

HP OpenView Performance Insight

Windows®、HP-UX、Solaris、および Linux オペレーティングシステム用

ソフトウェアバージョン : 5.30

管理ガイド

Manufacturing Part Number: J5223-99040

ドキュメントリリース日 : 2007 年 10 月

ソフトウェアリリース日 : 2007 年 10 月



ご注意

保証

HP 製品およびサービスに対する保証については、当該製品およびサービスに付属の保証書に記載されています。本書のいかなる内容も、新たな保証を追加するものではありません。HP は、本書中の技術的あるいは校正上の誤り、省略に対して責任を負わないものとします。

本書に含まれる情報は、予告なく変更されることがあります。

権利の制限

本製品は機密コンピュータソフトウェアです。所有、使用、または複製には、HP からの有効な使用許諾が必要です。FAR 12.211 および 12.212 に従い、商用コンピュータソフトウェア、コンピュータソフトウェアドキュメント、および市販品用技術データは、製造供給元の標準的な商用使用許諾に基づいて米国政府に使用許諾されます。

著作権

© Copyright 2007 Hewlett-Packard Development Company, L.P.

商標

Windows® および Windows Server™ 2003 は、Microsoft® Corp. の米国登録商標です。

UNIX® は、The Open Group の登録商標です。

Java™ は、Sun Microsystems, Inc. の米国商標です。

Oracle® は、Oracle Corporation (カリフォルニア州レッドウッドシティ) の米国商標です。

ドキュメントの更新

本書のタイトルページに、以下の識別情報が記載されています。

- ソフトウェアバージョン番号 (ソフトウェアバージョンを示します)
- ドキュメントリリース日 (ドキュメントが更新されると変更されます)
- ソフトウェアリリース日 (該当バージョンのソフトウェアのリリース日を示します)

最近の更新があるかどうかの確認、または最新版のドキュメントを使用しているかどうかの確認を行うには、以下の **Web** ページをご覧ください。

http://ovweb.external.hp.com/lpe/doc_serv/

該当する製品サポートサービスをご契約になれば、更新版または新しい版を受け取ることもできます。詳細については、**HP** にお問い合わせください。

サポート

以下の HP ソフトウェアサポートサイトにアクセスすることができます。

<http://www.hp.com/go/hpsoftwaresupport>

HP のオンラインソフトウェアサポートでは、対話形式の技術サポートツールに効率的にアクセスできます。サポートサイトでは次のことが可能です。

- 関心のあるドキュメントを検索する
- サポートケースおよび改善要求を登録 / トラッキングする
- ソフトウェアパッチをダウンロードする
- サポート契約を管理する
- HP サポートの問い合わせ先を調べる
- 利用可能なサービスに関する情報を確認する
- 他のお客様とのディスカッションに参加する
- ソフトウェアトレーニングの検索および登録を行う

サポートの多くでは、HP Passport へのユーザー登録とサインインが必要です。多くの場合、サポート契約も必要です。

アクセスレベルおよび HP Passport に関する詳細は、以下の Web ページをご覧ください。

http://support.openview.hp.com/new_access_levels.jsp

目次

1 Performance Insight の概要	21
OVPI の動作のしくみ	21
データ収集機能.....	23
収集するデータの種類の決定.....	24
収集するデータのソースの決定.....	24
レポートの準備.....	25
ポーリングパラメータ.....	26
データ処理機能.....	26
データアーカイブ機能.....	27
データレポート機能.....	28
OVPI レポートパックの使用.....	30
カスタムレポートの作成.....	30
2 OVPI の設定	31
インストール後の設定作業.....	31
その他の設定作業.....	39
ユーザーアクセスの設定.....	39
ユーザーアカウントの作成.....	40
フィルターを持つユーザーグループの作成.....	42
データベースの変更の管理.....	45
SNMPv3 ノードからのデータ収集	46
SNMPv3 ノードの設定.....	47
brass_v3_seed ユーティリティの使用.....	47
SNMPv3 ノードのインポート.....	48
コミュニティ文字列プロファイルの作成.....	49
タイプグループへのノードの割り当て.....	50
SNMPv3 ノードに対応するためのリモートポーラーの設定.....	51
分散型構成の設定.....	51

リモートポラーラに対応するためのポーリングポリシーの設定.....	51
ポーリングシステムの変更.....	52
複数のポラーラ用の新しいポリシーの作成.....	53
3 インストールした OVPI の管理.....	57
インストール後の管理作業.....	57
OVPI が動作していることの確認.....	57
レポートのスケジュール設定.....	59
ユーザーアカウントの変更.....	59
ユーザーグループの変更.....	60
ユーザーグループのフィルタの変更.....	61
ユーザーグループのフィルタの削除.....	61
毎日実行する管理作業.....	62
データのステータスの確認.....	62
毎週実行する管理作業.....	62
Oracle データベースのバックアップ.....	63
Sybase データベースのバックアップ.....	63
Sybase SQL インストールサーバーのバックアップ.....	64
Sybase SQL Server のバックアップ.....	69
スクリプトを使用した Sybase SQL Server のバックアップ.....	76
不定期に実行する管理作業.....	79
システムのバックアップ.....	80
OVPI のプロセスの開始および停止.....	80
Windows でのプロセスの開始および停止.....	81
サービスの開始.....	81
UNIX でのプロセスの開始および停止.....	82
OVPI Sybase データベースの再配置.....	83
OVPI データベースの再配置の確認.....	85
HTTP プロキシまたはポータル環境での OVPI のセットアップ.....	86
例 : Apache プロキシサーバーのセットアップ.....	91
4 管理コンソールの使用.....	93
管理コンソールの起動.....	96
UNIX システム.....	96
Windows システム.....	96
ログオン.....	97

管理コンソールインタフェース	97
メニューバー	98
[ファイル]メニュー	99
[編集]メニュー	99
[ツール]メニュー	100
[ヘルプ]メニュー	101
ツールバー	101
[ホーム]スナップイン	102
OVPI のステータスの表示	102
OVPI リリースノート の表示	104
OVPI の一般情報の表示	105
データベースサーバーの変更	106
ユーザー設定の保存	107
オンラインマニュアルの表示	109
5 ネットワークの検出	111
検出プロセスの使用	112
SNMP 検出ウィザードの使用	112
タイプ検出プロセスの使用	120
タイプ検出ウィザードの起動	120
6 レポートパックのインストール	123
パッケージの概要	123
レポートパック	123
データパイプ	124
レポートパックとデータパイプの依存関係	124
パッケージマネージャの起動	125
Windows デスクトップ	125
OVPI 管理コンソール (UNIX および Windows)	125
コマンド行 (UNIX および Windows)	126
パッケージのインストール	127
パッケージのアンインストール	133
7 場所に依存しないレポート作成機能およびコピーポリシー	137
場所に依存しないレポート作成機能	137
LIR マッピング	138

LIR の実装例	139
LIR のサポートのためのインストールウィザードの更新	139
LIR マッピングの管理	143
LIR の有効化	144
LIR の無効化	144
新しい LIR マッピングの追加	145
LIR マッピングの表示	146
LIR マッピングの削除	146
LIR マッピングの変更	147
コピーポリシー	147
コピーポリシーの実装例	148
コピーポリシーマネージャの起動	149
設定されているコピーポリシーの表示	150
コピーポリシーの管理	151
コピーポリシーの作成	152
コピーポリシーの編集	155
コピーポリシーの削除	155
8 ポーリングポリシーの管理	157
ポーリングストラテジ	158
ポーリンググループ	158
ポーリング頻度	160
指定インスタンスポーリング	161
ポーリングポリシーマネージャの起動	162
表示機能	163
列のソート	163
列のサイズの変更	164
ポリシーリストの更新	164
項目の選択	164
ポーリングポリシーの表示	165
現在のポーリングポリシーの表示	165
収集の作成	167
MIB からの収集の作成	167
OpenView パフォーマンスエージェントまたは OpenView Operations Agent からの 収集の作成	189
ファイアウォール環境での通信	189

OpenView パフォーマンスエージェントまたは OpenView Operations Agent からの 収集の作成.....	192
HTTPS アクセスを伴うエージェントからのデータの収集.....	214
CIV ファイルからの収集の作成.....	221
ユーザー定義の収集の作成.....	232
ポーリングポリシーの作成.....	242
例：OVPA 収集用のポーリングポリシーの作成.....	245
ポリシーがポーリング中であることの確認.....	246
ポーリングポリシーの編集.....	247
ポーリングポリシーの削除.....	248
ポーリンググループの管理.....	249
ポーリンググループの作成.....	251
単一ノードのグループの作成.....	251
同じタイプのすべてのノードグループの作成.....	252
同じビューにあるすべてのノードグループの作成.....	253
タイプとビューの結合グループの作成.....	254
特定のインスタンスグループの作成.....	256
ポーリンググループの編集.....	259
ノードの管理.....	259
ノードの検索.....	261
ノードの作成.....	261
ノードの編集.....	263
ノードの削除.....	263
ノードのインポート.....	264
インポートファイルの作成.....	264
ファイルのインポート.....	267
コミュニティ文字列プロファイルの管理.....	268
コミュニティ文字列プロファイルの作成.....	269
コミュニティ文字列プロファイルの編集.....	269
コミュニティ文字列プロファイルの削除.....	270
SNMP プロファイルの管理.....	270
SNMP プロファイルの作成.....	271
SNMP プロファイルの編集.....	272
SNMP プロファイルの削除.....	273
データパイプのインストールの管理.....	273

データパイプのインストールの作成	274
データパイプのインストールの編集	275
データパイプのインストールの削除	276
プロパティテーブルの値の変更	276
9 OVPI パフォーマンスグラフ	281
OVPI パフォーマンスグラフの起動	281
OVPI パフォーマンスグラフの表示	282
プロセスの所要時間	284
プロセスの所要時間グラフの作成	284
ポーリングの稼動状態	285
ポーリングの稼動状態グラフの作成	286
行数	287
行数グラフの作成	288
10 オブジェクトの管理	291
オブジェクトモデルについて	291
管理対象オブジェクトの検索	293
オブジェクトのビューの変更	296
特定のオブジェクトの検索	297
ログ情報の表示	298
オブジェクトツリーの表示の変更	299
新しいオブジェクトモデルの追加	301
ノードのインポート	305
インポートファイルの作成	305
ファイルのインポート	305
ノードのエクスポート	306
フォームの使用	306
データベースの変更	307
新しい管理対象オブジェクトの作成	308
ノードの削除	309
ノードまたはノードのグループを削除する	309
ノードの除外リストを編集するには	316
11 管理対象オブジェクトのグループ化	319
グループのタイプ	319

グループ化の方法	320
ノードのグループ化	321
その他の管理対象オブジェクトのグループ化	321
グループカテゴリ	322
管理対象オブジェクトグループの表示	322
グループビューの変更	324
特定グループの検索	325
グループの作成	326
列挙リストグループの作成	327
派生グループの作成	329
評価済みグループの作成	332
フォルダーグループの作成	334
グループのインポート	336
グループのエクスポート	337
グループの管理	338
グループの表示	338
グループの編集	339
グループの削除	340
ログ情報の表示	340
表示オプションの設定	341
グループポーリングポリシーの管理	343
グループポーリングポリシーの作成	343
グループポーリングポリシーの変更	346
ポーリングポリシーの削除	347
ポーリングポリシービューの変更	347
レポートでのグループの使用	348
12 システムの管理	349
システム/ネットワークの管理アプリケーションの起動	350
[システム/ネットワークの管理] ウィンドウ	351
Web アクセスサーバーシステムの管理	352
Web アクセスサーバーの追加	352
Web アクセスサーバーのプロパティの表示および変更	355
Web アクセスサーバーの同期化	358
Web アクセスサーバーの変更	360
Web アクセスサーバーの削除	360

データベースの管理	361
データベースの追加	361
データベースプロパティの表示	363
データベースの初期化パラメータの変更	366
データベースサイズの拡張	367
データベースコンポーネントのサイズ設定のガイドライン	367
データベースのサイズの拡張	368
データベースサーバーの変更	371
リモートポーラーの追加	372
リモートポーラーの追加	372
13 保持期間テーブルの管理	379
テーブルマネージャの起動	379
テーブル情報の表示	381
表示機能	381
情報のソート	381
列のサイズの変更	381
情報の更新	381
エイリアス名の検索	382
データテーブルのタイプ別またはカテゴリ別での表示	382
プロパティテーブルの表示	385
テーブル列の表示の変更	386
データと内部テーブルの詳細の表示	387
データテーブルの情報の表示	388
データテーブルの説明の追加	388
データテーブルの情報の表示	389
データテーブルのインデックス情報の表示	390
保持プロファイル	391
インデックスプロファイル	391
インデックスプロファイルの管理	392
プロパティテーブルの詳細の表示	397
プロパティテーブル情報の表示	398
プロパティテーブルの説明の追加	399
プロパティテーブルの列情報の表示	399
プロパティテーブルのインデックス情報の表示	400
インデックスプロファイルの表示または管理	401

テーブルデータの表示.....	402
レポートの表示	402
メニューの使用	403
データの管理	405
テーブルデータの印刷	406
テーブルデータの保存	407
テーブルデータのエクスポート	408
データのフォーマット設定	409
統計のフォーマット設定.....	409
セルのフォーマット設定.....	411
列のフォーマット設定	412
行のフォーマット設定	415
テーブルクエリの変更.....	416
統計の選択	416
レポート内のデータのソート	416
期間の変更	418
制約の追加	420
制約値の変更.....	424
制約の変更	425
制約および句の削除	425
ノードとインタフェースの選択	425
データベースから取得する最大行数の変更	428
テーブルの作成.....	429
データテーブルの作成.....	429
プロパティテーブルの作成	443
テーブルのデフォルトの設定	447
データテーブルのデフォルトの設定	447
期間テーブルのデフォルト	448
14 カタログマネージャの使用.....	451
カタログマネージャの起動.....	452
[カタログ/レポートリンクの管理] ウィンドウ.....	453
[配布済み項目] カタログの管理.....	454
レポートの配布	454
レポートの配布解除.....	459
[削除] メニューオプションによるレポートの配布解除	460

[レポートの配布] ウィザードによるレポートの配布解除.....	460
URL の配布	462
カタログ内のディレクトリの新規作成	463
レポートおよびディレクトリの移動	463
レポートおよびディレクトリのコピー	464
ディレクトリプロパティの表示および変更.....	466
配布項目プロパティの表示および変更	467
レポートプロパティの表示および変更.....	467
URL プロパティの表示および変更.....	469
レポートおよび URL の削除	469
カタログの更新	470
リンクカタログの管理.....	470
リンクグループの作成	470
レポートリンクの作成.....	472
レポートから別のレポートへのリンク.....	472
レポートからアプリケーションへのリンク	481
レポートから URL へのリンク.....	486
レポートリンクを開く	493
表示ペインでのリンクの変更.....	494
リンクのコピー	495
リンクの移動	496
リンクの削除	497
リンクのプロパティの表示および変更	497
リンクのエクスポートとインポート	499
リンクグループのエクスポート	499
リンクのインポート	500
リンクカタログの更新.....	500
15 Web アクセスサーバーの使用.....	501
Web アクセスサーバーへのアクセス	501
Web アクセスサーバーの概要	504
[管理] リンク	505
[ユーザーアカウント].....	505
[サービスの構成].....	507
[診断].....	508
[ログファイル]	509

[Java の設定]	509
[配布済み項目]	511
[カタログ] リンク	513
ユーザーアカウントの管理	516
パスワードの有効期限ルールの設定	517
ユーザーアカウントの作成	519
ユーザーアカウントの変更	522
ユーザーアカウントの削除	523
ユーザーアカウントに電子メールを送信	524
ユーザーグループの管理	525
ユーザーグループとは	525
ユーザーグループの作成	526
ユーザーグループの変更	529
ユーザーグループの削除	530
ユーザーグループのフィルターの作成	530
ユーザーグループのフィルターの変更	531
ユーザーグループのフィルターの削除	532
例: グループを使用したデータのフィルタリング	532
診断の表示	535
ログファイルの設定の変更	536
ログファイルの表示	538
Java 設定の変更	539
配布項目の設定の変更	541
ビューの作成	544
ビューの作成	544
ビューの変更	547
Web アクセスサーバーの外観の変更	547
サイトのオプションの変更	548
リンクバーのオプションの変更	548
リンクバーの別名の変更	551
ナビゲーションフレームのオプションの変更	553
結果フレームのオプションの変更	554
レポートの配布	555
サービスの設定の変更	557
Web アクセスサーバー設定の変更	557

管理者権限のリセット	560
SSL サービス設定の変更	562
デジタル証明書のインポート	565
証明書署名要求 (CSR) の生成	565
署名入りデジタル証明書のインポート	566
システムマネージャの設定の変更	567
[Performance Insight システム] ページの表示	567
デフォルトシステムの変更	568
システムの追加	568
システムの設定の変更	571
システムの削除	575
メールサーバーの設定の変更	576
グラフの X 軸の時刻フォーマットの変更	577
16 データのアーカイブ	581
アーカイブテーブル	581
データ保持プロファイル	582
データ処理のアーカイブ	583
保持プロファイルの管理	584
保持プロファイルの表示	584
保持プロファイルの追加	585
保持プロファイルの変更	587
保持プロファイルの削除	587
データと内部テーブルの詳細の表示	588
データテーブルの情報の表示	589
データテーブル保持プロファイルの設定	589
異なる保持プロファイルをデータテーブルに割り当てる	589
複数のデータテーブルへの保持プロファイルの割り当て	591
データテーブルの説明の追加	591
データテーブルの列情報の表示	592
データテーブルのインデックス情報の表示	593
データテーブルのタイプ別またはカテゴリ別での表示	594
アーカイブ設定のガイドライン	597
アーカイブの制限事項	601

17 システムの調整	603
ハードウェアでの検討事項	603
プロセッサのタイプとクロック速度	604
プロセッサの数	604
メモリー	604
共有メモリー/スワップファイルのサイズ	605
ディスクドライブのインタフェース	605
物理ディスクデバイスの数	606
オペレーティングシステムのパラメータの設定	607
Oracle パラメータの設定	607
Sybase パラメータの設定	608
データベースチューナーの使用	608
About Sybase パラメータ	613
sp_configure コマンドの使用	619
オペレーティングシステム - 非同期の I/O プロセス	619
トランザクションログキャッシュ	620
トランザクションログ I/O のサイズ	622
Traceflag パラメータ	623
その他の設定パラメータ	625
プロパティテーブルのバインディング	626
18 セルフヒーリングサービスコレクタの使用	631
セルフヒーリングプロセスの概要	632
SHS の有効化と開始	633
例: SHS によるエラーの検出と解決	634
19 MIB の管理	637
MIB ブラウザの起動	638
MIB ブラウザウィンドウ	640
ナビゲーションペイン	641
表示ペイン	641
メニューバーとツールバー	643
[ファイル] メニュー	643
[表示] メニュー	643
[アクション] メニュー	644

[ヘルプ]メニュー	644
MIB のロード	645
考慮すべき問題	645
MIB ツリーの最上位を含める	645
オブジェクトタイプを検証する	646
MIB のロード	647
MIB のアンロード	650
SNMP データのクエリ	651
ノードの設定	652
コミュニティ文字列の設定	652
MIB マップでのグループまたはオブジェクトの検索	652
データの表示	653
SNMP 値の設定	656
収集テーブルの作成	656
収集テーブルの機能	656
SNMPv1 における 64 ビット値	657
収集テーブルの要件	658
収集テーブルの作成	659
20 ログファイルの解釈	675
OVPI ログファイル	675
ログファイルの表示	676
ログファイルのメッセージフォーマット	677
timestamp	677
time_zone	678
GMT_offset	678
appl_name	678
module_name	678
severity	679
process_ID	679
parent_proc_ID	679
message_ID	679
message	680
ログファイルメッセージの例	680
WARNING と INFO メッセージ	680
ERROR メッセージ	680

audit.log ファイル	681
ログファイルのフォーマット	681
metrics.log ファイル	683
ログファイルのフォーマット	684
mw_collect メッセージ	686
bcp_gateway メッセージ	687
trendcopy メッセージ	688
builder.log ファイルと viewer.log ファイル	689
A 付録：NNM-OVPI 統合	691
索引	693

1 Performance Insight の概要

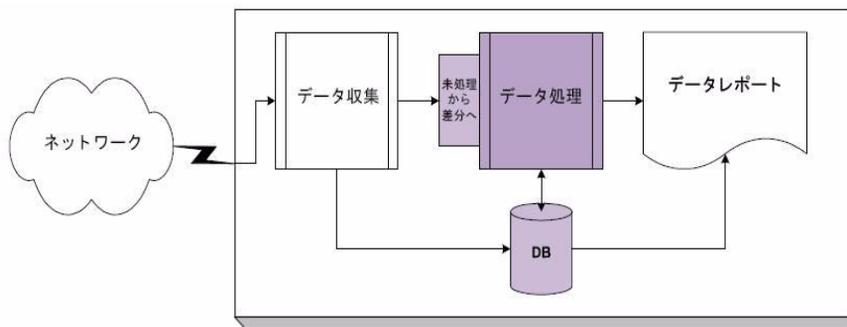
この章では、HP OpenView Performance Insight (OVPI) の動作のしくみについて説明します。

OVPI の動作のしくみ

OVPI は次の機能を実行するネットワーク管理システムです。

- データ収集
- データ処理
- データアーカイブ
- データレポート

次の図はこれらの機能の概要を示しています。



以下では各機能について説明します。

- データ収集

この機能は、ネットワーク内のノード（ネットワークデバイスまたはシステム）を認識し、それらのノードを直接ポーリングするか、または各ノードで抽出されたフラットファイルをインポートすることで、ノードからデータを

取得します。フラットファイルとは、ノードの履歴情報であり、ノード自体の内部に格納されており、ネットワークデバイスユーティリティによって定期的に生成されます。いずれの場合も、収集されたデータはシステムによってデータベースに保存されます。詳細は、23 ページの「[データ収集機能](#)」を参照してください。

- データ処理

この機能は、未処理のデータを割合データに変換し、データに対して要約ルーチンを実行し、保持期間を過ぎたデータをデータベースから排除します。要約ルーチンは、割合データを時間単位、週単位、月単位、四半期単位、および年単位のデータに変換します。また、要約ルーチンは予測データも生成します。ユーザーは予測データに基づいて、過去のパフォーマンスから、何が起こる可能性があるかを知ることができます。詳細は、26 ページの「[データ処理機能](#)」を参照してください。

- データアーカイブ

この機能は、OVPI の要約およびレポートのパフォーマンスに影響を与えることなく、データを長期保持しておくのに役立ちます。この機能では、OVPI データベーススキーマではなく、個別の場所に OVPI データを格納できます。OVPI のレポート機能では、標準的な OVPI データベーススキーマに配置されている場合と同じようにデータにアクセスできます。詳細は、27 ページの「[データアーカイブ機能](#)」を参照してください。

- データレポート

この機能は、要約されたデータからレポートを生成します。この機能は、レポートパックと呼ばれるレポート機能に基づいて、レポートを自動的に生成します。レポートパックは、特定の種類の機能に対応するための、レポートテンプレートとすべてのサポート用ファイルおよびスクリプトを提供するものです。

これらのレポートは、Web ベースのインタフェース (Web アクセスサーバー) を使用するか、またはクライアントアプリケーション (レポートビューア) を使用して、表示できます。また、もう 1 つのクライアントアプリケーション (レポートビルダ) を使用して独自のカスタムレポートを作成することもできます。ただし、この機能を使用する場合は HP の担当者にお問い合わせください。詳細は、28 ページの「[データレポート機能](#)」を参照してください。

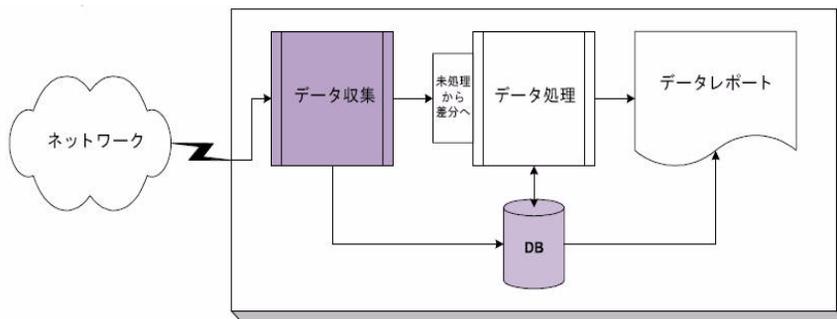
以上の機能の実行はすべて、OVPIの **trendtimer** プログラムによって管理されます。このプログラムは、サービス (Windows)、またはデーモン (UNIX) によって、実行されます。**trendtimer** は、OVPI システムの一部である各種のプロセスを起動します。**trendtimer** の詳細については、『HP OpenView Performance Insight Reference Guide』を参照してください。

データ収集機能

OVPI は、データを収集するときに、どの種類のデータを収集するかに加えて、いつ、どこからデータを収集するかを決定する必要があります。OVPI は、以下のソースからデータを収集できます。

- Simple Network Management Protocol (SNMP) タイプデバイス
- OpenView パフォーマンスエージェント (OpenView Performance Agent および OpenView Operations Agent)
- 非 SNMP デバイス

ここでいう SNMP タイプデバイスは、Remote Monitoring (RMON) デバイスを含んでいます。次の図は、OVPI システム全体におけるデータ収集機能を示しています。



収集するデータの種類の決定

OVPI は、SNMP タイプデバイスから取得されるオブジェクト識別子 (OID) のリストを使用して、どのデータを収集するかを決定します。OID は、定義済みオブジェクトの集まりである管理情報ベース (MIB) テーブル内にあります。これらのテーブルは、レポートパックのインストール時に OVPI によって自動的に提供されます。

独自の収集方法を設定するには、MIB ブラウザを使用するか、または TEEL というデータ定義言語と `datapipe_manager` を使用して、テーブルを定義します。

OVPI は、非 SNMP デバイスからデータを収集するときは、TEEL ファイルを使用してデバイスからのデータをインポートおよび保存します。対応するテーブルとデータの定義ファイルは、レポートパックのインストール時に OVPI によって自動的に提供されます。独自の収集方法を定義する場合は、テーブルマネージャまたは `datapipe_manager` を使用してテーブルを定義できます。すると、適切な収集ツール (たとえば `ee_collect` や `pa_collect`) を使用してデータをインポートできるようになります。独自の機能を設ける場合は、HP の担当者にお問い合わせください。

収集するデータのソースの決定

SNMP タイプデバイスの場合、データはノードから取得します。以下のいずれかの方法で、どのノードをポーリングするかをシステムに知らせることができます。

- **SNMP 検出。** ウィザードを使用してネットワークアドレスの範囲を ping することで、応答元となるノードを検索できます。詳細は、112 ページの「[検出プロセスの使用](#)」を参照してください。
- **ポーリングポリシーマネージャ。** ノードを 1 つずつ入力できます。詳細は、第 8 章「[ポーリングポリシーの管理](#)」を参照してください。
- **node_manager。** このユーティリティを使用すると、既存のノードリストをシステムにインポートできます。この場合は、必要な情報をもとにユーザーが ASCII ファイルを 1 つ作成し、次にこのユーティリティを使用してノードをインポートします。node_manager コマンドの詳細については、『[HP OpenView Performance Insight Reference Guide](#)』を参照してください。

ノードを指定した後はタイプ検出プロセスを使用して、ノードを検索しグループに割り当てることができます。通常、ノードは、レポートパックのデータまたはデバイスの固有のグループに分類されます。このグループをタイプリストと呼び

ます。ただし、特定のノードセットだけをポーリングする必要がある場合は独自のグループを作成できます。そのようなグループをビューリストと呼びます。ノードリストの定義の詳細は、251 ページの「[ポーリンググループの作成](#)」を参照してください。ポーラーはこれらのリストにあるノードをポーリングし、そのときに取得したデータをデータテーブルに格納します。

SNMP が有効になっている OpenView パフォーマンスエージェントからのデータ収集を有効にするには、SNMP 検出をすることでこれらのノードを検出します。OpenView パフォーマンスエージェントのある非 SNMP 対応システムの場合は、`node_manager` を使用してノードリストをインポートします。

非 SNMP デバイスの場合、データはフラットファイルから取得します。これらのフラットファイルからデータを取得するには、データをインポートする手順を提供する TEEL ファイルを設定する必要があります。TEEL ファイルではまた、これらのファイルからのデータを保存するためのテーブルも定義します。TEEL ファイルを使用すると、SNMP テーブルと非 SNMP テーブルを作成できます。非 SNMP データは、データを正しく収集するために、パフォーマンスマネージャコンポーネントのあるサーバー上に配置する必要があります。一方、SNMP データはソースノードから直接に収集されます。データがデータベースに格納された後は、すべてのデータが、その収集方法に関係なく同様に処理されます。

レポートの準備

レポートパックではプロパティインポートデータパイプが提供されることがあります。これを使用すると、ネットワークに固有の情報を使用してレポートパックを準備できます。このプロセスは、以下のいずれかの方法で、ネットワークに固有の静的データをインポートします。

- スプレッドシートプログラムから、またはファイルを自動生成するネットワーク準備データベースから、独自のフラットファイルを作成する。
- 既存のデータをデータベースからエクスポートする。
- ポーリングポリシーマネージャを使用して、選択したフィールドを対話形式で変更する。

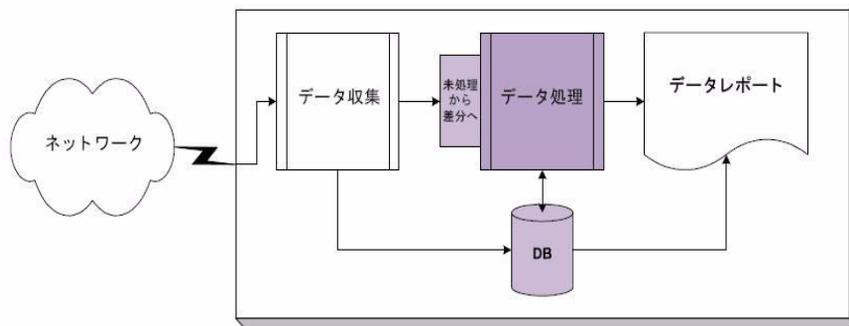
既存のファイルの変更は、初めてのタイプ検出プロセスを実行した後、他の処理を行う前に行うことをお勧めします。この時点でファイルを作成または変更し、そのあと適切な場所にそのファイルをインポートして戻します。これらのファイルの変更およびインポートの手順については、各種レポートパックのマニュアルを参照してください。

ポーリングパラメータ

システムは、ポーリングするノードを特定した後、どのデータをどのくらいの頻度で収集するかを知る必要があります。システムはこれらの指定をポーリングポリシーから取得します。レポートパックにはポーリングポリシーの定義が含まれています。ただし、分散環境をセットアップする場合は、既存のポーリングポリシーを変更しなければならないか、または新しいポーリングポリシーを作成しなければならない場合があります。ポーリングポリシーの詳細は、[第 8 章「ポーリングポリシーの管理」](#)を参照してください。

データ処理機能

OVPI は、主に時系列データを管理します。したがって、データベースに保存される各レコードには、タイムスタンプが関連付けられている必要があります。また、タイムスタンプに加えて、そのデータに関連付けられた管理対象オブジェクトを示すインジケータが、各レコードにあります。典型例は、ルーター、インタフェース、カスタマ、場所などです。次の図は、OVPI システム全体におけるデータ処理機能を示しています。



データが収集されると、システムがレコードにタイムスタンプを割り当て、データをデータテーブルに保存します。そして、システムが未処理データを差分（またはレート）データに変換します。差分データは、時間による 2 つの値の違いです。

差分データができあがると、続いて集約プロセスが実行されます。集約プロセスでは、システムがデータをソース（入力）テーブルから読み取り、集約した後、宛先（出力）テーブルに保存します。集約プロセスによって、各種の統計情報に対応したさまざまな宛先テーブルが作成されます。統計情報には、時間単位、週

単位、月単位、四半期単位、および年単位の要約があります。また、30日、60日、90日の各予測があり、百分率、および平均があります。レポートパックには、複数の集約を実行するための必要な手順がすべて含まれています。

データが過度にテーブルに蓄積するのを防ぐため、OVPIはデータの排除（エージング）またはアーカイブを実行します。エージングには保持期間の概念があります。これは、データをテーブルに保持する日数です。エージングプロセスでは、テーブル内のデータがテーブルに対して指定されている保持期間を超えている場合、そのデータを削除します。テーブルにはそれぞれデフォルトの保持期間があります。保持期間はテーブルマネージャを使用して変更できます。テーブルに対する保持期間の変更の詳細は、447ページの「[テーブルのデフォルトの設定](#)」を参照してください。

データアーカイブ機能

OVPIでは、データテーブルがネットワークデバイスから収集したデータを保存しておくための一次ソースになります。データテーブルにデータを長期間保存しておく、要約およびレポート機能のパフォーマンスが低下します。このため、エージングプロセスでは、データテーブルに保存されているデータがそのテーブルに対して指定されている保持期間を超えている場合、データが削除されます。要約およびレポート機能のパフォーマンスが低下することなく、長期間に渡ってデータをレポート目的に使用できるように、OVPIではアーカイブテーブルを使用してデータを保存します。

アーカイブには、アーカイブフラグ、アーカイブ保持期間、およびアクティブテーブルの概念があります。アーカイブフラグは、データテーブルのアーカイブテーブルが必要かどうかを示します。デフォルトでは、アーカイブフラグの値は[OFF]に設定されています。データテーブルのデータを保持しておく場合は、アーカイブフラグの値を[ON]に設定する必要があります。アーカイブ保持期間は、アーカイブテーブル内にデータを保持する日数です。アクティブデータは、アーカイブテーブルが関連付けられているデータテーブルです。

レポートパックのインストール時に、`datapipe_manager` は `TEEL` ファイルに指定されている保持期間に基づいて、各データテーブルに対して保持プロファイルを作成します。システムは、データテーブルの時間タイプに基づくプロファイル名とアーカイブ保持期間のデフォルト値を使用して、保持プロファイルを作成します。



同じ名前および同じ保持期間の保持プロファイルがプロファイルディレクトリにすでに存在していると、システムはそのプロファイルを使用し、新しいプロファイルは作成しません。

アーカイブフラグが `[ON]` に設定されている場合に、`datapipe_manager` はデータテーブルのアーカイブテーブルを作成します。また、データテーブル (アクティブテーブル) の保持プロファイルをアーカイブテーブルに割り当てます。

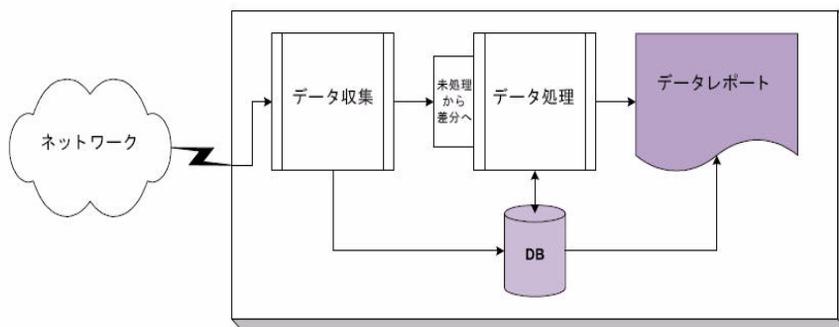
データテーブルに対してアーカイブフラグが `[ON]` に設定されていると、そのデータテーブルの指定の保持期間が終了すると、エージングプロセスによってデータがデータテーブルからアーカイブデータに移動します。たとえば、データテーブルの保持期間が 10 日に設定され、アーカイブ保持期間が 60 日に設定されている場合、エージングプロセスはデータテーブルのデータを 10 日後にアーカイブテーブルに移動します。アーカイブテーブルのデータは、その後 60 日間使用できます。60 日が過ぎると、エージングプロセスはアーカイブテーブルのデータを削除します。つまり、アクティブテーブルとアーカイブテーブルを合わせ、合計 70 日間データを使用することができます。データテーブルのアーカイブ保持期間およびアーカイブフラグの変更の詳細は、581 ページの「データのアーカイブ」を参照してください。

データレポート機能

データが処理されると、そのデータを使用してレポートを生成できます。レポートは以下のいずれかの方法で生成できます。

- **自動**。この方法では、`OVPI` のレポートパックを使用して、レポートの作成、配布、スケジュール設定、および生成を実行します。30 ページの「[OVPI レポートパックの使用](#)」を参照してください。
- **カスタム**。この方法では、レポートビルダを使用してカスタムレポートを作成できます。30 ページの「[カスタムレポートの作成](#)」を参照してください。

いずれの方法でも、レポートを記述する手順セットであるレポートテンプレートが作成されます。次の図は、OVPI システム全体におけるデータレポート機能を示しています。



レポートは以下のフォーマットで使用できます。

- レポート定義ファイル(.rep ファイル拡張子)には、複数のテーブル、グラフ、グラフィック、およびテキストがあり、データをデータベースから取得します。
- データセットファイル(.srep ファイル拡張子)はレポート定義ファイルとほぼ同じですが、データセットレポートを表示するときにデータベースからではなくレポートからデータを取得します。データセットレポートは、レポートの生成時に取得されたデータのスナップショットです。スナップショットはバッチ生成プロセスによって実行されます。通常、バッチ生成プロセスは管理者が設定します。レポート定義ファイルと同様に、データセットレポートについても表示属性の多くを変更できます。
- フォーム(.frep ファイル拡張子)は特殊な種類のレポートです。フォームを使用すると、1つのデータベーステーブルに格納されているデータを変更できます。レポートにある要素はすべて、フォームにもあります。また、フォーム要素を追加できます。そうすることで、データベーステーブルのデータを変更できます。フォームを使用すると、データベースのデータの変更や新規作成が簡単に行えます。たとえば、データベース内のカスタマを更新するフォームや、特定のレポートパックについて新しいカスタマをデータベースに追加するフォームを作成できます。

OVPI レポートパックの使用

特定のテクノロジーに対応したレポートパックをインストールすると、レポートの作成、スケジュール設定、および生成ができるよう、システムが自動的にセットアップされます。

レポートパックは以下のものを提供します。

- データを保存するためのテーブル定義
- データを収集するための収集情報（スクリプト、ポーリングポリシー、コマンドなど）
- 要約データを生成するための集約手順
- レポートを生成するためのレポートテンプレート
- レポートテンプレートの場所を特定するための配布手順
- レポートのスケジュール設定と生成を自動化するための手順とコマンド

カスタムレポートの作成

レポートビルダを使用してレポートテンプレートを作成できます。レポートテンプレートを作成するときは、データの表示方法、データベースのどの情報を使用するか、データをレポートにリンクする方法を、それぞれ定義します。目的

2 OVPI の設定

この章では、OVPI をスタンドアロン環境または分散環境に正常にインストールした後に行う、OVPI の設定方法について説明します。

インストール後の設定作業

この項では、OVPI をスタンドアロン環境または分散環境に正常にインストールした後に行う、設定作業について説明します。

OVPI の設定作業には以下のものがあります。

- データベースの調整
- ネットワークの検出、またはノードのインポート
- レポートパックのインストール
- デバイスタイプの検出
- ポーリングポリシーの変更
- 収集の確認
- バックアップサーバーのセットアップ
- データベースのバックアップ

タスク 1: データベースを調整する

データベースの調整に関する推奨事項を実行します (Sybase または Oracle)。

Sybase

データベースチューナーを起動します。詳細は、608 ページの「データベースチューナーの使用」を参照してください。

▶ データベースチューナーは Sybase データベースでのみ使用できます。

Oracle

Oracle は自動的に最適化する機能を備えています。このため、OVPI ではいくつかのパラメータを設定するだけで、データベースが十分に最適化されます。

OVPI のインストール時に、これらのパラメータのデフォルト値を変更する機会があります。詳細は、『HP OpenView Performance Insight Oracle データベースのインストールおよびアップグレードガイド』の第 5 章の「特定の Oracle 設定パラメータの変更 (パラメータタブ)」を参照してください。

インストール時にこれらのパラメータの値を変更せず、現時点で変更を行いたい場合は Oracle の Enterprise Manager Console を使用して変更できます。調整に関するその他の推奨事項は、Oracle のマニュアルを参照してください。

タスク 2: ネットワークを検出する

OVPI でデータを収集できるようにするには、どのデバイスを管理するかを OVPI が知る必要があります。この情報を取得するため、ネットワークを検出する必要があります。以下のいずれかの方法で、ネットワークを検出できます。

- ノードの検出

この方法は、管理対象ノードのリストを準備していない環境や、NNM、またはその他の障害管理プラットフォームが存在しない環境の場合に便利です。大規模な環境の場合は、ノードの検出プロセスに時間がかかることがあります。その場合は、先にノードをインポートすることを検討してください。

OVPI は、検出ウィザードで使用可能なノードを検出します。検出ウィザードは管理コンソールから実行できます。このウィザードは、ネットワークにあるノードを検索し、それらが SNMP で管理できるかどうかを判断します。

▶ デバイスが多数存在するネットワークでは、この方法が好ましくない場合があります。そのような場合は、代わりにノードをインポートしてください。

- ノードのインポート

この方法は、監視する管理対象オブジェクトのリストをすでに準備してある場合に便利です (NNM、または CiscoWorks など、他のネットワーク準備ソフトウェアがある場合)。たとえば、ルーターが 5 台しかない場合は、それらのルーターの情報がすでにわかっていることが十分考えられます。したがって、ポーリングする必要のあるオブジェクトだけを検出の対象にすることができます。

他のソース (たとえば準備データベース) からのノードをインポートできません。



レポートパックによっては、ネットワークを検出する前に何らかの設定を必要とするものがあります。そのため、検出プロセスを開始する前に、使用するレポートパックのマニュアルを参照してください。レポート機能に関するマニュアルについては、『HP OpenView Performance Insight リリースノート』を参照してください。

ノードの検出

- 1 管理コンソールの [ツール] メニューから、[SNMP 検出] を選択します。検出ウィザードが開きます。
- 2 開始 IP アドレス、終了 IP アドレス、サブネットマスクを入力し、[次へ] をクリックします。



サブネットマスクの設定は、ネットワークアドレスとブロードキャストアドレスを調べるためだけのものです。マスクが正しくない場合でも検出プロセスは実行されますが、ノードが正しく追加されない可能性があります。

- 3 SNMP デバイスのコミュニティストリング (1 つまたは複数) を入力し、[次へ] をクリックします。
- 4 SNMP ポートが 161 以外の場合はそのポートを入力し、[次へ] をクリックします。
- 5 [検出] をクリックします。

検出ウィザードによって、各 IP アドレスでのデバイスの存在が確認され、GET 要求が各アドレスに転送されます。要求への応答があれば、そのデバイスは SNMP で管理できます。

詳細は、112 ページの「検出プロセスの使用」を参照してください。または、trend_discover コマンドを使用することもできます。詳細については、『HP OpenView Performance Insight Reference Guide』を参照してください。

ノードのインポート

ノードをインポートする手順は 2 段階になります。まず、インポートするノードを含む ASCII ファイルを作成する必要があり、それからそのファイルをインポートする必要があります。ASCII ファイルのフォーマット方法の詳細は、265 ページの表 6 を参照してください。

ノードのリストをインポートするには、以下の手順に従います。

- 1 [ファイル]メニューの[ノードのインポート]を選択します。
[インポート元]ダイアログボックスが開きます。
- 2 インポートするノードを含むファイルに移動します。
- 3 ファイル名をダブルクリックします。または、ファイル名を選択し[開く]をクリックします。

または、コマンド行を使用してノードをインポートすることもできます。これには、`node_manager` コマンドを使用します。`node_manager` コマンドの詳細については、『HP OpenView Performance Insight Reference Guide』を参照してください。

タスク 3: レポートパックをインストールする

この手順では、RNS の CD を使用してレポートパックをインストールする方法を示します。



この手順に進む前に、インストールする各レポートパックのユーザーガイドを必ず入手してお読みください。これらのガイドには、レポートパックのインストール前に読んでおく必要のある、レポートパックに関する重要な設定情報（たとえば分散環境におけるインストール）が記載されています。これらのガイドについては、『HP OpenView Performance Insight リリースノート』を参照してください。

- 1 ローカルシステムにログオンします。
 - Windows の場合：
管理者権限を持つユーザーとしてログオンします。
 - UNIX の場合：
root としてログオンします。
- 2 RNS の CD を CD-ROM ドライブに挿入します。UNIX ユーザーの場合は、挿入した CD をマウントします。

次の表に、各 UNIX プラットフォームでの CD のマウント方法を示します。

オペレーティング
システム

コマンド

Sun Solaris

CD を CD-ROM ドライブに挿入すると、CD は自動的にマウントされます。CD-ROM が自動的にマウントされると、ファイルマネージャウィンドウが開きます。ウィンドウが開かれない場合は、**root** として次のように入力します。

```
mkdir /cdrom
```

```
mount -r /dev/dsk/cd_devicename /cdrom
```

このインスタンスで、**cd_devicename** は CD-ROM デバイスの名前です。

HP-UX

SAM ユーティリティを使用して CD-ROM をマウントするか、または次のコマンドを入力します。

```
mkdir /cdrom
```

```
mount /dev/dsk/cd_devicename /cdrom
```

このインスタンスで、**cd_devicename** は CD-ROM デバイスの名前です。

3 Solaris システムの場合のみ：以下の手順を実行します。

- a **cd_label** を表示するには、次のコマンドを入力します。

```
ls -l /cdrom
```

- b ディレクトリを変更するには、次のコマンドを入力します。

```
cd /cdrom/cd_label
```

この場合で、**cd_label** は CD 名です。

4 インストールプログラムが自動的に起動します。自動的に起動した場合は、36 ページの**手順 6**に進みます。起動しない場合は、**手順 5**に進みます。

5 以下のいずれかを実行してセットアッププログラムを起動します。

- Windows の場合：

CD の最上位のフォルダーから **setup.exe** をダブルクリックします。

- UNIX の場合：

セットアッププログラムを検索し、以下のコマンドを入力して起動します。

./setup

メニューが開きます。

- 6 **[OV Performance Insight Report Pack のインストール]** を選択します。インストールスクリプトによってすべてのパッケージがシステムの **Packages** ディレクトリにコピーされると、インストールスクリプトによって **[パッケージマネージャ]** が起動されます。
- 7 **[次へ]** をクリックして続行します。
- 8 **[インストール]** をクリックし、デフォルトをレポートパックのインストール先としない場合は希望のインストール先ディレクトリを指定してから、**[次へ]** をクリックします。
- 9 以下のいずれかを実行します。
 - **[レポートの配布]** ボックスを選択します。このオプションを選択した場合は、レポートが **Web** アクセスサーバーに公開され、そこでレポートを表示できるようになります。

OVPI 管理者のユーザー名とパスワードを入力し、**[次へ]** をクリックします (デフォルトの OVPI 管理者アカウントである trendadm を使用できます。これはインストール時に作成されたものです)。
 - **[レポートの配布]** ボックスをオフにし、**[次へ]** をクリックします。

場合によっては、レポートを **Web** アクセスサーバーに配布したくないが、それらのレポートパックのデータは収集したいということがあります。そのような場合はレポートを後で配布できます。この場合は、すでに収集済みのすべてのデータが表示されます。
- 10 インストールするレポートパックとデータパイプを選択し、**[次へ]** をクリックします。

依存するパッケージがレポートパックと同じディレクトリにある場合は、それらのパッケージが自動的に選択されます。同じディレクトリにない場合は、インストールを続けることができません。インストールするレポートパックに必要なデータパイプの詳細は、レポートパックのユーザーガイドを参照してください。
- 11 **[OVPI タイプ検出の実行]** を選択、またはオフにし、**[次へ]** をクリックします。

[OVPI タイプ検出] は、インストールしようとしている各レポートパックについて、ネットワークにあるどのデバイスをポーリングできるのかを調べます。

インストールしようとしているすべてのレポートパックに、タイプ検出を実行することをお勧めします。

レポートパックによっては、ユーザーにとって必要がないかもしれないタイプを追加するものがあります。お使いの環境にどのタイプが存在するかを理解している上級ユーザーは、このオプションをオフにし、後でタイプ検出ウィザードを実行するということができます。

- 12 [概要] ウィンドウに表示される情報を確認し、[インストール] をクリックします。

インストールした 1 つまたは複数のレポートパックのためのデータを収集するよう、システムが設定されます。

36 ページの **手順 11** でタイプ検出を実行しなかった場合は、データを収集するために、必ずタイプ検出ウィザードを使用してタイプ検出を実行する必要があります。

タスク 4: デバイスタイプを検出する

この検出によって、検出済みノードのデバイスタイプが調べられ、その情報がデータベースに記録されます。OVPI はこの情報に基づいて、特定のタイプのデバイスをデータ収集の対象にすることができます。

以下のいずれかを実行します。

- レポートパックのインストール時 (36 ページの **手順 11** を参照) にタイプ検出を実行しなかった場合は、タイプ検出ウィザードを使用して手動でタイプ検出を実行できます。このウィザードは管理コンソールから実行できます。
- タイプ検出を実行した場合は、**タスク 5** に進みます。

タイプ検出を実行するには、以下の手順に従います。

- 1 管理コンソールの [ツール] メニューから、[**タイプの検出**] を選択します。タイプ検出ウィザードが開きます。
- 2 検出するタイプを選択します。複数のタイプを選択するには、**Ctrl** キーを押しながらタイプを 1 つずつクリックしていきます。
- 3 すべてのタイプを検出する場合、またはどのタイプを検出するべきか不明な場合は、[**既知のタイプをすべて検出する**] を選択し、[**次へ**] をクリックします。

4 [検出]をクリックします。

あるいは、`trend_discover -t` コマンドを使用することもできます。詳細については、『HP OpenView Performance Insight Reference Guide』を参照してください。

タスク 5: ポーリングポリシーを変更する

ポーリングポリシーは、定義されたタイプのデータを収集する頻度を定義したものです。また、ローカルシステムでデバイスのデータをポーリングするかどうかを指定したり、ポーリングをリモートポーラーに割り当てるかどうかを指定するのにも使用します。



ポーリングポリシーを変更する際は注意が必要です。通常は、ポリシーのポーリング頻度だけを変更してください。テーブルやグループを変更した場合、インストールしたシステムに悪影響することがあります。

スタンドアロン環境では、ポーリングポリシーの頻度を調整できます。たとえば、何台かの新しいデバイスがネットワークに追加されるために、ネットワークが1日で頻繁に変更されることがわかっていると仮定します。現在のポーリングポリシーにおいてネットワークが1日に1回ポーリングされるようになっている場合は、新しいデバイスが使用可能になった時点でポーリングされるよう、ポリシーのポーリング頻度を1時間に1回に変更することができます。そして、ネットワークが安定した後に、ポーリング頻度を1日に1回に戻します。



ポリシーを変更したためにデータの収集頻度が高くなりすぎた場合、OVPI とネットワークのパフォーマンスに深刻な影響を及ぼす可能性があります。

リモートポーラーに対応するようなポーリングポリシーの設定の詳細は、51 ページの「リモートポーラーに対応するためのポーリングポリシーの設定」を参照してください。

ポーリングポリシーを変更するには、以下の手順に従います。

- 1 管理コンソールを起動し、ナビゲーションペインの [ポーリングポリシー] アイコンをクリックします。
- 2 表示ペインで [すべて] ページを選択することで、現在のすべてのポーリングポリシーを表示します。
- 3 変更するポリシーを探しダブルクリックします。[ポーリングポリシーの編集] ダイアログボックスが開きます。
- 4 ポーリング間隔を変更するには、[ポーリング間隔] リストから間隔を選択します。

5 [OK] をクリックします。

6 各ポーリングポリシーについて手順 3 ～手順 5 を繰り返します。

ポーリングポリシーの詳細は、第 8 章「ポーリングポリシーの管理」を参照してください。

タスク 6: システムをバックアップする

OVPI のインストールと設定を実行した後に、システムをバックアップすることをお勧めします。ファイルシステムのバックアップを通常使用する手順で実行してください。



システムをバックアップする前に、すべての OVPI サービスとデータベースを停止させることをお勧めします。OVPI サービスの停止の詳細は、80 ページの「OVPI のプロセスの開始および停止」を参照してください。Sybase の停止の詳細については、『HP OpenView Performance Insight Installation Guide』を参照してください。Oracle の停止の詳細は、Oracle のマニュアルを参照してください。

タスク 7: データベースをバックアップする

OVPI のインストールと設定を実行した後にデータベースをバックアップし、それ以降はデータベースを毎週バックアップすることをお勧めします。詳細は、63 ページの「Oracle データベースのバックアップ」または 63 ページの「Sybase データベースのバックアップ」を参照してください。

その他の設定作業

この項では、OVPI を設定するために実行できるその他の作業について説明します。

ユーザーアクセスの設定

すべての OVPI クライアントアプリケーション (レポートビルダ、レポートビューア、Web アクセスサーバー、および管理コンソール) で、ユーザーのログオンが必要です。これらのアプリケーションへのユーザーアクセスは Web アクセスサーバーを使用して設定します。

OVPI をインストールする際に、デフォルトのユーザーアカウントを 1 つ作成します。これは trendadm というアカウントです。ユーザーアカウントは、OVPI のクライアントアプリケーションを使用するユーザーごとに作成してください。

たとえば業務分野別や会社別といったように、グループを作成してユーザーを分類することもできます。すると、そのグループに対してフィルターを適用できます。そうすることで、ユーザーがアクセスできる情報を制限できます。



分散環境のためのユーザーとグループを作成するとき、それらは現在ログオンしている Web アクセスサーバーで作成されます。以降、この Web アクセスサーバーが、Web アクセスサーバーアプリケーションと管理コンソールのログオン認証を提供します。Web アクセスサーバーが複数ある場合は、ユーザーと、ユーザーがアクセスを必要としている各 Web アクセスサーバーを、必ず監視する必要があります。たとえば、2 つの異なる Web アクセスサーバーへのアクセスを必要としている複数のユーザーがいる場合は、ユーザーがアクセスを必要としている各 Web アクセスサーバーで、アカウントを 1 つ作成する必要があります。

異なるデータベースサーバーのデータによるレポートを、表示するのみの場合は、ビューを作成できます。ビューは、配布済みレポートの特定なリストを表示します。そのビューは、ユーザーがアクセスするすべてのデータベースに適用されます。ビューの作成の詳細は、544 ページの「[ビューの作成](#)」を参照してください。

ユーザーアカウントの作成

ユーザーアカウントを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 Web アクセスサーバーにアクセスします。詳細は、501 ページの「[Web アクセスサーバーへのアクセス](#)」を参照してください。
- 2 リンクバーから、**[管理]** を選択します。
- 3 **[管理]** ツリーで **[ユーザーアカウント]** を展開し、**[ユーザー]** をクリックします。**[ユーザーの管理]** ページが開き、現在のユーザーアカウントが一覧表示されます。
- 4 **[新規ユーザーの追加]** をクリックします。**[新規ユーザーの追加]** ページが開きます。
- 5 **[ユーザー名]** から **[電子メールアドレス]** までのすべてのボックスに、要求された情報を入力します。そのとき以下の制約に注意してください。

以下の文字をこのページの各フィールドで**使用しない**でください。アンパサンド (&)、円記号 (¥)、カンマ (,)、二重引用符 (“)、スラッシュ (/)、疑問符 (?)、パーセント (%)、および単一引用符 (') です。

有効な入力は以下のとおりです。

- すべての英字 (大文字と小文字)、すべての数字、および、上記のものを除くすべての特殊文字。
 - ユーザー名は、**1** 文字以上、最大 **255** 文字まで入力できます。英数字、スペース (空白)、アンダースコア (_)、アットマーク (@)、ピリオド (.)、およびハイフン (-) だけを使用できます。
 - ユーザーの実名と会社 / 部門は、最小 **0** 文字 (したがって空欄にできます)、最大 **255** 文字までです。
 - パスワードは、最小 **4** 文字、最大 **255** 文字まで入力できます。スペース (空白) は使用できません。
 - 電話番号のフォーマットは自由ですが、**255** 文字を超えることはできません。
 - 電子メールアドレスのフォーマットは自由ですが、**255** 文字を超えることはできません。
- 6 ユーザーに管理者役割がある場合にのみ **[管理者である]** チェックボックスをオンにします。このオプションを選択しない場合、アカウントには自動的にユーザー役割が与えられます。
 - 7 [データベース] リストで、ユーザーがアクセスするデータベースを選択します。現在のリストに別のデータベースを追加する方法の詳細は、**567** ページの「**システムマネージャの設定の変更**」を参照してください。
 - 8 [表示] リストで、ユーザーがアクセスするデータベースを選択します。ビューの作成方法の詳細は、**544** ページの「**ビューの作成**」を参照してください。
 - 9 ユーザーアカウントのパスワードの期限を設定するには、以下のいずれかを実行します。
 - **[無期限]** オプションをクリックします。このアカウントのパスワードは無期限になります。
 - **[パスワードの期限切れ]** オプションの日数を選択し、入力することで、パスワードの期限を設定します。

パスワードの期限が切れると、アカウントのパスワードの期限が切れたことを通知するページが表示され、そのアカウントのパスワードを変更するオプションが表示されます。

このオプションに加えて、以下を実行できます。

- パスワードの有効期限ルールをセットアップします。たとえば、パスワードの猶予期間を設定できます。このオプションにより、アカウントのパスワードの期限が切れた後も、指定回数だけそのアカウントにログオンできます。この猶予期間が経過すると、そのアカウントはロックされます（使用不能になります）。詳細は、517 ページの「[パスワードの有効期限ルールの設定](#)」を参照してください。
- ユーザーに許されるログオン試行の失敗回数を指定します。この回数だけ失敗するとアカウントはロックされます。詳細は、557 ページの「[Web アクセスサーバー設定の変更](#)」を参照してください。

10 **[適用]** をクリックします。

11 **[OK]** をクリックして新しいユーザーアカウントを確定します。

新しいユーザーアカウントを確定すると、[ユーザーの管理] ページに新しいユーザーアカウントの情報が表示されます。ユーザーアカウントはナビゲーションツリーにも表示できます。

ユーザーを作成するコマンド (userimport) と、ユーザーの管理に使用できるコマンド (userctl) もあります。これらのコマンドの詳細については、『[HP OpenView Performance Insight Reference Guide](#)』を参照してください。

フィルターを持つユーザーグループの作成

グループとは以下のものを指します。

- ユーザーアカウントの集まり
たとえば、**Thunderbolt** 社という会社のすべてのユーザー用に、**Thunderbolt** というグループを作成することができます。これは、サービスプロバイダにおいて、特定の会社の表示できるデータを制限する場合に便利です。
- ユーザーアカウントとグループの集まり
たとえば、**All** というグループを作成し、その中にいくつかのユーザーアカウントと、**North**、**East**、**South**、**West** という 4 つのグループを含めることができます。

North、*East*、*South*、*West* の各グループのユーザーに制約を設定することで、それらのユーザーが特定の地域のデータしか表示できないようにすることが可能です。

All グループのユーザーは、*North*、*East*、*South*、*West* の各グループのユーザーが表示できるデータをすべて表示できます。なぜなら、最上位のグループには、階層内の下位のグループの制約が継承されるからです。

グループを作成する際は、想定されるグループ数が少なくなるように、グループの制約を効果的に作成するよう心掛けることをお勧めします。たとえば、`interface` を制約として使用し各インタフェースに **1000** 以上のグループを持たせるのではなく、`cust-id` を制約として使用します。グループの数が多いと、データベースに送られるクエリの効率やサイズに影響することがあります。

▶ レポートがあり、1人のユーザーしかそのレポートを表示する必要がない場合は、ビューを使用するのではなく、ユーザーフォルダーの下位にあるそのユーザーのレポートディレクトリにレポートを配布します。詳細は、555 ページの「レポートの配布」を参照してください。

フィルターを持つグループを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 **Web** アクセスサーバーを起動します。詳細は、501 ページの「**Web** アクセスサーバーへのアクセス」を参照してください。
- 2 **Web** アクセスサーバーのリンクバーから **[管理]** を選択します。
- 3 **[管理]** ツリーで、**[ユーザーアカウント]** を展開し、次に **[グループ]** をクリックします。**[グループの管理]** ページが開きます。
- 4 **[新規グループの追加]** をクリックします。**[新規グループの追加]** ページが開きます。
- 5 新しいグループを作成するには、以下を実行します。
 - a **[グループ]** ボックスに、作成するグループの名前を入力します。

▶ すでに存在するグループ名を入力したり、"Group" という名前を使用しないでください。

グループ名は以下の制約に従う必要があります。

以下の文字をグループ名で**使用しない**でください。

アンパサンド (&)、アスタリスク (*)、円記号 (\)、コロン (:)、カンマ (,)、二重引用符 (“)、感嘆符 (!)、スラッシュ (/)、大なり記号 (>)、開き角かっこ (()、小なり記号 (<)、ピリオド (.)、シャープ記号 (#)、疑問符 (?)、閉じ角かっこ ()、単一引用符 (‘)、パーセント (%)、スペース (空白)

グループ名に対して有効な文字は以下のとおりです。

- 名前には、すべての英字 (大文字と小文字)、すべての数字、および、上記のものを除くすべての特殊文字を、含めることができます。
- 1文字以上、最大は **255** 文字です。

- b この新しいグループに属するユーザーおよびグループ (いずれも **1** つまたは複数) を [使用可能なユーザー/グループ] リストから選択し、[追加] をクリックします。ユーザー名、グループ名、またはその両方が、[メンバー] リストに移動します。
- c [次へ] をクリックします。[グループフィルター] ページが開きます。



フィルターは、テーブル列名、数値演算子、および統計情報の値を必要とする、比較手段です。

6 フィルターを作成するには、以下の手順に従います。

- a フィルタリングの対象となるテーブル列名を [列] フィールドに入力します。

テーブル列を探すには、テーブルマネージャを使用します。これは管理コンソールから実行できます。このフィールドで有効な値は、プロパティテーブルからのテーブル列だけです。詳細は、**388** ページの「[データテーブルの情報の表示](#)」を参照してください。

- b [演算子] フィールドの矢印をクリックし、演算子を選択します。
- c [値] フィールドに、値を入力します。

たとえば、**ABC Company** というクライアントを持つサービスプロバイダを考えてみましょう。**ABC Sales** というグループを作成し、それに **ABC** のレポートしか表示を許可しないフィルターを付けるとします。これをするには、以下のようなフィルターを作成します。

```
cust_id = 05
```

cust_id はテーブル列名です。

= は数値演算子です。

05 は ABC のカスタマ識別番号です。この値は、レポートパックのインストール時に作成したものです。詳細は、レポートパックのマニュアルを参照してください。

d [**フィルタの追加**] をクリックします。

7 [**終了**] をクリックします。

[**グループの管理**] ページに新しいグループが一覧表示されます。それらのグループは [**グループ**] フォルダーの下にあるナビゲーションフレームにも表示されます。

グループを作成するコマンド (groupimport) と、グループの管理に使用できるコマンド (groupctl) もあります。これらのコマンドの詳細については、『**HP OpenView Performance Insight Reference Guide**』を参照してください。

データベースの変更の管理

データベースの管理はシステム / ネットワークの管理アプリケーションを使用して実行できます。このアプリケーションは管理コンソールから実行できます。

このアプリケーションを使用するには、以下の手順に従います。

- 1 管理コンソールを起動します。96 ページの「**管理コンソールの起動**」を参照してください。
- 2 [**システム**] アイコンをクリックします。

システム / ネットワークの管理アプリケーションを使用したデータベース管理の詳細は、以下を参照してください。

- 361 ページの「**データベースの追加**」
- 363 ページの「**データベースプロパティの表示**」
- 366 ページの「**データベースの初期化パラメータの変更**」
- 367 ページの「**データベースサイズの拡張**」
- 371 ページの「**データベースサーバーの変更**」

SNMPv3 ノードからのデータ収集

OVPI は、SNMPv3 ノードからデータを収集できますが、これらのノードを検出できません。したがって、それらのノードからのデータ収集をサポートするよう OVPI を設定する必要があります。

SNMPv3 ノードからデータを収集するよう OVPI を設定するには、以下を実行する必要があります。

- 1 SNMP セキュリティパックのバージョン 16.1.0.35 以降を、OVPI をインストールしたシステムにインストールします。

SNMP セキュリティパックは、SNMP Research 社の製品です。購入については、SNMP Research 社にお問い合わせください。詳細は、<http://www.snmp.com> を参照してください。

このパックの BRASS 製品を使用すると、v3 のコミュニティ文字列プロファイルを持つ SNMPv3 ノードを、OVPI のポーラーで特定できます。OVPI には `brass_v3_seed` というユーティリティがあり、これを使用して認証パスワードと秘匿パスワードを指定できます。



分散型の OVPI 構成では、データを収集する予定のすべてのシステムに、SNMP セキュリティパックをインストールする必要があります。したがって、すべてのリモートポーラーと、OVPI のパフォーマンスマネージャコンポーネントをインストールしたすべてのシステムに、このパックをインストールする必要があります。

- 2 SNMP セキュリティパックの SNMPv3 設定ウィザードを使用して、各エージェントを SNMPv3 ノードに対応するよう設定します。詳細は、SNMP セキュリティパックのマニュアルを参照してください。
- 3 `brass_v3_seed` ユーティリティを使用して、ノードの認証パスワードと秘匿パスワードを指定します。
- 4 ノードをインポートします。
- 5 ノードのコミュニティ文字列を作成します。
- 6 ノードをタイプグループに割り当てます。
- 7 リモートポーラーを設定します。

SNMPv3 データを収集するためにこの項で説明した手順では、以下をすでにインストールしたと仮定しています。

- OVPI。OVPI のインストールの詳細については、『HP OpenView Performance Insight Installation Guide』を参照してください。
- SNMP セキュリティパック。

SNMPv3 ノードの設定

SNMPv3 設定ウィザードを使用して、各エージェントを **SNMPv3** ノードに対応するよう設定します。詳細は、**SNMP** セキュリティパックのマニュアルを参照してください。

brass_v3_seed ユーティリティの使用

SNMPv3 ノードから実際のデータ収集を開始できるようにするには、その前に **brass_v3_seed** ユーティリティを使用する必要があります。このユーティリティはノードのパスワードを、暗号化されたフォーマットで格納します。このユーティリティは、OVPI のインストールディレクトリの **bin** フォルダーにあります。

brass_v3_seed コマンドには以下のオプションがあります。

```
brass_v3_seed  -f ファイル名  
                 [-d デバッグレベル]  
                 [-E ]
```

-f オプション

-f オプションは必須です。入力ファイルの名前を指定します。この入力ファイルは以下のフォーマット順で表示されます。

```
<ホスト名>,<ポート番号>,<ユーザー名>,<認可プロトコル>,<認可パスワード>,<秘匿プロトコル>,<秘匿パスワード>
```

ホスト名、ポート番号、ユーザー名の各フィールドは必須です。認可プロトコルは **MD5** または **SHA** です。秘匿プロトコルは **DES** です。

-d オプション

-d オプションは省略可能であり、デバッグメッセージの表示に使用します。サポートされているデバッグレベルは、**1**、**2**、**3**です。レベル**1**では最小限のデバッグ情報が表示され、レベル**3**では最大限の詳細なデバッグ情報が表示されます。

-E オプション

-E オプションは、入力ファイルで指定されたノードの可用性をテストします。

たとえば、**neast1** という名前のホストを **snmpv3_node.txt** という入力ファイルに追加する場合、このファイルの内容は次のようになります。

```
neast1,161,ewing,MD5,cat,DES,dog
```

ユーティリティのコマンド行は次のようになり、デバッグオプションやテストオプションを選択するかどうかにより異なります。

```
brass_v3_seed -f snmpv3_node.txt -d 1 -E
```

SNMPv3 ノードのインポート

brass_v3_seed ユーティリティを実行した後、ASCII ファイルを作成することで SNMPv3 ノードを **ksi_managed_node** テーブルにインポートし、次に、ポーリングポリシーマネージャまたは **node_manager** コマンドを使用してそのファイルをインポートする必要があります。

たとえば、**neast1** というノードをインポートすると仮定します。このノードをインポートするには、以下の手順に従います。

- 1 **snmpv3_node.txt** という ASCII ファイルを作成します (詳細は、264 ページの「**ノードのインポート**」を参照してください)。

このファイルの内容は次のようになります。

```
neast1, public, private,,,,1,,smp_1, 161,10,500,20,50
```

- 2 以下のいずれかを実行することでファイルをインポートします。
 - ポーリングポリシーマネージャの [ファイル] メニューから、[**ノードのインポート**] を選択します。[インポート元] ボックスで、**snmpv3_node.txt** を見つけて選択し、[OK] をクリックします。

- `node_manager` コマンドを使用してファイルをインポートします。詳細については、『**HP OpenView Performance Insight Reference Guide**』を参照してください。このコマンドは次のようになります。

```
node_manager -import -file snmpv3_node.txt
```

コミュニティ文字列プロファイルの作成

各ノードのパスワードを格納した後、それらのノードのコミュニティ文字列プロファイルを作成する必要があります。

- 1 管理コンソールを起動します。96 ページの「**管理コンソールの起動**」を参照してください。

- 2 ポーリングポリシーマネージャアプリケーションを開きます。

詳細は第 8 章「**ポーリングポリシーの管理**」を参照してください。

- 3 以下を実行してノードのコミュニティ文字列プロファイルを作成します。

- a ポーリングポリシーマネージャの [編集] メニューから、[**コミュニティ文字列プロファイル**] を選択します。

[コミュニティ文字列プロファイルの編集] ダイアログボックスが開きます。

- b [作成] をクリックします。[コミュニティ文字列プロファイルの作成] ダイアログボックスが開きます。

- c プロファイルの名前を [プロファイル名] ボックスに入力します。この名前は最大 64 文字までです。

v3 対応の **SNMP Get** 要求を有効にするため、コミュニティ文字列の始めに以下のいずれかを含める必要があります。

— 3N (認証なし、秘匿なし)

— 3A (認証あり、秘匿なし)

— 3P (認証あり、秘匿あり)

コミュニティ文字列には、上記のいずれかと、**SNMPv3** 設定ウィザードを使用してエージェントを設定した際に割り当てた **SNMPv3** ユーザー名を使用してください。

たとえば、SNMPv3 エージェントが admin というユーザー名であり、認証ありと秘匿なしの権限にする場合の、そのエージェントのコミュニティ文字列は、3A/admin です。同様に、ユーザー名、認証権限、秘匿権限の、別の組み合わせも可能です。

- d 読み取り権限の値を [読み取り] ボックスに入力します。
 - e 書き込み権限の値を [書き込み] ボックスに入力します。
 - f [OK] をクリックします。
- 4 以上の手順を、各 SNMPv3 ノードに繰り返します。

タイプグループへのノードの割り当て

SNMPv3 ノードが、自動的にタイプ別に検出されて特定のグループに配置されることはありません。ポーリングポリシーマネージャアプリケーションを使用して、手動でノードをグループに割り当てる必要があります。

ノードを各グループに割り当てるには、以下の手順に従います。

- 1 ポーリングポリシーマネージャアプリケーションを開きます。
詳細は第 8 章「ポーリングポリシーの管理」を参照してください。
- 2 [編集] メニューの [ポーリンググループ] を選択します。
[ポーリンググループの編集] ダイアログボックスが開きます。
- 3 [グループの種類を選択] ボックスから [同じタイプのすべてのノード] を選択します。
- 4 1つまたは複数のノードを追加するグループを、[ポーリング元とするグループの選択] ボックスから選択します。
- 5 [編集] をクリックします。
- 6 グループのノードを選択するには、以下のいずれかを実行します。
 - [他のノード] ボックスでノードを選択し、 をクリックしてノードを [グループ内のノード] ボックスに追加します。
 - [他のノード] ボックスでノードをダブルクリックします。ノードが [グループ内のノード] ボックスに移動します。
- 7 完了したら、[OK] をクリックします。
- 8 [閉じる] をクリックします。

SNMPv3 ノードに対応するためのリモートポーラーの設定

リモートポーラーは、SNMPv3 ノードを自動的にポーリングできません。すべてのリモートポーラーに SNMP セキュリティパック製品をインストールする必要があります。詳細は、SNMP セキュリティパックのマニュアルを参照してください。

分散型構成の設定

この項では、OVPI をインストールした後に、分散型構成を設定するために実行できる作業について説明します。分散型構成では、OVPI のコンポーネントが、物理的に別々のシステムにインストールされ、全体が 1 つの分散型システムとして稼働します。分散型構成の詳細については、『HP OpenView Performance Insight Installation Guide』を参照してください。

リモートポーラーに対応するためのポーリングポリシーの設定

リモートポーラーは、ネットワークノードからデータを収集し、そのデータを OVPI データベースに格納するシステムです。このデータベースはリモートポーラーシステム上には存在しません。リモートポーラーは、ネットワーク内のノードからデータを収集し、OVPI データベースが動作しているサーバーにそのデータを格納します。

リモートポーラーをインストールした後に、レポートパック用のポーリングポリシーを設定する必要があります。ポーリングポリシーはデータベースサーバー上に配置されますが、データの収集元となるリモートポーラーを識別できるようにポーリングポリシーをセットアップする必要があります。データベースサーバーは、対象期間の収集が完了した後に、リモートポーラーからデータを転送します。

この項では、分散型構成においてポーリングポリシーを変更する可能性のある以下の方法について説明します。

- ポーリングポリシーを実行するシステムを変更する。
- 複数のポーラー用の新しいポリシーを作成する。

ポーリングシステムの変更

レポートバックをサテライトサーバーにインストールすると、インストールされたシステムからポーリングするよう、それらのレポートバック用のポーリングポリシーが最初にセットアップされます。したがって、リモートポーラーからポーリングするよう、それらのレポートバックのポーリングポリシーを編集する必要があります。

以下の手順では、ポーリングポリシーのポーリングシステムを、サテライトサーバー (**neast1** と仮定) からリモートポーラー (**neast2** と仮定) に変更する方法を示します。

- 1 管理コンソールを起動し、ナビゲーションペインの **[ポーリングポリシー]** アイコンをクリックします。
- 2 表示ペインで **[すべて]** ページを選択することで、現在のすべてのポーリングポリシーを表示します。
- 3 変更するポリシーを探し、そのポリシーをダブルクリックします。**[ポーリングポリシーの編集]** ダイアログボックスが開きます。**[ポーリングの割り当て先]** ボックスの値は **neast1** です。
- 4 リモートポーラーを追加するには、以下を実行します。
 - a **[ポーリングの割り当て先]** ボックスの横にある **[作成]** をクリックします。**[データパイプインストールの作成]** ダイアログボックスが開きます。
 - b リモートポーラーにするシステムの名前 (この例では **neast2**) を **[ホスト名]** ボックスに入力します。
 - c **[OK]** をクリックします。
- 5 ポーリングシステムを変更するには、**[ポーリングの割り当て先]** リストから **[neast2]** を選択します。
- 6 **[OK]** をクリックします。
- 7 各レポートバックに関連するすべてのポーリングポリシーについて、**手順 3** と **手順 5** を繰り返します。

ポーリングポリシーの詳細は、[第 8 章「ポーリングポリシーの管理」](#) を参照してください。

複数のポーラー用の新しいポリシーの作成

異なるデバイスをポーリングする複数のポーラーがある場合は、それらのポーラー用に新しいポリシーを作成する必要があります。たとえば、**Common Properties** および **Interface Reporting** の各レポートパックをサテライトサーバーにインストールしてあって、**Poller A** および **Poller B** という 2 つのポーラーがあると仮定します。**Poller A** には 10 台のデバイスとそれらすべてのインタフェースをポーリングさせ、**Poller B** には別の 10 台のデバイスとそれらすべてのインタフェースをポーリングさせる必要があるとします。



そのためのポーリングポリシーを作成する前に、2 つのデバイスセットに対応したポーリンググループを作成する必要があります。

デバイスのグループ化

この例に必要な 2 つのグループを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 管理コンソールを起動します。96 ページの「[管理コンソールの起動](#)」を参照してください。

- 2 **[グループ]** アイコンをクリックします。

[グループ管理] ウィンドウが管理コンソールに表示されます。ウィンドウの左側にはグループ管理ツリーが表示され、そこには選択したビューの種類に対応したすべてのグループが一覧表示されます。

グループは、管理対象オブジェクト (複数可) を選択することで作成します。

- 3 **[グループ化]** フォルダーを展開し、それから **[管理対象オブジェクト]** フォルダーを展開します。
- 4 グループ化する管理対象オブジェクトのあるフォルダーを右クリックします。ショートカットメニューが開き、列挙、派生、プロパティ、フォルダーの、いずれかの種類のグループについて、その新しいインスタンスを作成できます。

この例では 2 つのグループを作成する必要があります。1 つは、10 台のデバイスとそれらすべてのインタフェース用のグループであり、もう 1 つは別の 10 台のデバイスとそれらすべてのインタフェース用のグループです。

- 5 フォルダーを右クリックし、メニューから **[列挙グループの作成]** を選択します。[グループの作成] ダイアログボックスが開きます。

- 6 グループの名前を [グループ名] ボックスに入力します (たとえば **DevicesA**)。
- 7 グループの説明を [説明] ボックスに入力します。
- 8 グループにノードを追加するには、以下のいずれかを実行します。
 - [他のノード] ボックスでノードをダブルクリックして、そのノードを [グループ内のノード] ボックスに移動します。
 - [他のノード] ボックスでノードまたはインタフェースを選択し、 をクリックしてそのノードを [グループ内のノード] ボックスに追加します。
- 9 グループを作成する前にそのグループからノードを削除するには、以下のいずれかを実行します。
 - [グループ内のノード] ボックスでノードをダブルクリックして、そのノードを [他のノード] ボックスに移動します。
 - [グループ内のノード] ボックスでノードを選択し、 をクリックしてそのノードを [他のノード] ボックスに戻します。
- 10 完了したら、**[OK]** をクリックします。
- 11 この手順の**手順 5**～**手順 10**を繰り返すことで、**2** 番目のグループ (たとえば **DevicesB**) を作成します。

グループマネージャの詳細は、[第 11 章「管理対象オブジェクトのグループ化」](#)を参照してください。

1 番目のポーリングポリシーの作成

この手順では、必要となる 1 番目のポーリングポリシーの作成方法を示します。ポーリングポリシーを変更するには、以下の手順に従います。

- 1 管理コンソールを起動します。[96](#) ページの「[管理コンソールの起動](#)」を参照してください。
- 2 **[ポーリングポリシー]** アイコンをクリックします。
- 3 [ファイル] メニューの **[ポーリングポリシーの作成]** を選択します。
[ポーリングポリシーの作成] ダイアログボックスが開きます。
- 4 以下のオプションの値を変更します。

- a ポーリングポリシーの名前として、明確に区別できる一意の名前 (**Policy 1** と仮定) を、[ポリシー名] ボックスに入力します。
- b ポーリング対象のデータを選択します。
- c [データの収集元] リストから [**カスタムグループ**] を選択します。
- d 1 番目のグループの名前 (この例では **DevicesA**) を [ポーリング元とするグループの選択] リストから選択します。
- e ポーリング間隔を選択します。
- f データパイプを選択します。
- g デバイスからデータを収集するポラーの名前 (この例では **Poller A**) を [ポーリングの割り当て先] リストから選択します。
- h このポーリングポリシーの説明を [説明] ボックスに入力します。
- i [**OK**] をクリックします。

これで、**Policy 1** という 1 番目のポーリングポリシーが作成されました。

2 番目のポーリングポリシーの作成

この手順では、2 番目のポーリングポリシーの作成方法を示します。

2 番目のポーリングポリシーを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 管理コンソールを起動します。96 ページの「[管理コンソールの起動](#)」を参照してください。
- 2 [**ポーリングポリシー**] アイコンをクリックします。
- 3 [ファイル] メニューの [**ポーリングポリシーの作成**] を選択します。
[ポーリングポリシーの作成] ダイアログボックスが開きます。
- 4 以下の手順に従います。
 - a ポーリングポリシーの名前として、明確に区別できる一意の名前 (この例では **Policy2**) を、[ポリシー名] ボックスに入力します。
 - b ポーリング対象のデータを選択します。
 - c [データの収集元] リストから [**カスタムグループ**] を選択します。
 - d 2 番目のグループの名前 (この例では **DevicesB**) を [ポーリング元とするグループの選択] リストから選択します。

- e ポーリング間隔を選択します。
- f データパイプを選択します。
- g デバイスからデータを収集するポーラーの名前(この例では **Poller B**)を [ポーリングの割り当て先] リストから選択します。
- h このポーリングポリシーの説明を [説明] ボックスに入力します。
- i **[OK]** をクリックします。

これで、**Policy 2** という 2 番目のポーリングポリシーが作成されました。

3 インストールした OVPI の管理

この章では、インストールした OpenView Performance Insight (OVPI) を維持管理するために特定の間隔で実行する必要がある管理作業について説明します。

インストール後の管理作業

OVPI を正常にインストールした後、それに続いていくつかの管理作業を、その日から実行する必要があります。以下の管理作業を、OVPI を初めてインストールした日から実行する必要があります。

- OVPI が動作していることの確認
- レポートのスケジュール設定
- ユーザー、グループ、およびグループフィルターの変更

OVPI が動作していることの確認

OVPI が正常に動作していることを確認するには、以下を実行します。

- 1 データベースのエラーログファイルを確認して、データベースの損傷やハードウェアの問題がないことを調べます。

Sybase のエラーログファイル (error.log) は、Sybase をインストールしたディレクトリの `$SYBASE/$SYBASE_ASE/install` フォルダーにあります。

Oracle のログファイルは通常は `$ORACLE_BASE/admin/<SID>` にあります。

- 2 準備したノードのデータが収集されていることを確認します。これを確認するには、trend.log ファイルを確認することで、SNMP のセッションエラーがないことと、SNMP のタイムアウトエラーを継続的に引き起こしているノードがないことを確かめます。

ログファイルの検索

trend.log ファイルには、OVPI のすべてのバックエンドプロセス (たとえば **trendtimer**) のメッセージが格納されています。各メッセージは、ログ記録されたプロセスの開始時刻と終了時刻を示します。

OVPI のインストール時にログファイルのデフォルトの場所を使用した場合は、ログファイルは OVPI インストールディレクトリ配下の log フォルダにあります (**Windows** システムの場合は、たとえば C:\OVPI\log)。

ログファイルがデフォルトの場所がない場合に、その所在を調べるには、使用しているオペレーティングシステムに応じて以下のいずれかを実行します。

Windows

- a **Windows** のタスクバー上の [スタート] ボタンをクリックし、[設定]、[コントロール パネル] の順に選択します。[コントロール パネル] ウィンドウが開きます。
- b [システム] をダブルクリックします。[システムのプロパティ] ダイアログボックスが表示されます。
- c [詳細] タブをクリックし、[環境変数] ボタンをクリックします。
- d システム環境変数のリストで **TREND_LOG** 変数を探します。たとえば次のようになっています。

```
TREND_LOG          C:\OVPI\log
```

UNIX

オペレーティングシステムのユーザー (trendadm) として、コマンド行で以下を入力します。

```
echo $TREND_LOG
```

このコマンドによって、ログフォルダの場所が表示されます。

SNMP エラーの解決

SNMP エラーが見つかった場合は、trendtimer.sched ファイルの **mw_collect** エントリーを変更する必要があります。特に、mw_collect コマンドに指定する値について、-o オプション (タイムアウト) や -r オプション (再試行) を使用して調整する必要があります。mw_collect コマンドの詳細については、『HP OpenView Performance Insight Reference Guide』を参照してください。

- 3 テーブルマネージャ ([管理コンソール] から実行できます) を使用して、データ収集をしているかどうかを確認めます。詳細は、385 ページの「[プロパティテーブルの表示](#)」を参照してください。

レポートに内容が正しく記載されていない様子である場合は、Web アクセスサーバーをデバッグモードにすることで、レポートの生成に使用されている SQL 文を表示します (Web アクセスサーバーをデバッグモードにする方法の詳細は、557 ページの「[Web アクセスサーバー設定の変更](#)」を参照してください)。SQL 文の確認が済んだら、Web アクセスサーバーのデバッグモードを必ずオフにしてください。さもないとシステムのパフォーマンスが低下することがあります。

レポートのスケジュール設定



スケジュールの設定は、すべてのレポートパックのすべてのレポートについては、**行わない**でください。

次の異なるレポートフォーマットがあります。html、.srep、.csv、.pdf。電子メールで送信できるのは、.pdf フォーマットのレポートだけです。特定の状況においてのみ、一度に少数のレポートに、スケジュール設定することをお勧めします。たとえば、PDF フォーマットの要約レポートを毎週生成するよう上司が求めたといった場合に、スケジュール設定をします。Web アクセスサーバーを使用してレポートを対話形式で表示すれば、レポートのスケジュールを設定せずに済みます。レポートのスケジュール設定の詳細は、『[HP OpenView Performance Insight レポートの作成および表示ガイド](#)』を参照してください。

ユーザーアカウントの変更

場合によっては、ユーザーアカウントの変更が必要になることがあります。たとえば、ユーザーをアカウントからロックしなければならない場合などです。

ユーザーアカウントを変更するには、以下の手順に従います。

- 1 リンクバーから、[管理] を選択します。
- 2 [管理] ツリーで、[ユーザー アカウント] を展開し、次に [ユーザー] をクリックします。[ユーザーの管理] ページが開き、ユーザーアカウントが一覧表示されます。
- 3 以下のいずれかを実行します。

- [ユーザーの管理] ページでユーザーアカウントをクリックします。
- 変更するユーザーアカウントの横にある **[編集]** アイコン () をクリックします。

[ユーザー名の編集] ページが表示されます。

- 4 変更を加えた後、**[適用]** をクリックします。

たとえば、ユーザーアカウントをロックするには、**[ユーザーのログインを許可しない]** チェックボックスをオンにします。

- 5 **[OK]** をクリックして変更を確定します。

ユーザーアカウントの変更の詳細は、**516** ページの「**ユーザーアカウントの管理**」を参照してください。

ユーザーグループの変更

ユーザーグループを変更するには、以下の手順に従います。

- 1 リンクバーから、**[管理]** を選択します。
- 2 [管理] ツリーで、[ユーザーアカウント] を展開し、次に **[グループ]** をクリックします。[グループの管理] ページが開き、ユーザーグループとユーザーのリストが表示されます。
- 3 以下のいずれかを実行します。
 - [グループの管理] ページのユーザーグループをクリックします。
 - ユーザーグループの横の  ([編集] アイコン) をクリックします。このオプションを選択した場合は、この手順のステップ **5** に進みます。

[次の項目の内容: <グループ名>] ページが開き、ユーザーグループと、そのユーザーグループに含まれているユーザーのリストが表示されます。

- 4 **[グループの編集]** をクリックします。[グループの変更] ページが表示されます。これは、[新規グループの追加] ページと同じものです。
- 5 ユーザーグループに追加する場合、ユーザーまたはユーザーグループを [使用可能なユーザー/グループ] リストから選択し、**[追加]** をクリックします。ユーザーまたはユーザーグループが [メンバー] リストに追加されます。

- 6 ユーザーグループから削除する場合、ユーザーまたはユーザーグループを [メンバー] リストから選択し、[削除] をクリックします。[使用可能なユーザー/グループ] リストからユーザーまたはユーザーグループが削除されます。
- 7 [次へ] をクリックしてから [完了] をクリックします。

ユーザーグループのフィルターの変更

ユーザーグループのフィルターを変更するには、以下の手順に従います。

- 1 リンクバーから、[管理] を選択します。
- 2 [管理] ツリーで、[ユーザーアカウント] を展開し、次に [グループ] をクリックします。[グループの管理] ページが開き、ユーザーグループとユーザーのリストが表示されます。
- 3 以下のいずれかを実行します。
 - [グループの管理] ページのユーザーグループをクリックします。
 - ユーザーグループの横の  ([編集] アイコン) をクリックします。

[次の項目の内容:<グループ名>] ページが表示され、ユーザーグループと、そのユーザーグループに含まれているユーザーのリストが表示されます。
- 4 [フィルターの編集] をクリックします。[グループフィルター] ページが開きます。
- 5 フィルターを選択し [編集] をクリックします。フィルターの値が、[列]、[演算子]、および [値] の各ボックスに表示されます。
- 6 必要な値を編集し、[フィルタの追加] をクリックします。
- 7 [終了] をクリックします。

ユーザーグループのフィルターの削除

ユーザーグループのフィルターを削除するには、以下の手順に従います。

- 1 リンクバーから、[管理] を選択します。
- 2 [管理] ツリーで、[ユーザーアカウント] を展開し、次に [グループ] をクリックします。[グループの管理] ページが開き、ユーザーグループとユーザーのリストが表示されます。

- 3 以下のいずれかを実行します。
 - ナビゲーションフレームでユーザーグループを選択します。
 - [グループの管理] ページのユーザーグループをクリックします。
 - ユーザーグループの横の  ([編集] アイコン) をクリックします。

[次の項目の内容 :<グループ名>] ページが表示され、ユーザーグループと、そのユーザーグループに含まれているユーザーのリストが表示されます。
- 4 [フィルター編集] をクリックします。[グループフィルター] ページが開きます。
- 5 [グループフィルター] ボックスで、削除するフィルターを選択し、[削除] をクリックします。
- 6 [終了] をクリックします。

毎日実行する管理作業

プロセスや要約が正しく完了していることを確かめることで、データのステータスを確認してください。

データのステータスの確認

プロセスと要約のステータスを確かめるには、`audit.log`、`trend.log`、および `metrics.log` の内容を表示し、オペレーティングシステムのプロセスリストを確認します。ログファイルに含まれている情報の詳細は、[第20章「ログファイルの解釈」](#)を参照してください。

毎週実行する管理作業

毎週実行する必要がある管理作業を以下に示します。

- データベースのバックアップ

バックアップの頻度を増やすほど、致命的なエラーやディスク障害の際にデータを損失する可能性が減ります。

Oracle データベースのバックアップ

Oracle データベースを使用している場合は、以下のいずれかを実行できます。

- オフラインバックアップ。このバックアップを実行する場合は、**Oracle** と **OVPI** をシャットダウンする必要があります。

OVPI をシャットダウンするには、**OVPI HTTP Server** サービスと **OVPI Timer** サービスを停止させる必要があります。詳細は、80 ページの「**OVPI のプロセスの開始および停止**」を参照してください。

- オンラインバックアップ。このバックアップを実行する場合は、ファイルのバックアップ中もデータベースを使用できます。

以上のそれぞれのバックアップの詳細は、**Oracle** のマニュアルを参照してください。

Sybase データベースのバックアップ

Sybase データベースのバックアップを行うには、以下のガイドラインに従ってください。

- できれば、すべてをディスクにダンプして、ディスクの内容をテープに移動します。複数のシステムを使用している場合は、すべてのデータベースを 1 つのシステムのバックアップサーバーにダンプし、そのファイルすべてを同じテープに保存します。
- バックアップサーバーが稼動していることを確認し、そのバックアップサーバーにアクセスするすべてのシステムのインタフェースファイルにこのバックアップサーバーを追加します（新しいバックアップサーバーを作成する場合は、バックアップサーバーの作成後、**Sybase SQL** サーバーを再起動してください）。
- バックアップサーバープログラムにより、データベースのダンプおよびロードを実行できます。このプログラムは、**Sybase SQL** サーバーと同じシステムで動作します。リモートシステム上のバックアップサーバー 1 台とローカルシステムの別のバックアップサーバー 1 台を使って、ネットワーク上でバックアップをとることができます。

- UNIX システムでは、バックアップサーバーは自動的に作成されません。バックアップサーバー作成の詳細は、64 ページの「UNIX システムでのバックアップサーバーの作成」を参照してください。
- Windows システムでは、バックアップサーバーは自動的に作成されません。バックアップサーバー作成の詳細は、68 ページの「Windows システムでのバックアップサーバーの作成」を参照してください。
- 既存のサーバー上にあるすべてのデータベース (マスター、dpipe_db、および sybssystemprocs) のバックアップを個々に作成します。詳細は、69 ページの「Sybase SQL Server のバックアップ」を参照してください。

Sybase SQL インストールサーバーのバックアップ

Sybase データベースのダンプおよびロードはバックアップサーバープログラムによって実行されます。このプログラムは Sybase SQL サーバーと同じシステム上で動作します。リモートシステム上のバックアップサーバー 1 台とローカルシステムの別のバックアップサーバー 1 台を使って、ネットワーク上でバックアップをとることができます。

この項では、Sybase 11.9.2.x システムでバックアップサーバーを作成し、インストールした Sybase SQL サーバーをバックアップする方法について説明します。バックアップサーバーの使用法の詳細については、『SYBASE SQL Server System Administration Guide』を参照してください。

UNIX システムでのバックアップサーバーの作成

Sybase のインストール時、デフォルトでは SYB_BACKUP という名前のバックアップサーバーが作成されます。別の名前のバックアップサーバーを作成する場合は、srvbuild ユーティリティを使用します。

バックアップサーバーを作成するには、以下の手順に従います。

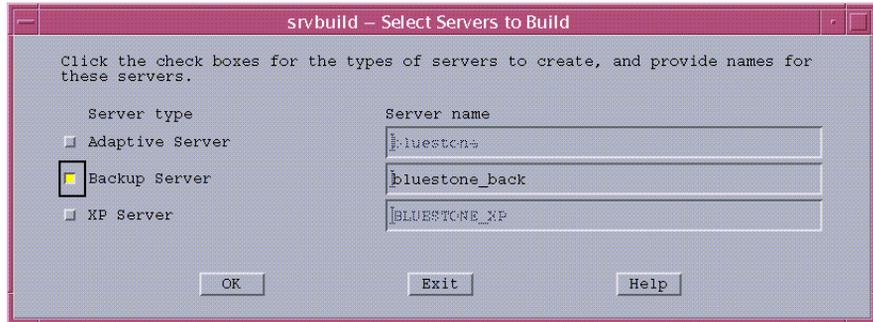
- 1 システムに root としてログオンします。
- 2 ターミナルウィンドウを開きます。
- 3 \$SYBASE 変数が、Sybase をインストールしたディレクトリを指していることを確認します。
- 4 Sybase がインストールされているディレクトリに変更するには、次のコマンドを入力します。

```
cd $SYBASE/bin
```

- 5 次のコマンドを入力して、`srvbuild` ユーティリティを実行します。

```
./srvbuild
```

[Select Servers to Build] ダイアログボックスが開きます。



- 6 [Server type] で **[Backup Server]** を選択します。

バックアップサーバーのデフォルト名が対応する [Server name] ボックスに表示されます。

- 7 デフォルト名のままでよければ、**[OK]** をクリックします。

[Server Attribute Editor] ダイアログボックスが開きます。

Server name: bluestone_back
Server type: Backup Server

Accept the default values, or change them as desired. Fields marked with an * are required.

* Related Adaptive Server name:

* Error log path:

Tape configuration file:

Language:

Character set:

Maximum number of network connections:

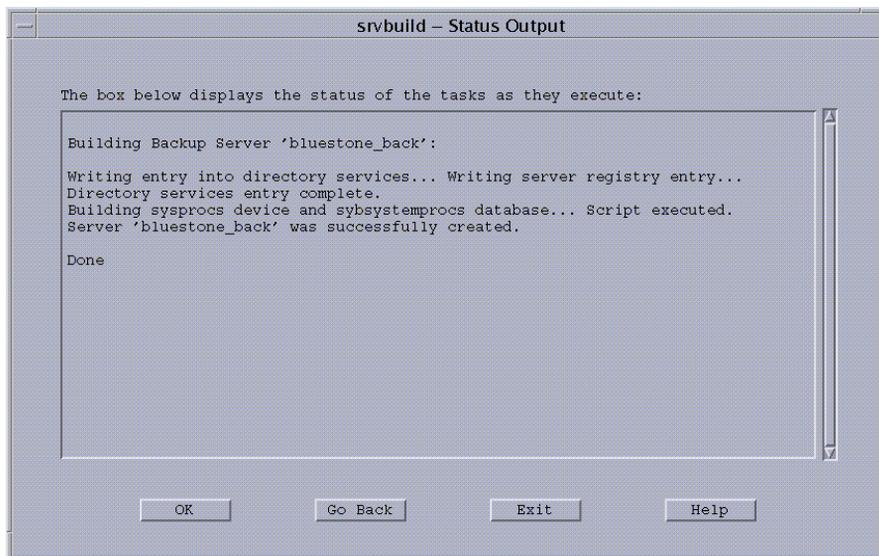
Maximum number of server connections:

* Interfaces file entry:

Transport type	Host name	Port number
<input type="text" value="tli tcp"/>	<input type="text" value="bluestone"/>	<input type="text" value="4200"/>

- 8 デフォルト値のままであれば、[Build Server!] をクリックします。

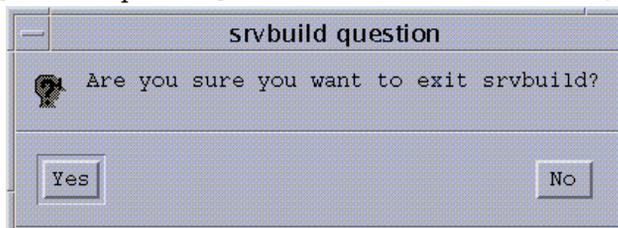
[Status Output] ウィンドウが開きます。



[Status Output] ウィンドウに [Done] と表示されたら、作成は完了です。

- 9 [Exit] をクリックします。

[srvbuild question] ダイアログボックスが開きます。



- 10 [Yes] をクリックします。

新しいバックアップサーバーを作成したら、**syssservers** テーブルから古いバックアップサーバーのエントリを削除して、新しいバックアップサーバーのエントリを追加する必要があります。

- 11 次のコマンドを入力して、**isql** ユーティリティを起動します。

```
isql -Usa -P
```

- 12 次のコマンドを入力して、古いバックアップサーバーのエントリー（この例では、「**SYB_BACKUP**」という名前のサーバー）を削除します。

```
1> sp_dropserver OSYB_BACKUPO
2> go
```

```
Server dropped.
(return status = 0)
```

- 13 次のコマンドを入力して、新しいバックアップサーバーのエントリー（この例では、「**bluestone_back**」という名前のサーバー）を追加します。

```
1> sp_addserver OSYB_BACKUPO, null, Obluestone_backO
2> go
```

```
Adding server 'SYB_BACKUP', physical name 'bluestone_back'
Server added.
(return status = 0)
```

Windows システムでのバックアップサーバーの作成

Sybase をインストールすると、デフォルトでバックアップサーバーが作成されます。別の名前のバックアップサーバーを作成する場合は、**Sybase Server Config** ユーティリティを使用します。

バックアップサーバーを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 管理者権限のあるアカウントでシステムにログオンします。
- 2 タスクバー上の [スタート] ボタンをクリックし、[プログラム]、[Sybase]、[ServerConfig] の順に選択します。[Sybase サーバーの設定] ダイアログボックスが開きます。
- 3 [製品] 列で [バックアップサーバー] を選択します。
- 4 [バックアップサーバーの作成] をクリックします。[バックアップサーバー] ダイアログボックスが開きます。
- 5 [続行] をクリックして、デフォルトを採用します。[バックアップサーバーのオプション] ダイアログボックスが開きます。
- 6 [続行] をクリックして、デフォルト値を採用します。ただし、接続を追加する必要がある場合は、以下を実行します。
 - a [ネットワークアドレス] をクリックして、[ネットワーク接続] ダイアログボックスを表示します。

- b [追加] をクリックして、[接続入力] ダイアログボックスを表示します。
 - c 適切な情報を入力し、[OK] をクリックします。
 - d [ネットワーク接続] ダイアログボックスの [OK] をクリックします。
- 7 [続行] をクリックします。[新規バックアップサーバーの完了] ウィンドウが開き、FINISHED! メッセージが表示されます。
 - 8 [続行] をクリックします。
 - 9 [Sybase サーバーの設定] ダイアログボックスの [終了] をクリックします。

Sybase SQL Server のバックアップ

Sybase SQL Server をバックアップするには、以下を実行します。

- バックアップサーバーの起動 (69 ページの「UNIX システムでのバックアップサーバーの起動」または 70 ページの「Windows システムでのバックアップサーバーの起動」を参照)。
- ダンプデバイスの作成 (70 ページの「ダンプデバイスの作成」を参照)。
- データベースのダンプ (72 ページの「データベースのダンプ」を参照)。
- データベースのロード (74 ページの「データベースのロード」を参照)。
- バックアップサーバーのシャットダウン (75 ページの「バックアップサーバーのシャットダウン」を参照)。

この項で説明するように、サーバーは手動でバックアップできますが、バックアップサーバーの起動、ダンプデバイスの作成、データベースのダンプ、およびバックアップサーバーのシャットダウンを実行するスクリプトを作成することもできます。バックアップスクリプト作成の詳細は、76 ページの「スクリプトを使用した Sybase SQL Server のバックアップ」を参照してください。

UNIX システムでのバックアップサーバーの起動

バックアップサーバーを起動するには、以下の手順に従います。

- 1 Sybase の管理者としてシステムにログオンします。
- 2 ターミナルウィンドウを開きます。
- 3 \$SYBASE 変数が、Sybase をインストールしたディレクトリを指していることを確認します。

- 4 次のコマンドを入力して、バックアップサーバーを起動します。

```
startserver -f パス / サーバー名
```

この例で、パスはバックアップサーバーの位置を示す完全修飾の SYBASE パスで、サーバーはバックアップサーバーの名前です。SQL Server のデフォルトのサーバー名は SYB_BACKUP です。

Windows システムでのバックアップサーバーの起動

バックアップサーバーを起動するには、以下の手順に従います。

- 1 管理者権限のあるアカウントでシステムにログオンします。
- 2 Windows のタスクバー上の [スタート] ボタンをクリックし、[設定]、[コントロール パネル] の順に選択します。
- 3 [管理 ツール] アイコンをダブルクリックします。
- 4 [サービス] アイコンをダブルクリックします。
- 5 [サービス] 一覧から、Sybase バックアップサーバーを選択します。
(Sybase BCKserver_ *hostname* _BS).

この例で、*hostname* はバックアップサーバーが稼動しているシステムの名前です。

- 6 [開始] をクリックします。

バックアップサーバーの起動中であることを示すメッセージが表示されません。サーバーが起動されると、[ステータス] 列の Sybase バックアップサーバーの横に [開始] と表示されます。

- 7 [サービス] ウィンドウと [コントロールパネル] ウィンドウを閉じます。

ダンプデバイスの作成

ダンプデバイスを作成するには、以下のように sp_addumpdevice コマンドを使用します。

sp_addumpdevice *OdevicetypeO, devicename, OphysicalnameO, size:*

ここで、 *devicetype* ダンプするデバイスのタイプです。二重引用符で囲みます。有効な値は「**tape**」と「**disk**」です。

devicename デバイスの名前です。

physicalname デバイスの物理名です。二重引用符で囲みます。

size デバイスのサイズを指定します。

テープへのダンプデバイスを作成する場合、テープデバイスは非巻き戻しデバイスでなければならず、sp_addumpdevice コマンドで **size** パラメータを使用する必要があります。

ディスクへのダンプデバイスを作成する場合は、sp_addumpdevice コマンドで **size** パラメータを省略します。省略しない場合は、警告メッセージが表示されません。ただし、その場合でもデバイスは作成されます。

また、Windows では、Sybase Central を使用しても、ディスクへのダンプデバイスを作成することができます。Sybase Central を起動するには、Windows タスクバー上の [スタート] ボタンをクリックし、[プログラム]、[Sybase]、**Sybase Central** の順に選択します。

例：テープへのダンプデバイスの作成

この項の例では、UNIX システムと Windows システムそれぞれについて、テープへのダンプデバイスを作成する方法を示します。どちらの例でも、データベースのサイズとして 200MB が指定され、実際のデータベースサイズよりも多少大きくなっています。

- UNIX の場合：

```
isql -Usa -P
1> sp_addumpdevice "tape", tapedump, "/dev/rmt/0mn", 200
2> go
```

- Windows の場合：

```
isql -Usa -P
1> sp_addumpdevice OtapeO, tapedump, O\\.\tapeO, 200
2> go
```

例：ディスクへのダンプデバイスの作成

次の例では、UNIX システムと Windows システムそれぞれについて、ディスクへのダンプデバイスを作成する方法を示します。

- UNIX の場合：

```
isql -Usa -P
1> sp_addumpdevice Odisk0, diskdump,
"/export/home/diskdump.dat"
2> go
```

- Windows の場合：

```
isql -Usa -P
1> sp_addumpdevice Odisk0, diskdump, OC:\HOME\diskdump.dat0
2> go
```

データベースのダンプ

データベースのバックアップには、dump database コマンドを使用します。アップグレード時に何らかの問題が検出された場合に、このダンプを使用して復元を行う必要があります。

dump database コマンドには 2 種類のフォーマットがあり、それぞれ次の機能があります。

- あらかじめ作成しておいたダンプデバイスにデータをダンプできます。
- 二重引用符で囲んで完全修飾のパス名を指定したファイルにデータをダンプできます。



必ず、既存のサーバー上にあるすべてのデータベース（マスター、dpipe_db、および sybssystemprocs）を個々にダンプしてください。

デバイスへのデータベースのダンプ

あらかじめ作成しておいたダンプデバイスにデータベースをダンプできます（ダンプデバイスの作成については、70 ページの「ダンプデバイスの作成」を参照してください）。

UNIX システムまたは Windows システム上でダンプデバイスにデータベースをダンプするには、次のコマンドを使用します。このデバイスは、**SYBASE**(Windows の場合は **%SYBASE%**) ディレクトリの指定した位置に表示されます。

```
isql -Usa -P
1> dump database db_name to devicename with init
2> go
```

この例では、*db_name* に **master**、**dpipe_db**、および **sybssystemprocs** を使用して、それぞれのデータベースをダンプします。



init パラメータを使用することをお勧めします。このパラメータを使用することで、宛先のダンプデバイス (*devicename*) 上にある既存のデータに上書きされます。

次の例では、あらかじめ定義しておいたダンプデバイス (テープまたはディスク) へデータベースをダンプするために入力するコマンドを示します。

- テープ :

```
isql -Usa -P
1> dump database dpipe_db to tapedump with init
2> go
```

- ディスク :

```
1> dump database dpipe_db to diskdump with init
2> go
```

ファイルへのデータベースのダンプ

ファイルにデータベースをダンプできます。完全修飾されたファイル名 (ダンプファイル名とディレクトリパス) を二重引用符で囲みます。

以下のいずれかを実行します。

- UNIX の場合 :

```
isql -Usa -P
1> dump database db_name to "/path/dumpfile"
2> go
```

- Windows の場合 :

```
isql -Usa -P
1> dump database db_name to O\path\dumpfileO
2> go
```

次の例では、UNIX システムおよび Windows システムで、**master**、**sybssystemprocs**、および **dpipe_db** の各データベースをバックアップするコマンドストリームを示します。

- UNIX の場合 :

```
isql -Usa -P
1> dump database master to
"/apps/syb_dumps/hostA_master_dump.dat"
2> go
```

```
1> dump database sybssystemprocs to
"/apps/syb_dumps/hostA_procs_dump.dat"
2> go
```

```
1> dump database dpipe_db to
"/apps/syb_dumps/hostA_dpipe_db_dump.dat"
2> go
```

- Windows の場合 :

```
isql -Usa -P
1> dump database master to Oc:\sybdump\mastdmp.datO
2> go
```

```
1> dump database sybssystemprocs to Oc:\sybdump\procdmp.datO
2> go
```

```
1> dump database dpipe_db to Oc:\sybdump\dpipedmp.datO
2> go
```

データベースのロード

この項では、あらかじめ定義しておいたダンプデバイス（テープまたはディスク）からデータベースをロードおよびリストアする方法の例を示します。

次の例では、テープまたはディスクからデータベースをロードする方法を示します。

- テープ :

```
isql -Usa -P
1> load database dpipe_db from tapedump
2> go
```

この例で、*tapedump* はテープデバイスです。

- ディスク :

```
1> load database dpipe_db from diskdump
2> go
```

この例で、*diskdump* はダンプデバイスです。

次の例では、データベースのリストア方法を示します。

```
1> online database dpipe_db
2> go
```

バックアップサーバーのシャットダウン

バックアップサーバーをシャットダウンするには、以下の手順に従います。

- 1 次のコマンドを入力して、システム管理者権限のあるアカウントで Sybase SQL Server にログオンします。

```
isql -Usa -Ppassword
```

- 2 次のコマンドを入力して、指定したバックアップサーバーをシャットダウンします。

```
1> shutdown SYB_BACKUP
2> go
```

shutdown コマンドを使用してバックアップサーバーを停止する場合、そのバックアップサーバーに対して **syservers** テーブルに示されている **svrname** を指定します。SQL Server のデフォルトの **svrname** は **SYB_BACKUP** です。

代わりに、以下の方法で Windows システム上のバックアップサーバーをシャットダウンすることができます。

- 1 管理者権限のあるアカウントでシステムにログオンします。

- 2 Windows のタスクバー上の [スタート] ボタンをクリックし、[設定]、[コントロール パネル] の順に選択します。
- 3 [管理 ツール] アイコンをダブルクリックします。
- 4 [サービス] アイコンをダブルクリックします。
- 5 [サービス] 一覧から、Sybase バックアップサーバーを選択します。
(Sybase BCKserver_hostname_BS).
- 6 [停止] ボタンをクリックします。

スクリプトを使用した Sybase SQL Server のバックアップ

データベースをバックアップするためのスクリプトを作成することができます。作成したスクリプトは、UNIX 用の **cron** コマンドや Windows 用の **AT** コマンドなど、スケジューラプログラムを使用して、定期的に行うようスケジュールを設定できます (バックアップからデータベースをロードする方法の詳細は、74 ページの「データベースのロード」を参照してください)。



この項のコマンドおよび例は、UNIX システムのみに適用されます。

バックアップスクリプトの前提条件

スクリプトのスケジュール設定を実行する前に、以下の点について決定しておく必要があります。

- 1 **master** や **sybssystemprocs** といった小さなデータベースを、テープデバイスではなくファイルシステムにバックアップするかどうかを決定します。
UNIX システムで固定ディスクファイルを定義するかどうかに応じて、各データベースに対して手順 a または手順 b を実行します。
 - a `sp_addumpdevice` コマンドを使用して固定ディスクファイルを定義する場合は、以下を実行します。
 - 新しい **setenv** 行を追加して、変数名と、ディスクファイルを使用する既存の Sybase ダンプデバイスを定義します。たとえば、次のように入力します。
setenv MASTER_DEVICE masterdump
 - 対応する `dump` コマンドの **\${TAPE_DEVICE}** を新しい変数名に変更します。たとえば、次のように入力します。

```
dump database master to ${MASTER_DEVICE} file=
"master.dmp" with init
```

- b 実行時に固定ディスクファイルを定義する場合は、以下を実行します。
- 対応する **dump** コマンドの **\${TAPE_DEVICE}** をフルパス名に変更します。たとえば、次のように入力します。

```
dump database master to '/Full_Pathname/OVPI_Backups/
master.dmp' with init
```

どのインスタンスでも複数のバックアップコピーを使用できるようにしたければ、次の構文を使用し、date-designation 付きのファイルを作成できます。

```
dump database master to '/Full_Pathname/OVPI_Backups/
master_`date +%y%m%d%H%M`.dmp' with init
```

- file= で始まり、二重引用符 (") で終わるセグメントを対応する **dump** コマンドから削除します。



マスターデータベースの **dump** コマンドを変更する場合は、**with init** パラメータを保持しておくことが重要です。

- 2 **error.log** を作成するために、スクリプトの **\$\$SYBASE/install** ディレクトリに適切なアクセス権限があることを確認します。
- 3 スクリプトのログファイル **\$\$SYBASE/\$\$SYBASE_ASE/installerror.log** を定期的に確認し、特定のデータベースに対して発生が懸念されるエラー状況を突き止めます。
- 4 バックアップスクリプトを実行する前に、バックアップサーバーが存在し、動作していることを確認します。詳細は、64 ページの「UNIX システムでのバックアップサーバーの作成」を参照してください。



テープボリューム内のすべてのデータベース結果が変更になった場合、変更処理が終了するまでシステムは待機状態になります。

バックアップスクリプトの作成

テキストエディタを使用してバックアップスクリプトを作成します。



次のスクリプトでかぎカッコ (<>) で囲まれているパラメータは、かぎカッコ内に示されている必要情報に置き換えてください。**bin/isql** 行の引数はすべて 1 行に指定します。

次の文は、UNIX システムの場合のスキプトの内容を示したものです。

```
#!/bin/csh -f
#
# OVPI および Sybase データベースをバックアップする (つまりダンプする) ためのスキプト
#

setenv DPIPE_HOME <OVPI-Directory>
setenv TAPE_DEVICE <Sybase-Name-of-Tape-Device>

# Setup correct OVPI environment.
#
source $DPIPE_HOME/data/Cshrc

# Log data to Sybase log file.
#
echo -n "Starting Sybase/OVPI backup on " | tee -a $SYBASE/
$SYBASE_ASE/install/error.log
date | tee -a $SYBASE/$SYBASE_ASE/install/error.log

# Start isql session to perform the backups
#
$SYBASE/$SYBASE_OCS/bin/bin/isql -Usa -P << EOFEOF | tee -a $SYBASE/
$SYBASE_ASE/install/error.log
checkpoint
go
dump database master to ${TAPE_DEVICE} file="master.dmp" with init
go
dump database sybsystemprocs to ${TAPE_DEVICE}
file="sybsystemprocs.dmp"
go
dump database dpipe_db to ${TAPE_DEVICE} file="db_dpipe.dmp"
go
quit
EOFEOF
```

```
echo -n "Completed Sybase/OVPI backup on " | tee -a $SYBASE/  
$SYBASE_ASE/install/error.log  
date | tee -a $SYBASE/$SYBASE_ASE/install/error.log  
echo " 0 | tee -a $SYBASE/$SYBASE_ASE/install/error.log
```

```
exit
```

バックアップスクリプトの実行

バックアップスクリプト (BackupOVPIIDB.csh) を実行する前に、以下を実行します。

- 1 適切な実行権限を設定します。通常は **755** です。
- 2 スクリプトを \$DPIPE_HOME/scripts ディレクトリに置きます。
- 3 **cron** などのスケジューラプログラムを使用する場合は、そのプログラムが \$DPIPE_HOME を認識するために必要な環境であり、このディレクトリにアクセスする権限があることを確認します。

不定期に実行する管理作業

不定期に実行する必要がある管理作業を以下に示します。

- システムおよびデータベースのバックアップ

以下の時点で、インストールされている **OVPI** とデータベースの両方をバックアップする必要があります。

- **OVPI** を初めてインストールした後。

OVPI を初めてインストールした後に、システムとデータベースの完全なバックアップを実行することが重要です。

- インストールされているソフトウェアに大規模な変更を加えたときの、前と後。

たとえば、**OVPI** とレポートパックを初めてインストールした後に、追加のレポートパックをインストールする場合は、レポートパックをインストールする **前**と、した **後**に、システムとデータベースをバックアップしてください。

- 詳細は、80 ページの「システムのバックアップ」および 63 ページの「Oracle データベースのバックアップ」または 63 ページの「Sybase データベースのバックアップ」を参照してください。
- OVPI のプロセスの開始および停止
- OVPI Sybase データベースの再配置
- プロキシサーバーのセットアップ

システムのバックアップ

ファイルシステムのバックアップを通常使用する手順で実行してください。

OVPI のプロセスの開始および停止

OVPI には以下のプロセスがあります。

- **OVPI HTTP Server**

このプロセスは、OVPI データベースへの OVPI クライアントによるアクセスを制御します。Web アクセスサーバー、レポートビューア、レポートビルダの各アプリケーションを正しく動作させるには、このプロセスがシステム上で常に稼動している必要があります。

OVPI のインストール時に Web アクセスサーバーをインストールした場合（つまり、Web アクセスサーバーのオプションを選択した場合は、Web アクセスサーバーを使用して OVPI HTTP Server プロセスの設定を変更できます。それらの設定として、ポート番号、レルム、ログファイルパス、ロギング、デバッグ、ゲートウェイパッチ機能、タイムアウト値、認証方法、およびアカウント ID があります。詳細は、557 ページの「Web アクセスサーバー設定の変更」を参照してください。

- **OVPI Timer**

このプロセスは、trendtimer.sched ファイルの内容を処理することで、特定の時点で、または定期的な間隔で実行される必要のある他の OVPI アプリケーションを起動します。

trendtimer コマンドの詳細については、『HP OpenView Performance Insight Reference Guide』を参照してください。

Windows でのプロセスの開始および停止

OVPI をインストールしたとき、OVPI HTTP Server と OVPI Timer はサービスとして自動的に開始するよう設定されます。これらが何らかの理由で自動的に開始しなかった場合や停止した場合は、手動で開始する必要があります。

サービスのステータスの確認

Windows においてサービスの開始を試みる場合は、その前に以下を実行することで、そのサービスが稼動しているかどうかを確かめてください。

サービスのステータスを確認するには、以下の手順に従います。

- 1 Windows のデスクトップで [スタート] ボタンをクリックし、[設定]、[コントロール パネル] の順に選択します。[コントロール パネル] ウィンドウが開きます。
- 2 [管理 ツール] をダブルクリックし、次に [サービス] をダブルクリックします。[サービス] ウィンドウが開きます。
- 3 以下のサービスについて、状態が [開始] であり、かつスタートアップの種類が [自動] であり、それぞれウィンドウに表示されていることを確認します。

OVPI HTTP Server

OVPI Timer

サービスの停止と、サービスを自動的に開始するための設定の詳細は、81 ページの「サービスの開始」を参照してください。

- 4 [サービス]、[管理ツール]、[コントロール パネル] の各ウィンドウの右上隅にある  をクリックして、それらのウィンドウを閉じます。

サービスの開始

通常、Windows ではサービスがインストールされた場合、それらのサービスはシステムが再起動されるたびに自動的に開始されます。しかし場合によっては、サービスを手動で開始または停止しなければならない場合があります。

サービスの開始または停止は、それらのサービスがインストールされているシステムから実行する必要があります。コントロールパネルから、サービスを開始または停止できます。あるいは、Windows エクスプローラまたはコマンドプロンプトウィンドウから、OVPI HTTP Server サービスを開始することもできます。

コントロールパネルの使用

コントロールパネルを使用してサービスを開始または停止するには、以下の手順に従います。

- 1 Windows のデスクトップで [スタート] ボタンをクリックし、[設定]、[コントロール パネル] の順に選択します。[コントロール パネル] ウィンドウが開きます。
- 2 [管理 ツール] をダブルクリックし、次に [サービス] をダブルクリックします。[サービス] ウィンドウが開きます。
- 3 サービス (OVPI HTTP Server または OVPI Timer) を右クリックします。
- 4 ショートカットメニューから [開始] または [停止] を選択します。[状態] 列に、選択したサービスが正常に開始または停止したかどうかを示されます。

UNIX でのプロセスの開始および停止

OVPI をインストールしたとき、OVPI HTTP Server と OVPI Timer は、デフォルトではデーモンとして自動的に開始するよう設定されます。デーモンサービスはシステムが再起動されるたびに自動的に開始されます。しかし場合によっては、サービスを手動で開始または停止しなければならない場合があります。

デーモンの開始は、それらのデーモンがインストールされているシステムから実行する必要があります。

デーモンを開始するには、以下の手順に従います。

- 1 アプリケーションがインストールされているシステムで新しいシェルを開きます。
- 2 root としてログオンします。
- 3 以下のいずれかのコマンドを入力して OVPI HTTP Server プロセスを開始します。
 - HP-UX の場合：
`/sbin/init.d/ovpi_httpd start`
 - Linux の場合：
`/etc/init.d/ovpi_httpd start`
 - Solaris の場合：

```
/etc/init.d/ovpi_httpd start
```

4 以下のいずれかのコマンドを入力して OVPI Timer プロセスを開始します。

- HP-UX の場合 :

```
/sbin/init.d/ovpi_timer start
```

- Linux の場合 :

```
/etc/init.d/ovpi_timer start
```

- Solaris の場合 :

```
/etc/init.d/ovpi_timer start
```



コマンド行で **start** の部分を **stop** に置き換えることで、デーモンを手動で停止させることができます。

OVPI Sybase データベースの再配置

OVPI Sybase データベースをあるホストから別のホストに移動する場合、HP ではホスト **A** (ソースホスト) とホスト **B** (ターゲットホスト) の両方で Sybase バックアップサーバーを作成および使用することをお勧めします。

OVPI データベースを再配置するには、以下の手順に従います。

- 1 ホスト **A** に Sybase バックアップサーバーを作成します。
 - Windows では、バックアップサーバーは、Sybase インストール時に自動的に作成されます。
 - UNIX では、バックアップサーバーをインストールする場合に `srvbuild` ユーティリティを使用しなければなりません。
- 2 Sybase SQL サーバーとバックアップの Sybase サーバーがホスト **A** で実行していることを確認します。
- 3 ホスト **B** に OVPI をインストールします。



この手順の残りのステップを完了するには、ホスト **B** のデータベースのサイズがホスト **A** のデータベースのサイズと同等以上である必要があります。

- 4 ホスト **B** で、自動データベースが自動的に動作しないよう `trendtimer` をオフにします。

- 5 ホスト B に Sybase バックアップサーバーをインストールします。Sybase サーバーとバックアップの Sybase サーバーがホスト B で実行していることを確認します。
- 6 ホスト A で **trendtimer** をオフにします。
- 7 収集が完了するまで待ちます。
- 8 データベースを利用可能なディスクファイルにダンプします。ダンプファイルを作成するために利用可能なディスクスペースがあることを確認します。たとえば、**isql** セッションを起動し、次のコマンドを入力することで、最新のバックアップを取得できます。

```
isql -Usa -P  
1> dump database dpipe_db to 'path-to-diskpace'  
2> go
```

- 9 以下のいずれかを実行します。
 - ホスト B にエクスポートするために、ホスト A の *fullpath-to-dumpfile* ファイルシステムをマウントします。
 - ダンプしたデータベースファイルを一時保存しておくためのディスクリソースがホスト B にあるかどうかに応じて、作成したファイルのホスト B への FTP を実行します。
- 10 **isql** セッションを起動して、バックアップをホスト B にロードします。たとえば、次のように入力します。

```
isql -Usa -P  
1> load database dpipe_db from 'fullpath-to-dumpfile'  
2> go  
  
1> online database dpipe_dp  
2> go
```

- 11 バックアップのロードが終了したら、ホスト B にファイルを取得するために選択した方法に応じて、ホスト B にあるホスト A の *fullpath-to-dumpfile* ファイルシステムをディスマウントするか、またはホスト B の *fullpath-to-dumpfile* を削除します。

ホスト B のデータベースが完全であることを確認したら、ホスト B で **trendtimer** をオンにできます。

OVPI データベースの再配置の確認

データベースの再配置を完了した後、ホスト **B** で以下の項目を必ず確認してください。

- ポーリング要求

ポーリングポリシーマネージャを使用して、新しいホストでデータをポーリングするよう各ポーリング要求を変更する必要があります。ポーリング要求の中でどのシステムでデータをポーリングする必要があるかを変更する方法の詳細は、第 8 章「ポーリングポリシーの管理」を参照してください。ポーリングされるシステムを変更したら、**ping** コマンドを使用して変更を確認できます。

- ovpi およびその他のすべてのユーザーの環境変数

以下のファイルが（新規インストールまたは編集によって）変更されて、特に **DISPLAY** および **DSQUERY** について新しい設定になったことを確かめます。

```
$DPIPE_HOME/data/Cshrc
```

```
$DPIPE_HOME/data/Profile
```

- データベースのリビジョン

ホスト **B** について新しい Sybase 環境変数値となるよう、すべてのエントリーについて、**tl_groups** テーブルの **dsquery** 列を変更する必要があります。この作業は以下の **isql** コマンドを使用して実行できます。

```
isql -Udsi_dpipe -Pdsi_dpipe
1> update tl_groups set dsquery = Sybase-DSQUERY-value ,
2> data_db = Sybase-DSQUERY-value
3> go
```

- レポートパック

レポートパックについて、必ず以下を実行します。

- レポートパックを [パッケージマネージャ] を使用してインストールした場合や、レポートを追加した場合は、以下のファイルとディレクトリをホスト **A** からホスト **B** にコピーします。

\$DPIPE_HOME/data/print.* ファイル
\$DPIPE_HOME/data/*.info ファイル
\$DPIPE_HOME/reports ディレクトリ
\$DPIPE_HOME/scripts ディレクトリ

- カスタムレポートファイル (.qss、.qgr、または .gos) がホスト **A** のいずれかのディレクトリに存在する場合は、必ずそれらをホスト **B** にコピーします。
 - カスタムスクリプトがいずれかのホスト **A** のディレクトリに存在する場合は、必ずそれらをホスト **B** にコピーします。
 - ホスト **B** の `trendtimer.sched` ファイルを編集して、ホスト **A** の `trendtimer.sched` ファイルの時間およびエントリーと同じになるようにします。特に、パッケージの `trend_proc -f xxx.pro` に関する行と、カスタムレポートまたはカスタムスクリプトに関する行について、この作業を行います。
 - 分散型構成のみ : `trendcopy` を使用してデータをサテライトサーバーからセントラルサーバーにコピーする場合は、新しいホスト名が反映されるよう、各レポートパックの該当する `.pro` ファイルを変更する必要があります。

HTTP プロキシまたはポータル環境での OVPI のセットアップ

OVPI の Web アクセスサーバーコンポーネントと実際のサーバーとの間に HTTP プロキシサーバーが存在する場合は、OVPI をインストールした後に、OVPI の Web アクセスサーバーコンポーネントへの適切な認証を設定しなければならない場合があります。どの種類の認証が最適かを判断するには、使用しているプロキシサーバーのユーザー名の変換機能を知る必要があります。

理想的には、以下のいずれかを実行できるプロキシサーバーを使用することが最適です。

- 着信プロキシまたは着信ポータルのユーザー名を受け取り、いずれかを適切な HTTP ヘッダエンコードを使用して、パスワードとともに OVPI に直接渡す。

- 何らかの変換手法で、着信名を **OVPI** アカウント名に変換する。



ポータルとプロキシを区別して扱うとわかりやすくなります。プロキシは、トラフィックを強制的に処理し、ロギングの可能性によって、**HTTP** トラフィックをあるシステムから別のシステムに、渡します(主にセキュリティの区分化)。ポータルは、より広範な目的を持ったアプリケーション統合として機能し、数多くの付加的な機能を提供します。

HTTP ベースのアプリケーションは、パケットを生成するときに **HTTP** ヘッダを作成します。(たとえば **HTTP** ヘッダの作成を下位層に依存しているためなどの理由で、)ユーザー名とパスワードをヘッダの中で指定できる機能がプロキシサーバーにない場合、そのプロキシサーバーは、igeorges のようなプロキシユーザー名を受け取り、**HTTP 1.1** の基本認証を使用してそれを変換しさらにクリアテキストで **OVPI** の **Web** アクセスサーバーコンポーネントに渡すことができない場合があります。したがって、**Tomcat** に頼って自身の **HTTP** ヘッダを作成する **Service Information Portal (SIP)** と統合する必要がある場合は、**HTTP** の基本認証を使用できません。この目的のために、**OVPI** にはユーザー名とパスワードを **OVPI** に渡すための他の認証方法があります。それらのオプションを以下に示します。

- **[HTTP 基本]**: この方法では、自分のユーザーアカウントのユーザー名とパスワードを指定して、**Web** アクセスサーバーにログオンする必要があります。
- **[URL]**: この方法では、**URL** を使用してレポートを表示するときにユーザー名を入力する必要があります。

- [なし]: この方法では認証は必要ありません。



HTTP の基本認証と URL 認証を同時には使用できません。たとえば、Network Operations Center 内のユーザーに対して、各自の Web ブラウザを Network Node Manager (NNM) から起動できるようにし、ログオンせずに OVPI に接続できるようにしたいと仮定します。ただし、他のすべてのユーザーアカウントに対しては標準の OVPI セキュリティのままよいと仮定します。

この事例のための設定をするには、2 つの Web アクセスサーバーシステムを使用します。一方のサーバーを [HTTP 基本] の認証オプションで実行し、他方のサーバーを [なし] の認証オプションで実行することができます。この場合、OVPI の管理者は 2 つ目の Web アクセスサーバーにレポートを再配布する必要があります。この作業は **deploytool** ユーティリティを使用して実行できます。このユーティリティの使用についての詳細は、『HP OpenView Performance Insight Reference Guide』を参照してください。

Web アクセスサーバーに対する認証をセットアップするには、以下の手順に従います。

- 1 お使いの Web ブラウザを起動します。
- 2 ブラウザの [アドレス] または [場所] フィールドに以下の URL を入力し、**Enter** キーを押します。

`http://server_name.organization.type:port_number`

`server_name` は、Web アクセスサーバーの名前です。

`organization` は、ユーザーの組織の名前です。

`type` は、ドメインの種類 (たとえば com、org、net) です。

`port_number` は、デフォルトの Web アクセスサーバーのポート番号です。



Web アクセスサーバーがポート 80 を使用している場合は、ポート番号を入力する必要はありません。

[ログイン] ページが開きます。

- 3 [ログオン] をクリックします。
[ネットワーク パスワードの入力] ダイアログボックスが開きます。
- 4 管理者のユーザー名とパスワードを入力し **[OK]** をクリックします

OVPI は、インストール時に、trendadm というデフォルトの管理者アカウントを作成します。このアカウントを使用するか、または、管理者権限を持つ別のアカウントがあればそれを使用します。

Web アクセスサーバーが開きます。

- 5 リンクバーから、[**管理**] を選択します。[管理] ページが開きます。
- 6 [管理] ツリーで、[サービスの構成] を展開し、次に [**Web アクセス サーバー**] をクリックします。[**Web アクセスサーバーの設定**] ページが開きます。
- 7 [レルム] ボックスに、サーバーのレルム名を入力します。最大 **50** 文字です。

レルムとは、Web アプリケーション (複数もありうる) の有効なユーザーを識別するユーザー名とパスワードのデータベースであり、有効な各ユーザーに関連付けられた役割の列挙リストを提供します。役割は UNIX オペレーティングシステムのグループに似ています。なぜなら、関連付けられたユーザー名のリストを列挙するのではなく、特定の Web アプリケーションリソースへのアクセスが、特定の役割を所有しているすべてのユーザーに許可されるからです。ある特定の **1** ユーザーについて、任意の個数の役割をそのユーザー名に関連付けることができます。通常は、ポータル管理の要求に応答してレルム値を変更するだけで済みます。

レルム名はユーザーを認証するために使用します。ユーザーのログオン情報 (ユーザー名とパスワード) は、割り当てられたレルムに対してのみ機能します。Web アクセスサーバーの前にプロキシサーバーを使用している場合は、レルム名を変更する必要があります。

たとえば、プロキシサーバーのレルム名が realm1 であり、Web アクセスサーバーのレルム名が tw-app である場合、ユーザーは **2** 回ログオンする必要があります。Web アクセスサーバーのレルム名を realm1 に変更すれば、ユーザーは **1** 回のログオンですみます。

レルム名は、Web アクセスサーバーで [**ログオン**] ボタンをクリックした後の [ネットワーク パスワードの入力] ダイアログボックスに表示されます。

- 8 [**Web サイトのドキュメントルート**] ボックスに、ホームページのディレクトリ階層を再配置するディレクトリを入力します。これにより、Web アクセスサーバーのコンポーネントが配置される URL が変更されます。

Webサイトのドキュメントルートは、OVPIのURL階層の最上位になっています。デフォルトでは、階層は/(ルート)です。つまり、OVPIすべてのコンポーネントがWebアクセスサーバーのルートレベルに配置されます。

このオプションは、プロキシサーバーが存在し、OVPIがプロキシ内のコンポーネントのうちの1つである環境において役に立ちます。つまり、統合されたすべてのアプリケーションで一意的な合理的なドキュメントルートが必ず使用されるよう、URLを変更できます。

複数のユーザーアプリケーションがあり、その1つがOVPIである場合は、このURLを/ovpiに変更できます。たとえば、デフォルトのURLを `http://hostname/reports/home` から以下のURLに変更します。

```
http://hostname/ovpi/reports/home
```

9 [認証方法] の矢印をクリックし、以下のいずれかを選択します。

- [HTTP 基本]。この方法では、[ネットワーク パスワードの入力] ダイアログボックスにユーザーアカウントのユーザー名とパスワードを入力して、にログオンする必要があります。ブラウザは、ユーザー入力を受け付けると、その情報を、そのサーバーへのセッションに対する以降のすべてのHTTPヘッダに追加します。ユーザー名とパスワードはBase64でエンコードされます。
- [URL]。この方法では、URLを使用してレポートを表示するときにユーザー名を入力する必要があります。

このオプションは、ユーザー名をHTTPヘッダの中でエンコードする能力を持たないアプリケーション群(たとえばSIPなど比較的初期のプロキシサーバー)か、またはユーザー名の概念がないアプリケーション群(たとえばNetwork Node Manager)について、それらを統合するためのものです。この場合は、何らかの汎用のNetwork Operation Centerアカウントのためのブラウザ要求をOVPIサーバーに送り、OVPIでカタログ表示のマスク処理を実行できるようにするだけです。

このオプションではパスワードは必要ありません。引数はコマンド行(URL)でクリアテキストを使用して渡されるため、パスワードをクリアテキストで渡すことは意味がありません。したがって、URL認証を使用する場合は、OVPIサーバーが信頼ある環境の中で動作しているとみなされます。なぜなら、ユーザーはパスワードの入力を求められることなく、誰もがWebブラウザで&ov_user引数のURL値を変更することで任意のユーザーのデータにアクセスできるからです。

URL を使用してレポートを表示する方法の詳細は、『HP OpenView Performance Insight レポートの作成および表示ガイド』を参照してください。[URL]:

- [なし]。この方法では、認証が必要ありません。ただし、ユーザーは [アカウント ID] ボックスで指定したユーザーアカウントと同じ権限でシステムにアクセスします。このオプションではユーザーがログオン情報の入力を求められることはありません。基本レベルのフィルターリングとアクセス制御を実現するため、OVPI サーバーでは、ログオンが [なし] となるデフォルトの OVPI アカウントを [アカウント ID] ボックスで指定できます。



[アカウント ID] ボックスに、管理者権限を持たないユーザーアカウントを指定した場合、[管理] リンクにはアクセスできなくなります。管理者権限をリセットする方法の詳細は、560 ページの「管理者権限のリセット」を参照してください。

- 10 [アカウント ID] ボックスに、認証オプション [なし] を関連付けるユーザーアカウントの名前を入力します。Web サーバーに、他のユーザーアカウントでアクセスする場合、ここで設定したアカウントと同じ権限が必要です。
- 11 [適用] をクリックします。
- 12 変更が完了したら、Web アクセスサーバーを停止させてからまた起動します。この手順については、80 ページの「OVPI のプロセスの開始および停止」を参照してください。

例 : Apache プロキシサーバーのセットアップ

Apache プロキシサーバーをセットアップするには、いくつかの行を httpd.conf ファイルに追加する必要があります。httpd.conf ファイルは、Apache をインストールしたディレクトリの conf サブディレクトリにあります。

サーバーをセットアップするには、以下の行を httpd.conf ファイルに追加します。

```
ProxyPass /images http://<ホスト名>/images
ProxyPass /reports http://<ホスト名>/reports
ProxyPass /jsp http://<ホスト名>/jsp
ProxyPass /webview http://<ホスト名>/webview
```

```
ProxyPass /system http://<ホスト名>/system
ProxyPass /results http://<ホスト名>/results
ProxyPass /index.jsp http://<ホスト名>/index.jsp
ProxyPass /help.html http://<ホスト名>/help.html
ProxyPassReverse /images http://<ホスト名>/images
ProxyPassReverse /webview http://<ホスト名>/webview
ProxyPass /system http://<ホスト名>/system
ProxyPassReverse /results http://<ホスト名>/results
ProxyPassReverse /index.jsp http://<ホスト名>/index.jsp
ProxyPassReverse /help.html http://<ホスト名>/help.html
ProxyPassReverse /reports http://<ホスト名>/reports
ProxyPassReverse /jsp http://<ホスト名>/jsp
```

この例で、<ホスト名>は Web アクセスサーバーサービスが動作しているシステムの名前です。

この例では基本 HTTP 認証がデフォルトになっているため、認証を変更する必要はありません。

4 管理コンソールの使用

OVPI システムのほとんどの機能は、OVPI 管理コンソールで管理できます。OVPI 管理コンソールの各種のスナップインは直感的で、カスタマにとって使いやすいものになっています。OVPI には、さまざまな機能を管理するもう 1 つのアプリケーションとして、Web アクセスサーバーもあります。

管理コンソールを使用することで、Performance Insight Reporting プラットフォームの設定、管理、および監視を行うことができます。

Performance Insight 管理コンソールは一連のワークスペースから構成され、それぞれのワークスペースが対象とする機能エリアが異なります。各ワークスペースはさらに機能エリア別に細分化されていて、この機能エリアが左側のナビゲーションツリーに示されています。また、右側に表示されているリンクを使用して、特定のワークシートに切り替えることもできます。

[管理コンソール] を使用すると、以下の機能を実行できます。

- **ホーム:** [ホーム] スナップインでは、OVPI リリースノートへのリンクを提供するとともに、詳細なシステム情報および OVPI 稼動状態のハイレベルビューに対するリンクも提供します。
- **管理:** 管理コンソールのこの機能は、コア製品の特長および機能の管理に着目し、ユーザーはこの機能を使用することで、ノード、ポーリングポリシー、およびコピーポリシーの追加 / 削除 / 変更を行うことができます。また、テーブル管理機能により、OVPI で使用されるテーブルを表示することもできます。ユーザーが実行できる機能は以下のとおりです。
 - **ノード管理:** この機能で、ノード、SNMP プロファイル、およびコミュニティ文字列プロファイルを管理できます。
 - **テーブル:** テーブル機能により、システム内のさまざまなタイプのテーブルに関する情報を表示できます。
 - **ポーリングポリシー:** ポーリングポリシー機能により、管理ユーザーはデータ収集を作成できるとともに、どのようなデータ収集をどのようにどの程度の頻度で行うかを管理できます。

- **コピーポリシー**：コピーポリシー機能により、管理ユーザーは中央サーバー上でコピーポリシーの作成、変更、および削除を行い、OVPIでのデータコピー機能の動作を制御できます。詳細は第7章「場所に依存しないレポート作成機能およびコピーポリシー」を参照してください。
- **カタログ**：カタログ/レポートリンクの管理機能により、管理ユーザーはWebアプリケーションサーバー (WAS) のディレクトリツリー上でレポートの配布、削除、および移動を行うことができます。また、配布されたレポートに対して、管理ユーザーがレポートリンクグループを作成および管理することもできます。
- **グループ**：グループ管理機能により、管理ユーザーはテーブルカテゴリに基づいて、ポーリンググループとレポートグループを作成および管理できます。
- **オブジェクト**：オブジェクト/プロパティの管理機能により、管理ユーザーは管理対象オブジェクトのプロパティを階層的に表示および変更できます。
- **パフォーマンス**：OVPI パフォーマンスグラフ機能により、管理ユーザーはプロセスの所要時間、ポーリングの稼動状態、および行数の OVPI グラフを表示できます。詳細は第9章「OVPI パフォーマンスグラフ」を参照してください。
- **システム**：システム/ネットワークの管理機能により、データベース、Web アクセスサーバー、およびリモートポーターに関連するシステム情報を表示できます。

図 1 は、HP OpenView の Performance Insight 管理コンソールウィンドウを示します。

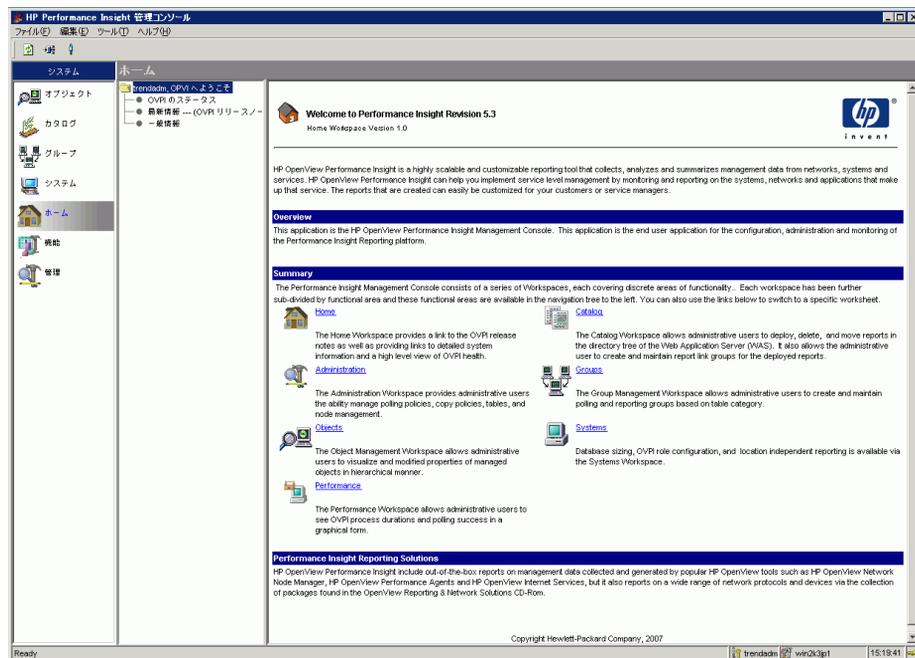


図 1 [管理コンソール] ウィンドウ

この章では、以下の項目について説明します。

- 管理コンソールの起動
- 管理コンソールインタフェース
- OVPI のステータスの表示
- OVPI の一般情報の表示
- ユーザー設定の保存
- オンラインマニュアルの表示

管理コンソールの起動

管理コンソールは UNIX または Windows のいずれかのオペレーティングシステムで使用できます。サポートされているオペレーティングシステムのリストについては、『HP OpenView Performance Insight Installation Guide』を参照してください。

UNIX システム

UNIX システムで管理コンソールを起動するには、以下の手順に従います。

- 1 アプリケーションがインストールされているシステムで新しいシェルウィンドウを開きます。
- 2 以下のコマンドを入力し、**[Enter]** キーを押します。

```
piadmin
```

piadmin コマンドの詳細については、『HP OpenView Performance Insight Reference Guide』を参照してください。

Windows システム

Windows システムで管理コンソールを起動するには、以下のいずれかを実行します。

- Windows のタスクバー上の **[スタート]** ボタンをクリックし、**[プログラム]**、**[HP OpenView]**、**[Performance Insight]** の順に選択し、メニューから **[管理コンソール]** を選択します。
- Windows のコマンドプロンプトウィンドウから表示される MS-DOS コマンドプロンプトで、以下のコマンドを入力し、**[Enter]** キーを押します。

```
piadmin
```

piadmin コマンドの詳細については、『HP OpenView Performance Insight Reference Guide』を参照してください。

- Windows エクスプローラを使用する場合は、以下を実行します。
 - a 次のディレクトリに移動します。

installation_directory\bin

この場合、*installation_directory* は OVPI がインストールされているディレクトリです。

- b 次のファイルをダブルクリックします。

piadmin.exe

ログオン

管理コンソールにログオンするには、以下の手順に従います。

- 1 管理コンソールを起動します。
[ログイン] ダイアログボックスが開きます。
- 2 ユーザー名とパスワードを入力し、アプリケーションを使用するシステムを選択します。
- 3 [ログオン] をクリックします。

管理コンソールインタフェース

図 1 は、HP OpenView の Performance Insight 管理コンソールウィンドウを示します。

HP OpenView Performance Insight 管理コンソールは、メニューバー、ツールバー、システムペイン、ナビゲーションペイン、および表示ペインで構成されています。

この項では、以下の内容について説明します。

- メニューバー
- ツールバー
- [ホーム] スナップイン
- OVPI のステータスの表示
- OVPI リリースノートの表示
- OVPI の一般情報の表示

管理ペインから実行できる任意のアプリケーションを開いた後、または [ツール] メニューから実行できる MIB ブラウザを開いた後、アプリケーションのウィンドウには以下のペインが表示されます。

- **ナビゲーション:** ナビゲーションペインでは、項目を選択できます。
ナビゲーションペインの階層レベルは、Windows エクスプローラで Windows システムの内容を表示するときとまったく同様に展開できます。フォルダーを展開することで、そのフォルダー内のページやフォルダーを表示できます。また、階層レベルを折りたたむこともできます。
- **表示:** 表示ペインには、ナビゲーションペインで実行した選択の結果が表示されます。

ペインを分割している縦線をいずれかの方向に移動することで、ペインのサイズを調整できます。オペレーティングシステムによって以下のいずれかを実行します。

- **Windows の場合:** ペインを分割している縦線の上にカーソルを置き、両方向の矢印 (⇄) を表示します。そして、いずれかの方向に縦線をドラッグします。
- **UNIX の場合:** ペインを分割している縦線の上にボックスを置き (☐)、左クリックしたまま、いずれかの方向に縦線をドラッグします。

メニューバー

管理コンソールには次のメニューがあります。[ファイル]、[編集]、[ツール]、および [ヘルプ] です。



メニューバーは、どのアプリケーションを開いているかによって異なります。使用しているアプリケーションのメニューバーの詳細は、そのアプリケーションの章を参照してください。

[ファイル] メニュー

表 1 に、[ファイル] メニューのオプションを示します。

表 1 管理コンソールの [ファイル] メニューのオプション

メニュー オプション	説明
[サーバーの 変更]	[管理サーバーの選択] ダイアログボックスを表示します。このダイアログボックスでは、別の管理システムを選択できません。詳細は [一般情報] ウィンドウを参照してください。
[ログアウト]	システムからログオフしますが、管理コンソールは稼働中のままです。引き続き、[ヘルプ] メニューや他のいくつかの基本機能にアクセスできます。ログオフ後、このオプションは [ログイン] に変わり、選択すると再びシステムにログオンします。
[終了]	管理コンソールを終了します。

[編集] メニュー

表 2 に、[編集] メニューのオプションを示します。

表 2 管理コンソールの [編集] メニューのオプション

メニュー オプション	説明
[オプション]	[オプション] ダイアログボックスを表示します。このダイアログボックスでは、管理コンソールのオプションと、各アプリケーションに固有のオプションを変更できます。

[ツール] メニュー

表 3 に、[ツール] メニューのオプションを示します。

表 3 管理コンソールの [ツール] メニューのオプション

メニューオプション	説明
[データベースチューナー]	[データベースチューナー] は、 Install Wizard for Database Configuration を開きます。
[証明書の管理 UI]	[証明書の管理 UI] は、 HTTPS プロトコルをサポートする HP OpenView エージェントからデータを収集するときに使用します。セキュリティ証明書を表示および管理できます。
[MIB ブラウザ]	MIB ブラウザアプリケーションを表示します。このアプリケーションでは、 SMI (管理情報構造) に準拠した SNMP MIB を分析、クエリ、およびトラブルシューティングできます。
[SNMP 検出]	SNMP 検出ウィザードを表示します。このウィザードでは、特定の IP アドレスでのデバイスの存在を確認し、そのデバイスが SNMP で管理可能かどうかを判断できます。
[タイプ検出]	タイプ検出ウィザードを表示します。このウィザードでは、検出したノードのタイプを調べることができます。
[パッケージマネージャ ...]	[パッケージマネージャ] アプリケーションを表示します。このアプリケーションでは、パッケージ (レポートパック) のインストールとアンインストール、および Web アクセスサーバーへのレポートの配布を実行できます。



クライアントのみのインストールでは、**OVPI** の完全なインストールをした場合に [ツール] メニューから通常実行できるアプリケーションが、使用できません。また、新しいデータテーブルまたはプロパティテーブルの登録、データベースへの収集の自動追加もできません。

[ヘルプ] メニュー

表 4 に、[ヘルプ] メニューのオプションの一覧を示します。

表 4 管理コンソールの [ヘルプ] メニューのオプション

メニュー オプション	説明
[ヘルプ トピック]	OVPI のオンラインマニュアルにアクセスできます。
[Performance Insight について ...]	OVPI のバージョン情報と著作権情報を表示します。

ツールバー

ツールバーに表示されるボタンは、使用しているアプリケーションによって異なります。表 5 はツールバーボタンの一覧です。

表 5 管理コンソールのツールバーのボタン

ボタン	メニュー オプション	説明
	[すべて更新]	表示を更新します。
	[サーバーの 変更]	[管理サーバーの選択] ダイアログボックスを表示します。このダイアログボックスでは、別の管理システムを選択できます。
	[ログアウト] /[ログイン]	管理コンソールからログオフできます。または管理コンソールにログオンできます。

[ホーム] スナップイン

[ホーム] スナップインでは、OVPI アプリケーションに簡単にアクセスできるとともに、OVPI サービスおよびポーリングのステータスを表示できます。また、接続情報やシステム情報も示され、リリースノートを参照することもできます。監視機能により、OVPI システムの管理作業が楽になります。パフォーマンスデータを記録し、潜在的な問題をトレースするために、絶えずシステムが監視されているため、膨大なログファイルの中から、システムの稼動状態に関する情報を探し出す必要がありません。

OVPI の [ホーム] スナップインでは、ナビゲーションペインに次のオプションが用意されています。

- **[OVPI のステータス]**: 選択したシステムについて、基本的な統計情報を提供します。詳細は [OVPI のステータスの表示](#) を参照してください。
- **[新機能 ... (OVPI リリースノート)]**: OVPI のリリースノート文書を開きます。詳細は [OVPI リリースノートの表示](#) を参照してください。
- **[一般情報]**: OVPI の接続およびシステム情報を提供します。詳細は [OVPI の一般情報の表示](#) を参照してください。

OVPI のステータスの表示

[OVPI のステータス] オプションは、OVPI 環境の次の側面を把握する上で有効です。

- OVPI のシステムサービスおよびシステムの設定
- OVPI のポーリングステータス

[OVPI のステータス] ページの表示

- 1 OVPI の [ホーム] スナップインにあるナビゲーションツリーで、**[OVPI のステータス]** リーフノードをクリックします。

[OVPI のステータス] ページが開き、ログインしているシステムのデータが表示されます。

[OVPI のステータス] ウィンドウ図は、[ステータス] ページを示したものです。

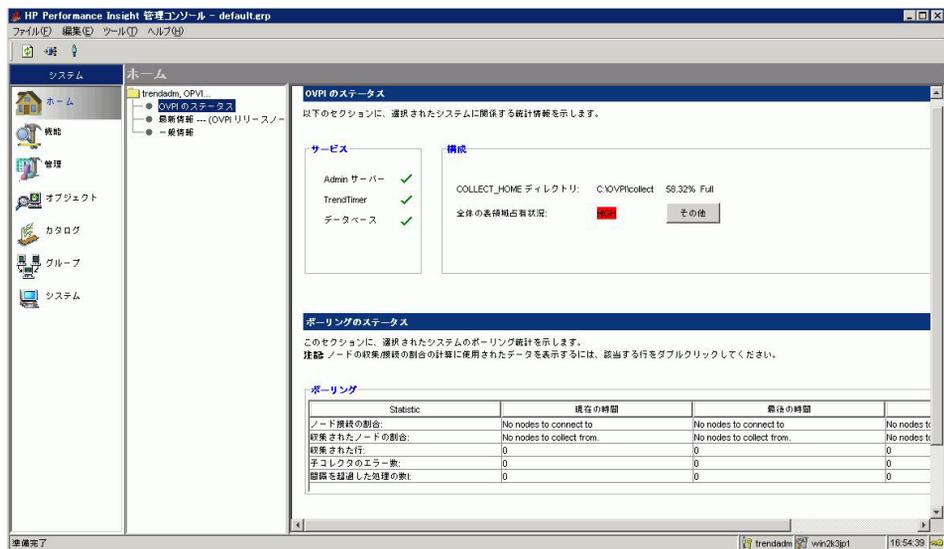


図 2 [OVPI のステータス] ウィンドウ

[OVPI のステータス] ページでは以下の情報が表示されます。

- **[OVPI のステータス]:** 選択したシステムについて、基本的な統計情報を提供します。
 - **[サービス]:** OVPI に関連する可能性があるすべてのサービスとその現在のステータスを示します。
 - 使用可能な OVPI サービスには、緑色のチェックマークが付けられます。
 - 停止中の OVPI サービスには、赤いクロス記号が付けられます。
 - OVPI に適用できないサービスの場合は、サービス名が淡色表示され、*not installed* というステータスになります。



サービスの起動または停止は、[OVPI のステータス] ページからは実行できません。

- **[構成]:** キーとなるデータの格納領域のビューを制限します。統計情報は、次のように算出されます。
 - ホーム収集プロセスについては、使用されているスペース / 全スペースに基づく現在の使用済み比率 (%) がグラフに表示されます。

- データベースについては、1つの表領域の使用済み比率が90%を超えた場合、ステータスは **[High]** になります。表領域の使用済み比率が80%以上になると、**[警告]** ラベルが付けられます。それ以外であれば、ステータスはすべて **[許容]** になります。データベースの使用済み統計は、RDBMS システムからではなく、システムの `dsi_segment_v` テーブルからクエリできます。このテーブルを使用すると、OVPI でデータベース全体がどの程度使用されているか一貫したビューを取得できます。

[詳細] ボタンをクリックすると、**[個々の表領域の使用済み統計]** ページが表示されます。

- **[ポーリングのステータス]**: 関連するシステムについて、OVPI のポーリング統計を表示します。このデータは、`mv_collect` によって生成された CSV ファイルから収集されます。この1時間、その前の1時間、前日の3つの間隔について、表形式でデータが示されます。
 - **[ノード接続の割合]**: OVPI が接続されているノードの割合が表示されます。この値のエラーは、停止中のノードまたはエージェント、および無効なコミュニティ文字列を示します。これらは、基本的にはゼロ以外の終了ステータスが原因です。
 - **[収集されたノードの割合]**: OVPI が正常に接続され、データを受信したノードの割合が表示されます。このため、ゼロ行が返されたものの、ゼロ終了ステータスのノードは、100% 成功から除外されます。
 - **[収集された行]**: すべてのポーリングポリシーについて収集された全行数が表示されます。
 - **[子コレクタのエラー数]**: すべての収集エラーの要約が表示されます。
 - **[間隔を超過した処理の数]**: 収集間隔を超過した収集数が表示されます。これは、`mw_collect` エントリに対するクエリです。

OVPI リリースノートの表示

[OVPI リリースノート] セクションでは以下の情報が表示されます。

- このバージョンで導入された新機能
- インストールノート
- ソフトウェア要件、マニュアルの更新情報、判明している問題、制限、および回避策

- サポート
- Legal Notices

[OVPI リリースノート] ページの表示

- 1 OVPI の [ホーム] スナップインにあるナビゲーションツリーで、[**新機能 ... (OVPI リリースノート)**] リーフノードをクリックします。

[OVPI リリースノート] ページが開きます。

OVPI の一般情報の表示

[ホーム] スナップインのナビゲーションツリーにある [一般情報] オプションでは、さまざまなシステムパラメータのスナップショットビューを提供します。これには以下のものが含まれています。

- **[Connection Information]:** 接続しているシステムおよびデータベースの名前が表示されます。
- **[システム情報]:** 選択したシステムに関連するオペレーティングシステム、システムの負荷、および OVPI アプリケーションに関する情報が表示されます。

[一般情報] オプションの表示

- 1 OVPI の [ホーム] スナップインにあるナビゲーションツリーで、[**一般情報**] リーフノードをクリックします。
- **[Connection Information]** ペインと **[システム情報]** ペインが開きます。

図 3 に、OVPI の一般情報を示します。

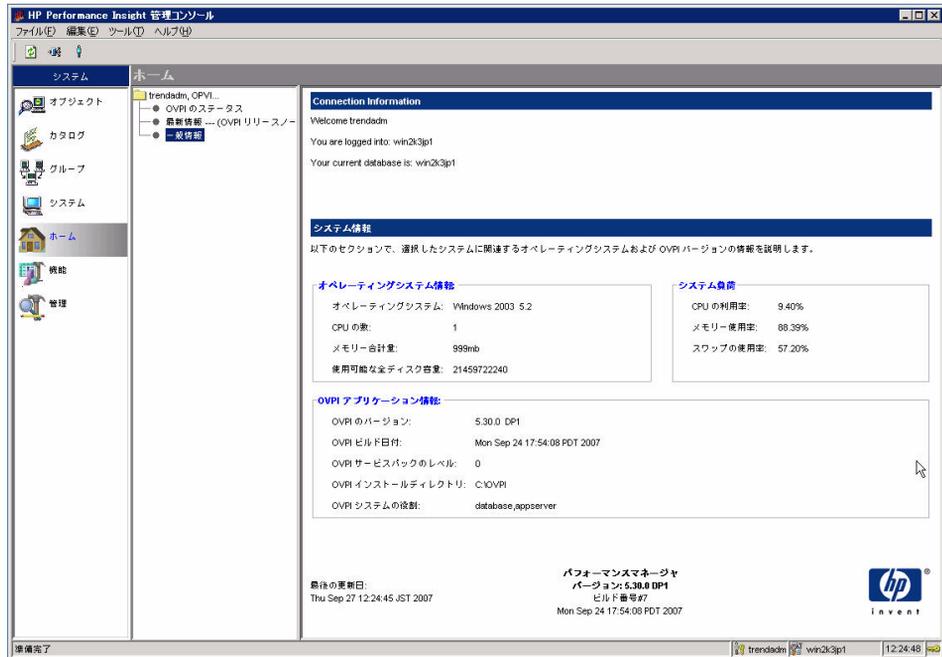


図 3 [一般情報] ウィンドウ

データベースサーバーの変更

OVPI では、ネットワークにあるすべての OVPI サーバーのデータを、読み取りおよび格納できます。すべてのサーバーのポーリングを、1 箇所から実行できます。接続するデータベースサーバーを変更することで、1 箇所から各サーバーにログオンできます。

サーバーを変更するには、以下の手順に従います。

- 1 [ファイル] メニューの [サーバーの変更] を選択します。

[OVPI システムの変更] ダイアログボックスが開き、使用可能な OVPI サーバーが表示されます。



- 2 サーバーを変更するには、サーバー名を選択し [接続] をクリックします。すると、選択したサーバーのデータベースから取得された情報が管理コンソールに表示されます。

新しいデータベースサーバーにアクセスしていることを確かめるには、[ホーム] スナップインアイコンから、ナビゲーションツリーの [一般情報] オプションをクリックします。[Connection Information] ペインでは、現在のデータベースが識別されます。

ユーザー設定の保存

OVPI では、以下のアプリケーションに対して一意のユーザー設定を管理できます。

- レポートビルダ
- レポートビューア
- 管理コンソール

OVPI ではその設定が .ini ファイルに保存されます。.ini ファイルはユーザーごとに 1 つ維持されます。アプリケーションの設定を変更すると、OVPI はそれらの設定を該当する .ini ファイルに自動的に保存します。

たとえば、**OVPI** では管理コンソールのログファイルを保存するディレクトリを指定できますが、その設定は管理コンソールアプリケーションの設定を行ったユーザーの `.ini` ファイルに保存されます。

ユーザーの `.ini` ファイルは以下の命名規則に従ってユーザーのホームディレクトリに格納されます。

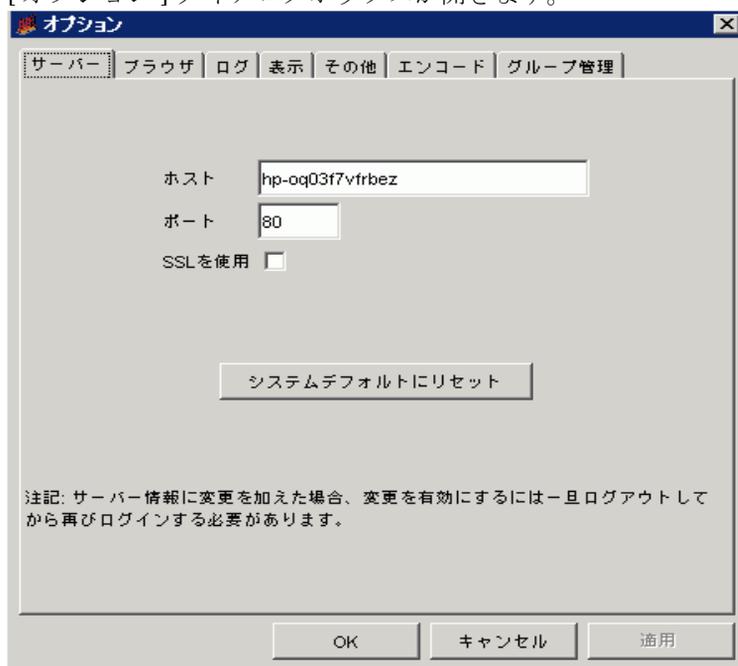
`.ovpi/ アプリケーション名 /defaults.ini`

`.ovpi/ アプリケーション名 /preferences.ini`

ユーザー設定を保存するには、以下の手順に従います。

- 1 [編集] メニューから [**オプション**] を選択します。

[オプション] ダイアログボックスが開きます。



- 2 タブをクリックし、必要な値を変更します。

管理コンソールのアプリケーションである、オブジェクトマネージャ、グループマネージャ、またはテーブルマネージャを使用しているときは、そのアプリケーションに固有のタブが表示されます。たとえば、上の図では

[サーバー] タブが表示されています。

- 3 [OK] をクリックします。

オンラインマニュアルの表示

OVPI で参照できるオンラインマニュアルを表示するには、**Acrobat Reader** をシステムにインストールしておく必要があります。**Acrobat Reader** をまだインストールしていない場合は、docs フォルダからインストールできます。このフォルダは **OVPI** をインストールしたディレクトリにあります。

オンラインマニュアルを表示するには、以下の手順に従います。

- 1 [ヘルプ] メニューの [**ヘルプトピック**] を選択します。

以下のいずれかが実行されます。

- 使用しているクライアントアプリケーション (たとえば管理コンソールやレポートビルダ) 用のブラウザをまだ選択していない場合は、[オプション] ダイアログボックスが開き、[ブラウザ] タブが表示されます。**手順 2** に進みます。
- 使用しているアプリケーション用のブラウザをすでに選択してある場合は、ブラウザウィンドウにオンラインマニュアルの一覧が表示されます。**手順 4** に進みます。

- 2 [ブラウザ] タブで、以下のいずれかを実行します。

- **Web** ブラウザのフルパスとアプリケーションファイル名を [ブラウザアプリケーション] ボックスに入力します。
-  をクリックします。[開く] ダイアログボックスが開きます。**Web** ブラウザのアプリケーションファイル名を探し、ファイル名をダブルクリックします。

たとえば、**Microsoft Internet Explorer** では、フルパスとアプリケーションファイル名は次のようになります。

```
C:\Program Files\Plus!\Microsoft Internet\IEXPLORE.EXE
```

- 3 [**OK**] をクリックします。

使用可能なドキュメントの一覧がブラウザウィンドウに表示されます。



Acrobat Reader をシステムにインストールしていない場合は、[**Acrobat Reader**] アイコンをクリックしてインストールしてください。

- 4 開きたいドキュメントのタイトルをクリックします。

PDF (Portable Document Format) ドキュメントが Acrobat Reader で開きます。

5 ネットワークの検出

この章では、ネットワーク上のノードに関する情報を取得する方法について説明します。具体的には、**HP OpenView Performance Insight** の検出プロセスの実行方法を説明します。以下の、ウィザードベースのアプリケーションか、コマンドを使用して実行します。

- **SNMP 検出**。ネットワークにあるノードを検索し、それらが **SNMP** で管理可能かどうかを判断します。詳細は、112 ページの「**検出プロセスの使用**」を参照してください。
- **タイプ検出**。ノードのデバイスタイプ（たとえばルーター、ハブ、スイッチ）を調べます。詳細は、120 ページの「**タイプ検出プロセスの使用**」を参照してください。



レポートパックをインストールした際にタイプ検出プロセスを実行しなかった場合は、インストール後に、タイプ検出ウィザードを実行する必要があります。

- `trend_discover` コマンド。検出ウィザード (`trend_discover -l`) およびタイプウィザード (`trend_discover -t`) と同じ働きをしますが、さまざまなオプションを指定することで検出プロセスの付加機能も利用できます。

このコマンドの詳細については、『**HP OpenView Performance Insight Reference Guide**』を参照してください。

`node_manager` コマンドを使用してノードをシステムに追加することもできます。このコマンドでは、各種のノードテーブルへの書き込みと更新を実行できます。このコマンドの詳細については、『**HP OpenView Performance Insight Reference Guide**』を参照してください。



検出ウィザード、タイプウィザード、`trend_discover` コマンド、および `node_manager` コマンドは、**OVPI** サーバーシステム上でのみ使用できます。

ネットワークノードマネージャ (NNM) のシステムを持っていて、NNM からシステムへノードを追加したい場合は、NNM-PI 統合ウィザードを使用することができます。このウィザードの詳細については、『HP OpenView Network Node Manager and Performance Insight Integration User Guide』を参照してください。

検出プロセスの使用

検出プロセスは、IP アドレスの範囲を 1 つずつ ping し、取得した応答を分析および特定します。そしてこの情報で、OVPI データベースのテーブルに書き込みまたは更新をします。検出プロセスで以下のことがわかります。

- 特定の IP アドレスに、デバイスが存在するか？
- そのデバイスは SNMP で管理可能か？
- SNMP で管理可能なデバイスである場合、そのデバイスの種類は何か？

以下のいずれかの方法で、検出を実行してください。

- **管理 コンソール。** SNMP 検出ウィザードを使用します。
- **コマンド行。** `trend_discover -1` コマンドを使用します。trend_discover コマンドの詳細については、『HP OpenView Performance Insight Reference Guide』を参照してください。

SNMP 検出ウィザードの使用

SNMP 検出ウィザードを使用すると、検索する IP アドレスの範囲、サブネットマスク、および、1 つまたは複数の読み取りコミュニティ文字列を指定できます。次に、検出プロセスは指定した IP アドレス範囲内の各 IP アドレス (最初のサブネットアドレス [0] とブロードキャストアドレス [255] を除く) を ping します。すると、以下のいずれかの結果が得られます。

- その IP アドレスにデバイスが存在しない場合は、応答はありません。
- ping を認識するデバイスがその IP アドレスに存在する場合は、検出プロセスに応答します。この応答から、検出プロセスはその IP アドレスにデバイスが存在することを知ります。

次に、検出プロセスは以下を実行します。

- 応答のあったデバイスに **SNMP GET** メッセージを送ります。

デバイスが **GET** を認識して応答した場合、検出プロセスはそのデバイスを **SNMP** で管理可能と判断します。

- デバイスのホスト名の検出を試みます (ホスト名変換を指定した場合)。

使用しているシステムで、**IP** アドレスをホスト名に変換するプロトコルを使用していて、ホスト名が見つかった場合は、検出プロセスはそのホスト名を、検出されたデバイスに関連付けます。ホスト名が見つからない場合、検出プロセスはそのノードを **IP** アドレスで列挙します。



SNMP 検出ウィザードを起動する前に、[パッケージマネージャ] が稼動していないことを確かめてください。

SNMP 検出を起動するには、以下の手順に従います。

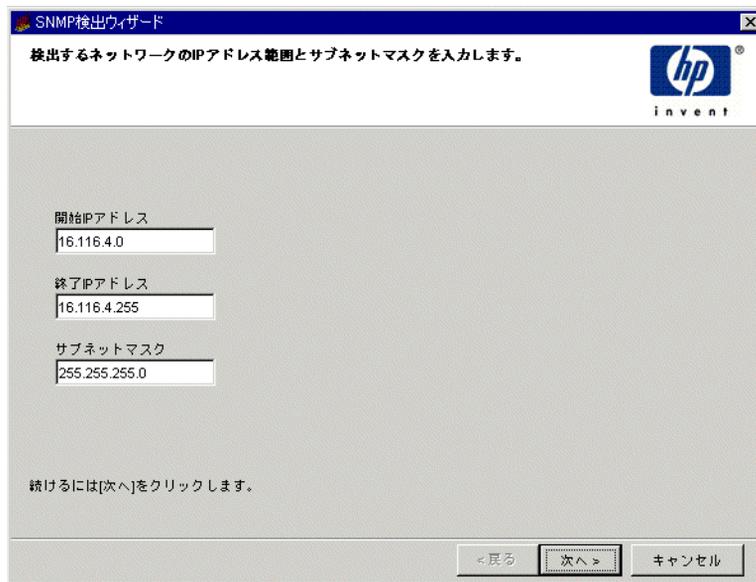
- 1 管理コンソールを起動します。詳細は、**96** ページの「[管理コンソールの起動](#)」を参照してください。



管理コンソールには管理者権限を持つアカウントでログオンする必要があります。ユーザーアカウントの詳細は、**516** ページの「[ユーザーアカウントの管理](#)」を参照してください。

- 2 [ツール] メニューの [**SNMP 検出**] を選択します。

以下のウィンドウが開き、検出する IP アドレスの範囲を指定できます。



SNMP検出ウィザード

検出するネットワークのIPアドレス範囲とサブネットマスクを入力します。

開始IPアドレス
16.116.4.0

終了IPアドレス
16.116.4.255

サブネットマスク
255.255.255.0

続けるには[次へ]をクリックします。

< 戻る 次へ > キャンセル

3 以下の手順に従います。

- a IP アドレスの最小値を [開始 IP アドレス] ボックスで指定します。
- b IP アドレスの最大値を [終了 IP アドレス] ボックスで指定します。

ローカルサブネットにあるノードを検出する場合は、[開始 IP アドレス] ボックスと [終了 IP アドレス] ボックスの各アドレスを指定するだけで済みます。



検出できるアドレスの範囲はサブネットマスクによって異なります。[サブネットマスク] ボックスの値を、ネットワークのサブネット構成に合わせて必ず適切に設定する必要があります。

- c サブネットマスクを [サブネットマスク] ボックスに入力します。
- d [次へ] をクリックします。

以下のウィンドウが開きます。



SNMP 検出ウィザードによって、指定した IP アドレスでデバイスが見つかり、SNMP GET が送られて、そのデバイスが SNMP で管理可能かどうか調べられます。この SNMP GET には読み取りコミュニティ文字列が含まれています。対象のデバイスは、デバイスのコミュニティ文字列が GET 内の文字列と一致した場合にのみ、SNMP 検出ウィザードに応答します。

- 4 以下の手順に従います。
 - a SNMP デバイスのコミュニティストリング (1 つまたは複数) を [コミュニティ文字列] ボックスに入力します。
複数のコミュニティ文字列はカンマで区切ります。
 - b [次へ] をクリックします。

以下のウィンドウが開き、ネットワーク検出中に使用するオプションの選択を求めてきます。

5 以下の手順に従います。

- a SNMP ポートを [SNMP ポート] ボックスに入力します。
- b [SNMP v2 検出の実行] ボックスをオンまたはオフにします。

このオプションをオンにすると、**SNMP V2** 検出ユーティリティが実行されます。**SNMP V2** 検出ユーティリティの使用についての詳細は、『**HP OpenView Performance Insight Reference Guide**』を参照してください。

- c [ホスト名変換の実行] ボックスをオンまたはオフにします。

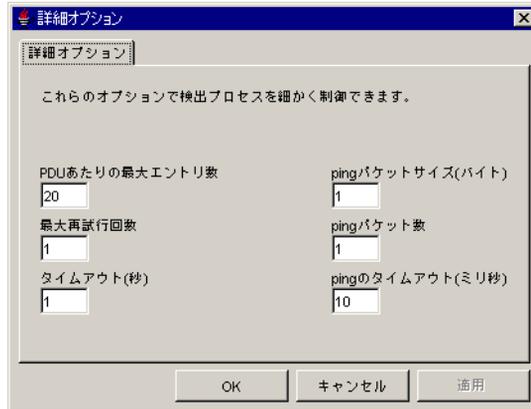
ホスト名は、通常、デバイスの特定に使用されます。このオプションをオンにすると、ウィザードは検出した各ノードについて、その IP アドレスに対応したホスト名の検索を試みます。

この変換の実行方法はシステムによってさまざまに異なります。ウィザードは、システムで可能なあらゆる方法を試みます。ホスト名が検出された場合、ウィザードはそれを使用してデバイスを特定します。対象デバイスのホスト名が見つからない場合は、IP アドレスを使用します。

- d [ドメイン名の無効化] ボックスをオンまたはオフにします。

このオプションをオンにすると、検出プロセスは検出したノードのホスト名だけを表示し、ドメイン名は表示しません。

- e **[MACアドレスのチェックを無効にする]** チェックボックスをオンまたはオフにします。
- f **[詳細]** をクリックします。[詳細オプション] ダイアログボックスが開き、検出プロセスのその他のオプションを指定できます。



以下の手順に従います。

- PDU (Protocol Data Unit) に含めることができる最大エントリー数を、[PDUあたりの最大エン트리数] ボックスに入力します。
- 応答がない場合に検出プロセスが **SNMP GET** 要求を再試行する回数を、[最大再試行回数] ボックスに入力します。
- **SNMP GET** 要求をタイムアウトとするまでの検出プロセスの待ち時間を、秒単位で [タイムアウト(秒)] ボックスに入力します。
- ping パケットのバイトサイズを、[ping パケットサイズ(バイト)] ボックスに入力します。
- ping に含めることのできるパケット数を、[ping パケット数] ボックスに入力します。
- Windows の場合のみ。検出プロセスの実行中に ping をタイムアウトとするまでの時間を、ミリ秒単位で [ping のタイムアウト(ミリ秒)] ボックスに入力します。
- 完了したら、[OK] をクリックします。

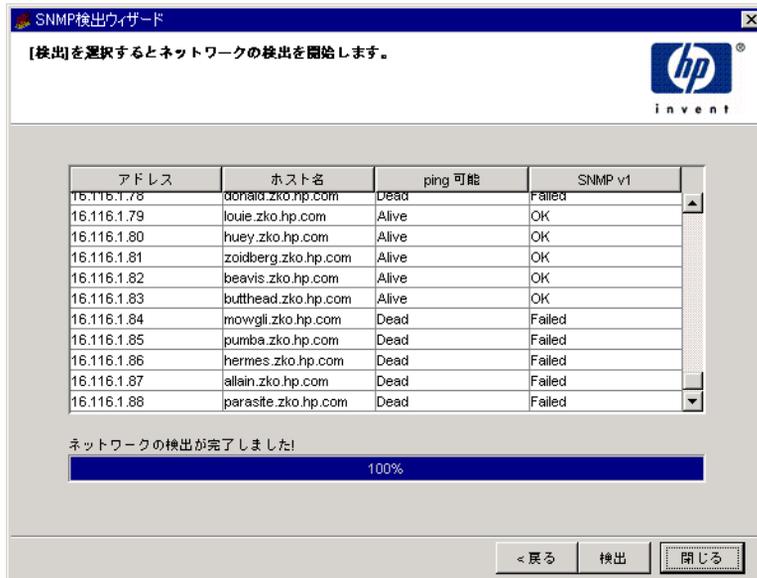
g [次へ] をクリックします。

以下のウィンドウが開きます。



6 [検出] をクリックして検出プロセスを開始します。

検出プロセスの実行中は、リストが表示されます。そこに示されるのは、各ノードのアドレス、ホスト名、ping 可能かどうか、および SNMP V1 であるかどうかです。ページの下部にある進捗バーにはプロセスの経過時間と状態が、たとえば以下のように表示されます。



検出プロセスが完了すると、以下の確認メッセージが表示されます。



- 7 [OK] をクリックします。
- 8 ウィザードウィンドウで [閉じる] をクリックします。

タイプ検出プロセスの使用

タイプ検出ウィザードは、検出されたノードのデバイスタイプを調べ、その情報をデータベースに記録します。OVPIはこの情報に基づいて、特定のタイプのデバイスをデータ収集の対象にすることができます。

▶ レポートパックをインストールした際にタイプ検出プロセスを実行しなかった場合は、インストール後に、タイプ検出ウィザードを実行する必要があります。

以下のいずれかの方法で、タイプ検出を実行してください。

- **管理 コンソール**。タイプ検出ウィザードを使用します。
- **パッケージマネージャ**。レポートパックのインストール時にタイプ検出プロセスを起動します。詳細は、131 ページの**手順 7**を参照してください。
- **コマンド行**。trend_discover -t コマンドを使用します。このコマンドの詳細については、『HP OpenView Performance Insight Reference Guide』を参照してください。

デフォルトでは、trendtimer.sched ファイルに trend_discover -t コマンドがあり、1日に1回、現地時間の午前2時に実行するようスケジュール設定されています。

タイプ検出ウィザードの起動

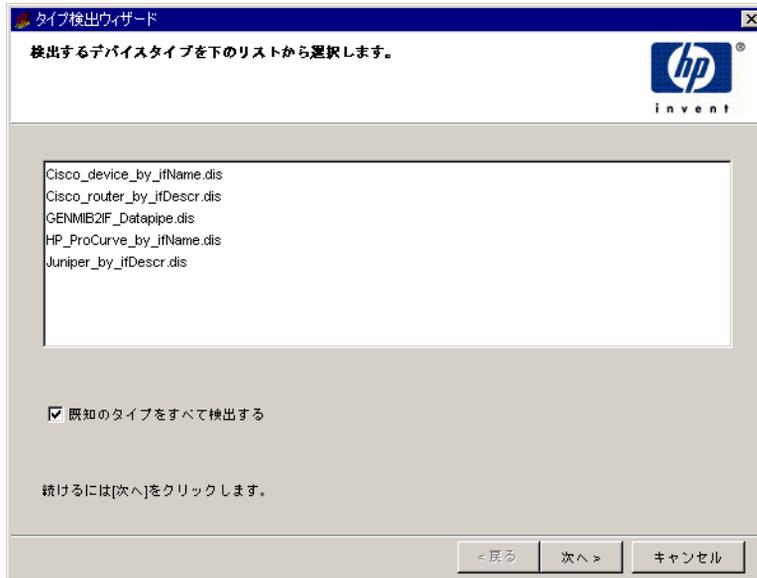
タイプ検出ウィザードを起動するには、以下の手順に従います。

- 1 管理コンソールを起動します。詳細は、96 ページの「**管理コンソールの起動**」を参照してください。

▶ 管理コンソールには管理者権限を持つアカウントでログオンする必要があります。ユーザーアカウントの詳細は、516 ページの「**ユーザーアカウントの管理**」を参照してください。

- 2 [ツール] メニューの [**タイプの検出**] を選択します。

以下のウィンドウが開き、ここで検出するデバイスのタイプを指定できます。



- 3 以下の手順に従います。
 - a 検出するデバイスタイプをリストから選択します。
 - b デバイスの既定のタイプをすべて検出するには、[既定のタイプをすべて検出する] ボックスをオンにします。
 - c [次へ] をクリックします。

以下のウィンドウが開きます。



- 4 [検出] をクリックしてタイプ検出プロセスを開始します。

検出プロセスの実行中は、各管理対象オブジェクトとそのタイプを示すリストが表示されます。ページの下部にある進捗バーにはプロセスの経過時間と状態が表示されます。

検出プロセスが完了すると、以下の確認メッセージが表示されます。



- 5 [OK] をクリックします。
- 6 ウィザードウィンドウで [閉じる] をクリックします。

6 レポートパックのインストール

この章では、パッケージマネージャを使用して以下を行う方法について説明します。

- パッケージのインストールとアンインストール（最も頻繁に使用するパッケージはレポートパックとデータパイプです）
- **Web** アクセスサーバーへのレポートの配布（インストール時）と、**Web** アクセスサーバーからのレポートの配布解除（パッケージのアンインストール時）

Web アクセスサーバーには、**HP OpenView Performance Insight (OVPI)** の **Web** サイト (**Web** アクセスサーバーアプリケーション) とドメインがあります。

配布したレポートは、**Web** アクセスサーバー、レポートビューア、またはレポートビルダを使用して表示できます。これらのアプリケーションの詳細は、『**HP OpenView Performance Insight** レポートの作成および表示ガイド』を参照してください。

パッケージの概要

この項では、レポートパック、データパイプ、およびそれらの依存関係について説明します。

レポートパック

レポートパックは、パフォーマンスを分析する対話形式のレポートの集まりです。レポートパックは、特定のタイプのデバイスの現在のパフォーマンスを監視し、パフォーマンスを過去の傾向と比較するのに使用します。この比較によって、異常な状態を発見し問題のトラブルシューティングを実行できます。また、

現在のパフォーマンスを将来のパフォーマンスと比較することもできます。それによって、デバイスが重要なパフォーマンスしきい値をいつごろ超えそうであるかを事前に知ることができます。

ほとんどのレポートパックはデモパッケージを含みます。パッケージの内容に慣れておく必要があります。かつ、実際のレポートでデータが収集されるまでの数日から数週間を待たないという場合は、デモパッケージをインストールしてください。デモパッケージは完成したパッケージであり、パッケージのレポートごとに1つずつ例があります。また、実際のレポートとまったく同様に、デモレポートでもテーブル間やグラフ間のリンクが動作します。さらに、オブジェクトを右クリックし別の異なるビューを選択することで、テーブルやグラフのさまざまなビューオプションを試すこともできます。デモレポートのデータは静的なものであり、時間が経過しても変更はされません。

データパイプ

データパイプは収集テーブルを作成するものであり、データを収集してテーブルに格納するための手段となります。また、未処理のデータを、レポートパックで使用できる形式に変換します。

(すべてではなく)一部のデータパイプは、データを **OVPI** と互換性のあるフォーマットに変換するのに使用する、アプリケーション固有のカスタムスクリプトも提供しています。データパイプを使用することで、**OVPI** では **MIB** テーブルとフラットファイルからデータを収集し、データを格納するための1つまたは複数のテーブルを提供することができます。

レポートパックとデータパイプの依存関係

一部のパッケージは他のパッケージに依存しています。たとえば、**Device Resource** レポートパックには **Common Property Tables** パッケージが必要です。パッケージマネージャは依存関係を認識しており、パッケージを常に可能な限り正しい順序でインストールします。つまり、2つのパッケージを同時にインストールしようとしていて、一方のパッケージが他方のパッケージを必要としている場合、パッケージマネージャは、どちらのパッケージを先にインストールすべきかを正しく判断します。さらに、あるパッケージをインストールしようとしていて、そのパッケージよりも先に必要なパッケージがある場合、パッケージマネージャは必要なパッケージを自動的にインストールします。

パッケージマネージャの起動

この項では、パッケージマネージャを **Windows** および **UNIX** システムで起動するための方法について説明します。

Windows デスクトップ

パッケージマネージャを起動するには、以下の手順に従います。

Windows のタスクバー上の [**スタート**] をクリックし、[プログラム]、[HP OpenView]、[Performance Insight]、[**パッケージマネージャ**] の順に選択します。

[ようこそ] ウィンドウ (127 ページの ) が開きます。

OVPI 管理コンソール (UNIX および Windows)

パッケージマネージャを起動するには、オペレーティングシステムに応じて以下のいずれかを実行します。

- **Windows**

- a **Windows** のタスクバー上の [**スタート**] をクリックし、[プログラム]、[HP OpenView]、[Performance Insight]、[**管理コンソール**] の順に選択します。

[管理コンソール] ウィンドウが開きます。

- b [ツール] メニューの [**パッケージマネージャ**] を選択します。

[ようこそ] ウィンドウ (127 ページの ) が開きます。

- UNIX
 - a trendadm としてログオンします。
 - b 次のコマンドを入力します。
piadmin
[管理コンソール] ウィンドウが開きます。
 - c [ツール] メニューの [パッケージマネージャ] を選択します。
[ようこそ] ウィンドウ (127 ページの図 4) が開きます。

コマンド行 (UNIX および Windows)

パッケージマネージャを起動するには、オペレーティングシステムに応じて以下のいずれかを実行します。

- Windows
コマンド行で以下を入力します。
packagemgr
[ようこそ] ウィンドウ (127 ページの図 4) が開きます。
- UNIX
 - a trendadm としてログオンします。
 - b コマンド行で以下を入力します。
packagemgr
[ようこそ] ウィンドウ (127 ページの図 4) が開きます。

パッケージのインストール

パッケージをインストールするには、以下の手順に従います。

- 1 パッケージマネージャを起動します。(125 ページの「パッケージマネージャの起動」を参照)。

[ようこそ] ウィンドウ (図 4) が開きます。

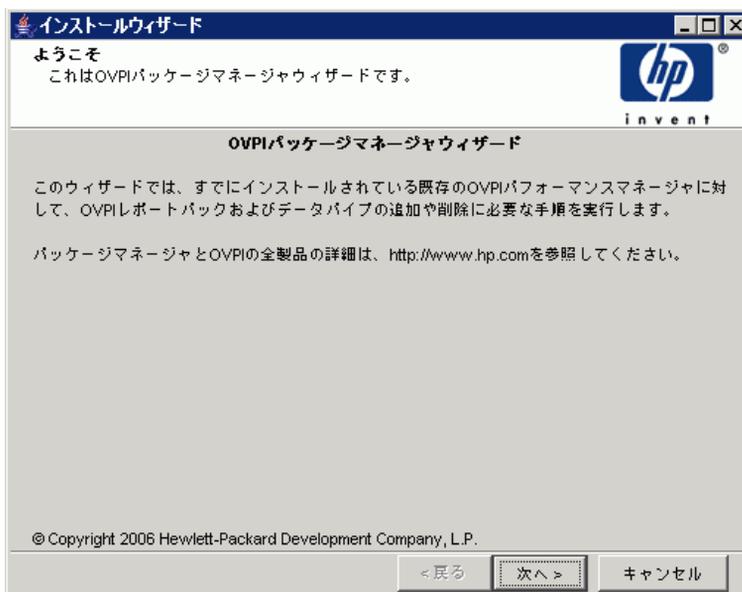


図 4 [ようこそ] ウィンドウ

- 2 [次へ] をクリックします。

[OVPI パッケージの場所] ウィンドウ (図 5) が開きます。

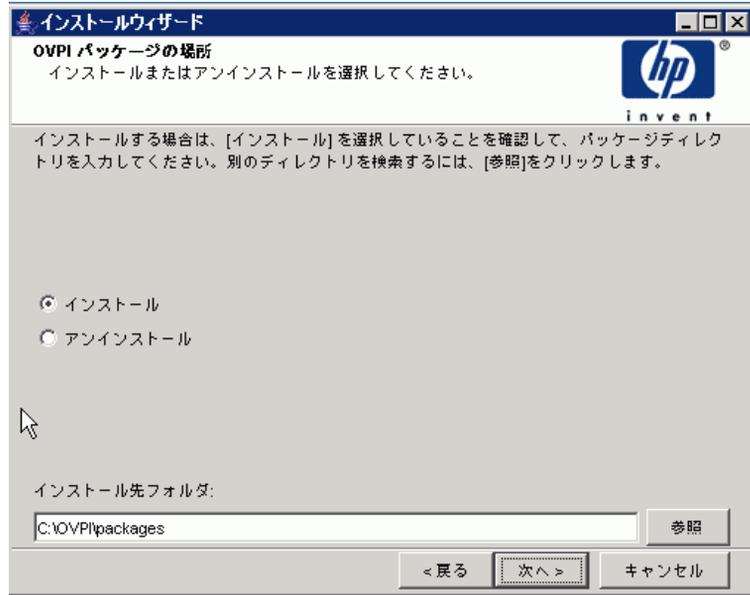


図 5 [OVPI パッケージの場所] ウィンドウ

3 以下の手順に従います。

- a [インストール] を選択し、パッケージをインストールしたディレクトリを入力します。

通常、このディレクトリは OVPI をインストールしたディレクトリの packages フォルダにします。たとえば、Windows システムの場合、このディレクトリは C:\OVPI\packages です。

- b [次へ] をクリックします。

[OVPI レポートの配布] ウィンドウが開きます。

このウィンドウには、パッケージのレポートを Web アクセスサーバーに配布する際のオプションが示されます。レポートを配布すると、ユーザーはクライアントアプリケーション (Web アクセスサーバー、レポートビューア、レポートビルダ) を使用してそれらを表示できるようになります。

レポートパック用のデータを収集し、それを後で配布することもできます。現時点でレポートを配布しない場合は、配布ウィザードまたは配布ツールを使用して後で配布できます。詳細については、『HP OpenView Performance Insight レポートの作成および表示ガイド』を参照してください。

4 以下のいずれかを実行します。

- a パッケージをインストールするがそれらのレポートを **Web** アクセスサーバーに配布しない場合は、[**レポートの配布**] チェックボックスをオフにします。
- b レポートを **Web** アクセスサーバーに配布する場合は、[**レポートの配布**] チェックボックスをオンにし、以下を実行します。
 - [OVPI アプリケーションサーバー名] ボックスに、レポートの配布先とするシステム (**Web** アクセスサーバーシステム) の名前を入力します。
 - [OVPI アプリケーションサーバーのポート番号] ボックスに、[OVPI アプリケーションサーバー名] ボックスで、指定したシステム (**Web** アクセスサーバーシステム) のポート番号を入力します。
 - 管理者のユーザー名とパスワードを入力します。パッケージをインストールするには管理者権限を持つアカウントが必要です。

OVPI では、インストール時に **Web** アクセスサーバー用の `trendadm` というデフォルトの管理者アカウントが作成されます。このアカウントを使用するか、または、管理者権限を持つ別のアカウントがあればそれを使用します。アカウントの作成の詳細は、516 ページの「**ユーザーアカウントの管理**」を参照してください。

▶ 複数の **Web** アクセスサーバーシステムが構成に含まれている場合は、パッケージを中央サーバーにインストールした後に、`deploytool` コマンドを使用してレポートを他の **Web** アクセスサーバーシステムに配布します。`deploytool` コマンドの詳細については、『**HP OpenView Performance Insight Reference Guide**』を参照してください。

あるいは、配布ウィザードを使用してレポートをこれらのシステムに 1 つずつ配布することもできます。配布ウィザードの詳細については、『**HP OpenView Performance Insight** レポートの作成および表示ガイド』を参照してください。

5 [**次へ**] をクリックします。

▶ 現在のデータベースにインストールできないレポートパックがある場合、それらが表示されます。たとえば、データベースとして **Oracle** を使用しているシステムに、**Sybase** でのみ使用可能なレポートパックをインストールしようとした場合は、メッセージが表示されます。

[OVPI パッケージの選択] ウィンドウ (図 6) が開きます。



図 6 [OVPI パッケージの選択] ウィンドウ

このウィンドウには以下を表示します。

- [レポートパッケージ]: 現在 **packages** フォルダにあるレポートパックパッケージを一覧表示します。
- [ステータス]: レポートパックパッケージがインストールされているかどうかを表示します。
- [バージョン]: レポートパックパッケージのバージョン番号を表示します。
- [依存関係]: 選択したレポートパックを必要とするレポートパックを表示します。[依存関係なし]は、そのレポートパックパッケージが他のレポートパックパッケージを必要としていないことを示しています。

6 以下の手順に従います。

- a インストールする各パッケージの横にあるチェックボックスをオンにすると、赤いチェックマーク (✓) が各パッケージの横にあるボックスに表示されます。



他のパッケージに対して依存関係を持つパッケージを選択した場合は、パッケージマネージャによってそれらのパッケージがインストール対象として自動的に選択されます。各依存パッケージの横にあるボックスに、黒いチェックマークが表示されます。

- b [次へ] をクリックします。

[OVPI タイプ検出] ウィンドウ (図 7) が開きます。

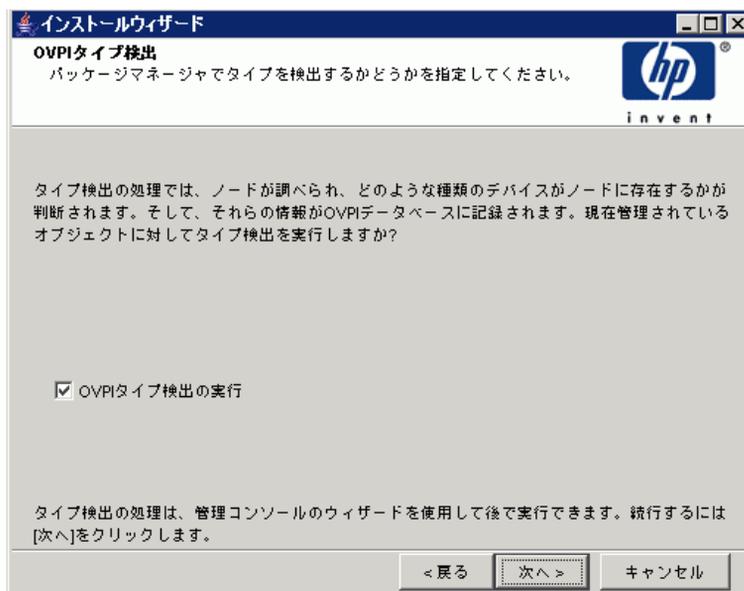


図 7 [OVPI タイプ検出] ウィンドウ

タイプ検出は、インストールしたパッケージで使用される管理対象オブジェクトのタイプを調べます。このオプションは、インストールしようとしているすべてのパッケージにおいてタイプ検出をする場合のみ、使用してください。パッケージによっては、ユーザがタイプ検出しなくてもよいものがあります。したがって、自分の環境にどのタイプが存在するかがわかっている場合は、パッケージをインストールした後にユーザが必要なものだけ、タイプ検出プロセスを実行することもできます。

- 7 以下のいずれかを実行します。

- a パッケージのインストール時にタイプ検出を実行するには、[次へ]をクリックします。
- b パッケージのインストール時にタイプ検出をしないようにするには、[OVPI タイプ検出の実行] チェックボックスをオフにしてから [次へ] をクリックします。



レポートパックのインストール後にタイプ検出プロセスを実行する場合は、ネットワーク検出 (112 ページ) を実行し、その後でタイプ検出 (120 ページ) を実行してください。

[概要] ウィンドウが表示されます。

- 8 [概要] ウィンドウに表示された情報を確認し、以下のいずれかを実行します。
 - 情報に問題がなければ、[インストール] をクリックします。
 - 表示された情報を変更する場合は、[戻る] ボタンをクリックして前のいずれかの画面に戻り、変更を加えます。完了したら、[概要] ウィンドウに戻り、[インストール] をクリックします。

[インストールの進捗状況] ウィンドウ (図 8) が開き、インストールの進捗状況と完了に関する情報が表示されます。

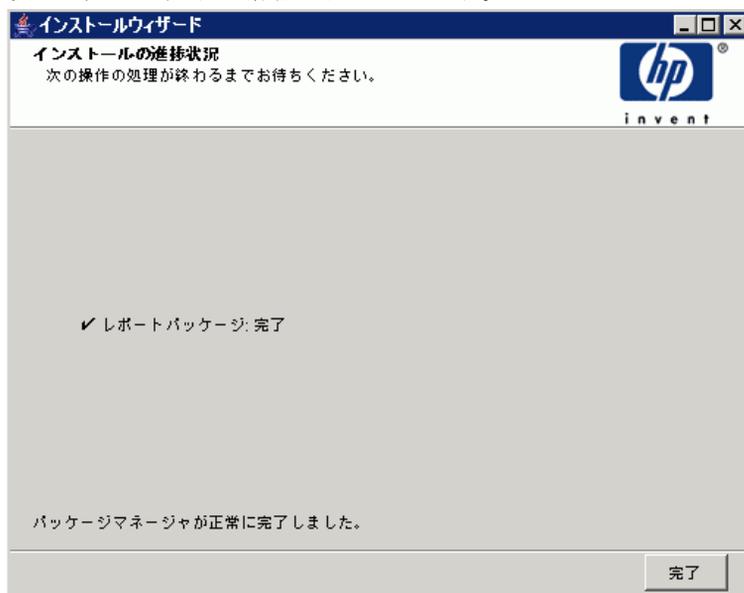


図 8 [インストールの進捗状況] ウィンドウ

パッケージのインストールが失敗した場合は、[レポートパックのインストールエラー] ダイアログボックスが表示されます。

パッケージマネージャがインストールできなかったパッケージが表示され、インストールを続行するかどうかをたずねられます。このダイアログボックスが開いた場合は、以下のいずれかを実行します。

- エラーにかかわらず、続けて次のパッケージをインストールするには、[はい] をクリックします。

別のエラーがあってもこのダイアログボックスを表示しないようにするには、[今後は確認しない] チェックボックスをオンにします (残りの各エラーを詳しく調べるには、[インストールの進捗状況] ウィンドウの [詳細] ボタンをクリックします)。

- インストールを終了するには、[いいえ] をクリックします。



各パッケージにはいくつかの指令がセットになっている場合があります。ここでいう指令とは、そのパッケージのインストール方法をパッケージマネージャに指示する手順です。ある指令によるインストールが失敗した場合は、パッケージマネージャが [レポートパックのインストールエラー] ダイアログボックスを表示することでそのエラーを示します。[はい] を選択して続行すると、そのレポートパックの残りの指令をパッケージマネージャが実行します。

- 9 インストールが正常に完了したら、[インストールの進捗状況] ウィンドウの [完了] をクリックしてインストールを完了します。

パッケージのアンインストール

パッケージをアンインストールするには、以下の手順に従います。

- 1 OVPI の管理者としてシステムにログオンします。
- 2 パッケージマネージャを起動します (125 ページの「[パッケージマネージャの起動](#)」を参照)。[\[ようこそ\]](#) ウィンドウ (127 ページの [図 4](#)) が開きます。
- 3 [\[次へ\]](#) をクリックします。
[\[OVPI パッケージの場所\]](#) ウィンドウ (128 ページの [図 5](#)) が開きます。
- 4 [\[アンインストール\]](#) を選択し、[\[次へ\]](#) をクリックします。

[OVPI レポートの配布解除] ウィンドウが開きます。128 ページの図 5 を参照してください。

このウィンドウには、パッケージのレポートを Web アクセスサーバーから配布解除 (削除) する際のオプションが示されます。レポートの配布解除を選択すると、それ以降、ユーザーはクライアントアプリケーション (Web アクセスサーバー、レポートビューア、レポートビルダ) を使用してそれらのレポートを表示することができなくなります。

- 5 以下のいずれかを実行します。
 - a レポートを Web アクセスサーバーから配布解除しない場合は、[**レポートの配布解除**] チェックボックスをオフにします。
 - b レポートを Web アクセスサーバーから配布解除するには、[**レポートの配布解除**] チェックボックスをオンにし、以下を実行します。
 - [OVPI アプリケーションサーバー名] ボックスに、レポートを配布解除するシステム (Web アクセスサーバーシステム) の名前を入力します。
 - [OVPI アプリケーションサーバーのポート番号] ボックスに、[OVPI アプリケーションサーバー名] ボックスで、指定したシステム (Web アクセスサーバーシステム) のポート番号を入力します。
 - 管理者のユーザー名とパスワードを入力します。レポートを配布解除するには管理者権限を持つアカウントが必要です。
 - OVPI は、インストール時に、trendadm というデフォルトの管理者アカウントを作成します。このアカウントを使用するか、または、管理者権限を持つ別のアカウントがあればそれを使用します。
- 6 [次へ] をクリックします。

[OVPI パッケージの選択] ウィンドウが開きます。130 ページの図 6 を参照してください。

- 7 以下の手順に従います。

- a アンインストールする各パッケージの横にあるチェックボックスをオンにすると、赤いチェックマーク (✓) が各パッケージの横にあるボックスに表示されます。



他のパッケージに対して依存関係を持つパッケージを選択した場合は、パッケージマネージャによってそれらのパッケージが削除対象として自動的に選択されます。各依存パッケージの横にあるボックスに、黒いチェックマークが表示されます。

- b [次へ] をクリックします。

[概要] ウィンドウが表示されます。

- 8 [概要] ウィンドウに表示された情報を確認し、以下のいずれかを実行します。

- a 情報に問題がなければ、[アンインストール] をクリックします。

- b 表示された情報を変更する場合は、[戻る] ボタンをクリックして前のいずれかの画面に戻り、変更を加えます。完了したら、[概要] ウィンドウに戻り、[アンインストール] をクリックします。

[アンインストールの進捗状況] ウィンドウ (132 ページの  8) が開き、アンインストールの全体および個々の進捗状況が表示されます。

アンインストールが完了したら、[アンインストールの進捗状況] ウィンドウの [完了] をクリックします。

7 場所に依存しないレポート作成機能 およびコピーポリシー

場所に依存しないレポート作成機能

通常、OVPI は分散型ネットワーク環境に配布され、セントラルサーバーとサテライトサーバーの構成になっています。サテライトサーバーはデータをポーリングし、要約タスクを実行します。ポーリングされたデータをレポートするために、集中リポジトリ（通常は、セントラルサーバー）にデータがコピーされます。このため、データの複製が大量に作成され、OVPI が監視しているネットワークの負荷が増大します。

このような問題に対処し、分散型データ管理を準備するために考えられたのが、場所に依存しないレポート作成機能 (LIR) です。OVPI 分散型環境では、LIR によって、ネットワーク上のどこにデータがあるかに関係なく、レポートを作成できます。複数のデータベースのデータを 1 つのレポートに自動的に取り込むことができ、サテライトサーバーからセントラルサーバーへデータを頻繁にコピーしなければならないという問題を回避できます。

レポート作成のために LIR を設定する利点は以下のとおりです。

- ネットワークトラフィックを軽減できます。レポート生成のために、最小限のデータだけをサテライトサーバーからセントラルサーバーへ転送するようにデータ管理を設定できます。理想的なシナリオは、サテライトサーバーがデータの大半（未処理のデータ、レポートデータ、および要約データ）をローカルに保存できるようにすることです。
- ネットワーク上に分散されたデータを 1 つのレポートにまとめることができます。
- ネットワーク上でのデータコピー機能をカスタマイズするための LIR マッピングおよびコピーポリシーを作成できます。

ポイントツーポイントの **trendcopy** プロシージャを使用して、各サテライトサーバーからのデータでセントラルサーバーを更新する手間を省略できます。

LIR マッピング

セントラルサーバーで LIR マッピングが設定されていると、各サテライトサーバーに含まれるデータタイプのマッピングが記録されます。サテライトサーバーはセントラルサーバーに登録します。この登録は、OVPI のインストール時に行うことができます (LIR のサポートのためのインストールウィザードの更新を参照)。または、データベース参照の追加ウィザードを使用しても行うことができます。このウィザードは、OVPI 管理コンソールのシステム/ネットワークの管理アプリケーションから利用できます。詳細は 349 ページの「システムの管理」を参照してください。

LIR マッピング情報には以下のものが含まれます。

- **データタイプ**: レポートパックまたはテーブルカテゴリ内の特定のプロパティテーブルおよびすべてのプロパティテーブル
- **集約タイプ**: レート、時間単位、日単位、週単位、月単位、四半期単位、年単位

レポートを生成する場合、レポート作成エンジンは LIR マッピングを使用して、必要とされるデータのあるサテライトサーバーを特定します。プロパティテーブル単位でクエリーが実行されます。プロパティテーブルがデータマッピングテーブルに示されていない場合は、ローカルデータベースまたはデフォルトのデータベースに対してクエリーが実行されます。

LIR クエリーは、個々のノードまたはノードセットに対して作成されるレポート要素 (グラフまたはテーブル) に適用されます。ノードの選択の詳細は、『HP OpenView Performance Insight レポートの作成および表示ガイド』の第 6 章を参照してください。また、ドリルダウンを使用して複数のレポート要素がリンクされている場合にも LIR クエリーが適用されます。ドリルダウンの詳細は、『HP OpenView Performance Insight レポートの作成および表示ガイド』の第 5 章を参照してください。

LIR マッピングとコピーポリシー

LIR マッピングを作成すると、集約タイプに基づき、コピーポリシーが作成されます。LIR マッピング 1 つにつき、ゼロまたは 1 つ以上のコピーポリシーを関連付けることができます。コピーポリシーはセントラルサーバーに自動的に生成されます。コピーポリシーによって、データテーブルのタイプ、コピー対象となるデータを含むコピー元のサテライトサーバー、およびデータ集約タイプが規定されます。詳細はコピーポリシーを参照してください。

LIR の実装例

例 1: サテライトサーバー上にあるレートデータを 1 時間ごとにセントラルサーバーにコピーする

この例は、セントラルサーバーで準リアルタイム (NRT) レポートが必要とされる場合に適用できます。これまでのバージョンの OVPI では、すべてのサテライトサーバーからレート データをコピーすることで、この機能を果たしていました。しかし、各ポーリングサイクルで収集されるレート データの量が多いため、ほとんどの実装ではこれは実現できませんでした。さらに、サテライトサーバーとセントラルサーバーの間で重複したレート データが保持されることとなります。

LIR を使用すると、セントラルサーバーにレートデータをコピーすることなく、NRT レポートを表示できます。1 時間ごとに集計を実行し、その 1 時間分のデータだけをセントラルサーバーにコピーするようにサテライトサーバーを設定するだけです。レートデータと比べ、1 時間分のデータの方がボリュームを小さく抑えることができます。

- OVPI と必要なレポートパックをセントラルサーバーと 1 つ以上のサテライトサーバーにインストールします。
- サテライトサーバーをセントラルサーバーに登録します。
- サテライトサーバーは、特定のデバイスリストについてポーリングを実行し、時間単位の集約だけを実行するように設定します。それよりも高いレベルの集約 (日単位や週単位など) については、セントラルサーバーで実行します。
- セントラルサーバーで LIR を設定し、LIR マッピングを追加します。
- セントラルサーバーからレポートを実行します。これで、サテライトサーバーのデータがレポートに自動的に取り込まれます。

LIR のサポートのためのインストールウィザードの更新

OVPI のインストール時に、OVPI サーバーシステムの役割の選択が求められるようになります。インストール指示の詳細は、『**HP OpenView Performance Insight Oracle** データベースのインストールおよびアップグレードガイド』の第 4 章を参照してください。

[データベースの選択] ウィンドウには、3 つのオプションが用意されています。

- [スタンドアロンサーバー]
- [セントラルサーバー]
- [サテライトサーバー]

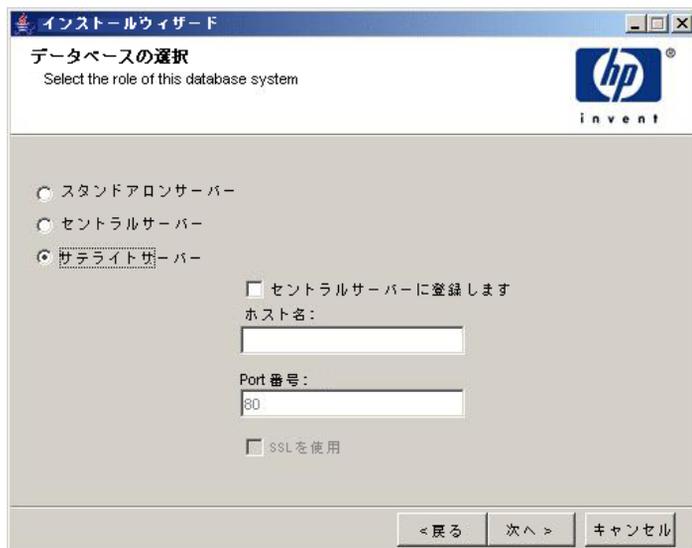


図 9 [データベースの選択] ウィンドウ

[サテライトサーバー] オプションを選択すると、[セントラルサーバー登録] ページが開きます。図 10 は、[セントラルサーバー登録] ウィンドウを示しています。

[セントラルサーバー登録] ページには、登録先のセントラルサーバーのホスト名およびポート番号(デフォルト値は 80)を指定するためのオプションがあります。これは、systems.xml ファイルに格納されている情報を同期させるために必要です。安全な通信を実現するために、SSL を有効にできます。インストールプロセスが終了すると、登録も完了です。

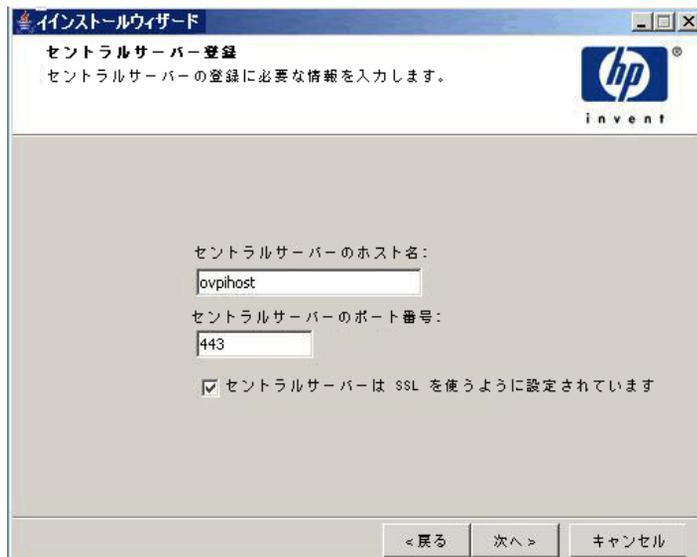


図 10 [セントラルサーバー登録] ウィンドウ

System.xml ファイルの更新

LIR を導入すると、systems.xml ファイルの [データベースプロパティ] ブロックに新しい 2 つのタグが追加されます。1 つ目は [役割] タグで、許容値は [スタンドアロン] (数値 0)、[セントラル] (数値 1)、[サテライト] (数値 2) です。2 つ目は [LIREnabled] タグで、許容値は [true] と [false] です。[LIREnabled] タグは、セントラルサーバーに限り適用されます。

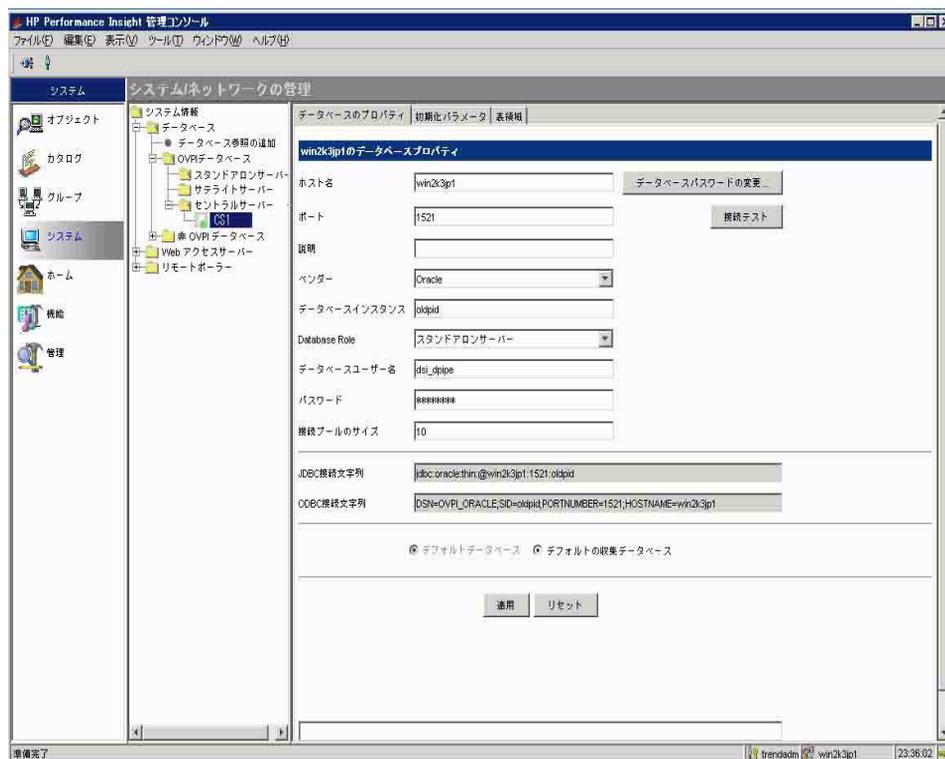
systems.xml ファイルのこのような変更により、アプリケーションサーバーが LIR アクセスの管理を行うようになります。クライアントがアプリケーションサーバーにログインすると、現在どのデータベースに接続するのか指定が求められますが、今後 LIR 機能を使用するかどうかについても指示が求められます。このように設定ポイントが 1 つになっているため、クライアントのみのシステムでは LIR を設定する必要はありません。

OVPI サーバシステムの役割の管理

[システム/ネットワークの管理] ウィンドウを表示するには、管理コンソールのナビゲーションペインで [システム] アイコンをクリックします。[システム/ネットワークの管理] ウィンドウが開きます。

ナビゲーションペインの [OVPI データベース] フォルダーは、新たに [セントラルサーバー]、[サテライトサーバー]、[スタンドアロンサーバー] の 3 つのサブフォルダーに分けられています。セントラルサーバーシステム名を選択すると、以下のウィンドウが表示ペインに表示されます。

図 11 [システム/ネットワークの管理] ウィンドウ



このウィンドウでは、以下の情報を設定できます。

- データベースのプロパティ
- 初期化パラメータ
- 表領域
- LIR 設定 (セントラルサーバーにのみ適用)

データベースシステムの役割を変更するには、以下の手順に従います。

1 管理コンソールを起動します。

▶ 管理コンソールには管理者権限を持つアカウントでログオンする必要があります。

2 管理コンソールのナビゲーションペインで **[システム]** アイコンをクリックします。

[システム/ネットワークの管理] ウィンドウが開きます。

3 **[OVPI データベース]** フォルダーに移動し、目的のデータベースシステムを選択します。

4 **[データベースのプロパティ]** をクリックします。

[データベースのプロパティ] ウィンドウが開きます。

5 [データベースの役割] リストで、新たに設定する役割を選択し、**[適用]** をクリックします。

[OVPI データベース] フォルダーの適切なフォルダーに直ちに移動するとともに、OVPI 管理者がログインしているシステムと異なる場合、役割が変更されたシステムに変更内容が伝播されます。変更内容に合わせて、`systems.xml` ファイルが自動的に更新されます。

▶ 新しいデータベース参照を追加するには、システム/ネットワークの管理アプリケーションのデータベース参照の追加ウィザードを使用できます。

LIR マッピングの管理

この章では、以下の項目について説明します。

- LIR の有効化
- LIR の無効化
- 新しい LIR マッピングの追加
- LIR マッピングの表示
- LIR マッピングの削除
- LIR マッピングの変更

LIRの有効化

LIR を有効にするには、以下を実行します。

- 1 管理コンソールを起動します。



管理コンソールには管理者権限を持つアカウントでログオンする必要があります。

- 2 管理コンソールのナビゲーションペインで **[システム]** アイコンをクリックします。

[システム/ネットワークの管理] ウィンドウが開きます。

- 3 **[OVPI データベース]** フォルダーに移動し、セントラルサーバー名を選択します。

- 4 **[LIR 設定]** をクリックします。

[LIR 設定] ウィンドウが開きます。

- 5 ウィンドウの下部にある **[LIRの有効化]** チェックボックスをオンにします。

これで、セントラルサーバーに対して LIR が有効になり、systems.xml ファイルで **[LIRの有効化]** タグが **[true]** に設定されます。続けて **新しい LIR マッピングの追加** に進むことができます。

LIRの無効化

セントラルサーバーで LIR を無効にするには、以下を実行します。

- 1 [システム/ネットワークの管理] ウィンドウから、**[OVPI データベース]** フォルダーに移動し、セントラルサーバー名を選択します。

- 2 **[LIR 設定]** をクリックします。

[LIR 設定] ウィンドウが開きます。

- 3 ウィンドウの下部にある **[LIRの有効化]** チェックボックスをオフにします。

メッセージボックスが表示されます。

- 4 LIR マッピングと関連するポリシーを削除する場合は、**[はい]** をクリックします。

新しい LIR マッピングの追加

新しい LIR マッピングを追加するには、以下を実行します。

1 [システム/ネットワークの管理] ウィンドウから、[OVPI データベース] フォルダーに移動し、セントラルサーバー名を選択します。

2 [LIR 設定] をクリックします。

[LIR 設定] ウィンドウが開きます。



セントラルサーバーに対して LIR が有効になっていることを確かめます。144 ページの「[LIR の有効化](#)」を参照してください。

3 [マッピングの追加] をクリックします。

[LIR マッピングの追加] ウィンドウが表示されます。

4 [サテライトサーバーの選択] リストから、マッピングを追加するサテライトサーバーを選択します。

5 以下のいずれかのデータテーブルオプションを選択します。

— [カテゴリ] (レポートパックテーブルカテゴリ)

— [プロパティテーブル] (個々のプロパティテーブル)

6 手順 5 で選択した内容に応じて、コンボボックスから名前を選択します。

7 マッピング対象となるデータタイプを選択します。

コピータイプを選択すると、それよりも下位レベルにある集約タイプすべてが自動的に選択されます。たとえば、[日単位] オプションを選択した場合、[時間単位] および [レート] マッピングが自動的に選択されます。

8 [リストへの追加] をクリックします。

LIR マッピングが作成され、[追加されたマッピング] リストに表示されます。

9 複数の LIR マッピングがある場合は、手順 4 ~ 手順 8 を繰り返して追加します。

10 マッピングを追加したら、[OK] をクリックし、[適用] をクリックします。

追加された LIR マッピングが表示ペインに表示されます。対応するコピーポリシーもセントラルサーバーに自動的に生成されます。

LIR マッピングの表示

- 1 [システム/ネットワークの管理] ウィンドウから、[OVPI データベース] フォルダーに移動し、**LIR** が有効になっているセントラルサーバーを選択します。
- 2 **[LIR 設定]** をクリックします。
LIR マッピングがテーブルにリストされます。
- 3 マッピングをフィルタリングするには、[サテライトサーバーの選択] リストからサテライトサーバー名を選択して、対応するマッピングを表示します。

LIR マッピングの削除

- 1 [システム/ネットワークの管理] ウィンドウから、[OVPI データベース] フォルダーに移動し、**LIR** が有効になっているセントラルサーバーを選択します。
- 2 [編集] メニューの **[LIR マッピングの削除]** をクリックします。
[LIR マッピングの削除] ウィンドウが表示されます。
- 3 マッピングのリストから、サテライトサーバー、データテーブルタイプ、またはその両方でフィルタリングできます。
- 4 フィルタリングしたリストから、削除するマッピングを選択します。
 - 連続した複数のオブジェクトを選択するには、最初のオブジェクトを選択してから、**[Shift]** キーを押しながら最後のオブジェクトを選択します。
 - 連続していない複数のオブジェクトを選択するには **[Ctrl]** キーを押しながらオブジェクトを **1** つずつクリックします。
- 5 選択した内容に応じて、**[選択済みを削除]** または **[すべてを削除]** をクリックします。
LIR マッピングが削除されます。
- 6 **[適用]** をクリックします。
- 7 **[OK]** をクリックして [システム/ネットワークの管理] ウィンドウに戻ります。

LIR マッピングの変更

サテライトサーバーにマッピングされるデータタイプ値を変更できます。

- 1 **[LIR 設定]** ウィンドウで、変更する **LIR** マッピングに対応するサテライトサーバーを選択します。
- 2 このサテライトサーバーに関連付けられている **LIR** マッピングが表示されます。
- 3 マッピングのためのデータタイプオプションを選択または選択解除して、**[適用]** をクリックします。

コピーポリシー

LIR 機能では、サテライトサーバーからセントラルサーバーへの **trendcopies** のためのコピーポリシーを作成するために、コピーポリシーウィザードをサポートしています。コピーポリシーウィザードはセントラルサーバーから起動します。

コピーポリシーにより、ネットワークでのデータコピー機能のカスタマイズおよび管理が可能になります。特定のデータタイプのデータをサテライトサーバーからセントラルサーバーへコピーするためのポリシーを作成できます。使用シナリオの詳細は、148 ページの「**コピーポリシーの実装例**」を参照してください。

LIR マッピングにはそれぞれ対応するコピーポリシーがあります。詳細は 138 ページの「**LIR マッピング**」を参照してください。ポリシーの作成および変更には、コピーポリシーマネージャアプリケーションを使用します。

この章では、以下の項目について説明します。

- 148 ページの「**コピーポリシーの実装例**」
- 149 ページの「**コピーポリシーマネージャの起動**」
- 151 ページの「**コピーポリシーの管理**」

コピーポリシーの実装例

例 1: テーブルカテゴリのためのカスタムコピーポリシー

この例では、テーブルカテゴリのためのカスタムコピーポリシーを作成します。さまざまなサテライトサーバーからセントラルサーバーに日単位のデータをコピーします。

- セントラルサーバーおよび 1 つまたは複数のサテライトサーバーに **OVPI** をインストールします。
- セントラルサーバーとサテライトサーバーの両方に必要なレポートパックをインストールします。
- テーブルカテゴリのためのカスタムコピーポリシーを作成します。集約を [日単位]、コピータイプを [データのみ] に設定します。

コピータイプがデータコピーであるため、タイムバリエーションデータがコピーされ、プロパティデータは無視されます。



上記の例のプロシージャでは、選択したテーブルカテゴリに対してプロパティだけをコピーする別のコピーポリシーをすでに作成していることが前提となります。

例 3: 個々のデータテーブルのためのカスタムコピーポリシー

この例では、個々のデータテーブルのためのコピーポリシーを取り上げます。さまざまなサテライトサーバーからセントラルサーバーに、すべての時間単位テーブルのプロパティテーブルとデータテーブルをコピーします。

- セントラルサーバーおよび 1 つまたは複数のサテライトサーバーに **OVPI** をインストールします。
- サテライトサーバーとセントラルサーバーの両方に必要なレポートパックをインストールします。
- 個々の時間単位のデータテーブルのためのコピーポリシーを作成します。集約を [プロパティのみ] と [データのみ] に設定します。[プロパティおよびデータ] オプションを選択しないでください。

コピーポリシーマネージャの起動

コピーポリシーマネージャアプリケーションには、OVPI 管理コンソールからアクセスします。このアプリケーションを使用できるのは、セントラルサーバーで管理コンソールが起動されている場合だけです。

このアプリケーションでは、以下の作業を実行できます。

- コピーポリシーの作成
- コピーポリシーの編集
- コピーポリシーの表示

コピーポリシーマネージャアプリケーションを起動するには、以下を実行します。

- 1 管理コンソールを起動します。



管理コンソールには管理者権限を持つアカウントでログオンする必要があります。

- 2 管理コンソールのナビゲーションペインで **[管理]** アイコンをクリックします。

[管理] ウィンドウが開きます。このウィンドウには以下のペインがあります。

- **表示ペイン**。表示ペインは、ウィンドウの右側にあります。
- **ナビゲーションペイン**。ナビゲーションペインはウィンドウの左側にあります。コピーポリシーマネージャでは 2 つの表示オプションをサポートしています。ビューに応じて、ペインにツリーが表示されます。ツリーはフォルダーで構成されており、各フォルダー内には項目があり、各項目の下に、さらに別の項目、またはフォルダーがある場合があります。

ツリーの階層レベルは、Windows エクスプローラで Windows システムの内容を表示するのとまったく同様に展開できます。フォルダーを展開すると、そのフォルダー内の項目やフォルダーを表示できます。また、階層レベルを折りたたむこともできます。

ナビゲーションフレームのツリーは、次のように操作します。

- フォルダーの内容をプレビューするには、プラス記号 (+) をクリックします。

フォルダーの内容は、表示フレームに表示されます。

- 展開されたフォルダーを縮小するには、マイナス記号 (-) をクリックします。

設定されているコピーポリシーの表示

コピーポリシーマネージャには 2 つの表示オプションがあります。

- **テーブルのカテゴリビュー**：コピーポリシーは、テーブルカテゴリに基づき、[コピーポリシーマネージャ] ウィンドウの表示ペインに表示されます。また、ナビゲーションペインでさらにドリルダウンして、テーブルカテゴリによってフィルタリングされたコピーポリシーを取得することもできます。詳細は 150 ページの「[テーブルカテゴリのコピーポリシーの表示](#)」を参照してください。
- **サーバービュー**：コピーポリシーは、サテライトサーバーに基づき、[コピーポリシーマネージャ] ウィンドウの表示ペインに表示されます。また、ナビゲーションペインでさらにドリルダウンして、各サテライトサーバーに作成されているコピーポリシーを取得することもできます。サテライトサーバービューは、コピーポリシーマネージャアプリケーションを起動したときのデフォルトのビューです。詳細は 150 ページの「[サテライトサーバーに関連付けられているコピーポリシーの表示](#)」を参照してください。

サテライトサーバーに関連付けられているコピーポリシーの表示

サテライトサーバーに関連付けられているコピーポリシーを表示するには、以下のいずれかを実行します。

- [表示] メニューの [サーバービュー] を選択します。
-  ([表示] ボタン) をクリックして、[サーバービュー] を選択します。

ナビゲーションペインにサテライトサーバーが表示されます。いずれかのサテライトサーバーを選択すると、それに関連するコピーポリシーが表示ペインに表示されます。

テーブルカテゴリのコピーポリシーの表示

テーブルカテゴリのコピーポリシーを表示するには、以下のいずれかを実行します。

- [表示] メニューの [テーブルのカテゴリビュー] を選択します。
-  ([表示] ボタン) をクリックして、[テーブルのカテゴリビュー] を選択します。

ナビゲーションペインにテーブルカテゴリが表示されます。いずれかのテーブルカテゴリを選択すると、それに関連するコピーポリシーが表示ペインに表示されます。

各列の項目は以下のとおりです。

[コピーポリシー ID]	コピーポリシーの一意の識別子。
[テーブルカテゴリ]	テーブルカテゴリの名前。
[ソーステーブルのエイリアス]	サテライトサーバーのソーステーブルの名前。
[ターゲットテーブルエイリアス]	セントラルサーバーのターゲットテーブルの名前。
[コピータイプ]	コピー対象のデータタイプ。可能な値は、[プロパティテーブル]、[データテーブル]、またはその両方です。
[ソースサーバー]	データが保存されているサーバー。
[宛先サーバー]	セントラルサーバーの名前。
[コピーポリシーが許可されています]	ソースサーバーからセントラルサーバーへデータがコピーされるかどうかを示します。

コピーポリシーの管理

コピーポリシーマネージャアプリケーションでは、新しいコピーポリシーを作成したり、既存のコピーポリシーを変更できます。

通常、新しいポリシーが作成されるシナリオは以下のとおりです。

- 新しいレポートパックをインストールしたとき。
- セントラルサーバーが集約の一部を処理する新しい収集を作成したとき。

この章では、以下の項目について説明します。

- 152 ページの「[コピーポリシーの作成](#)」
- 155 ページの「[コピーポリシーの編集](#)」
- 155 ページの「[コピーポリシーの削除](#)」

コピーポリシーの作成

コピーポリシーを作成するには、以下の手順に従います。

タスク 1: [コピーポリシー]ウィザードを起動する

[コピーポリシーマネージャ]ウィンドウから、以下のいずれかを実行して、[コピーポリシー]ウィザードを起動します。

-  ([新規コピーポリシー]ボタン)をクリックします。
- [ファイル]メニューから、[新規コピーポリシー]を選択します。
[コピーポリシー]ウィザードが開きます。[次へ]をクリックします。

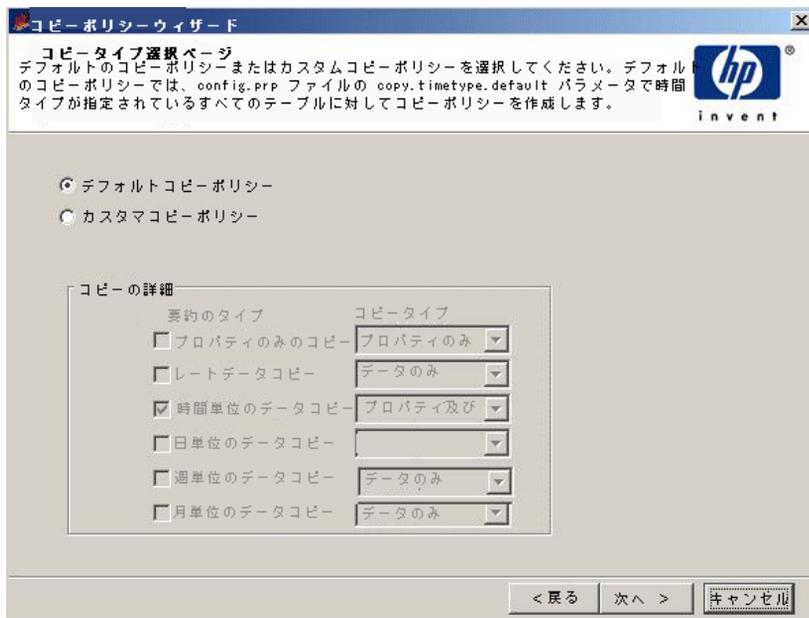
タスク 2: サテライトサーバーとデータテーブルを選択する

- 1 コンボボックスから、データのコピー元となるソースサテライトサーバーを選択します。データ転送のターゲットサーバーは、ログインしているセントラルサーバーです。
- 2 以下のいずれかを実行します。
 - すべてのテーブルを選択するには、[テーブルカテゴリ]をクリックして、コンボボックスからテーブルカテゴリを選択します。
 - 個々のテーブルを選択するには、[単一テーブル]をクリックして、コンボボックスからテーブルを選択します。
- 3 [次へ]をクリックします。

テーブルカテゴリを選択した場合は、[タスク 3](#)に進みます。それ以外の場合は、[タスク 4](#)に進みます。

タスク 3: テーブルカテゴリのためのコピーポリシー詳細を定義する

[コピータイプ選択] ウィンドウが開きます。



1 以下のいずれかを実行します。

- デフォルトの設定のままポリシーを作成する場合は、[**デフォルトコピーポリシー**] オプションを選択します。デフォルトのポリシーでは、時間単位のすべてのテーブルに対してプロパティテーブルとデータテーブルがコピーされます。

デフォルトの間隔(時間単位)は、以下の名前でも `$DPIPE_HOME/data/config.prp` ファイルに保存されています (DPIPE_HOME は、OVPI をインストールしたディレクトリです)。

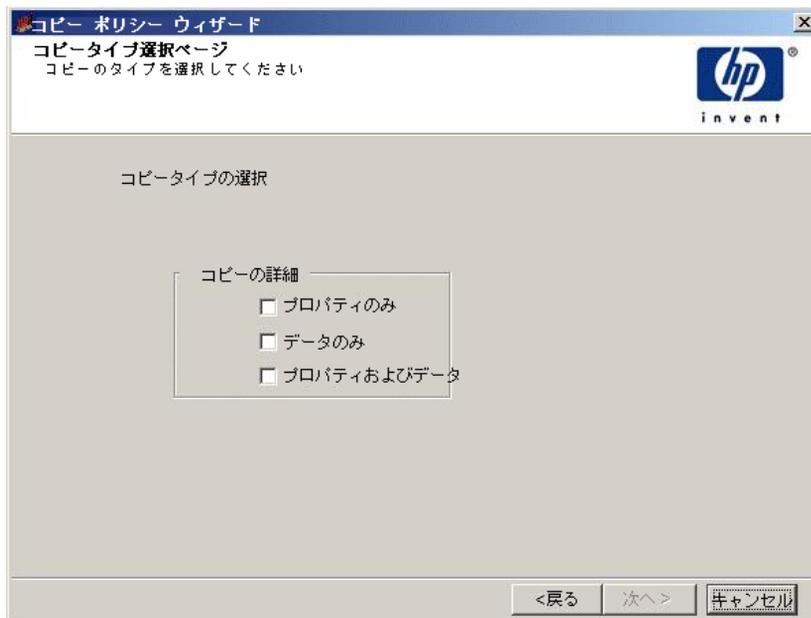
```
copy.timetype.default = hourly
```

- カスタマイズされたポリシーを作成する場合は [**カスタムコピーポリシー**] オプションを選択して、必要な集約タイプとそのコピータイプを選択します。

2 [**次へ**] をクリックし、**タスク 5** に進みます。

タスク 4: 単一のテーブルのためのコピーポリシー詳細を定義する

[コピータイプ選択] ウィンドウが開きます。



- 1 テーブルのコピータイプを選択します。
 - [プロパティのみ] オプションを選択した場合、プロパティテーブルとキーマップテーブルだけがセントラルサーバーにコピーされます。
 - [プロパティのみ] と [データのみ] の両方を選択できます。プロパティのみのコピーは頻繁に実行され、データのコピーはそれより長い間隔で実行されるので、このオプションはベーステーブルおよび時間単位のテーブルに最適です。
 - [プロパティおよびデータ] オプションは、テーブルの場合に通常選択される **trendcopy** 操作です。



trendcopy コマンドの詳細については、『HP OpenView Performance Insight Reference Guide』を参照してください。

- 2 [次へ] をクリックし、タスク 5 に進みます。

タスク 5: コピーポリシー情報を確認し、プロセスを完了する

- 1 [概要] ウィンドウに表示される情報を確認します。
- 2 以下のいずれかを実行します。
 - 情報が正しいかどうかを確認します。
 - 必要があれば、[戻る] をクリックして前のウィンドウに戻り、変更します。変更が完了したら、[次へ] をクリックして [概要] ウィンドウまで戻ります。
- 3 [終了] をクリックします。

コピーポリシーの編集

コピーポリシーを編集するには、以下を実行します。

- 1 [コピーポリシーマネージャ] ウィンドウから、変更するコピーポリシーをダブルクリックします。150 ページの「設定されているコピーポリシーの表示」を参照してください。
- 2 [コピータイプ] リストからコピータイプの値を変更できます。
- 3 データをセントラルサーバーにコピーしないのであれば、[有効] チェックボックスをオフにします。
デフォルトでは、[有効] チェックボックスはオンになっています。
- 4 [OK] をクリックします。



レポートパッケレベルまたはサテライトサーバーレベルではコピーポリシーは変更できません。ポリシーはすべて手動で編集する必要があります。

コピーポリシーの削除

コピーポリシーを作成するために、以下のオプションを使用できます。

テーブルカテゴリに関連付けられているすべてのコピーポリシーを削除するには、以下の手順に従います。

- 1 テーブルカテゴリに関連付けられているすべてのコピーポリシーを削除する場合は、ナビゲーションペインのビューを [テーブルのカテゴリビュー] に設定します。150 ページの「設定されているコピーポリシーの表示」を参照してください。

- 2 テーブルカテゴリ名を右クリックして、[コピーポリシーの削除]を選択します。
- 3 [はい]をクリックして、データベースからすべてのコピーポリシーを削除します。

サテライトサーバー上のすべてのコピーポリシーを削除するには、以下の手順に従います。

- 1 サテライトサーバー上のすべてのコピーポリシーを削除する場合は、ナビゲーションペインのビューを[サーバービュー]に設定します。150 ページの「設定されているコピーポリシーの表示」を参照してください。
- 2 サーバー名を右クリックして、[コピーポリシーの削除]を選択します。
- 3 [はい]をクリックして、データベースからすべてのコピーポリシーを削除します。

個々のコピーポリシーを削除するには、以下の手順に従います。

- 1 削除するコピーポリシーに応じて、ナビゲーションペインのビューを[サーバービュー]または[テーブルのカテゴリビュー]に設定します。150 ページの「設定されているコピーポリシーの表示」を参照してください。
- 2 削除するコピーポリシーを右クリックします。
- 3 [コピーポリシーの削除]を選択し、[OK]をクリックして、データベースからコピーポリシーを削除します。

8 ポーリングポリシーの管理

ポーリングポリシーマネージャでは、データを収集するポーリングポリシーのセットアップと変更、ノードのインポートと管理、ポーリンググループの管理を実行できます。また、プロパティテーブル内の値を更新することもできます。この章では、次の作業を説明します。

- 現在のポーリングポリシーの表示 (165 ページ)
- 新しい収集の作成 (167 ページ)
- 新しいポーリングポリシーの作成 (242 ページ)
- 既存のポーリングポリシーの編集 (247 ページ)
- 既存のポーリングポリシーの削除 (248 ページ)
- ノードのインポート (264 ページ)
- ポーリンググループの管理 (249 ページ)
- ノードの管理 (259 ページ)
- コミュニティ文字列プロファイルの管理 (268 ページ)
- SNMP プロファイルの管理 (270 ページ)
- データパイプのインストールの管理 (273 ページ)
- プロパティテーブルの値の変更 (276 ページ)

ポーリングポリシーを使用すると、適切なポーリングストラテジを採用すれば、最大限の効率でデータが収集されるようデータ収集を設定できます。ポーリングポリシーにはそれぞれ、その定義の中にポーリンググループが必要です。ポーリンググループはそれぞれ、ポーリング対象のノードやインスタンスなどの、デバイスのリストです。これらのポーリンググループを各種のストラテジを使用して定義でき、効率の最大化と管理の簡素化を実現できます。ポーリングストラテジでは、収集するデータのための適切なポーリング頻度を設定する必要もありません。

ポーリングストラテジ

ポーリングストラテジには以下のことを考慮する必要があります。

- ネットワーク内のノードをグループ化する最も効果的な方法
- 各グループをポーリングする必要の頻度

たとえば、すべてのルーターを 1 時間ごとにポーリングしたいとします。また、特定のデータセンターにあるすべてのデバイスを 1 日に 1 回ポーリングしたいとします。この場合、該当するデバイスを含む 2 つのグループを作成し（一部のデバイスは両方のグループに属する可能性があります）、グループ別にポーリング頻度を定義できます。



[パッケージマネージャ] を使用してデータパイプパッケージをインストールする際はポーリングストラテジが提供されますが、それらのストラテジは収集のニーズに合わせて変更することもできます。

たとえば、**Device Resource Cisco Router Datapipe** をインストールした場合は、15 分ごとに収集を行う 3 つのポーリングポリシーと、1 時間ごとに収集を行う 1 つのポーリングポリシーが設定され、これらのポリシーによって Cisco ルーターのグループから収集が行われます。しかし、15 分間隔ではなく 5 分間隔で収集を実行する必要があり、1 時間ごとの収集を 1 日に 1 回しか実行する必要がない場合は、デフォルトのポリシーを変更する必要があります。または、サテライトシステムごとに、一部の Cisco ルーターに対してのみ収集を実行することもできます。この場合はグループも変更する必要があります。

さらに、データパイプによっては指定インスタンスポーリングを設定できるものもあります。指定インスタンスポーリングでは、データ収集対象を一部のインタフェースだけに制限できます。詳細は、161 ページの「[指定インスタンスポーリング](#)」を参照してください。

ポーリンググループ

OVPI では、ポーリング対象のノードのグループを柔軟に定義できます。

ポーリングポリシーマネージャを使用して作成できるポーリンググループの種類を以下に示します。

- 機能別グループ

同じ機能を実行するすべてのデバイス（たとえばファイルサーバー）をグループ化できます。

- 使用可能情報別グループ

グループ内のすべてのノードから使用できる特定の情報に従ってノードグループを作成できます。

- 場所別グループ

大規模なネットワークでは、グループをそれらの物理的な場所に基づいて分割することが有効な場合があります。このようにすると、対象のノードが常に最も近くにあるポーリングシステムによってポーリングされます。

- ベンダー別グループ

同じタイプのデバイスが多数あるが、それらが異なるベンダーからのものである場合があります。ベンダー別にタイプのグループを作成できます。たとえば、ベンダー **A** のルーターに使用するタイプと、ベンダー **B** のルーターに使用するタイプとを別々にすることができます。

また、ベンダー機能グループを作成し、同じベンダーからのデバイスをそのタイプに関係なくすべて同じグループに含めることもできます。

- 優先順位別グループ

このグループは、より大きなグループをさらに分割する方法とみなすことができます。たとえば、大規模なネットワークでは、ルーターの数が数十から数百に及ぶことがあります。その場合に、ポーリング目的において中心的なルーターに注目する必要があるとします。そこで、全ルーターを含むルーターグループを作成し、そのサブセットにコアルーターというグループを作成し、中心的なルーターを含め、別々にポーリングすることができます。

ポーリングプロセス `ee_collect`、`mw_collect`、および `rmon_collect` は、ポーリング周期が始まるたびに、ポーリング対象のグループのメンバシップリストを読み取ります。グループに加えられた変更は、実際にデータがポーリングされている、ノードのリストに自動的に反映されます。



レポートパックを使用してデータパイプをインストールすると、グループの定義が追加されます。

ポーリング頻度

ポーリング要求で収集するデータのタイプと、データを収集する理由は、データのポーリング頻度を決定する際に影響します。たとえば、次のようになります。

- 変化が減多に発生しないシステム構成データや、徐々に変化するディスク使用率データは、1日に1回だけ収集すればよいでしょう。
- 時間帯によって特性が変化する動的なパフォーマンス統計情報は、正確に把握するには毎日何回も収集する必要があります。
- ポーリングの間隔の時間(分単位)は、データがその間隔の中でどの程度変化しうるかによって決定します。

このほか、ポーリング頻度の決定に影響する要因として、以下のものがあります。

- ポーリングの間隔が広すぎる場合に何らかの情報を見逃してしまう可能性があるかどうか
- ポーリングされる側とポーリングする側のシステムにかかる負荷(および、データ収集によってネットワークにかかる負荷。特に対象ノードがリモートサイトにある場合)
- データ格納用として使用できるデータベース領域の量

ポーリング頻度を10分から5分に変更すると、収集されるデータの量は2倍になります。通常、パフォーマンス統計情報は10分から15分ごとに収集しますが、RMONのホストやマトリックスなど比較的多量のデータは1時間ごとに収集します。

また、OVPIは、リアルタイム(現在起こっている問題を解決するための統計情報)を確認することを意図したものではありません。それを行うのはダッシュボードやリアルタイムアプリケーションの役割です。これらは、データを高い頻度(一般には秒単位)で収集し、最新のデータを表示し、新しいデータを入手した時点で(または短時間で)、前のデータを破棄します。これらのリアルタイムアプリケーションはトラブルシューティングが目的であり、必要な統計情報を少数のデバイスから収集します。OVPIのポーリングは、トラブルシューティングをサポートするためのベースラインを提供し、数時間、数日、および数週間にわたって頻繁に発生するパターンを特定することを目的としています。

指定インスタンスポーリング

特定のデバイスについて、その一部のコンポーネントをポーリングしたくない場合があります。この状況はインタフェースの場合によく起きます。

たとえば、**100** 個のインタフェースを持つスイッチがあり、それらインタフェースがすべて異なる PC またはサーバーに接続していると仮定します。標準の **SNMP** ポーリングでこれらすべてのインタフェースからデータを収集した場合は、各インタフェースから **1** 行のデータを収集することになるので、結果は **100** 行のデータになります。

多くの場合、各インタフェースについてそのすべてのデータが必要になることはありません。たとえば、個々の PC などの下位が知りたいというのではなく、親スイッチへの接続やサーバーとの接続のみが知りたいと仮定します。このような場合は、**100** 個の接続からたとえば **4** 個をポーリングするだけで済みます。指定インスタンスポーリングでは、データ収集対象を一部のインタフェースだけに制限できます。データ収集対象はルールまたは特定の規定のいずれかで識別されます。

指定インスタンスポーリングの利点は、すべてのインタフェースから収集されるデータが、ほとんど不要な場合に、一部のデータだけを収集することで、規模の大きいネットワークをも管理できることです。また、これによって収集の負荷とネットワークトラフィックが低減します。唯一の欠点は、すべてのインタフェースのデータを保持していないということです。指定インスタンスポーリングの採用を決定した時点で、一部のデータを不要と判断したということです。

Interface Reporting および **FrameRelay Service** レポートパックには以下のデータパイプがあり、これらを使用して指定インスタンスポーリングをセットアップできます。

- **ATM ifEntry** データパイプ：詳細は、『**ATM ifEntry Datapipe User Guide**』（英語）を参照してください。
- **Frame Relay CPE** データパイプ：詳細は、『**Frame Relay CPE Datapipe ユーザーガイド**』を参照してください。
- **Interface Reporting ifEntry** データパイプ：詳細は、『**Interface Reporting ifEntry Datapipe ユーザーガイド**』を参照してください。

ポーリングポリシーマネージャの起動

ポーリングポリシーマネージャを起動するには、以下の手順に従います。

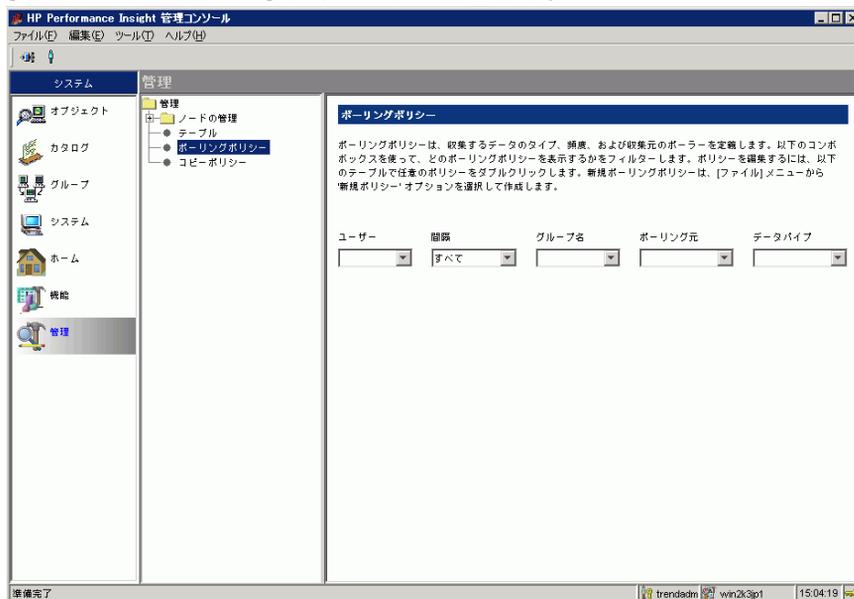
- 1 管理コンソールを起動します。詳細は、96 ページの「[管理コンソールの起動](#)」を参照してください。



管理コンソールには管理者権限を持つアカウントでログオンする必要があります。ユーザーアカウントの詳細は、516 ページの「[ユーザーアカウントの管理](#)」を参照してください。

- 2 ナビゲーションペインの [管理] アイコンをクリックします。[管理] スナップインが開きます。
- 3 [管理] スナップインにあるナビゲーションツリーで、**ポーリングポリシー** をクリックします。

[ポーリングポリシー] ウィンドウが開きます。



[ポーリングポリシー] ウィンドウには以下のペインがあります。

- **表示ペイン**: 表示ペインは、ウィンドウの右側にあります。

- **ナビゲーションペイン**。ナビゲーションペインはウィンドウの左側にあります。このペインには、現在表示しているデータベースのツリーが表示されます。ツリーはフォルダーで構成されており、各フォルダーにはページが含まれています。各ページの下に、さらに別のページ、またはフォルダーがある場合があります。

データベースの階層レベルは、**Windows** エクスプローラで **Windows** システムの内容を表示するときとまったく同様に展開できます。フォルダー を展開することで、そのフォルダー内のページやフォルダーを表示できます。また、階層レベルを折りたたむこともできます。

ナビゲーションフレームのツリーは、次のように操作します。

- フォルダーの内容をプレビューするには、プラス記号(+)をクリックします。
フォルダーの内容は表示フレームに表示されます。
- 展開されたフォルダーを縮小するには、マイナス記号(-)をクリックします。

表示機能

ポーリングポリシーマネージャプログラムは、情報の表示を変更できる機能を備えています。以下では各機能について説明します。それらの機能は、昇順または降順でのソート、列のサイズの変更、およびポリシーリストの更新です。

列のソート

列内の情報を昇順にソートするには、ソートする列の見出しの上にカーソルを置いてクリックします。同様に、列内の情報を降順にソートするには、ソートする列の見出しの上にカーソルを置き、**[Shift]** キーを押しながらクリックします。



テキストフィールドで昇順にソートすると、大文字の英字が先にアルファベット順に表示され、それから小文字の英字がアルファベット順に表示されます。また、テキストフィールド内の数値は、標準の **ASCII** ソート順である英数字順に表示されます。たとえば、**1、11、112、3、34、5** の順に表示されます。

列のサイズの変更

列のサイズを変更するには、以下の手順に従います。

- 1 列の右側の境界線上にカーソルを置きます。
両方向の矢印が表示されます。
- 2 マウスの左ボタンをクリックし、押したままにします。
- 3 列が希望の幅になるまで、矢印を左か右に移動します。
- 4 マウスの左ボタンを放します。

ポリシーリストの更新

ポーリングポリシーマネージャでは、表示ペイン内のポーリングポリシーのリストを更新できます。ポーリングポリシーマネージャでリストを更新すると、列が元の順序にソートされ、列のサイズが元のサイズに戻り、列の強調表示がなくなります。

表示ペインを更新するには、以下のいずれかを実行します。

-  をクリックします。
- [表示] メニューの [更新] を選択します。

項目の選択

以下のいずれかを実行してリスト内の項目を選択できます。

- 連続する行を選択するには、その最初の行を選択してから最後の行で **[Shift]** キーを押すか、またはマウスの左ボタンを押しながらスクロールします。
- 連続していない行を選択するには、選択する行ごとに **[Ctrl]** キーを押します。
- 場合によっては、単一の行をダブルクリックしてその特定の行を編集することができます。

上記の方法をいくつか組み合わせることで選択できます。

ポーリングポリシーの表示

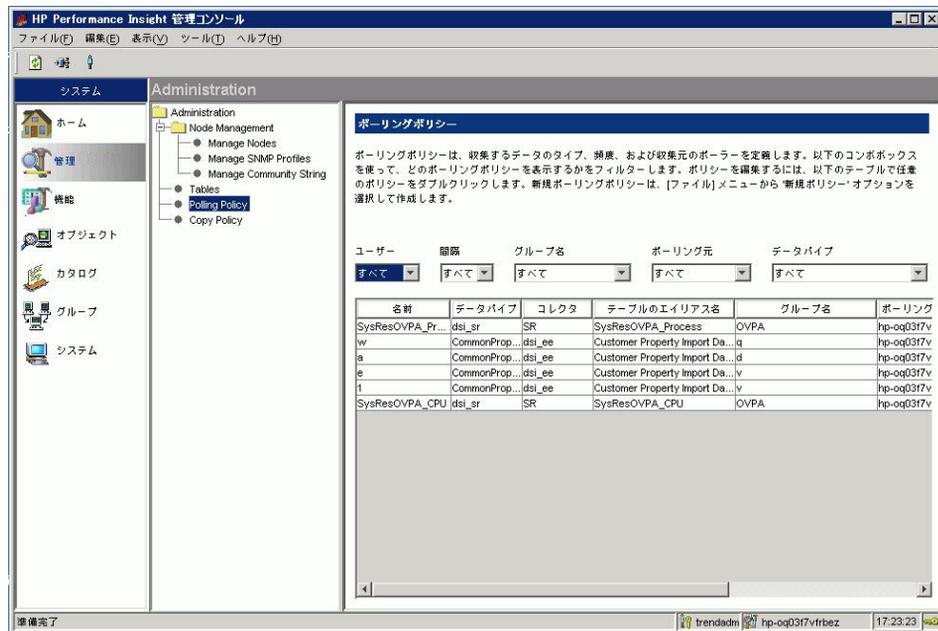
表示ペインにはさまざまなフィルターが含まれています。次のフィルターを使用して、利用可能なポーリングポリシーのサブセットだけを表示することができます。

- **【ユーザー】** ユーザー名でフィルタリングしたポーリングポリシーが表示されます。
- **【間隔】** ポーリング間隔でフィルタリングしたポーリングポリシーが表示されます。
- **【グループ名】** グループ名でフィルタリングしたポーリングポリシーが表示されます。
- **【ポーリング元】** ポーリングを実行しているマシンでフィルタリングしたポーリングポリシーが表示されます。
- **【データパイプ】** データパイプ名でフィルタリングしたポーリングポリシーが表示されます。

現在のポーリングポリシーの表示

現在のポーリングポリシーを表示するには、**【すべて】** ページをクリックします。

以下のポーリングポリシー情報が表示ペインに表示されます。



各列の項目は以下のとおりです。

- [名前] ポーリングポリシーの名前
- [データパイプ] データパイプの名前
- [コレクタ] OVPI の外部にあるソースからデータを収集するプログラムの名前
- [テーブルのエイリアス名] ユーザーに表示されるテーブルの名前
- [グループ名] ポーリングされるノードまたはインスタンスを含むグループの名前
- [ポーリング元] ポーリングを実行しているマシンの名前
- [サーバー] 対象サーバー名 (収集データを含んでいるサーバー)
- [間隔] ポーリング要求の時間間隔
- [ユーザー] ポーリングポリシーを作成したユーザーの名前
- [説明] ポーリングポリシーを説明したテキスト

収集の作成

[収集定義] ウィザードでは、ポーリングポリシー用の収集を作成できます。収集は、デバイスから収集したデータを格納するデータベース内のテーブルを識別します。以下のいずれかからのデータに基づく収集を定義できます。

- **MIB: 167** ページの「**MIB からの収集の作成**」を参照してください。
- **OpenView Performance Agent: 189** ページの「**OpenView パフォーマンスエージェントまたは OpenView Operations Agent からの収集の作成**」を参照してください。
- **CSV ファイル: 221** ページの「**CIV ファイルからの収集の作成**」を参照してください。
- **ユーザー定義: 232** ページの「**ユーザー定義の収集の作成**」を参照してください。

MIB からの収集の作成

MIB から収集を作成するには、以下の手順を実行します。

タスク 1: [新規収集] ウィザードを起動する

- 1 [管理コンソール] の [ファイル] メニューから [**収集の作成**] を選択します。

[収集ソースの選択] ウィンドウが開きます (図 12)。

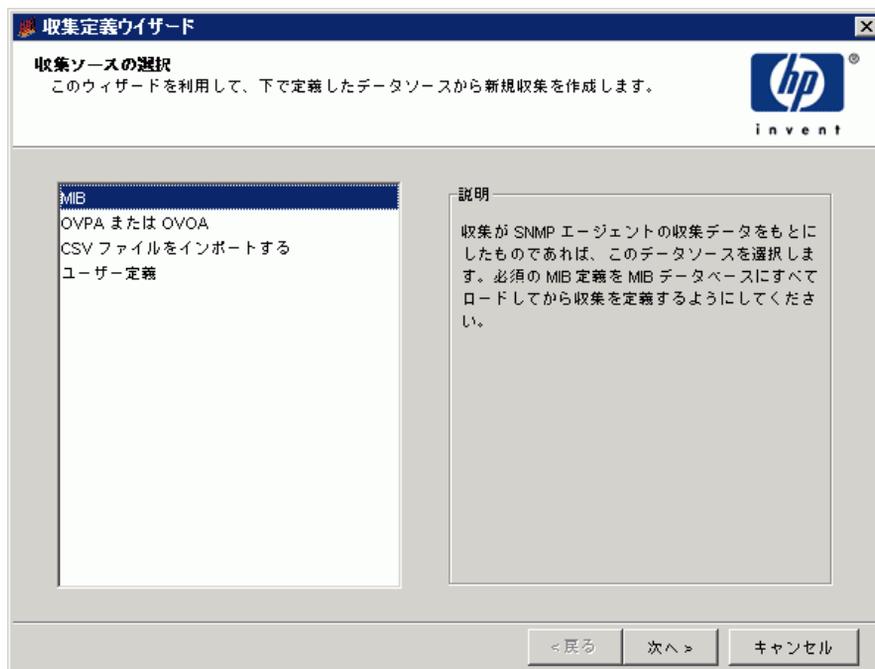


図 12 [収集ソースの選択] ウィンドウ

- 2 [MIB] を選択します。
- 3 [次へ] をクリックします。

タスク 2: 収集名、収集カテゴリ、および収集の説明を指定する

[収集の定義] ウィンドウが開きます (図 13)。

収集定義ウィザード

収集の定義

データベースのテーブルセットの作成に使われる収集名を入力します。名前の長さは 30 文字以内です。収集カテゴリは既存のリストから選択するか、収集をグループ化するために使用する新しい名前を入力します。255 文字以内で説明を入力することができます。

収集名:

収集カテゴリ: default

収集の説明:

<戻る 次へ> キャンセル

図 13 [収集の定義] ウィンドウ

- 1 [収集名] ボックスにデータテーブルの名前を入力します。この名前は OVPI のデータリポジトリに格納されます。



ウィザードは、提供するエイリアス名に基づいて名前をコレクションに割り当てます。

名前は一意でなければなりません。最大 255 文字までです。使用できるのは、大文字/小文字のアルファベット、数字、特殊文字のハイフン (-) とアンダースコア (_) です。

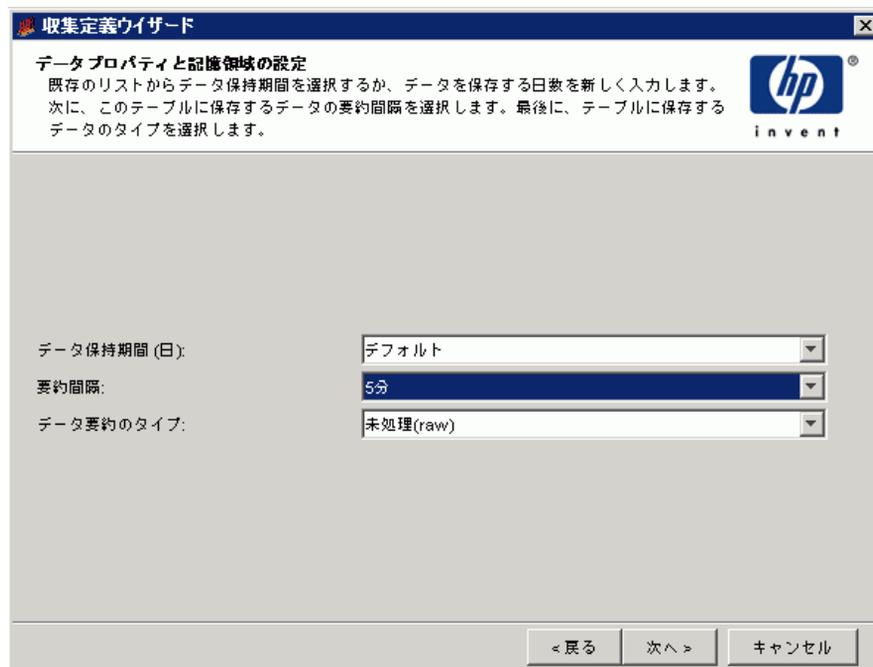
- 2 [収集カテゴリ] ボックスで、収集テーブルのカテゴリを入力または選択します。

カテゴリ名は、テーブルのセットをまとめてグループ化します。どの名前を選択するべきかを判断できない場合は、**[default]** を選択します。この名前は、最大 30 文字までです。

- 3 [収集の説明]ボックスに、テーブルの説明を入力します。説明は省略することも可能です。説明は、最大 255 文字までです。
- 4 [次へ]をクリックします。

タスク 3: 収集テーブルのデータのプロパティおよび保存期間を設定する

[データプロパティと記憶領域の設定] ウィンドウが開きます(図 14)。



The screenshot shows a window titled "収集定義ウィザード" (Collect Definition Wizard) with a sub-header "データプロパティと記憶領域の設定" (Data Properties and Storage Area Settings). The window contains three dropdown menus: "データ保持期間(日)" (Data Retention Period (Days)) set to "デフォルト" (Default), "要約間隔" (Summarization Interval) set to "5分" (5 minutes), and "データ要約のタイプ" (Data Summarization Type) set to "未処理(raw)" (Raw). The HP logo and "invent" text are visible in the top right corner. At the bottom, there are buttons for "< 戻る" (Back), "次へ >" (Next), and "キャンセル" (Cancel).

図 14 [データプロパティと記憶領域の設定] ウィンドウ

- 1 [データ保持期間(日)]ボックスで、テーブル内にデータを保持する日数を入力または選択します。
- 2 [要約間隔]ボックスで、テーブル内のデータの時間特性を選択します。たとえば、5分テーブルには5分間隔のデータが格納されます。この5分間隔で収集されたデータを割合データと呼びます。
- 3 [データ要約のタイプ]ボックスで、テーブルのタイプを選択します。

テーブルタイプは、テーブルに含まれているデータのクラスを指定するものです。テーブルタイプのオプションには、以下のものがあります。

- [レート]

テーブルには割合データが格納されます。割合データは、**raw** 入力データからの 1 対の行から算出される差分データです。

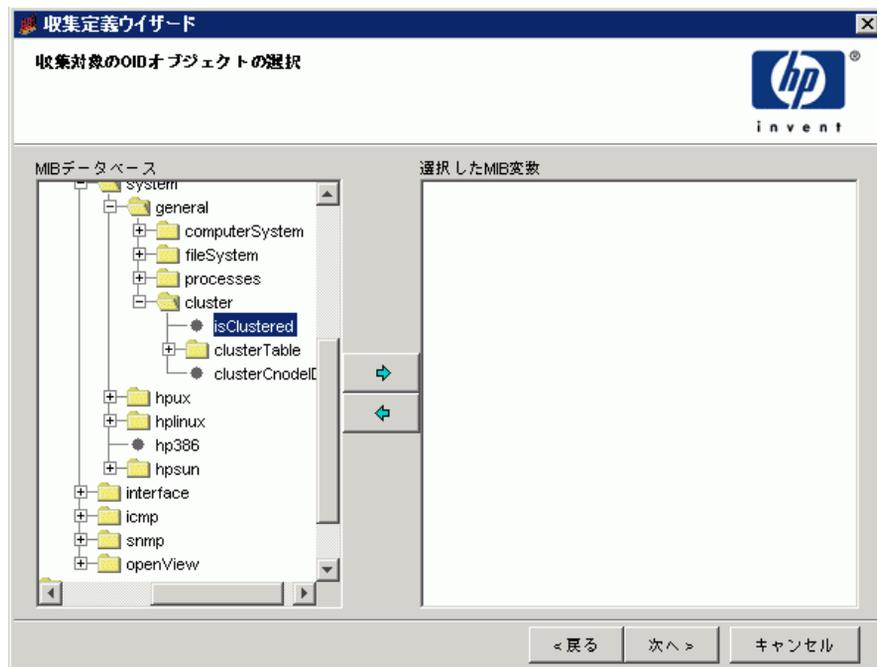
- [未処理 (raw)]

テーブルには **raw** (ポーリング時の) データが格納されます。

4 [次へ] をクリックします。

タスク 4: 収集用 OID オブジェクトを選択する

[収集対象の OID オブジェクトの選択] ウィンドウが開きます。



1 [MIB データベース] ボックスで、MIB のフォルダーを展開してオブジェクトを表示します。

2 [選択した MIB 変数] ボックスに追加するオブジェクトを選択します。選択した各オブジェクトは、テーブルの列になります。



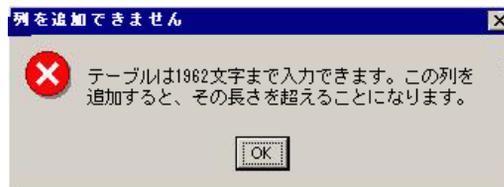
列は全部で 250 列まで作成できます。デフォルトで既に 13 列あるため、最大 237 列を追加できます。それを超えると、エラーメッセージが表示されます。

以下のいずれかを実行します。

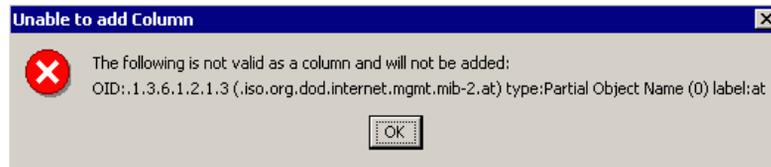
- [MIB データベース] ボックスでオブジェクトを 1 つ選択して、 をクリックします。
- 連続した複数のオブジェクトを選択するには、最初のオブジェクトを選択してから、[Shift] キーを押しながら最後のオブジェクトを選択し、 をクリックします。
- 連続していない複数のオブジェクトを選択するには [Ctrl] キーを押しながらオブジェクトを 1 つずつクリックしながら選択し、 をクリックします。

- 3 必要に応じて、[選択した MIB 変数] ボックスからオブジェクトを削除するには、上記手順のいずれかの方法を実行して、 をクリックします。

全体文字数の制限 (1,962 文字) を超えるオブジェクトを選択した場合、制限を超えるこのオブジェクトは [選択した MIB 変数] フィールドには追加されず、以下のメッセージが表示されます。



列として有効でないオブジェクト (フォルダーなど) を選択した場合、[Unable to add Column] というタイトルのエラーメッセージが表示されます。そのオブジェクトが一覧表示されますが、これらのオブジェクトは [選択した MIB 変数] リストには表示されません。



- 4 [次へ] をクリックします。

タスク 5: 詳細 SNMP プロパティを設定する

図 15 は、[拡張設定] ウィンドウを示しています。



図 15 [拡張設定] ウィンドウ

以下を設定できます。

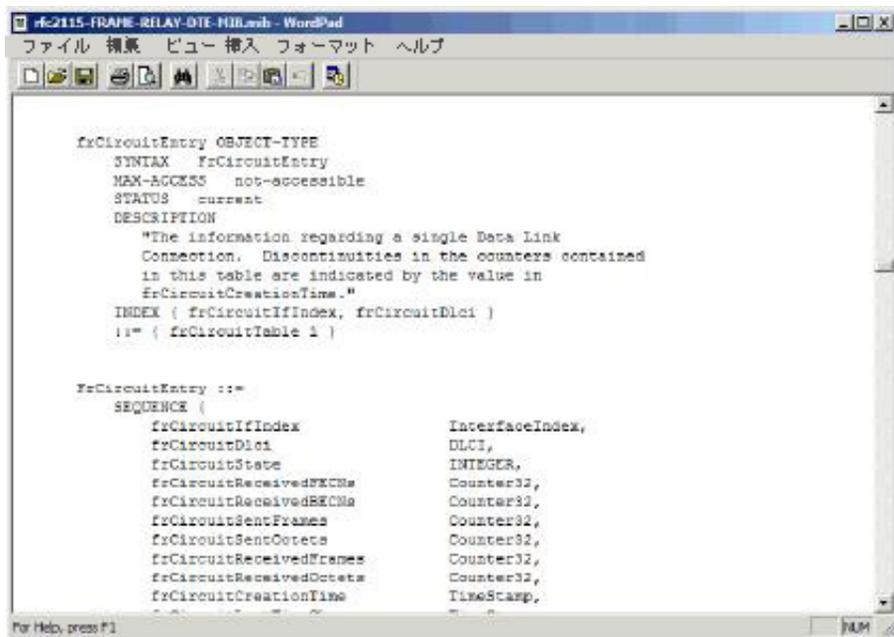
- **MIB インデックス : OID** にはテーブルとして定義されるものがあります。MIB インデックスを使うと、一意のキーを構成する OID または OID 値を特定することができます。
 - **高低カウンタペア** : より古い SNMP デバイスは、大きな値を持つカウンタフィールドを 2 つの 32 ビットフィールドに分割します。実際の値を得るには、これらのフィールドを組み合わせなければなりません。
- 1 必要に応じて、以下のいずれかを実行します。
 - [**編集**] をクリックして、MIB インデックスのフォーマットを定義します。詳細は、174 ページの「**MIB インデックスフォーマットの決定**」および 176 ページの「**MIB インデックスフォーマットの指定**」を参照してください。

- [設定] をクリックして 64 ビットカウンタを定義します。178 ページの「64 ビットカウンタの定義」を参照してください。
- 2 これらの機能を使用する必要がない場合は、[次へ] をクリックして 179 ページのタスク 6 を参照します。

MIB インデックスフォーマットの決定

以下の例は、rfc2115-FRAME-RELAY-DTE MIB の frCircuitTable グループにある frCircuitEntry オブジェクトの MIB インデックスフォーマットを決定するための方法を示しています。

- 1 MIB ファイルを開きます。エントリーを見つけて、そのインデックスが frCircuitIfIndex、frCircuitDlci であることを確認します。これを以下の図に示します。



```

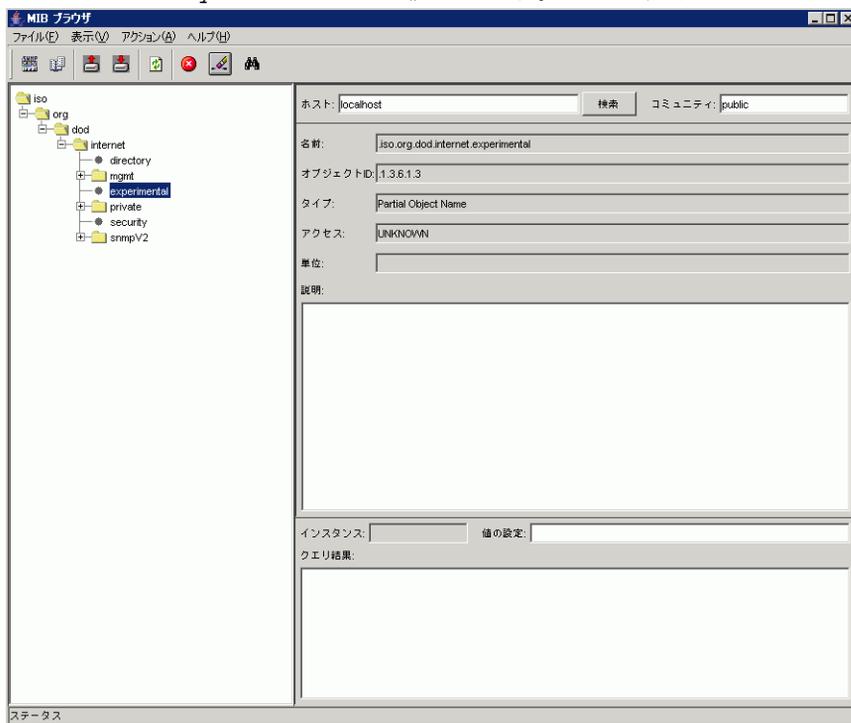
frCircuitEntry OBJECT-TYPE
    SYNTAX FrCircuitEntry
    MAX-ACCESS not-accessible
    STATUS current
    DESCRIPTION
        "The information regarding a single Data Link
        Connection. Discontinuities in the counters contained
        in this table are indicated by the value in
        frCircuitCreationTime."
    INDEX ( frCircuitIfIndex, frCircuitDlci )
    ::= { frCircuitTable 1 }

FrCircuitEntry ::=
    SEQUENCE (
        frCircuitIfIndex      InterfaceIndex,
        frCircuitDlci         DLCI,
        frCircuitState        INTEGER,
        frCircuitReceivedFECNs Counter32,
        frCircuitReceivedBECNs Counter32,
        frCircuitSentFrames   Counter32,
        frCircuitSentOctets   Counter32,
        frCircuitReceivedFrames Counter32,
        frCircuitReceivedOctets Counter32,
        frCircuitCreationTime TimeStamp,
    )
  
```

インデックスは、1つの整数値(frCircuitIfIndex)と、それに続くもう1つの整数値(frCircuitDlci)で構成されています。

MIB ブラウザで表示すると、インデックスは整数値を使用してフォーマットされ、ピリオドで区切られ、次に2番目の整数値が続いていることがわかります(たとえば、*n.n*)。

- 2 MIB ブラウザを使用して MIB を開き、frCircuitTable グループの frCircuitEntry オブジェクトに移動します。これを以下の図に示します。



オブジェクトを選択し **SNMP Get** 要求を実行すると、そのオブジェクトがポーリングされます。[クエリ結果]に、テーブル内の関連するすべてのオブジェクトのインスタンスと値が表示されます。たとえば、frCircuitIfIndex インスタンスの場合、MIB インデックスフォーマットは 1.1 です。これは、3 と 20 がそれぞれ単一の整数値だからです。frCircuitEntry オブジェクトの場合、176 ページの [手順 1](#) の MIB インデックスのボックスに 1.1 を入力できます。

176 ページの [手順 1](#) で MIB インデックスフォーマットを指定した場合、以下を実行する必要があります。

- 新しいプロパティテーブル列を作成します。テーブルにはインデックスコンポーネントと同じ名前を付けることをお勧めします ([タスク 7](#))。
- 正しいデータ型、および長さ (該当する場合) を設定します ([タスク 8](#))。
- 新しい各列をオブジェクト別変数および収集別変数として指定します ([タスク 8](#))。

- 列を指定した後、`dsi_table_key` のオブジェクト別と収集別のオプションをクリアします (タスク 8)。



上記の手順を実行しなければ、収集定義は機能しません。

MIB インデックスフォーマットの指定

この手順は省略可能です。OID にはテーブルとして定義されるものがあります。MIB インデックスを使うと、一意のキーを構成する OID または OID 値を特定することができます。

MIB インデックス値のフォーマットを指定するには、以下の手順に従います。

- 1 MIB インデックス値を入力するには、[拡張設定] ウィンドウ (図 15) で [編集] をクリックします。

[MIB インデックス値の入力] ウィンドウが開きます。

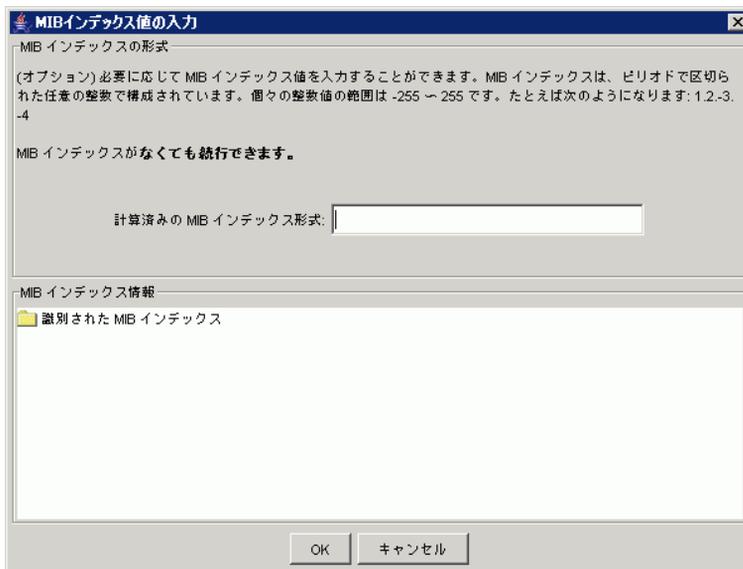


図 16 MIB インデックスの入力



MIB インデックスはテーブル化されたエントリーにのみ適用されます。テーブル化されていないエントリーはゼロのインデックスを持つことになります。

- 2 MIB インデックスフォーマットを入力します。ユーザー自身の MIB を参照してフォーマットを決めてください。

MIB インデックスフォーマットは次のように決定されます。

- 上の例では、MIB インデックスフォーマットは **1** になります。
- インデックスが **2** つある場合、MIB インデックスフォーマットは **1.1** になり、**2** つのインデックスがそれぞれ **1** つの整数であることを示します。
- **ifIndex** (整数)、**atIfIndex** (整数)、および **atNetAddress** (IP アドレス、キャラクタ文字列値) である **3** つのエントリーがあった場合、MIB インデックスフォーマットは **1.1maxstringlength** になります。

この場合、IP アドレスは **118.4.20.7** であるとしみます。このアドレスは **4** つの部分から成り、それぞれの部分が最大 **3** つの整数で構成され (合計文字列 **12**)、**3** つのピリオドで区切られているため、最大文字列長は **15** になります。このため、MIB インデックスフォーマットは **1.1.15** になります。



キャラクタ文字列の値の長さは最大 **255** 文字であることに注意してください。

3 [MIB インデックス値の入力] ウィンドウで **[OK]** をクリックします。

4 [詳細設定] ウィンドウで **[次へ]** をクリックして続行します。

テーブル化されていないエントリーがある場合、以下のようになります。

- 解析されていないインデックスが **dsi_table_key** に挿入されます。
- 複数のインデックスがある場合、連結されて小数で区切られます (たとえば、**1.2**)。

テーブル化されたエントリーに **MIB** インデックスを付けると、以下のようになります。

- **mw_collect** コマンドが、インデックスに関連付けられた各コンポーネントを、ユーザーが作成したプロパティテーブルの列に挿入します。
- **mw_collect** は、コンポーネントを挿入した後、各コンポーネントを取り上げて、アンダースコアで区切ってこれをテーブルキーに挿入します (たとえば、**1_2**)。

64ビットカウンタの定義

この手順は省略可能です。32ビットカウンタを使用している場合のみ、このタスクが必要です。64ビットカウンタの値全体を取得するには、高低カウンタのペアが必要です。2つの32ビットカウンタをAND演算することで、疑似64ビットカウンタを作成します。

- 1 64ビットカウンタを定義するには、[拡張設定]ウィンドウ(173ページの図15)で[設定]をクリックします。[高低カウンタペアの定義]ウィンドウが開きます。



- 2 各列からカウンタを選択し、[ペアの追加]をクリックします。
必要に応じて引き続きこの方法でペアを追加し、新しい収集テーブルに必要なカウンタをすべて定義します。
ウィザードでは適切なペアは決定されません。ペアにする高低ペアを把握しておく必要があります。
- 3 誤ってペアを追加した場合は、ペアを選択して[ペアの削除]をクリックします。
- 4 [高低カウンタペアの定義]ウィンドウの[OK]をクリックします。
- 5 [詳細設定]ウィンドウで[次へ]をクリックして続行します。

タスク 6: 列とエイリアス名を変更する

図 17 は、[列の変更] ウィンドウを示しています。



図 17 [列の変更] ウィンドウ

必要であれば、列とエイリアス名を変更することができます。

- 1 [列名] ボックスまたは [エイリアス] ボックスをクリックして、テキストを編集します。
- 2 [次へ] をクリックします。

タスク 7: データテーブルに関連付けるプロパティテーブルを指定する

[プロパティテーブルとの関連付け] ウィンドウが開きます。

- 1 以下のいずれかを実行します。
 - [新規プロパティテーブルの作成] を選択し、収集するデータを表す、プロパティテーブルの名前を指定します。最大 30 文字までの、一意な名前を入力できます。使用できる文字は、アルファベット、数字、アンダースコア (_) です。 180 ページのタスク 8 に進みます。
 - [既存のプロパティテーブルの再利用] を選択し、リストからプロパティテーブルを選択します。186 ページのタスク 9 に進みます。



既存のプロパティテーブルを再利用すると、そのテーブルにすでに格納されているデータが壊れてしまうことがあります。

- 2 [次へ] をクリックします。

タスク 8: プロパティ属性を定義する

既存の列を使用してプロパティテーブルを作成することも、さらに列を追加することもできます。

[プロパティ属性の定義] ウィンドウが開きます。

キー	FK	列	エイリアス	データタイプ	データ長
<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	dsi_target_n...	dsi_target_n...	snmp_char_...	64
<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	dsi_table_key	dsi_table_key	snmp_char_...	128
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	dsi_descr	dsi_descr	snmp_char_...	255

次のオプションがあります。

- プロパティテーブルへの列または外部キーを含む列の追加、および TEEL での列マップ指令のセットアップ
181 ページの「列の追加」および 184 ページの「外部キーを含む列の追加」を参照してください。
- 列の順序の変更
185 ページの「列の順序の変更」を参照してください。
- 列の削除
185 ページの「列の削除」を参照してください。
- 列の編集

185 ページの「列の編集」を参照してください。

列の追加

プロパティテーブルに列を追加するには、以下の手順に従います。

- 1 列を追加するには、[新しい属性] をクリックします。

[新しい属性] ダイアログボックスが開きます。



- 2 [名前] リストをクリックし、列の名前を選択します。デフォルトでは、選択した OID オブジェクトの名前が表示されます。
- 3 列のエイリアス名を [エイリアス] ボックスに入力します。
名前は最大 **255** 文字までで、次の文字を使用できます。アルファベット、数字、アンダースコア、ハイフンを使用できます。
- 4 [説明] ボックスに、テーブルの説明を入力します。
説明は省略することも可能です。説明は、最大 **255** 文字までです。
- 5 列のデフォルト値を設定する場合は、[デフォルト値] ボックスに値を入力します。
デフォルト値は省略可能です。値の長さは最大 **255** 文字までです。
このフィールドは、この列がオブジェクト別変数または収集キー変数である場合には、空欄にする必要があります。
- 6 [データタイプ] リストで、データタイプの値をクリックします。

以下に、使用可能なデータパイプのオプションと、対応するデータベース記憶領域タイプを示します。

OVPI データタイプ	データベースのデータタイプ
char_string	varchar
counter	float
counter_high	float
counter_low	float
counter64	float
double	float
enum	integer
float	float
gauge	float
hex_string	varchar
integer	float
ip_address	varchar(15)
numeric	numeric
object_id	varchar(128)
octet_string	varchar(128)
seq_key	integer
smalldatetime	smalldatetime
snm_float	float
snmp_char_string	varchar
snmp_counter	float
snmp_double	float
snmp_enum	integer
snmp_float	float
snmp_gauge	float
snmp_hex_string	varchar

snmp_integer	float
snmp_ip_address	varchar(15)
snmp_object_id	varchar(128)
snmp_octet_string	varchar(128)
snmp_snm_float	float
snmp_timeticks	float
timeticks	float
tinyint	tinyint
unix_time	datetime

- 7 [データ長] リストで長さの値をクリックします。

長さの値が有効なデータタイプは、`char_string`、`hex_string`、`numeric`、`octet_string`、`snmp_char_string`、`snmp_hex_string`、`snmp_octet_string`です。

- 8 [Can contain NULL data] ボックスをオンまたはオフにします。

このオプションをオンにした場合は、この列は `NULL` の可能性があります。**[Is an identifying attribute]** ボックスがオンになっていると、このオプションは自動的にオフになります。

- 9 [Is an identifying attribute] ボックスは、列をキー変数とする場合にオンにします。

このオプションをオンにした場合は、その列が、プロパティテーブル内の、要素を定義するプロパティの、一意な組み合わせに含まれていることとなります。この場合は、**[Is an identifying attribute]** ボックスはオンにせず、[デフォルト値] ボックスに値が指定されていないようにします。

キー変数として `[dsi_target_name]` 以外の列を指定した場合は、キー変数として `dsi_table_key` を指定できません。ただし、キー変数の最初のものとして `dsi_target_name` を指定した場合にのみ、キー変数として `dsi_table_key` を指定できます。

キー変数の順序で列を配置する必要があります。たとえば、リスト内の最初の列は 1 番目のキー変数に対応させ、2 番目の列は 2 番目のキー変数に対応させ、以下同様に列をキー変数に対応させます。プロパティテーブル内での列の順序を変更する場合は、185 ページの「[列の順序の変更](#)」を参照してください。

10 **[Apply]** をクリックします。

プロパティテーブルに列が追加されます。

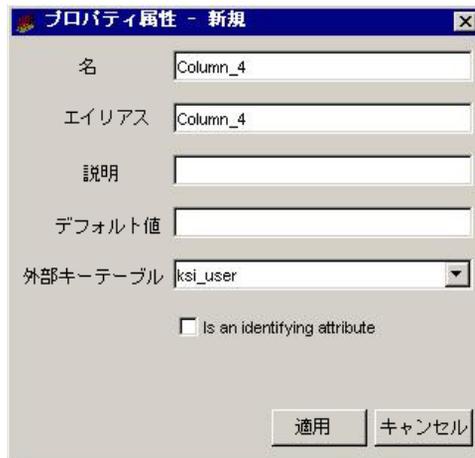
11 手順を繰り返して列を追加するか、**[次へ]** をクリックして続行します。

外部キーを含む列の追加

外部キーを含む列の追加するには、以下の手順に従います。

1 列を追加するには、**[新規外部キー]** をクリックします。

[新規外部キー] ダイアログボックスが開きます。



2 **[名]** ボックスに、列の名前を入力します。

列の名前は最大 **30** 文字までで、次の文字を使用できます。アルファベット、数字、アンダースコアを使用できます。

3 列のエイリアス名を **[エイリアス]** ボックスに入力します。

名前は最大 **255** 文字までで、次の文字を使用できます。アルファベット、数字、アンダースコア、ハイフンを使用できます。

4 **[説明]** ボックスに、テーブルの説明を入力します。

説明は省略することも可能です。説明は、最大 **255** 文字までです。

5 列のデフォルト値を設定する場合は、**[デフォルト値]** ボックスに値を入力します。

デフォルト値は省略可能です。値の長さは最大 **255** 文字までです。

このフィールドは、この列がオブジェクトキー変数または収集キー変数である場合には、空欄にする必要があります。

- 6 [外部キーテーブル] リストをクリックし、キーを含むプロパティテーブルを選択します。
- 7 **[Is an identifying attribute]** ボックスは、列をキー変数とする場合にオンにします。

収集キー変数として [dsi_target_name] 以外の列を指定した場合は、収集キー変数として dsi_table_key を指定できません。ただし、収集キー変数の最初のものとして dsi_target_name を指定した場合にのみ、収集キー変数として dsi_table_key を指定できます。

キー変数の順序で列を配置する必要があります。たとえば、リスト内の最初の列は 1 番目のキー変数に対応させ、2 番目の列は 2 番目のキー変数に対応させ、以下同様に列をキー変数に対応させます。プロパティテーブル内での列の順序を変更する場合は、185 ページの「[列の順序の変更](#)」を参照してください。

- 8 **[適用]** をクリックします。
プロパティテーブルに列が追加されます。
- 9 手順を繰り返して列を追加するか、**[次へ]** をクリックして続行します。

列の順序の変更

プロパティテーブル内での列の順序を変更する場合は、変更したい列を選択して以下を実行します。

- 列を上へ移動するには、**[上へ移動]** をクリックします。
- 列を下へ移動するには、**[下へ移動]** をクリックします。

列の削除

プロパティテーブルから列を削除するには、**[削除]** をクリックします。

列の編集

列を編集するには、以下の手順に従います。

- 1 **[プロパティ属性の定義]** ウィンドウで列をダブルクリックします。

[プロパティ属性の編集] ダイアログボックスが開きます。これは、[新しいプロパティ属性] ダイアログボックスまたは [プロパティ属性の新しい外部キー] ダイアログボックスと同じです。

- 2 変更を行います。
- 3 [適用] をクリックします。

手順を繰り返すか、[次へ] をクリックして続行します。

タスク 9: 収集の出力ファイルを指定する

[出力ファイルの選択] ページが開きます (図 18)。

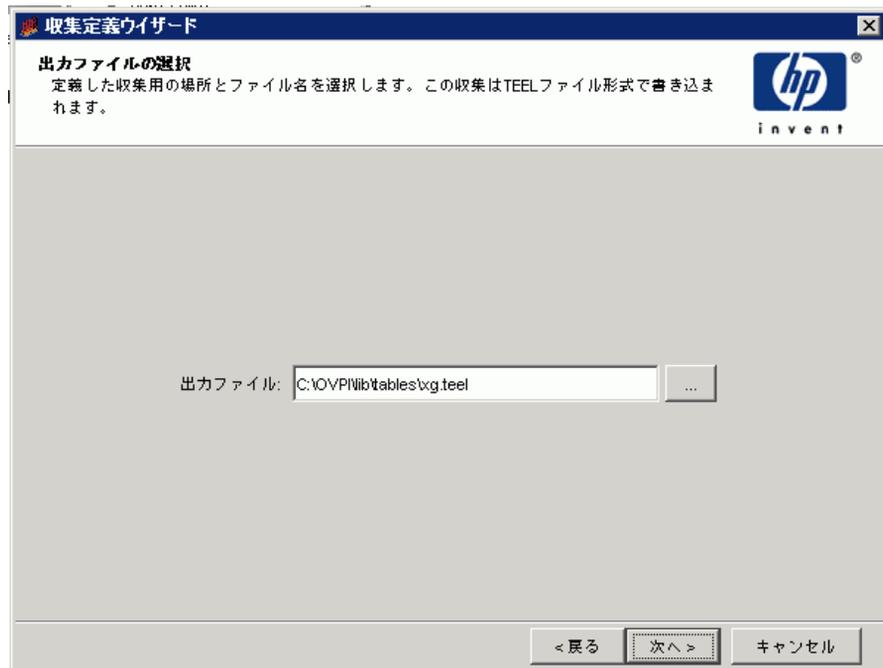


図 18 [出力ファイルの選択] ウィンドウ

- 1 出力ファイルの名前と場所が正しいことを確認します。
- 2 ファイルの名前または場所を変更する場合は、以下のいずれかを実行します。
 - [出力ファイル] ボックスに新しい情報を入力します。
 -  をクリックします。[開く] ダイアログボックスが開きます。

ファイルの場所に移動してそのファイルをダブルクリックし、[開く]をクリックします。[出力ファイル]ボックスが、新しいファイル情報で更新されます。

3 [次へ]をクリックします。

タスク 10: 収集をデータベースに登録する

[データベースへの収集の追加] ウィンドウが開きます (図 19)。

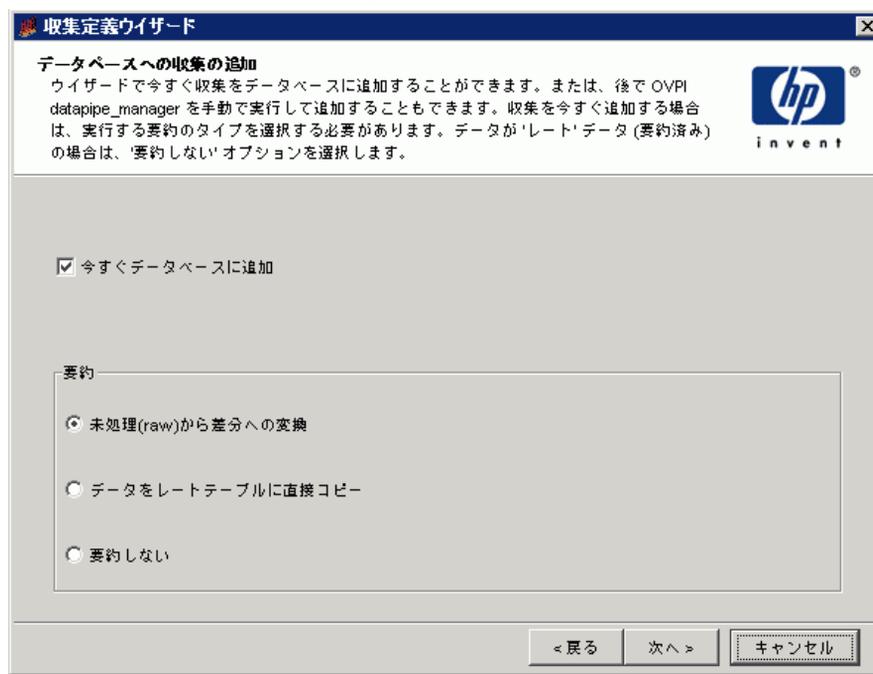


図 19 [データベースへの収集の追加] ウィンドウ

1 すぐにテーブルを生成してデータベースに追加する場合は、[今すぐデータベースに追加]を選択します。

このオプションをオフにした場合は、後からコマンド行で以下のコマンドを入力する必要があります。

```
datapipe_manager -p create -a teal_file
```

この例で、*teal_file* は、の出力ファイルの名前です。

datapipe_manager コマンドのオプションに関する情報がさらに必要な場合は、『HP OpenView Performance Insight TEEL Reference Guide』および『HP OpenView Performance Insight Reference Guide』を参照してください。

- 2 [要約] ボックスで、[データをレートテーブルに直接コピー] または [要約しない] を選択します。



さらに、時間単位または週単位の要約が必要なら、ロールアップファイル (.sum ファイル) を作成し、trend_sum コマンドを使って作成したファイルを実行する必要があります。trend_sum コマンドの詳細については、『HP OpenView Performance Insight Reference Guide』を参照してください。

- 3 [次へ] をクリックします。

タスク 11: [サマリー] ページを確認する

[サマリー] ダイアログボックスが開きます (図 20)。



図 20 [サマリー] ウィンドウ

- 1 すべての収集プロパティ値が正しいことを確認します。
必要であれば、**[戻る]**をクリックして前のページに戻り、変更します。変更が完了したら、**[次へ]**をクリックして[サマリー]ページまで戻ります。
- 2 **[完成]**をクリックするとデータテーブルが作成されます。
データテーブル作成ウィザードが閉じ、**TEEL** ファイルが作成され、指定した場所に保存されます。
- 3 収集用のポーリングポリシーを作成します。詳細は、**242** ページの「**ポーリングポリシーの作成**」を参照してください。

OpenView パフォーマンスエージェントまたは OpenView Operations Agent からの収集の作成

この章では、以下の項目について説明します。

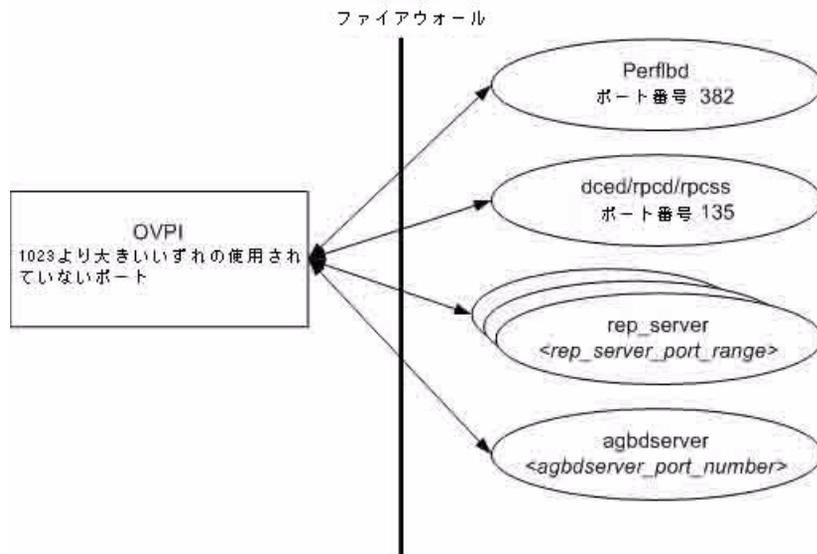
- ファイアウォール環境での通信
- **HTTPS** アクセスを伴うエージェントからのデータの収集(144 ページ)
- 行ベースでのデータ変換のための **Perl** スクリプトの作成(137 ページ)

ファイアウォール環境での通信

このセクションでは、ファイアウォールを越える **OVPI** とパフォーマンスエージェント間の通信を許可するために実行する手順について説明します。

パフォーマンスエージェント 3.x ポートの構成

ファイアウォールを越える OVPI とパフォーマンスエージェント 3.x 間の基本的な通信モデルを、次の図に示します。



パフォーマンスエージェントシステムで agdbserver サービスおよび rep_server サービス用のポート設定を構成するには、管理者権限のあるアカウントでログインし、次の手順を実行します。

- 1 次の場所にある services ファイルを探します。
 - UNIX:/etc
 - Windows:%windir%\system32\drivers\etc
- 2 テキストエディタでファイルを開き、次のパラメータをファイルの末尾に追加します。

```
agdbserver <port_number>/tcp
```

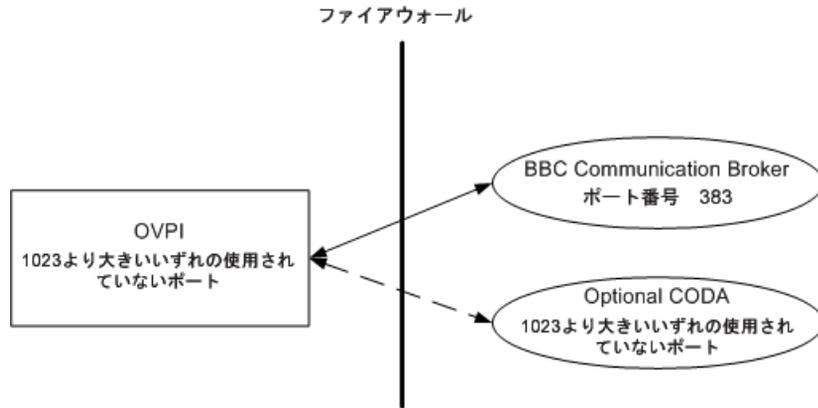
```
rep_server <port_number>/tcp
```

perflbd.rc ファイルに構成されたデータソースが複数ある場合、最初の rep_server が指定のポート番号を使用します。それ以外の rep_server サービスは、前のサービスで使用したポート番号に 1 を加えた番号を使用します。

- 3 ファイルを保存します。
- 4 エージェントサービスを再起動します。

パフォーマンスエージェント 4.x ポートの構成

ファイアウォールを越える OVPI とパフォーマンスエージェント 4.x 間の基本的な通信モデルを、次の図に示します。



CODA はデフォルトで、BBC Communication Broker が使用するポート 383 に加え、未使用の任意のポートを使用します。パフォーマンスエージェントシステムで、選択したポート番号を CODA に割り当てるには、管理者権限のあるアカウントでログオンし、コマンドプロンプトで次のコマンドを実行します。

```
ovconfchg -ns coda.comm -set SERVER_PORT <port_number>
```

```
ovc -restart
```

単一ポート通信を有効にするには、BBC Communication Broker が使用するポートを共有するように CODA のポート設定を構成します。この構成を行うには、コマンドプロンプトで次のコマンドを入力します。

```
ovconfchg -ns coda.comm -set SERVER_BIND_ADDR localhost
```

```
ovc -restart
```

OpenView パフォーマンスエージェントまたは OpenView Operations Agent からの収集の作成

OpenView Performance Agent (OVPA) から、または OpenView Operations Agent (OVOA) の組み込み型パフォーマンスコンポーネント (EPC) から収集したいメトリックを識別する収集を作成できます。これらのエージェントは、システムの稼動状態の監視に使用されるシステムのパフォーマンスデータの収集、要約、タイムスタンプ、およびロギングを行います。



収集を作成する前に、エージェントをインストールしたシステムを見つける必要があります。エージェントシステムを検出および指定するための最良の方法は、**SR_OVPA** データパイプおよび **OVPA_Collection_Datapipe** をインストールすることです。『**System Resource OVPA Datapipe Release Statement**』を参照してください。これは、**System Resources** レポートパックのインストール時に提供されます。

`pa_discovery` コマンドは、OVPI システム上で OpenView パフォーマンスエージェント (OVPA) または OpenView Operations Agent (OVOA) を見つけるためのユーティリティです。`pa_discovery` コマンドの詳細については、『**HP OpenView Performance Insight Reference Guide**』を参照してください。

`pa_discovery` を通してデータを集めた後、次のスクリプトを実行する必要があります。

```
trend_proc -f {DPIPE_HOME}/scripts/SR_OVPA_Daily.pro
```

収集の作成には、ポーリングポリシーマネージャアプリケーションを使用します。

フロントエンドのみの UNIX マシンでは、**trendadm** ユーザーがないため、**OVPI** 固有の環境変数は作成されません。フロントエンドのみのマシンで **OVPA** データソースから収集 **TEEL** ファイルを作成する場合、以下のライブラリ検索パス環境変数を手動で設定する必要があります (存在していない場合)。

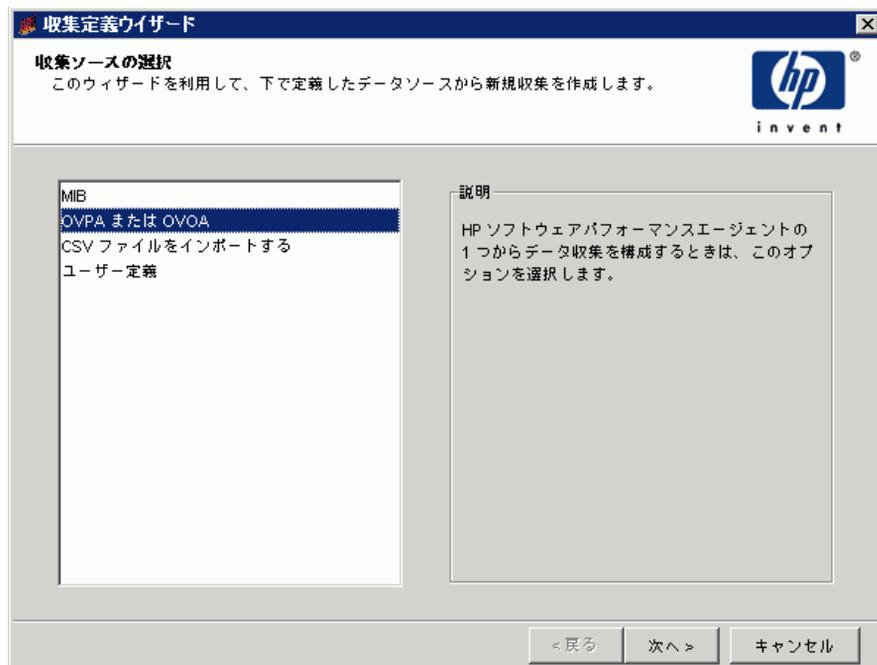
オペレーティングシステム	環境変数	必要なパス
HPUX	SHLIB_PATH	/opt/OV/lib および \$DPIPE_HOME/lib
Linux および Solaris	LD_LIBRARY_PATH	/opt/OV/lib および \$DPIPE_HOME/lib
Windows	PATH	C:\Program Files\HP OpenView\bin および %DPIPE_HOME%\bin

収集を作成するには、以下の手順を実行します。

タスク 1: 収集定義ウィザードを起動する

- 1 管理コンソールで **[管理]** スナップインをクリックします。**[管理]** ナビゲーションウィンドウが開きます。
- 2 ナビゲーションツリーから **[ポーリングポリシー]** を選択します。
- 3 メニューバーの **[ファイル]** をクリックして、**[収集の作成]** を選択します。

[収集ソースの選択] ウィンドウが開きます。



- 4 [OVPA または OVOA] を選択します。
- 5 [次へ] をクリックします。

タスク 2: 収集名、収集カテゴリ、および収集の説明を指定する

[収集の定義] ウィンドウが開きます。

収集定義ウィザード

収集の定義

データベースのテーブルセットの作成に使われる収集名を入力します。名前の長さは 30 文字以内です。収集カテゴリは既存のリストから選択するか、収集をグループ化するために使用する新しい名前を入力します。255 文字以内で説明を入力することができます。

収集名:

収集カテゴリ: default

収集の説明:

<戻る 次へ> キャンセル

- 1 [収集名] ボックスにデータテーブルの名前を入力します。この名前は OVPI のデータリポジトリに格納されます。



ウィザードは、提供するエイリアス名に基づいて名前をコレクションに割り当てます。

名前は一意でなければなりません。最大 255 文字までです。使用できるのは、大文字/小文字のアルファベット、数字、特殊文字のハイフン (-) とアンダースコア (_) です。

- 2 [収集カテゴリ] ボックスで、収集テーブルのカテゴリを入力または選択します。

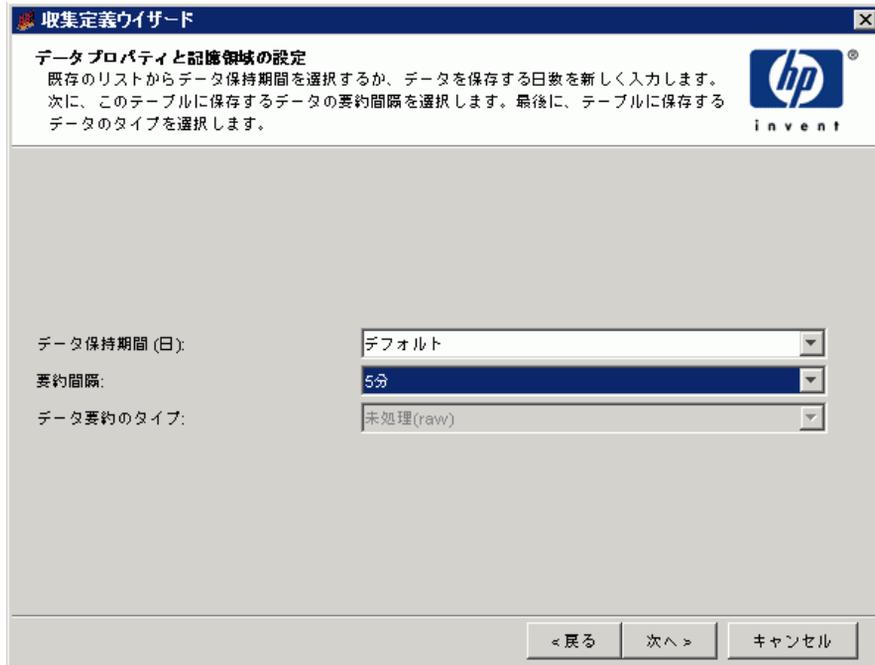
カテゴリ名は、テーブルのセットをまとめてグループ化します。どの名前を選択するべきかを判断できない場合は、**[default]** を選択します。この名前は、最大 30 文字までです。

- 3 [収集の説明] ボックスに、テーブルの説明を入力します。説明は省略することも可能です。説明は、最大 255 文字までです。

4 [次へ] をクリックします。

タスク 3: 収集テーブルのデータのプロパティおよび保存期間を設定する

[データプロパティと記憶領域の設定] ウィンドウが開きます。



- 1 [データ保持期間(日)] ボックスで、テーブル内にデータを保持する日数を入力または選択します。
- 2 [要約間隔] ボックスで、テーブル内のデータの時間特性を選択します。たとえば、5分テーブルには5分間隔のデータが格納されます。この5分間隔で収集されたデータを割合データと呼びます。



OVPA または OVOA の収集を定義する場合、使用できるデータタイプは raw だけです。

- 3 [データ要約のタイプ] ボックスでテーブルのタイプを選択します。

テーブルタイプは、テーブルに含まれているデータのクラスを指定するものです。テーブルタイプのオプションには、以下のものがあります。

- [レート]

テーブルには割合データが格納されます。割合データは、**raw** 入力データからの 1 対の行から算出される差分データです。

- **[未処理 (raw)]**

テーブルには **raw** (ポーリング時の) データが格納されます。

4 **[次へ]** をクリックします。

タスク 4: **メトリックを取得するためのホストを選択する**

[ホストの選択] ウィンドウが開きます。

1 以下のいずれかを実行することで、エージェントがインストールされているホストを選択します。

- **[既知のエージェント]** ボックスでホストを選択します。

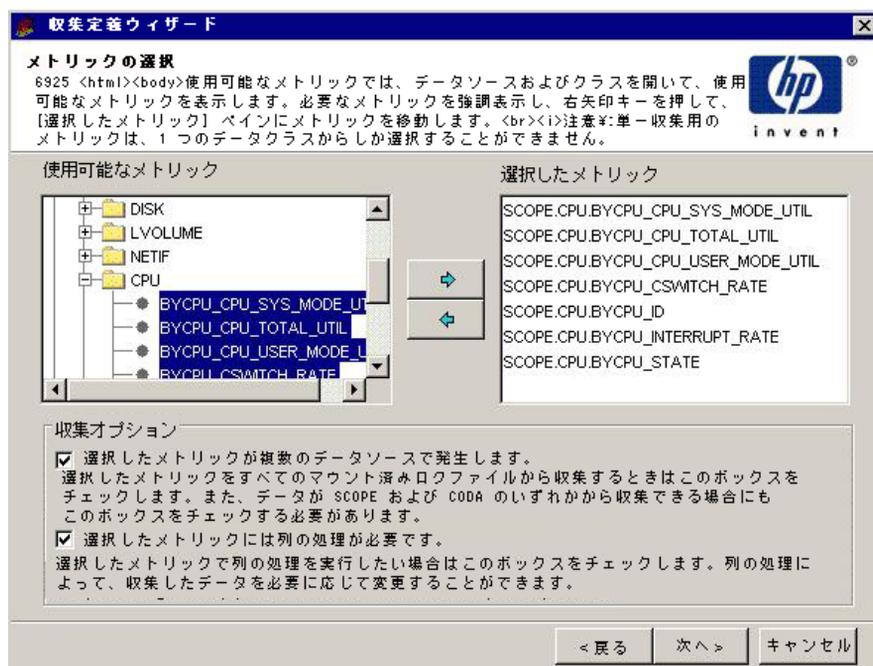
- [ホスト名]ボックスにエージェントがインストールされているシステムのホスト名を入力して、[検索]をクリックします。

▶ 既知のエージェントは K_padatatasources プロパティテーブルにあります。このテーブルは SR_OVPA および OVPA_Collection のデータパイプによって提供される SQL スクリプトによって値が設定されます。

2 [次へ]をクリックします。

タスク 5: 収集に使用するメトリックを選択します。

[メトリックの選択] ウィンドウが開きます。



- 1 [使用可能なメトリック]ボックスのメトリックのリストを展開します。
- 2 以下のいずれかを実行します。

- [使用可能なメトリック]ボックスでメトリックを1つ選択して、 をクリックします。

- 連続した複数のオブジェクトを選択するには、最初のオブジェクトを選択してから、**[Shift]** キーを押しながら最後のオブジェクトを選択し、

 をクリックします。

- 連続していない複数のオブジェクトを選択するには **[Ctrl]** キーを押しながらオブジェクトを 1 つずつクリックしながら選択し、 をクリックします。

3 以下のオプションのいずれかまたは両方を実行します。

□ 以下のいずれかが当てはまる場合は **[選択したメトリックが複数のデータソースで発生します]** チェックボックスをオンにします。

- 収集するデータが複数のエージェントデータソースにまたがる。
- **[Selected Metrics]** ウィンドウで選択したメトリックのデータが、すべてのマウントされたエージェントデータログファイルから集められる。
- データが **SCOPE** または **CODA** データソースから収集される。

[収集定義にデータソースを含めます] ウィンドウが開きます。

図 21 [収集定義にデータソースを含めます] ウィンドウ



- 選択されたメトリックに対して行処理を実行したい場合は、[**選択したメトリックには列の処理が必要です**] チェックボックスを選択します。行処理は、収集されたデータを要件にあわせて変更するのに役立ちます。

[列の処理] ウィンドウが表示されます。

図 22 [列の処理] ウィンドウ



- 4 [次へ] をクリックして、以下のいずれかを実行します。
 - 手順 3 で [**選択したメトリックが複数のデータソースで発生します**] チェックボックスをオンにした場合は、Perl スクリプトを使用してデータ変換の手順を完了しなければなりません。タスク 6 に進みます。
 - 手順 3 で [**選択したメトリックが複数のデータソースで発生します**] チェックボックスをオンにしていない場合は、タスク 7 に進みます。

タスク 6: 行ベースでデータ変換のための Perl スクリプトを作成する

別のシステムにインポートされたエージェントメトリック

エージェントシステム上で収集されたデータは、定期的に元のシステムから抽出され、異なるシステムの別のエージェントにインポートされます。これにより、元のシステムのパフォーマンスに影響を与えずにメトリックデータをクエリし、分析を実行することができます。このため、複数のシステムからデータを収集する場合、元のシステムを一意に識別する唯一の方法は、メトリックタブルのデータソース識別子を使用することです。

Delta_Time 値として INTERVAL メトリックを使用

一部の **DSI** データソースおよび標準的なすべての **PROCESS** メトリックは、データの性質上、要約が使用可能なエージェントには保存されません。**OVPI** はこのデータを取得し、**raw** から **delta** への変換処理を実行できなければなりません。**delta** への変換処理が正しいことを確かめるために、データには有効な **delta_time** 列が含まれていなければなりません。通常、エージェントでは、この情報は **INTERVAL** メトリック内に格納されます。このため、子コレクタでは、エージェントで作成された **INTERVAL** のメトリックを使用して、エージェント収集時に **delta_time** として使用できなければなりません。

dpipe_pa は以下のシナリオに限り、メトリックを自動的にロギングします。

- データソースが **SCOPE** であり、収集されるデータのメトリッククラスが **PROCESS** または **CONFIGURATION** いずれかの場合。
- データソースが **SCOPE** であり、要約間隔が **0** の場合、このクラスの **INTERVAL** メトリックがロギングされます。
- データソースが **CODA** であり、要約間隔が **0** の場合、**CODA** グローバルクラスの **GBL_INTERVAL** メトリックがロギングされます。

以下のシナリオでは、データ変換が有効です。

要約されないメトリックに対する raw から delta への変換処理

要約されないメトリックでは、**raw** から **delta** への変換処理を実行する場合、エージェントから収集した 2 組のメトリック間に差分時間が必要になります。行処理用の Perl スクリプトを使用することで、収集したメトリックから差分時間値を生成できます。

非標準記録日のサポート

カスタム DSI データソースでは独自のフォーマットでデータを格納しておくことができ、このデータをエージェントシステムに追加して、以降のレポート作成に使用することができます。データが追加されると、各レコードに対応するタイムスタンプはそのレコードが作成されたときの時間値ではなくなり、そのレコードがエージェントシステムに追加されたときのタイムスタンプになります。このため、無効に歪曲したデータとなり、OVPI 内でデータが正しく表示されないこととなります。このため、**dpipe_pa** コレクタはエージェントからのタイムスタンプだけを使用するのではなく、メトリックデータから **ta_period** を作成できなければなりません。これに対処できるようにするため、コレクタは **Row Process2** 指令をサポートし、残りの列に対して実行される式の結果と同じように **ta_period** 列を設定できなければなりません。

行ベースでのデータ変換のための Perl 式を作成するには、次の手順を実行します。

- 1 収集にエージェントのデータソース名を取り込む場合は、[収集定義にデータソースを含めます] ウィンドウのチェックボックスをオンにします。データソース名が一意的識別子となります。
- 2 [次へ] をクリックします。
図 22 [列の処理] ウィンドウが表示されます。
- 3 コンボボックスからメトリックを選択して、[式を作成] をクリックします。

[式エディタ] ウィンドウが開きます。



[式エディタ] ウィンドウに以下の情報が表示されます。

- [統計値] 収集内で選択したメトリック
- [式] Perl 式を作成するための編集ペイン
- [機能] 一般的に使用される Perl 関数のリスト

- 4 [機能] リストから必要な Perl 関数を選択して、[選択] をクリックします。Perl 関数が式ペインに表示されます。必要に応じて、式を編集します。

row process 指令を使用して収集を作成した場合、データパイプ名は dsi_tablename になります。

GUI によって生成された Perl スクリプトでは、OVPI の内部テーブル構造の詳細が考慮されます。自分自身で Perl スクリプトを作成する場合は、OVPI の内部構造の詳細を把握している必要があります。

たとえば、Perl スクリプトは以下のようになります。

```
sub processRecord {  
    $record = shift(@_);
```

```

$separator = ' ';
$Offset = 9;
#setting array
@MyCols = split( /$separator/, $record );
#setting variables
$BYCPU_CPU_CLOCK = $MyCols[$Offset + 0];

#writing expressions
$BYCPU_CPU_CLOCK_new = length( $BYCPU_CPU_CLOCK );

#putting all back to array
$MyCols[$Offset + 0] = $BYCPU_CPU_CLOCK_new;

#constructing resulting record
$record_new = $MyCols[0];
for($count = 1; $count <= $#MyCols; $count++) {
    $record_new =
$record_new.$separator.$MyCols[$count];
}

if(length($record_new) <= (length($record) * 3)) {
    return $record_new;
};
return $record;
}

```

5 **[検証]** をクリックして、Perl 式の構文をチェックします。

- 構文が正しければ、確認メッセージボックスで **[OK]** をクリックして、[列の処理] ウィンドウに戻ります。テーブルに式がリストされます。

式が作成されているメトリックが [式] リストに表示されます。[編集] および [削除] オプションを使用して、式を更新または削除します。

- 構文が間違っている場合は、メッセージボックスで **[OK]** をクリックして、式エディタに戻ります。以下のいずれかを実行します。
 - 式を変更して、構文を修正します。式を再度検証します。
 - **[クリア]** をクリックして、スクリプトを削除します。その後、式を再度作成するために、**手順 4** と **手順 5** を繰り返します。

6 他のメトリックについて Perl 式を作成するために、**手順 3** ~ **手順 5** を繰り返します。

7 **[次へ]** をクリックし、**タスク 7** に進みます。



収集定義ウィザードを使用しなくても、Perl スクリプトを手動で作成して、データを処理することができます。スクリプトを作成する場合は、下記のガイドラインに従ってください。

- Perl スクリプトで関数を定義します。関数名は processRecord とします。名前は大文字と小文字を区別します。
- 対応する TEEL ファイルのデータパイプ名は一意でなければなりません。
- Perl スクリプトを保存します。
- RowProcees2=<Perl スクリプトのフルパス > 指令を TEEL ファイルに保存します。

デフォルトでは、TEEL ファイルおよび Perl スクリプトは OVPI_HOME/lib/tables ディレクトリに保存されます。

タスク 7: データテーブルに関連付けるプロパティテーブルを指定する

[プロパティテーブルとの関連付け] ウィンドウが開きます。

1 以下のいずれかを実行します。

- **[新規プロパティテーブルの作成]** を選択し、収集するデータを表す、プロパティテーブルの名前を指定します。最大 30 文字までの、一意な名前を入力できます。使用できる文字は、アルファベット、数字、アンダースコア (_) です。206 ページの **タスク 8** に進みます。

- [既存のプロパティテーブルの再利用] を選択し、リストからプロパティテーブルを選択します。212 ページのタスク 9 に進みます。



既存のプロパティテーブルを再利用すると、そのテーブルにすでに格納されているデータが壊れてしまうことがあります。

2 [次へ] をクリックします。

タスク 8: プロパティ属性を定義する

既存の列を使用してプロパティテーブルを作成することも、さらに列を追加することもできます。

[プロパティ属性の定義] ウィンドウが開きます。

キー	FK	列	エイリアス	データタイプ	データ長
<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	dsi_target_n...	dsi_target_n...	snmp_char_...	64
<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	dsi_table_key	dsi_table_key	snmp_char_...	128
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	dsi_descr	dsi_descr	snmp_char_...	255

次のオプションがあります。

- プロパティテーブルへの列または外部キーを含む列の追加、および TEEL での列マップ指令のセットアップ
207 ページの「列の追加」 および 210 ページの「外部キーを含む列の追加」を参照してください。

- 列の順序の変更
211 ページの「[列の順序の変更](#)」を参照してください。
- 列の削除
212 ページの「[列の削除](#)」を参照してください。
- 列の編集
212 ページの「[列の編集](#)」を参照してください。

列の追加

プロパティテーブルに列を追加するには、以下の手順に従います。

- 1 列を追加するには、[**新しい属性**] をクリックします。

[新しい属性] ダイアログボックスが開きます。

- 2 [名前] リストをクリックし、列の名前を選択します。デフォルトでは、選択した **OID** オブジェクトの名前が表示されます。
- 3 列のエイリアス名を [エイリアス] ボックスに入力します。
名前は最大 **255** 文字までで、次の文字を使用できます。アルファベット、数字、アンダースコア、ハイフンを使用できます。
- 4 [説明] ボックスに、テーブルの説明を入力します。
説明は省略することも可能です。説明は、最大 **255** 文字までです。

- 5 列のデフォルト値を設定する場合は、[デフォルト値]ボックスに値を入力します。

デフォルト値は省略可能です。値の長さは最大 **255** 文字までです。

このフィールドは、この列がオブジェクト別変数または収集キー変数である場合には、空欄にする必要があります。

- 6 [データタイプ]リストで、データタイプの値をクリックします。

以下に、使用可能なデータパイプのオプションと、対応するデータベース記憶領域タイプを示します。

OVPI データタイプ	データベースのデータタイプ
char_string	varchar
counter	float
counter_high	float
counter_low	float
counter64	float
double	float
enum	integer
float	float
gauge	float
hex_string	varchar
integer	float
ip_address	varchar(15)
numeric	numeric
object_id	varchar(128)
octet_string	varchar(128)
seq_key	integer
smalldatetime	smalldatetime
snm_float	float
snmp_char_string	varchar

snmp_counter	float
snmp_double	float
snmp_enum	integer
snmp_float	float
snmp_gauge	float
snmp_hex_string	varchar
snmp_integer	float
snmp_ip_address	varchar(15)
snmp_object_id	varchar(128)
snmp_octet_string	varchar(128)
snmp_snm_float	float
snmp_timeticks	float
timeticks	float
tinyint	tinyint
unix_time	datetime

- 7 [データ長] リストで長さの値をクリックします。

長さの値が有効なデータタイプは、`char_string`、`hex_string`、`numeric`、`octet_string`、`snmp_char_string`、`snmp_hex_string`、`snmp_octet_string`です。

- 8 [Can contain NULL data] ボックスをオンまたはオフにします。

このオプションをオンにした場合は、この列は `NULL` の可能性があります。**[Is an identifying attribute]** ボックスがオンになっていると、このオプションは自動的にオフになります。

- 9 **[Is an identifying attribute]** ボックスは、列をキー変数とする場合にオンにします。

このオプションをオンにした場合は、その列が、プロパティテーブル内の、要素を定義するプロパティの、一意な組み合わせに含まれていることとなります。この場合は、**[Is an identifying attribute]** ボックスはオンにせず、[デフォルト値] ボックスに値が指定されていないようにします。

収集キー変数として [dsi_target_name] 以外の列を指定した場合は、収集キー変数として dsi_table_key を指定できません。ただし、収集キー変数の最初のものとして dsi_target_name を指定した場合にのみ、収集キー変数として dsi_table_key を指定できます。

キー変数の順序で列を配置する必要があります。たとえば、リスト内の最初の列は 1 番目のキー変数に対応させ、2 番目の列は 2 番目のキー変数に対応させ、以下同様に列をキー変数に対応させます。プロパティテーブル内での列の順序を変更する場合は、[列の順序の変更](#)を参照してください。

- 10 **[Apply]** をクリックします。

プロパティテーブルに列が追加されます。

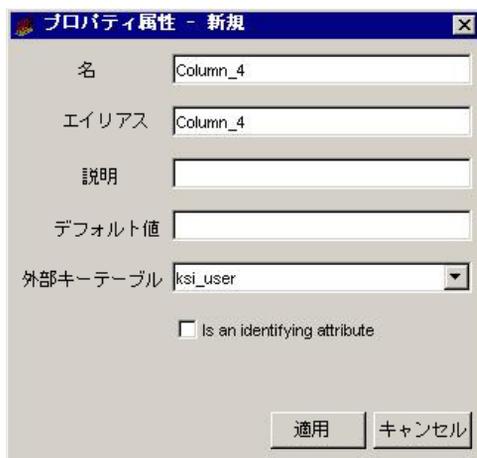
- 11 手順を繰り返して列を追加するか、**[次へ]** をクリックして続行します。

外部キーを含む列の追加

外部キーを含む列の追加するには、以下の手順に従います。

- 1 列を追加するには、**[新規外部キー]** をクリックします。

[プロパティ属性 - 新規] ダイアログボックスが開きます。



- 2 [名] ボックスに、列の名前を入力します。

列の名前は最大 30 文字までで、次の文字を使用できます。アルファベット、数字、アンダースコアを使用できます。

- 3 列のエイリアス名を [エイリアス] ボックスに入力します。

名前は最大 **255** 文字までで、次の文字を使用できます。アルファベット、数字、アンダースコア、ハイフンを使用できます。

- 4 [説明] ボックスに、テーブルの説明を入力します。

説明は省略することも可能です。説明は、最大 **255** 文字までです。

- 5 列のデフォルト値を設定する場合は、[デフォルト値] ボックスに値を入力します。

デフォルト値は省略可能です。値の長さは最大 **255** 文字までです。

このフィールドは、この列がオブジェクト別変数または収集キー変数である場合には、空欄にする必要があります。

- 6 [外部キーテーブル] リストをクリックし、キーを含むプロパティテーブルを選択します。

- 7 **[Is an identifying attribute]** ボックスは、列をキー変数とする場合にオンにします。

収集キー変数として [dsi_target_name] 以外の列を指定した場合は、収集キー変数として dsi_table_key を指定できません。ただし、収集キー変数の最初のものとして dsi_target_name を指定した場合にのみ、収集キー変数として dsi_table_key を指定できます。

キー変数の順序で列を配置する必要があります。たとえば、リスト内の最初の列は 1 番目のキー変数に対応させ、2 番目の列は 2 番目のキー変数に対応させ、以下同様に列をキー変数に対応させます。プロパティテーブル内での列の順序を変更する場合は、[列の順序の変更](#)を参照してください。

- 8 **[適用]** をクリックします。

プロパティテーブルに列が追加されます。

- 9 手順を繰り返して列を追加するか、**[次へ]** をクリックして続行します。

列の順序の変更

プロパティテーブル内での列の順序を変更する場合は、変更したい列を選択して以下を実行します。

- 列を上へ移動するには、**[上へ移動]** をクリックします。
- 列を下へ移動するには、**[下へ移動]** をクリックします。

列の削除

プロパティテーブルから列を削除するには、[削除]をクリックします。

列の編集

列を編集するには、以下の手順に従います。

- 1 [プロパティ属性の定義] ウィンドウで列をダブルクリックします。
[プロパティ属性の編集] ダイアログボックスが開きます。これは、[新しいプロパティ属性] ダイアログボックスまたは [プロパティ属性の新しい外部キー] ダイアログボックスと同じです。
- 2 変更を行います。
- 3 [適用] をクリックします。
- 4 手順を繰り返すか、[次へ] をクリックして続行します。

タスク 9: 収集の出力ファイルを指定する

[出力ファイルの選択] ウィンドウが開きます。



- 1 出力ファイルの名前と場所が正しいことを確認します。

- 2 ファイルの名前または場所を変更する場合は、以下のいずれかを実行します。
 - [出力ファイル] ボックスに新しい情報を入力します。
 -  をクリックします。[開く] ダイアログボックスが開きます。
出力ファイルを保存するフォルダーに移動し、[ファイル名] ボックスにファイル名を入力し、[開く] をクリックします。[出力ファイル] ボックスが、新しいファイル情報で更新されます。
- 3 [次へ] をクリックします。

タスク 10: 収集をデータベースに登録する

[データベースへの収集の追加] ウィンドウが開きます。



- 1 すぐにテーブルを生成してデータベースに追加する場合は、[今すぐデータベースに追加] を選択します。

このオプションをオフにした場合は、後からコマンド行で以下のコマンドを入力する必要があります。

```
datapipe_manager -p create -a teal_file
```

この例で、*teel_file* は、の出力ファイルの名前です。

datapipe_manager コマンドのオプションに関する情報がさらに必要な場合は、『HP OpenView Performance Insight TEEL Reference Guide』および『HP OpenView Performance Insight Reference Guide』を参照してください。

- 2 [要約] ボックスで、[データをレートテーブルに直接コピー] または [要約しない] を選択します。



OVPA 収集では、**raw** から **delta** への変換処理は実行できません。

さらに、時間単位または週単位の要約が必要ななら、ロールアップファイル (.sum ファイル) を作成し、**trend_sum** コマンドを使って作成したファイルを実行する必要があります。**trend_sum** コマンドの詳細については、『HP OpenView Performance Insight Reference Guide』を参照してください。

- 3 [次へ] をクリックします。

タスク 11: [サマリー] ウィンドウを確認する

[サマリー] ダイアログボックスが開きます。

- 1 すべての収集プロパティ値が正しいことを確認します。

必要があれば、[戻る] をクリックして前のウィンドウに戻り、変更します。変更が完了したら、[次へ] をクリックして [概要ページ] ウィンドウまで戻ります。

- 2 [完了] をクリックするとデータテーブルが作成されます。

データテーブル作成ウィザードが閉じ、Perl スクリプトと TEEL ファイルが作成され、指定した場所に保存されます。

HTTPS アクセスを伴うエージェントからのデータの収集

この章では、以下の項目について説明します。

- 215 ページの「はじめに」
- 215 ページの「データ収集の前提条件」
- 216 ページの「証明書の管理」

はじめに

OVPI バージョン 5.30 では、安全な通信を実現するために、HTTPS プロトコルを使用する HP OpenView Performance Agents (OVPA) および HP OpenView Operations Agents (OVOA) からのデータの収集をサポートしています。

▶ 本書では、特にエージェント名を限定する必要がない限り、HP OpenView Performance Agents (OVPA) と HP OpenView Operations Agents (OVOA) をまとめて**エージェント**と呼びます。

HTTPS 通信の場合、エージェントは CODA バージョン 10 をサポートしていなければなりません。それ以外の場合は、HTTP または DCP の手法が使用されます。HTTPS 通信は証明書をベースとするため、エージェントからデータを収集する OVPI システム (リモートポラーも含む) に証明書がインストールされている必要があります。OVPI は、エージェントにあらかじめインストールされているクライアント証明書を使用します。OVPI システムがクライアント証明書の役割を果たし、OVO 管理サーバーまたは OVPA エージェントシステムによって証明書サーバー (認証機関) が提供されます。HTTPS 通信を確立するために、クライアント証明書の交換が要求されます。

HTTPS 通信については、『HP OpenView Operations HTTPS Agent Concepts and Configuration Guide』を参照してください。このガイドは、HP OpenView Operations ドキュメントセットとともに、以下の URL に提供されています。

http://ovweb.external.hp.com/lpe/doc_serv/

ネットワーク構成によっては、複数の証明書サーバーがエージェントに証明書を提供していることがあります。この例では、すべての認証サーバーから各エージェントに対して信頼できる証明書を取得できます。このためには、OVPI 管理コンソールで提供されている証明書管理アプリケーションを使用できます。詳細は 216 ページの「**証明書の管理**」を参照してください。

▶ OVPA システムの [codal] ネームスペースで SSL_SECURITY オプションが [ALL] または [REMOTE] に設定されている場合、HTTP 通信は失敗します。HTTPS のみがサポートされます。

データ収集の前提条件

- OVPI が監視しているネットワークで HTTPS 通信が有効になっていなければなりません。

- エージェントからデータをポーリングする **OVPI** システムに証明書がインストールされていなければなりません。証明書のインストールの詳細は、218 ページの「**証明書のインストール**」を参照してください。
- 証明書サーバーの名前を **OVPI** 管理者が把握していなければなりません。管理者は証明書を管理する際に、証明書サーバー名の提示が求められます。
- **OVPI_installation_directory/data/pa_rpt.cnfg** 設定ファイルを更新する必要があります。テキストエディタを使用してファイルを開き、**https** オプションを有効にします。これで、**OVPA** システムからのデータ収集が可能になります。**HTTPS** 通信が失敗した場合、**HTTP** が使用されます。これはデフォルトの **CODA** 動作です。

証明書の管理

証明書管理アプリケーションを使用することで、エージェントからデータを収集する **OVPI** システムで証明書のインストールおよび管理を実行できます。

この章では、以下の項目について説明します。

証明書管理アプリケーションの起動

証明書管理アプリケーションは、**OVPI 管理コンソール**または**コマンド行**から起動できます。



証明書管理アプリケーションは、リモートポーターまたは **OVPI** のデータベーススキーマおよびパフォーマンスマネージャの各コンポーネントがインストールされている場合に限り、管理コンソール上で使用できます。

OVPI 管理コンソール

証明書管理アプリケーションを起動するには、次の手順を実行します。

- 1 **OVPI 管理コンソール**を起動します。



管理コンソールには管理者権限を持つアカウントでログオンする必要があります。

- 2 [ツール] メニューの [**証明書の管理 UI**] を選択します。

[証明書管理] ウィンドウ (217 ページの  23) が開きます。



Windows システムを使用している場合、証明書管理アプリケーションは **Windows** の [スタート] メニューから起動できます。

コマンド行

オペレーティングシステムによって以下のいずれかを実行します。

- **Windows**

コマンド行で以下を入力します。

certmgmt

- **UNIX**

trendadm としてログオンし、コマンド行で以下を実行します。

certmgmt

[証明書管理] ウィンドウ (217 ページの [図 23](#)) が開きます。

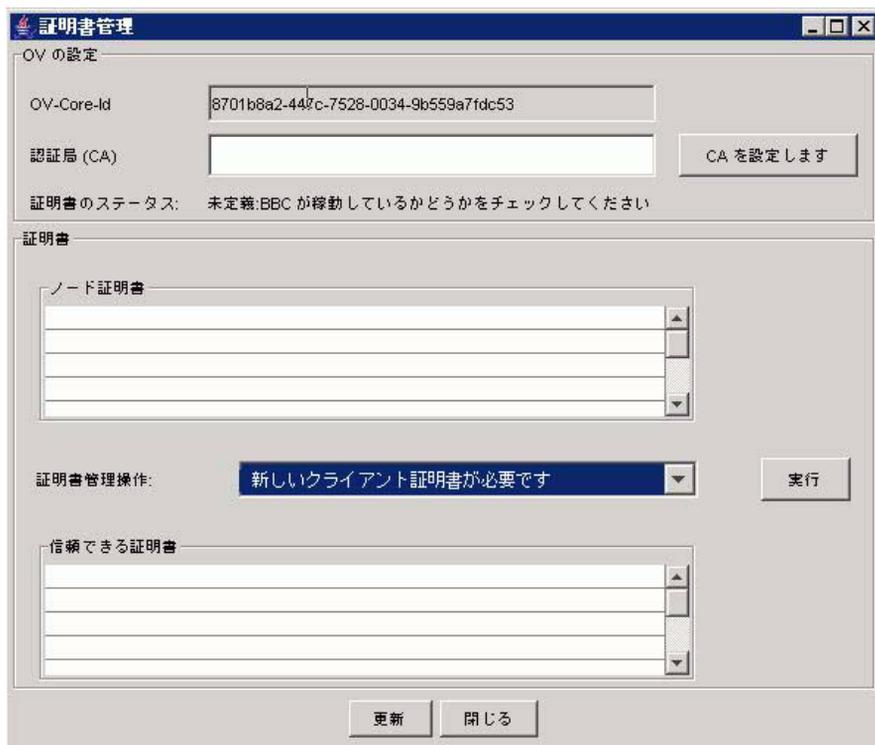


図 23 [証明書管理] ウィンドウ

[証明書管理] ウィンドウに表示される情報は以下のとおりです。

[OV-Core-Id]	HTTPS エージェントをホストとして処理している各システムの一意的識別値。この値は、それぞれのシステムに HP OpenView ソフトウェアをインストールする際に自動的に割り当てられます。値は変更できません。 OvCoreId 値の例： d498f286-aa97-4a31-b5c3-806e384fcf6e
[認証局 (CA)]	認証局の名前です。この名前は有効な証明書サーバー名の識別子でなければなりません。
[証明書のステータス]	ステータス情報を示します。
[ノード証明書]	使用可能なノード証明書のリストを示します。
[証明書管理操作]	証明書の管理に対して使用可能なアクションを示します。
[信頼できる証明書]	使用可能な信頼できる証明書のリストを示します。

証明書のインストール

証明書管理アプリケーションを使用して OVPI システムに証明書をインストールするには、次の手順を実行します。

- 1 証明書管理アプリケーションを起動します。216 ページの「[証明書管理アプリケーションの起動](#)」を参照してください。
- 2 [認証局 (CA)] ボックスに認証局の名前を入力して、[**CA を設定します**] をクリックします。
- 3 [証明書管理操作] リストで [**新しいクライアント証明書が必要です**] を選択します。
- 4 [**実行**] をクリックします。
確認ダイアログボックスが表示されます。
- 5 [**OK**] をクリックして確定し、[**更新**] をクリックします。

[OV の設定] セクションに証明書のステータス情報が表示されます。

以下のステータス情報が表示された場合、OV Communication Broker は動作していません。

未定義：BBC が稼動しているかどうかをチェックしてください

OV Communication Broker を起動するには、管理者権限を持つユーザーとしてログオンし、コマンド行で以下を入力します。

ovc -start

証明書の要求保留中というステータスが表示された場合、証明書サーバーは証明書要求の処理中です。このプロセスが完了するまで待ちます。[更新] ボタンで、更新後のステータスを表示します。

証明書のインポート

証明書をインポートするには、次の手順を実行します。

- 1 証明書管理アプリケーションを起動します。
- 2 [証明書管理操作] のコンボボックスから、以下のいずれかを選択します。
 - 信頼できる証明書をインポートする場合は、[信頼できる証明書をディスクからインポートします] を選択します。
 - ノード証明書をインポートする場合は、[ノード証明書をディスクからインポートしてください] を選択します。
- 3 [実行] をクリックします。

[インポート元] ダイアログボックスが開きます。

- 4 インポートする証明書があるフォルダーに移動し、証明書を選択して、[OK] をクリックします。

信頼できる証明書をインポートする場合は、手順 6 に進みます。それ以外の場合は、手順 5 に進みます。

- 5 [パスワードの入力] ダイアログボックスで以下を実行します。
 - a パスワードを入力して [OK] をクリックします。
[パスワードの再入力] ダイアログボックスが開きます。
 - b パスワードを再入力して [OK] をクリックします。
- 6 [OK] をクリックして確定し、[更新] をクリックします。

証明書のエクスポート

証明書をエクスポートするには、次の手順を実行します。

- 1 証明書管理ウィザードを起動します。

- 2 以下のいずれかを実行します。
 - 信頼できる証明書をエクスポートする場合は、信頼できる証明書を選択して、[証明書管理操作] リストから [信頼できる証明書をディスクにエクスポートしてください] を選択します。
 - ノード証明書をエクスポートする場合は、ノード証明書を選択して、[証明書管理操作] リストから [ノード証明書をディスクにエクスポートしてください] を選択します。
- 3 [実行] をクリックします。

[エクスポート先] ダイアログボックスが開きます。
- 4 証明書を保存するフォルダーに移動します。
- 5 ファイル名を [ファイル名の入力] ボックスに入力し、[OK] をクリックします。信頼できる証明書をエクスポートする場合は、手順 6 に進みます。それ以外の場合は、手順 7 に進みます。
- 6 [パスワードの入力] ダイアログボックスで以下を実行します。
 - a パスワードを入力して [OK] をクリックします。

[パスワードの再入力] ダイアログボックスが開きます。
 - b パスワードを再入力して [OK] をクリックします。
- 7 [OK] をクリックして確定し、[更新] をクリックします。

信頼できる証明書の更新

複数の証明書サーバーがエージェントに対して分散的に証明書を提供する場合があります。この例では、すべての認証サーバーから各エージェントに対して信頼できる証明書を取得できます。

そのためには、次の手順を実行します。

- 1 証明書管理ウィザードを起動します。
- 2 [証明書管理操作] リストから [信頼できる証明書の更新] を選択します。
- 3 [実行] をクリックします。

確認ダイアログボックスが表示されます。
- 4 [OK] をクリックして確定し、[更新] をクリックします。

更新された証明書が [信頼できる証明書] リストに表示されます。

証明書の削除

ノード証明書または信頼できる証明書を削除するには、以下の手順に従います。

- 1 証明書管理アプリケーションを起動します。
- 2 [ノード証明書] リストまたは [信頼できる証明書] リストから、削除する証明書を選択します。
- 3 [証明書管理操作] リストから **[選択した証明書の削除]** を選択します。
- 4 **[実行]** をクリックします。
[証明書の削除] ダイアログボックスが開きます。
- 5 **[はい]** をクリックして確定し、**[更新]** をクリックします。

CIV ファイルからの収集の作成

CIV ファイルから収集を作成するには、以下の手順に従います。

タスク 1: [新規収集] ウィザードを起動する

- 1 [管理コンソール] の [ファイル] メニューから **[収集の作成]** を選択します。
[収集ソースの選択] ウィンドウが開きます (168 ページの  12)。
- 2 **[CSV ファイルをインポートする]** を選択します。
- 3 **[次へ]** をクリックします。

タスク 2: 収集名、収集カテゴリ、および収集の説明を指定する

[収集の定義] ウィンドウが開きます (169 ページの  13)。

- 1 [収集名] ボックスにデータテーブルの名前を入力します。この名前は OVPI のデータリポジトリに格納されます。



ウィザードは、提供するエイリアス名に基づいて名前をコレクションに割り当てます。

名前は一意でなければなりません。最大 30 文字までです。使用できるのは、大文字/小文字のアルファベット、数字、特殊文字のアンダースコア (_) です。

- 2 [収集テーブルのカテゴリ] ボックスで、収集テーブルのカテゴリを入力または選択します。

カテゴリ名は、テーブルのセットをまとめてグループ化します。どの名前を選択するべきかを判断できない場合は、[**デフォルト**] を選択します。この名前は、最大 **30** 文字までです。

- 3 [収集の説明] ボックスに、テーブルの説明を入力します。説明は省略することも可能です。説明は、最大 **255** 文字までです。
- 4 [**次へ**] をクリックします。

タスク 3: 収集テーブルのデータのプロパティおよび保存期間を設定する

[データのプロパティと保存期間の設定] ウィンドウが開きます (170 ページの  14)。

- 1 [データの保持期間] ボックスで、テーブル内にデータを保持する日数を入力または選択します。
- 2 [要約間隔] ボックスで、テーブル内のデータの時間特性を選択します。たとえば、5 分テーブルには 5 分間隔のデータが格納されます。この 5 分間隔で収集されたデータを割合データと呼びます。
- 3 [テーブルタイプ] ボックスで、テーブルのタイプを選択します。

テーブルタイプは、テーブルに含まれているデータのクラスを指定するものです。以下に、使用可能なテーブルタイプのオプションを示します。

[ベースライン] テーブルにはベースラインデータが格納されます。

[イベント] テーブルにはイベントデータが格納されます。イベントデータは、独立イベントの付いた非時系列指向のデータです。

[予測] テーブルには予測データが格納されます。

[レート] テーブルには割合データが格納されます。割合データは、**raw** 入力データからの 1 対の行から算出される差分データです。

[未処理 (**raw**)] テーブルには **raw** (ポーリング時の) データが格納されません。

[要約] テーブルには要約データが格納されます。

- 4 [**次へ**] をクリックします。

タスク 4: CSV ファイルを選択する

[インポートファイルの選択] ウィンドウが開きます。



- 1 以下のいずれかを実行します。
 - インポートする CSV ファイルのパスを入力します。
 - [参照] ボタンをクリックし、[開く] ダイアログボックスで目的のファイルまで移動してファイルを選択し、[OK] をクリックします。
- 2 [次へ] をクリックします。

タスク 5: 収集で使用する統計に、ファイルからデータフィールドをマップする

[データフィールドを統計値にマップします] ウィンドウが開きます。



ファイルからデータフィールドを作成したウィンドウが表示され、収集で使用するフィールドを統計にマップすることができます。

- 1 データフィールドを選択して、以下を実行します。
 - a 選択したフィールドを含めない場合は、[Include] チェックボックスをオフにします。
 - b [列] ボックスをクリックして、統計の列名を入力します。列名の長さは、最大 **20** 文字です。
 - c [エイリアス] ボックスをクリックして、統計のエイリアス名を選択します。このエイリアス名の長さは、最大 **255** 文字です。
 - d [データタイプ] ボックスをクリックして、統計の列名を選択します。
 - e [長さ] ボックスをクリックして、統計のデータ長を入力します。可能なデータ長は、**1 ~ 255** です。

f データがないデータフィールドを許可する場合は、[ヌル可能]チェックボックスをオフにします。

g [デフォルト]ボックスをクリックして、データが入力されない場合に統計のデータベースに挿入する値を入力します。

[デフォルト]ボックスを **null** にしておくと、データは挿入されません。この値の長さは、[長さ]フィールドで指定されている値によって決まります。たとえば、データ長が **5** で統計が数字の場合、デフォルトの値は **99999** までの整数になります。

h [説明]ボックスをクリックして、この統計の説明を入力します。

2 各データフィールドで、**手順 1**を繰り返します。

3 [次へ]をクリックします。

タスク 6: データテーブルに関連付けるプロパティテーブルを指定する

[プロパティテーブルとの関連付け]ウィンドウが開きます。

1 以下のいずれかを実行します。

- [新規プロパティテーブルの作成]を選択し、収集するデータを表す、プロパティテーブルの名前を指定します。最大 **30** 文字までの、一意な名前を入力できます。使用できる文字は、アルファベット、数字、アンダースコア (**_**) です。225 ページの**タスク 7**に進みます。
- [既存のプロパティテーブルの再利用]を選択し、リストからプロパティテーブルを選択します。230 ページの**タスク 8**に進みます。



既存のプロパティテーブルを再利用すると、そのテーブルにすでに格納されているデータが壊れてしまうことがあります。

2 [次へ]をクリックします。

タスク 7: プロパティ属性を定義する

既存の列を使用してプロパティテーブルを作成することも、さらに列を追加することもできます。

[プロパティ属性の定義] ウィンドウが開きます。



次のオプションがあります。

- プロパティテーブルへの列または外部キーを含む列の追加、および TEEL での列マップ指令のセットアップ
227 ページの「列の追加」および 228 ページの「外部キーを含む列の追加」を参照してください。
- 列の順序の変更
230 ページの「列の順序の変更」を参照してください。
- 列の削除
230 ページの「列の削除」を参照してください。
- 列の編集
230 ページの「列の編集」を参照してください。

列の追加

プロパティテーブルに列を追加するには、以下の手順に従います。

- 1 列を追加するには、[**新しい属性**] をクリックします。

[**新しい属性**] ダイアログボックスが開きます。



- 2 [**名前**] リストをクリックし、列の名前を選択します。デフォルトでは、選択した **OID** オブジェクトの名前が表示されます。

- 3 列のエイリアス名を [**エイリアス**] ボックスに入力します。

名前は最大 **255** 文字までで、次の文字を使用できます。アルファベット、数字、アンダースコア、ハイフンを使用できます。

- 4 [**説明**] ボックスに、テーブルの説明を入力します。

説明は省略することも可能です。説明は、最大 **255** 文字までです。

- 5 列のデフォルト値を設定する場合は、[**デフォルト値**] ボックスに値を入力します。

デフォルト値は省略可能です。値の長さは最大 **255** 文字までです。

このフィールドは、この列がオブジェクト別変数または収集キー変数である場合には、空欄にする必要があります。

- 6 [**データタイプ**] リストで、データタイプの値をクリックします。

利用可能なデータ型のオプションとそれに対応するデータベースのストレージタイプについては、**181** ページの **手順 6** を参照してください。

- 7 [データ長] リストで長さの値をクリックします。

長さの値が有効なデータタイプは、`char_string`、`hex_string`、`numeric`、`octet_string`、`snmp_char_string`、`snmp_hex_string`、`snmp_octet_string`です。

- 8 [Can contain NULL data] ボックスをオンまたはオフにします。

このオプションをオンにした場合は、この列は `NULL` の可能性があります。**[Is an identifying attribute]** ボックスがオンになっていると、このオプションは自動的にオフになります。

- 9 [Is an identifying attribute] ボックスは、列をキー変数とする場合にオンにします。

このオプションをオンにした場合は、その列が、プロパティテーブル内の、要素を定義するプロパティの、一意な組み合わせに含まれていることとなります。この場合は、**[Is an identifying attribute]** ボックスはオンにせず、**[デフォルト値]** ボックスに値が指定されていないようにします。

収集キー変数として `[dsi_target_name]` 以外の列を指定した場合は、収集キー変数として `dsi_table_key` を指定できません。ただし、収集キー変数の最初のものとして `dsi_target_name` を指定した場合にのみ、収集キー変数として `dsi_table_key` を指定できます。

キー変数の順序で列を配置する必要があります。たとえば、リスト内の最初の列は 1 番目のキー変数に対応させ、2 番目の列は 2 番目のキー変数に対応させ、以下同様に列をキー変数に対応させます。プロパティテーブル内での列の順序を変更する場合は、230 ページの「[列の順序の変更](#)」を参照してください。

- 10 [Apply] をクリックします。

プロパティテーブルに列が追加されます。

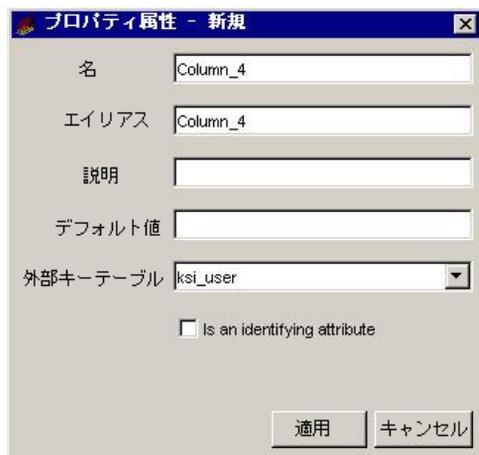
- 11 手順を繰り返して列を追加するか、**[次へ]** をクリックして続行します。

外部キーを含む列の追加

外部キーを含む列の追加するには、以下の手順に従います。

- 1 列を追加するには、**[新規外部キー]** をクリックします。

[新規外部キー] ダイアログボックスが開きます。



- 2 [名] ボックスに、列の名前を入力します。
列の名前は最大 **30** 文字までで、次の文字を使用できます。アルファベット、数字、アンダースコアを使用できます。
- 3 列のエイリアス名を [エイリアス] ボックスに入力します。
名前は最大 **255** 文字までで、次の文字を使用できます。アルファベット、数字、アンダースコア、ハイフンを使用できます。
- 4 [説明] ボックスに、テーブルの説明を入力します。
説明は省略することも可能です。説明は、最大 **255** 文字までです。
- 5 列のデフォルト値を設定する場合は、[デフォルト値] ボックスに値を入力します。
デフォルト値は省略可能です。値の長さは最大 **255** 文字までです。
このフィールドは、この列がオブジェクト別変数または収集キー変数である場合には、空欄にする必要があります。
- 6 [外部キーテーブル] リストをクリックし、キーを含むプロパティテーブルを選択します。
- 7 **[Is an identifying attribute]** ボックスは、列をキー変数とする場合にオンにします。
収集キー変数として [dsi_target_name] 以外の列を指定した場合は、収集キー変数として dsi_table_key を指定できません。ただし、収集キー変数の最初のものとして dsi_target_name を指定した場合にのみ、収集キー変数として dsi_table_key を指定できます。

キー変数の順序で列を配置する必要があります。たとえば、リスト内の最初の列は 1 番目のキー変数に対応させ、2 番目の列は 2 番目のキー変数に対応させ、以下同様に列をキー変数に対応させます。プロパティテーブル内での列の順序を変更する場合は、230 ページの「[列の順序の変更](#)」を参照してください。

- 8 [適用] をクリックします。

プロパティテーブルに列が追加されます。

- 9 手順を繰り返して列を追加するか、[次へ] をクリックして続行します。

列の順序の変更

プロパティテーブル内での列の順序を変更する場合は、変更したい列を選択して以下を実行します。

- 列を上へ移動するには、[上へ移動] をクリックします。
- 列を下へ移動するには、[下へ移動] をクリックします。

列の削除

プロパティテーブルから列を削除するには、[削除] をクリックします。

列の編集

列を編集するには、以下の手順に従います。

- 1 [プロパティ属性の定義] ウィンドウで列をダブルクリックします。
[プロパティ属性の編集] ダイアログボックスが開きます。これは、[新しいプロパティ属性] ダイアログボックスまたは [プロパティ属性の新しい外部キー] ダイアログボックスと同じです。
- 2 変更を行います。
- 3 [適用] をクリックします。

手順を繰り返すか、[次へ] をクリックして続行します。

タスク 8: 収集の出力ファイルを指定する

[出力ファイルの選択] ウィンドウが開きます (186 ページの [図 18](#))。

- 1 出力ファイルの名前と場所が正しいことを確認します。

- 2 ファイルの名前または場所を変更する場合は、以下のいずれかを実行します。
 - [出力ファイル] ボックスに新しい情報を入力します。
 -  をクリックします。[開く] ダイアログボックスが開きます。
出力ファイルを保存するフォルダーに移動し、[ファイル名] ボックスにファイル名を入力し、[開く] をクリックします。[出力ファイル] ボックスが、新しいファイル情報で更新されます。
- 3 [次へ] をクリックします。

タスク 9: 収集をデータベースに登録する

[データベースへの収集の追加] ウィンドウが開きます (187 ページの [図 19](#))。

- 1 すぐにテーブルを生成してデータベースに追加する場合は、[**今すぐデータベースに追加**] を選択します。

このオプションをオフにした場合は、後からコマンド行で以下のコマンドを入力する必要があります。

```
datapipe_manager -p create -a teal_file
```

この例で、*teal_file* は、の出力ファイルの名前です。

datapipe_manager コマンドのオプションに関する情報がさらに必要な場合は、『HP OpenView Performance Insight TEEL Reference Guide』および『HP OpenView Performance Insight Reference Guide』を参照してください。

- 2 [要約] ボックスで、[**データをレートテーブルに直接コピー**] または [**要約しない**] を選択します。



さらに、時間単位または週単位の要約が必要なら、ロールアップファイル (.sum ファイル) を作成し、trend_sum コマンドを使って作成したファイルを実行する必要があります。trend_sum コマンドの詳細については、『HP OpenView Performance Insight Reference Guide』を参照してください。

- 3 [次へ] をクリックします。

タスク 10: [サマリー] ウィンドウを確認する

[サマリー] ダイアログボックスが開きます (188 ページの [図 20](#))。

- 1 すべての収集プロパティ値が正しいことを確認します。

必要があれば、**[戻る]**をクリックして前のウィンドウに戻り、変更します。変更が完了したら、**[次へ]**をクリックして**[概要ページ]**ウィンドウまで戻ります。

- 2 **[完了]**をクリックするとデータテーブルが作成されます。

データテーブル作成ウィザードが閉じ、**TEEL** ファイルが作成され、指定した場所に保存されます。

- 3 収集用のポーリングポリシーを作成します。詳細は、242 ページの「**ポーリングポリシーの作成**」を参照してください。

ユーザー定義の収集の作成

インポートファイルがないものの、使用するフォーマットがわかっている場合は、収集ウィザードを使用して、収集を作成できます。この方法を使用するのは、ファイルベースの収集に限ります。

タスク 1: **[新規収集] ウィザードを起動する**

- 1 **[管理コンソール]**の**[ファイル]**メニューから**[収集の作成]**を選択します。
[収集ソースの選択]ウィンドウが開きます(168 ページの図 12)。
- 2 **[ユーザー定義]**を選択します。
- 3 **[次へ]**をクリックします。

タスク 2: **収集名、収集カテゴリ、および収集の説明を指定する**

[収集の定義]ウィンドウが開きます(169 ページの図 13)。

- 1 **[収集名]**ボックスにデータテーブルの名前を入力します。この名前は **OVPI** のデータリポジトリに格納されます。



ウィザードは、提供するエイリアス名に基づいて名前をコレクションに割り当てます。

名前は一意でなければなりません。最大 **30** 文字までです。使用できるのは、大文字/小文字のアルファベット、数字、特殊文字のアンダースコア (**_**) です。

- 2 **[収集カテゴリ]**ボックスで、収集テーブルのカテゴリを入力または選択します。

カテゴリ名は、テーブルのセットをまとめてグループ化します。どの名前を選択するべきかを判断できない場合は、**[default]** を選択します。この名前は、最大 **30** 文字までです。

- 3 **[収集の説明]** ボックスに、テーブルの説明を入力します。説明は省略することも可能です。説明は、最大 **255** 文字までです。
- 4 **[次へ]** をクリックします。

タスク 3: 収集テーブルのデータのプロパティおよび保存期間を設定する

[データプロパティと記憶領域の設定] ウィンドウが開きます (170 ページの [図 14](#))。

- 1 **[データの保持期間 (日)]** ボックスで、テーブル内にデータを保持する日数を入力または選択します。
- 2 **[要約間隔]** ボックスで、テーブル内のデータの時間特性を選択します。たとえば、5 分テーブルには 5 分間隔のデータが格納されます。この 5 分間隔で収集されたデータを割合データと呼びます。
- 3 **[テーブルタイプ]** ボックスで、テーブルのタイプを選択します。

テーブルタイプは、テーブルに含まれているデータのクラスを指定するものです。以下に、使用可能なテーブルタイプのオプションを示します。

[ベースライン] テーブルにはベースラインデータが格納されます。

[イベント] テーブルにはイベントデータが格納されます。イベントデータは、独立イベントの付いた非時系列指向のデータです。

[予測] テーブルには予測データが格納されます。

[レート] テーブルには割合データが格納されます。割合データは、**raw** 入力データからの 1 対の行から算出される差分データです。

[未処理 (raw)] テーブルには **raw** (ポーリング時の) データが格納されません。

[要約] テーブルには要約データが格納されます。

- 4 **[次へ]** をクリックします。

タスク 4: 収集の統計を定義する

[収集対象の統計値を手動で定義する] ページが開きます。



- 1  をクリックし、テーブルに追加する列を作成します。
- 2 列名を変更するには、[列] ボックスをクリックし、統計の新しい名前を入力します。
名前は最大 **30** 文字までで、次の文字を使用できます。アルファベット、数字、アンダースコアを使用できます。
- 3 統計のエイリアス名を変更するには、[エイリアス] ボックスをクリックし、新しいエイリアス名を入力します。
名前は最大 **255** 文字までで、次の文字を使用できます。アルファベット、数字、アンダースコア、ハイフンを使用できます。
- 4 [データタイプ] ボックスで値を選択します。
利用可能なデータ型のオプションとそれに対応するデータベースのストレージタイプについては、**181** ページの **手順 6** を参照してください。

- 5 データ長を変更するには、[長さ]ボックスをダブルクリックし、新しい値を入力します。
長さの値が有効なデータタイプは、`char_string`、`hex_string`、`numeric`、`octet_string`、`snmp_char_string`、`snmp_hex_string`、`snmp_octet_string`です。
- 6 統計に NULL がありえる場合は、[ヌル可能]をクリックします。
- 7 デフォルトを変更するには、[デフォルト]ボックスをクリックし、新しい値を入力します。
値の長さは最大 255 文字までです。
- 8 説明を変更するには、[説明]ボックスをクリックし、新しい説明を入力します。
説明は省略することも可能です。説明は最大 255 文字までです。
- 9 データテーブル内の列の順序を変更する場合は、変更したい列を選択し以下を実行します。
 - 列を上へ移動するには、をクリックします。
 - 列を下へ移動するには、をクリックします。
 - プロパティテーブルから列を削除するには、をクリックします。
- 10 [次へ]をクリックします。

タスク 5: データテーブルに関連付けるプロパティテーブルを指定する

[プロパティテーブルとの関連付け]ウィンドウが開きます。

- 1 以下のいずれかを実行します。
 - [新規プロパティテーブルの作成]を選択し、収集するデータを表す、プロパティテーブルの名前を指定します。最大 30 文字までの、一意な名前を入力できます。使用できる文字は、アルファベット、数字、アンダースコア (`_`) です。236 ページのタスク 6 に進みます。

- [既存のプロパティテーブルの再利用] を選択し、リストからプロパティテーブルを選択します。241 ページのタスク 7 に進みます。



既存のプロパティテーブルを再利用すると、そのテーブルにすでに格納されているデータが壊れてしまうことがあります。

2 [次へ] をクリックします。

タスク 6: プロパティ属性を定義する

既存の列を使用してプロパティテーブルを作成することも、さらに列を追加することもできます。

[プロパティ属性の定義] ウィンドウが開きます。

キー	FK	列	エイリアス	データタイプ	データ長
<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	dsi_target_n...	dsi_target_n...	snmp_char_...	64
<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	dsi_table_key	dsi_table_key	snmp_char_...	128
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	dsi_descr	dsi_descr	snmp_char_...	255

次のオプションがあります。

- プロパティテーブルへの列または外部キーを含む列の追加、および TEEL での列マップ指令のセットアップ
237 ページの「列の追加」および 239 ページの「外部キーを含む列の追加」を参照してください。

- 列の順序の変更
240 ページの「[列の順序の変更](#)」を参照してください。
- 列の削除
240 ページの「[列の削除](#)」を参照してください。
- 列の編集
240 ページの「[列の編集](#)」を参照してください。

列の追加

プロパティテーブルに列を追加するには、以下の手順に従います。

- 1 列を追加するには、[**新しい属性**] をクリックします。

[**新しい属性**] ダイアログボックスが開きます。

- 2 [**名前**] リストをクリックし、列の名前を選択します。デフォルトでは、選択した **OID** オブジェクトの名前が表示されます。
- 3 列のエイリアス名を [**エイリアス**] ボックスに入力します。
名前は最大 **255** 文字までで、次の文字を使用できます。アルファベット、数字、アンダースコア、ハイフンを使用できます。
- 4 [**説明**] ボックスに、テーブルの説明を入力します。
説明は省略することも可能です。説明は、最大 **255** 文字までです。

- 5 列のデフォルト値を設定する場合は、[デフォルト値] ボックスに値を入力します。

デフォルト値は省略可能です。値の長さは最大 **255** 文字までです。

このフィールドは、この列がオブジェクト別変数または収集キー変数である場合には、空欄にする必要があります。

- 6 [データタイプ] リストで、データタイプの値をクリックします。

利用可能なデータ型のオプションとそれに対応するデータベースのストレージタイプについては、**181** ページの[手順 6](#)を参照してください。

- 7 [データ長] リストで長さの値をクリックします。

長さの値が有効なデータタイプは、`char_string`、`hex_string`、`numeric`、`octet_string`、`snmp_char_string`、`snmp_hex_string`、`snmp_octet_string`です。

- 8 **[Can contain NULL data]** ボックスをオンまたはオフにします。

このオプションをオンにした場合は、この列は **NULL** の可能性があります。**[Is an identifying attribute]** ボックスがオンになっていると、このオプションは自動的にオフになります。

- 9 **[Is an identifying attribute]** ボックスは、列をキー変数とする場合にオンにします。

このオプションをオンにした場合は、その列が、プロパティテーブル内の、要素を定義するプロパティの、一意な組み合わせに含まれていることとなります。この場合は、**[Is an identifying attribute]** ボックスはオンにせず、**[デフォルト値]** ボックスに値が指定されていないようにします。

収集キー変数として `[dsi_target_name]` 以外の列を指定した場合は、収集キー変数として `dsi_table_key` を指定できません。ただし、収集キー変数の最初のものとして `dsi_target_name` を指定した場合にのみ、収集キー変数として `dsi_table_key` を指定できます。

キー変数の順序で列を配置する必要があります。たとえば、リスト内の最初の列は 1 番目のキー変数に対応させ、2 番目の列は 2 番目のキー変数に対応させ、以下同様に列をキー変数に対応させます。プロパティテーブル内での列の順序を変更する場合は、**240** ページの「[列の順序の変更](#)」を参照してください。

- 10 **[Apply]** をクリックします。

プロパティテーブルに列が追加されます。

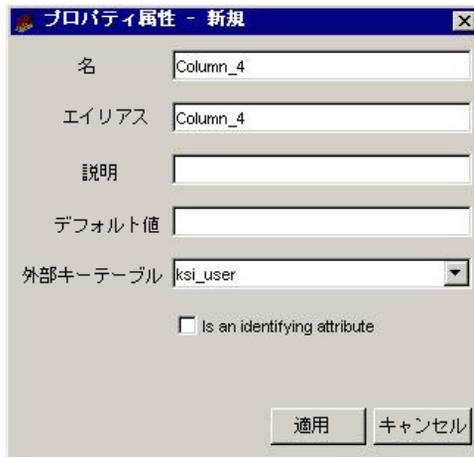
11 手順を繰り返して列を追加するか、[次へ]をクリックして続行します。

外部キーを含む列の追加

外部キーを含む列の追加するには、以下の手順に従います。

1 列を追加するには、[新規外部キー]をクリックします。

[新規外部キー]ダイアログボックスが開きます。



2 [名]ボックスに、列の名前を入力します。

列の名前は最大 **30** 文字までで、次の文字を使用できます。アルファベット、数字、アンダースコアを使用できます。

3 列のエイリアス名を [エイリアス]ボックスに入力します。

名前は最大 **255** 文字までで、次の文字を使用できます。アルファベット、数字、アンダースコア、ハイフンを使用できます。

4 [説明]ボックスに、テーブルの説明を入力します。

説明は省略することも可能です。説明は、最大 **255** 文字までです。

5 列のデフォルト値を設定する場合は、[デフォルト値]ボックスに値を入力します。

デフォルト値は省略可能です。値の長さは最大 **255** 文字までです。

このフィールドは、この列がオブジェクト別変数または収集キー変数である場合には、空欄にする必要があります。

- 6 [外部キーテーブル] リストをクリックし、キーを含むプロパティテーブルを選択します。
- 7 [Is an identifying attribute] ボックスは、列をキー変数とする場合にオンにします。

収集キー変数として [dsi_target_name] 以外の列を指定した場合は、収集キー変数として dsi_table_key を指定できません。ただし、収集キー変数の最初のものとして dsi_target_name を指定した場合にのみ、収集キー変数として dsi_table_key を指定できます。

キー変数の順序で列を配置する必要があります。たとえば、リスト内の最初の列は 1 番目のキー変数に対応させ、2 番目の列は 2 番目のキー変数に対応させ、以下同様に列をキー変数に対応させます。プロパティテーブル内での列の順序を変更する場合は、240 ページの「列の順序の変更」を参照してください。

- 8 [適用] をクリックします。
プロパティテーブルに列が追加されます。
- 9 手順を繰り返して列を追加するか、[次へ] をクリックして続行します。

列の順序の変更

プロパティテーブル内での列の順序を変更する場合は、変更したい列を選択して以下を実行します。

- 列を上へ移動するには、[上へ移動] をクリックします。
- 列を下へ移動するには、[下へ移動] をクリックします。

列の削除

プロパティテーブルから列を削除するには、[削除] をクリックします。

列の編集

列を編集するには、以下の手順に従います。

- 1 [プロパティ属性の定義] ウィンドウで列をダブルクリックします。
[プロパティ属性の編集] ダイアログボックスが開きます。これは、[新しいプロパティ属性] ダイアログボックスまたは [プロパティ属性の新しい外部キー] ダイアログボックスと同じです。

- 2 変更を行います。
- 3 **[適用]** をクリックします。

手順を繰り返すか、**[次へ]** をクリックして続行します。

タスク 7: 収集の出力ファイルを指定する

[出力ファイルの選択] ウィンドウが開きます (186 ページの [図 18](#))。

- 1 出力ファイルの名前と場所が正しいことを確認します。
- 2 ファイルの名前または場所を変更する場合は、以下のいずれかを実行します。
 - **[出力ファイル]** ボックスに新しい情報を入力します。
 -  をクリックします。[開く] ダイアログボックスが開きます。
出力ファイルを保存するフォルダーに移動し、[ファイル名] ボックスにファイル名を入力し、**[開く]** をクリックします。[出力ファイル] ボックスが、新しいファイル情報で更新されます。
- 3 **[次へ]** をクリックします。

タスク 8: 収集をデータベースに登録する

[データベースへの収集の追加] ウィンドウが開きます (187 ページの [図 19](#))。

- 1 すぐにテーブルを生成してデータベースに追加する場合は、**[今すぐデータベースに追加]** を選択します。

このオプションをオフにした場合は、後からコマンド行で以下のコマンドを入力する必要があります。

```
datapipe_manager -p create -a teal_file
```

この例で、*teal_file* は、の出力ファイルの名前です。

datapipe_manager コマンドのオプションに関する情報がさらに必要な場合は、『HP OpenView Performance Insight TEEL Reference Guide』および『HP OpenView Performance Insight Reference Guide』を参照してください。

- 2 [要約] ボックスで、[データをレポートテーブルに直接コピー] または [要約しない] を選択します。



さらに、時間単位または週単位の要約が必要なら、ロールアップファイル (.sum ファイル) を作成し、trend_sum コマンドを使って作成したファイルを実行する必要があります。trend_sum コマンドの詳細については、『HP OpenView Performance Insight Reference Guide』を参照してください。

- 3 [次へ] をクリックします。

タスク 9: [サマリー] ウィンドウを確認する

[サマリー] ダイアログボックスが開きます (188 ページの [図 20](#))。

- 1 すべての収集プロパティ値が正しいことを確認します。

必要があれば、[戻る] をクリックして前のウィンドウに戻り、変更します。変更が完了したら、[次へ] をクリックして [概要ページ] ウィンドウまで戻ります。

- 2 [完了] をクリックするとデータテーブルが作成されます。

データテーブル作成ウィザードが閉じ、TEEL ファイルが作成され、指定した場所に保存されます。

- 3 収集用のポーリングポリシーを作成します。詳細は、242 ページの「[ポーリングポリシーの作成](#)」を参照してください。

ポーリングポリシーの作成

レポートパックをインストールすると、そのレポートパックにとって必要なポーリングポリシーが提供されます。ただし、新しいポーリングポリシーを作成しなければならない場合もあります。

各ポーリングポリシーにはそれぞれ *collection* とポーリンググループが必要です。collection は、収集されたデータを含むデータベースのテーブルを識別します。ポーリンググループは、ポーリンググループは、ポーリングする管理対象オブジェクトを識別します。ノードのリスト、またはインスタンスのリストを含みます。各ノードには、SNMP プロファイルとコミュニティ文字列プロファイルが必要です。

ポーリングポリシーを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 [ファイル]メニューの[ポーリングポリシーの作成]を選択します。

[ポーリングポリシーの作成]ダイアログボックスが開きます。

ポーリングポリシーの作成

ポリシー名:

ポーリングするデータ: Customer Property Import Data Table

データの収集元: 単一ノードのグループの作成

ポーリングするグループの選択: v

ポーリング間隔: オフ

データパイプの使用: CommonPropTablesCustomer

ポーリングの割り当て先: hp-oq03f7vfrbez

説明:

- 2 ポーリングポリシーの名前として、明確に区別できる一意の名前を [ポリシー名] ボックスに入力します。
- 3 [ポーリングするデータ] リストから、収集するデータのテーブルを選択します。収集を指定します。

このリストに表示されるテーブルは、[ポーリングポリシーの管理] ウィンドウのナビゲーションペインに表示されている、データベースのものです。

別のサーバーにあるテーブル内のデータを収集する必要がある場合は、[ファイル]メニューの[サーバーの変更]を選択してデータベースを変更します。詳細は、106 ページの「データベースサーバーの変更」を参照してください。テーブル内で収集できる項目を表示する必要がある場合は、テーブルマネージャを使用して、どの列がテーブル内にあるかを表示します。

収集を新しく作成する場合、詳細は、167 ページの「収集の作成」を参照してください。

- 4 [データの収集元] リストから、以下のいずれかのデータの収集元を選択します。

- **[単一ノード]**: 1つのノードだけを含むグループを表示します。指定したグループにある1つのノードだけがシステムによってポーリングされます。
 - **[同じタイプのすべてのノード]**: 同じタイプとして指定されたノードがあるグループを表示します。指定したグループにあるノードだけがシステムによってポーリングされます。通常、このグループの指定では、ルーターなど類似したデバイスである項目が該当します。
 - **[同じビュー内にあるすべてのノード]**: 同じビューとして指定されたノードがあるグループを表示します。指定したグループにあるノードだけがシステムによってポーリングされます。通常、このグループの指定では、場所別やカスタマ別など、特定の用途について関連のある項目が該当します。
 - **[タイプとビューとの組み合わせ]**: タイプとビューの組み合わせとして指示したノードがあるグループを表示します。指定したグループにあるノードだけがシステムによってポーリングされます。
 - **[特定のインスタンス]**: ルールまたは列举リストによって選択されたプロパティテーブルにあるインスタンスを含むグループを表示します。指定したグループにあるノードだけがシステムによってポーリングされます。
 - **[カスタムグループ]**: ルールベースのグループなど、ポーリングポリシーマネージャアプリケーション以外の何らかの方法で定義された特定のグループを表示します。
- 5 **[ポーリングするグループの選択]** リストで、ポーリング元のデータのソースがあるグループを選択します。

新しいグループを作成するには、**[作成]** をクリックします。詳細は、249ページの「**ポーリンググループの管理**」を参照してください。

- 6 **[ポーリング間隔]** リストから、ポーリング間隔を選択します。ポーリング間隔は、1回のポーリング要求と次のポーリング要求との間の時間です。
- 以下のオプションが**[ポーリング間隔]** リストにあります。
- **[オフ]**: データのポーリングをすべて停止します。
 - **[5分]**: 0時から、5分間隔でデータをポーリングします。
 - **[10分]**: 0時から、10分間隔でデータをポーリングします。
 - **[15分]**: 0時から、15分間隔でデータをポーリングします。

- **[20分]**: 0時から、20分間隔でデータをポーリングします。
 - **[1時間]**: 0時から、1時間間隔でデータをポーリングします。
 - **[1日]**: 毎日、trendtimer.sched ファイルに指定された時刻にデータをポーリングします。デフォルトのデータポーリング時刻は、毎日午前1時です。
- 7 **[データパイプの使用]** リストから、データパイプを選択します。データパイプはデータの収集方法を指定しています。
- データパイプの詳細は、HP OpenView の営業担当者にお問い合わせのうえ、『HP OpenView Performance Insight TEEL Reference Guide』を入手してください。
- 8 **[ポーリングの割り当て先]** リストから、データを収集するサーバーを選択します。
- 別の収集ステーションをリストに追加するには、**[作成]** をクリックします。詳細は、273 ページの「**データパイプのインストールの管理**」を参照してください。
- 9 **[説明]** ボックスに、ポーリングポリシーのテキスト説明文を入力します。
- 10 **[OK]** をクリックします。
- ポーリングポリシーが作成されます。

例 : OVPA 収集用のポーリングポリシーの作成

ovpa_northeast という名前の OVPA 収集を作成したと仮定して、以下の例は、この収集用のポーリングポリシーの作成方法を示します。

ポーリングポリシーを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 **[ファイル]** メニューから、**[ポーリングポリシーの作成]** を選択します。
[ポーリングポリシーの作成] ダイアログボックスが開きます。
- 2 ポーリングポリシーの名前として、**ovpa_northeast_policy** のような、明確に区別できる一意の名前を [ポリシー名] ボックスに入力します。
- 3 **[ポーリングするデータ]** リストから「**ovpa_northeast**」を選択します。



ポリシー名と収集名は同じでなくてもかまいません。

- 4 [データの収集元] リストから [**同じタイプのすべてのノード**] を選択します。
このオプションは、同じタイプとして指定されたノードがあるグループを表示します。指定したグループにあるノードだけがシステムによってポーリングされます。通常、このグループの指定では、ルーターなど類似したデバイスである項目が該当します。
- 5 [ポーリングするグループの選択] リストで「**OVPA**」を選択します。
- 6 [ポーリング間隔] リストから、ポーリング間隔を選択します。これによって、ポーリング要求間の時間間隔が指定されます。
- 7 [データパイプの使用] リストから「**dsi_sr**」を選択します。このデータパイプがデフォルトです。これによって、**OVPI** がデータを収集する方法が指定されます。
- 8 [ポーリングの割り当て先] リストから、データを収集するサーバーを選択します。
- 9 [説明] ボックスに、ポーリングポリシーのテキスト説明文を入力します。
- 10 **[OK]** をクリックします。
ポーリングポリシーが作成されます。

ポリシーがポーリング中であることの確認

以下を行うことで、ポリシーがポーリング中であることを確認できます。

- 1 `pa_collect` コマンドを実行します。たとえば、ポーリングポリシーのエントリーを間隔値を **5** にして実行するには、以下を入力します。
pa_collect -i 5
`pa_collect` コマンドの詳細については、『**HP OpenView Performance Insight Reference Guid**』を参照してください。
- 2 テーブルマネージャを使用して、収集のプロパティテーブルを探し、行が存在しているかどうかを確認します。

ポーリングポリシーの編集

場合によっては、ポーリングポリシーを変更する必要があります。たとえば、一部のノードだけをポーリングしたいと仮定します。この場合、一部のノードだけを含むビューを作成し、そのノードの一覧を代わりに使用するようポーリングポリシーを変更します。



既存のポーリングポリシーを変更すると、インストール済みの機能（レポートパックとデータパイプ）が正常に動作しなくなることがあります。

ポーリングポリシーを編集するには、以下の手順に従います。

1 以下のいずれかを実行します。

- 表示ペインでポーリングポリシーをダブルクリックします。
- 表示ペインでポーリングポリシーを選択し、[編集]メニューの[ポーリングポリシー]を選択します。

[ポーリングポリシーの編集]ダイアログボックスが開きます。

ポーリングポリシーの編集

ポリシー名: e

ポーリングするデータ: Customer Property Import Data Table

データの収集元: 単一ノードのグループの作成

ポーリングするグループの選択: v 作成...

ポーリング間隔: オフ

データパイプの使用: CommonPropTablesCustomer 作成...

ポーリングの割り当て先: hp-oq03f7vfrbez

説明: e

OK キャンセル

2 以下のいずれかを実行します。

- a 収集するデータを格納するテーブルを変更するには、別のテーブルを [ポーリングするデータ] リストから選択します。
- b データの収集元となるグループのタイプを変更するには、別のタイプを [データの収集元] リストから選択します。

- c ポーリング元のデータのソースがあるグループを変更するには、別のグループを [ポーリングするグループの選択] リストから選択します。
新しいグループを作成するには、[作成] をクリックします。詳細は、249 ページの「[ポーリンググループの管理](#)」を参照してください。
 - d ポーリング間隔を変更するには、別の間隔を [ポーリング間隔] リストから選択します。
 - e データの収集方法を指定するデータパイプを変更するには、別のデータパイプを [データパイプの使用] リストから選択します。
データパイプの詳細は、HP OpenView の営業担当者にお問い合わせのうえ、『[HP OpenView Performance Insight TEEL Reference Guide](#)』を入手してください。
 - f データを収集するサーバーを変更するには、別のサーバーを [ポーリングの割り当て先] リストから選択します。
別の収集ステーションをリストに追加するには、[作成] をクリックします。詳細は、273 ページの「[データパイプのインストールの管理](#)」を参照してください。
- 3 [OK] をクリックします。

ポーリングポリシーの削除

- 1 つ以上のポーリングポリシーを削除するには、以下の手順に従います。
- 1 表示ペインに表示されているポーリングポリシーリストから、1 つまたは複数のポーリングポリシーを選択します。
詳細は、164 ページの「[項目の選択](#)」を参照してください。
 - 2 [編集] メニューの [ポーリングポリシーの削除] を選択します。
削除の確認ウィンドウが表示されます。表示内容は、選択したポーリングポリシーが 1 つか複数かで異なります。
 - 3 以下のいずれかを実行します。
 - 1 つのポーリングポリシーだけを選択した場合、ポーリングポリシーを削除するには、[はい] をクリックします。

- 複数のポーリングポリシーを選択した場合は、以下のいずれかを実行します。
 - 選択したポーリングポリシーをすべて削除するには、[すべてはい]をクリックします。
 - 現在確認ウィンドウに表示されているポーリングポリシーを削除するには、[はい]をクリックします。
 - 現在確認ウィンドウに表示されているポーリングポリシーを取り消し、次のポリシーの確認ウィンドウに移るには、[いいえ]をクリックします。
 - 選択したポーリングポリシーをいずれも削除せずにウィンドウを閉じるには、[キャンセル]をクリックします。

ポーリンググループの管理

ポーリンググループを作成、編集、または削除するには、以下の手順に従います。

- 1 [編集]メニューの[ポーリンググループ]を選択します。

[ポーリングポリシーの編集]ダイアログボックスが開きます。

ポーリングポリシーの編集

ポリシー名: e

ポーリングするデータ: Customer Property Import Data Table

データの収集元: 単一ノードのグループの作成

ポーリングするグループの選択: v 作成...

ポーリング間隔: オフ

データパイプの使用: CommonPropTablesCustomer 作成...

ポーリングの割り当て先: hp-oq03f7vfrbez

説明: e

OK キャンセル

- 2 作成、編集、または削除するグループの種類を [ポーリングするグループの選択] ボックスから選択します。

選択したタイプに対応するグループが存在する場合は、それらのグループが [ポーリング元とするグループの選択] ボックスに表示されます。

[ポーリングするグループの選択] ボックスには以下のオプションがあります。

- [単一ノードのグループの作成]: 1つのノードだけを含みます。このグループにある1つのノードだけがシステムによってポーリングされます。
- [同じタイプのすべてのノード]: 同じタイプとして指定されたノードがあります。このグループで指定されたノードだけがシステムによってポーリングされます。通常、このグループの指定では、ルーターなど類似したデバイスである項目が該当します。
- [同じビュー内にあるすべてのノード]: 同じビューとして指定されたノードがあります。このグループで指定されたノードだけがシステムによってポーリングされます。通常、このグループの指定では、場所別やカスタマ別など、特定の用途について関連のある項目が該当します。
- [タイプとビューとの組み合わせ]: タイプとビューの組み合わせとして指定されたノードがあります。このグループで指定されたノードだけがシステムによってポーリングされます。
- [特定のインスタンス]: ルールによって選択されたプロパティテーブルにあるインスタンスを含みます。このグループで指定されたインスタンスだけがシステムによってポーリングされます。

3 選択したタイプの新しいグループを作成するには、[作成] をクリックします。

選択したグループに対して適用される手順の詳細は、251 ページの「[ポーリンググループの作成](#)」を参照してください。

4 選択したタイプのグループを編集するには、以下のいずれかを実行します。

- 編集するグループを [ポーリング元とするグループの選択] ボックスでダブルクリックします。
- 編集するグループを [ポーリング元とするグループの選択] ボックスで選択し、[編集] をクリックします。

ポーリンググループの編集方法の詳細は、259 ページの「[ポーリンググループの編集](#)」を参照してください。

5 選択したタイプのグループを削除するには、以下の手順に従います。

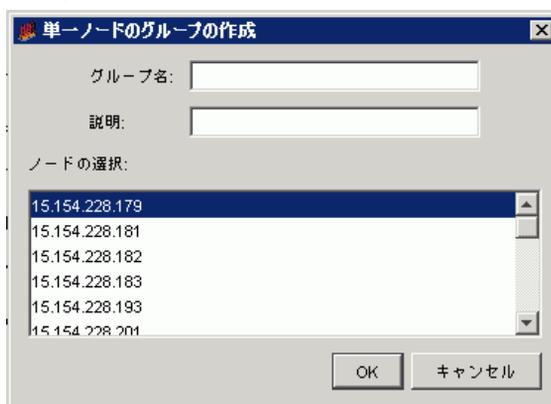
- a 削除するグループを [ポーリング元とするグループの選択] ボックスから選択します。
 - b [削除] をクリックします。削除の確認ウィンドウが表示されます。
 - c ポーリンググループを削除するには、[はい] をクリックします。
- 6 完了したら、[閉じる] をクリックします。

ポーリンググループの作成

ポーリンググループを作成するときは、ポーリングプロセス中にデータの収集元とするノードまたはインスタンスを指定します。作成できるポーリンググループの種類は、単一のノード、同じタイプのノード、同じビューにあるノード、タイプとビューの組み合わせ、および特定のインスタンスです。

単一ノードのグループの作成

[ポーリンググループの編集] ダイアログボックスで [単一ノードのグループの作成] オプションを選択し [作成] をクリックすると、[単一ノードのグループの作成] ダイアログボックスが開きます。



単一ノードのグループを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 グループの名前を [グループ名] ボックスに入力します。この名前は最大 30 文字までです。
- 2 [説明] ボックスに、グループの説明を入力します。説明の長さは最大 255 文字までです。

- 3 1つのノードを [ノードの選択] ボックスから選択します。
- 4 **[OK]** をクリックします。

同じタイプのすべてのノードグループの作成

ダイアログボックスで **[同じタイプのすべてのノード]** オプションを選択し **[作成]** をクリックすると、**[タイプグループの作成]** ダイアログボックスが開きます。

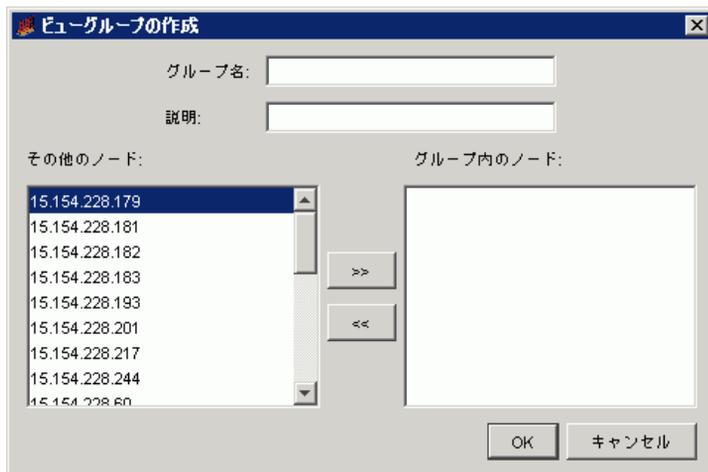


同じタイプのノードを含むグループを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 グループの名前を [グループ名] ボックスに入力します。この名前は最大 30 文字までです。
- 2 [説明] ボックスに、グループの説明を入力します。説明の長さは最大 255 文字までです。
- 3 グループのノードを選択するには、以下のいずれかを実行します。
 - [他のノード] ボックスでノードを選択し、**[>>]** をクリックしてノードを [グループ内のノード] ボックスに追加します。
 - [他のノード] ボックスでノードをダブルクリックします。ノードが [グループ内のノード] ボックスに移動します。
- 4 ノードをグループから削除するには、以下のいずれかを実行します。
 - [グループ内のノード] ボックスでノードを選択し、**[<<]** をクリックしてそのノードを [他のノード] ボックスに戻します。
 - [グループ内のノード] ボックスでノードをダブルクリックし、ノードを [他のノード] ボックスに移動します。
- 5 完了したら、**[OK]** をクリックします。

同じビューにあるすべてのノードグループの作成

ダイアログボックスで [同じビュー内にあるすべてのノード] オプションを選択し [作成] をクリックすると、[ビューグループの作成] ダイアログボックスが開きます。



同じビューにあるすべてのノードを持つグループを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 グループの名前を [グループ名] ボックスに入力します。この名前は最大 30 文字までです。
- 2 [説明] ボックスに、グループの説明を入力します。説明の長さは最大 255 文字までです。
- 3 グループのノードを選択するには、以下のいずれかを実行します。
 - [その他のノード] ボックスでノードを選択し、>> をクリックしてノードを [グループ内のノード] ボックスに追加します。
 - [その他のノード] ボックスでノードをダブルクリックします。ノードが [グループ内のノード] ボックスに移動します。
- 4 ノードをグループから削除するには、以下のいずれかを実行します。
 - [グループ内のノード] ボックスでノードを選択し、<< をクリックしてそのノードを [その他のノード] ボックスに戻します。
 - [グループ内のノード] ボックスでノードをダブルクリックし、ノードを [その他のノード] ボックスに移動します。

- 5 完了したら、[OK] をクリックします。

タイプとビューの結合グループの作成

ダイアログボックスで [タイプとビューとの組み合わせ] オプションを選択し [作成] をクリックすると、[タイプとビューの結合グループの作成] ダイアログボックスが開きます。

タイプとビューの結合グループの作成

グループ名:

説明:

タイプグループ: OVPA

かつ

ビューグループ: q

結果ノードのリストを表示

ノード:

OK キャンセル

タイプとビューの各ノードグループの組み合わせで構成されるノードグループを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 グループの名前を [グループ名] ボックスに入力します。この名前は最大 30 文字までです。
- 2 [説明] ボックスに、グループの説明を入力します。説明の長さは最大 255 文字までです。
- 3 [タイプグループ] リストからノードのグループを選択します。
- 4 [ビューグループ] リストからノードのグループを選択します。

- 5 [演算子] リストから演算子を選択します。このリストは[タイプグループ] リストと[ビューグループ] リストとの間にあります。

[演算子] リストには以下のオプションがあります。

 - [かつ]: 結果として得られるノードリストには、[タイプグループ] と [ビューグループ] の両方にある同じノードが含まれます。たとえば、[タイプグループ] にノード 1、2、3 があり、[ビューグループ] にノード 3、4、5 がある場合、結果として得られるグループにはノード 3 が含まれます。
 - [または]: 結果として得られるノードリストには、[タイプグループ] と [ビューグループ] の少なくとも一方にあるすべてのノードが含まれます。たとえば、[タイプグループ] にノード 1、2、3 があり、[ビューグループ] にノード 3、4、5 がある場合、結果として得られるグループにはノード 1、2、3、4、5 が含まれます。
 - [タイプがビュー内にありません]: 結果として得られるノードリストには、[タイプグループ] にあって[ビューグループ] にないノードが含まれます。たとえば、[タイプグループ] にノード 1、2、3 があり、[ビューグループ] にノード 3、4、5 がある場合、結果として得られるグループにはノード 1、2 が含まれます。
 - [ビューがタイプ内にありません]: 結果として得られるノードリストには、[ビューグループ] にあって[タイプグループ] にないノードが含まれます。たとえば、[タイプグループ] にノード 1、2、3 があり、[ビューグループ] にノード 3、4、5 がある場合、結果として得られるグループにはノード 4、5 が含まれます。
- 6 結果のノードリストを表示する場合は、[結果ノードのリストを表示] をクリックします。
- 7 完了したら、[OK] をクリックします。

特定のインスタンスグループの作成

ダイアログボックスで [特定のインスタンス] オプションを選択し [作成] をクリックすると、[特定のインスタンスグループの作成] ダイアログボックスが開きます。

The screenshot shows a dialog box titled "特定のインスタンスグループの作成". It contains the following elements:

- グループ名: [Text input field]
- 説明: [Text input field]
- プロパティグループを選択: [Dropdown menu with "KIRVendor" selected]
- ルール: [Text input field] with a "編集..." button to its right.
- View Resulting Instances [Button]
- インスタンス値を編集... [Button]
- インスタンス: [Large empty area for displaying instances]
- 選択されたインスタンスのみ [Checkbox]
- OK [Button]
- キャンセル [Button]

特定のインスタンスグループとルールベースのグループとは、同じタイプのグループを指します。

特定のインスタンスグループを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 グループの名前を [グループ名] ボックスに入力します。この名前は最大 30 文字までです。
- 2 このグループの説明を [説明] ボックスに入力します。説明の長さは最大 255 文字までです。
- 3 インスタンスがあるプロパティテーブルを [プロパティグループの選択] リストから選択します。

- 4 インスタンスの選択条件を入力するには、[編集]をクリックします。[ルールの作成]ダイアログボックスが開きます。

ルールの作成

ルールの定義

列の選択: DSI_KEY_ID NOT LIKE

かつ

列の選択: DSI_KEY_ID NOT LIKE

OK キャンセル

ルールの定義では、最大 2 つの列に選択条件を入力できます。

- 5 以下の手順に従います。
- a 列名を [列の選択] リストから選択します。これらは、選択したプロパティテーブルにある列です。
 - b 選択した列にある値に対する演算子を選択します。以下の演算子が使用できます。

= 等しい
< より小さい
> より大きい
>= 以上
<= 以下
<> 等しくない

like

not like

- c 選択した列に対する値を、右側のボックスに入力します。
この値には英数字の文字列を使用できます。**LIKE** 演算子を使用する場合は、値は文字列でなければならないほか、ワイルドカード文字としてアンダースコア () およびパーセント (%) を含めることができます。アンダースコアは、任意の 1 文字を表します。パーセント記号は、ゼロまたは 1 つ以上の文字を表します。たとえば、次のように入力します。

12%3 にマッチする文字列は、1233、123、1244443 などです。

_ime にマッチする文字列は、time、lime、dime などです。

- d 2つの列を選択した場合、または同じ列名を2回選択した場合は、2つの列の間に表示される [演算子] リストから結合演算子を選択します。

同じ列名を2回選択した場合、その列を部分的に条件付ける、複合ルールを作成できます。

- e 完了したら、[OK] をクリックします。

作成したルールは、[特定のインスタンスグループの作成] ダイアログボックスの [ルールの作成] ボックスに表示されます。

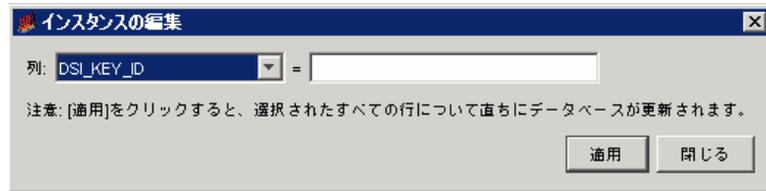
- 6 プロパティテーブルで選択した行に対応するすべての列を表示するには、[結果のインスタンスの表示] をクリックします。

- 7 [インスタンス] にある行の値を変更する場合は、以下を実行します。

- a 1つまたは複数の行を選択して強調表示します。詳細は、164 ページの「項目の選択」を参照してください。

- b [インスタンス値の編集] をクリックし、選択した行の1つまたは複数の列にある値を変更します。

[インスタンスの編集] ダイアログボックスが開きます。



- c 変更する列を [列] リストから選択します。

- d 選択した列の値を、[列] リストの右側にある [列] ボックスに入力します。

- e 選択した行について同じ変更を加える必要があることを確認します。

▶ [適用] をクリックすると、選択した行についてデータベースがすぐに更新されます。

- f 変更が正しければ、[適用] をクリックして、プロパティテーブルで選択したすべての行をすぐに更新します。

- 8 結果として得られるインスタンスのうち一部だけをグループに含めたい場合は、以下を実行します。
 - a 1つまたは複数の行を選択して強調表示します。詳細は、164 ページの「項目の選択」を参照してください。
 - b **[選択したインスタンスだけを保存]** チェックボックスをオンにします。チェックマークがボックスに表示されていることを確認します。
- 9 完了したら、**[OK]** をクリックします。

ポーリンググループの編集

ポーリングポリシーを編集するときは、[グループ名] ボックスの値を除く、ウィンドウ内の全フィールドのすべての値を変更できます。

[タイプとビューの結合グループの編集] ダイアログボックスが開いたとき、ノードのリストは **[結果ノードのリストの表示]** ボタンをクリックするまで表示されません。ノードが多数ある場合は、説明の変更のみでも、ノードの表示が予想より長くなる場合があります。

[特定のインスタンスグループの編集] ダイアログボックスが開いたとき、インスタンスのリストは **[結果のインスタンスの表示]** ボタンをクリックするまで表示されません。ただし、**[選択したインスタンスだけを保存]** をクリックした場合は、ルールは保存せず、インスタンスのリストのみを保存し、更新されたノードのリストが表示されます。インスタンスが多数ある場合は、説明の変更のみでも、インスタンスの表示が予想より長くなる場合があります。[ルール] ボックスの値を変更するには **[編集]** ボタンをクリックしてください。

ノードの管理

ノードを作成、編集、または削除するには、以下の手順に従います。

- 1 [管理] スナップインにあるナビゲーションツリーで、[ノード管理] フォルダーを展開します。
- 2 **[ノードの管理]** をクリックします。

[ノードの管理] ウィンドウが開きます。

HP Performance Insight 管理コンソール
ファイル(F) 編集(E) ツール(T) ヘルプ(H)

システム 管理

オブジェクト
カタログ
グループ
システム
ホーム
接続
管理

ノードの管理
● ノードの管理
● SNMP プロファイルの管理
● コミュニティ文字列の管理
● テーブル
● ボーリングポリシー
● コピーポリシー

ノード管理ツールを使用して、検出、新しいノードの作成、既存のノードの編集または無効化を変更できます。表に、管理されるノードとその属性の一覧を示します。

- ノード名: ノードの名前またはノードの IP アドレスを指定します。
- ステータス: インポートしてノードのステータスを示します。
- SNMP プロファイル: ノードが SNMP プロトコルをサポートするかどうかを指定します。
- SNMP V2 フラグ: ノードが SNMP プロトコルをサポートするかどうかを指定します。
- SNMP プロファイル: ノードに割り当てられる SNMP プロファイルの名前を指定します。
- コミュニティ文字列: ノードのコミュニティ文字列を指定します。

現在のノード: 検索...

ノード名	ステータス	SNMP	SNMP V2	SNMP プロファイル	コミュニティ文字列プロファイル
15.153.129	Available	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	default	commprofile_1
15.154.44	Available	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	default	commprofile_1
15.194.27	Available	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	default	commprofile_1
15.128.164.1	Available	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	default	commprofile_1
15.128.9.128	Available	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	default	commprofile_1
15.128.9.129	Available	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	default	commprofile_1
15.128.9.130	Available	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	default	commprofile_1
15.129.22.187	Available	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	default	commprofile_1
15.13.104.6	Available	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	default	commprofile_1
15.140.11.216	Available	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	default	commprofile_1
15.148.8.21	Available	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	default	commprofile_1
15.148.8.31	Available	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	default	commprofile_1
15.148.8.35	Available	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	default	commprofile_1
15.148.8.36	Available	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	default	commprofile_1
15.148.8.37	Available	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	default	commprofile_1
15.148.8.38	Available	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	default	commprofile_1
15.148.8.39	Available	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	default	commprofile_1

タイプ検出 作成... 編集... 削除

このウィンドウには、現在のノードのリストが以下のフィールドとともに表示されます。

- [ノード名]: ノードの名前です。IP アドレスまたは英数字名です。
 - [ステータス]: ステータスは、ノードがポーリング可能かどうかを示します。
 - [SNMP]: ボックスがオンであれば、そのノードは **SNMP v1** データをサポートしています。
 - [SNMP V2]: ボックスがオンである場合、そのノードは **SNMP v2** データをサポートしています。
 - [SNMP プロファイル]: ノードの **SNMP** プロファイルの名前です。
 - [コミュニティ文字列プロファイル]: ノードのコミュニティ文字列プロファイルの名前です。
- 3 新しいノードを作成するには、261 ページの「[ノードの作成](#)」を参照してください。
 - 4 既存のノードを編集するには、263 ページの「[ノードの編集](#)」を参照してください。

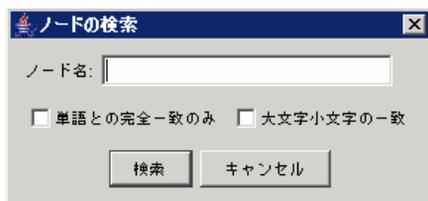
- 5 既存のノードを削除するには、263 ページの「ノードの削除」を参照してください。
- 6 完了したら、[閉じる]をクリックします。

ノードの検索

既存のノードをリストから検索するには、以下の手順に従います。

- 1 [ノードの管理] ウィンドウで、[検索]をクリックします。

[検索] ダイアログボックスが開きます。



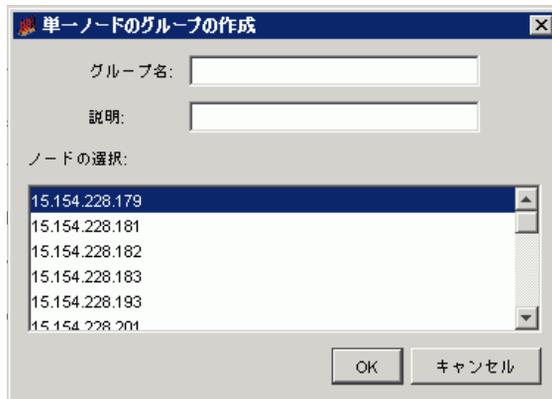
- 2 検索するノードの名前を [ノード名] ボックスに入力します。
- 3 名前の語句の一部分だけでなく全体が一致する語句だけを検索する場合は、[単語との完全一致のみ] チェックボックスをオンにします。
- 4 [ノード名] ボックスで指定した名前で、大文字小文字まで一致するよう検索する場合は、[大文字小文字の一致] チェックボックスをオンにします。
- 5 ノードを検索して強調表示するには、[検索]をクリックします。

ノードの作成

ノードを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 [ノードの管理] ウィンドウで、[作成]をクリックします。

[単一ノードのグループの作成] ダイアログボックスが開きます。



- 2 ノードの名前を [ノード名] ボックスに入力します。この名前は最大 64 文字までです。
- 3 SNMP プロファイルを [SNMP プロファイルの選択] リストから選択します。

SNMP プロファイルが存在しない場合は、[作成] をクリックして新しい SNMP プロファイルを作成します。詳細は、270 ページの「SNMP プロファイルの管理」を参照してください。

- 4 コミュニティ文字列プロファイルを [コミュニティ文字列プロファイルの選択] リストから選択します。

コミュニティ文字列プロファイルが存在しない場合は、[作成] をクリックして新しく作成します。詳細は、268 ページの「コミュニティ文字列プロファイルの管理」を参照してください。

- 5 ノードのステータスを [ステータス] リストから選択します。

[ステータス] リストには以下のオプションがあります。

- [使用不可]: この値を使用するのは、ノードを作成したいがまだポーリングはしたくない場合、または、現時点ではそのノードをポーリング不可能にしておきたい場合です。
- [Available]: ノードをポーリング可能にする場合に、この値を使用します。

- 6 ノードが SNMP v1 データをサポートしている場合は、[SNMP ノード] ボックスをオンにします。

- 7 ノードが **SNMP v2** データをサポートしている場合は、**[SNMP V2 ノード]** ボックスをオンにします。
- 8 **[OK]** をクリックします。

ノードの編集

既存のノードを編集するには、以下の手順に従います。

- 1 **[ノードの管理]** ウィンドウで、対応する行を強調表示することで、編集するノードを選択します。
または、単一のノードをダブルクリックし、**手順 3** に進みます。
既存のノードのリストの中でノードを検索する方法の詳細は、**261** ページの「**ノードの検索**」を参照してください。
- 2 **[編集]** をクリックします。
[ノードの編集] ダイアログボックスが開きます。
- 3 **[ノード名]** 以外の、任意の値を変更します。詳細は、**261** ページの「**ノードの作成**」を参照してください。
- 4 **[OK]** をクリックします。

ノードの削除

1つ以上の既存のノードを削除するには、以下の手順に従います。

- 1 **[ノードの管理]** ウィンドウで、対応する行を強調表示することで、削除する1つまたは複数のノードを選択します。詳細は、**164** ページの「**項目の選択**」を参照してください。
既存のノードのリストの中でノードを検索する方法の詳細は、**261** ページの「**ノードの検索**」を参照してください。
- 2 **[削除]** をクリックします。
削除の確認ウィンドウが表示されます。表示内容は、選択したノードが1つか複数かで異なります。
- 3 以下のいずれかを実行します。

- ノードを1つだけ選択した場合、そのノードを削除するには、[はい]をクリックします。
- ノードを複数選択した場合は、以下のいずれかを実行します。
 - ノードをすべて削除するには、[すべてはい]をクリックします。
 - 現在確認ウィンドウに表示されているノードを削除するには、[はい]をクリックします。
 - 現在確認ウィンドウに表示されているノードを取り消し、次のノードの確認ウィンドウに移るには、[いいえ]をクリックします。
 - 選択したノードをいずれも削除せずにウィンドウを閉じるには、[キャンセル]をクリックします。

ノードのインポート

ノードをインポートする手順は2段階になります。まず、インポートするノードを含むASCIIファイルを作成する必要があり、それからそのファイルをインポートする必要があります。

インポートファイルの作成

インポートしたいノードのリストを含むASCIIファイルを作成します。インポートしたい各ノードには、以下のフォーマットの記入事項を、ファイル内に記載する必要があります。

node_name, read_community, write_community, type_name, view_name, snmp_v1_flag, snmp_v2_flag, node_status, desc, snmp_profile, port_num, num_retries, timeout_sec, num_oids, get_bulk_size

データを入力しないパラメータには、カンマを代わりに置きます。カンマを置かない場合は、そのノードデータが省かれます。表 6 に、インポートファイルのパラメータを説明します。

表 6 インポートファイルのパラメータ

パラメータ	説明
<i>node_name</i>	ノードの名前、またはノードの IP アドレス。
<i>read_community</i>	ノードの読み取りコミュニティ文字列。プロファイルが存在しない場合は、システムによって作成されます。
<i>write_community</i>	ノードの書き込みコミュニティ文字列。プロファイルが存在しない場合は、システムによって作成されます。デフォルト値は private です。
<i>type_name</i>	<p>ポーリングするノードの一覧を含むタイプリストの名前です。このフィールドをファイル内に指定する場合は、グループ名を指定する必要があります。この名前が存在しない場合は、指定した名前のタイプリストがポーリングポリシーマネージャによって作成されます。</p> <p>グループ名は、[タイプグループの編集] ダイアログボックスの [グループ名] ボックスに表示されるものと同じです。このダイアログボックスを表示するには、[編集] メニューの [ポーリンググループ] オプションを選択し、[同じタイプのすべてのノード] オプションを選択してから、[編集] をクリックします。</p> <p>このパラメータを空欄にすると、ポーリングポリシーマネージャは、ノードをタイプリストグループに割り当てないか、またはノードをタイプリストグループから削除します。</p>

表 6 インポートファイルのパラメータ

パラメータ	説明
<i>view_name</i>	<p>ポーリングするノードの一覧を含むビューリストの名前です。このフィールドをファイル内に指定する場合は、グループ名を指定する必要があります。この名前が存在しない場合は、指定した名前のビューリストがポーリングポリシーマネージャによって作成されます。</p> <p>ビュー名は、[ビューグループの編集]ダイアログボックスの[グループ名]ボックスに表示されるものと同じです。このダイアログボックスを表示するには、[編集]メニューの[ポーリンググループ]オプションを選択し、[同じビュー内にあるすべてのノード]オプションを選択してから、[編集]をクリックします。</p> <p>このパラメータを空欄にすると、ポーリングポリシーマネージャは、このノードをビューリストグループに割り当てないか、またはこのノードをビューリストグループから削除します。</p>
<i>snmp_v1_flag</i>	<p>ノードが SNMP プロトコルをサポートしているかどうかを指定します。値を 1(サポートあり)または 0(サポートなし)に設定します。デフォルト値は 1 です。</p>
<i>snmp_v2_flag</i>	<p>ノードが SNMPv2 プロトコルをサポートしているかどうかを指定します。値を 1(サポートあり)または 0(サポートなし)に設定します。デフォルト値は 1 です。</p>
<i>node_status</i>	<p>インポート時のノードの状態を、開始、または停止に指定します。値を 1(開始)または 0(停止)に設定します。デフォルト値は 1 です。</p>
<i>desc</i>	<p>ノードの説明。このパラメータを空欄にすると、値は空になり、エクスポートファイルにはスペースとして表示されます。長さは最大 255 文字までです。</p>

表 6 インポートファイルのパラメータ

パラメータ	説明
<i>snmp_profile</i>	<p>ノードに割り当てられている SNMP プロファイルの名前です。このプロファイルが存在する場合は、そのプロファイルがノードに割り当てられ、<i>snmp_profile</i> パラメータの後のパラメータ (<i>port_num</i>、<i>num_retries</i>、<i>timeout_sec</i>、<i>num_oids</i>、<i>get_bulk_size</i>) は無視されます。</p> <p>このプロファイルが存在しない場合は、ポーリングポリシーマネージャが、<i>snmp_profile</i> パラメータの後のパラメータを使用してプロファイルを作成し、そのプロファイルをノードに割り当てます。</p> <p><i>snmp_profile</i> パラメータが空欄の場合は、値はデフォルトになり、ポーリングポリシーマネージャはその後のパラメータを無視します。</p>
<i>port_num</i>	新しい SNMP プロファイルの SNMP ポート番号。デフォルト値は 161 です。
<i>num_retries</i>	新しい SNMP プロファイルの再試行回数。デフォルト値は 5 です。
<i>timeout_sec</i>	SNMP 要求後のタイムアウトまでのミリ秒数。デフォルト値は 1000 です。
<i>num_oids</i>	新しい SNMP プロファイルの PDU に含める OID の数。デフォルト値は 20 です。
<i>get_bulk_size</i>	SNMPv2 の GetBULK 要求に使用するサイズ。デフォルト値は 50 です。

ファイルのインポート

管理対象のノードを含むファイルをインポートするには、以下の手順に従います。

- 1 [管理] スナップインにあるナビゲーションツリーで、**ポーリングポリシー**をクリックします。
- 2 [ファイル] メニューの [**ノードのインポート**] を選択します。
[インポート元] ダイアログボックスが開きます。

- 3 インポートするノードを含むファイルに移動します。
- 4 ファイル名をダブルクリックするか名前を選択し、[開く]をクリックします。

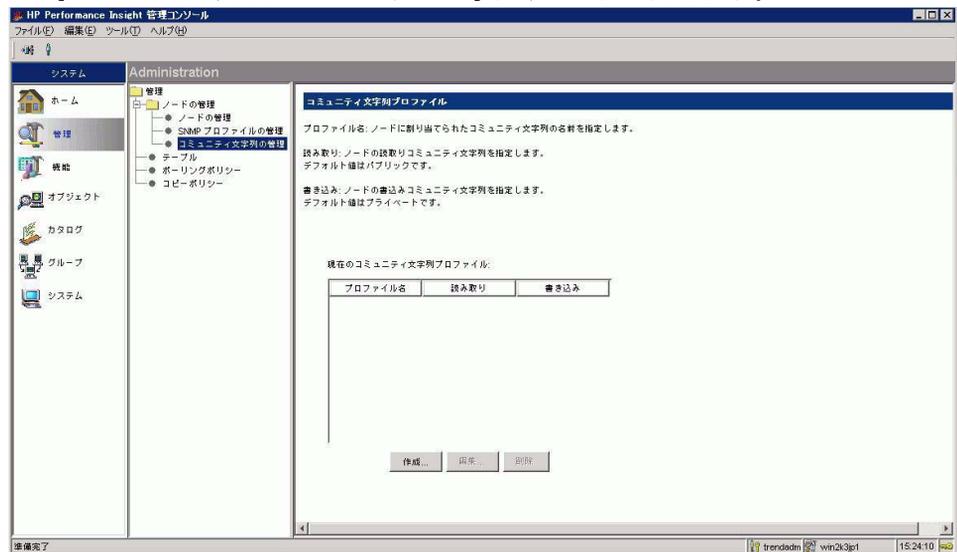
または、`node_manager` コマンドを使用してノードをインポートおよびエクスポートすることもできます。`node_manager` コマンドの詳細については、『**HP OpenView Performance Insight Reference Guide**』を参照してください。

コミュニティ文字列プロファイルの管理

既存のコミュニティ文字列プロファイルのリストを、プロファイルの名前、対応する読み取り権限および書き込み権限とともに表示するには、以下の手順に従います。

- 1 [管理] スナップインにあるナビゲーションツリーで、[ノードの管理] フォルダーを展開します。
- 2 [コミュニティ文字列の管理] をクリックします。

[コミュニティ文字列プロファイル] ウィンドウが開きます。



以下を実行できます。

- コミュニティ文字列プロファイルの作成。詳細は、269 ページの「コミュニティ文字列プロファイルの作成」を参照してください。
- コミュニティ文字列プロファイルの編集。詳細は、269 ページの「コミュニティ文字列プロファイルの編集」を参照してください。
- コミュニティ文字列プロファイルの削除。詳細は、270 ページの「コミュニティ文字列プロファイルの削除」を参照してください。

コミュニティ文字列プロファイルの作成

コミュニティ文字列プロファイルを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 [コミュニティ文字列プロファイル] ウィンドウで、[作成] をクリックします。

[コミュニティ文字列プロファイルの作成] ダイアログボックスが開きます。

- 2 プロファイルの名前を [プロファイル名] ボックスに入力します。この名前は最大 64 文字までです。
- 3 読み取り権限の値を [読み取り] ボックスに入力します。
- 4 書き込み権限の値を [書き込み] ボックスに入力します。
- 5 [OK] をクリックします。

コミュニティ文字列プロファイルの編集

コミュニティ文字列プロファイルを編集するには、以下の手順に従います。

- 1 [コミュニティ文字列プロファイル] ウィンドウから、変更するコミュニティ文字列プロファイルを選択します。

- 2 **[編集]** をクリックします。[コミュニティ文字列プロファイルの編集] ダイアログボックスが開きます。



- 3 権限の値を **[読み取り]** および **[書き込み]** フィールドで変更します。

▶ プロファイルの名前は変更できません。

- 4 **[OK]** をクリックします。

コミュニティ文字列プロファイルの削除

コミュニティ文字列プロファイルを削除するには、以下の手順に従います。

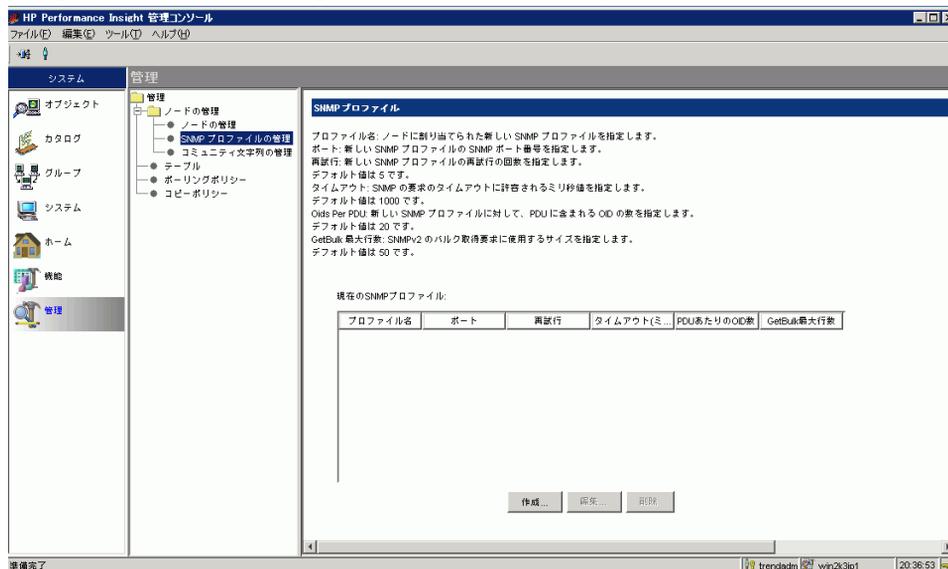
- 1 [コミュニティ文字列プロファイル] ウィンドウから、削除するコミュニティ文字列プロファイルを選択します。
- 2 **[削除]** をクリックします。
削除の確認ウィンドウが表示されます。
- 3 **[はい]** をクリックします。

SNMP プロファイルの管理

既存の SNMP プロファイルを、プロファイル名および対応する設定とともに表示するには、以下の手順に従います。

- 1 **[管理]** スナップインにあるナビゲーションツリーで、**[ノードの管理]** フォルダを展開します。
- 2 **[SNMP プロファイルの管理]** をクリックします。

[SNMP プロファイル] ウィンドウが開きます。



以下を実行できます。

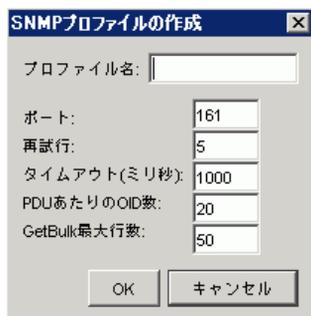
- コミュニティ文字列プロファイルの作成。詳細は、271 ページの「SNMP プロファイルの作成」を参照してください。
- コミュニティ文字列プロファイルの編集。詳細は、272 ページの「SNMP プロファイルの編集」を参照してください。
- コミュニティ文字列プロファイルの削除。詳細は、273 ページの「SNMP プロファイルの削除」を参照してください。

SNMP プロファイルの作成

SNMP プロファイルを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 [SNMP プロファイル] ウィンドウで、[作成] をクリックします。

[SNMP プロファイルの作成] ダイアログボックスが開きます。



The image shows a dialog box titled "SNMPプロファイルの作成" (SNMP Profile Creation). It contains several input fields and two buttons. The fields are: "プロファイル名:" (Profile Name) with an empty text box; "ポート:" (Port) with a numeric box containing "161"; "再試行:" (Retries) with a numeric box containing "5"; "タイムアウト(ミリ秒):" (Timeout in milliseconds) with a numeric box containing "1000"; "PDUあたりのOID数:" (Number of OIDs per PDU) with a numeric box containing "20"; and "GetBulk最大行数:" (Maximum number of rows for GetBulk) with a numeric box containing "50". At the bottom, there are two buttons: "OK" and "キャンセル" (Cancel).

- 2 プロファイルの名前を [プロファイル名] ボックスに入力します。この名前は最大 64 文字までです。
- 3 ポート番号の値を [ポート] ボックスに入力します。
- 4 許容する再試行回数を [再試行] ボックスに入力します。
- 5 タイムアウトまで待つ時間をミリ秒数単位で [タイムアウト (ミリ秒)] ボックスに入力します。
- 6 エージェントが PDU ごとにサポートする OID の最大数を [PDU あたりの OID 数] ボックスに入力します。
- 7 1 回の **GetBulk** 要求で取得される最大テーブル行数を [GetBulk 最大行数] ボックスに入力します。このフィールドは **SNMPv2** および **SNMPv3** のデバイスでのみサポートされています。
- 8 **[OK]** をクリックします。

SNMP プロファイルの編集

SNMP プロファイルを編集するには、以下の手順に従います。

- 1 [SNMP プロファイル] ウィンドウから、変更する SNMP プロファイルを選択します。
- 2 **[編集]** をクリックします。

[SNMP プロファイルの編集] ダイアログボックスが開きます。

A screenshot of the 'SNMP Profile Edit' dialog box. The title bar reads 'SNMP プロファイルの編集'. The dialog contains several input fields: 'プロファイル名:' with the value 'デフォルト', 'ポート:' with '161', '再試行:' with '5', 'タイムアウト (MS):' with '1000', 'PDU別のOid:' with '20', and '最大GetBulk行:' with '50'. At the bottom, there are 'OK' and 'キャンセル' buttons.

- 3 変更する必要がある設定の値を変更します。
プロファイルの名前は変更できません。
- 4 [OK] をクリックします。

SNMP プロファイルの削除

SNMP プロファイルを削除するには、以下の手順に従います。

- 1 [SNMP プロファイル] ウィンドウから、削除する SNMP プロファイルを選択します。
- 2 [削除] をクリックします。
削除の確認ウィンドウが表示されます。
- 3 [はい] をクリックします。

データパイプのインストールの管理

既存のデータパイプを、それぞれのデータパイプの対応するインストールリストとともに表示するには、以下の手順に従います。

- 1 [管理] スナップインにあるナビゲーションツリーで、[ポーリングポリシー] をクリックします。
[ポーリングポリシー] ウィンドウが開きます。
- 2 [編集] メニューの [データパイプのインストール] を選択します。

[データパイプのインストールの編集] ダイアログボックスが開きます。



以下を実行できます。

- コミュニティ文字列プロファイルの作成。詳細は、274 ページの「データパイプのインストールの作成」を参照してください。
- コミュニティ文字列プロファイルの編集。詳細は、275 ページの「データパイプのインストールの編集」を参照してください。
- コミュニティ文字列プロファイルの削除。詳細は、276 ページの「データパイプのインストールの削除」を参照してください。

データパイプのインストールの作成

データパイプのインストールを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 [データパイプのインストールの編集] ダイアログボックスから、[作成] をクリックします。

[データパイプインストールの作成] ダイアログボックスが開きます。

データパイプインストールの作成

ホスト名:

IPアドレス:

ルールファイル:

注意: ホスト名だけを入力した場合は、IPアドレスが自動的に参照されます。

OK キャンセル

- 2 収集ステーションのホスト名を [ホスト名] ボックスに入力します。

ホスト名だけを入力した場合は、システムによって IP アドレスが自動的に参照されます。システムでアドレスが正しく参照されるようにするには、完全修飾のホスト名を入力しなければならない場合があります。ホスト名を入力すると、そのホスト名が収集ステーションの名前になります。

指定したホスト名に対応する IP アドレスを検索できない場合は、アドレスが見つからなかったことを確認するウィンドウが表示されます。

- 3 収集ステーションの IP アドレスを [IP アドレス] ボックスに入力します。

ホスト名に対応するアドレスをシステムが検索できる場合は、このボックスを空欄のままにしておいてかまいません。IP アドレスだけを入力した場合は、そのアドレスが収集ステーションの名前になります。

- 4 収集ステーションの指示を含むファイルの名前を [ルールファイル] ボックスに入力します。このボックスは空欄のままにしておくことができます。

- 5 [OK] をクリックします。

データパイプのインストールの編集

データパイプのインストールを編集するには、以下の手順に従います。

- 1 [データパイプのインストールの編集] ダイアログボックスの [データパイプの選択] リストから変更するデータパイプを選択します。
- 2 [現在のデータパイプのインストール] リストで、対応するインストールをリストから選択します。

- 3 [編集] をクリックします。[データパイプのインストールの編集] ダイアログボックスが開きます。

データパイプのインストールの編集

ホスト名:

IPアドレス:

ルールファイル:

注意: ホスト名だけを入力した場合は、IPアドレスが自動的に参照されます。

OK キャンセル

- 4 変更する必要がある設定の値を変更します。
- 5 [OK] をクリックします。

データパイプのインストールの削除

データパイプのインストールを削除するには、以下の手順に従います。

- 1 [データパイプのインストールの編集] ダイアログボックスの [データパイプの選択] リストから削除するデータパイプを選択します。
- 2 対応するインストールを [現在のデータパイプのインストール] リストから選択します。
- 3 [削除] をクリックします。
削除の確認ウィンドウが表示されます。
- 4 [はい] をクリックします。

プロパティテーブルの値の変更

プロパティテーブルの値を変更するには、以下の手順に従います。

- 1 ナビゲーションペインの [管理] アイコンをクリックします。
[管理] スナップインが開きます。

- 2 [管理] スナップインにあるナビゲーションツリーで、[**ポーリングポリシー**] をクリックします。
- 3 [編集] メニューの [**説明**] を選択します。

[説明の編集] ダイアログボックスが開きます。



- 4 変更する値があるプロパティテーブルを [プロパティグループの選択] リストから選択します。
- 5 変更するインスタンスの選択条件を入力するには、[**編集**] をクリックします。[ルール] ダイアログボックスが開きます。



- 6 ルールの定義では、最大 2 つの列に選択条件を入力できます。
- a 列名を [列の選択] リストから選択します。これらは、選択したプロパティテーブルにある列です。
 - b 選択した列にある値に対する演算子を選択します。以下の演算子が使用できます。

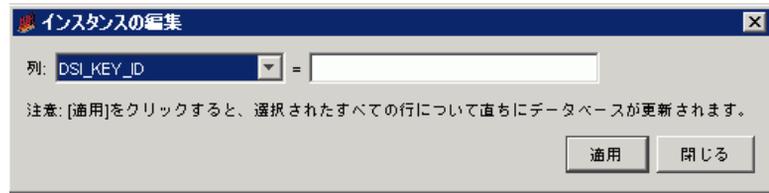
=	等しい
<	より小さい
>	より大きい
>=	以上
<=	以下
<>	等しくない

like

not like

- c 選択した列に対する値を、リストの右側のボックスに入力します。
 - d 2 つの列を選択した場合、または同じ列名を 2 回選択した場合は、2 つの列の間にある [演算子] リストから結合演算子を選択します。
同じ列名を 2 回選択した場合、その列を部分的に条件付ける、複合ルールを作成できます。
 - e 完了したら、**[OK]** をクリックします。
入力したルールが [ルール] ボックスに表示されます。
- 7 プロパティテーブルの選択した行に対応するすべての列を表示するには、**[結果のインスタンスの表示]** をクリックします。
- 8 [インスタンス] にある行の値を変更する場合は、以下を実行します。
- a 1 つまたは複数の行を選択して強調表示します。連続する行を選択できます。連続していない行のグループを選択するには、選択する行ごとに **[Ctrl]** キーを押します。

- b [**インスタンス値の編集**] をクリックし、選択した行の 1 つまたは複数の列にある値を変更します。[インスタンスの編集] ダイアログボックスが開きます。



- c 変更する列を [列] リストから選択します。
d 選択した列に対する値を [列] ボックスに入力します。
e 選択した行について同じ変更を加える必要があることを確認します。

▶ [**適用**] をクリックすると、選択した行についてデータベースがすぐに更新されます。

- f 変更が正しければ、[**適用**] をクリックして、プロパティテーブルで選択したすべての行を **すぐに** 更新します。正しくない場合は、[**閉じる**] をクリックしてダイアログボックスを閉じ、プロパティテーブルの行を変更しないままにします。
- 9 完了したら、[説明の編集] ダイアログボックスの [**閉じる**] をクリックします。

9 OVPI パフォーマンスグラフ

OVPI パフォーマンスグラフは、OVPI 管理コンソールから利用可能なアプリケーションです。管理コンソールの詳細は、第 4 章「管理コンソールの使用」を参照してください。このアプリケーションは一連のグラフを使用して、OVPI ポーリングのパフォーマンスを示します。VPI システムが正常に機能しているか、それとも過負荷であるかを把握することができます。

パフォーマンスグラフを参照すれば、ノードから収集されたデータの量および各ポーリングサイクルの期間を確認できます。

OVPI システムには、ポーリングのパフォーマンスを示す 3 種類のグラフがあります。

- **プロセスの所要時間** : OVPI ポーリング要素の期間グラフを表示します
- **ポーリングの稼動状態** : ポーリングが正常に実行されているかどうかを表示します
- **行数** : ポーリングサイクルごとのデータテーブル別の行数のグラフを表示します

OVPI パフォーマンスグラフの起動

OVPI パフォーマンスグラフアプリケーションを起動するには、以下の手順に従います。

- 1 管理コンソールを起動します。詳細は、96 ページの「**管理コンソールの起動**」を参照してください。



管理コンソールには管理者権限を持つアカウントでログオンする必要があります。

- 2 ナビゲーションペインの [**パフォーマンス**] アイコンをクリックします。

[Performance Insight Performance Graphs] ウィンドウが管理コンソール内に開きます。ウィンドウの左側にナビゲーションツリーが表示され、パフォーマンスグラフを取得するための3つのオプションがリストされます。

次の図は、[Performance Insight Performance Graphs] ウィンドウを示しています。

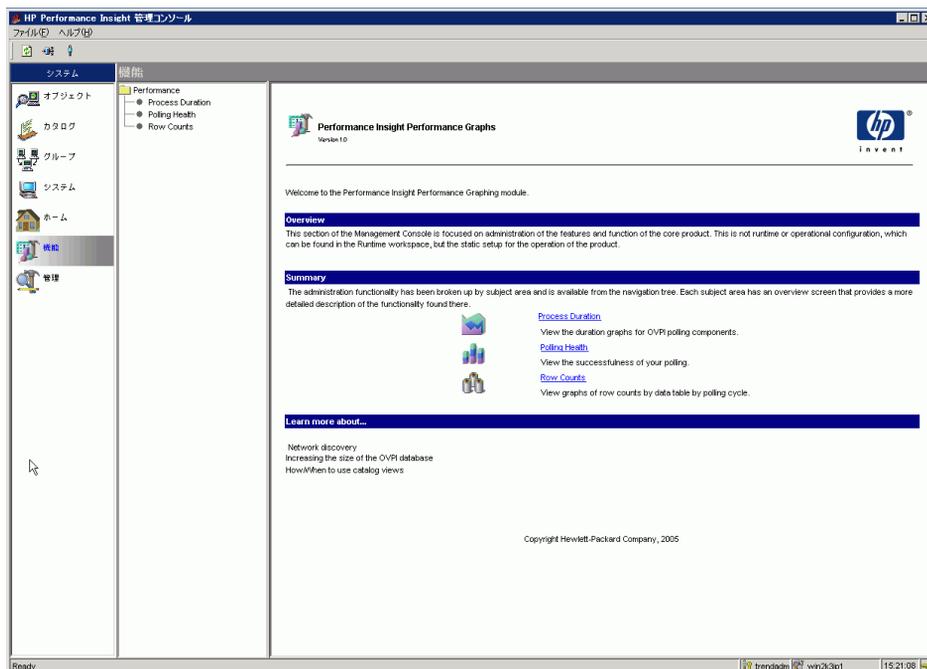


図 24 [Performance Insight Performance Graphs] ウィンドウ

OVPI パフォーマンスグラフの表示

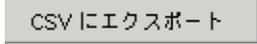
[Performance Insight Performance Graphs] ウィンドウのナビゲーションツリーで以下のいずれかをクリックします。

- プロセスの所要時間
- ポーリングの稼動状態
- 行数

どのパフォーマンスグラフでも必要とされるデータメトリックは以下のとおりです。

- 1 **[コレクタ]:** OVPI の外部にあるソースからデータを収集するプログラムです。以下のいずれか 1 つのコレクタを選択できます。
 - **MW:** MW オプションを使用すると、**HP OpenView Performance Insight (OVPI)** システムでノードをポーリングして **SNMP** データを取得できます。詳細については、『**HP OpenView Performance Insight Reference Guide**』を参照してください。
 - **EE:** EE オプションを使用すると、**HP OpenView Performance Insight (OVPI)** システムでフラットファイルからデータパイプにデータをインポートできます。データのインポートには、関連している **TEEL** ファイルからの指示を使用します。詳細については、『**HP OpenView Performance Insight TEEL Reference Guide**』を参照してください。
 - **SR:** SR オプションを使用すると、**OVPI** システム上で **OpenView パフォーマンスエージェント (OVPA)** または **OpenView Operations Agent (OVOA)** からデータを収集できます。使用されるコマンドは `pa_collect` です。詳細については、『**HP OpenView Performance Insight Reference Guide**』を参照してください。
- 2 **[ポーリング間隔]:** ポーリングの時間間隔 (分単位) です。
- 3 **[データテーブル]:** ポーリングされたノードからのデータが保存されるテーブルです。

パフォーマンスグラフの **[開始日]** は、データ取得を開始するためのフィルターです。所定の日の午前 **0 時 (00:00:00)** になります。同じく、**[終了日]** はデータ取得を終了するためのフィルターです。所定の日の **11:59:59** になります。グラフ

下部の日ナビゲーションバー  をクリックすることで、過去 7 日間 (当日を含む) に対応するグラフを表示できます。  ボタンをクリックすれば、パフォーマンスグラフからカンマ区切り値 (.csv) ファイルにデータをエクスポートできます。

プロセスの所要時間

プロセスまたはポーリングの所要時間データは、特定のデータテーブルの合計ポーリング時間を表します。このようなグラフは均一になっていなければなりません。プロセスの所要時間グラフは、特定のデータテーブルについてデータの収集にかかった時間を参照するために使用します。

時間範囲、ポーリング間隔、コレクタタイプ、データテーブルの組み合わせに基づいて、プロセスの所要時間のデータセットを取得できます。これらのパラメータを使用して折れ線グラフを作成することで、収集ウィンドウの限界にどの程度近づいているのか、さらに本来であれば全体的に比較的平坦であるはずの処理ストリームに「波」が現れていないかを確認することができます。



揺れの大きなグラフの場合は、多数のシステムが停止しているか、またはデータベースに問題が発生している可能性があります。

プロセスの所要時間グラフの作成

プロセスの所要時間グラフを作成するには、次の手順を実行します。

- 1 [Performance Insight Performance Graphs] ウィンドウの [Performance] ナビゲーションツリーで、[Process Duration] をクリックします。[機能 - ポーリング時間のデータ] ウィンドウが表示されます。
- 2 [Collector] のコンボボックスから、MW、SR、EE のいずれかのコレクタを選択します。
- 3 [Select Polling Interval] のコンボボックスから、必要な間隔を選択します。
- 4 [Select Data Table] のコンボボックスから、プロセスの所要時間を計算するデータテーブルを選択します。このデータテーブルに対して [All Policies] を選択すると、mw_collect、pa_collect、または ee_collect のプロセスに対する実際のプロセス時間が表示されます。
- 5 [Graph it !] をクリックします。

収集時間と所要時間（秒単位）の関係がグラフで表示されます。

赤い線は、選択されているポーリング間隔を示します。この線を超えると、直前のポーリングの実行に予想よりも長い時間がかかっているため、OVPI システムのポーリングが欠落している可能性があります。この場合は、パフォーマンスの調整が必要になります。

グラフ化できるのは、過去 7 日以内に使われたコレクタのデータのみです。

次の図は、OVPI プロセスの所要時間グラフの例です。

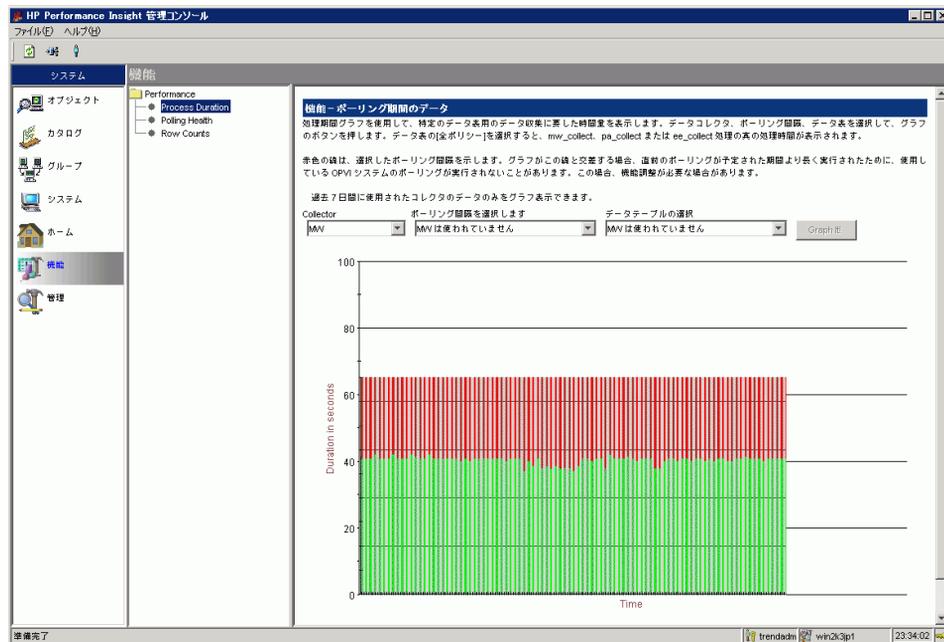


図 25 [機能 - ポーリング時間のデータ] ウィンドウ

ポーリングの稼動状態

ポーリングの稼動状態データでは、SNMP および OVPA のエージェントからのデータの収集に応答したノードの合計数がグラフ化されます。所定のポーリングサイクルで障害の数が多いと、ネットワークの停止または問題が発生している可能性があります。

ポーリングの稼動状態グラフでは、セットアップしたポリシーについてシステムがどの程度正常にポーリングを実行しているかをグラフで表します。

ポーリングの稼動状態グラフの作成

ポーリングの稼動状態グラフを作成するには、次の手順を実行します。

- 1 [Performance Insight Performance Graphs] ウィンドウの [Performance] ナビゲーションツリーで、[Polling Health] をクリックします。[機能 - ヘルスデータのポーリング] ウィンドウが表示されます。
- 2 [Collector] のコンボボックスから、MW、SR、EE のいずれかのコレクタを選択します。
- 3 [Select Polling Interval] のコンボボックスから、必要な間隔を選択します。
- 4 [Select Data Table] のコンボボックスから、ポーリングの稼動状態を計算するデータテーブルを選択します。
- 5 [Graph it !] をクリックします。

時間とノード数の関係がグラフで表示されます。

1 日を通して、ポーリンググループ内の各ノードについてポーリングの成功（緑）と失敗（赤）が積み上げ棒グラフで示されます。成功したノードは緑色で、失敗したノードは赤色で表示されます。

グラフの下にあるボタンを使って 1 日単位でグラフを前後させて、直近の 7 日間のデータを表示することができます。

グラフ化できるのは、過去 7 日以内に使われたコレクタのデータのみです。

次の図は、OVPI ポーリングの稼動状態グラフの例です。

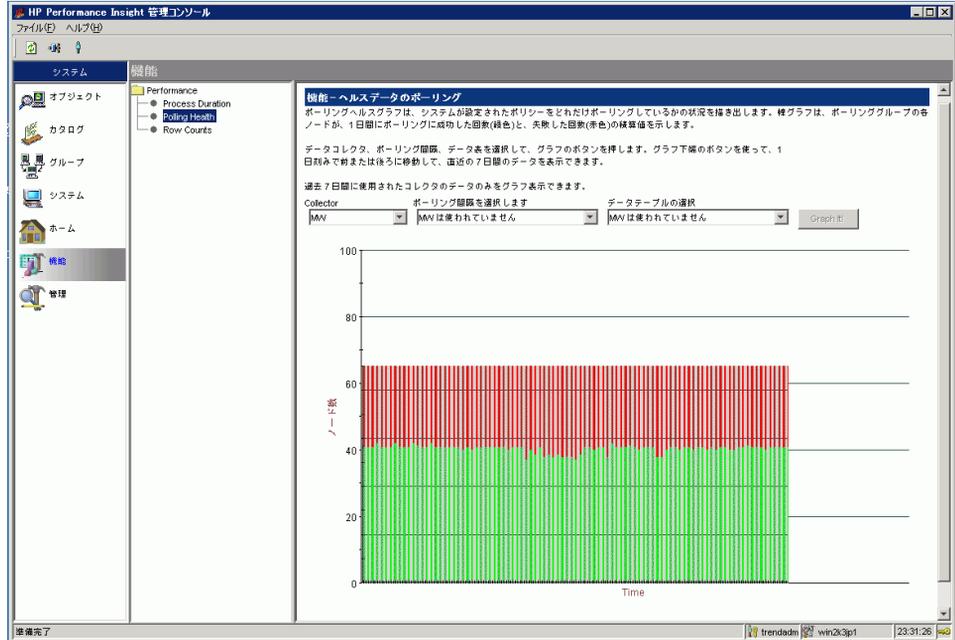


図 26 [機能 - ヘルスデータのポーリング] ウィンドウ

行数

行数グラフでは、特定のデータテーブルについてポーリング期間ごとのデータ量を示します。収集時間のピークがどこであるかを確認したり、データベースのサイズ情報を調べる場合に便利です。

最も忙しい時間帯を視覚化したり、レポートグラフでデータが欠落している場合のトラブルシューティングに役立てることができます。

行数グラフの作成

行数グラフを作成するには、次の手順を実行します。

- 1 [Performance Insight Performance Graphs] ウィンドウの [Performance] ナビゲーションツリーで、[Row Counts] をクリックします。[機能 - 行計数データ] ウィンドウが表示されます。
- 2 [Collector] のコンボボックスから、MW、SR、EE のいずれかのコレクタを選択します。
- 3 [ポーリング間隔を選択します] のコンボボックスから、必要な間隔を選択します。
- 4 [データテーブルの選択] のコンボボックスから、行数を計算するデータテーブルを選択します。
- 5 [Graph it !] をクリックします。

時間とノード数の関係がグラフで表示されます。

グラフの下にあるボタンを使って 1 日単位でグラフを前後させて、直近の 7 日間のデータを表示することができます。



収集済みの行として表示されている値は、必ずしもデータベースに保存されている行数を表すわけではありません。これは、ポーリングされたノードで動作しているパフォーマンスエージェントからの情報と重複するデータレコードをコレクタが取得することがあるためです。OpenView Performance Insight では、こうした重複するレコードはデータベースに挿入する前に破棄されます。

次の図は、OVPI 行数グラフの例です。

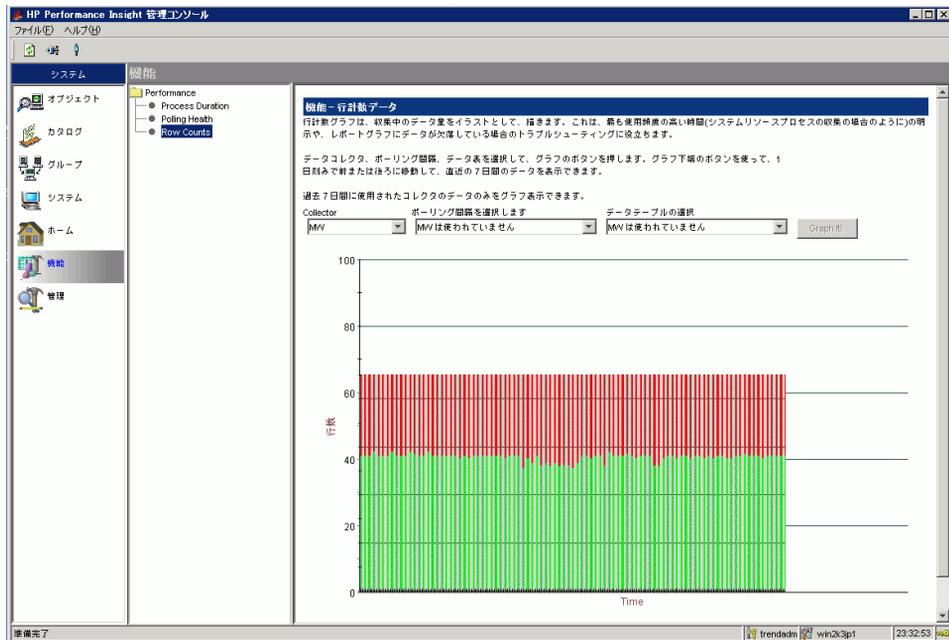


図 27 [機能 - 行計数データ] ウィンドウ

10 オブジェクトの管理

オブジェクトマネージャは管理コンソールから使用可能なアプリケーションであり、管理対象オブジェクトの検索と選択、オブジェクトに固有のプロパティ管理フォーム、レポートパック構成フォームへのアクセス、および選択したオブジェクトに関連するレポートの生成と表示を行うことができます。また、ノードオブジェクトをデータベースにインポートしたり、ノードを含んだエクスポートファイルを作成したりすることもできます。

オブジェクトとは、**OpenView Performance Insight (OVPI)** により管理（分析およびレポート）される任意のエンティティです。オブジェクトには、ノード、ノードの CPU、ノードのメモリおよびバッファ領域、インタフェース、**Frame Relay PVC**、**ATM PVC**、スロット、またはバックプレーンがあります。さまざまなオブジェクトタイプがさまざまなレポートパックにより管理されます。

フォームを使用すると、**OVPI** のプロパティテーブルにある管理対照オブジェクトに関する情報を表示したり変更したりできます。たとえば、フォームを使用してデータベース内のカスタマを更新できます。また、データベース内に新しいオブジェクトを作成するフォームにアクセスすることもできます。

オブジェクトモデルについて

OVPI のデフォルトのオブジェクトモデルでは、**ksi_managed_node** プロパティテーブルのみを調べます。レポートパックをインストールすると、このオブジェクトモデルのサイズと範囲が拡張されます。

モデルとは大きなカテゴリで、その中に含まれるものをグループ化することができます。レポートパックをインストールすると、デフォルト、カスタマ、およびロケーションモデルが作成されます。独自のモデルにその他のテクノロジーを追加することもできます。

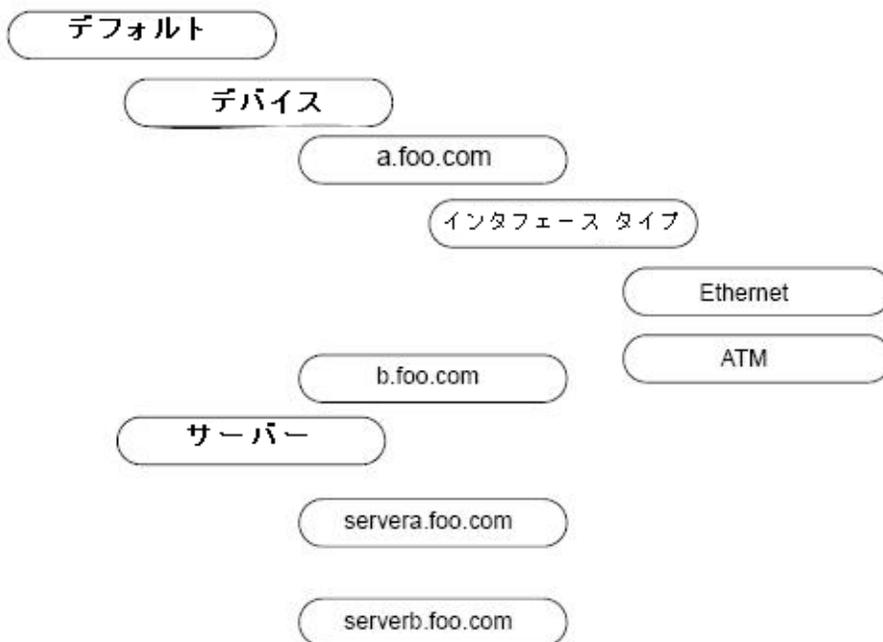
カテゴリはモデルの特徴を説明し、プロパティテーブルとそのテーブルの列から構築されます。カテゴリには、デバイス、インタフェース、プロトコル、カスタマ(モデルとカテゴリの両方)、ロケーション、サーバー、およびファイルシステムなどがあります。カテゴリは特定のプロパティ列に結び付けられています。いくつかの例を以下に示します。

デバイス	KSI_MANAGED_NODE.DSI_TARGET_NAME
	K_NODE.NODE_NAME
	KIRDEVPORTS.DSI_TARGET_NAME
インタフェース	KIRDEVPORTS.INTERFACENAME
	KV_FRSWITCH_PORT.PORT^a

a. このカテゴリは **KIRDEVPORTS.INTERFACENAME** を解決します。

現在、**OVPI** のオブジェクトモデルはカテゴリレベルのみを調べます。次の図は、カテゴリレベルを超えて拡張されるオブジェクトモデルを示しています。太字は **OVPI** がサポートしているカテゴリであることを示します。カテゴリオブジェクト (**foo.com**)、子カテゴリ (インタフェースのタイプ)、および子カテゴリ

オブジェクト (Ethernet と ATM) は OVPI によりサポートされていませんが、モデルに追加することができます。詳細は、301 ページの「新しいオブジェクトモデルの追加」を参照してください。



管理対象オブジェクトの検索

管理対象オブジェクトを表示するには、以下の手順に従います。

- 1 管理コンソールを起動します。詳細は、96 ページの「管理コンソールの起動」を参照してください。



管理コンソールには管理者権限を持つアカウントでログオンする必要があります。ユーザーアカウントの詳細は、516 ページの「ユーザーアカウントの管理」を参照してください。

- 2 ナビゲーションペインの [オブジェクト] アイコンをクリックします。

[オブジェクト/プロパティの管理] ウィンドウが管理コンソール内に開きます。ウィンドウの左側にはオブジェクトツリーが表示されます。そこに、選択したビューの種類に対応したすべてのオブジェクトが一覧表示されます。

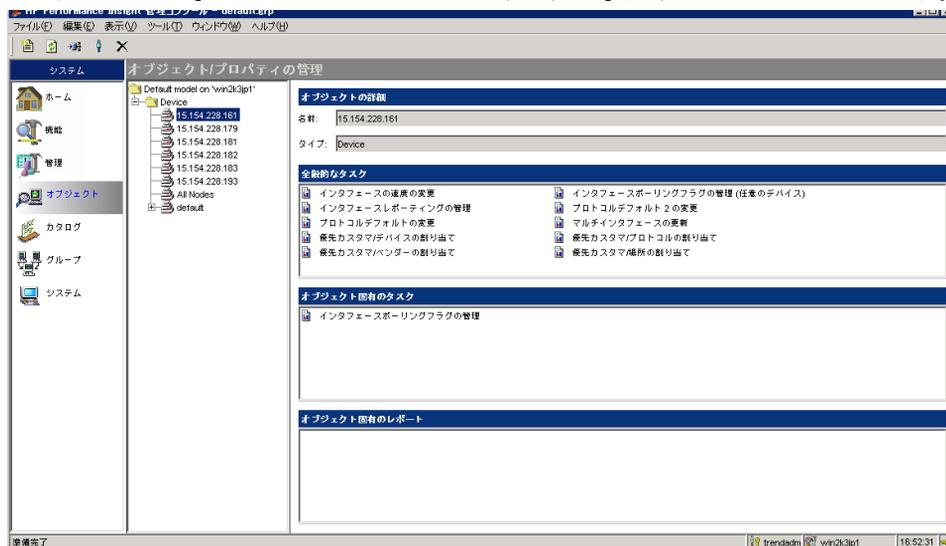
このツリーでは、オブジェクト名が数字順に並び、次にアルファベット順に並びます。大文字の英字が小文字の英字よりも前にくるようソートされます。関連付けられた名前を持たずに検出されたオブジェクトは、ツリーの中で該当するネットワークアドレス(たとえば 15.24.115.205)の下に表示されます。これらのアドレスはツリーの上部に一覧表示されます。

デフォルトでは、オブジェクトタイプ(たとえばデバイス)の1つ下のレベルには、アルファベットの文字ごとに、または数字ごとに、ツリー分岐が1つだけ表示されます。文字または数字の横にあるプラス記号(+)をクリックすると、その文字または数字で始まるオブジェクトのリストが表示されます。

[フォルダの一意性] の値を変更すると、ツリー内をより細かく区別できます。299 ページの「オブジェクトツリーの表示の変更」を参照してください。

必要なオブジェクトの正確な名前がわかっている場合は、検索機能を使用できます。297 ページの「特定のオブジェクトの検索」を参照してください。

以下の図は [オブジェクト/プロパティの管理] ウィンドウを示しています。



ウィンドウの右側には以下の情報が表示されます。

- オブジェクトの名前とタイプが [オブジェクトの詳細] セクションに表示されます。
- 1つのオブジェクトに固有のタスクではなくグローバルなタスクを表すフォームが、[全般的なタスク] セクションに表示されます。
- 選択したオブジェクトに適用されるフォームが、[オブジェクト固有のタスク] セクションに表示されます。このセクションには、データの変更に使用するフォームだけが表示されます。新しいデータを追加するには、308 ページの「新しい管理対象オブジェクトの作成」を参照してください。
- 選択したオブジェクトに適用されるレポートは、[オブジェクト固有のレポート] セクションに表示されます。



独自のフォームまたはレポートを作成してもオブジェクトマネージャで表示されない場合、そのフォームやレポートに必要なプロパティパラメータを作成しなかったことが原因である可能性があります。プロパティパラメータを作成して、フォームの作成に使用したテーブルまたはレポートの要素の作成に使用したテーブルにそのパラメータを関連付ける必要があります。フォームには1つのプロパティパラメータが必要であり、レポートにはその要素ごとにプロパティパラメータが必要です。フォームとレポートのプロパティパラメータ作成の詳細については、『HP OpenView Performance Insight レポートの作成および表示ガイド』を参照してください。

- 3 管理対象オブジェクトをオブジェクトツリーで選択するか、または検索機能を使用します (297 ページの「特定のオブジェクトの検索」を参照)。
- 4 レポートまたはフォームを表示するには、レポートまたはフォームの名前をダブルクリックします。

選択した項目が、別のウィンドウに表示されます。

- レポートを選択した場合は、OVPIによって、選択した管理対象オブジェクトのレポートが生成および表示されます。レポートは表示および印刷できます。
- タスクを選択した場合は、OVPIによって、選択した管理対象オブジェクトのデータが記載された、該当するフォームが表示されます。フォーム内の特定の値(たとえば、しきい値)は変更でき、それらの値は関連付けられたプロパティテーブルで更新されます。307 ページの「データベースの変更」を参照してください。

オブジェクトツリーで別の項目を選択すると、そのたびに、選択したオブジェクトが反映されるようフォームおよびレポートのリストが更新されます。

オブジェクトのビューの変更

管理対象オブジェクトの表示に使用されるプロパティを変更することができます。オブジェクトは、デバイス順、カスタマ順、場所順、ベンダー順、または Cards 順に表示できます。

オブジェクトのビューを変更するには、以下の手順に従います。

- 1 [表示] メニューから [ビューの変更] を選択します。

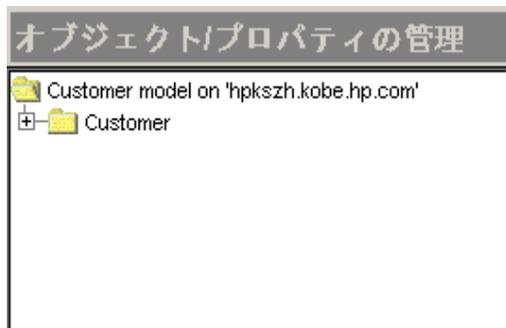
[ビューの選択] ダイアログボックスが開きます。



- 2 プロパティを選択し、[OK] をクリックします。

オブジェクトツリーが更新され、そのプロパティが割り当てられているすべての管理対象オブジェクトが表示されます。

たとえば、カスタマ用のすべての管理対象オブジェクトを表示したいと仮定します。[Customer] フォルダを展開した後のオブジェクトツリーの表示は以下の図のようになります。



特定のオブジェクトの検索

表示したいオブジェクトの正確な名前がわかっている場合は、検索機能を使用してその情報にすばやくアクセスできます。

- 1 [編集] メニューから [検索] を選択します。

[検索] ダイアログボックスが開きます。



- 2 オブジェクト名をテキスト領域に入力し、[検索] をクリックします。

入力した名前を OVPI が見つけると、対応するオブジェクトがオブジェクトツリーの中で強調表示され、関連付けられたフォームとレポートがそれぞれの領域に一覧表示されます。

- 3 以下のいずれかを実行します。
 - 入力したオブジェクト名が OVPI によって見つからなかった場合は、別の名前を入力して試します。
 - 正しいオブジェクト名がオブジェクトツリーの中で強調表示されたら、[検索] ダイアログボックスの [閉じる] をクリックします。

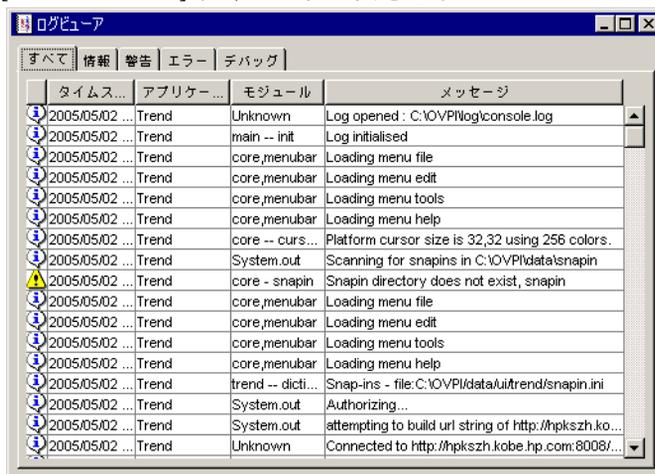
- 4 希望のオブジェクト名が強調表示されたら、295 ページの**手順 4**に進みます。

ログ情報の表示

[表示]メニューには、ログファイル情報とデバッグ情報を表示できる2つのオプションがあります。

ログファイル情報を表示するには、[表示]メニューから**[ログ]**を選択します。

[ログビューア]ウィンドウが開きます



[ログビューア]ウィンドウには5つのタブがあり、それぞれに各種のログ情報が表示されます。ログメッセージは4つのタイプがあります。[情報]、[警告]、[エラー]、および[デバッグ]です。[すべて]タブには、4タイプすべてのメッセージが表示されます。

出力情報を表示するには、[表示]メニューの**[出力]**を選択します。

[出力ビューア]ウィンドウに、生成された最新のログメッセージが表示されます。

オブジェクトツリーの表示の変更

非常に多数のオブジェクトがある場合、ツリーの長さを制御するための設定をすることで、スクロールを最小限に抑えることができます。一方、スクロールは気にならないがフォルダーを展開せずにオブジェクトをすばやく見つけたいという場合は、他の設定をすることで実現できます。

これらのオプションは [編集] メニューの [オプション] の [オブジェクトの管理] タブの下にあります。[レベルあたりのツリーノード数] 値と [フォルダの一意性] 値とが互いに連動することで、オブジェクトツリー内の各レベルに表示されるフォルダーまたはリーフの個数が決まります。

[レベルあたりのツリーノード数] には、ツリーの各レベルごとに表示するフォルダー/リーフの最大数を設定します。データベース内のオブジェクトの数がこの値を超えると、OVPI が [フォルダの一意性] フィールドを調べて、表示されているフォルダーとリーフの数を減らす方法を決めます。[フォルダの一意性] は、オブジェクト名をアルファベット、または数字で区分する際に、[フォルダの一意性] の値に基づいて行います。値が 1 の場合はオブジェクト名の最初の 1 文字で、値が 2 の場合は最初の 2 文字でオブジェクトを区分します。[フォルダの一意性] に対して可能な最小値は 1 であるため、非常に長いリストがツリーに表示されることもあります。たとえば、[レベルあたりのツリーノード数] を 500 に設定し、[フォルダの一意性] を 1 に設定した場合に、10,000 台のデバイスがあると、あるフォルダーではアルファベットの A で始まるすべてのデバイス名が表示され、別のフォルダーでは B で始まるすべてのデバイス名が表示され、以下同様となります。あるツリーレベルで 500 を超えるフォルダーが表示される可能性もありますが、OVPI によって、フォルダーの数が最小限になるようすでに調整されています。

表示されるフォルダーやリーフの数は気にならず、各ノード名をすばやく特定できるようにしたい場合は、[レベルあたりのツリーノード数] にオブジェクト数よりも少ない値を設定し、[フォルダの一意性] に 1 よりも大きい値を設定します。すると、各オブジェクト名の 2 文字以上の文字 (例、AA、AB など) も表示されます ([レベルあたりのツリーノード数] は比較的小さい値にする必要があります。そうしないと、OVPI は [フォルダの一意性] 値を調べません)。

たとえば、Denver という名前のオブジェクトと Destroy という名前の別のオブジェクトがある場合は、名前の最初の 3 文字 (それぞれ den および des) を表示するよう選択することで、各オブジェクト名をすぐに区別できます。

オブジェクトツリーの外観を変更するには、以下の手順に従います。

- 1 [編集]メニューから[オプション]を選択します。

[オプション]ウィンドウが開きます。

- 2 [オブジェクトの管理]タブを選択します。

[オブジェクトの管理]ダイアログボックスが開きます。



- 3 [ナビゲーションビュー]ボックスで、下矢印をクリックして使用可能なビューを表示し、希望のビューを選択します。[デバイス](デフォルト)、[カスタマ]、[場所]、[ベンダー]、または[Cards]を選択できます。
- 4 [レベルあたりのツリーノード数]ボックスに、オブジェクトツリー内の各レベルに表示したいオブジェクトの最大数を入力します。

データベース内のオブジェクトの数がこの値を超えると、OVPIが[フォルダの一意性]の値を調べて、表示されているフォルダーとリーフの数を減らす方法を決めます。これらのフィールドに関する前述の説明を参照してください。

- 5 [フォルダの一意性(文字数)]ボックスに、ツリーの各レベルに各フォルダーまたは各リーフに対して表示する、識別用の文字の数を入力します。

この値が有効なのは、データベース内のオブジェクトの数が [レベルあたりのツリーノード数] フィールドの値を超えている場合のみです。これらのフィールドに関する前述の説明を参照してください。

- 6 [適用] をクリックします (または、[オプション] ウィンドウでの変更がすべて完了したら、[OK] をクリックします)。
- 7 [表示] メニューの [更新] を選択します。
オブジェクトツリーのビューが更新されます。

新しいオブジェクトモデルの追加

特定のカテゴリによって何かを管理する場合、そのオブジェクトを作成することができます。たとえば、管理対象サーバーの CPU 情報のみを必要とする **System Resource** レポートパック (Oracle データベース ?) の新しいオブジェクトモデルを登録するとします。

適切なオブジェクトモデルを作成するには、以下について記述できる必要があります。

- モデル
- モデルのカテゴリ
- カテゴリを記述するプロパティ列
- ツリーを構築する親 / 子関係
- モデルを利用するフォーム、レポート、またはその両方

マスターモデルはサーバーで、モデルの下のカテゴリはサーバーと CPU です。階層ツリーは以下のようになるはずです。

Servers

サーバー

CPU

オブジェクトモデルを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 テキストエディタを使用してファイルを作成し、
`create_sys_resources_ObjectModel.sql` などの名前を付けます。

- 2 SQL ファイルに以下のように入力して、モデルコンテナ Servers を作成します。

```
dsi_relation_model_p (in_action => 1,  
in_name => 'Servers',  
in_image_name => Odevice0,  
in_descr => 'Model for servers managed by OVPI');
```

現時点では何も関係を持たないコンテナであるため、Servers コンテナの視覚的な表示はありません。

- 3 SQL ファイルに以下のように入力して、サーバーと CPU のカテゴリコンテナを作成します。

```
dsi_object_category_p(in_action=> 1,  
in_name => 'Server',  
in_image_name => Odevice0,  
in_descr=>OServer Category0);  
dsi_object_category_p(in_action=> 1,  
in_name => 'CPU',  
in_image_name => Odevice0,  
in_descr=>OCPU Child Category0);
```

この時点ではこれら 2 つのコンテナも空のコンテナです。これらのコンテナに何が属するかを記述するには、これらのコンテナをデータベースのプロパティ列に関連付ける必要があります。

- 4 以下のように入力して、カテゴリとプロパティ列の間にマッピングを作成します。

```
dsi_category_instance_p(in_action=> 1,  
in_object_category=> OServer0,  
in_property_table=> OK_SYSTEM_CPU0,  
in_property_column=> ODSI_TARGET_NAME0);
```

これらの SQL 文は、DSI_TARGET_NAME のすべての値をテーブル K_SYSTEM_CPU に格納し、Server カテゴリに配置します。

```
dsi_category_instance_p(in_action=> 1,
```

```
in_object_category=> OCPUO,  
in_property_table=> OK_SYSTEM_CPUO,  
in_property_column=> OCPUIDO);
```

これらの SQL 文は、CPUID のすべての値をテーブル K_SYSTEM_CPU に格納し、CPU カテゴリに配置します。この時点ではまだ関係は作成されていません。したがって、ツリーを構築するには階層関係を作成する必要があります。



カテゴリ名に関係なく、同じプロパティテーブルにすべての親子関係が構築されます。オブジェクトモデルの最初のレベルには、そのモデル自体の親/子関係が含まれています。

- 5 階層関係を作成するには、SQL ファイルに以下のように入力します。

```
dsi_model_instance_p(in_action=> 1,  
  in_model=>'Servers',  
  in_parent_object_category=>'Server',  
  in_parent_property_table=>'K_SYSTEM_CPU',  
  in_parent_property_column=>'DSI_TARGET_NAME',  
  in_child_object_category=>'Server',  
  in_child_property_table=>'K_SYSTEM_CPU',  
  in_child_property_column=>'DSI_TARGET_NAME');
```

この手順を実行し、テーブル K_SYSTEM_CPU にデータを格納した後にオブジェクトマネージャを調べると、以下のようにになっているのが確認できます。

```
--Servers  
  - サーバー  
    - サーバー A  
    - サーバー B  
    - サーバー C
```

- 6 SQL ファイルに以下のように入力して、CPU カテゴリを作成します。

```
dsi_model_instance_p(in_action=> 1,
```

```
in_model=>'Servers',
in_parent_object_category=>'Server',
in_parent_property_table=>'K_SYSTEM_CPU',
in_parent_property_column=>'DSI_TARGET_NAME',
in_child_object_category=>'CPU',
in_child_property_table=>'K_SYSTEM_CPU',
in_child_property_column=>'CPUID');
```



親は最初に登録した列を示し、子はその親の子であり、同じプロパティテーブルで別の列に属しています。子は、常に親オブジェクトのなんらかのサブセットである必要があります。サーバーには複数の CPU が含まれますが、CPU に多数のサーバーが含まれることはありません。

この手順を実行した後にオブジェクトマネージャを調べると、以下のようになっているのが確認できます。

```
--Servers
```

```
- サーバー
  - サーバー A
    -CPU
      1
      2
      3
  - サーバー B
    -CPU
      1
  - サーバー C
```

ノードのインポート

ノードをインポートする手順は 2 段階になります。まず、インポートするノードを含む ASCII ファイルを作成する必要があります、それからそのファイルをインポートする必要があります。

インポートファイルの作成

インポートしたいノードのリストを含む ASCII ファイルを作成します。インポートしたい各ノードには、以下のフォーマットの記入事項を、ファイル内に記載する必要があります。

node_name, read_community, write_community, type_name, view_name, snmp_v1_flag, snmp_v2_flag, node_status, desc, snmp_profile, port_num, num_retries, timeout_sec, num_oids, get_bulk_size

データを入力しないパラメータには、カンマを代わりに置きます。カンマを置かない場合は、そのノードデータが省かれます。265 ページの表 6 に、インポートファイルのパラメータを説明します。

ファイルのインポート

管理対象のノードを含むファイルをインポートするには、以下の手順に従います。

- 1 [ファイル]メニューから [インポート] を選択します。
[インポート元]ダイアログボックスが開きます。
- 2 インポートするノードを含むファイルに移動します。
- 3 ファイル名をダブルクリックするか名前を選択し、[開く]をクリックします。

ノードのエクスポート

管理対象ノードを含むファイルを作成し、これを使用して、ノードを別のデータベースにエクスポートできます。

管理対象ノードを含むエクスポートファイルを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 [ファイル]メニューの[エクスポート]を選択します。
[エクスポート先]ダイアログボックスが開きます。
- 2 エクスポートファイルの保存先に移動します。
- 3 ファイル名を[ファイル名]ボックスに入力し、[開く]をクリックします。
ファイルの作成中は進捗ウィンドウが表示されます。

フォームの使用

フォームを使用すると、単一のデータベーステーブルの場合、データベース内の、新しいデータの作成と既存のデータの変更ができます。また、フォームを使用して、管理対象オブジェクトを管理コンソールから作成、および変更することも可能です。レポートパックの設定中にプロパティファイル情報をインポートしなかった場合は、この機能を使って行えます。

管理対象オブジェクトの独自のフォームを作成するには、『**HP OpenView Performance Insight** レポートの作成および表示ガイド』を参照してください。



独自のフォームを作成してもオブジェクトマネージャで表示されない場合、そのフォームのプロパティパラメータを作成しなかったことが原因である可能性があります。フォームには、そのフォームを作成する際に使用したテーブルに関連付けられているプロパティパラメータが必要です。フォームのプロパティパラメータ作成の詳細については、『**HP OpenView Performance Insight** レポートの作成および表示ガイド』を参照してください。

データベースの変更

フォームを使用して、選択した管理対象オブジェクトに対応するデータベース内のデータを変更するには、以下の手順に従います。

- 1 [オブジェクト] ツリーで管理対象オブジェクトをクリックします。たとえば、デバイスを選択します。
- 2 選択したオブジェクトに固有の [全般的なタスク] セクション、または [タスク] セクションにある、フォームをダブルクリックします。

選択したフォームが別のウィンドウに表示されます。たとえば、[プロトコルデフォルトの変更] というフォームを選択できます。これにはデフォルトのプロトコル設定が表示され、それらは変更できます。



インタフェースのレポートिंग
プロトコルデフォルトの変更

このフォームを使用して、「インタフェースレポートिंग」レポートバックのプロトコル（インタフェースタイプ）のデフォルト設定を変更できます。別のプロトコルの名前を変更したり、各プロトコルのデフォルトの定数およびしきい値の設定を変更することができます。Monitor フラグを Off (0) にセットされたインタフェースタイプをレポートしないようシステムを設定することもできます。設定を変更したいプロトコルを選択して、下に新しい設定を入力してください。[適用] ボタンをクリックすると、変更が保存されます。[キャンセル] ボタンをクリックすると、変更が取り消されます。[OK] ボタンをクリックすると、変更を保存してフォームを閉じます。

ifType	プロトコル名	定数	Monitor	デフォルト 使用率しき い値	デフォルト 廃棄しきい 値	デフォルト エラーしき い値
1	other	Full	On	90.00	1.00	1.00
2	regular1822	Full	On	90.00	2.00	2.00
3	hdh1822	Full	On	90.00	2.00	2.00
4	ddn-x25	Full	On	90.00	2.00	2.00
5	rfo877-x25	Full	On	90.00	2.00	2.00
6	ethernet-csma/cd	Half	On	30.00	1.00	1.00
7	iso88023-csma/cd	Half	On	90.00	2.00	2.00
8	iso-88024-tokenBus	Half	On	50.00	2.00	2.00
9	iso-88025-tokenRing	Half	On	50.00	2.00	2.00
10	iso88026-man	Full	On	90.00	2.00	2.00
11	statLan	Full	On	90.00	2.00	2.00

プロトコル名: other Monitor: On

使用率%: 90.00 エラー%: 1.00 廃棄%: 1.00

OK 適用 キャンセル

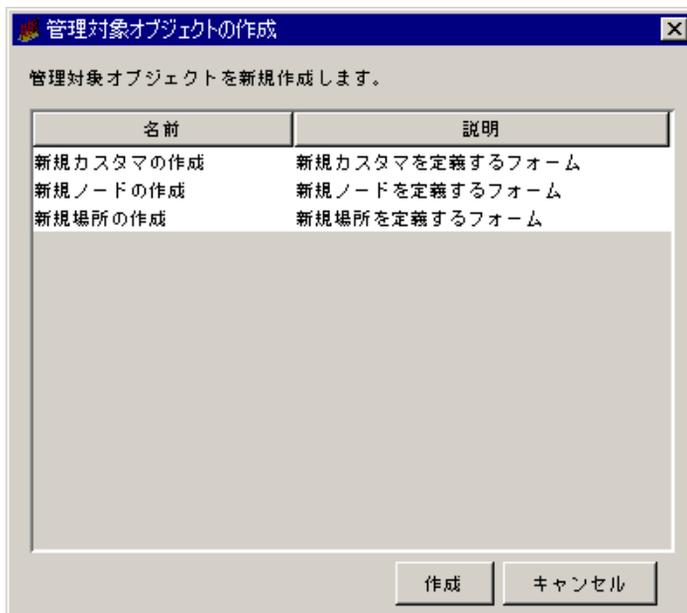
- 3 フォームに変更を加え、[OK] をクリックします。

ここで加えた変更に関連するプロパティテーブルの値が、OVPIによって変更されます。

新しい管理対象オブジェクトの作成

フォームを使用して管理対象オブジェクトをデータベースに追加するには、以下の手順に従います。

- 1 [ファイル]メニューの[新規]を選択します。
[管理対象オブジェクトの作成]ダイアログボックスが開きます。



- 2 使用するフォームを選択し、[作成]をクリックします。
フォームが開きます。フィールド（入力フィールドと入力コンボボックス）はすべて空になっています。
- 3 フォームに変更を加え、以下のいずれかを実行します。
 - オブジェクトの作成が完了したら、手順4に進みます。
 - 別のオブジェクトを作成する場合は、[適用]をクリックし手順2に戻ります。
- 4 [OK]をクリックします。
OVPIによってオブジェクトがデータベースに追加されます。

ノードの削除

ノードやオブジェクトをこれ以上ポーリングする必要がない場合には、そのノードまたはオブジェクトを **OVPI** から削除することができます。

OVPI データベースからのノードの削除は、以下の場合に必要なことがあります。

- システムまたはインタフェースなどの管理対象オブジェクトがネットワークで不要になったか、またはそのオブジェクトのデータを収集する必要がなくなった。
- 一部のオブジェクトからデータを収集する必要がなくなった。オブジェクトにマークを付け、ポーリングを停止させることができます。これらのオブジェクトに関連付けられたデータは、自動的に使用できなくなります。すべてのデータが削除されると、オブジェクトも削除されます。
- 管理対象オブジェクトはネットワークにあるが、特定の収集だけが必要であり、他の管理ソリューションに表示する必要はない。たとえば、ネットワークのために管理する必要はあるが、**Interface Reporting** は必要ない場合などです。



以下の手順に従い、管理対象オブジェクト削除ウィザードを使用して、デバイスまたはインタフェースのタイプ、あるいはインタフェースのみを削除できます。このウィザードは、他のタイプのオブジェクトは削除しません。

ノードまたはノードのグループを削除する

以下の手順を実行してノードまたはノードのグループを削除します。

タスク 1: ノードまたはノードのグループを選択して、削除処理を開始します。

- 1 管理コンソールで、**[オブジェクト]** スナップインをクリックします。

[オブジェクト/プロパティの管理] ウィンドウが管理コンソール内に開きます。

以下の図は [オブジェクト/プロパティの管理] ウィンドウを示しています。

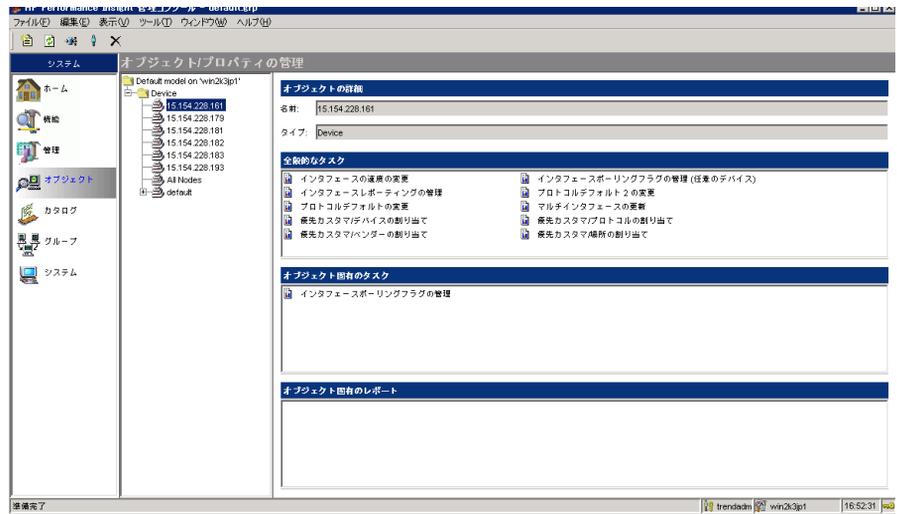


図 28 [オブジェクト/プロパティの管理] ウィンドウ

- 2 削除するノードまたはノードのグループを選択します。
- 3 ツールバーで [削除] ボタン  をクリックします。

[オブジェクト削除の準備] ダイアログボックスが表示されます。

- 4 [はい] をクリックして、オブジェクトまたはノードの削除処理を開始します。管理対象オブジェクト削除ウィザードが開きます。

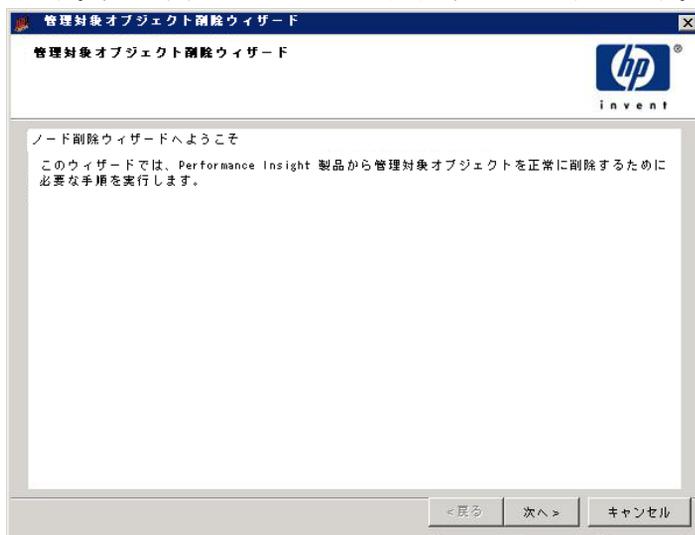


図 29 管理対象オブジェクト削除ウィザード



管理対象オブジェクト削除ウィザードは、デバイスまたはインタフェースのタイプ、あるいはインタフェースを削除する場合にのみ呼び出すことができます。このウィザードは、他のタイプのオブジェクトは削除しません。

タスク 2: 削除のタイプを選択します。

- 1 管理対象オブジェクト削除ウィザードで、[次へ] をクリックして続行します。ウィザードが開き、以下の 2 つのオプションのいずれかを選択できます。
- 2 以下のいずれかを選択します。
 - **選択したオブジェクトのデータのみを削除:** このオプションを選択すると、選択したノードのすべてのデータが OVPI データベースから削除されます。ノードは削除されないため、将来このノードまたはノードのグループのためにデータを収集することができます。
 - **選択したオブジェクトおよびデータを完全に削除:** このオプションを選択すると、選択したノードまたはノードのグループがプロパティテーブルから削除されます。これまでに収集されたすべてのデータも削除されます。また、将来このノードまたはノードのグループのためにデータを収集することはできません。

次の図は、2つの削除オプションを示しています。

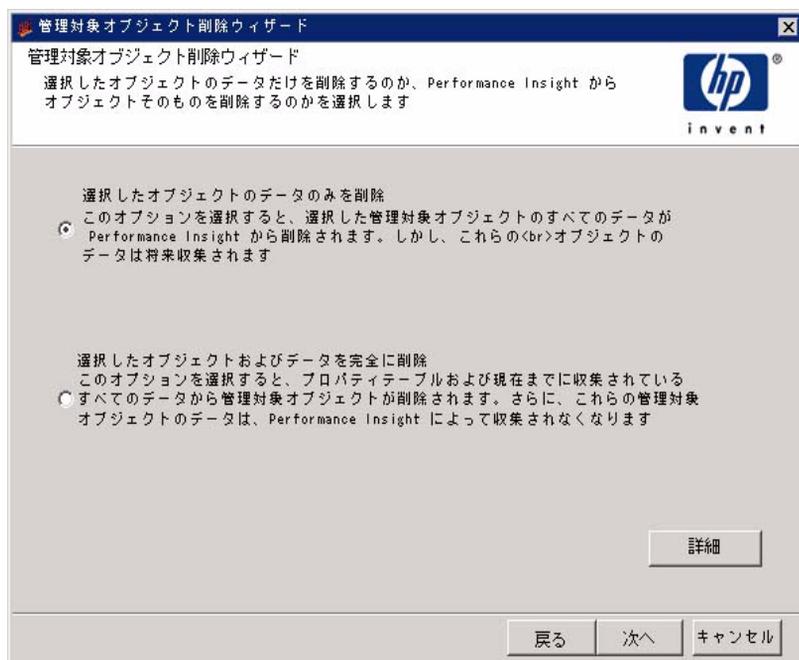


図 30 オプションを選択する管理対象オブジェクト削除ウィザード

タスク 3: 削除のタイプを制御します。

a データのみを削除オプションの場合

- 1 [**選択したオブジェクトのデータのみを削除**] を選択してから、[**詳細**] をクリックします。詳細な削除ウィザードが開き、削除のタイプを制御できます。

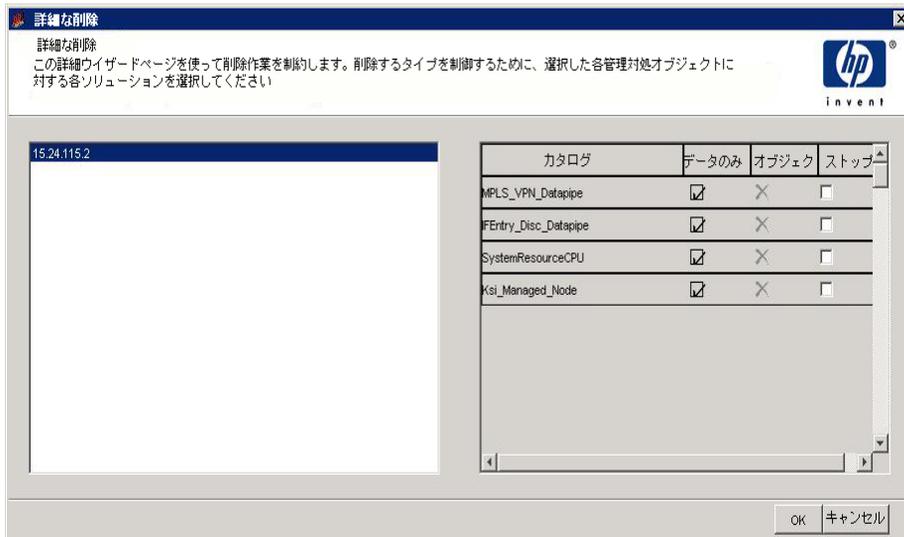


図 31 データのみを削除する詳細な削除ウィザード

- 2 ノードのいずれかのカテゴリのデータ収集を停止するには、[**ストップ**] ボックスを選択します。
- 3 デフォルトでは、[**データのみ**] ボックスが選択されています。データを削除したくない場合は [**データのみ**] ボックスの選択を解除します。デフォルトでは、[**オブジェクト**] ボックスは使用不可になっており、 マークが表示されます。

4 [OK] をクリックして続行します。



[ストップ] を選択している場合は、必ず以下を実行します。

- [ストップ] は、PI データベースで選択したレポートパックに新規データが取り込まれないことを意味します。デバイスまたはインタフェースのネットワークポーリングが停止するというものではありません。ネットワークからのポーリングは発生しますが、データは PI レポートパックのスキーマにアップロードされません。このオプションは、ネットワーク負荷を減少させるためのものではありません。
- 収集の停止オプションは、このリリースでは以下のカテゴリの場合のみサポートされています。
 - ksi_managed_node
 - CommonProperty テーブル
 - Interface Reporting

その他のカテゴリの場合は、[ストップ] を選択できますが、これらのカテゴリのデータ収集を実行可能にする GUI のサポートはありません。

b ノードの完全削除オプションの場合

- 1 ステップ 6 で [選択したオブジェクトおよびデータを完全に削除] を選択してから、[詳細] をクリックします。詳細な削除ウィザードが開き、削除のタイプを制御できます。

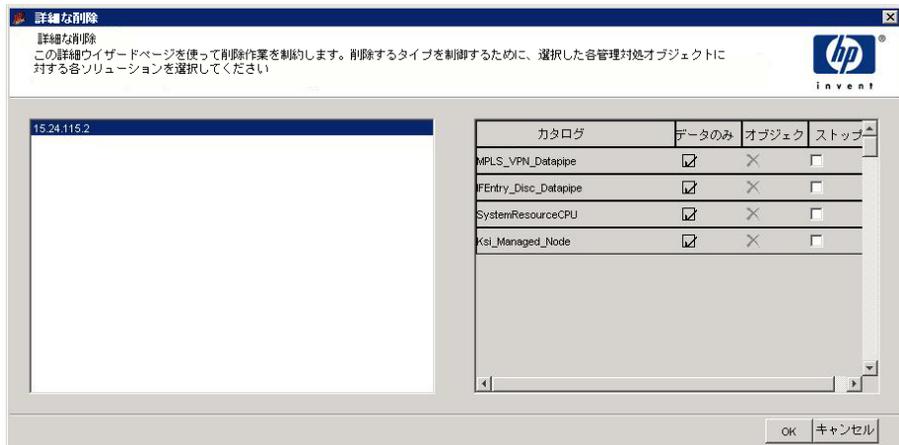


図 32 ノードとデータを完全に削除する詳細な削除ウィザード

- 2 デフォルトでは、[**データのみ**] ボックスおよび [**ストップ**] ボックスが選択され、使用不可になっています。また、[**オブジェクト**] ボックスがデフォルトで選択されています。特定のレポートパックのデータを削除したくない場合は、このオプションの選択を解除します。
- 3 [**はい**] をクリックして続行します。

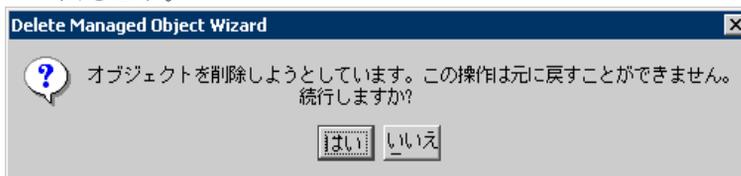


この GUI からレポートパックを選択または選択解除する場合は、レポートパックの最後の選択で、必ず **ksi_managed_node** テーブル、**Common Property** テーブル、インタフェースレポートのいずれかをその他の選択とともに選択してください。

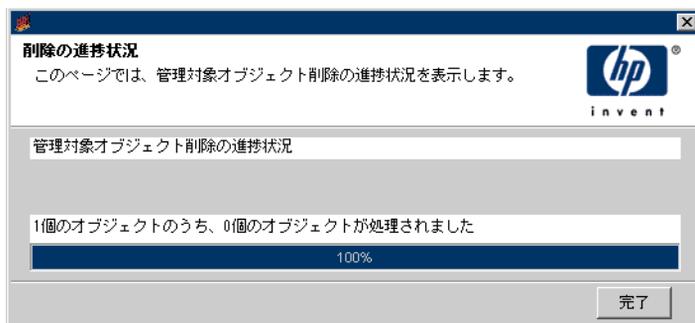
上記のレポートパックのいずれかを選択しないと、PI データベースのオブジェクトにいずれのウィザードも含めることができず、永久に無効化されてしまいます。

タスク 4: 削除処理を完了します。

- 1 Delete Managed Object Wizard ウィザードで、[**次へ**] をクリックします。
- 2 [管理対象オブジェクトの削除 - 完了] ページが開きます。このページには、該当するテーブルに関連する情報が表示されます。また、削除に関して選択したすべてのオプション、つまり [**データの削除**]、[**オブジェクトの削除**]、または [**収集の停止**] も表示されます。
- 3 [**完了**] をクリックすると削除処理が完了します。[**確認**] ダイアログボックスが開きます。



- 4 削除操作を確認したら [**はい**] をクリックします。[**削除の進捗状況**] ページが開き、ノードの削除処理の進捗状況が表示されます。



[完了] をクリックして [削除の進捗状況] ページを閉じることができますが、処理はバックグラウンドで行われています。[ファイル] メニューの [削除の進捗状況] を選択して、その [削除の進捗状況] ページを表示できます。

ノードの除外リストを編集するには

除外リストには、削除したすべてのオブジェクトの記録およびデータ収集停止のマークが付けられたオブジェクトが表示されます。リストには以下の特性があります。

- このリストはプロパティテーブルに関連付けられたキーマップテーブルと **mbr** テーブルに類似していますが、必要に応じて管理対象オブジェクト削除サービスにより作成されます。
- リストはプロパティテーブルに関連付けられ、**datapipe_manager** がプロパティテーブルを削除すると削除されます。

除外リストを編集するには、以下の手順に従います。

- 1 [ファイル]メニューの [オブジェクト] スナップインで、[除外リストの編集] を選択します。[除外リストの編集] ページが開きます。
- 2 左側のペインで、除外されたオブジェクトを表示するカテゴリを選択します。
- 3 再びデータ収集に含めたい除外されたオブジェクトを選択します。
- 4  をクリックして、選択したオブジェクトを [除外されたオブジェクト] のリストから [含まれるオブジェクト] のリストに移動します。

- 5 **[編集]**をクリックしてから**[完了]**をクリックして、オブジェクトを含めることを確認します。

11 管理対象オブジェクトのグループ化

グループマネージャは、管理コンソールから利用できるアプリケーションであり、これを使用して管理対象オブジェクトグループを作成および管理できます。ポーリングポリシーは、これらのグループを参照します。

グループとは、複数の管理対象オブジェクトの集合です。つまり、プロパティテーブルの行の集まりに対応しています。管理対象 オブジェクトとは、OVPIで管理されるオブジェクトです。主にネットワークデバイスとネットワークインタフェースがこれにあたります。したがって、管理対象オブジェクトグループは、単一のプロパティテーブルで定義される、管理対象オブジェクトの部分集合です(真部分集合である必要はありません)。

グループマネージャは、具体的には以下の用途に使用できます。

- グループ要素のツリー操作を行う
- 各タイプ(列挙リスト、プロパティ、派生、フォルダー)のグループを作成する
- グループを削除および変更する
- グループに関連付けられているポーリングポリシーを作成、変更、および削除する

グループのタイプ

この項ではグループの、サポートされているタイプについて説明します。グループタイプごとに、グループメンバーを指定する方法が異なります。

- **すべて:** プロパティテーブルで識別された管理対象オブジェクトがすべて含まれます。

- **列挙リスト**：プロパティテーブルの各オブジェクト ID によって識別された管理対象オブジェクトの集合。このグループの構成は静的です（ただし、後で特定のオブジェクトを追加または削除する場合を除く）。
- **プロパティ**：共通のプロパティ（複数ありうる）を共有する管理対象オブジェクトの集まり。このタイプのグループは、グループのオブジェクトを選択する際に使用する 1 つまたは複数のルールを定義するため、ルールベースのグループとも呼ばれます。

たとえば、あるプロパティグループは、ロサンゼルスにあるすべてのノードを含みます。列挙リストとは違って、ルールベースのグループは動的です。ロサンゼルスに新たに 3 つのノードが追加された場合は、次回以降はロサンゼルスのノードグループに 3 つの新しいメンバーが加わっています。



OVPI では、プロパティグループに任意の数のルールを設定できます。ただし、3 つ以上のルールを持つプロパティグループは、リモートポーラーからは使用できません。たくさんのルールを持つプロパティグループは、レポートビューアまたは Web アクセスサーバーで遅延ノードレポート（たとえば準リアルタイムスナップショットレポート）を表示する際にどのノードを表示するかを選択するのに使用できます。

- **派生**：他のグループのオブジェクトの論理的な組み合わせ。派生グループは、多くの場合、ポーリングポリシーの作成に使用します。
- **フォルダー**：Windows エクスプローラなどのアプリケーションで使用されている旧来のファイルおよびフォルダービューに対応しています。このタイプのグループのオブジェクトは、列挙リストグループを定義するときと同じ方法で選択できます。唯一の違いは、フォルダーグループには内部に別のフォルダーグループを含めることができることです。

グループ化の方法

ノードの編成は、場所、管理ドメイン、ベンダー、サプライヤ、およびタイプなどに基づいて行うことができます。あるいは、特別な処理（たとえば、データ量も使用頻度も多いバックボーンコンポーネントのポーリング）を行う特定のノードを指定することも可能です。

ノードのグループ化

以下の方法で、既知のノードセットをグループ化できます。

- デバイスプロパティに基づいてグループ化する

この方法では、同じ属性値を共有するノードを集めてグループ化できます。ただし、各ノードは属性ごとに1つのグループにしか含めることはできません。

この方法は、場所、ベンダー、またはサプライヤに基づいてグループ化するノード編成には適していますが、すべての種類のノード編成に適しているとは言えません。たとえば、タイプに基づいてノードをグループ化する場合は、プロパティは使用できません。どのノードも複数のタイプに属する可能性があるからです。タイプ別にグループ化されるノードは、ルーター、スイッチ、ハブ、**RMON** プローブが一般的です。

- 各グループごとにノードの列挙リストを作成する

1つのノードを、ルーター、スイッチ、ハブのそれぞれのリストに含めることができます。このリストベースの方法では、特殊なポーリングやより焦点を絞ったレポート生成を目的とした、特別なグループ構成も可能です。たとえば、アップグレードを目的とするルーターのグループを、より頻繁かつ広範にポーリングできます。

あるいは、オンラインで提供される新しいサービスから直接に影響されるノードのグループの、詳細なレポートを表示することも可能です。

 列挙リストを作成することでグループを形成することは、多くの用途に使用できます。ただし、列挙リストの管理は、ルールベースのグループの管理よりも、複雑かつ作業量も多くなります。

その他の管理対象オブジェクトのグループ化

ノード以外の管理対象オブジェクトも、プロパティや列挙リストの作成でグループ化できます。そのようなグループでは、たとえば、**WAN** ルーターインタフェースのみをポーリングしたり、インタフェースのタイプで要約したり、**LAN** と **WAN** のインタフェース情報を別々にレポートしたりできます。多数ある管理対象オブジェクトのうち実際に重要なオブジェクトは少数である環境や、データの処理と格納が可能な環境では、列挙リストを作成できるかどうか特に重要です。

グループカテゴリ

グループは、特定のグループカテゴリに関連して作成します。1つのグループカテゴリは、1つのプロパティテーブルのみに関連付けられます。ただし、プロパティテーブルは複数のグループカテゴリに関連付けることが可能です。

管理対象ノードのグループに使用できるカテゴリの例は、ビューに対応するカテゴリ、タイプに対応するカテゴリ、必須ノードグループカテゴリです。

- ▶ グループマネージャを使用して、グループカテゴリを新しく作成することも既存のグループカテゴリを削除することもできません。グループカテゴリは、新しいプロパティテーブルの作成時やレポートバックのインストール時に作成されます。

管理対象オブジェクトグループの表示

管理対象オブジェクトグループを表示するには、以下の手順に従います。

- 1 管理コンソールを起動します。詳細は、96 ページの「[管理コンソールの起動](#)」を参照してください。

- ▶ 管理コンソールには管理者権限を持つアカウントでログオンする必要があります。ユーザーアカウントの詳細は、516 ページの「[ユーザーアカウントの管理](#)」を参照してください。

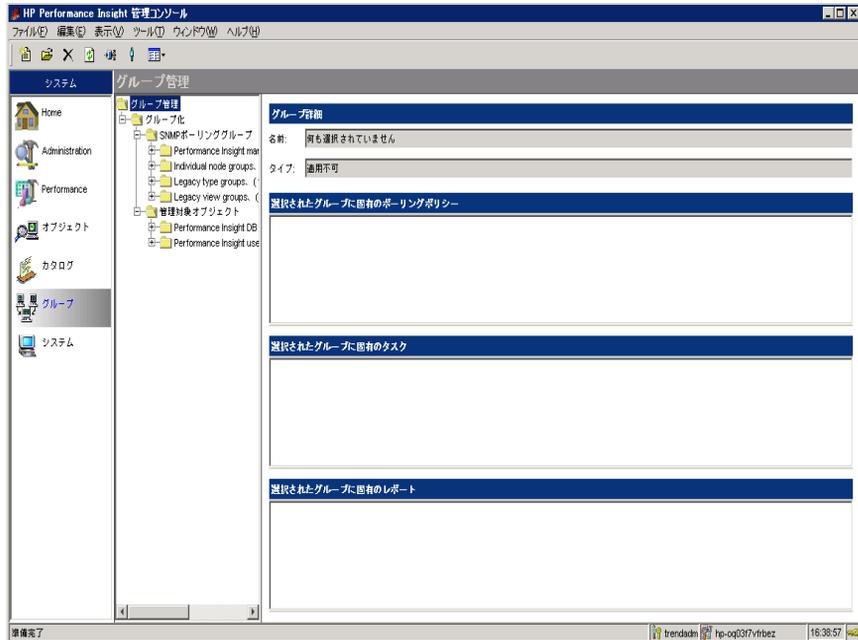
- 2 ナビゲーションペインの [**グループ**] スナップインをクリックします。

管理コンソールに [グループ管理] ウィンドウが表示されます。

[グループ管理] ウィンドウにはナビゲーションペインと表示ペインがあります。

ナビゲーションウィンドウにはグループ管理ツリーが表示され、[選択項目の表示] で選択された表示方法に基づいて、グループが一覧表示されます。表示ペインには、ツリーで選択した結果が表示されます。

次の図は、[グループ管理] ウィンドウを示しています。



ツリーの階層レベルは、Windows エクスプローラで Windows システムの内容を表示するのとまったく同様に展開できます。ナビゲーションフレームのツリーは、次のように操作します。

- フォルダの内容を見るには、プラス記号 (+) をクリックします。
フォルダの内容が表示されます。
 - 展開されたフォルダを縮小するには、マイナス記号 (-) をクリックします。
- 3 ナビゲーションペインで、管理対象オブジェクトグループを選択します。(または、検索機能を使用してグループを検索できます。325 ページの「[特定グループの検索](#)」を参照してください)。

表示ペインに以下の情報が表示されます。

- [グループ詳細] セクションには、グループの名前とタイプが表示されます。

- [**選択されたグループに固有のポーリングポリシー**] セクションには、そのグループに関連付けられているポーリングポリシーが表示されます。
 - [**選択されたグループに固有のタスク**] セクションには、選択したグループに適用されるフォームが表示されます。このセクションには、[**モード**] プロパティが [**変更**] に設定された状態で作成されたフォームのみが表示されます。
 - [**選択されたグループに固有のレポート**] セクションには、選択したグループに適用されるレポートが表示されます。
- 4 レポートまたはフォームを表示するには、レポートまたはフォームの名前をダブルクリックします。

選択した項目が、別のウィンドウに表示されます。

- レポートを選択した場合は、選択されているグループのそのレポートが生成および表示されます。レポートは表示および印刷できます。
- タスクを選択した場合は、選択されているグループの適切なフォームが、データが記入された状態で表示されます。フォーム内の特定の値（たとえば、しきい値）を変更することもできます。変更された値は、関連付けられているプロパティテーブルで更新されます。307 ページの「[データベースの変更](#)」を参照してください。

グループ管理ツリーで別の項目を選択するたびに、表示ペインの情報が、選択したグループを反映するよう更新されます。

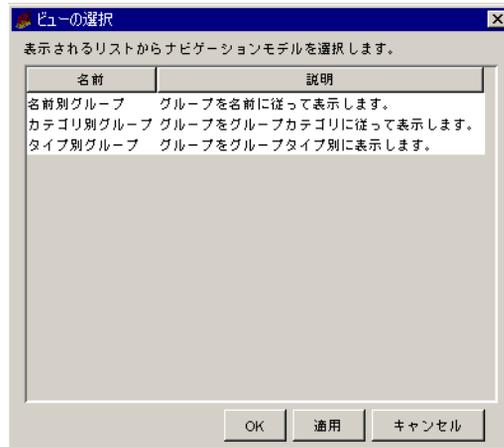
グループビューの変更

管理対象オブジェクトグループの表示方法を変更できます（デフォルトのビューを設定するには、341 ページの「[表示オプションの設定](#)」を参照してください）。

グループビューを変更するには、以下の手順に従います。

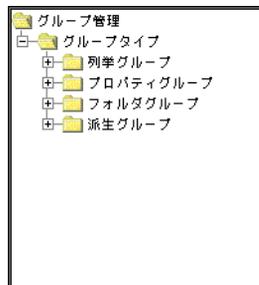
- 1 [**表示**] メニューから [**ビューの変更**] を選択します。

[ビューの選択] ウィンドウが開きます。



- 2 表示方法を選択し [OK] をクリックします。

グループ管理ツリーが更新され、そのプロパティが割り当てられている管理対象オブジェクトグループがすべて表示されます。たとえば、タイプに基づいてすべてのグループを表示するよう選択した場合は、グループ管理ツリーは次の図のようになります([グループタイプ] フォルダを展開した状態)。



特定グループの検索

表示するグループの正確な名前が分かっている場合は、検索機能を使用するとその情報にすばやくアクセスできます。

- 1 [編集] メニューから [検索] を選択します。

[検索] ウィンドウが開きます。



- 2 テキストボックスにグループ名を入力し [**検索**] をクリックします。
入力した名前が検出された場合は、対応するグループがグループ管理ツリーで強調表示されるほか、関連付けられているフォームとレポートがそれぞれの領域に一覧表示されます。
- 3 以下のいずれかを実行します。
 - 入力したグループ名が検出されなかった場合は、別の名前を入力して再試行できます。
 - ツリーで正しいグループ名が強調表示された場合は、[検索] ウィンドウで [**閉じる**] をクリックします。
- 4 希望のグループ名が強調表示されたら、324 ページの **手順 4** に進みます。

グループの作成

グループは、管理対象オブジェクト（複数可）を選択することで作成します。グループフォルダーを右クリックすると、ショートカットメニューが開きます。これを使用して、任意のグループタイプ（列挙、派生、評価済み、フォルダー）の新しいインスタンスを作成できます。



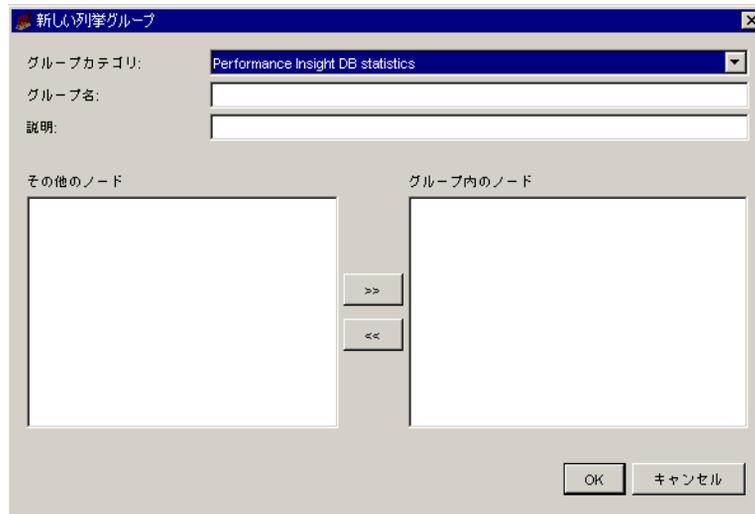
列挙リストグループの作成

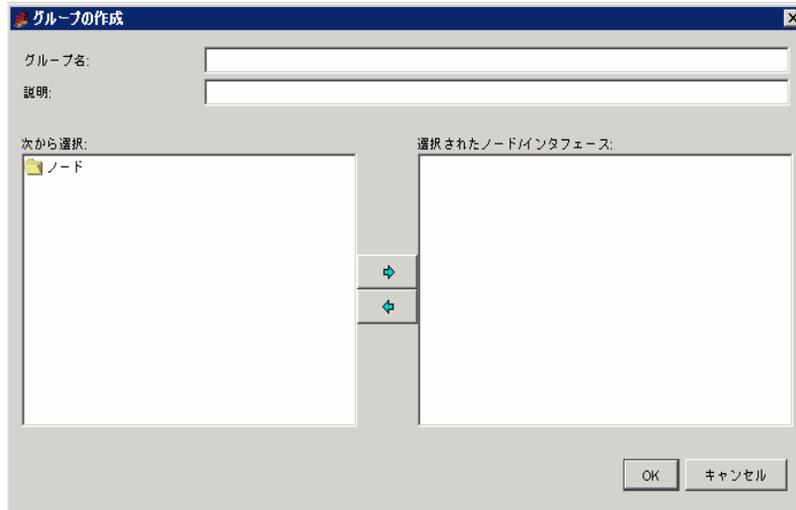
列挙リストグループは、所定のカテゴリのプロパティテーブルにある、管理対象オブジェクトのグループです。

列挙リストグループを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 以下のいずれかを実行します。
 - グループの作成に使用するグループカテゴリが分かっている場合は、ナビゲーションペインでそのグループカテゴリのフォルダーを右クリックし、メニューから **[列挙グループの作成]** を選択します。
 - [ファイル] メニューから [新規] を選択し、**[列挙グループ]** を選択します。

[新しい列挙グループ] または [グループの作成] ダイアログボックスが開きます。





このダイアログボックスは、開いた方法によって画面が以下のように異なります。

- [ファイル]メニューを使用した場合は、[新しい列挙グループ]ダイアログボックスが開きます。このダイアログボックスには[グループカテゴリ]リストが表示されます。ここで、列挙グループの作成に使用するグループカテゴリを指定します。
 - グループカテゴリを右クリックした場合は、[グループの作成]ダイアログボックスが開きます。この場合は[グループカテゴリ]リストは表示されません。ナビゲーションペインで右クリックしたグループカテゴリを使用しようとしているとみなされるからです。
- 2 [新しい列挙グループ]ダイアログボックスの場合のみ:[グループカテゴリ]リストからグループカテゴリを選択します。
 - 3 [グループ名]ボックスに、作成するグループの名前を入力します。
 - 4 [説明]ボックスに、グループの説明を入力します。
 - 5 グループにノードを追加するには、以下のいずれかを実行します。
 - [その他のノード]ボックスでノードをダブルクリックして、そのノードを
[グループ内のノード]ボックスに移動します。

- [その他のノード] ボックスでノードまたはインタフェースを選択し、 をクリックしてそのノードを [グループ内のノード] ボックスに追加します。
- 6 グループを作成する前にそのグループからノードを削除するには、以下のいずれかを実行します。
 - [グループ内のノード] ボックスでノードをダブルクリックして、そのノードを [その他のノード] ボックスに移動します。
 - [グループ内のノード] ボックスでノードを選択し、 をクリックしてそのノードを [その他のノード] ボックスに戻します。
 - 7 完了したら、[OK] をクリックします。

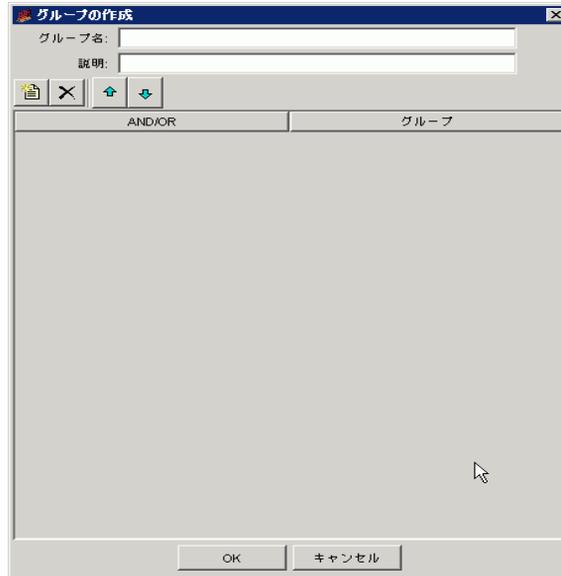
派生グループの作成

派生グループは、列挙リストグループと評価済みグループとを組み合わせたグループ（たとえば、和集合や共通集合）です。

派生グループを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 以下のいずれかを実行します。
 - グループの作成に使用するグループカテゴリが分かっている場合は、ナビゲーションペインでそのグループカテゴリのフォルダーを右クリックし、メニューから **[派生グループの作成]** を選択します。
 - [ファイル] メニューから [新規] を選択し、**[派生グループ]** を選択します。

[新規派生グループ] または [グループの作成] ダイアログボックスが開きます。



このダイアログボックスは、開いた方法によって画面が以下のように異なります。

- [ファイル]メニューを使用した場合は、[新規派生グループ]ダイアログボックスが開きます。このダイアログボックスには[グループカテゴリ]リストが表示されます。ここで、派生グループの作成に使用するグループカテゴリを指定します。
 - グループカテゴリを右クリックした場合は、[グループの作成]ダイアログボックスが開きます。この場合は[グループカテゴリ]リストは表示されません。ナビゲーションペインで右クリックしたグループカテゴリを使用しようとしているとみなされるからです。
- 2 [新規派生グループ]ダイアログボックスの場合のみ:[グループカテゴリ]リストからグループカテゴリを選択します。
 - 3 [グループ名]ボックスに、作成するグループの名前を入力します。
 - 4 [説明]ボックスに、グループの説明を入力します。
 - 5 グループを選択するには、以下を実行します。
 - a  をクリックします。[AND/OR] および [グループ] 列の下に、空の行が表示されます。
 - b [属性]列の下にあるボックスをクリックします。表示されるリストから、グループを選択できます。
 - c リストからグループを選択します。
 - d  をクリックします。空の行が1つ追加されます。
 - e [および/または]列の下にあるボックスをクリックします。表示されるリストから、グループの比較方法を選択できます。
オプションは [AND] または [OR] です。[AND] オプションを使用するとグループ間の共通集合が作成され、[OR] オプションを使用するとグループ間の和集合が作成されます。
 - f [属性]列の下にあるボックスをクリックします。表示されるリストから、別のグループを選択できます。
 - g リストからグループを選択します。
 - 6 リスト内のグループの順番を変更するには、グループを選択した後、以下のいずれかを実行します。
 - リスト内でグループを上を移動するには、 をクリックします。

- リスト内でグループを下に移動するには、 をクリックします。
- 7 グループを削除するには、グループを選択し  をクリックします。
 - 8 完了したら、[OK] をクリックします。

評価済みグループの作成

プロパティグループは、評価済みテーブル内の特定のプロパティに基づく管理対象オブジェクトのグループです。



評価済みグループでは、ポーリングシステムによる制限のために、設定できるプロパティは2つだけです。

評価済みグループを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 以下のいずれかを実行します。
 - グループの作成に使用するグループカテゴリが分かっている場合は、ナビゲーションペインでそのグループカテゴリのフォルダーを右クリックし、メニューから [**プロパティの作成**] を選択します。
 - [ファイル] メニューから [新規] を選択し、[**評価済みグループ**] を選択します。

[新しいルールベースのグループ] または [グループの作成] ダイアログボックスが開きます。



AND/OR	属性	演算子	値

このダイアログボックスは、開いた方法によって画面が以下のように異なります。

- [ファイル]メニューを使用した場合は、[新しいルールベースのグループ]ダイアログボックスが開きます。このダイアログボックスには[グループカテゴリ]リストが表示されます。ここで、プロパティグループの作成に使用するグループカテゴリを指定します。
 - グループカテゴリを右クリックした場合は、[グループの作成]ダイアログボックスが開きます。この場合は[グループカテゴリ]リストは表示されません。ナビゲーションペインで右クリックしたグループカテゴリを使用しようとしているとみなされるからです。
- 2 [新しいルールベースのグループ]ダイアログボックスの場合のみ:[グループカテゴリ]リストからグループカテゴリを選択します。
 - 3 [グループ名]ボックスに、作成するグループの名前を入力します。
 - 4 [説明]ボックスに、グループの説明を入力します。
 - 5 グループを選択するには、以下を実行します。

- a  をクリックします。[AND/OR]、[属性]、[演算子]、および[値]列の下に、空の行が表示されます。
- b [属性]列の下にあるボックスをクリックします。表示されるリストから、プロパティを選択できます。
- c リストからプロパティを選択します。
- d [演算子]リストから演算子を選択します。
- e [値]ボックスをクリックし、プロパティの値を入力します。
この値には英数字の文字列を使用できます。

LIKE 演算子を使用する場合は、値は文字列でなければならないほか、ワイルドカード文字としてアンダースコア () およびパーセント (%) を含むことができます。アンダースコアは、任意の 1 文字を表します。パーセント記号は、ゼロまたは 1 つ以上の文字を表します。たとえば、次のように入力します。

12%3 にマッチする文字列は、1233、123、1244443 などです。

_ime にマッチする文字列は、time、lime、dime などです。

- f  をクリックします。行が 1 つ追加されます。
- g [AND/OR] 列の下にあるボックスをクリックします。表示されるリストから、グループの比較方法を選択できます。
- オプションは [AND] または [OR] です。[AND] オプションを使用するとグループ間の共通集合が作成され、[OR] オプションを使用するとグループ間の和集合が作成されます。
- h 手順 b から手順 e までを繰り返します。
- 6 リスト内のプロパティの順番を変更するには、プロパティを選択した後、以下のいずれかを実行します。
- リスト内でプロパティを上に移動するには、 をクリックします。
 - リスト内でプロパティを下に移動するには、 をクリックします。
- 7 プロパティを削除するには、グループを選択し  をクリックします。
- 8 完了したら、[OK] をクリックします。

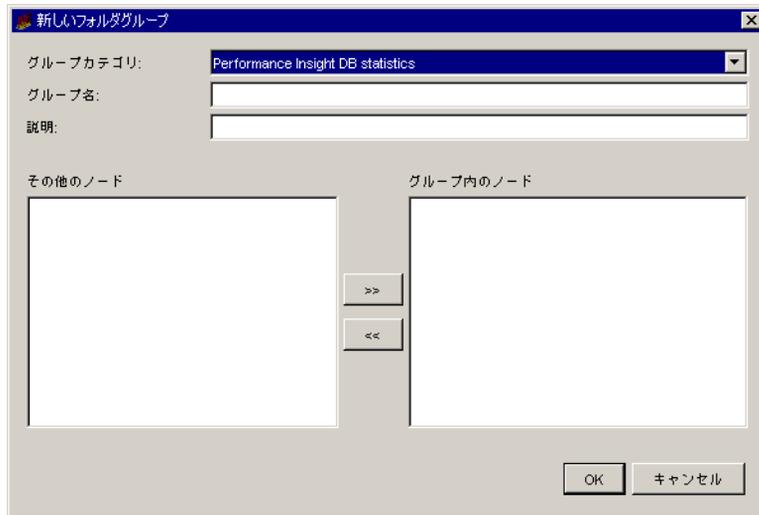
フォルダーグループの作成

フォルダーグループには、管理対象オブジェクトの列挙リストと、別のフォルダーグループを含めることができます。

フォルダーグループを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 以下のいずれかを実行します。
 - グループの作成に使用するグループカテゴリが分かっている場合は、ナビゲーションペインでそのグループカテゴリのフォルダーを右クリックし、メニューから [**フォルダーの作成**] を選択します。
 - [ファイル] メニューから [**新規**] を選択し、[**フォルダグループ**] を選択します。

[新しいフォルダグループ] または [グループの作成] ダイアログボックスが開きます。



このダイアログボックスは、開いた方法によって画面が以下のように異なります。

- [ファイル]メニューを使用した場合は、[新しいフォルダグループ]ダイアログボックスが開きます。このダイアログボックスには[グループカテゴリ]リストが表示されます。ここで、フォルダグループの作成に使用するグループカテゴリを指定します。
 - グループカテゴリを右クリックした場合は、[グループの作成]ダイアログボックスが開きます。この場合は[グループカテゴリ]リストは表示されません。ナビゲーションペインで右クリックしたグループカテゴリを使用しようとしているとみなされるからです。
- 2 [新しいフォルダグループ]ダイアログボックスの場合のみ:[グループカテゴリ]リストからグループカテゴリを選択します。
 - 3 [グループ名]ボックスに、作成するグループの名前を入力します。
 - 4 [説明]ボックスに、グループの説明を入力します。
 - 5 グループにノードを追加するには、以下のいずれかを実行します。
 - [その他のノード]ボックスでノードをダブルクリックして、そのノードを
[グループ内のノード]ボックスに移動します。

- [その他のノード] ボックスでノードまたはインタフェースを選択し、 をクリックしてそのノードを [グループ内のノード] ボックスに追加します。
- 6 グループを作成する前にそのグループからノードを削除するには、以下のいずれかを実行します。
 - [グループ内のノード] ボックスでノードをダブルクリックして、そのノードを [その他のノード] ボックスに移動します。
 - [グループ内のノード] ボックスでノードを選択し、 をクリックしてそのノードを [その他のノード] ボックスに戻します。
 - 7 完了したら、[OK] をクリックします。



フォルダグループ内にサブフォルダグループを含めたい場合は、まず、前述した手順ですべてのフォルダグループを作成します。その後、グループを別のフォルダグループに移動することで、グループを編集してサブフォルダグループを作成します。339 ページの「[グループの編集](#)」を参照してください。

グループのインポート

データベースにグループを追加するための方法の 1 つは、そのグループが含まれているファイルをインポートすることです。

管理対象オブジェクトグループを含むファイルをインポートするには、以下の手順に従います。

- 1 [ファイル] メニューから [インポート] を選択します。
[開く] ダイアログボックスが開きます。
- 2 インポートするグループが含まれているファイルに移動します。
- 3 ファイル名をダブルクリックするか名前を選択し、[開く] をクリックします。

ファイルがデータベースにインポートされている間、進捗ウィンドウが表示されます。インポートが完了すると、インポートされたグループをグループ管理リストに表示できるようになります。

グループのエクスポート

別のデータベースにエクスポートする 1 つまたは複数のグループを含むファイルを作成できます。

管理対象オブジェクトグループを 1 つ含むエクスポートファイルを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 グループ管理ツリーで、エクスポートするグループの名前を選択します。
- 2 [ファイル]メニューの[エクスポート]から[選択済み]を選択します。
[開く]ダイアログボックスが開きます。
- 3 エクスポートファイルの保存先に移動します。
- 4 [ファイル名]ボックスにファイル名を入力し、[開く]をクリックします。
ファイルの作成中は進捗ウィンドウが表示されます。

すべての管理対象オブジェクトグループを含むエクスポートファイルを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 [ファイル]メニューの[エクスポート]から[すべてのグループ]を選択します。
[開く]ダイアログボックスが開きます。
- 2 エクスポートファイルの保存先に移動します。
- 3 [ファイル名]ボックスにファイル名を入力し、[開く]をクリックします。
ファイルの作成中は進捗ウィンドウが表示されます。

グループの管理

グループリーフノードを右クリックすると、ショートカットメニューが開きます。このショートカットメニューを使用して、グループを開いて表示する、([すべて]グループ以外のグループを)編集する、または削除することができます。また、[新規収集]メニューオプションを使用してポーリングポリシーを作成することもできます(343 ページの「グループポーリングポリシーの作成」を参照)。

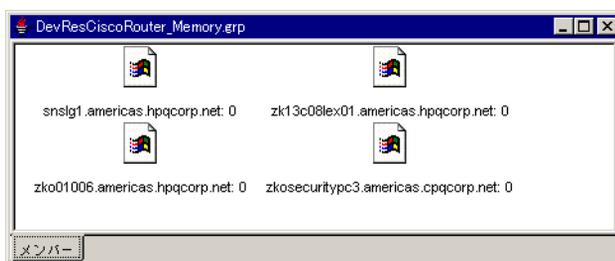


グループの表示

グループの内容を表示するには、以下のいずれかを実行します。

- グループ名を右クリックし、メニューから [グループを開く] を選択します。
- グループ名をダブルクリックします。

グループの内容が、オブジェクトブラウザウィンドウに表示されます。(表示フォーマットは、ブラウザウィンドウの表示オプションによって異なります。341 ページの「表示オプションの設定」を参照してください)。



ウィンドウには、このグループのメンバーである管理対象オブジェクトが表示されます。管理対象オブジェクトを右クリックすると、ショートカットメニューが表示されます。このショートカットメニューを使用して、管理対象オブジェクト

をさまざまな表示フォーマットで表示できます。オブジェクトは、大きいアイコン、小さいアイコン、一覧、または詳細（オブジェクトのプロパティ値付き一覧）のいずれかで表示できます。

グループの編集

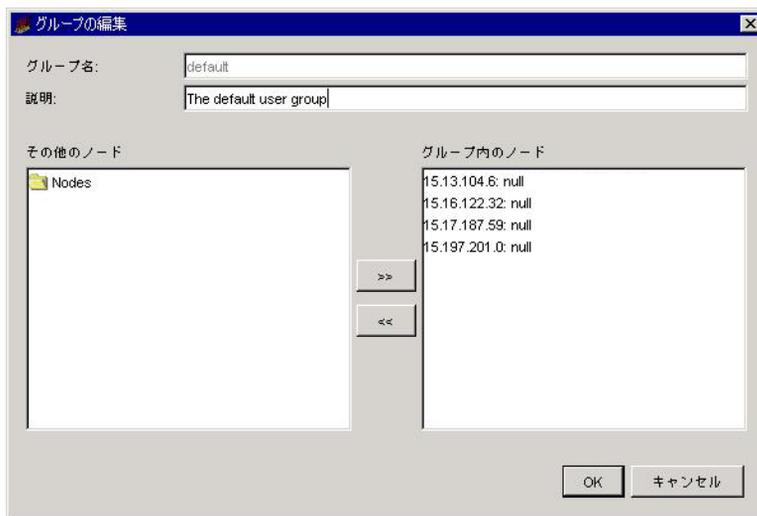
グループにオブジェクトを追加したり、グループからオブジェクトを削除したりできます。フォルダグループを編集しているときに、そのグループに別のグループを追加することも可能です。

▶ グループマネージャでは、[すべて]タイプグループは編集できません。

グループを編集するには、以下の手順に従います。

- 1 グループ名を右クリックし、メニューから [**<グループタイプ>の編集**]（たとえば、[**列挙グループの編集**]）を選択します。

[グループの編集] ダイアログボックスが開きます。



- 2 グループにノードを追加するには、以下のいずれかを実行します。
 - [その他のノード] ボックスでノードをダブルクリックして、そのノードを [グループ内のノード] ボックスに移動します。

- [その他のノード] ボックスでノードまたはインタフェースを選択し、 をクリックしてそのノードを [グループ内のノード] ボックスに追加します。
- 3 グループを作成する前にそのグループからノードを削除するには、以下のいずれかを実行します。
 - [グループ内のノード] ボックスでノードをダブルクリックして、そのノードを [その他のノード] ボックスに移動します。
 - [グループ内のノード] ボックスでノードを選択し、 をクリックしてそのノードを [その他のノード] ボックスに戻します。
 - 4 [OK] をクリックします。

グループの削除

グループを削除しても、管理対象オブジェクトは削除されず、グループのみが削除されます。そのグループがポーリングポリシーの適用範囲にある場合は、そのポーリングポリシーを削除しなければ、そのグループは削除できません。

グループを削除するには、以下の手順に従います。

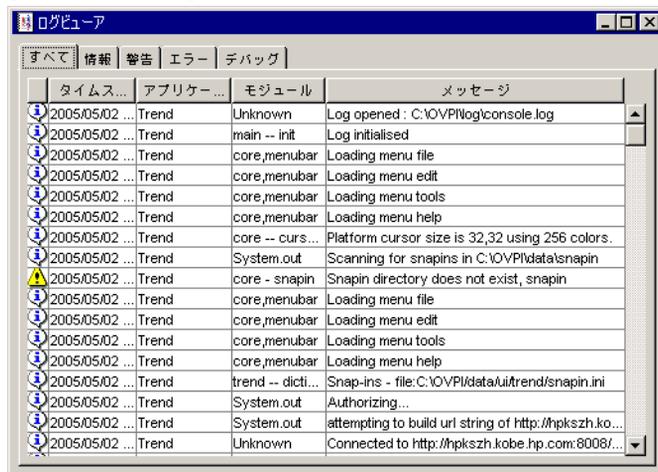
- 1 グループ名を右クリックし、メニューから [グループの削除] を選択します。
削除の確認ウィンドウが表示されます。
- 2 [はい] をクリックします。

ログ情報の表示

[表示] メニューのオプションを使用して、ログファイルとデバッグ情報を表示できます。

ログファイル情報を表示するには、[表示] メニューから [ログ] を選択します。

[ログビューア] ウィンドウが開きます



[ログビューア] ウィンドウには 5 つのタブがあり、それぞれに各種のログ情報が表示されます。ログメッセージは 4 つのタイプがあります。[情報]、[警告]、[エラー]、および [デバッグ] です。[すべて] タブには、4 タイプすべてのメッセージが表示されます。

出力情報を表示するには、[表示] メニューから [出力] を選択します。

[出力ビューア] ウィンドウに、生成された最新のログメッセージが表示されます。

表示オプションの設定

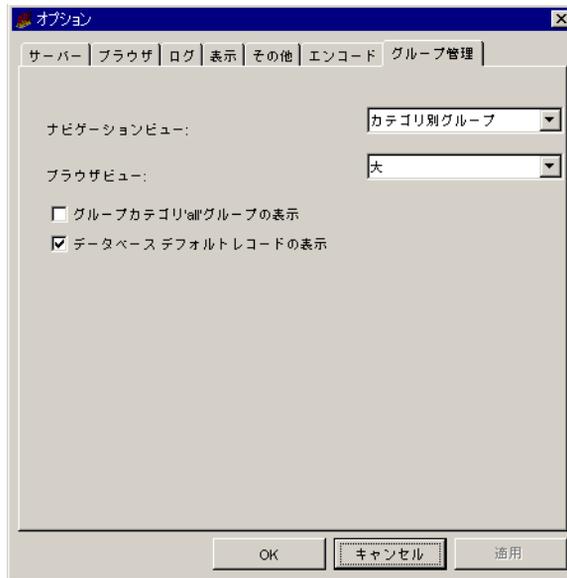
グループ管理の表示画面のデフォルト値を設定するには、以下の手順に従います。これらのデフォルト設定の変更された内容は、次回、管理コンソールにログインしたときに適用されます。

- 1 [編集] メニューから [オプション] を選択します。

[オプション] ウィンドウが開きます。

- 2 [グループ管理] タブを選択します。

[グループ管理] ページが開きます。



- 3 ナビゲーションツリーのグループ階層構造を設定するには、[ナビゲーションビュー]の矢印をクリックし、一覧から[カテゴリ別グループ]、[タイプ別グループ]、[名前別グループ]のいずれかのオプションを選択します。
- 4 ブラウザウィンドウにおけるグループオブジェクトの表示方法を設定するには、[ブラウザビュー]の矢印をクリックし、一覧から[大]、[小]、[リスト]、[詳細]のいずれかのオプションを選択します。
- 5 以下のいずれかを実行します。
 - [すべて]タイプグループ(選択されているグループカテゴリのすべての管理対象オブジェクトを含むグループ)を表示するには、[**グループカテゴリ'all'グループの表示**]ボックスをオンにします。
 - [すべて]タイプグループを表示しないようにするには、[**グループカテゴリ'all'グループの表示**]ボックスをオフにします。
- 6 以下のいずれかを実行します。
 - グループ管理時にデフォルトのレコードを表示するには、[**データベースデフォルトレコードの表示**]ボックスをオンにします。
デフォルトレコードとは、プロパティテーブルの作成時に、データベースの整合性を維持するためにOVPIが自動的に挿入するレコードです。

- デフォルトレコードを表示しないようにするには、[データベース デフォルトレコードの表示] ボックスをオフにします。

7 [OK] をクリックします。

グループポーリングポリシーの管理

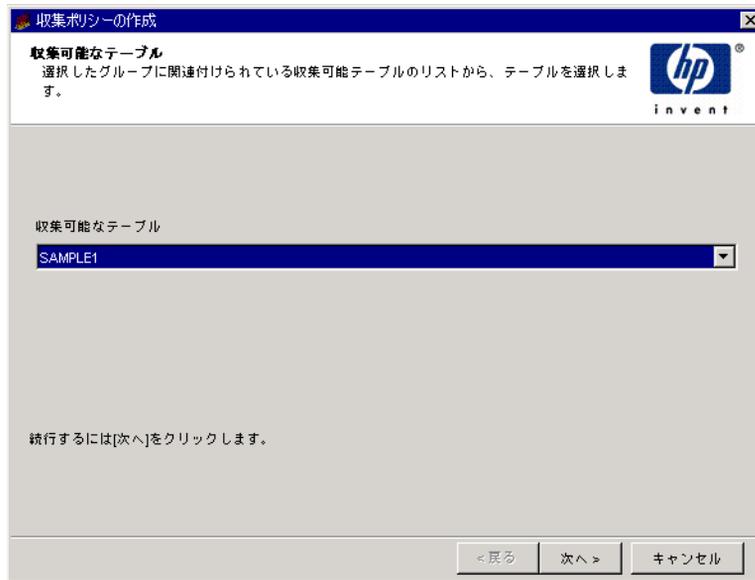
グループポーリングポリシーは、[収集ポリシーの作成] ウィザードを使用して作成できます。また、グループを表示すると使用できる [ポーリングポリシー] タブを使用して、いずれかのグループに関連付けられているポーリングポリシーを編集または削除することもできます。

グループポーリングポリシーの作成

グループのポーリングポリシーを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 ポーリングポリシーを作成するグループを右クリックし、ショートカットメニューから [新規収集] を選択します。

次の図のようなページが開き、グループに関連付けられている収集可能なテーブル（通常は、**raw** テーブルと、レートテーブル）が一覧表示されます。



- 2 [収集可能なテーブル] リストでテーブルを選択し、[次へ] をクリックします。

次の図のようなページが開き、ポーリングを実行するシステム（ポーラー）と、データをポーリングする間隔を指定するよう求められます。

- 3 以下の手順に従います。
 - a [ポーラー]リストから、データをポーリングするサーバーを選択します。
 - b [ポーリング間隔]リストから、ポーラーにデータのポーリングを実行させる間隔を選択します。
 - c [次へ]をクリックします。

次の図のようなページが開き、ポーリングポリシーの名前と説明の入力を求められます。

収集ポリシーの作成

この収集の名前と説明(オプション)を提供します。

hp
invent

収集名

説明(オプション)

続行するには[完了]をクリックします。

< 戻る 次へ > キャンセル

- 4 以下の手順に従います。
 - a [収集名] ボックスに、ポーリングポリシーの名前を入力します。
 - b [説明] ボックスに、ポリシーの説明を入力します。説明は省略することも可能です。
 - c [次へ] をクリックします。要約ページが開き、ポーリングポリシーの概要が表示されます。
- 5 [終了] をクリックします。

グループポーリングポリシーの変更

グループのポーリングポリシーを変更するには、以下の手順に従います。

- 1 グループ管理ツリーで目的のグループに移動します。

ウィンドウの右側の [選択されたグループに固有のポーリングポリシー] ボックスに、関連付けられているポーリングポリシーが表示されます。

- 2 変更するポリシーを右クリックし、ショートカットメニューから [**プロパティ**] を選択します。
[ポーリングポリシーの編集] ダイアログボックスが開きます。
- 3 247 ページの「**ポーリングポリシーの編集**」で説明した手順でポーリングポリシーを変更します。

ポーリングポリシーの削除

グループのポーリングポリシーを変更するには、以下の手順に従います。

- 1 グループ管理ツリーで、ポーリングポリシーを削除するグループに移動します。
ウィンドウの右側の [選択されたグループに固有のポーリングポリシー] ボックスに、関連付けられているポーリングポリシーが表示されます。
- 2 削除するポリシーを右クリックし、ショートカットメニューから [**削除**] を選択します。
ダイアログボックスが開き、選択されているポーリングポリシーを削除するかどうかを尋ねられます。
- 3 [**はい**] をクリックします。

ポーリングポリシービューの変更

リストボックスにおけるポーリングポリシーの表示方法を変更するには、以下の手順に従います。

- 1 グループ管理ツリーで目的のグループに移動します。
ウィンドウの右側の [選択されたグループに固有のポーリングポリシー] ボックスに、関連付けられているポーリングポリシーが表示されます。
- 2 ポリシーを右クリックし、ショートカットメニューから [**表示**] を選択します。
- 3 以下のいずれかを選択します。
 - [**大きいアイコン**] – ポーリングポリシー名が、大きいアイコンで横並びに表示されます。

- [小さいアイコン] – ポーリングポリシー名が、小さいアイコンで横一列に表示されます。
- [リスト] – ポーリングポリシー名が、小さいアイコンで縦一列に表示されます。
- [詳細] – 各ポーリングポリシーの詳細情報(名前、説明、ポーリング間隔)が表示されます。

レポートでのグループの使用

レポートビューアまたは **Web** アクセスサーバーを使用して遅延選択付きレポートを開く場合は、個々のノードとインタフェースを選択することも、ノードとインタフェースのグループを選択することもできます。

たとえば、「**HP Systems**」という列挙リストグループを作成し、このグループに「**Monty**」および「**Caesar**」というノードを含めたと仮定します。このレポートを開くとき、レポート用にこのグループを選択すると、「**Monty**」および「**Caesar**」システムのデータのみをレポートに表示することができます。

レポートの遅延ノードの選択の詳細は、『**HP OpenView Performance Insight** レポートの作成および表示ガイド』を参照してください。

12 システムの管理

この章では、システム/ネットワークの管理アプリケーションについて説明します。これは管理コンソールから利用できます。このアプリケーションでは、次のものを管理できます。

- **Web アクセスサーバー。** Web アクセスサーバーシステムのプロパティを追加、削除、変更できます。さらに、プロパティを表示したり、現在の Web アクセスサーバーを別の使用可能なサーバーに変更することもできます。
- **データベース。** 初期化パラメータとデータベースパスワードを変更することで、データベースを追加、削除、変更できます。また、データベースのサイズを拡張したり、現在のデータベースを別の使用可能なデータベースに変更したりすることもできます。
- **リモートポーラー。** リモートポーラーは、ネットワークノードからデータを収集し、そのデータを **OVPI** データベースに格納するシステムです。リモートポーラーは、ネットワーク内のノードからデータを収集し、**OVPI** データベースが動作しているサーバーにそのデータを格納します。リモートポーラーは、専用ポーラーであるように設定されます。リモートポーラーにデータベースまたはクライアントは含まれません。リモートポーラーのプロパティを追加、削除、変更できます。

システム / ネットワークの管理アプリケーションの起動

システム / ネットワークの管理アプリケーションを起動するには、以下の手順に従います。

- 1 管理コンソールを起動します。詳細は、96 ページの「管理コンソールの起動」を参照してください。



管理コンソールには管理者権限を持つアカウントでログオンする必要があります。ユーザーアカウントの詳細は、516 ページの「ユーザーアカウントの管理」を参照してください。

- 2 ナビゲーションペインの [システム] スナップインをクリックします。

[管理コンソール] に [システム / ネットワークの管理] ウィンドウが表示されます。ウィンドウの左側には、データベース、Web アクセスサーバー、およびリモートポーターが表示されます。

図 33 は、[システム / ネットワークの管理] ウィンドウを示しています。

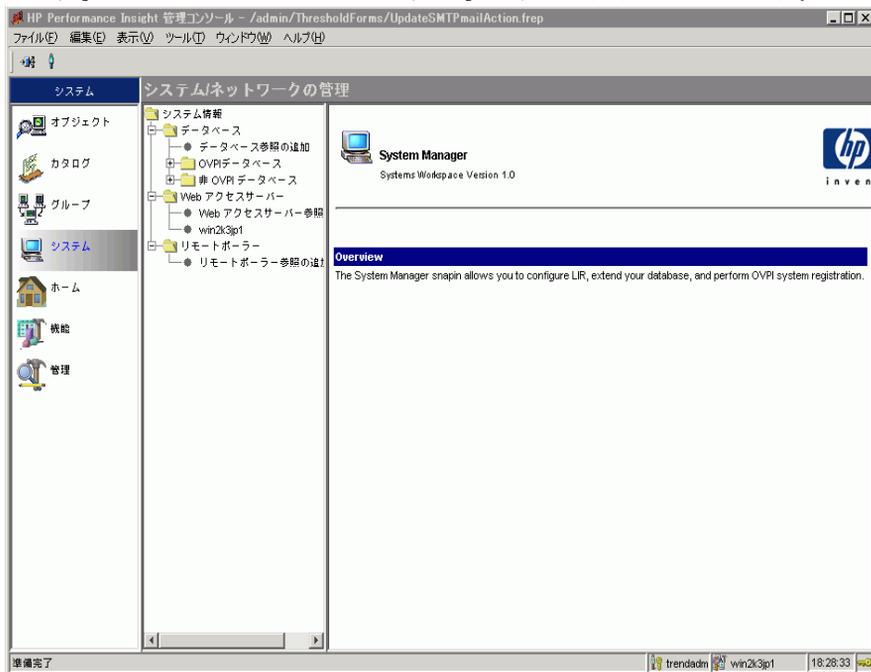


図 33 [システム / ネットワークの管理] ウィンドウ

 アイコンが青の場合は、そのシステムに現在ログオンしていることを示しています。

[システム / ネットワークの管理] ウィンドウ

[システム / ネットワークの管理] ウィンドウには以下のペインがあります。

- 表示ペイン：表示ペインは、ウィンドウの右側にあります。
- ナビゲーションペイン：ナビゲーションペインはウィンドウの左側にあります。このペインには、アクセス可能なシステムのツリーが表示されます。ツリーはフォルダーで構成されており、各フォルダーにはページが含まれています。各ページの下に、さらに別のページ、またはフォルダーがある場合があります。

システムの階層レベルは、**Windows** エクスプローラで **Windows** システムの内容を表示するときとまったく同様に展開できます。フォルダーを展開することで、そのフォルダー内のページやフォルダーを表示できます。また、階層レベルを折りたたむこともできます。

ナビゲーションフレームのツリーは、次のように操作します。

- フォルダーの内容をプレビューするには、プラス記号 (+) をクリックします。
フォルダーの内容は表示フレームに表示されます。
- 展開されたフォルダーを縮小するには、マイナス記号 (-) をクリックします。

Web アクセスサーバーシステムの管理

システム/ネットワークの管理コンポーネントを使用すると、Web アクセスサーバーシステムの追加、それらのシステムのプロパティを編集、使用可能なシステムの一覧からシステムを削除、ローカルシステムと現在選択されている Web アクセスサーバーを同期させることができます。

Web アクセスサーバーの追加

Web アクセスサーバーを、アクセス可能なシステムの一覧に追加するには、以下の手順に従います。

タスク 1: [Web アクセスサーバーの追加] ウィザードを起動する

- 1 (+) 記号をクリックして Web アクセスサーバーリストを展開します。[Web アクセスサーバー参照の追加] に対するオプションが表示されます。
- 2 [Web アクセスサーバー参照の追加] オプションをクリックします。

図 34 に、[Web アクセスサーバーの追加] ウィザードを示します。

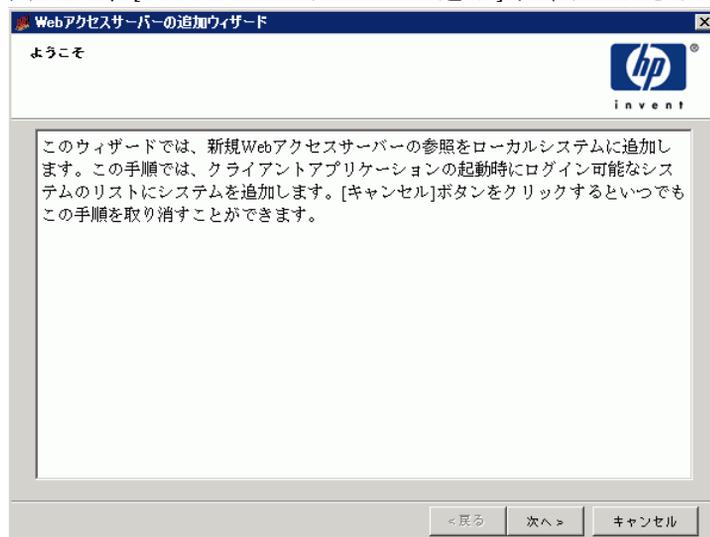


図 34 [Web アクセスサーバーの追加ウィザード] ウィンドウ

- 3 [次へ] をクリックします。

タスク 2: Web アクセスサーバーへの接続に必要な情報を指定する

図 35 は、[接続情報] ウィンドウを示しています。

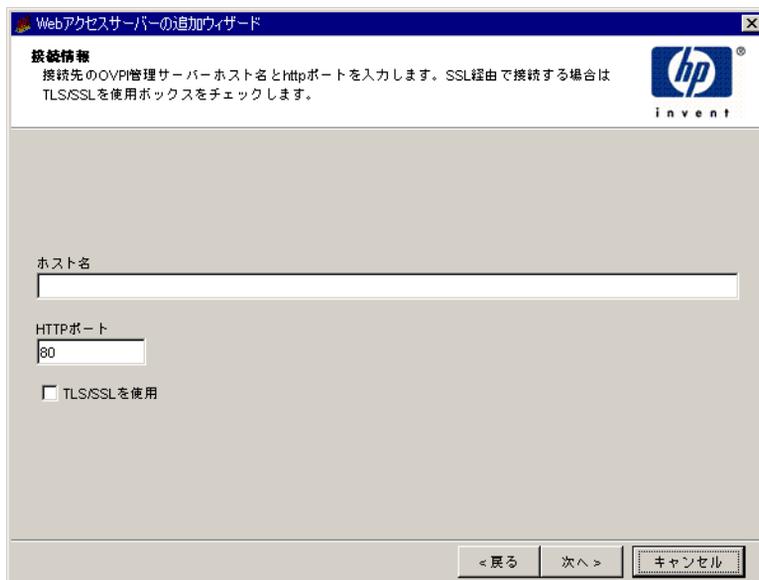


図 35 [接続情報] ウィンドウ

- 1 [ホスト名] ボックスに **Web** アクセスサーバーのホスト名を入力します。
- 2 **Web** アクセスサーバーのポート番号が **80** (デフォルト) 以外の場合は、**[HTTP ポート]** ボックスにポート番号を入力します。
- 3 **Web** アクセスサーバーで **SSL** が使用されており、かつ通信を保護したい場合は、**[TLS/SSL を使用]** ボックスをオンにします。
- 4 **[次へ]** をクリックします。

タスク 3: Web アクセスサーバーの名前と説明を入力する

図 36 は、[システムの識別] ウィンドウを示しています。

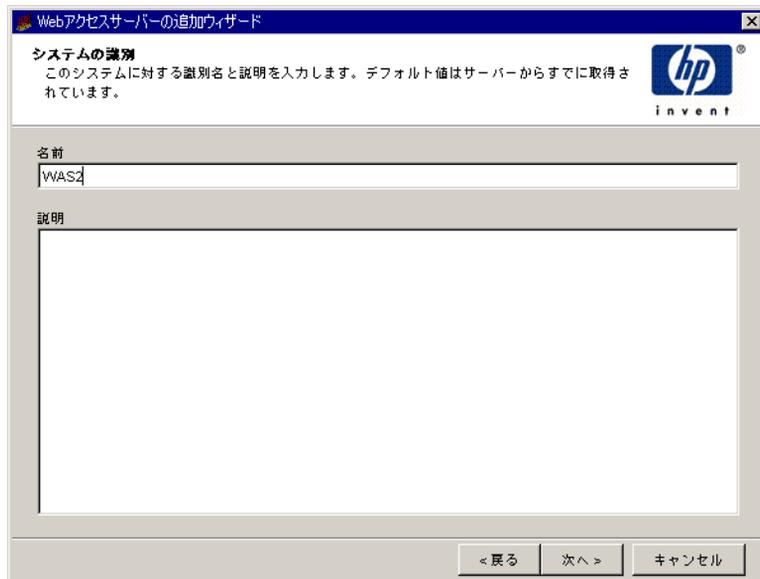


図 36 [システムの識別] ウィンドウ

5 [名前] ボックスにサーバーの名前(たとえば neast2)を入力します。



OVPI のシステム設定ファイル (systems.xml) にすでに存在する名前は指定できません。

データベースは、この名前でシステム設定ファイルに登録されます。

6 [説明] ボックスに、サーバーの説明を入力します。説明は省略することも可能です。

7 [次へ] をクリックします。

タスク 4: 情報の要約を確認する

図 37 は [概要] ウィンドウを示しています。

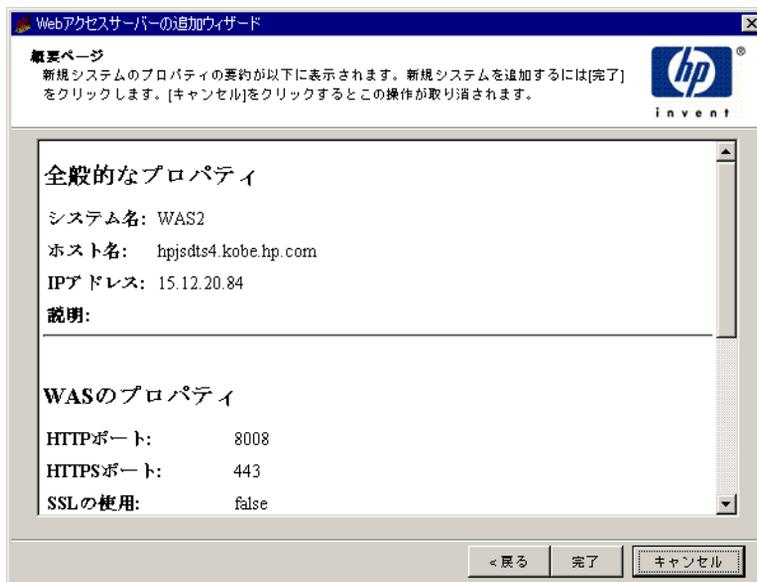


図 37 [概要] ウィンドウ

- 1 情報が正しいことを確認します。

必要であれば、[戻る] をクリックして前のページに戻り、変更します。変更が完了したら、[次へ] をクリックして [概要ページ] ウィンドウまで戻ります。

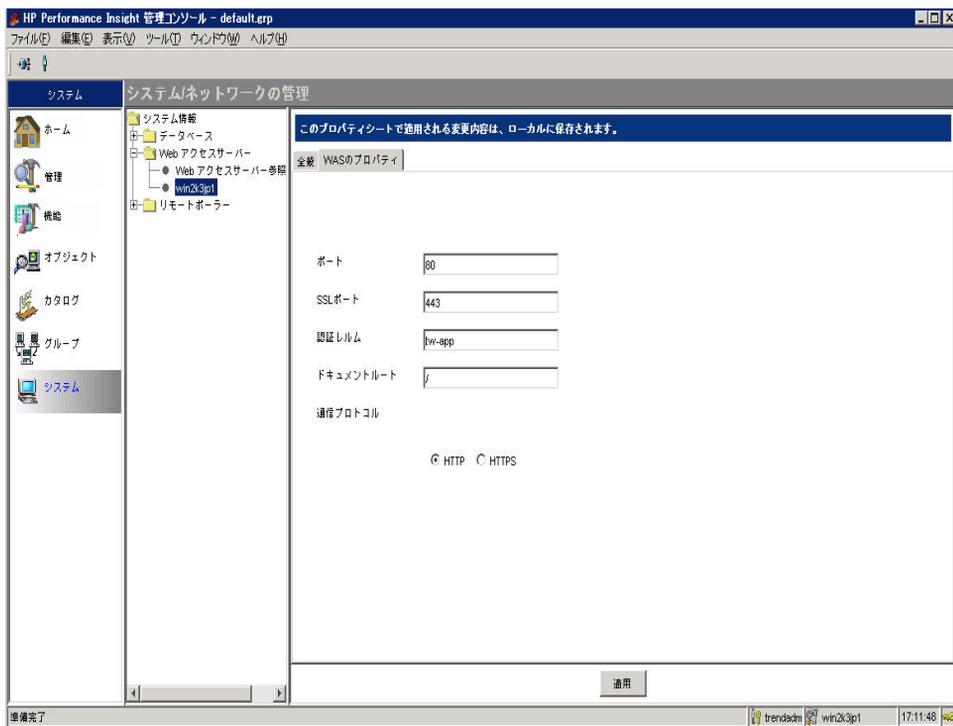
- 2 [完了] をクリックすると Web アクセスサーバーが追加されます。

ウィザードが閉じ、使用可能なシステムの一覧に Web アクセスサーバーが追加されます。

Web アクセスサーバーのプロパティの表示および変更

必要に応じて、現在の Web アクセスサーバーのプロパティを表示および変更できます。

現在の Web アクセスサーバーの全般的な情報を表示するには、ナビゲーションペインで Web アクセスサーバーのフォルダーを展開し、サーバー名をクリックします。表示ペインには、[全般] および [WAS のプロパティ] の 2 つのタブが表示されています。



このダイアログボックスには以下のタブがあります。

- [全般]: このタブには以下の情報が含まれています。
 - [名前]: Web アクセスサーバーの名前を入力します。
 - [ホスト名]: Web アクセスサーバーのホスト名を入力します。
 - [IP アドレス]: Web アクセスサーバーの IP アドレスを入力します。
 - [説明] 説明を入力します。
- [WAS のプロパティ]: このタブには以下の情報が含まれています。
 - [ポート]: システムのポート番号を入力します。
 - [SSL ポート]: システムの SSL ポート番号を入力します。

- [認証レulum]: レulumを入力します。レulumの詳細は、558 ページの **手順 b** を参照してください。
- [ドキュメントルート]: ドキュメントルートを入力します。レulumの詳細は、558 ページの **手順 c** を参照してください。
- [通信プロトコル]: [HTTP] または [HTTPS] をクリックします。

情報を変更して [適用] をクリックし、保存できます。

選択されている **Web** アクセスサーバーの状態に応じて、変更結果の保存先が、[システムのプロパティ] ダイアログボックスに表示されます。たとえば、現在のサーバーを選択した場合は、現在のサーバーに変更結果が適用されます。現在のサーバー以外のサーバーを選択した場合は、変更結果はそのサーバーにリモートで適用されます。リモートサーバーへの変更は、現在のサーバーには影響しません。

- [データベースのプロパティ]: このタブには以下の情報が含まれています。
 - [ポート]: データベースのポートを入力します。
 - [説明]: データベースの説明を入力します (省略可)。
 - [ベンダー]: [ベンダー] 矢印をクリックし、データベースタイプ ([Sybase]、[Oracle]、[Solid]、および [SQLServer]) を選択します。
 - [データベースインスタンス]: データベースインスタンスを入力します。デフォルトでは、これらは DSQUERY(Sybase の場合) または \$ORACLE_SID(Oracle の場合) です。
 - [最大接続数]: このデータベースプールの最大接続数を入力します。
 - [データベースユーザー名]: データベースユーザー名を入力します。デフォルトは dsi_dpipe です。
 - [パスワード]: データベースユーザーのパスワードを入力します。
 - [デフォルトデータベース]: **Web** アクセスサーバーが現在アクセスしているデータベースを、デフォルトのデータベースに設定する場合は、このオプションをクリックします。
 - [デフォルトの収集データベース]: **Web** アクセスサーバーが現在アクセスしているデータベースを、デフォルトの収集データベースに設定する場合は、このオプションをクリックします。

- 3 タブを選択し、変更を行い、**[適用]**をクリックして変更を適用します。完了したら、**[OK]**をクリックします。

現在のサーバー以外の **Web** アクセスサーバーのプロパティを表示するには、そのサーバーに接続する必要があります。詳細は、**360** ページの「**Web** アクセスサーバーの変更」を参照してください。

Web アクセスサーバーの同期化

ローカルシステムと現在の **Web** アクセスサーバーとを同期させることができません。

システムを現在の **Web** アクセスサーバーと同期させるには、以下の手順に従います。

- 1 ナビゲーションペインで **Web** アクセスサーバーのフォルダーを展開し、サーバー名をクリックします。表示ペインには、**[全般]** および **[WAS プロパティ]** の 2 つのタブが表示されます。
- 2 **[全般]** タブをクリックします。

現在のシステムを右クリックした場合、同期オプションは使用できません。システムをそのシステム自身と同期させることはできないため、別のシステムを選択してください。

- 3 メニューから **[同期化]** をクリックし、次のオプションのいずれかを選択します。
 - **[完全同期化]**: このオプションは初めに、ローカルシステムと、**手順 1** で選択した **Web** アクセスサーバーを同期化します。このとき、**Web** アクセスサーバーのすべての情報が、ローカルシステムの情報と置き換わります。続いて、**手順 1** で選択した **Web** アクセスサーバーからアクセス可能な、すべてのシステムを同期化します。**Web** アクセスサーバーが現在アクセスしていないシステムは追加されます。

この同期オプションでは基本的に、**[localhost の更新]** オプションと **[Web アクセスサーバーの更新]** オプションが行うのと同じ同期処理が実行されます。

たとえば、複数のローカルシステムで、重なった参照は **Web** アクセスサーバーにある参照に統一され、**Web** アクセスサーバーにない参照は、ローカルシステムから **Web** アクセスサーバーにアップロードされます。

- **[localhostの更新]**: ローカルシステムを、手順 1 で選択した Web アクセスサーバーと同期化できます。Web アクセスサーバーのすべての情報が、ローカルシステムの情報と置き換わります。(この更新では、**[Web アクセスサーバーの更新]** オプションとは反対の機能が実行されます)。

たとえば、ローカルシステムに **Thunderbolt** という名前のシステムのエントリーがあり、Web アクセスサーバーにも同じシステムのエントリーがあるとします。この場合は Web アクセスサーバーがマスターになるため、Web アクセスサーバーの **Thunderbolt** のエントリーが、ローカルシステムの **Thunderbolt** のエントリーに上書きされます。

- **[Web アクセスサーバーの更新]**: 手順 1 で選択した Web アクセスサーバーからアクセス可能な、すべてのシステムを同期化します。Web アクセスサーバーが現在アクセスしていないシステムは追加されます。

たとえば、ローカルシステムに、Web アクセスサーバーに追加したいデータベースがある場合は、同期処理を実行するとそのデータベースが Web アクセスサーバーに追加されます。

同期のオプションを選択すると、同期のダイアログボックスが開いて同期処理が開始されます。この処理が正常に完了したかどうかは、このダイアログボックスでわかります。同期処理が完了すると、ダイアログボックスが閉じます。

Web アクセスサーバーの変更

現在の Web アクセスサーバーを変更するには、以下の手順に従います。

- 1 ツールバーで [サーバーの変更] アイコン  をクリックするか、または、[ファイル] メニューから [サーバーの変更] を選択します。[OVPI システムの変更] ダイアログボックスが開きます。

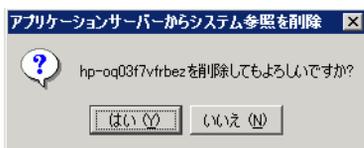


- 2 目的の Web アクセスサーバーを選択し、[接続] をクリックします。接続が確立されると、このシステムの横にあるアイコンが青で強調表示されます。

Web アクセスサーバーの削除

Web アクセスサーバーを削除するには、以下の手順に従います。

- 1 [システム/ネットワークの管理] ウィンドウのナビゲーションペインでサーバーを右クリックします。
- 2 [システム参照を削除] を選択します。確認のダイアログボックスが開きます。



- 3 [はい] をクリックします。

データベースの管理

データベースの追加、データベースに関連付けられているパラメータの変更、表領域のプロパティの変更、使用するデータベースサーバーの変更、などの操作が可能です。

データベースの追加

データベースサーバーを追加するには、以下の手順に従います。

- 1 [システム/ネットワークの管理] ウィンドウのデータベースフォルダーを展開します。
- 2 [データベース参照の追加] をクリックします。[データベースの追加ウィザード] が開きます。
- 3 [次へ] をクリックして続行します。ここで、データベースのタイプを選択できます。
- 4 以下の手順に従います。
 - a 以下のいずれかのオプションを選択します。
 - [OVPI データベース]: このオプションを使用すると、OVPI データベーススキーマが含まれているデータベースを追加できます。
 - [非 OVPI データベース]: このオプションでは、汎用データベースを追加できます。汎用データベースには OVPI データベーススキーマは含まれていません。サポートされている汎用データベースのタイプは、Oracle、SQLServer、および Solid です。



ユーザーが非 OVPI データベースにアクセスできるようにするには、そのデータベースをユーザーに割り当てておく必要があります。つまり、非 OVPI データベースにアクセスできるようにユーザーアカウントが設定されていないユーザーは、そのデータベースのデータを使用するレポートを作成できません。

非 OVPI データベースをユーザーに割り当てるには、そのデータベースをユーザーのアカウントのデフォルトにするか、非 OVPI データベースにアクセスするためのユーザーアカウントを別に作成します。詳細は、522 ページの「ユーザーアカウントの変更」または 519 ページの「ユーザーアカウントの作成」を参照してください。

- b [次へ] をクリックします。
 - OVPI データベースを選択した場合は、[接続情報] ウィンドウが開きます。手順 5 に進みます。
 - サポートされている非 OVPI データベースを選択した場合は、[データベース接続情報] ウィンドウが開きます。手順 6 に進みます。
- 5 以下の手順に従います。
 - a [ホスト名] ボックスにデータベースのホスト名を入力します。
 - b データベースのポート番号が 80 (デフォルト) 以外の場合は、[ポート] ボックスに使用するポート番号を入力します。
 - c データベースが SSL を使用しており、かつ通信を保護したい場合は、[TLS/SSL を使用] ボックスをオンにします。
 - d [次へ] をクリックします。[システムの識別] ページが開きます。手順 7 に進みます。
- 6 以下の手順に従います。
 - a [ホスト名] ボックスにデータベースのホスト名を入力します。
 - b データベースのポート番号が 80 (デフォルト) 以外の場合は、[ポート] ボックスに使用するポート番号を入力します。
 - c [説明] ボックスに説明を入力します。説明は省略することも可能です。
 - d [ベンダー] リストからベンダーを選択します。
 - e [データベースインスタンス] にデータベースインスタンスを入力します。
 - f パスワードボックスに、dsi_dpiped アカウントのパスワードを入力します。
 - g [次へ] をクリックします。[システムの識別] ページが開きます。
- 7 以下の手順に従います。
 - a [名前] ボックスにデータベースの名前 (たとえば neast2) を入力します。



OVPI のシステム設定ファイル (systems.xml) にすでに存在する名前は指定できません。

データベースは、この名前でシステム設定ファイルに登録されます。

b [説明] ボックスに、サーバーの説明を入力します。説明は省略することも可能です。

c [次へ] をクリックします。[サマリー] ウィンドウが開きます。

8 以下の手順に従います。

a 情報が正しいことを確認します。

必要であれば、[戻る] をクリックして前のページに戻り、変更します。
変更が完了したら、[次へ] をクリックして[概要] ページまで戻ります。

b [完了] をクリックするとデータベースが追加されます。

ウィザードが閉じ、サーバーの使用可能なデータベースの一覧にこのデータベースが追加されます。

▶ 非 OVPI データベースシステムのレポートを作成および表示するには、『HP OpenView Performance Insight レポートの作成および表示ガイド』を参照してください。

データベースプロパティの表示

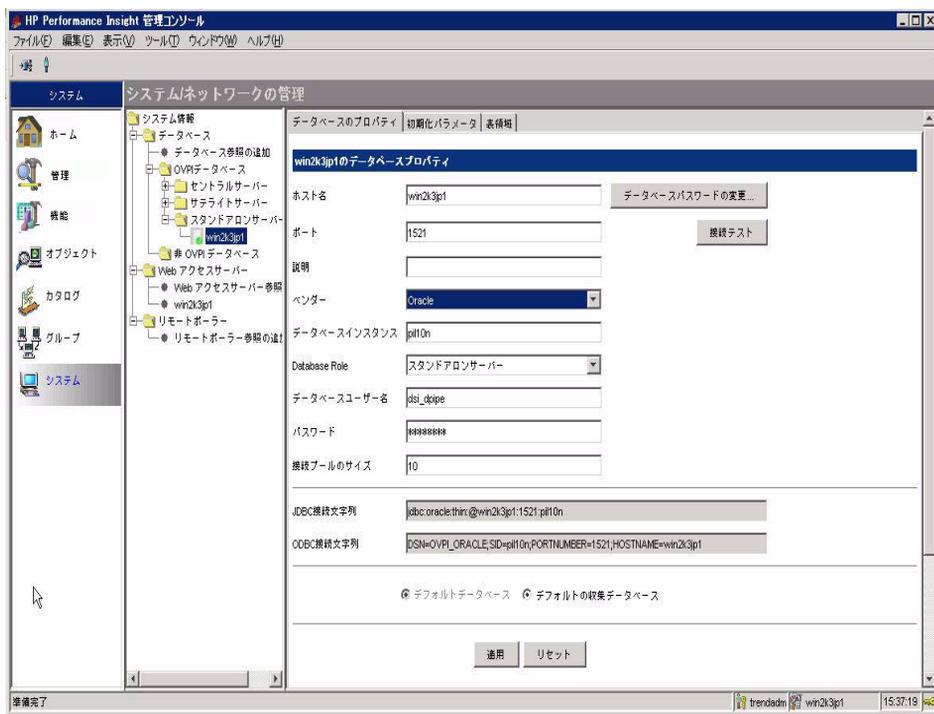
必要に応じて、データベースのプロパティを表示したり、データベースパスワードを変更したりできます。

▶ データベースのプロパティを変更する場合は、データベースに付属のツール (Oracle Enterprise Manager など) を使用します。

データベースプロパティを表示するには、以下の手順に従います。

- 1 [システム情報] ナビゲーションツリーで、[データベース] フォルダを展開します。
- 2 表示するデータベースをクリックします。3 つのタブを表示するウィンドウが開きます。

- 3 [データベースのプロパティ] タブをクリックします。データベースのプロパティが表示ペインに表示されます。



表示されるプロパティは次のとおりです。

- [ホスト名]
- [ポート]
- [説明]
- [ベンダー]: これはデータベースのタイプ (Sybase または Oracle) です。
- [データベースインスタンス]: デフォルトでは、この名前は DSQUERY (Sybase の場合) または \$ORACLE_SID (Oracle の場合) です。
- [Database Role]: ドロップダウンメニューからデータベースの役割 (スタンドアロンサーバー、セントラルサーバー、またはサテライトサーバー) を選択します。
- [データベースユーザー名]

- [パスワード]
 - [接続プールのサイズ]: OVPI 用に確立されている接続の数です。
 - [JDBC 接続文字列]: OVPI の Java コンポーネントでデータベース接続に使用される文字列です。
 - [ODBC 接続文字列]: OVPI の C ベースのコンポーネントでデータベース接続に使用される文字列です。
 - [接続テスト] ボタン: このボタンをクリックすると、データベース接続をテストできます。
- 4 データベースパスワードを変更するには、[データベースパスワードの変更] をクリックします。[データベースパスワードの変更] ダイアログボックスが開きます。

以下の手順に従います。

- [新しいパスワード] ボックスに新しいパスワードを入力します。
- [確認] ボックスに新しいパスワードをもう一度入力します。
- [データベースに関する変更] を選択すると、データベースのパスワードと共に、systems.xml ファイル内のパスワードも変更されます。

たとえば、システム A のデータベースパスワードを変更してあり、Web アクセスサーバーはシステム B にあると仮定します。[データベースに関する変更] オプションを選択すれば、Web アクセスサーバーが更新されたパスワードを systems.xml ファイルから取得するため、Web アクセスサーバーも次回からそのデータベースにアクセスできるようになります。このオプションを選択しなかった場合は、Web アクセスサーバーはシステム A のデータベースにはアクセスできなくなります。

- d [OK] をクリックします。
- e Web アクセスサーバーと、開いているクライアントアプリケーションをすべて再起動します。

データベースの初期化パラメータの変更

データベースの初期化パラメータを変更するには、以下の手順に従います。

- 5 [システム情報] ナビゲーションツリーで、[データベース] フォルダを展開します。
- 6 表示するデータベースをクリックしてから [初期化パラメータ] タブをクリックします。

データベースの初期化パラメータが表示ペインに表示されます。

hpkszhのデータベース初期化パラメータ

パラメータ

変更可能	再起動...	パラメータ	値	説明
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	aq_tm_processes	1	number of AQ Time Managers to start
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	archive_lag_target	0	Maximum number of seconds of redo...
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	background_dump_dest	C:\oracle\admi...	Detached process dump directory
<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	backup_tape_io_slaves	FALSE	BACKUP Tape I/O slaves
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	control_file_record_keep...	7	control file record keep time in days
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	core_dump_dest	C:\oracle\admi...	Core dump directory
<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	cursor_sharing	EXACT	cursor sharing mode
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	db_16k_cache_size	209715200	Size of cache for 16K buffers
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	db_2k_cache_size	0	Size of cache for 2K buffers
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	db_32k_cache_size	0	Size of cache for 32K buffers
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	db_4k_cache_size	0	Size of cache for 4K buffers
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	db_8k_cache_size	0	Size of cache for 8K buffers
<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	db_block_checking	FALSE	data and index block checking
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	db_block_checksum	TRUE	store checksum in db blocks and che...
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	db_cache_advice	ON	Buffer cache sizing advisory
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	db_cache_size	209715200	Size of DEFAULT buffer pool for stan...
<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	db_create_file_dest		default database location
<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	db_create_online_log_de...		online log/controlfile destination #1
<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	db_create_online_log_de...		online log/controlfile destination #2
<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	db_create_online_log_de...		online log/controlfile destination #3
<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	db_create_online_log_de...		online log/controlfile destination #4
<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	db_create_online_log_de...		online log/controlfile destination #5
<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	db_file_multiblock_read_...	16	db block to be read each IO
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	db_keep_cache_size	0	Size of KEEP buffer pool for standard ...
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	db_recycle_cache_size	0	Size of RECYCLE buffer pool for stan...
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	dg_broker_config_file1	%ORACLE_H...	data guard broker configuration file #1

[パラメータ] ウィンドウに、次の情報が表示されます。

- [変更可能]: パラメータの変更が可能かどうかを示します。
- [再起動が必要]: パラメータを変更した後にデータベースを再起動する必要があるかどうかを示します。
- [パラメータ]: パラメータの名前。
- [値]: パラメータの現在の値。
- [説明]: パラメータの説明。

データベースサイズの拡張

表領域とはデータベーステーブルの格納場所であり、カタログと似ています。表領域のサイズは拡張できます。これにより、データベースのサイズも拡張されます。

Sybase を使用している場合は、データファイルを追加することで表領域を拡張できます。通常は、Oracle の表領域は自動的に拡張されるよう設定されているため、領域を追加する必要はありません。使用できる容量をデータベース管理者が制限しているときは、場合によってはデータベースを拡張しなければなりません。

データベースコンポーネントのサイズ設定のガイドライン

表 7 は、データベースコンポーネントの推奨サイズをまとめたものです。

表 7 データベースコンポーネントのサイズ設定のガイドライン

データベースコンポーネント	ガイドライン
一時データベース (tempdb)	最小で OVPI データベースの 50%、最大 1 GB
トランザクションログ	最小で OVPI データベースの 50%、最大 2 GB

各データベースは、データと、デバイスに関連するログで構成されます。各デバイスは、ファイルまたは raw パーティションにマップされています。データとログのためのディスク領域の初期サイズは、インストールプロセスで設定されます。各 OVPI システムはそれぞれに特有な特性を持つため、データベースサイズの拡張が不要な場合もあります。データベースのサイズを変更するべきかどうかを判断できない場合は、HP のテクニカルサポートにお問い合わせください。

データベースのサイズの拡張

- ▶ OVPI がインストールされているシステムが、**Oracle Client** を使用してリモートの **Oracle** データベースにアクセスしている場合は、表領域を拡張できません。

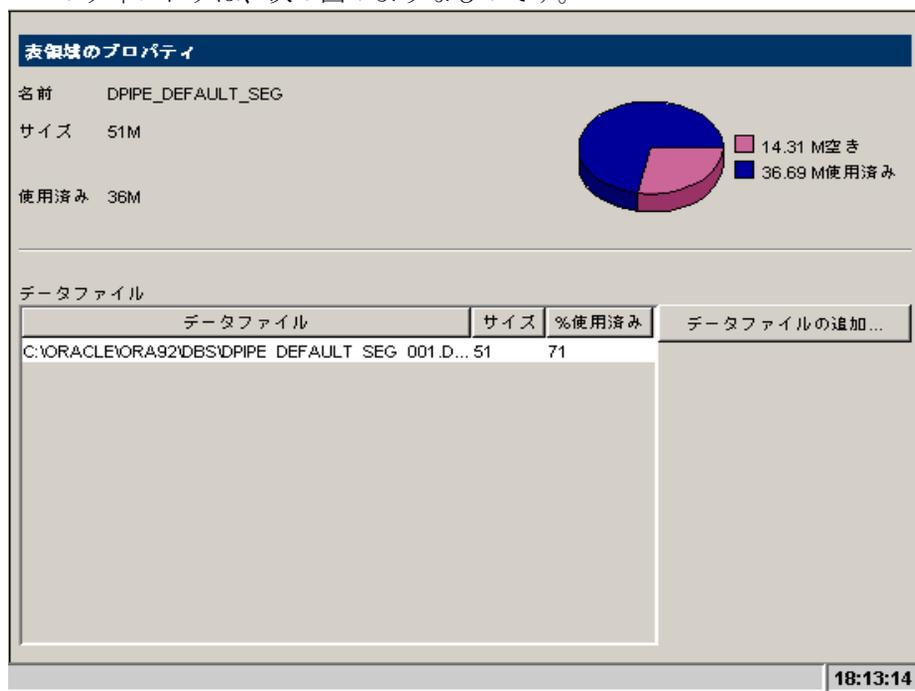
データベースを拡張するには、以下の手順に従います。

- 1 変更するデータベースが含まれているサーバーのフォルダーを展開します。
- 2 [データベース] フォルダーを展開し、必要なデータベースを展開します。使用可能なデータベースが一覧表示されます。
- 3 変更するデータベースのフォルダーを展開します。
- 4 [表領域] フォルダーを展開します。

データベースのタイプに応じて、以下の表領域が表示されます。

- **Sybase:** Sybase の表領域は次のものがあります。
 - **dpipe_db.** Sybase では、OVPI データベースは **dpipe_db** として認識されます。
 - **tempdb.** これは、**Sybase** で必要に応じて一時テーブルが作成される場所です。たとえば、グループ化やソートを行うクエリに基づくレポートを実行すると、**Sybase** では **tempdb** 内に一時テーブルが作成され、ここにビューから返されたデータが格納されます。
 - s Sybase のインストール時に、小さな領域 (約 2MB) が **tempdb** に割り当てられます。
- **Oracle:** Oracle の表領域は、**dpipe_default_seg**、**dpipe_property_ind_seg**、**dpipe_property_seg**、**dpipe_upload_ind_seg**、**dpipe_upload_seg**、**dpipe_rate_ind_seg**、**dpipe_rate_seg**、**dpipe_summary_ind_seg**、**dpipe_summary_seg**、および **dpipe_overflow_seg** です。

- 5 表領域をクリックします。表示ペインに [表領域] ウィンドウが開きます。このウィンドウは、次の図のようなものです。



[表領域] ウィンドウには以下の情報が表示されます。

- [名前]: データファイルの名前
- [サイズ]: データファイルのサイズ
- [使用済み]: 使用されているデータファイルの割合 (%)
- [データファイル]: データファイルのファイル名
- [使用法]: ファイルの用途
- [サイズ]: ファイルのサイズ
- [% 使用済み]: 使用されているファイルの割合 (%)。この値が、データベースの **60%** 以上が使用されていることを示している場合は、データベースの拡張を推奨します。あるいは、不要なデータを削除するか、データの保存期間を短くするという方法もあります。

- 6 データファイルを追加するには、[**データファイルの追加**] をクリックします。
[**拡張**] ダイアログボックスが開きます。



- 7 以下の手順に従います。

- a [**データファイル**] ボックスにデータファイルの名前を入力するか、または [**参照**] をクリックしてファイルを検索します。

[**参照**] オプションを使用すると、ローカルシステム上のファイルを選択するか、ファイルの作成先とするデータベースシステム上のディレクトリに移動することができます。たとえば、現在 **Windows** システムにログオンしており、データベースは **UNIX** システムにあるとします。この場合は、[**参照**] オプションを使用すると、**UNIX** システムのディレクトリ階層を参照できます。

- b [**サイズ (M)**] ボックスに、データファイルのサイズを入力します。
c **Sybase** のみ：以下の手順に従います。

- **Sybase** データベースに **OVPI** データ用の領域を追加するには、[**データ記憶領域**] をクリックします。
- データベースのログセグメントに領域を追加するには、[**トランザクションログ**] をクリックします。

ログセグメントとは、データベースへの変更をコミットされるまで格納しておく、データベース上の領域です。ログセグメントは、ログ以外の全データファイルの合計サイズの約 **50%** にしておくことをお勧めします。

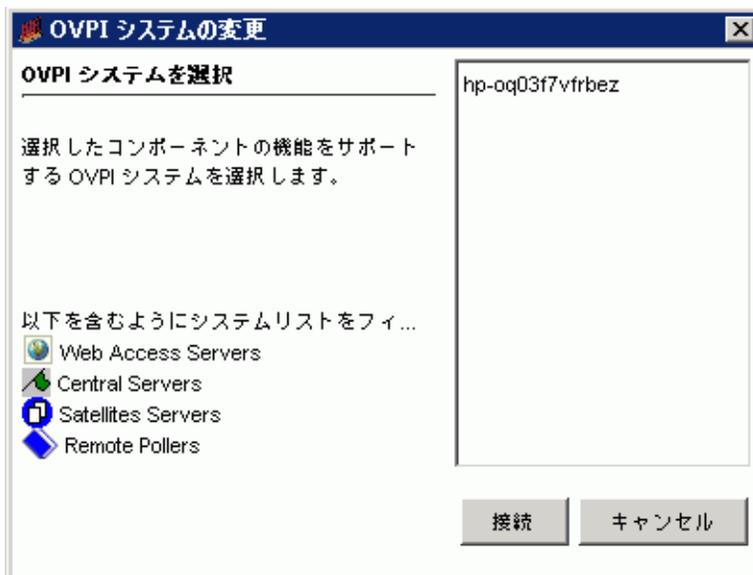
- d [**拡張**] をクリックします。

新しいデータファイルがウィンドウに表示されます。

データベースサーバーの変更

使用するデータベースサーバーを変更するには、以下の手順に従います。

- 1 ツールバーで  をクリックするか、または [ファイル] メニューから [サーバーの変更] を選択します。[OVPI システムの変更] ダイアログボックスが開きます。



- 2 目的のデータベースを選択し [接続] をクリックします。接続が確立されると、このシステムの横にあるデータベースアイコンが緑で強調表示されます。

リモートポーターの追加

システム/ネットワーク管理コンポーネントを使用して、システムにリモートポーターを追加できます。

リモートポーターの追加

アクセスできるシステムのリストにリモートポーターを追加するには、以下の手順に従います。

タスク 1: リモートポーターの追加ウィザードを起動する

- 1 (+) 記号をクリックしてリモートポーターリストを展開します。[**リモートポーター参照の追加**] に対するオプションが表示されます。
- 2 [**リモートポーター参照の追加**] オプションをクリックします。

図 34 はリモートポーターウィザードの追加を示しています。

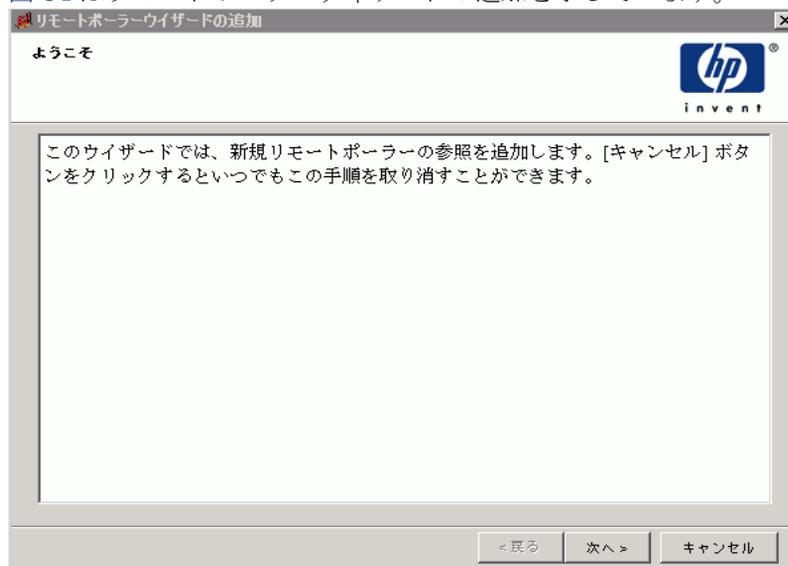
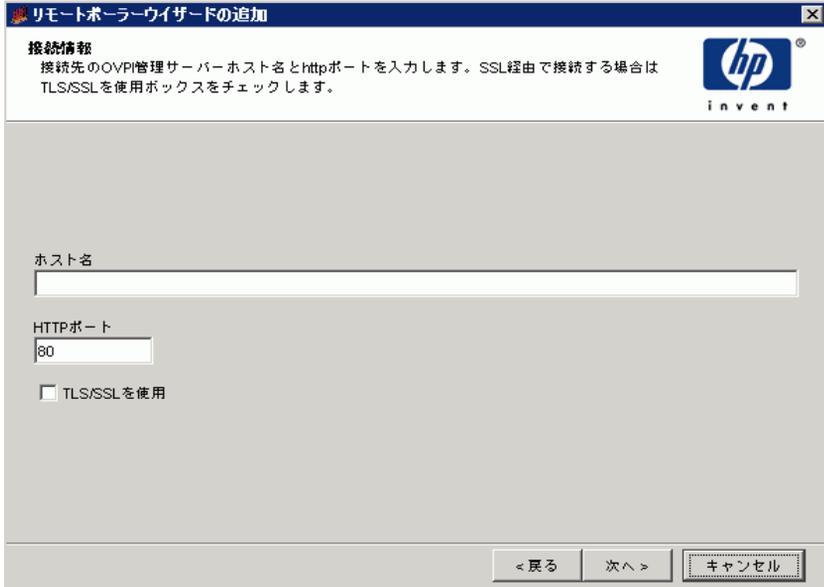


図 38 [リモートポーターウィザードの追加] ウィンドウ

- 3 [**次へ**] をクリックします。

タスク 2: リモートポーターへの接続に必要な情報を指定する

図 39 は、[接続情報] ウィンドウを示しています。



The screenshot shows a window titled "リモートポーターウィザードの追加" (Add Remote Port Wizard). The window contains the following elements:

- 接続情報** (Connection Information) section with instructions: "接続先のOVPI管理サーバーホスト名とhttpポートを入力します。SSL経由で接続する場合は TLS/SSLを使用ボックスをチェックします。" (Enter the host name of the OVPI management server and the http port. If connecting via SSL, check the TLS/SSL use box.)
- ホスト名** (Host Name) text box.
- HTTPポート** (HTTP Port) text box containing the value "80".
- TLS/SSLを使用** (Use TLS/SSL) checkbox.
- Navigation buttons at the bottom: "< 戻る" (Back), "次へ >" (Next), and "キャンセル" (Cancel).
- The HP logo and "invent" text are visible in the top right corner.

図 39 [接続情報] ウィンドウ

- 1 [ホスト名] ボックスにリモートポーターのホスト名を入力します。
- 2 [HTTP ポート] ボックスにリモートポーターのポート番号を入力します。
- 3 リモートポーターが **SSL** を使用しており、かつ通信を保護したい場合は、[**TLS/SSL を使用**] ボックスをオンにします。
- 4 [**次へ**] をクリックします。

タスク 3: リモートポーターの名前と説明を入力する

図 40 は、[システムの識別] ウィンドウを示しています。

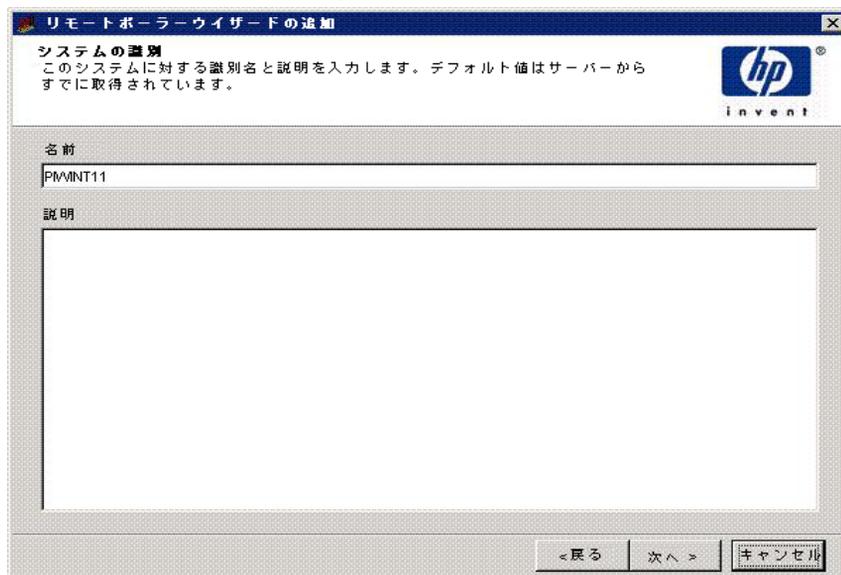


図 40 [システムの識別] ウィンドウ

5 [名前] ボックスに、リモートポーターの名前を入力します。



OVPI のシステム設定ファイル (systems.xml) にすでに存在する名前は指定できません。

6 [説明] ボックスに、リモートポーターの説明を入力します。説明は省略することも可能です。

7 [次へ] をクリックします。

タスク 4: リモートポーターに関して入力した情報の要約を確認する

図 41 は [サマリー] ウィンドウを示しています。



図 41 [サマリー] ウィンドウ

- 1 情報が正しいことを確認します。

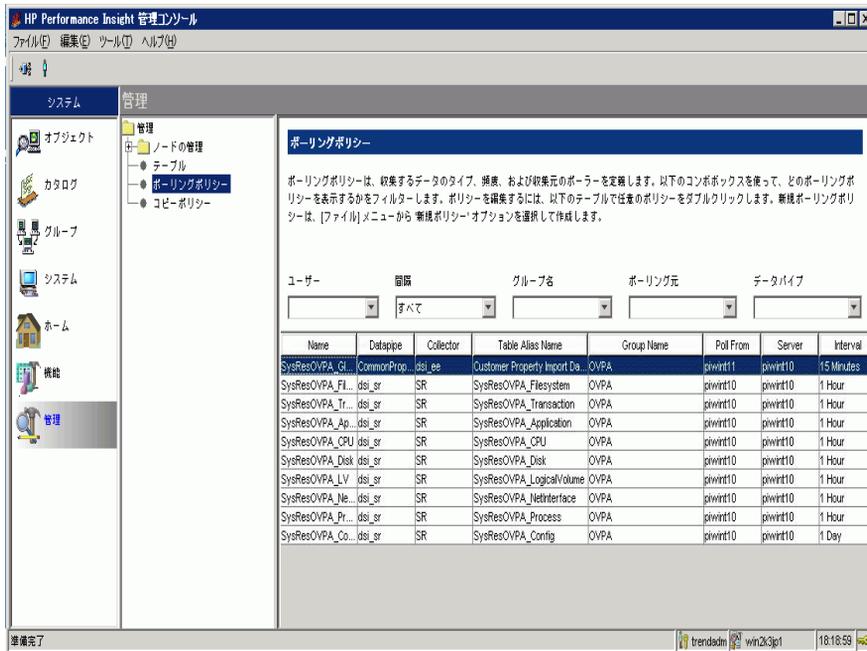
必要であれば、[戻る] をクリックして前のページに戻り、変更します。変更が完了したら、[次へ] をクリックして [概要ページ] ウィンドウまで戻ります。

- 2 [完了] をクリックするとリモートポーターが追加されます。
ウィザードが閉じ、リモートポーターがリストに追加されます。

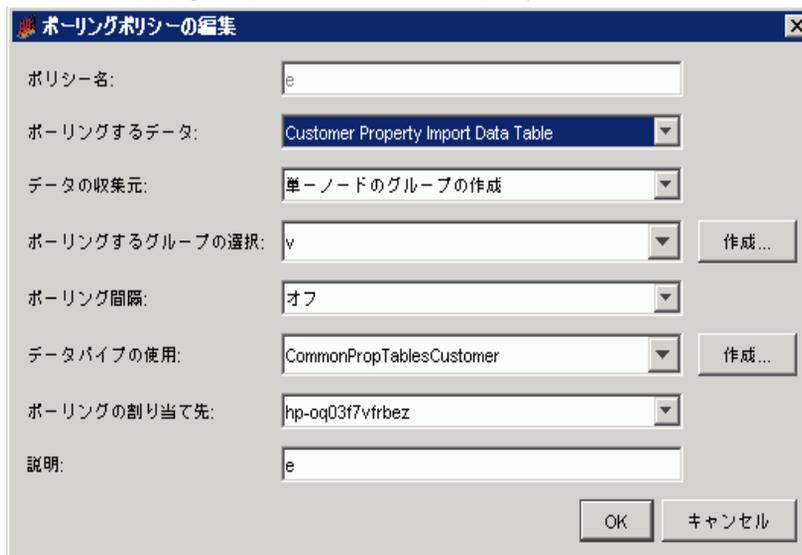
タスク 5: ポーリングポリシーを編集する

- 1 ナビゲーションペインで [管理] スナップインをクリックし、[ポーリングポリシー] をクリックします。

2 ポーリングポリシーのリストからポーリングポリシーを選択します。



3 [編集]メニューから[ポーリングポリシー]を選択します。[ポーリングポリシーの編集]ウィンドウが表示されます。



- 4 [データパイプの使用]の隣にある[作成]ボタンをクリックします。[データパイプインストールの作成]ウィンドウが開きます。

データパイプインストールの作成

ホスト名:

IPアドレス:

ルールファイル:

注意: ホスト名だけを入力した場合は、IPアドレスが自動的に参照されます。

OK キャンセル

- 5 リモートポーラーのホスト名を入力し、[OK]をクリックします。[リモートポーラーの編集]ウィンドウに戻ります。
- 6 [リモートポーラーの編集]ウィンドウで[OK]をクリックします。
ポーリングポリシーごとにステップ 2 から 6 までを繰り返します。

13 保持期間テーブルの管理

この章では、HP OpenView Performance Insight (OVPI) のテーブルマネージャアプリケーションの使用方法を説明します。このアプリケーションを使用して、データベースの使用状況とサイズの増大を監視し、データとプロパティテーブルを表示および作成し、個々のテーブル、および全体のテーブルのデフォルトを設定します。

具体的には、以下を行う方法を説明します。

- テーブル情報を表示する。381 ページを参照してください。
- テーブルの詳細情報を表示する。387 ページを参照してください。
- テーブル内のデータを表示する。402 ページを参照してください。
- テーブルを作成する。429 ページを参照してください。
- テーブルのデフォルトを設定する。447 ページを参照してください。

テーブルの詳細については、『HP OpenView Performance Insight TEEL Reference Guide』を参照してください。このマニュアルには、テーブルの属性と TEEL ファイルの作成に関する情報が記載されています。

テーブルマネージャの起動

テーブルマネージャを起動するには、以下の手順に従います。

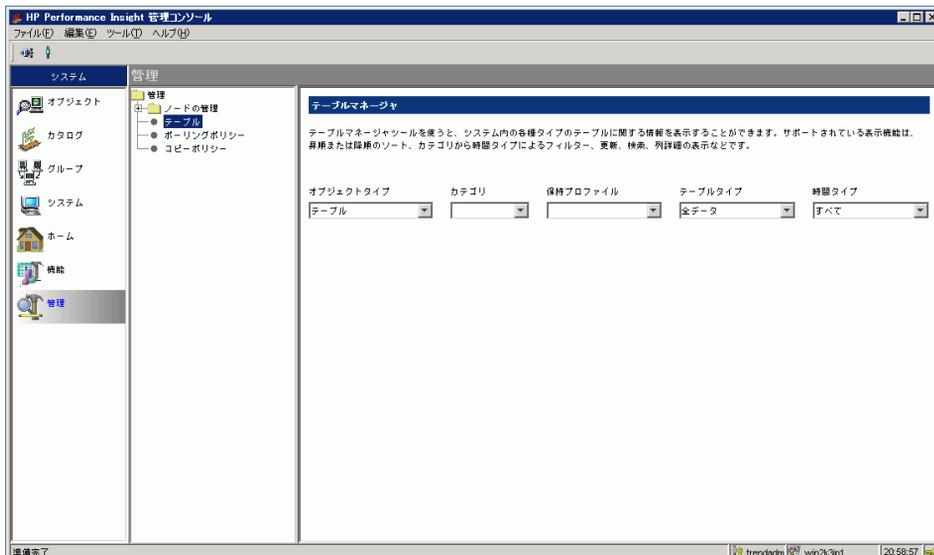
- 1 管理コンソールを起動します。詳細は、96 ページの「**管理コンソールの起動**」を参照してください。



管理コンソールには管理者権限を持つアカウントでログオンする必要があります。ユーザーアカウントの詳細は、516 ページの「**ユーザーアカウントの管理**」を参照してください。

- 2 ナビゲーションペインの [管理] アイコンをクリックします。
[管理] スナップインが開きます。
- 3 [管理] スナップインにあるナビゲーションツリーで、**テーブル**をクリックします。

[テーブルマネージャ] ウィンドウが開きます。



[テーブルマネージャ] ウィンドウには以下のペインがあります。

- **表示ペイン**: 表示ペインは、ウィンドウの右側にあります。
- **ナビゲーションペイン**: ナビゲーションペインはウィンドウの左側にあります。ペインにはツリーが表示されます。ツリーはフォルダーで構成されており、各フォルダー内には項目があり、各項目の下に、さらに別の項目、またはフォルダーがある場合があります。

ツリーの階層レベルは、**Windows** エクスプローラで **Windows** システムの内容を表示するのとまったく同様に展開できます。フォルダーを展開すると、そのフォルダー内の項目やフォルダーを表示できます。また、階層レベルを折りたたむこともできます。

ナビゲーションフレームのツリーは、次のように操作します。

- フォルダーの内容をプレビューするには、プラス記号 (+) をクリックします。フォルダーの内容は、表示フレームに表示されます。

- 展開されたフォルダーを縮小するには、マイナス記号(-)をクリックします。

テーブル情報の表示

さまざまなタイプのテーブルに関する情報を表示できます。データおよび内部テーブルの列は、プロパティテーブルの列とは異なります。ここでは、さまざまなタイプのテーブルに表示される列と、情報の表示形態を変更する機能について説明します。

表示機能

テーブルマネージャでは、表示情報を変更および検索できます。昇順または降順でのソート、列のサイズの変更、更新、検索といった機能があります。

情報のソート

列内の情報を昇順でソートするには、ソートする列の見出しにカーソルを置きクリックします。

同様に、列内の情報を降順でソートするには、ソートする列の見出しにカーソルを置き、**[Shift]** キーを押しながらクリックします。

列のサイズの変更

列のサイズを変更するには、以下の手順に従います。

- 1 カーソルを、列の見出しの右枠の上に置きます。
- 2 ポインタが  に変わったら、左マウスボタンを押しながら動かして、列を希望の幅に調整します。

情報の更新

テーブルマネージャの表示を更新できます。テーブルマネージャの表示を更新すると、列は元の順序でソートされ、列のサイズも元の大きさに戻ります。また、強調表示されていた行も通常の表示に戻ります。

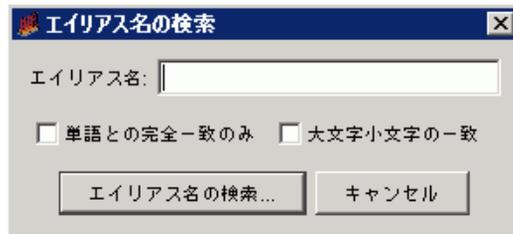
画面を更新するには、 をクリックするか、[表示]メニューから**[更新]**を選択します。

エイリアス名の検索

テーブルマネージャでは、現在アクティブなテーブルのリストからエイリアス名を検索できます。

現在のリストからエイリアス名を検索するには、以下の手順に従います。

- 1 [編集]メニューから[**エイリアス名の検索**]を選択します。
[エイリアス名の検索]ダイアログボックスが開きます。



- 2 [エイリアス名]ボックスに、検索するエイリアス名を入力します。
- 3 語句の一部分だけでなく全体が一致する検索をする場合は、[**単語との完全一致のみ**]をクリックします。
- 4 大文字/小文字を区別する場合は、[**大文字小文字の一致**]をクリックします。
- 5 [**エイリアス名の検索**]をクリックすると、エイリアス名が検索されます。

データテーブルのタイプ別またはカテゴリ別での表示

表示ペインにはさまざまなフィルターが含まれています。次のフィルターを使用して、利用可能なデータテーブルのサブセットだけを表示することができます。

- オブジェクトタイプ
- カテゴリ
- 保持プロファイル
- テーブルタイプ
- 時間タイプ

たとえば、[カテゴリ]フォルダーからルーターを選択した場合は、表示ペインに以下のような結果が表示されます。

テーブルマネージャツールを使うと、システム内の各種タイプのテーブルに関する情報を表示することができます。サポートされている表示機能は、昇順または降順のソート、カテゴリから時間タイプによるフィルター、更新、検索、列詳細の表示などです。

オブジェクトタイプ	カテゴリ	保持プロファイル	テーブルタイプ	時間タイプ			
テーブル			全データ	すべて			
カタログ	エイリア...	SQL名	サイズ(行)	アクティブデータの保...	アーカイブデータの保...	アーカイ...	タイム...
CommonPropertyTables	Customer P...	RComPro...	0	2	<input type="checkbox"/>	as-poll	
CommonPropertyTables	Location Pr...	RComPro...	0	2	<input type="checkbox"/>	as-poll	
CommonPropertyTables	Node Prop...	RComPro...	0	2	<input type="checkbox"/>	as-poll	



実際に表示される列は、この例の列とは異なる場合もあります。データテーブルの表示時にどの列を表示するかは、ユーザが選択できます。詳細は、386 ページの「[テーブル列の表示の変更](#)」を参照してください。

表示される列は以下のとおりです。

[カテゴリ]: テーブルのカテゴリです。カテゴリとは、OVPI のレポート機能によってテーブルのグループに割り当てられる標準のコードです。レポートのタイプに基づいて、複数のテーブルをグループにすることができます。最後に追加したカテゴリは、リストの末尾に表示されます。

[エイリアス名]: データベース内のテーブルの、論理的かつ一意な、内容を表した名前です。

[SQL 名]: SQL Server がテーブルを識別するための名前です。SQL クエリにはこの名前を使用します。

[サイズ(行)]: テーブルの行数です。

[アクティブデータ保持(日数)]: テーブル内にデータを保持する日数です。この日数プラス 1 日が経過したデータは破棄されます。保持のためのオプションは以下のとおりです。

- [永続的に] – データは永久に削除されません。
- [n] – データはこの日数だけ保存されます。

[デフォルト] – データはデフォルトの期間(時間タイプの保持期間)だけ保持されます。この値は、[テーブルのデフォルトの設定]ダイアログボックスの[データを保持する日数]ボックスで設定します。

[アーカイブデータの保持(日数)]: テーブル内にデータを保持する日数です。この日数プラス1日が経過したデータは破棄されます。アーカイブ保持のためのオプションは以下のとおりです。

- [永続的に] – データは永久に削除されません。
- [n] – データはこの日数だけ保存されます。

[デフォルト] – データはデフォルトの期間(時間タイプのアーカイブ保持期間)だけ保持されます。この値は、[テーブルの詳細設定]ダイアログボックスの[アーカイブ保持]ボックスで設定します。

[アーカイブ対象]: これは、アーカイブテーブルを作成するかどうかを指定するためのフラグです。

[タイムタイプ]: データの時間タイプです。時間タイプは、**as-polled**、分以下、5分、時単位、日単位、週単位、月単位、四半期単位、年単位のいずれかです。

[タイプ]: このテーブルに格納されているデータのタイプです。使用できるタイプは、未処理(**raw**)、レート、要約、予測、ベースライン、イベント、および予測です。各タイプの説明は、[431 ページのタスク 3](#)を参照してください。

プロパティテーブルの表示

データベース内の既存のプロパティテーブルを表示するには、テーブルタイプリストで [**プロパティ**] を選択します。次の図は、[テーブルタイプ] リストからプロパティを選択したときの、表示ペインの表示結果の例です。

The screenshot shows the 'Table Manager' window with the following settings: Object: Table, Category: All, Profile: All, Table Type: All Data, Time Type: All. The table below lists the results:

カテゴリ	エイリアス名	SQL名
Thresholds	threshold_RTHthDef_DR_NRT	RTHTHDEF_DR_NRT
SystemResource	SH_SR_SysExec	SH_SR_SYSEXEC
SystemResource	Monthly SystemExecutive Data Table	SM_SR_SYSEXEC
SystemResource	Daily SystemExecutive Data Table	SD_SR_SYSEXEC
SystemResource	Hourly SystemExceptions Data Table	SH_SR_SYXCEP
SystemResource	Daily SystemExceptions Data Table	SD_SR_SYXCEP
SystemResource	Hourly SystemVolume Exceptions Data Table	SH_SR_SYSVOLXCEP
SystemResource	Daily SystemVolume Exceptions Data Table	SD_SR_SYSVOLXCEP
SystemResource	Daily Forecast System Exceptions Data Table	SD42SD_SR_SYXCEP_FORE
SystemResource	Daily FileSystem Exceptions Data Table	SD_SR_SYFSXCEP
SystemResource	Daily Forecast FileSystem Exceptions Data Table	SD42SD_SR_SYFSXCEP_FORE
SystemResource	Hourly Transaction Data Table	SHTRAN_TRANSACTION
SystemResource	Hourly ByTransaction Data Table for SR	SHTRAN_BYTRANSACTION
SystemResource	Daily Transaction Data Table	SDTRAN_TRANSACTION
SystemResource	Daily ByTransaction Data Table	SDTRAN_BYTRANSACTION
SystemResource	Hourly OVPA Application Sys.App Data Table	SH_APPOVPA_SYSAPP
SystemResource	Hourly OVPA Application by App Data Table	SH_APPOVPA_BYAPP

表示される列は以下のとおりです。

- [エイリアス名]: データベース内のテーブルの、論理的かつ一意な、内容を表した名前です。
- [SQL名]: **SQL Server** がテーブルを識別するための名前です。SQL クエリにはこの名前を使用します。
- [タイプ]: テーブルに格納されているデータのタイプです。プロパティテーブルの場合は、値は常に [**プロパティ**] です。
- [標準である]: この項目がオンの場合は、**OVPI** データベースの標準のテーブルです。
- [サイズ (行数)]: テーブルの行数です。

テーブル列の表示の変更

テーブルの列を表示するかどうかと、テーブル内の列の表示順序を、変更できます。

テーブル列の表示形態を変更するには、以下の手順に従います。

- 1 テーブル列の名前のいずれかを右クリックします。

ショートカットメニューに、以下の図のように、使用可能な、列の見出しがいくつか表示されます。



- 2 **[続く]** をクリックすると、以下の図のように、すべての見出しが一覧表示されます。



- 3 列の順序を変更するには、列名を選択し、その列が希望の位置にくるまで または をクリックします。
- 4 列を非表示にするには、列名の横にある **[列の表示]** オプションをオフにします。
- 5 現在非表示になっている列を表示するには、列名の横にある **[列の表示]** オプションをオンにします。
- 6 列の幅を変更するには、以下の手順を実行します。
 - a 列の **[設定する幅]** ボックスをダブルクリックします。

- b 現在の値を削除し、新しい値を入力します。
- c

7 [OK] をクリックします。

データと内部テーブルの詳細の表示

データまたは内部テーブルに関する詳細情報を表示するには、テーブルマネージャの表示ペインでテーブルをダブルクリックします。

[データテーブル詳細] ダイアログボックスが開きます。デフォルトでは、[テーブル情報] タブが開きます。

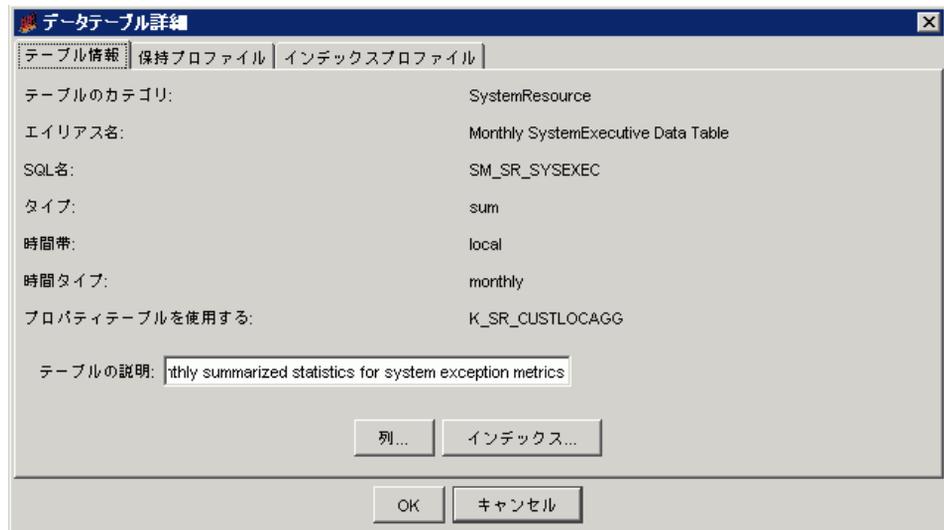


図 42 [データテーブル詳細] ダイアログボックス

[データテーブル詳細] ダイアログボックスは、[テーブル情報]、[保持プロファイル]、および[インデックスプロファイル]の3つのタブから構成されています。

[データテーブル詳細] ダイアログボックスを使用して、以下のことを実行できます。

- テーブルの列に関する情報の表示
- 説明を追加する

- テーブルの列に関する情報の表示
- 対応するインデックスに関する情報を表示する
- 保持プロファイルを表示および管理する
- インデックスプロファイルを表示および管理する

データテーブルの情報の表示

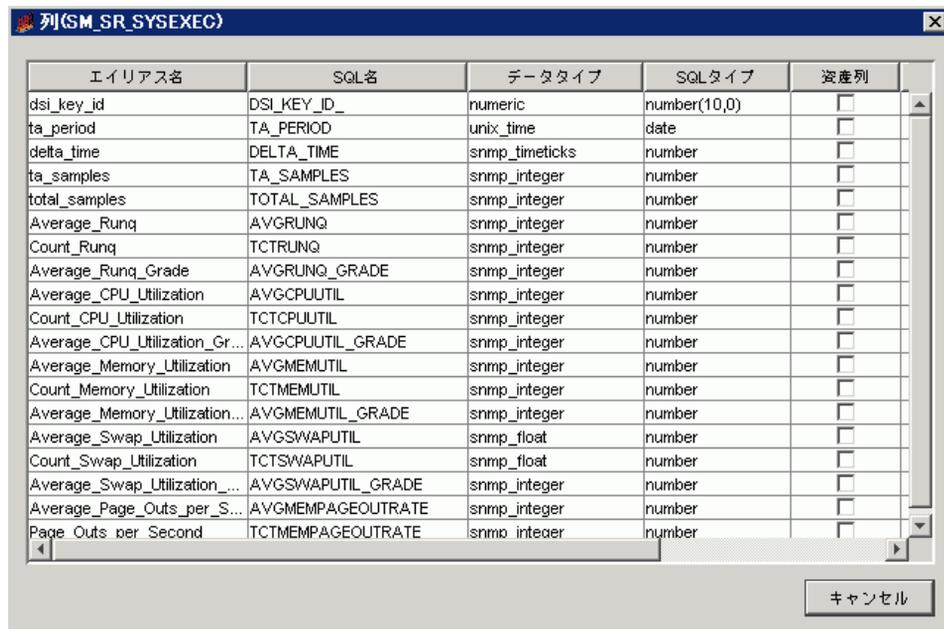
[データテーブル詳細] ダイアログボックス (387 ページの図 42) の [テーブル情報] ボックスには、選択されているテーブルのテーブル情報が表示されます。データテーブルの場合は、[テーブル情報] ボックスに、このデータまたは内部テーブルで使用されているプロパティテーブルの名前も表示されます。

データテーブルの説明の追加

[データテーブル詳細] ダイアログボックス (387 ページの図 42) の [テーブルの説明] ボックスに、テーブルの説明を記入できます。[テーブルの説明] ボックスに説明文を入力し **[OK]** をクリックします。説明文は最大で 255 文字までです。

データテーブルの情報の表示

テーブルの列に関する詳細を表示するには、[データテーブル詳細] ダイアログボックス (387 ページの [図 42](#)) の [列] をクリックします。[列] ウィンドウが開きます。



エイリアス名	SQL名	データタイプ	SQLタイプ	資産列
dsi_key_id	DSI_KEY_ID_	numeric	number(10,0)	<input type="checkbox"/>
ta_period	TA_PERIOD	unix_time	date	<input type="checkbox"/>
delta_time	DELTA_TIME	snmp_timeticks	number	<input type="checkbox"/>
ta_samples	TA_SAMPLES	snmp_integer	number	<input type="checkbox"/>
total_samples	TOTAL_SAMPLES	snmp_integer	number	<input type="checkbox"/>
Average_Runq	AVGRUNQ	snmp_integer	number	<input type="checkbox"/>
Count_Runq	TCTRUNQ	snmp_integer	number	<input type="checkbox"/>
Average_Runq_Grade	AVGRUNQ_GRADE	snmp_integer	number	<input type="checkbox"/>
Average_CPU_Utilization	AVGCPUUTIL	snmp_integer	number	<input type="checkbox"/>
Count_CPU_Utilization	TCTCPUUTIL	snmp_integer	number	<input type="checkbox"/>
Average_CPU_Utilization_Gr...	AVGCPUUTIL_GRADE	snmp_integer	number	<input type="checkbox"/>
Average_Memory_Utilization	AVGMEMUTIL	snmp_integer	number	<input type="checkbox"/>
Count_Memory_Utilization	TCTMEMUTIL	snmp_integer	number	<input type="checkbox"/>
Average_Memory_Utilization...	AVGMEMUTIL_GRADE	snmp_integer	number	<input type="checkbox"/>
Average_Swap_Utilization	AVGSWAPUTIL	snmp_float	number	<input type="checkbox"/>
Count_Swap_Utilization	TCTSWAPUTIL	snmp_float	number	<input type="checkbox"/>
Average_Swap_Utilization...	AVGSWAPUTIL_GRADE	snmp_integer	number	<input type="checkbox"/>
Average_Page_Outs_per_S...	AVGMEMPAGEOUTRATE	snmp_integer	number	<input type="checkbox"/>
Page Outs per Second	TCTMEMPAGEOUTRATE	snmp_integer	number	<input type="checkbox"/>

[列] ウィンドウには、テーブル内の各列に、以下の情報が表示されます。

[エイリアス名]: テーブル内の列の、論理的かつ一意な、内容を表した名前です。

[SQL名]: テーブル内の列の SQL 名です。

[データタイプ]: 各列の OVPI データタイプです。各タイプについての詳細は、[433 ページのタスク 4](#) を参照してください。

[SQLタイプ]: この列のデータのデータベースタイプです。各タイプについての詳細は、[433 ページのタスク 4](#) を参照してください。

[資産列]: この項目がオンの場合は、この列に、アセット要約で使用されるアセットプロパティが含まれています。

- [オブジェクト識別子]: MIB ツリーにおける、選択されているオブジェクトへのパスです。ピリオドで区切られた数字の列で表されます。SNMP コレクタに関連付けられている列にのみ MIB OID 値が表示され、それ以外の列ではこの項目は空欄である場合があります。
- [空白可]: この項目がオンの場合は、この列は NULL の可能性があります。
- [デフォルト値]: 列のデフォルト値です。

データテーブルのインデックス情報の表示

テーブルのインデックスに関する詳細を表示するには、[データテーブル詳細] ダイアログボックス (387 ページの [図 42](#)) の [インデックス] をクリックします。[インデックス] ウィンドウが開きます。

インデックス名	一意	クラスタ化	列1	列2
RDRCCR_CPUTOTAL_I1	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	TA_PERIOD	
PK_RDRCCR_CPUTOTAL	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	TA_PERIOD	DSI_KEY_ID_
RDRCCR_CPUTOTAL_I1	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	DSI_KEY_ID_	

[インデックス] ウィンドウには、テーブルの各インデックスに、以下の情報が表示されます。

- [インデックス名]: テーブルのインデックスの名前です。
- [一意]: この項目がオンの場合は、そのインデックスは一意です。
- [クラスタ化]: この項目がオンの場合は、そのインデックスはクラスタ化されています。
- [列 1]: インデックスの構築に使用される 1 つ目の SQL 名です。
- [列 2]: インデックスの構築に使用される 2 つ目の SQL 名です。
- ▶ インデックスの各要素ごとに列が表示されます。

保持プロファイル

データテーブルのデータ保持プロファイルは、データベースにデータテーブルを作成するときに作成されます。datapipe_manager コマンドは、TEEL ファイルに指定されている情報を使って保持プロファイルを作成します。

datapipe_manager コマンドは、保持プロファイルを参照するデータテーブルがない場合にその保持プロファイルを削除します。保持プロファイルの詳細は、581 ページの「データのアーカイブ」を参照してください。

インデックスプロファイル

indexmaint コマンドは、OVPI システムにある既存のデータテーブルを管理し、データまたはプロパティテーブルに関連付けられている日常作業を実行します。テーブルによっては、変更頻度が低いものがあります。このようなテーブルでは毎日 indexmaint コマンドが実行されます。これは、OVPI システムのリソース使用率と処理時間に悪影響を与えます。

インデックスプロファイルは、指定した間隔で indexmaint により実行される統計タスクまたはインデックス化関連タスクのグループです。各データテーブルまたはプロパティテーブルには、そのテーブルに関連付けられたデフォルトのインデックスプロファイルがあります。最適な方法でインデックスを管理するために、OVPI 管理コンソールでインデックスプロファイルウィザードを使用して、カスタマイズしたインデックスプロファイルを作成することができます。詳細は [インデックスプロファイルの作成](#) を参照してください。

テーブルで indexmaint を起動すると、テーブルのインデックスプロファイルに関連付けられた作業を実行します。カスタマイズしたインデックスプロファイルがテーブルに割り当てられていない場合、indexmaint はそのテーブルのデフォルトのインデックスプロファイルに列挙されている作業を実行します。

デフォルトのインデックスプロファイルは、テーブルのタイプごとに以下の作業を実行します。

- すべてのレート、時単位、日単位のテーブルの統計情報を毎日収集する
- すべての週単位のテーブルの統計情報を毎月曜日に収集する
- すべての月単位、四半期単位、および年単位のテーブルの統計情報を毎月 2 日に収集する

テーブル名を指定せずに `indexmaint` を起動すると、すべてのデータテーブルおよびプロパティテーブルのデフォルトのインデックスプロファイルに列挙されている作業を実行します。

▶ `indexmaint` コマンドの詳細については、『HP OpenView Performance Insight Reference Guide』を参照してください。

インデックスプロファイルの管理

インデックスプロファイルウィザードを使用すると、以下の作業を実行できます。

- インデックスプロファイルの表示および割り当て
- インデックスプロファイルの作成
- インデックスプロファイルの編集

インデックスプロファイルの表示および割り当て

[データテーブル詳細] ダイアログボックスの [インデックスプロファイル] タブには、選択したデータテーブルの現在のインデックスプロファイル設定が表示されます。

統計	頻度	起動日	インデックス	頻度	起動日
GatherStatisticsT...	Daily	All Days	VoidTask	Daily	All Days

既存のインデックスプロファイルの表示および割り当てを行うには、以下の手順に従います。

- 1 [インデックスプロファイルの表示] をクリックします。

[インデックスポリシープロファイル] ダイアログボックスが開きます。このダイアログボックスには、既存のインデックスプロファイルのリストと以下の情報が表示されます。

名前	インデックスプロファイルの名前。
説明	インデックスプロファイルの説明。
タスクリスト	選択されたインデックスプロファイルのタスクのリスト。

- 2 インデックスプロファイルをテーブルに割り当てるには、リストからインデックスプロファイルを選択し、[**インデックスプロファイルの割り当て**] をクリックします。
- 3 完了したら、[**閉じる**] をクリックします。

インデックスプロファイルの作成

インデックスプロファイルウィザードを使用して、新しいインデックスプロファイルを作成します。インデックスプロファイルには **1** つまたは複数の統計タスクまたはインデックス化関連タスクを含めることができます。

インデックスプロファイルを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 テーブルマネージャの表示ペインでテーブルをダブルクリックします。
[データテーブル詳細] ダイアログボックスが開きます。
- 2 [**インデックスプロファイル**] タブをクリックしてから、[**作成**] をクリックします。

[インデックスポリシープロファイル] ダイアログボックスが開きます。

統計	頻度	起動日	インデックス	頻度	起動日

- 3 [名前] ボックスにそのインデックスプロファイルの名前を入力します。
名前は最大 64 文字までです。英文字、数字、下線 (_)、またはハイフン (-) を含めることができます。
- 4 [説明] ボックスに、インデックスプロファイルの説明を入力します。
説明は省略することも可能です。説明は、最大 255 文字までです。
- 5 統計タスクおよびインデックス化タスクの作成

統計タスク：

- a テーブルを分析する場合は、[統計関連のタスク] チェックボックスをオンにします。
- b [統計タスク] リストから、以下のいずれかのオプションを選択します。
 - **GatherStatisticsTask**: 統計情報を収集するタスクが作成されます。

- **AnalyzeTableTask**: テーブルを分析するタスクが作成されます。
- c 以下のいずれかのオプションを選択します。
 - **[日単位]**: [頻度] リストは使用できません。テーブルのデータは毎日収集されます。インデックス化タスクを作成する場合は、**手順 a** に進みます。それ以外は**手順 6** に進みます。
 - **[週単位]**: テーブルのデータは週単位で収集されます。[頻度] リストには曜日が表示されます。**手順 d** に進みます。
 - **[月単位]**: テーブルのデータは月単位で収集されます。[頻度] リストには、**1** から **31** および**最終日**の値が表示されます。**手順 d** に進みます。
- d [頻度] リストから、適切な値を選択します。

インデックス化タスク:

- a インデックスを再構築または結合する場合は、**[インデクシング関連のタスク]** チェックボックスをオンにします。
 - b [インデックスタスク] リストから、以下のいずれかのオプションを選択します。
 - **RebuildIndexTask**: インデックスを再構築するタスクが作成されます。
 - **CoalesceIndexTask**: インデックスを結合するタスクが作成されます。
 - c 以下のいずれかのオプションを選択します。
 - **[日単位]**: [頻度] リストは使用できません。インデックス化タスクは毎日発生します。**手順 6** に進みます。
 - **[週単位]**: インデックス化タスクは週単位で発生します。[頻度] リストには曜日が表示されます。**手順 d** に進みます。
 - **[月単位]**: インデックス化タスクは月単位で発生します。[頻度] リストには、**1** から **31** および**最終日**の値が表示されます。**手順 d** に進みます。
 - d [頻度] リストから、適切な値を選択します。
- 6 **[追加]** をクリックします。

インデックスプロファイルの作成が成功すると、[タスクリスト]セクションにタスクが表示されます。

7 さらにタスクを作成するには、**手順 4** から**手順 6**を繰り返します。

8 **[終了]**をクリックします。

1つまたは複数のタスクを含むインデックスプロファイルが作成され、テーブルに割り当てられます。`indexmaint` コマンドは、スケジュールに割り当てたプロファイルを使用して、テーブルに関連するタスクを実行します。

インデックスプロファイルの編集

インデックスプロファイルの編集では、新規タスクの追加、またはインデックスプロファイルに関連付けられた既存タスクの削除を行います。

既存のインデックスプロファイルを編集するには、以下の手順に従います。

1 テーブルマネージャの表示ペインでテーブルをダブルクリックします。

[データテーブル詳細]ダイアログボックスが開きます。

2 **[インデックスプロファイル]** タブをクリックしてから、**[編集]** をクリックします。

[インデックスポリシープロファイル]ダイアログボックスが開きます。

3 以下のいずれかまたは両方を実行します。

- 新規タスクを追加するには、「**インデックスプロファイルの作成**」で説明する**手順 5**および**手順 6**を実行します。
- 既存のタスクを削除するには、[タスクリスト]セクションから削除するタスクを選択して、**[削除]** をクリックします。

4 **[終了]**をクリックします。

インデックスプロファイルの名前は編集できません。

プロパティテーブルの詳細の表示

任意のプロパティテーブルに関する詳細情報を表示するには、以下の手順に従います。

- 1 テーブルマネージャの表示ペインで、[テーブルタイプ] リストから [**プロパティ**] を選択します。

表示ペインに、すべてのプロパティテーブルが表示されます。

- 2 表示ペインでプロパティテーブルをダブルクリックします。

図 43 のように、[プロパティテーブル詳細] ダイアログボックスが開きます。

プロパティテーブル詳細

テーブル情報

エリアス名 SR OVPA and EPC Application by Application Property Table
SQL 名 : K_AppOVPA_byApp
グループメンバーテーブル: K_AppOVPA_byApp_mbr
キーマップテーブル K_AppOVPA_byApp_keymap

子プロパティテーブル:

KV_AppOVPA_byApp

関連するデータテーブル:

SH_AppOVPA_byApp
SD_AppOVPA_byApp

インデックスプロファイル

名前: DefaultpropertyProfile
説明: ndex profile for all property tables

統計値	頻度	起動日	インデック...	頻度	起動日
GatherStatistic...	Daily	All Days	VoidTask	Daily	All Days

インデックスプロ... 作成 編集

説明 : id EPC application metrics by application

列 インデックス... OK キャンセル

図 43 [プロパティテーブル詳細] ダイアログボックス

[プロパティテーブル詳細] ダイアログボックスを使用して、以下のことを実行できます。

- テーブルの情報を表示する
- 説明を追加する
- テーブルの列に関する情報の表示
- 対応するインデックスに関する情報を表示する
- インデックスプロファイルの表示または管理

プロパティテーブル情報の表示

[プロパティテーブル詳細] ダイアログボックス (398 ページの図 43) の [テーブル情報] ボックスには、プロパティテーブルに関する以下の情報が表示されます。

[エイリアス名]: データベース内のテーブルの、論理的かつ一意な、内容を表した名前です。

[SQL 名]: テーブルの SQL 名です。

[グループメンバー
テーブル]: このプロパティテーブルの列挙リストグループに属する管理対象オブジェクトの、一覧を含むテーブルの名前です。

[キーマップ
テーブル]: ローカルサーバーのプロパティテーブル内容からリモートサーバーのプロパティテーブル内容への相互参照を含むテーブルの名前です。

このダイアログボックスには、以下の情報も一覧表示されます。

[子プロパティ
テーブル]: このプロパティテーブルを参照するプロパティテーブルのリストです。

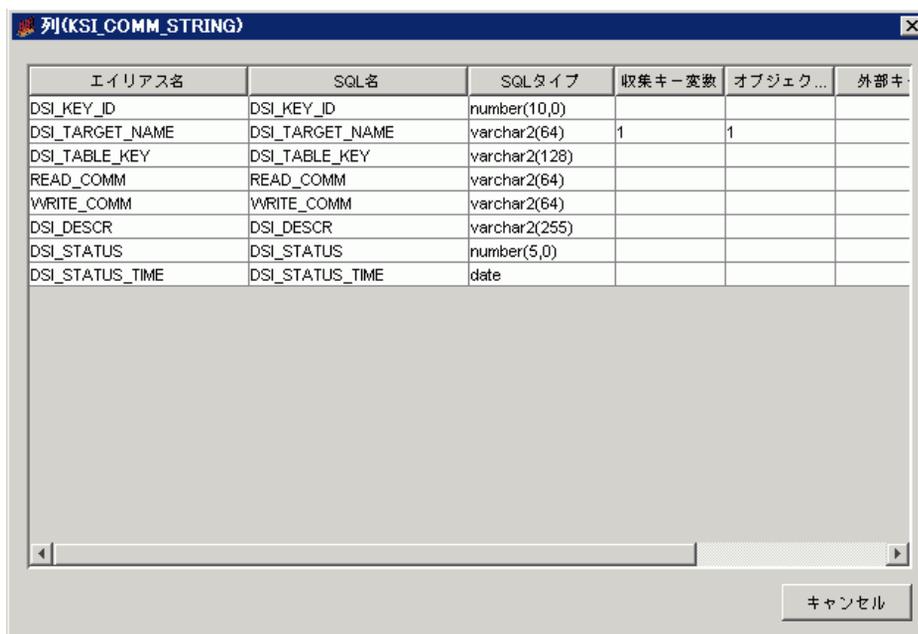
[関連する
データテーブル]: このプロパティテーブルを使用するデータテーブルのリストです。

プロパティテーブルの説明の追加

[プロパティテーブル詳細] ダイアログボックス (398 ページの図 43) の [説明] ボックスに、テーブルの説明を記入できます。[説明] ボックスに説明文を入力し [OK] をクリックします。説明文は最大で 255 文字までです。

プロパティテーブルの列情報の表示

テーブルの列に関する詳細を表示するには、[データテーブル詳細] ダイアログボックス (398 ページの図 43) の [列] をクリックします。[列] ウィンドウが開きます。



The screenshot shows a dialog box titled '列 (KSI_COMM_STRING)'. It contains a table with the following columns: 'エイリアス名', 'SQL名', 'SQLタイプ', '収集キー変数', 'オブジェク...', and '外部キ...'. The table lists several columns with their respective SQL names and types.

エイリアス名	SQL名	SQLタイプ	収集キー変数	オブジェク...	外部キ...
DSI_KEY_ID	DSI_KEY_ID	number(10,0)			
DSI_TARGET_NAME	DSI_TARGET_NAME	varchar2(64)	1	1	
DSI_TABLE_KEY	DSI_TABLE_KEY	varchar2(128)			
READ_COMM	READ_COMM	varchar2(64)			
WRITE_COMM	WRITE_COMM	varchar2(64)			
DSI_DESCR	DSI_DESCR	varchar2(255)			
DSI_STATUS	DSI_STATUS	number(5,0)			
DSI_STATUS_TIME	DSI_STATUS_TIME	date			

[列] ウィンドウには、テーブル内の各列に、以下の情報が表示されます。

[エイリアス名]: テーブル内の列の、論理的かつ一意な、内容を表した名前です。

[SQL 名]: テーブル内の列の SQL 名です。

[SQL タイプ]: この列のデータのデータベースタイプです。各タイプについての詳細は、[433 ページのタスク 4](#)を参照してください。

[収集キー変数]: テーブル内のコレクタの一意キーを構成する列の順序です。この列が空の場合は、この列はテーブルのコレクタキーに含まれていません。

[オブジェクト ...]: テーブル内の行の一意キーを構成する列の順序です。この列が空の場合は、この列はテーブルのオブジェクトキーに含まれていません。

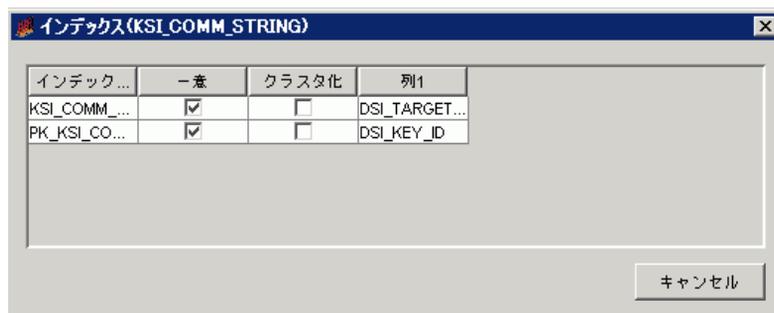
[外部キー]: 列が外部キーの場合、データを含む親テーブルと列の名前です。フォーマットは *parent_table.column_name* です。

[空白可]: この項目がオンの場合は、この列は NULL の可能性があります。テーブルの [変数別収集] 列または [変数別オブジェクト] 列に値がある場合は、[空白可] 列は選択できません。

[デフォルト値]: 列のデフォルト値です。

プロパティテーブルのインデックス情報の表示

テーブルのインデックスに関する詳細を表示するには、[プロパティテーブル詳細] ダイアログボックス ([398 ページの図 43](#)) の [インデックス] をクリックします。[インデックス] ウィンドウが開きます。



[インデックス] ウィンドウには、テーブルの各インデックスに、以下の情報が表示されます。

[インデックス名]: テーブルのインデックスの名前です。

[一意]: この項目がオンの場合は、インデックスが一意です。

[クラスタ化]: この項目がオンの場合は、インデックスがクラスタ化されています。

[列 1]: インデックスの構築に使用される 1 つ目の SQL 名です。

[列 2]: インデックスの構築に使用される 2 つ目の SQL 名です。



各プロパティテーブルには、少なくとも 2 つの一意なインデックスがあります。[変数別収集] と [オブジェクト別変数] が、参照する列のインデックスを構築します。[変数別収集] と [オブジェクト別変数] のインデックスに、同じ列がある場合は、リストにはインデックスが 1 つだけ表示されます。これらのインデックスに、異なる列がある場合は、リストには少なくとも 2 つのインデックスが表示されます。また、インデックスの各要素ごとに列が表示されます。

インデックスプロファイルの表示または管理

[プロパティテーブル詳細] ダイアログボックス (398 ページの  43) の [インデックスプロファイル] ボックスには、プロパティテーブルに関連付けられたインデックスプロファイルに関する以下の情報が表示されます。

名前	インデックスプロファイルの名前。
説明	インデックスプロファイルの説明。
タスクリスト	選択されたインデックスプロファイルのタスクのリスト。

インデックスプロファイルの詳細は、391 ページの「[インデックスプロファイル](#)」を参照してください。

テーブルデータの表示

テーブルマネージャの [**テーブル内容の表示**] オプションを使用すると、OVPI データベース内のデータを調べることができます。この場合は、データ、プロパティ、および内部テーブルのデータを表形式で表示できます。これらのレポートは、さまざまな順序で表示されている値や比較用にグループ化されている値を一覧表示する場合に便利です。特に、例外レポートで役立ちます(たとえば、超過したしきい値を表示するとき)。

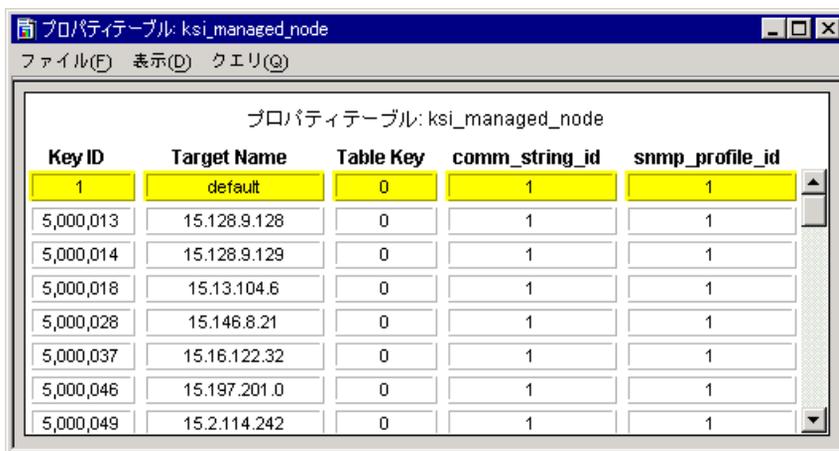
表示されるデータのタイプとその表示形態を変更し、それを OVPI レポートフォーマット (.rep または .srep) として保存することも可能です。以下の OVPI クライアントアプリケーションのいずれかを使用して、保存したレポートを表示することができます。Web アクセスサーバー、レポートビルダ、およびレポートビューア。さらに、これらのレポートを印刷でき、データを別のフォーマット (CSV と ASCII) でエクスポートしてスプレッドシートやその他のアプリケーションに移動することもできます。

レポートの表示

テーブルデータを選択し、そのデータを基にレポートを生成するには、以下の手順に従います。

- 1 該当する行を強調表示してテーブルを選択します。
- 2 テーブルマネージャの [表示] メニューから [**テーブル内容の表示**] を選択します。

ウィンドウが開き、選択されたテーブルのデータが表形式で表示されます。ウィンドウのタイトルバーにはテーブルの名前が表示されます。



メニューの使用

[データテーブル] ウィンドウには、[ファイル]、[表示]、[クエリ]の各メニューがメニューバーに表示されます。これらのメニューのオプションを使用して、レポートへのデータの表示形態を変更できます。

表 8 に、[ファイル] メニューのオプションを示します。

表 8 [ファイル] メニューのオプション

オプション	説明
[印刷] (CTRL+P)	[印刷] ダイアログボックスが開きます。ここでレポートを印刷できます。プリンタ、レポート上の印刷対象部分、および印刷部数を選択できます。
[印刷の設定]	[ページ設定] ダイアログボックスが開きます。ここで、用紙サイズ、プリンタ内の用紙の場所、ページ上のレポートの位置、およびページの印刷領域を指定できます。
[保存] (CTRL+S)	テーブルデータを現在のファイル名で保存します (レポートを初めて保存する場合は、[保存] ダイアログボックスが表示されます)。

表 8 [ファイル]メニューのオプション

オプション	説明
[別名保存]	[保存] ダイアログボックスが開きます。ここでテーブルデータを .rep または .srep レポートとして保存できます。
[エクスポート]	[データテーブルのエクスポート] ダイアログボックスが開きます。ここで、レポートのデータを CSV (.csv) または ASCII (.txt) ファイルにエクスポートできます。
[閉じる]	データテーブルが表示されているウィンドウを閉じます。

表 9 に、[表示]メニューのオプションを示します。

表 9 [表示]メニューのオプション

オプション	説明
[統計値のプロパティ]	サブメニューが表示され、統計を選択できます。統計を選択すると [統計値のプロパティ] ダイアログボックスが開きます。ここで、レポート上の統計プロパティの表示形態を変更できます。フォントとフォントサイズを変更できます。テキストを太字または斜体にできます。テキストの色、統計の列の位置揃え、および統計データの位置揃えを変更できます。
[セルのプロパティ]	[セルのプロパティ] ダイアログボックスが表示され、テーブルセルの各種プロパティを変更できます。
[列ラベルのプロパティ]	[列ラベルのプロパティ] ダイアログボックスが表示され、ここでテーブル列の各種プロパティを変更できます。
[行ラベルのプロパティ]	[行ラベルのプロパティ] ダイアログボックスが表示され、ここでテーブル行の各種プロパティを変更できます。

表 10 に、[クエリ]メニューのオプションを示します。

表 10 [クエリ]メニューのオプション

オプション	説明
統計情報の選択	[統計値の選択] ダイアログボックスが開き、ここで、表示するデータの統計を選択できます。
[統計値の順序付け]	[統計値の順序付け] ダイアログボックスが開き、ここでテーブル内の統計の表示順序を変更できます。
[ソート順序]	[ソート順序] ダイアログボックスが開き、データベースから返されるデータのソート順を選択できます。
[期間の変更]	[期間の設定] ダイアログボックスが開き、ここで、表示するデータの期間を選択できます。このオプションは、データテーブルでのみ使用できます。
制約の変更	[制約の変更] ダイアログボックスが開き、ここで制約および演算子を、追加、修正、削除できます。
[制約値の変更]	[制約値の変更] ダイアログボックスが開き、ここで制約の値のみを変更できます。
[ノード / インタフェースの選択]	[ノード / インタフェースの選択] ウィザードが表示されます。ここで、レポートを生成するためのデータの収集元となるノードおよびインタフェースを指定できます。
[最大行数の変更]	[最大行数の変更] ダイアログボックスが表示されます。ここで、表示するデータの列を制限できます。デフォルトでは、データベースから取得する行数は50行です。

データの管理

テーブルデータを印刷、保存、およびエクスポートできます。

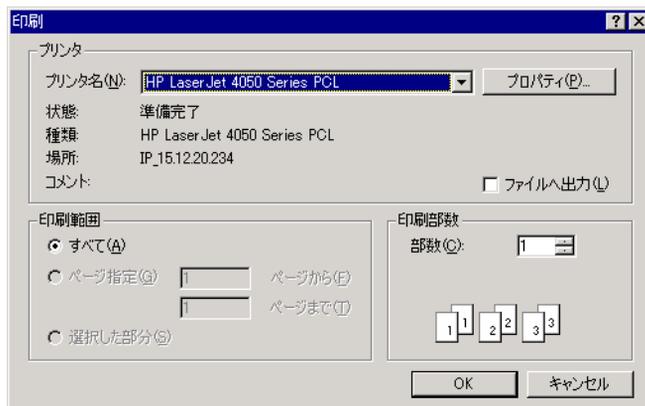
テーブルデータの印刷

[ファイル]メニューの[印刷]または[印刷の設定]オプションを使用すると、テーブルデータを印刷し、レポート印刷の設定をすることができます。

データを印刷するには、以下の手順に従います。

- 1 以下のいずれかを実行します。
 - [ファイル]メニューの[印刷]をクリックします。
 - [Ctrl+P]キーを押します。

[印刷]ダイアログボックスが開きます。



- 2 必要な変更を加え、[OK]をクリックします。

印刷の設定を行うには、以下の手順に従います。

- 1 [ファイル]メニューから[印刷の設定]をクリックします。[ページ設定]ダイアログボックスが開きます。



- 2 必要な変更を加え、[OK]をクリックします。

テーブルデータの保存

テーブルデータを表示した後、そのデータを以下のいずれかの OVPI レポートフォーマットで保存できます。

- OVPI データセット (.srep)
- OVPI レポート定義 (.rep)

以下の OVPI クライアントアプリケーションのいずれかを使用して、保存したレポートを表示することができます。Web アクセスサーバー、レポートビルダ、およびレポートビューア。

テーブルデータを保存するには、以下の手順に従います。

- 1 以下のいずれかを実行します。
 - レポートを現在のファイル名で保存するには、[ファイル]メニューの[保存]を選択するか、[CTRL+S] キーを押します。
 - レポートを別のファイル名またはフォーマットで保存するには、[ファイル]メニューの[別名保存]を選択します。

[ファイル]メニューの[別名保存]を選択した場合、またはレポートをまだ一度も保存していない場合は、[保存]ダイアログボックスが開きます。



- 2 以下のいずれかまたは両方を実行します。
 - ファイル名を[ファイル名]ボックスに入力します。
 - [ファイルタイプ]リストからレポートフォーマットを選択します。
- 3 [保存]をクリックします。

テーブルデータのエクスポート

[データテーブル]ウィンドウに表示されているデータを、値をカンマで区切ったファイル(CSV)またはテキストファイル(タブ区切り)にエクスポートできます。

データテーブルをエクスポートするには、以下の手順に従います。

- 1 推奨(必須ではない): [クエリ]メニューから[最大行数の変更]を選択し、[最大行数]ボックスに0(ゼロ)と入力し[OK]をクリックします。こうすることで、制約を設定したデータセットが確実に利用できるようになります。

- 2 [ファイル]メニューから[エクスポート]オプションを選択します。図 44 は、[エクスポート]ダイアログボックスを示しています。



図 44 [データテーブルのエクスポート]ダイアログボックス

- 3 ファイルの保存先に移動します。
- 4 [ファイルタイプ]リストからファイルタイプを選択します。
- 5 [ファイル名]ボックスにファイル名を入力します。
- 6 [保存]をクリックするとデータがエクスポートされます。

データのフォーマット設定

テーブルデータの表示フォーマットを変更するには、[表示]メニューのオプションを使用して、データの統計、セル、列、および行のフォーマットを変更します。

統計のフォーマット設定

テーブル列での統計値の表示フォーマットを変更するには、以下の手順に従います。

- 1 [表示]メニューから[統計値のプロパティ]を選択します。

- 2 変更する統計を選択します。図 45 は [統計値のプロパティ] ダイアログボックスを示しています。

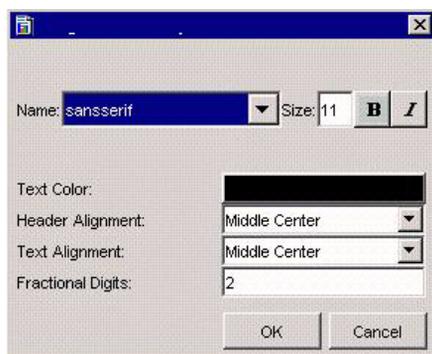


図 45 [統計値のプロパティ] ダイアログボックス

- 3 以下の手順に従います。
- a 統計値に使用するフォントを変更するには、[Name] リストからフォントを選択します。
 - b [Size] ボックスには、統計値に使用するフォントのサイズを入力します。
 - c 統計値を太字にするには [ボールド] ボタンをクリックします。
 - d 統計値を斜体にするには [イタリック] ボタンをクリックします。
 - e [Text Color] ボックスをクリックすると [色の選択] ダイアログボックスが表示されます。ここで統計値の色を選択できます。
 - f テーブル列の見出し上での統計の名前の位置を指定するには、[Header Alignment] リストから位置揃えのオプションを選択します。
 - g 統計の見出しの下の方に表示される統計のテキストの位置を指定するには、[Text Alignment] リストから位置揃えのオプションを選択します。
 - h 数値列の小数の表示桁数を指定する数値を入力します。
- 4 [OK] をクリックすると、変更が適用されます。

セルのフォーマット設定

テーブルセルのプロパティを変更するには、以下の手順に従います。

- 1 [表示]メニューから[セルのプロパティ]を選択します。図 47 は [セルのプロパティ]ダイアログボックスを示しています。

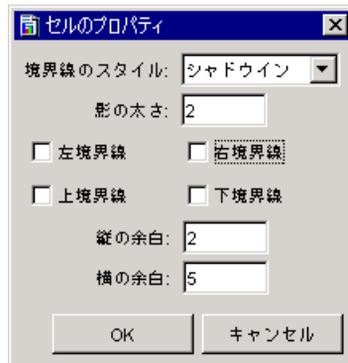


図 46 [セルのプロパティ]ダイアログボックス

- 2 以下のいずれかを実行します。

- a テーブルセルの枠を指定するには、[境界線のスタイル]リストから値を選択します。デフォルトでは[シャドウアウト]に設定されています。



オプション [左境界線]、[右境界線]、[上境界線]、または [下境界線] を選択して、枠を表示してください。

- b 手順 a で選択した枠の幅を設定するには、[影の太さ]ボックスに値を入力します。
- c 以下のいずれかを選択します。
 - [左境界線]: 手順 a で選択した枠のスタイルが、各セルの左側の枠に表示されます。
 - [右境界線]: 手順 a で選択した枠のスタイルが、各セルの右側の枠として表示されます。
 - [上境界線]: 手順 a で選択した枠のスタイルが、各セルの上の枠として表示されます。
 - [下境界線]: 手順 a で選択した枠のスタイルが、各セルの下の枠として表示されます。

たとえば、枠のオプションをすべて選択し、[境界線のスタイル] オプションを [シャドウアウト] に設定した場合は、テーブルのセルは以下の図のように表示されます。

Key ID	Target Name	Table Key	COMM_STRING_ID	SNMP_PROFILE_ID
1.00	default	0	1.00	1.00
21.00	16.116.4.40	0	1.00	1.00
22.00	16.116.4.60	0	1.00	1.00
23.00	ovpidocpeg	0	1.00	1.00
24.00	zko01006.americas.hpqcorp.net	0	1.00	1.00
25.00	16.116.4.135	0	1.00	1.00
26.00	16.116.4.144	0	1.00	1.00
27.00	zkosecuritypc3.americas.cpqcorp.net	0	1.00	1.00
28.00	pns0006.americas.hpqcorp.net	0	1.00	1.00
29.00	bulldozer.americas.hpqcorp.net	0	1.00	1.00

- d セルの各行の間の空間を増減させるには、[縦の余白] ボックスに値を入力します。たとえば **10** と入力すると、たとえば以下の図のように、各行の間の空間が広がります。

Key ID	Target Name	Table Key	COMM_STRING_ID	SNMP_PROFILE_ID
1.00	default	0	1.00	1.00
21.00	16.116.4.40	0	1.00	1.00
22.00	16.116.4.60	0	1.00	1.00
23.00	ovpidocpeg	0	1.00	1.00
24.00	zko01006.americas.hpqcorp.net	0	1.00	1.00
25.00	16.116.4.135	0	1.00	1.00
26.00	16.116.4.144	0	1.00	1.00
27.00	zkosecuritypc3.americas.cpqcorp.net	0	1.00	1.00

- e テーブルの各列の間の空間を増減させるには、[横の余白] ボックスに値を入力します。

- 3 **[OK]** をクリックすると、変更が適用されます。

列のフォーマット設定

レポートをより見やすくするために、レポート内の列の順序、各列の幅、および列のプロパティを変更できます。

列の順序の変更

自分の配置したい順序で、レポートの左側に列を移動すると、レポートがより見やすくなります。たとえば、使用率のレポートを、使用率レベルと 1 日のうちの時刻 ([Received Time]) に基づいて表示する場合は、**Utilization** 列をレポートの左端に置き、**[Received Time]** 列を **Utilization** の右隣に置きます。固定の **Time Period** 列の左側に各列をドラッグすることで、列を移動します。

テーブル列の順序を変更するには、以下の手順に従います。

- 1 移動する列見出しの上にマウスポインタを移動します。
- 2 左マウスボタンを押し、列の上でポインタを左、または右の方向にドラッグします。
マウスポインタを動かすと、ドラッグしている現在の列が他の列を飛び越えて (マウスポインタのドラッグ方向に応じて左または右に) 移動します。
- 3 マウスの左ボタンを放します。
- 4 さらに別の列を移動する場合は手順 1 ~ 3 を繰り返します。

列の幅の変更

列の幅を変更するには、以下の手順に従います。

- 1 幅を変更したい列とその隣の列との間にポインタを置きます。ポインタが両方向の矢印に変わります。
- 2 両方向の矢印をドラッグして、列を希望のサイズに調整します。

列のプロパティの変更

テーブル列のプロパティを変更するには、以下の手順に従います。

- 1 [表示]メニューから[列ラベルのプロパティ]を選択します。図 47 は [列ラベルのプロパティ]ダイアログボックスを示しています。



図 47 [列ラベルのプロパティ]ダイアログボックス

- 2 以下のいずれかを実行します。
 - a [表示色]ボックスをクリックすると[色の選択]ダイアログボックスが表示されます。ここで、列名の色を変更できます。デフォルトでは、表示色は黒です。
 - b [背景色]ボックスをクリックすると[色の選択]ダイアログボックスが表示されます。ここで、列名が含まれているボックスの色を変更できます。デフォルトでは、背景色は白です。
 - c 列名の周りの枠を指定するには、[境界線のスタイル]リストから値を選択します。

デフォルトは[なし]であり、列の見出しのボックスには枠は表示されません。たとえば[シャドウアウト]を選択すると、列の見出しのボックスは以下の図のようになります。

ターゲット名
 - d 手順 c で枠のスタイルを選択した場合は、[境界線の太さ]オプションで枠の幅を制御できます。デフォルトは2です。
 - e 列の見出しに使用するフォントを変更するには、[名前]リストからフォントを選択します。

- f [サイズ] ボックスには、列の見出しに使用するフォントのサイズを入力します。
 - g 列の見出しのテキストを太字にするには [ボールド] ボタンをクリックします。
 - h 列の見出しのテキストを斜体にするには [イタリック] ボタンをクリックします。
 - i 列の見出しを非表示にする場合は [列ラベルの表示] ボックスをオフにし、列の見出しを表示する場合は [列ラベルの表示] ボックスをオンにします。
- 3 [OK] をクリックすると、変更が適用されます。

行のフォーマット設定

- 1 [表示] メニューから [行ラベルのプロパティ] を選択します。図 48 は [行ラベルのプロパティ] ダイアログボックスを示しています。

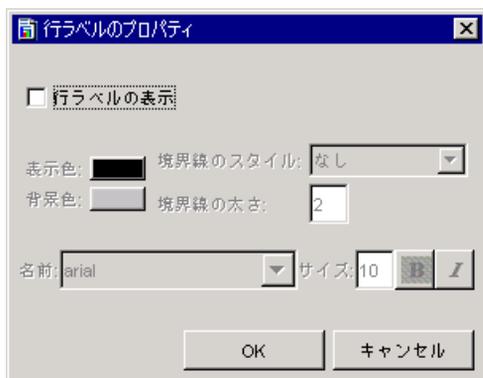


図 48 [行ラベルのプロパティ] ダイアログボックス



[行ラベルのプロパティ] ダイアログボックスは、図 47 の [列のプロパティ] ダイアログボックスとほとんど同じです。

- 2 [行ラベルの表示] オプション以外のオプションについては、414 ページの「列のプロパティの変更」の各手順を参照してください。
- 3 行の見出しを表示する場合は [行ラベルの表示] ボックスをオンにし、行の見出しを非表示にする場合は [行ラベルの表示] ボックスをオフにします。
- 4 [OK] をクリックすると、変更が適用されます。

テーブルクエリの変更

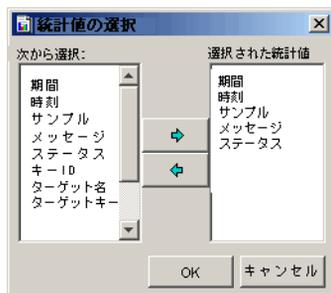
さまざまなデータベースクエリ情報を指定することで、レポートに含める情報を変更できます。[データテーブル] ウィンドウの[クエリ]メニューを使用すると、統計の選択、期間の変更、制約の追加および削除、制約値の変更、ノードとインタフェースのいずれか一方または両方の選択、返される最大行数の変更といった操作が可能です。

統計の選択

特定のテーブルデータに関して表示される統計を変更するには、以下の手順に従います。

- 1 [クエリ]メニューから[統計値の選択]を選択します。

[統計値の選択]ダイアログボックスが開き、レポートに現在表示されている統計が一覧表示されます。



- 2 統計を選択するには、[次から 選択]ボックスで統計をダブルクリックするか、または統計を選択し  をクリックします。
- 3 [選択された統計値]ボックスから統計を削除するには、[選択された統計値]ボックスで統計をダブルクリックするか、または統計を選択し  をクリックします。
- 4 必要な統計の選択が完了したら **[OK]** をクリックします。

レポート内のデータのソート

データベースから返されるデータのソート順序を選択できます。異なるフィールドを使用してレポートをソートしたり、降順ではなく昇順でソートしたりできます。

OVPI のデータは時刻と関連しているため、データのデフォルトのソート順は、ターゲット名のターゲット名テーブルキーと、テーブルキーの受信タイムスタンプ(最新から古い順序)に基づきます。ほとんどのレポートは特定のデバイスに対して実行されるため、タイムスタンプが重要なソートフィールドとなります。統計をソートするには、以下の手順に従います。

- 1 [クエリ]メニューから[ソート順序]を選択します。[ソートの設定]ダイアログボックスが開きます。



- 2 統計値をリストに追加するには、以下を実行します。
 - a  ボタンをクリックします。[統計値]列と[ソート順序]列の下に行が追加されます。
 - b ボックスをクリックし、統計のリストから追加する統計を選択します。
- 3 データのソート順序を変更するには、それぞれの統計値の隣にある[ソート順序]列のセルをクリックし、以下のいずれかをリストから選択します。
 - 統計値を昇順にソートするには、[ASC]を選択します。
 - 統計値を降順にソートするには、[DESC]を選択します。
- 4 値をリストから削除するには、 ボタンをクリックします。
- 5 リスト内の統計値の順序を変えるには、以下のいずれかを実行します。
 - リスト内で統計値を上移動するには、 ボタンをクリックします。
 - リスト内で統計値を下移動するには、 ボタンをクリックします。
- 6 [OK]をクリックします。

期間の変更

レポートに表示するデータの期間を変更できます。絶対期間（特定の日時）または相対期間（データを表示している現時点から見て何日前か）から選択できます。

絶対時間の選択

絶対期間は、具体的な開始時刻と終了時刻を指定します。

絶対時間範囲を選択するには、以下の手順に従います。

- 1 期間を変更するには、[クエリ]メニューから[期間の変更]を選択します。
[期間の設定]ダイアログボックス(図 49)が開きます。

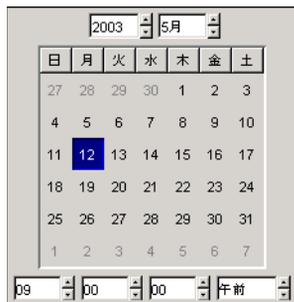
- 2 [絶対時間の使用]をクリックします。

[期間の設定]ダイアログボックスに表示される[使用可能なデータ]の開始時刻と終了時刻は、データベースにある使用可能データの範囲です。

- 3 [開始時刻]ボックスまたは[終了時刻]ボックスの横にある、[参照]ボタンをクリックします。次のようなウィンドウが開きます。



- 4 下矢印をクリックすると、次のようなカレンダーが表示されます。



- 5 [月]と[年]の矢印をクリックすることで、必要な月と年を選択します。
- 6 [時]、[分]、[秒数]、[午前/午後]の各矢印ボタンをクリックして、時刻を選択します。
- 7 カレンダー内の日付をクリックします。

日付をクリックするとカレンダーウィンドウが閉じ、選択した日付と時刻が [開始時刻] (または [終了時刻]) ウィンドウに表示されます。変更が必要な場合は、下矢印をクリックすることでカレンダーを再び開くことができます。

8 [OK] をクリックします。

相対期間の選択

相対期間とは、データを表示する時点からの期間です。

相対時間範囲を選択するには、以下の手順に従います。

- 1 期間を変更するには、[クエリ] メニューから [期間の変更] を選択します。
[期間の設定] ダイアログボックス (図 49) が開きます。



図 49 [期間の設定] ダイアログボックス

- 2 [相対時間の使用] をクリックします。
- 3 [開始] ボックスで、以下のいずれかを実行します。
 - 現在の時間範囲を選択するには、[現在の < 期間単位 >] ボタンを選択します。期間を選択するコンボボックスの矢印ボタンをクリックして、オプションを選択します。たとえば、[現在の < 期間単位 >] コンボボックスで [週] を選択すると、現在の週のデータがレポートに表示されます。
 - 以前の時間範囲を選択するには、[前の n < 期間単位 >] ボタンをクリックします。数値をボックスに入力し、[期間] の矢印ボタンをクリックし、オプションを選択します。たとえば、時間範囲で [前の n < 期間単位 >]

ボックスに「1」を入力し、コンボボックスから [週] を選択した場合は、現在の日付から見た先週について、丸 1 週間 (日曜から日曜まで) のデータがレポートに表示されます。

- 4 [期間] ボックスで、以下のいずれかを実行します。
 - デフォルトの期間を使用するには、[**デフォルト**] をクリックします。
 - 期間を設定するには、[**期間**] をクリックします。数値をボックスに入力し、[**期間**] の矢印ボタンをクリックし、オプションを選択します。
 - 選択した時間範囲から現在時刻までのデータを表示するには、[**現在まで**] をクリックします。たとえば、今日が木曜であり、時間範囲として 1 週を選択した場合は、先週 (日曜から日曜まで) から今週の木曜までのデータがレポートに表示されます。
- 5 [**OK**] をクリックします。

制約の追加

制約は、グラフまたはテーブルに表示するデータをデータベースから取得する方法を指定します。基本制約またはカスタム制約を作成できます。基本制約は統計、演算子、および値で構成されます。カスタム制約には任意の有効な SQL 式を含めることができ、基本制約とは違って制約の構造に制限がありません。

基本制約の追加

基本制約を追加するには、以下の手順に従います。

- 1 [クエリ]メニューから[制約の変更]を選択します。図 50 は [制約の変更] ダイアログボックスを示しています。

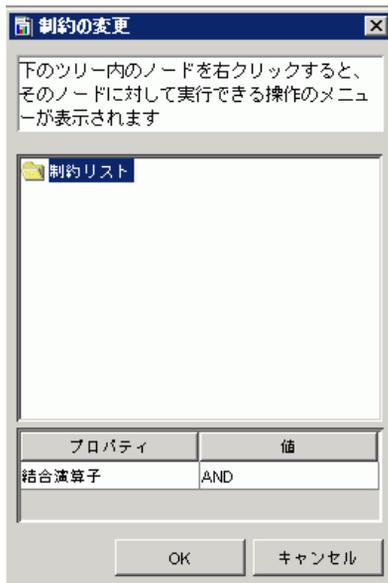


図 50 [制約の変更] ダイアログボックス

- 2 [制約リスト]を右クリックし、ショートカットメニューの[制約の追加]をクリックします。図 51 は [制約の追加] ダイアログボックスを示しています。

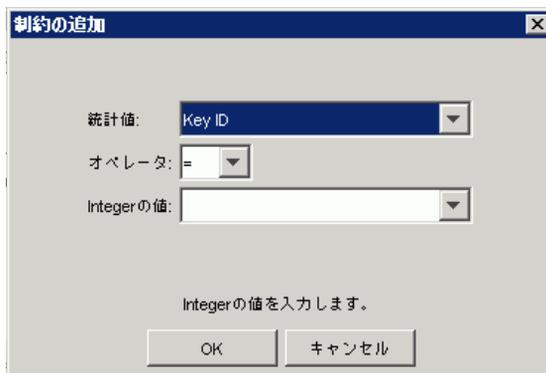


図 51 [制約の追加] ダイアログボックス

- 3 [制約の追加] ダイアログボックスで以下を実行します。
 - a [統計値] の矢印ボタンをクリックし、統計値を選択します。
 - b [オペレータ] の矢印ボタンをクリックし、演算子を選択します。
 - c [Integer の値] ボックスに値を入力します。使用可能な場合はパラメータを選択することもできます(パラメータ作成の詳細については、『HP OpenView Performance Insight レポートの作成および表示ガイド』を参照してください)。
- 4 [OK] をクリックします。

カスタム制約の追加

カスタム制約には任意の有効な SQL 式を含めることができ、構造上の制限はありません。

カスタム制約を追加するには、以下の手順に従います。

- 1 [クエリ] メニューから [制約値の変更] を選択します。[制約の変更] ダイアログボックスが開きます。図 50 を参照してください。
- 2 [制約リスト] を右クリックし、ショートカットメニューの [制約の追加] をクリックします。[制約の追加] ダイアログボックスが開きます。図 51 を参照してください。
- 3 [制約リスト] を右クリックし、ショートカットメニューの [カスタム制約の追加] をクリックします。図 52 は [カスタム制約の追加] ダイアログボックスを示しています。



図 52 [カスタム制約の追加]ダイアログボックス

- 4 [ラベル] ボックスに、制約のラベルを入力します。
- 5 制約の式を式ボックス内に作成するには、以下を実行します。
 - a [統計値] の矢印ボタンをクリックし、現在定義されている統計値を選択し、[挿入] をクリックします。
 - b 必要に応じて演算子の付いたボタンをクリックします。
 - c テキストを入力します。
- 6 [OK] をクリックします。

AND 句または OR 句の追加

AND 句と OR 句とでは、制約の処理方法が異なります。データベースでは、制約のリストが上から下へと処理され、論理演算に基づいて一致する行のリストが返されます。

AND 句または OR 句を追加するには、以下の手順に従います。

- 1 [クエリ] メニューから [制約値の変更] を選択します。[制約の変更] ダイアログボックスが開きます。図 50 を参照してください。
- 2 [制約リスト] を右クリックし、ショートカットメニューの [AND の追加] または [OR の追加] をクリックします。

AND 句または OR 句が制約のリストに追加されます。

制約値の変更

制約の値のみを変更するには、以下の手順に従います。

- 1 [クエリ]メニューから[制約値の変更]を選択します。[制約値の変更]ダイアログボックスが開きます。図 53 を参照してください。[制約値の変更]ダイアログボックスが開きます。



図 53 [制約値の変更]ダイアログボックス



制約の値にパラメータを指定した場合、パラメータ名は斜体で[値]列のセルに表示されます。パラメータは編集する必要があります。パラメータを変更するには、『HP OpenView Performance Insight レポートの作成および表示ガイド』を参照してください。

- 2 [値]列のセルをダブルクリックし、新しい値を入力します。
- 3 [OK] をクリックします。

制約の変更

制約プロパティを変更するには、以下の手順に従います。

- 1 [クエリ]メニューから **[制約値の変更]** を選択します。[制約の変更]ダイアログボックスが開きます。図 50 を参照してください。
- 2 変更する制約をクリックします。
その制約のプロパティと値が、ダイアログボックスの下半分に表示されます。
- 3 値を変更するには、プロパティの [値] ボックスをクリックします。
- 4 新しい値を入力または選択します。
- 5 **[OK]** をクリックすると、変更が適用されます。

制約および句の削除

制約または句を削除するには、以下の手順に従います。

- 1 [クエリ]メニューから **[制約値の変更]** を選択します。[制約の変更]ダイアログボックスが開きます。図 50 を参照してください。
- 2 以下のいずれかを実行します。
 - 削除する句を右クリックし、ショートカットメニューの **[句の削除]** をクリックします。
 - 削除する制約を右クリックし、ショートカットメニューの **[制約の削除]** をクリックします。

ノードとインタフェースの選択

レポート用のデータを選択するときに、データの選択元とするノードとインタフェースを指定できます。[ノード/インタフェースの選択]ウィザードを使用して、選択したノードとインタフェースを変更できます。

選択されたノードおよびインタフェースを変更するには、以下の手順に従います。

タスク 1: [ノード / インタフェースの選択] ウィザードを起動する

- 1 [クエリ]メニューから[ノード / インタフェースの選択]を選択します。[ノードの選択タイプを選択します]ページが開きます。



- 2 次のいずれかのオプションを選択します。
 - [ノードとインタフェースを個別に選択します]。[ノード / インタフェースの選択]ページが開きます。タスク 2 に進みます。
 - [ノードおよびインタフェースのグループを選択します]。[グループの選択]ページが表示されます。427 ページのタスク 3 に進みます。
- 3 [次へ]をクリックします。

タスク 2: ノードおよびインタフェースを個別に選択する

以下のいずれかを実行します。

- すべてのノードからデータを収集するには、[すべてのノード / インタフェースの使用]を選択し、[次へ]をクリックします。
- データを収集する対象を特定のノードに限定する場合、[選択したノード / インタフェースの使用]を選択します。[次から選択]ボックスで、各ノードは1つのフォルダーで表されます。

ノードおよびインタフェースを選択するには、以下を実行します。

- a ノードのフォルダーを展開してそのインタフェースを表示します。
- b ノードまたはインタフェースを選択するには、以下のいずれかを実行します。
 - [次から選択] ボックスでノードまたはインタフェースをダブルクリックします。
 - [次から選択] ボックスでノードまたはインタフェースを選択し、 をクリックします。
- c ノードまたはインタフェースを選択解除するには、以下のいずれかを実行します。
 - [選択されたノード/インタフェース] ボックスでノードまたはインタフェースをダブルクリックします。
 - [選択されたノード/インタフェース] ボックスでノードまたはインタフェースを選択し、 をクリックします。
- d 必要なノードおよびインタフェースの選択が完了したら、**[OK]** をクリックします。
- e **[次へ]** をクリックします。

タスク 3: ノードおよびインタフェースのグループを選択する

- 1 [グループ] ボックスからグループを選択します。[グループに対する管理対象オブジェクト] ボックスに、選択したグループのメンバーが表示されます。
- 2 **[次へ]** をクリックします。

タスク 4: ノードおよびインタフェースの概要を確認する

- 1 要約を確認します。
- 2 必要に応じて、**[戻る]** をクリックして戻り、変更を行います。変更が完了したら、**[次へ]** をクリックして概要に戻ります。

- 3 [終了]をクリックします。



ノードは、レポートを表示するときにも選択できます。ノードの選択を遅らせる方法の詳細は、『HP OpenView Performance Insight レポートの作成および表示ガイド』を参照してください。

データベースから取得する最大行数の変更

データベースに数千個のデータエントリが格納されている場合、データベースで使用するディスク容量がギガバイト単位になることがあります。そのため、データベースから取得して表示するデータ量に制約を設けることができるようになっています。デフォルトでは、データベースから取得する行数は **50** 行です。

返されるデータはクエリの性質によって異なります。たとえば、時間を基準にしてデータを降順で並び替えるようクエリで指定した場合は、**OVPI** によって最新の **50** 行のデータが表示されます。

表示するレポートの種類や、レポートに表示されるデータの分布状況によっては、**50** 行では不十分な場合があります。表示する行数を変更するには、ショートカットメニューまたはレポートのコンポーネントツリーを使用します。

ショートカットメニューを使用して行数を変更するには、以下の手順に従います。

- 1 [クエリ]メニューから[**最大行数の変更**]を選択します。図 54 は [最大行数の変更]ダイアログボックスを示しています。

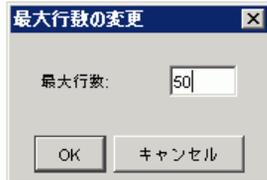


図 54 [最大行数の変更]ダイアログボックス

- 2 必要な行数を [最大行数] ボックスに入力し、[OK] をクリックします。

テーブルの作成

テーブルマネージャを使用して、カスタムデータテーブルとプロパティテーブルを作成できます。収集データテーブルも作成できますが、SNMP 収集テーブルを作成する場合は MIB ブラウザを使用する必要があります。詳細は 659 ページの「[収集テーブルの作成](#)」を参照してください。

収集データテーブルとは、データパイプから収集されたデータを格納するテーブルです。要約、ベースライン、予測テーブルなど他のテーブルを作成する場合は、429 ページの「[データテーブルの作成](#)」を参照してください。また、プロパティテーブルを作成する場合は、443 ページの「[プロパティテーブルの作成](#)」を参照してください。

テーブルには以下の要件があります。

- 最大幅は 1,962 文字です。これはすべての列の総文字数です。
- 列の個数は最大 250 です。データテーブルのオブジェクトを選択する場合、デフォルトの列が 13 列あるため、13 列以上を設定してください。プロパティテーブルのオブジェクトを選択する場合、デフォルトの列が 7 列あるため、7 以上を設定してください。
- 各データテーブルには、対応するプロパティテーブルが必要です。リストから既存のプロパティテーブルを選択するか、新しいプロパティテーブルを作成することができます。新しいプロパティテーブルを作成する場合は、デフォルトのキー変数を使用するか別のキー変数を選択できます。

この項では、テーブルの作成の基本を説明します。テーブルの詳細については、『[HP OpenView Performance Insight TEEL Reference Guide](#)』を参照してください。このマニュアルには、テーブルの属性と TEEL ファイルの作成に関する情報が記載されています。

データテーブルの作成

カスタムデータテーブルを作成するには、以下の手順に従います。

タスク 1: テーブルの作成ウィザードを起動する

管理コンソールから、以下のいずれかの方法でテーブルの作成ウィザードを起動します。

-  をクリックし、メニューから [データテーブル] を選択します。
- [ファイル] メニューから [新規]、[データテーブル] の順に選択します。

タスク 2: 収集名、収集カテゴリ、および収集の説明を指定します。

[収集の定義] ウィンドウが開きます (図 55)。

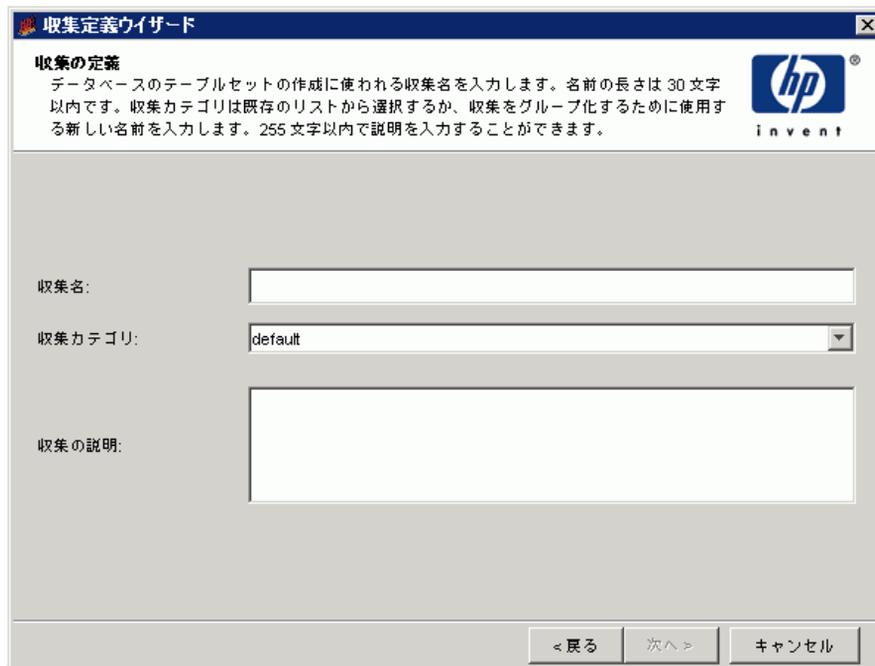


図 55 [収集の定義] ウィンドウ

- 1 [収集名] ボックスにデータテーブルの名前を入力します。この名前は OVPI のデータリポジトリに格納されます。



ウィザードは、提供するエイリアス名に基づいて名前をコレクションに割り当てます。

名前は一意でなければなりません。最大 255 文字までです。使用できるのは、大文字/小文字のアルファベット、数字、特殊文字のハイフン (-) とアンダースコア (_) です。

- 2 [収集カテゴリ] ボックスで、収集テーブルのカテゴリを入力または選択します。
カテゴリ名は、テーブルのセットをまとめてグループ化します。どの名前を選択するべきかを判断できない場合は、**[default]** を選択します。この名前は、最大 30 文字までです。
- 3 [収集の説明] ボックスに、テーブルの説明を入力します。説明は省略することも可能です。説明は、最大 255 文字までです。
- 4 [次へ] をクリックします。

タスク 3: 収集テーブルのデータのプロパティおよび保存期間を設定します。

[データ プロパティと記憶領域の設定] ウィンドウが開きます (図 56)。

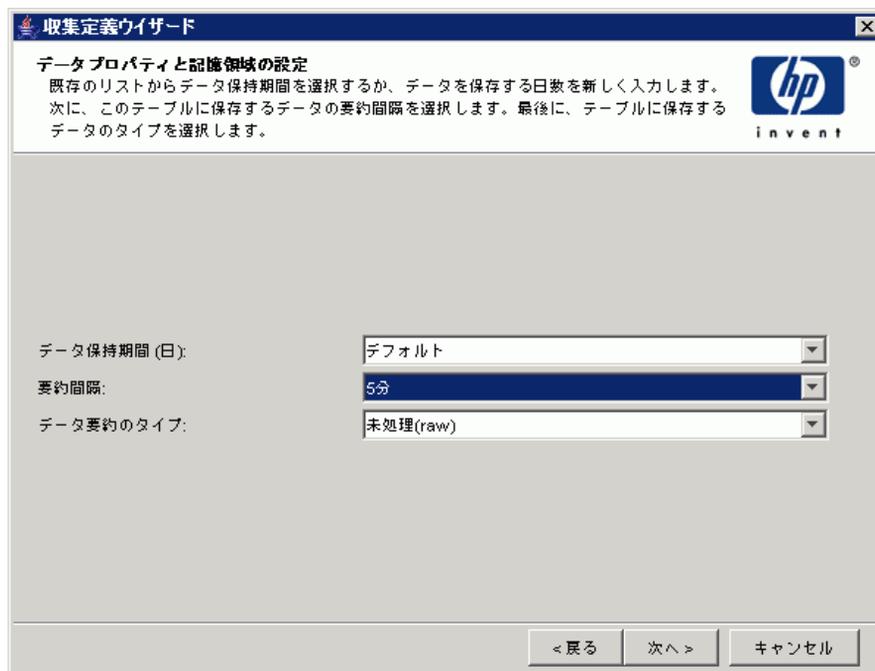


図 56 [データ プロパティと記憶領域の設定] ウィンドウ

- 1 [データ保持期間] ボックスで、テーブル内にデータを保持する日数を入力または選択します。

2 [要約間隔] ボックスで、テーブル内のデータの時間特性を選択します。たとえば、5分テーブルには5分間隔のデータが格納されます。この5分間隔で収集されたデータを割合データと呼びます。

3 [データ要約のタイプ] ボックスでテーブルのタイプを選択します。

テーブルタイプは、テーブルに含まれているデータのクラスを指定するものです。以下に、使用可能なテーブルタイプのオプションを示します。

[ベースライン] テーブルにはベースラインデータが格納されます。

[イベント] テーブルにはイベントデータが格納されます。イベントデータは、独立イベントの付いた非時系列指向のデータです。

[予測] テーブルには予測データが格納されます。

[レート] テーブルには割合データが格納されます。割合データは、**raw** 入力データからの1対の行から算出される差分データです。

[未処理 (raw)] テーブルには **raw** (ポーリング時の) データが格納されません。

[要約] テーブルには要約データが格納されます。

4 [次へ] をクリックします。

タスク 4: 収集の統計を定義する

[収集対象の統計値を手動で定義する] ページが開きます (図 57)。



図 57 [収集対象の統計値を手動で定義する] ページ

- 1  をクリックし、テーブルに追加する列を作成します。
- 2 [列] ボックスに、統計の名前を入力します。
統計名は最大 30 文字までで、アルファベット、数字、アンダースコアを使用できます。
- 3 [エイリアス] ボックスに、統計のエイリアス名を入力します。
名前は最大 255 文字までで、次の文字を使用できます。アルファベット、数字、アンダースコア、ハイフンを使用できます。
- 4 [データタイプ] ボックスで値を選択します。

以下に、使用可能なデータパイプのオプションと、対応するデータベース記憶領域タイプを示します。

OVPI データタイプ	Sybase データタイプ
char_string	varchar
カウンタ	float
counter_high	float
counter_low	float
counter64	float
double	float
enum	integer
float	float
gauge	float
hex_string	varchar
integer	float
ip_address	varchar(15)
numeric	numeric
object_id	varchar(128)
octet_string	varchar(128)
seq_key	integer
smalldatetime	smalldatetime
snm_float	float
snmp_char_string	varchar
snmp_counter	float
snmp_double	float
snmp_enum	integer
snmp_float	float
snmp_gauge	float
snmp_hex_string	varchar

snmp_integer	float
snmp_ip_address	varchar(15)
snmp_object_id	varchar(128)
snmp_octet_string	varchar(128)
snmp_snm_float	float
snmp_timeticks	float
timeticks	float
tinyint	tinyint
unix_time	datetime

- 5 必要に応じて、[長さ]ボックスに数値を入力します。
長さの値が有効なデータタイプは、char_string、hex_string、numeric、octet_string、snmp_char_string、snmp_hex_string、snmp_octet_stringです。
- 6 統計に NULL がありえる場合は、[ヌル可能]をクリックします。
- 7 [デフォルト]ボックスに、統計のデフォルト値を入力します。
値の長さは最大 255 文字までです。
- 8 [説明]ボックスに、統計の説明を入力します。
説明は省略することも可能です。説明は最大 255 文字までです。
- 9 データテーブル内の列の順序を変更する場合は、変更したい列を選択し以下を実行します。
 - 列を上へ移動するには、 をクリックします。
 - 列を下へ移動するには、 をクリックします。
 - プロパティテーブルから列を削除するには、 をクリックします。
- 10 [次へ]をクリックします。

タスク 5: データテーブルに関連付けるプロパティテーブルを指定する

[プロパティテーブルとの関連付け] ページが開きます (図 58)。

収集定義ウィザード

プロパティテーブルとの関連付け

各データテーブルは、データをさらに定額するためにプロパティテーブルが必要です。ウィザードを使って新しい収集用の新しいプロパティテーブルを作成することをお勧めします。プロパティテーブル名の長さは 30 文字以内です。上級ユーザーだけが、この [既存プロパティテーブルの再利用] オプションを使うことができます。

新規プロパティテーブルの作成

既存のプロパティテーブルの再利用

K_xew

K_APOVPA_BYAPP

<戻る 次へ > キャンセル

図 58 [プロパティテーブルとの関連付け] ページ

- 以下のいずれかを実行します。
 - [**新規プロパティテーブルの作成**] を選択し、新しく作成するプロパティテーブルの SQL 名を入力します。最大 30 文字までの、一意な名前を入力できます。使用できる文字は、アルファベット、数字、アンダースコア (_) です。タスク 6 に進みます。
 - [プロパティテーブル] リストからプロパティテーブルを選択します。タスク 7 に進みます。
- [**次へ**] をクリックします。

タスク 6: プロパティ属性を定義する

[プロパティ属性の定義] ページが開きます (図 59)。



図 59 [プロパティ属性の定義] ページ

既存の列を使用してプロパティテーブルを作成することも、さらに列を追加することもできます。いずれの場合も、列の属性を変更できます。

プロパティテーブルの列を追加または変更するには、以下の手順に従います。

- 1 列を追加するには、 をクリックします。

既存のリストの末尾に列のラインが現れます。[列] および [エイリアス] ボックスにはデフォルトの名前が **Column_n** と表示されます (n は数字であり、列を追加するたびに増加します)。

- 2 列の SQL 名を指定するには、[列] ボックスで名前を選択し新しい名前を入力します。

名前は最大 30 文字までで、アルファベット、数字、アンダースコアを使用できます。

- 3 列のエイリアス名を指定するには、[エイリアス]ボックスで名前を選択し新しい名前を入力します。

名前は最大 **255** 文字までであり、アルファベット、数字、アンダースコア、ハイフンを使用できます。
- 4 [データタイプ]ボックスをクリックし値を選択します。

利用可能なデータ型のオプションとそれに対応するデータベースのストレージタイプについては、**433** ページの**手順 4**を参照してください。
- 5 必要に応じて、[データ長]ボックスに数値を入力します。

長さの値が有効なデータタイプは、**char_string**、**hex_string**、**numeric**、**octet_string**、**snmp_char_string**、**snmp_hex_string**、**snmp_octet_string**です。
- 6 [オブジェクト別]ボックスをオンまたはオフにします。

このオプションをオンにした場合は、その列が、プロパティテーブル内の、要素を定義するプロパティの、一意な組み合わせに含まれていることとなります。この場合は、[ヌル可能]および[デフォルト値]ボックスは選択するべきではありません。

変数によるオブジェクトとして `dsi_target_name` 以外の列を指定した場合は、変数によるオブジェクトとして `dsi_table_key` は指定できません。ただし、オブジェクト別変数の最初のものとして `dsi_target_name` を指定した場合にのみ、オブジェクト別変数として `dsi_table_key` を指定できます。
- 7 [収集別]ボックスをオンまたはオフにします。

このオプションをオンにした場合は、その列が、収集対象要素を定義する列の一意な組み合わせに含まれていることとなります。この場合は、[ヌル可能]および[デフォルト値]ボックスは選択するべきではありません。

変数別収集として [`dsi_target_name`] 以外の列を指定した場合は、変数別収集として `dsi_table_key` を指定できません。ただし、変数別収集の最初のものとして `dsi_target_name` を指定した場合にのみ、変数別収集として `dsi_table_key` を指定できます。
- 8 [ヌル可能]ボックスをオンまたはオフにします。

このオプションをオンにした場合は、この列は **NULL** の可能性があります。[オブジェクト別]または[収集別]ボックスが選択されている場合は、このオプションは選択するべきではありません。

- 9 列のデフォルト値を設定する場合は、[デフォルト値]ボックスに値を入力します。

値の長さは最大 **255** 文字までです。このフィールドは、この列がオブジェクト別変数または変数別収集である場合には、空欄にする必要があります。

- 10 以下のいずれかを実行します。

- a この列に外部キー参照を含める場合は、[外部キー]リストからそのキーが含まれているプロパティテーブルを選択します。
- b この列に外部キー参照を含めない場合は、[外部キー]リストから **[no fk]** を選択します。デフォルトは外部キーなしです。

- 11 キー変数で列を指定する場合、キー変数の順序で列を配置する必要があります。たとえば、リスト内の最初の列は **1** 番目のキー変数に対応させ、**2** 番目の列は **2** 番目のキー変数に対応させ、以下同様に列をキー変数に対応させます。

プロパティテーブル内での列の順序を変更したい場合は、変更したい列を選択して以下を実行します。

- 列を上へ移動するには、 をクリックします。
- 列を下へ移動するには、 をクリックします。
- プロパティテーブルから列を削除するには、 をクリックします。



オブジェクト別変数と変数別収集とが同じである場合は、プロパティテーブルのデフォルトは **6** 列のみです。

タスク 7: 収集の出力ファイルを指定する

[出力ファイルの選択] ページが開きます (図 60)。



図 60 [出力ファイルの選択]

- 1 出力ファイルの名前と場所が正しいことを確認します。
- 2 ファイルの名前または場所を変更する場合は、以下のいずれかを実行します。
 - [出力ファイル] ボックスに新しい情報を入力します。
 -  をクリックします。[開く] ダイアログボックスが開きます。

ファイルの場所に移動してそのファイルをダブルクリックし、[開く] をクリックします。[出力ファイル] ボックスが、新しいファイル情報で更新されます。
- 3 [次へ] をクリックします。

タスク 8: 収集をデータベースに登録する

[データベースへの収集の追加] ページが開きます (図 61 を参照)。



図 61 [データベースへの収集の追加] ページ

- 1 すぐにテーブルを生成してデータベースに追加する場合は、[**今すぐデータベースに追加**] を選択します。

このオプションをオフにした場合は、後からコマンド行で以下のコマンドを入力する必要があります。

```
datapipe_manager -p create -a teel_file
```

ここで *teel_file* は、440 ページのタスク 7 で指定した出力ファイルの名前です。

datapipe_manager コマンドのオプションに関する情報がさらに必要な場合は、『HP OpenView Performance Insight TEEL Reference Guide』および『HP OpenView Performance Insight Reference Guide』を参照してください。

- 2 [要約] ボックスで、テーブル内のデータに対して実行する要約のタイプを選択します。

以下のオプションのいずれかをクリックします。

- [未処理 (raw) から差分への変換]

raw から差分への変換処理に必要なデータベースオブジェクトが生成されます。

手動で生成する場合は、この手順の[手順 1](#)のコマンドに `-r r2d` を付けます。

- [データをレートテーブルに直接コピー]

raw から差分への変換処理とデフォルトの要約に必要なデータベースオブジェクトが生成されます。データベースオブジェクトには、レートテーブルと、時間単位、日単位、および週単位の要約テーブルと、そのための要約プロシージャが含まれます。また、**.sum** ファイルも作成され、`DPIPE_HOME/scripts` ディレクトリに保存されます。

手動で生成する場合は、この手順の[手順 1](#)のコマンドに `-r default` を付けます。

- [要約しない]

他のデータベースオブジェクトは生成されません。

- 3 [次へ] をクリックします。

タスク 9: [サマリー] ページを確認する

[サマリー] ダイアログボックスが開きます。



- 1 すべての収集プロパティ値が正しいことを確認します。
必要であれば、[戻る] をクリックして前のページに戻り、変更します。変更が完了したら、[次へ] をクリックして [概要] ページまで戻ります。
- 2 [完成] をクリックするとデータテーブルが作成されます。
データテーブル作成ウィザードが閉じ、TEEL ファイルが作成され、指定した場所に保存されます。

プロパティテーブルの作成

プロパティテーブルを作成するには、以下の手順に従います。

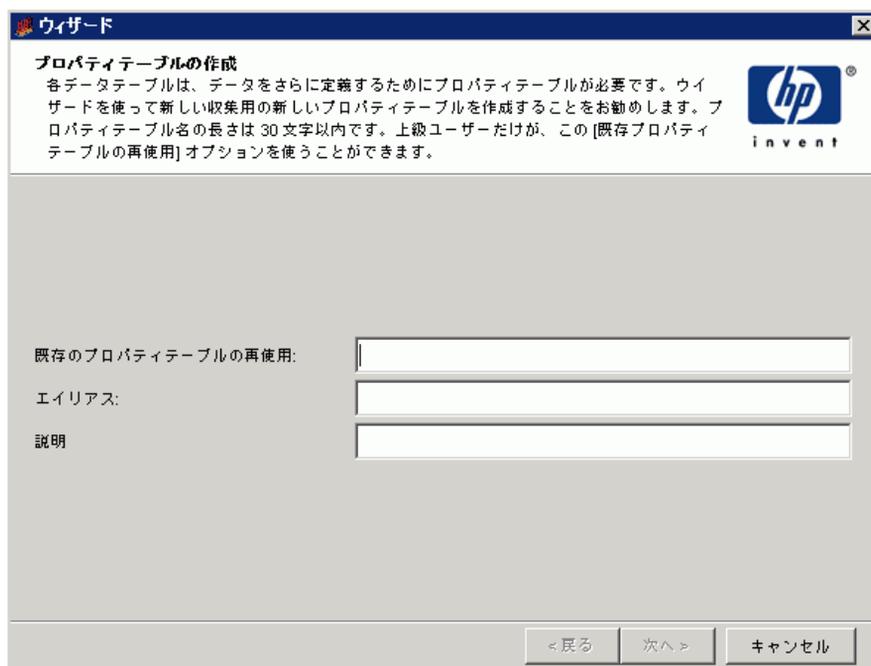
タスク 1: テーブルの作成ウィザードを起動する

管理コンソールから、以下のいずれかの方法でテーブルの作成ウィザードを起動します。

-  をクリックし、メニューから [プロパティテーブル] を選択します。
- [ファイル] メニューから [新規]、[プロパティテーブル] の順に選択します。

タスク 2: プロパティテーブルの名前を入力する

[プロパティテーブルの作成] ページが開きます。



ウィザード

プロパティテーブルの作成

各データテーブルは、データをさらに定義するためにプロパティテーブルが必要です。ウィザードを使って新しい収集用の新しいプロパティテーブルを作成することをお勧めします。プロパティテーブル名の長さは 30 文字以内です。上級ユーザーだけが、この [既存プロパティテーブルの再利用] オプションを使うことができます。

既存のプロパティテーブルの再利用:

エイリアス:

説明

<戻る 次へ > キャンセル

図 62 [プロパティテーブルの作成] ページ

- 1 [既存のプロパティテーブルの再利用] ボックスに、テーブルの SQL 名を入力します。

名前は一意でなければなりません。最大 30 文字までです。使用できるのは、大文字 / 小文字のアルファベット、数字、特殊文字のアンダースコア (_) です。

- 2 [エイリアス] ボックスに、テーブルのエイリアス名を入力します。

名前は一意でなければなりません。最大 255 文字までです。使用できるのは、大文字 / 小文字のアルファベット、数字、特殊文字のハイフン (-) とアンダースコア (_) です。)

3 [説明] ボックスに、テーブルの説明を入力します。

説明は省略できません。最大 255 文字までです。このボックスを空白にすると、テーブルの作成後にエラーメッセージが表示されます。

4 [次へ] をクリックします。

タスク 3: プロパティ属性を定義する

[プロパティ属性の定義] ページが開きます 437 ページの [図 59](#) を参照してください。

この手順を行うには、[437 ページのタスク 6](#) を参照してください。

タスク 4: 収集の出力ファイルを指定する

[出力ファイルの選択] ページが開きます 440 ページの [図 60](#) を参照してください。

この手順を行うには、[440 ページのタスク 7](#) を参照してください。

タスク 5: 収集をデータベースに登録する

[データベースへの収集の追加] ページが開きます (441 ページの [図 61](#) を参照)。

この手順を行うには、[440 ページのタスク 7](#) を参照してください。

タスク 6: [サマリー] ページを確認する

[サマリー] ダイアログボックスが開きます。



- 1 すべての値が正しいことを確認します。

必要であれば、[戻る] をクリックして前のページに戻り、変更します。変更が完了したら、[次へ] をクリックして [サマリー] ページまで戻ります。

- 2 [完了] をクリックするとプロパティテーブルが作成されます。

データテーブル作成ウィザードが閉じ、TEEL ファイルが作成され、指定した場所に保存されます。

テーブルのデフォルトの設定

テーブルマネージャでは、データテーブルと期間テーブルの2種類のテーブルに対して、デフォルトを設定できます。データテーブルのデフォルトはテーブルタイプに基づいて設定できます。デフォルト設定はすべてのデータテーブルに適用されます。期間テーブルのデフォルトは、選択した期間テーブルにのみ適用され、多数のアプリケーションに影響します。

データテーブルのデフォルトの設定

テーブルに関連付けられている特定の時間タイプごとに、さまざまなデフォルトオプションを設定できます。これらのオプションには、保持期間、タイムラグ値、および履歴単位があります。



これらの値を変更する場合は注意が必要です。データ保持のデフォルト値を変更した場合は、インストールされているOVPIレポート機能のデータが変更されます。デフォルト値を高くすると、システム全体のパフォーマンスに悪影響します。

デフォルトを変更するには、以下の手順に従います。

- 1 [ファイル]メニューから[**テーブルのデフォルトの設定**]を選択します。

[テーブルのデフォルトの設定]ダイアログボックスが開きます。



- 2 [時間タイプ]リストから、変更するテーブルの時間タイプを選択します。



特定の時間タイプのデフォルト値を変更すると、変更内容は、その時間タイプのすべてのテーブルに適用されます。

- 3 保持期間を変更するには、[データを保持する日数]ボックスに日数を入力します。

保持期間とは、OVPI が特定のテーブルのデータを保持しておく日数です。指定した日数が経過すると、データは自動的に削除されます。

- 4 タイムラグを変更するには、[ヒステリシス単位]ボックスに時間を分単位で入力します。

タイムラグ値は、データの処理の遅延時間(分単位)です。

- 5 履歴単位を変更するには、[ヒステリシス単位]ボックスに単位数を入力します。

履歴単位とは、再処理の対象とするデータのまとまり(量)の指定です。単位の値は、テーブルの時間タイプと同じです。たとえば、日単位のテーブルの履歴単位は日単位であり、同様に、時間単位のテーブルの履歴単位は時間単位です。



ダイアログボックスには実行頻度の設定も表示されますが、この値は変更できません。実行頻度とは、テーブル内のデータの通常処理の頻度です。

- 6 [OK] をクリックします。

期間テーブルのデフォルト

期間テーブルに対して設定できるデフォルトオプションは、保持期間だけです。期間テーブルには、指定した日数の期間のリストが含まれており、これがテーブルの保持期間です。日単位、時間単位、5分、30秒など、さまざまな時間カテゴリの期間テーブルがあります。これらのテーブルでは、データベースの検索が自動的に最適化されます。tpmaint の詳細については、『HP OpenView Performance Insight Reference Guide』を参照してください。



これらの値を変更する場合は注意が必要です。データ保持のデフォルト値を変更した場合は、インストールされている OVPI レポート機能のデータが変更されます。デフォルト値を高くすると、システム全体のパフォーマンスに悪影響します。

期間テーブルの保持期間を変更するには、以下の手順に従います。

- 1 [ファイル]メニューから[期間テーブル保持の設定]を選択します。

[時間範囲テーブル保持の設定] ダイアログボックスが開きます。



- 2 [時間範囲テーブル] リストから、適切な期間テーブルを選択します。

このリストには、データベースで使用可能な各タイムゾーンの、期間テーブルが含まれています。各データベースは、ローカルタイムゾーンセットと GMT タイムゾーンセットにアクセスします。

▶ 期間テーブルの保持日数を変更した場合は、最適化のためにこれらのテーブルを使用するすべてのアプリケーションに影響します。

- 3 [保持日数] ボックスに日数を入力します。テーブルに含まれる期間が変更されます。

▶ この値を正しく設定しないと、パフォーマンスが低下する可能性があります。

- 4 [OK] をクリックします。

14 カタログマネージャの使用

管理コンソールのカタログマネージャを使用すると、配布レポート内にレポートリンクを作成できます。するとそのレポートから、別のレポート、サードパーティーアプリケーション、または **URL (Uniform Resource Locator)** を開くことができるようになります。

レポートリンクは、ソースレポート内の要素（グラフ、テーブル、イメージ、またはラベル）から特定の情報を取得し、その情報をレポートパラメータ（レポートからレポートへのリンクの場合）または引数（レポートからアプリケーションまたは **URL** へのリンクの場合）への入力として使用し、その後、レポートからそのリンクが開かれたときに、指定された情報を用いてレポート、アプリケーション、または **URL** を表示します。このように、レポート、**URL**、およびアプリケーションを相互に結び付けることで、インテリジェントかつカスタマ固有の情報フローを構築するためのナビゲーションパスを作成できます。

さらに、配布するレポートリンクと項目を管理することもできます。カタログマネージャは、[リンク] および [配布済み項目] カタログで構成されています。これらのカタログは **Web** アクセスサーバーにあります。カタログの内容は以下のとおりです。

- [リンク]: [配布済み項目] カタログの配布済みレポート内にある、すべてのレポートリンクが格納されます。
- [配布済み項目]: このカタログには以下のものが含まれています。
 - 配布されたレポート。このカタログにレポートを配布すると、ユーザーは **OVPI** の **Web** アクセスサーバクライアントアプリケーションを使用してそれらのレポートを表示できます。レポートを配布するには、カタログマネージャ、パッケージマネージャ、および配布ウィザードを使用します。
 - 配布された **URL**。レポートから特定の **URL** へのリンクを頻繁に作成する場合、またはユーザーが **Web** アクセスサーバーから特定の **URL** を直接表示する必要がある場合は、[配布済み項目] カタログ内の **URL** を配布すると便利です。

さらに、各カタログ内にある固有の項目に、管理タスクを実行することもできます。

ユーザーは、OVPI クライアントアプリケーション (Web アクセスサーバー、レポートビューア、およびレポートビルダ) を使用してレポートを表示したときに、レポートリンクをトリガーできます。



レポートからアプリケーションへのリンクを、Web アクセスサーバーで開くことはできません。この種類のリンクを開くには、レポートビルダまたはレポートビューアを使用します。また、レポートにリンクされているアプリケーションを正常に起動するには、リンク先のアプリケーションが、レポートビルダまたはレポートビューアの実行元のシステムに存在している必要があります。

カタログマネージャの起動

カタログマネージャを起動するには、以下の手順に従います。

- 1 管理コンソールを起動します。詳細は、96 ページの「[管理コンソールの起動](#)」を参照してください。



管理コンソールには管理者権限を持つアカウントでログオンする必要があります。ユーザーアカウントの詳細は、516 ページの「[ユーザーアカウントの管理](#)」を参照してください。

- 2 管理コンソールのナビゲーションペインで、[**カタログ**] アイコンをクリックします。

図 63 は、[カタログ/レポートリンクの管理] ウィンドウの表示例です。

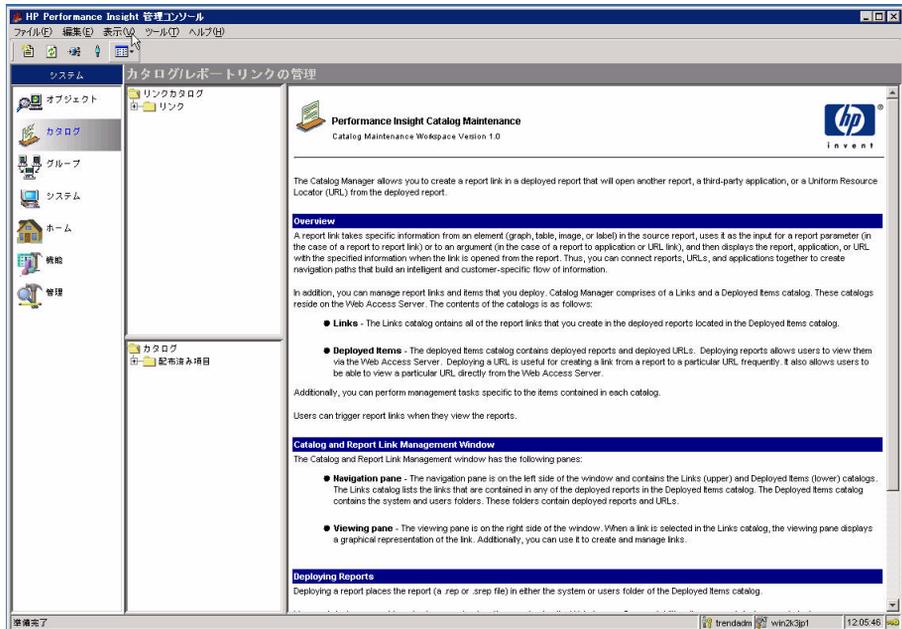


図 63 [カタログ/レポートリンクの管理] ウィンドウ

[カタログ/レポートリンクの管理] ウィンドウ

[カタログ/レポートリンクの管理] ウィンドウには、以下のペインがあります。

- ナビゲーションペイン：ナビゲーションペインはウィンドウの左側にあり、[リンク]カタログと[配布済み項目]カタログが表示されます。[リンク]カタログの[リンク]フォルダーには、[配布済み項目]カタログ内に配布された各レポートに含まれているリンクが一覧表示されます。

[カタログ]には[配布済み項目]フォルダーがあり、その中には[System]および[Users]フォルダーがあります。これらのフォルダーには、配布されたレポートとURLが格納されます。

- 表示ペイン：表示ペインは、ウィンドウの右側にあります。[リンク]カタログでリンクを選択すると、そのリンクがグラフィック表示されます。また、リンクの作成および管理もできます。詳細は 494 ページの「表示ペインでのリンクの変更」を参照してください。

[配布済み項目] カタログの管理

配布済み項目カタログに対しては次のタスクを実行することができます。

- レポートと URL を配布する。
- カタログ内にフォルダーを作成することで、配布した項目を整理する。
- レポートを移動する。
- レポートをコピーする。
- レポートと URL のプロパティを表示および変更する。
- レポートと URL を削除する。
- 必要に応じてカタログを更新する。

レポートの配布

レポートを配布すると、そのレポート (.rep または .srep ファイル) は [配布済み項目] カタログの、[System] または [Users] フォルダのいずれかに格納されます。

ユーザーが Web アクセスサーバーでレポートを表示するには、そのレポートを配布する必要があります。また、レポート内にリンクを作成する場合にも、まずレポートを配布する必要があります。カタログマネージャの [レポートの配布] ウィザードを使用すると、必要な各手順に従ってレポートをカタログに配布できます。

URL を配布するには、以下の手順に従います。

タスク 1: 配布ウィザードを起動する

カタログマネージャの [ファイル] メニューから [配布] を選択します。

タスク 2: 配布アクションを選択する

図 64 は [配布アクションの選択] ウィンドウを示しています。

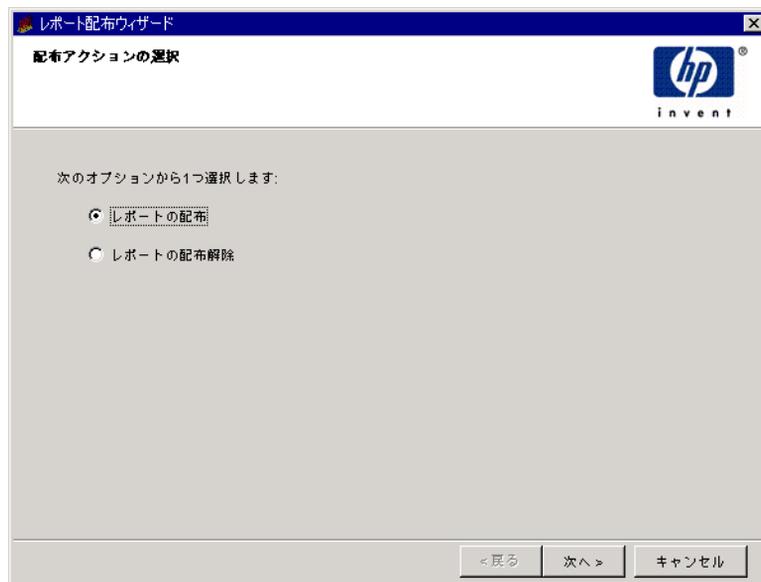


図 64 [配布アクションの選択] ウィンドウ

[レポートの配布] を選択して [次へ] をクリックします。

タスク 3: Web アクセスサーバーにレポートを配布するために必要な情報を指定する

図 65 は [アプリケーションサーバーの情報を入力します] ウィンドウを示しています。



図 65 [アプリケーションサーバーの情報を入力します] ウィンドウ

デフォルトでは、ウィンドウには現在の Web アクセスサーバーの名前とポート番号が表示されます。

以下の手順に従います。

- 1 [Web アクセスサーバーホスト] ボックスで、デフォルト値をそのまま使用するか、あるいはレポートを配布解除する Web アクセスサーバーの名前を入力します。
- 2 [Web アクセスサーバーポート] ボックスで、デフォルト値をそのまま使用するか、あるいは [Web アクセスサーバーホスト] ボックスで指定した Web Access Server のポート番号を入力します。
- 3 以下のいずれかを実行します。
 - [SSL 経由の通信] チェックボックスを選択して SSL を有効にします。
 - [SSL 経由の通信] チェックボックスをクリックして選択を解除し、SSL を無効にします。

[SSL 経由の通信] オプションを選択すると、Web アクセスサーバーとサーバポートされている Web ブラウザの間で SSL (Secure Socket Layer) 通信が有効になります。このオプションを使用しない場合は、通信は HTTP 経由で行われます。

4 [次へ] をクリックして続行します。

タスク 4: 配布するレポート (複数可) を選択する

図 66 は [レポートの選択] ウィンドウを示しています。



図 66 [レポートの選択] ウィンドウ

1 [追加] をクリックします。

[開く] ダイアログボックスが開いたら、配布するレポートが含まれているフォルダーに移動します。

2 [開く] ダイアログボックスで以下のいずれかを実行して [開く] をクリックします。

- レポートを 1 つだけ選択するには、そのレポートのファイル名をクリックします。
- 複数の隣接するレポートを選択するには、最初のレポートをクリックし、[Shift] キーを押しながら最後のレポートをクリックします。

- 隣接していない複数のレポートを選択するには、[Ctrl] キーを押しながらレポートを1つずつクリックしていきます。
- 3 追加したレポートを削除するには、そのレポートを選択し [削除] をクリックします。
 - 4 [次へ] をクリックします。

タスク 5: 配布するレポートの格納先とするフォルダーを選択する

図 67 は [場所の選択] ウィンドウを示しています。

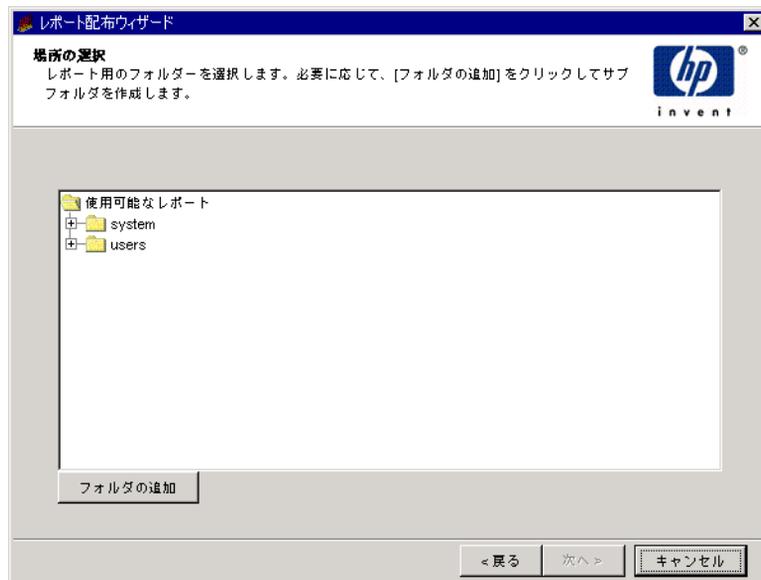


図 67 [場所の選択] ウィンドウ

以下のいずれかを実行します。

- ツリーを展開し、レポートを格納するフォルダーを選択して [次へ] をクリックします。
- ツリーを展開し、新しいフォルダーを作成するフォルダーを選択して [フォルダの追加] をクリックします。

ツリーに [新規フォルダ] が追加されます。以下の手順に従います。

- a [新規フォルダ] をクリックし、新しく作成するサブフォルダーの名前を入力します。
- b [次へ] をクリックします。

タスク 6: レポートを配布する

図 68 は [概要] ウィンドウを示しています。



図 68 [概要] ウィンドウ

- 1 [完了] をクリックします。

レポートが正常に配布された場合は、正常に配布されたことを伝えるメッセージが表示されます。

- 2 [OK] をクリックします。
- 3 レポートが配布されたことを確認するには、レポートの配布先としたフォルダーを選択し、ツールバーの [更新] ボタンをクリックします。

レポートの配布解除

レポートの配布を解除するには、[配布済み項目] カタログのショートカットメニューから [配布解除] オプションを使用するか、[レポートの配布] ウィザードを使用します。レポートの配布を解除すると、そのレポートは [配布済み項目] カタログから除外されます。

[削除] メニューオプションによるレポートの配布解除

レポートを配布解除するには、以下の手順に従います。

- 1 [配布済み項目] カタログで、配布を解除するレポートが含まれているフォルダー ([System] または [Users]) に移動します。
- 2 レポートを右クリックします。
- 3 メニューから [削除] を選択します。

[レポートの配布] ウィザードによるレポートの配布解除

レポートを配布解除するには、以下の手順に従います。

タスク 1: 配布ウィザードを起動する

カタログマネージャの [ファイル] メニューから [配布] を選択します。

タスク 2: 配布オプションを選択する

[配布アクションの選択] ウィンドウが開きます (455 ページの [図 64](#) を参照)。

[レポートの配布解除] を選択して [次へ] をクリックします。

タスク 3: Web アクセスサーバーからレポートの配布を解除するために必要な情報を指定する

[アプリケーションサーバーの情報を入力します] ウィンドウが開きます (456 ページの [図 65](#) を参照)。デフォルトでは、このウィンドウには現在の Web アクセスサーバーの名前とポート番号が表示されます。

以下の手順に従います。

- 1 [Web アクセスサーバーホスト] ボックスで、デフォルト値をそのまま使用するか、またはレポートの配布を解除する Web アクセスサーバーの名前を入力します。
- 2 [Web アクセスサーバーポート] ボックスで、デフォルト値をそのまま使用するか、あるいは [Web アクセスサーバーホスト] ボックスで指定した Web アクセスサーバーのポート番号を入力します。
- 3 以下のいずれかを実行します。
 - [SSL 経由の通信] チェックボックスを選択して SSL を有効にします。

- **[SSL 経由の通信]** チェックボックスをクリックして選択を解除し、SSL を無効にします。

[SSL 経由の通信] オプションを選択すると、Web アクセスサーバーとサポートされている Web ブラウザの間で SSL (Secure Socket Layer) 通信が有効になります。このオプションを使用しない場合は、通信は HTTP 経由で行われます。

- 4 **[次へ]** をクリックして続行します。

タスク 4: 配布解除するレポートを選択する

[場所の選択] ウィンドウが開きます。458 ページの [図 67](#) を参照してください。

- 1 配布解除するレポートが格納されているフォルダーに移動します。
- 2 以下のいずれかを実行してレポート (複数可) を選択します。
 - レポートを **1** つだけ選択するには、そのレポートのファイル名をクリックします。
 - 複数の隣接するレポートを選択するには、最初のレポートをクリックし、**[Shift]** キーを押しながら最後のレポートをクリックします。
 - 隣接していない複数のレポートを選択するには、**[Ctrl]** キーを押しながらレポートを **1** つずつクリックしていきます。
- 3 **[次へ]** をクリックします。

タスク 5: レポートの配布解除

[概要] ウィンドウが開きます。459 ページの [図 68](#) を参照してください。

- 1 **[終了]** をクリックします。

レポートの配布解除が正常に実行された場合は、正常に配布解除されたことを伝えるメッセージが表示されます。
- 2 **[OK]** をクリックします。
- 3 レポートが配布解除されたことを確認するには、配布解除を行ったフォルダーを選択し、ツールバーの **[更新]** ボタンをクリックします。

URL の配布

[配布済み項目] カタログに URL を配布すると、その URL に必要なすべての情報がカタログに保存されます。これは、OVPI の Web アクセスサーバークライアントアプリケーションから URL にすばやくアクセスしたい場合に便利です。

URL を配布すると、Web アクセスサーバーのリンクバーにある [**カタログ**] リンクをクリックすることでその URL にアクセスできるようになります。たとえば、URL を [System] フォルダーに配布した場合は、[System] フォルダーを展開すると、そのフォルダーに配布された URL が表示されます。URL をクリックすると、関連付けられている Web サイトが Web アクセスサーバーの結果ウィンドウに表示されます。

[URL] カタログへの URL の配布は必須ではありません。

URL を配布するには、以下の手順に従います。

- 1 [配布済み項目] カタログで URL の配布先とするフォルダーを右クリックし、メニューから [**URL の配布**] を選択します。

[URL の配布] ダイアログボックスが開きます。



- 2 [表示名] ボックスに、[配布済み項目] カタログでこの URL を表示する際の名前を入力します。
- 3 [説明] ボックスに、URL の説明を入力します。説明は省略することも可能です。

この時点で説明を指定しなくても、後で URL を右クリックしメニューから [**プロパティ**] を選択すれば、説明を指定できます。[プロパティ] ダイアログボックスが開き、URL のプロパティ (名前、説明、および URL) が表示されます。詳細は 469 ページの「[URL プロパティの表示および変更](#)」を参照してください。

- 4 [URL] ボックスに URL のアドレスを入力し、Web サイトへの入力として使用するパラメータがあれば指定します。
- 5 [OK] をクリックします。

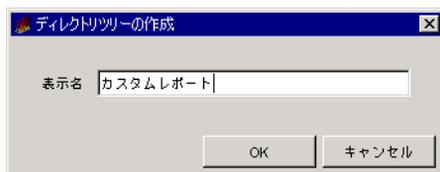
カタログ内のディレクトリの新規作成

[配布済み項目] カタログには [配布済み項目] という名前のフォルダーがあります。このフォルダー内には、さらに [System] フォルダーと [Users] フォルダーがあります。[System] および [Users] フォルダーの下の各ディレクトリ内に、新しいディレクトリを作成できます。

新しいディレクトリを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 ディレクトリの作成先とするフォルダーを右クリックし、メニューから [ディレクトリの作成] を選択します。

[ディレクトリツリーの作成] ダイアログボックスが開きます。



- 2 [表示名] ボックスに、作成するフォルダーの名前を入力し、[OK] をクリックします。

レポートおよびディレクトリの移動

レポートとディレクトリは移動できます。

レポートを移動するには、以下の手順に従います。

- 1 [配布済み項目] カタログで、移動するレポートを見つけて選択します。
- 2 レポートを右クリックし、メニューから [移動] を選択します。

[配布済みレポートの移動] ダイアログボックスが開きます。



3 レポートの移動先とするフォルダーを選択し **[OK]** をクリックします。

ディレクトリを移動するには、以下の手順に従います。

- 1 [配布済み項目] カタログで、移動するディレクトリを見つけて選択します。
- 2 ディレクトリを右クリックし、メニューから **[移動]** を選択します。

[ディレクトリに移動] ダイアログボックスが開きます。



3 レポートの移動先とするディレクトリを選択します。

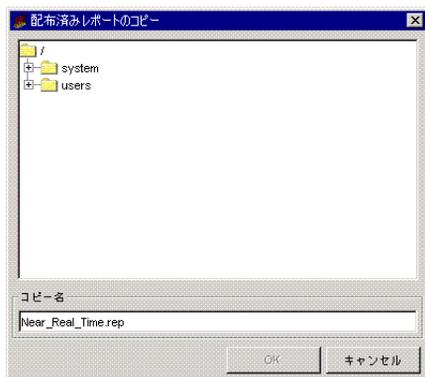
レポートおよびディレクトリのコピー

レポートとディレクトリはコピーできます。

レポートをコピーするには、以下の手順に従います。

- 1 [配布済み項目]カタログで、コピーするレポートを見つけて選択します。
- 2 項目を右クリックし、メニューから[コピー]を選択します。

[配布済みレポートのコピー]または[ディレクトリにコピー]ダイアログボックスが開きます。



- 3 以下の手順に従います。
 - a レポートのコピー先とするフォルダーを選択します。
 - b [コピー名]ボックスで、表示された元の名前をそのまま使用するか、新しい名前を入力します。
 - c [OK] をクリックします。

ディレクトリをコピーするには、以下の手順に従います。

- 1 [配布済み項目]カタログで、コピーするディレクトリを見つけて選択します。
- 2 項目を右クリックし、メニューから[コピー]を選択します。

[ディレクトリにコピー] ダイアログボックスが開きます。



- 3 以下の手順に従います。
 - a レポートのコピー先とするディレクトリを選択します。
 - b [コピー名]ボックスで、表示された元の名前をそのまま使用するか、新しい名前を入力します。
 - c [OK] をクリックします。

ディレクトリプロパティの表示および変更

ディレクトリのプロパティを表示または変更するには、以下の手順に従います。

- 1 項目を右クリックし、メニューから [プロパティ] を選択します。

[ディレクトリの編集] ダイアログボックスが開きます。



- 2 [表示名] ボックスに、ディレクトリの表示名を入力します。
- 3 **[OK]** をクリックします。

配布項目プロパティの表示および変更

配布されたレポートまたは URL のプロパティを表示および変更できます。

レポートプロパティの表示および変更

レポートプロパティを表示または変更するには、以下の手順に従います。

- 1 項目を右クリックし、メニューから **[プロパティ]** を選択します。

[配布済みレポートの編集] ダイアログボックスが開きます。



- 2 レポートの名前または説明を変更するには、[全般] タブをクリックします。
以下のいずれかを実行します。

- [表示名] ボックスに、レポートの表示名を入力します。
- [説明] ボックスに説明を入力します。

- 3 **Web** アクセスサーバークライアントアプリケーションでレポートを表示したときのレポートの表示形態を変更するには、[表示] タブをクリックします。

デフォルトでは、ユーザーが **Web** アクセスサーバーでレポートを開くと、レポートは現在のブラウザウィンドウに表示されます。レポートを新しいブラウザウィンドウに表示するには、[**新規ブラウザで開く**] をクリックします。

- 4 [OK] をクリックします。

レポートの名前と説明のみを確認したい場合は、カタログ内のレポートの上にポインタを置いてしばらく待つと表示されます。

URL プロパティの表示および変更

URL のプロパティ ([配布済み項目] カタログでの表示名、説明、アドレス) を表示および変更できます。

URL のプロパティを表示または変更するには、以下の手順に従います。

- 1 URL を右クリックし、メニューから [プロパティ] を選択します。



[URL の配布] ダイアログボックスが開きます。

- 2 以下のいずれかを実行します。
 - [表示名] ボックスに、レポートの表示名を入力します。
 - [説明] ボックスに説明を入力します。
 - [URL] ボックスに、新しい URL およびパラメータを入力します。
- 3 [OK] をクリックします。

URL の名前と説明のみを確認したい場合は、カタログ内の URL の上にポインタを置いてしばらく待つと表示されます。

レポートおよび URL の削除

レポートまたは URL を削除すると、[配布済み項目] カタログからそのレポートまたは URL の配布が解除されます。

レポートまたは URL を削除するには、項目を右クリックしメニューから [削除] を選択します。

カタログの更新

場合によっては、[配布済み項目]カタログ内のフォルダーを更新する必要があります。たとえば、自分と別のユーザーが共通の管理者アカウントを使用している場合は、複数の人が同時に変更を行う可能性があります。この場合は、カタログへの最新の変更を表示するために、カタログを手動で更新する必要があります。

カタログ内のフォルダーを更新するには、フォルダーを右クリックして、メニューから[更新]を選択します。

リンクカタログの管理

リンクカタログを管理するには以下を行います。

- カatalog内にリンクグループを作成する。
- 配布レポート内に、レポート、アプリケーション、または URL への、レポートリンクを作成する。
- 表示ペインでリンクを変更する。
- リンクをコピーする
- リンクを移動する
- リンクを削除する
- リンクプロパティを表示および変更する
- リンクをエクスポートまたはインポートする。
- リンクカタログを更新する。

リンクグループの作成

デフォルトでは、[リンクカタログ]には[リンク]というフォルダーがあります。この[リンク]フォルダー内にリンクグループというフォルダーを作成して、リンクを企業別、グループ別、ユーザー別などに整理することができます。

リンクグループを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 以下のいずれかを実行します。
 - [リンクカタログ]の[リンク]フォルダーを右クリックし、[新規リンクグループ]を選択します。
 - カタログマネージャの[ファイル]メニューから[新規]を選択し、[リンクグループ]を選択します。

[リンクグループの作成]ダイアログボックスが開きます。



▶ [ファイル]メニューから[リンクグループ]を選択した場合は、このダイアログボックスに[リンクグループの作成先]ボックスも表示されます。

- 2 必要であれば、[リンクグループの作成先]ボックスで、リンクグループの作成先とするフォルダーを選択します。
- 3 [名前]ボックスに、リンクグループフォルダーの名前を入力します。フォルダーの作成が完了すると、このフォルダー名が[リンク]フォルダーに表示されます。
- 4 [説明]ボックスに、リンクの説明を入力します。これは省略可能です。

後でこれらのプロパティを表示するには、リンクグループの上にポインタを置いてしばらく待ちます。すると、表示名と説明が表示されます。また、カタログ内のそのレポートの上にポインタを置いても、これらのプロパティ(リンクの名前と説明)が表示されます。

表示名と説明を変更するには、リンクグループフォルダーを右クリックし、メニューから **[プロパティ]** を選択します。リンクのプロパティの変更に関する詳細は、497 ページの「[リンクのプロパティの表示および変更](#)」を参照してください。

5 **[OK]** をクリックします。

[リンク] フォルダー内にリンクグループが表示されます。

レポートリンクの作成

ユーザーがレポート内のリンクを開くと、レポートリンクはソースレポート内の要素 (グラフ、テーブル、イメージ、ラベル) から特定の情報を取得し、その情報をレポートパラメータ (レポートからレポートへのリンクの場合) または引数 (レポートからアプリケーションまたは URL へのリンクの場合) への入力として使用し、その後、レポートからそのリンクが開かれたときに、指定された情報を用いてレポート、アプリケーション、または **URL** を表示します。

1 つのレポートを複数のレポートリンクのリンク先にすることもできます。たとえば、カスタマを表示するレポートに、デバイスレポートを表示するレポートリンクが含まれている場合は、特定カスタマのデバイスのみを表示できます。また、場所を表示する別のレポートに、同じデバイスレポートを表示するレポートリンクが含まれている場合は、特定の場所のデバイスのみを表示できます。この場合、カスタマと場所のレポートはいずれも、デバイスを表示する同じレポートにリンクされています。

同様に、1 つのレポートに複数のリンクを設定できます。たとえば、1 つのレポートを任意の数のレポート、**URL**、アプリケーションにリンク設定できます。

レポートから別のレポートへのリンク

配布されたレポート (リンク元) の中に、別の配布されたレポート (リンク先) へのリンクを作成できます。ユーザーがソースレポートでリンクをクリックすると、リンク先レポートが開きます。このとき、ソースレポート内の選択した要素に関連付けられている特定の統計の値が、リンク先レポート内の選択したレポートパラメータのために使用されます。たとえば、レポートからレポートへのリンクを作成することで、デバイスに関するさらなる情報を別のレポートで表示できます。

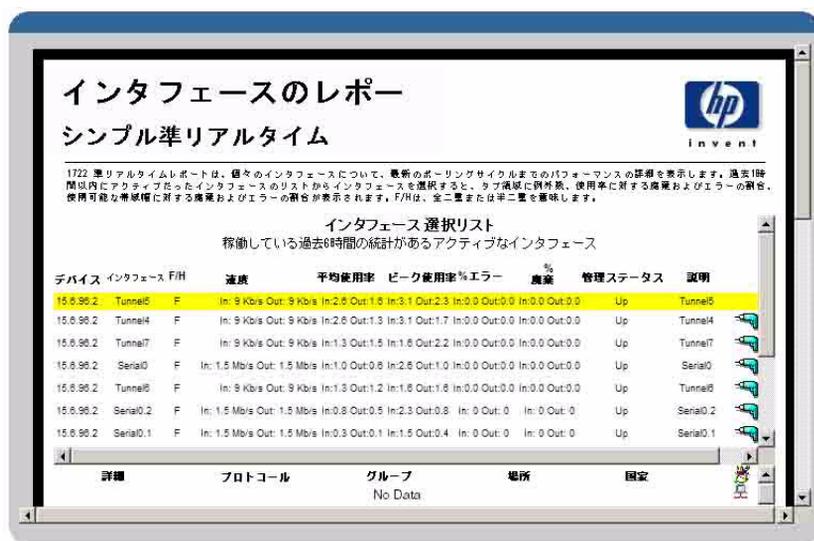
Device Resources レポートパックと **Interface Reporting** レポートパックが両方インストールされていると仮定します。これらの 2 つのレポートパックを同時に実行すれば、ルーター CPU の使用率が急増した場合、**Device Resources** がこの問題を知らせ、**Interface Reporting** でインタフェースの使用率レベルがこの問題の原因であるかどうかを判断します。

このとき、**Device Resource** の準リアルタイム クイックビューレポートを表示すると、デバイスの過去 6 時間の平均使用率 (バッファ、CPU、およびメモリー) が一覧表示され、使用率が極端に高いデバイスを特定できます。また、**Interface Reporting** の準リアルタイムレポートを開くと、最後のポーリング周期までの個々のインタフェースが一覧表示され、特定のインタフェースが問題の原因であるかどうかを確認できます。さらに、問題が発生しているデバイスがあるかどうかに関係なく、将来はこのレポートを常に開くようにしたいとします。この場合は、**Device Resource** の準リアルタイム クイックビューレポートからこのレポートへのリンク (レポートからレポートへのリンク) を作成すれば、レポートを繰り返し開かずに済みます。

このリンクを作成するには、[レポートからレポートへのリンク] ウィザードを使用して、準リアルタイム クイックビューレポートでデバイスを一覧表示するテーブルの [デバイス] 統計を、準リアルタイムレポートの [デバイス] パラメータにリンクします。以下の例は、Web アクセスサーバーでレポートを表示したときに、レポート内でリンクがどのように表示されるか (下線が付きます) を示しています。

Device Resources のレポートでリンクをクリックすると、このレポートの選択したデバイスの情報が、準リアルタイムレポートの選択したパラメータに渡されます。たとえば、**Device Resource** の準リアルタイム クイックビューでリンクを

クリックした場合は、Interface Reporting の準リアルタイムレポートが表示され、そこに、Device Resources で選択したデバイスの、すべてのインタフェースが表示されます(以下の図を参照)。



レポートから別のレポートへのリンクを作成するには、以下の手順に従います。

タスク 1: [レポートからレポートへのリンク]ウィザードを起動する

[レポートからレポートへのリンク]ウィザードは、以下の方法で起動できます。

- [リンク]カタログでリンクグループを右クリックし、メニューから[新規レポートリンク]を選択し、[レポートからレポートへのリンク]を選択します。

デフォルトでは[リンク]が唯一のリンクグループですが、リンクグループを追加で作成することもできます。詳細は 470 ページの「リンクグループの作成」を参照してください。

- 管理コンソールの[ファイル]メニューから[新規]を選択し、[レポートからレポートへのリンク]を選択します。

図 69 に示すように、[リンクの名前と説明] ウィンドウが開きます。



図 69 [リンクの名前と説明] ウィンドウ

タスク 2: リンクの名前と説明を指定する

- 1 [名前] ボックスに、[リンク] カタログで表示されるこのリンクの名前を入力します。
- 2 [説明] ボックスに、このリンクの説明を入力します。説明は省略することも可能です。
- 3 [次へ] をクリックします。

後でこの情報を変更する場合は、[リンク] カタログでリンクを右クリックし、メニューから [プロパティ] を選択します。詳細は 497 ページの「[リンクのプロパティの表示および変更](#)」を参照してください。

タスク 3: カatalogマネージャでリンクの作成先とするリンクグループを選択する

図 70 は、[リンクグループの選択] ウィンドウを示しています。



このウィンドウは、管理コンソールの [ファイル] メニューから [レポートからレポートへのリンク] ウィザードを起動した場合にのみ表示されます。

このウィンドウが表示されない場合は、477 ページのタスク 4 に進みます。

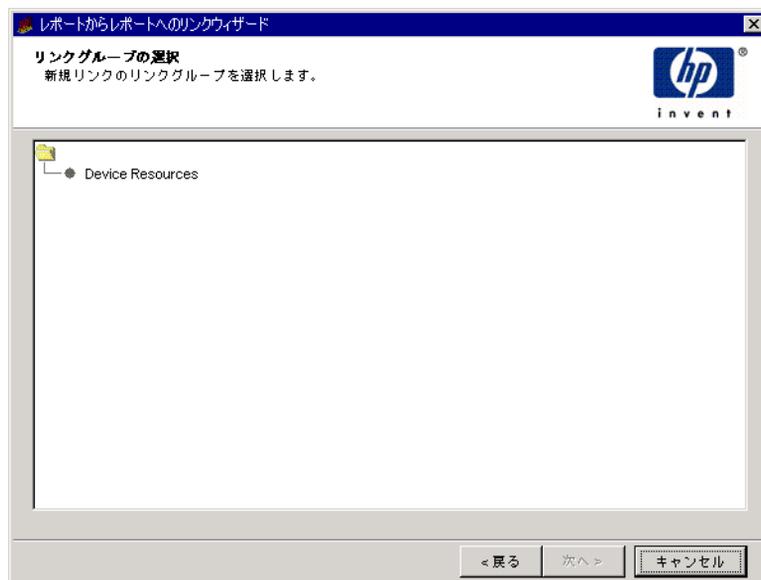


図 70 [リンクグループの選択]ウィンドウ

- 1 リンクの作成先とするフォルダーを選択します。
- 2 [次へ] をクリックします。

タスク 4: ソースレポートとリンク先レポートを指定する

図 71 は [ソースおよび宛先レポート] ウィンドウを示しています。

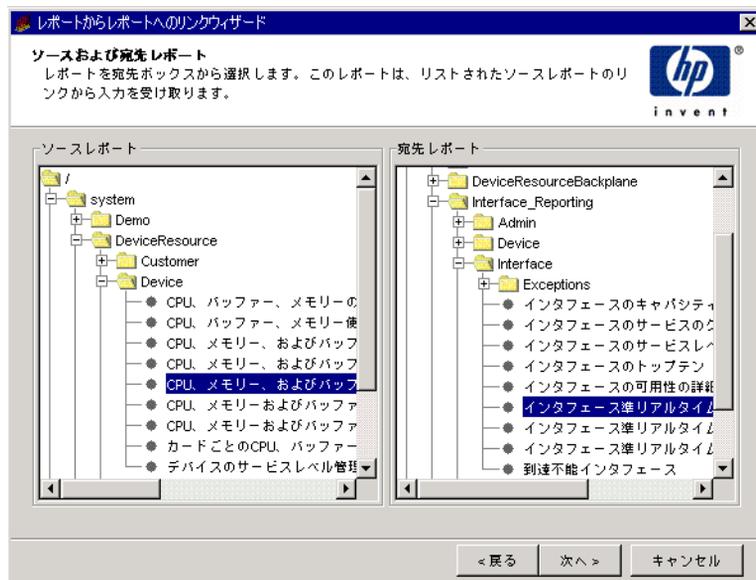


図 71 [ソースおよび宛先レポート] ウィンドウ



このウィンドウは、管理コンソールの [ファイル] メニューから [レポートからレポートへのリンク] ウィザードを起動した場合にのみ表示されます。

- 1 [ソースレポート] ボックスで、レポートリンクを含めるソースレポートを選択します。
- 2 [宛先レポート] ボックスで、ソースレポートのリンクによって開くレポートを選択します。
- 3 [次へ] をクリックします。

タスク 5: リンクインデックスを指定する

図 72 は [リンクインデックスの作成] ウィンドウを示しています。



図 72 [リンクインデックスの作成] ウィンドウ

リンクインデックスとは、ソースレポート内の、リンクのトリガー元となる場所であり、該当する場合はそこから情報がリンク先レポートに渡されます。

レポートからレポートへのリンクのインデックスは、以下のいずれかの方法で機能します。

- ソースレポート内の要素 (イメージやラベル) によってリンク先レポートへのリンクがトリガーされ、リンク先レポートが開きます。ただし、この場合は情報は渡されません。

たとえば、ソースレポートにある企業ロゴを選択した場合は、ユーザーがその企業ロゴをクリックするとリンク先レポートが開きます。

- ソースレポートの統計情報によって、リンク先レポートの選択したパラメータへのリンクがトリガーされます。さらに、統計情報が渡され、リンク先レポートに表示される情報に反映されます。

たとえば、準リアルタイム クイックビューレポートの [デバイス] 統計情報から準リアルタイムレポートの [デバイス] パラメータへのリンクインデックスを作成したと仮定します。この場合は、準リアルタイム クイックビュー

レポートでデバイスを選択すると、リンクによって準リアルタイムレポートが開き、選択したデバイスのすべてのインターフェースが準リアルタイムレポートに表示されます。

- 1 [ソース要素から]ボックスで、要素(イメージまたはラベル)または統計を選択します。

▶ イメージまたはラベルを選択した場合は、手順2を省略して[追加]をクリックします。ロゴを選択した場合は、ウィンドウの[リンクインデックス]ボックスに、たとえば[HP Logo (リンクインデックス)]のように表示されます。

- 2 [宛先パラメータへ]ボックスで、ソースレポート内の選択した統計から情報を受け取る、リンク先レポート内のパラメータを選択します。

▶ リンク先レポートにパラメータが存在しない場合は、[宛先パラメータへ]ボックスには何も表示されません。[次へ]ボタンも使用できない状態になるため、操作は続行できません。この場合は、[キャンセル]をクリックするか、[ソース要素から]ボックスでイメージまたはラベルを選択してください。

リンクを作成する前に、リンク先レポートにパラメータが存在するかどうかを確認するには、レポートビルダでレポートを開き、コンポーネントツリーの[パラメータ]フォルダーを展開します。レポートビルダとレポートパラメータの詳細は、『HP OpenView Performance Insight レポートの作成および表示ガイド』を参照してください。

- 3 [追加]をクリックします。

[要素リンク]ボックスにリンクが表示されます。リンクは、たとえば以下のように表示されます。

```
2:Device=Device (Link Index)
```

これは、ソースレポートのテーブル番号2のデバイス統計が、ソースレポートのデバイスパラメータにリンクされていることを示しています。したがって、リンクがトリガーされると、テーブルのデバイス統計が、リンク先レポートのデバイスパラメータに渡されます。

リンクインデックスは、複数作成できます。つまり、ソースレポート内の多数の要素からリンク先レポートへ、情報を渡すことができます。ただし、リンクインデックスとして機能できる要素は1つだけです。リンクインデックスとは、ソースレポート内の、リンクのトリガーする要素です。たとえば、

カスタマ名とカスタマ ID をリンク先レポートに渡すと仮定します。カスタマ名がリンクインデックスである場合は、ユーザーがカスタマ名をクリックしたときにリンクがトリガーされます。

- 4 必要に応じて、以下のいずれかを実行できます。
 - a リンクインデックスを削除するには、[リンクインデックス]ボックスでそのリンクインデックスを選択し **[削除]** をクリックします。
 - b リンクインデックスが複数ある場合に、キーリンクインデックスを変更するには、[リンクインデックス]ボックスでそのリンクインデックスを選択し **[選択]** をクリックします。
- 5 **[次へ]** をクリックします。

[概要] ウィンドウが開きます。



タスク 6: リンクのプロパティを確認する

ルールを作成するには **[完了]** をクリックします。

カタログマネージャの表示ペインにリンクがグラフィックで表示されます。また、[リンク] カタログで指定したフォルダーにもリンクが表示されます。

レポートからアプリケーションへのリンク

配布レポート（ソースレポート）内に、アプリケーションへのリンクを作成できます。ユーザーがソースレポートでリンクをクリックすると、リンクによって、指定したパラメータを使用してアプリケーションが起動します。

[配布済み項目] カタログに配布されたレポートを使用してレポート（ソースレポート）内にリンクを作成できます。すると、ソースレポートから選択した情報が取得され、その情報が指定したアプリケーションに渡されます。具体的には、ソースレポートから要素または統計を選択する場所としてリンクインデックスを作成します。このインデックスが、指定したアプリケーションへの入力になります。

たとえば、すべてのデバイスを一覧表示するレポートがあり、そのレポートで特定のデバイスを選択したときに **telnet** ユーティリティを実行してそのデバイスにログオンできるようにしたい場合は、レポートからアプリケーションへのリンクを使用すると便利です。

レポートからアプリケーションへのリンクを作成するには、以下の手順に従います。

タスク 1: [レポートからアプリケーションへのリンク] ウィザードを起動する

- 1 以下のいずれかを実行します。
 - [リンク] カタログでリンクグループを右クリックし、メニューから [新規レポートリンク]、[レポートからアプリケーションへの新規リンク] の順に選択します。デフォルトでは [リンク] が唯一のリンクグループですが、リンクグループを追加で作成することもできます。詳細は 470 ページの「リンクグループの作成」を参照してください。
 - 管理コンソールの [ファイル] メニューから [新規]、[レポートからアプリケーションへのリンク] の順に選択します。

[リンクの名前と説明] ウィンドウが開きます (475 ページの  69 を参照)。

タスク 2: リンクの名前と説明を指定する

- 1 [名前] ボックスに、[リンクカタログ] の [リンク] フォルダーで表示されるこのリンクの名前を入力します。
- 2 [説明] ボックスに、このリンクの説明を入力します。説明は省略することも可能です。

3 [次へ] をクリックします。

後でこの情報を変更する場合は、リンクを右クリックし、メニューから [プロパティ] を選択します。詳細は 497 ページの「リンクのプロパティの表示および変更」を参照してください。

タスク 3: リンクの作成先とするリンクグループを選択する

[リンクグループの選択] ウィンドウが開きます (476 ページの図 70 を参照)。

このウィンドウは、管理コンソールの [ファイル] メニューから [レポートからアプリケーションへのリンク] ウィザードを起動した場合にのみ表示されます (このウィンドウが表示されない場合は、482 ページのタスク 4 に進みます)。

- 1 リンクグループを選択します。
- 2 [次へ] をクリックします。

タスク 4: ソースレポートを指定する

図 73 は [レポートの指定] ウィンドウを示しています。

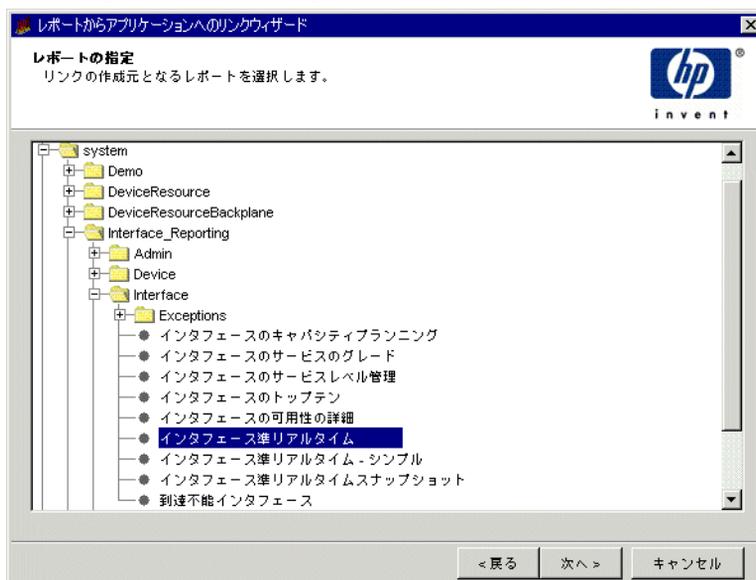


図 73 [レポートの指定] ウィンドウ

- 1 ソースレポートを選択します。

2 [次へ] をクリックします。

タスク 5: リンク項目を選択します。

図 74 は [リンク項目の選択] ウィンドウを示しています。



図 74 [リンク項目の選択] ウィンドウ

リンク先アプリケーションをトリガーする、ソースレポートの要素または統計を選択します。

- 1 ソースレポート内の要素または統計を選択します。
- 2 [次へ] をクリックします。

タスク 6: アプリケーションと引数を指定する

図 75 は [アプリケーションと静的引数を指定します] ウィンドウを示しています。

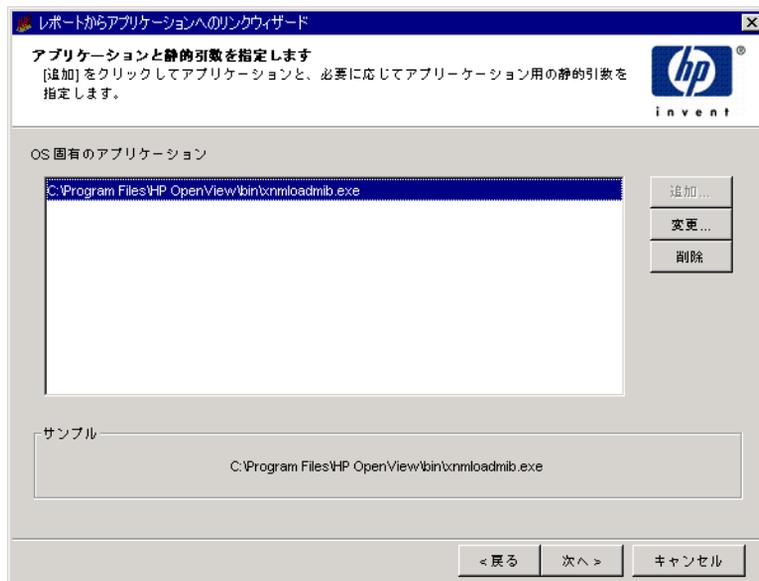


図 75 [アプリケーションと静的引数を指定します] ウィンドウ

- 1 [追加] ボタンをクリックして、アプリケーションを指定します。必要に応じて、アプリケーションの静的引数を入力します。

[アプリケーションのプロパティ] ボックスが開きます。



- 2 [オペレーティングシステム] ボックスで、アプリケーションを実行するオペレーティングシステムを選択します。
- 3 [アプリケーション] ボックスで、以下のいずれかを実行します。
 - アプリケーションの実行可能ファイルの場所を入力します。
 - [参照] ボタンをクリックすると [開く] ダイアログボックスが表示されます。アプリケーションの実行可能ファイルに移動し [開く] をクリックします。

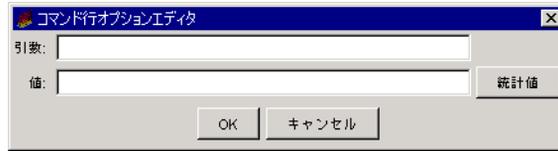


指定したアプリケーションは、レポートの表示に使用するクライアントアプリケーション (レポートビューアまたはレポートビルダ) が稼動しているシステム上にインストールされている必要があります。

- 4 アプリケーションの起動時に使用する引数または環境変数を指定するには、[アプリケーション引数] タブまたは [環境変数] タブをそれぞれクリックして、[追加] をクリックします。

これは省略可能です。たとえば、アプリケーションへのログオンに必要な引数があればここで指定します。

[コマンド行オプションエディタ] ダイアログボックスが開きます。



- a [引数] ボックスで引数を入力します。
- b 値を指定するには、以下のいずれかを実行します。
 - [値] ボックスに統計の値を入力します。
 - [統計値] をクリックして [要素または統計値の選択] ダイアログボックスを開きます。このダイアログボックスには、ソースレポートの要素および統計が表示されます。統計値を選択して [OK] をクリックします。

引数を変更するには、引数を選択して [変更] をクリックします。変更を加えたら、[OK] をクリックします。

引数を削除するには、引数を選択して [削除] をクリックします。変更を加えたら [OK] をクリックします。

- 5 [次へ] をクリックします。

タスク 7: リンクのプロパティを確認する

ルールを作成するには [完了] をクリックします。

カタログマネージャの表示ペインに、リンクがグラフィックで表示されます。また、[リンク] カタログにもリンクが表示されます。

482 ページの [図 73](#) は、カタログマネージャの [リンクカタログ] と表示ペインでの、リンクの表示例を示しています。

レポートから URL へのリンク

配布されたレポート (ソースレポート) 内に、URL へのリンクを作成できます。ユーザーがソースレポートでリンクをクリックすると、リンクによって、指定したパラメータ、統計、またはその両方を使用して URL が起動します。

たとえば、ProCurve Datapipe を使用して HP ProCurve スイッチを管理していると仮定します。この場合は、レポート内のノードから、ユーザーがスイッチにログオンするための URL へのリンクを作成できます。

レポートから URL へのリンクを作成するには、以下の手順に従います。

タスク 1: [レポートから URL へのリンク]ウィザードを起動する

[レポートから URL へのリンク]ウィザードは、以下の方法で起動できます。

- [リンク]カタログでリンクグループを右クリックし、メニューから[**新規レポートリンク**]、[**レポートから URL への新規リンク**]の順に選択します。
- [ファイル]メニューから[**新規**]、[**レポートから URL へのリンク**]の順に選択します。

[リンクの名前と説明]ウィンドウが開きます(475 ページの図 69 を参照)。

タスク 2: リンクの名前と説明を指定する

- 1 [名前]ボックスに、[リンクカタログ]の[リンク]フォルダーで表示されるこのリンクの名前を入力します。
- 2 [説明]ボックスに、このリンクの説明を入力します。説明は省略することも可能です。
- 3 [**次へ**]をクリックします。

後でこの情報を変更する場合は、リンクを右クリックし、メニューから[**プロパティ**]を選択します。詳細は「リンクプロパティの変更」を参照してください。

タスク 3: リンクの作成先とするリンクグループを選択する

[リンクグループの選択]ウィンドウが開きます(476 ページの図 70 を参照)。



このウィンドウは、カタログマネージャの[ファイル]メニューから[レポートから URL へのリンク]ウィザードを起動した場合にのみ表示されます。(このウィンドウが表示されない場合は、**タスク 4**に進みます)。

- 1 リンクグループを選択します。
- 2 [**次へ**]をクリックします。

タスク 4: ソースレポートを指定する

図 76 は [レポートの指定] ウィンドウを示しています。

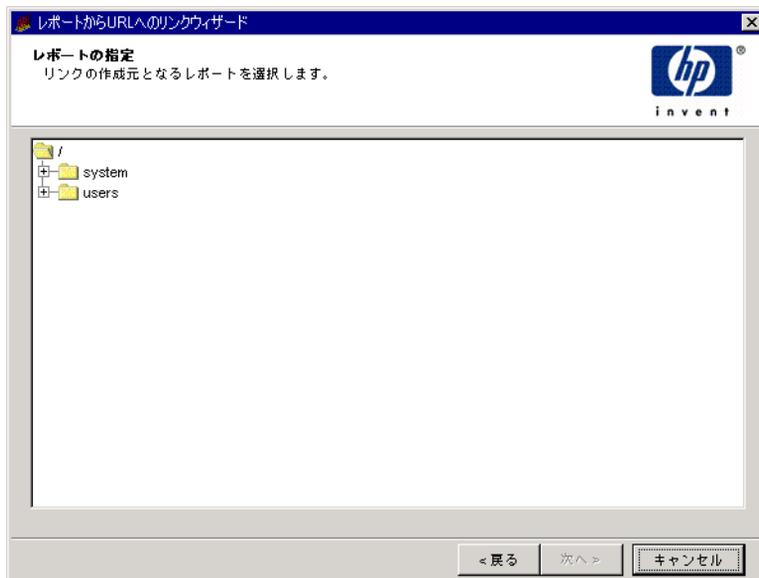


図 76 [レポートの指定] ウィンドウ

- 1 リンクを作成するレポートを見つけて選択します。
- 2 [次へ] をクリックします。

タスク 5: ソースレポート内の、リンクのトリガー元となる項目を指定する

図 77 は [リンク項目の選択] ウィンドウを示しています。

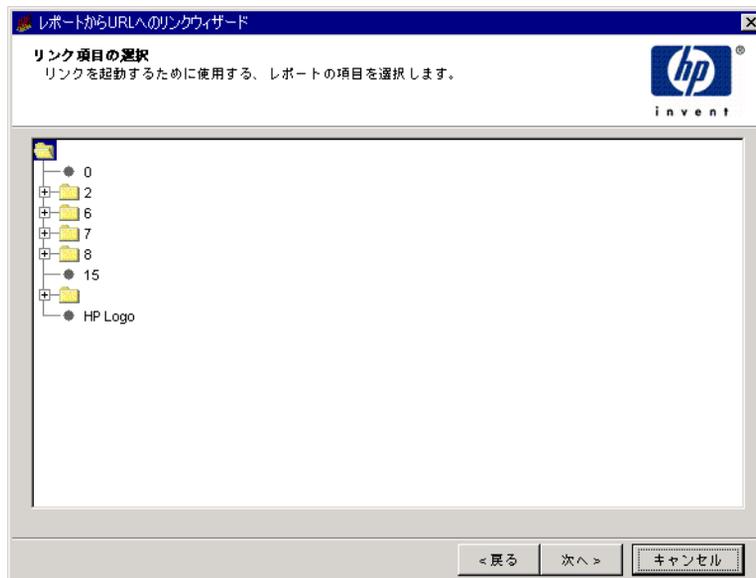


図 77 [リンク項目の選択] ウィンドウ

ソースレポート内の、リンクのトリガー元となる要素または統計を選択する必要があります (これをリンクアンカーと呼びます)。たとえば、ロゴなど要素を選択した場合は、ユーザーがレポートでロゴをクリックするとリンク先 URL が表示されるようにします。

- 1 ソースレポート内の要素または統計を選択します。
- 2 [次へ] をクリックします。

タスク 6: URL 情報を入力する

図 78 は [URL の追加] ウィンドウを示しています。

レポートからURLへのリンクウィザード

URL の追加
URLの作成に必要な情報を入力します。

この URL を相対URLとして作成:

プロトコル: http

ホスト: www.hp.com 統計値の使用

ポート(オプション): 統計値の使用

パス(オプション):

<戻る 次へ> キャンセル

図 78 【URL の追加】ウィンドウ

- 1 現在のサーバー上のページにリンクしたい場合は、[この URL を相対 URL として作成] チェックボックスをオンにします。

このオプションを選択すると、ウィンドウ内の [プロトコル]、[ホスト]、[ポート] ボックスが使用できなくなります。

- 2 [プロトコル] ボックスから、使用するプロトコル (http または https) を選択します。
- 3 以下のいずれかを実行します。

- [ホスト] ボックスに、リンク先の Web サーバーのホスト名を入力します。
- ソースレポート内の、ホスト情報の提供元となる統計を選択するには、[統計値の使用] をクリックします。

[要素または統計値の選択] ダイアログボックスが開いたら、統計を選択し [OK] をクリックします。

- 4 以下のいずれかを実行します。

- [ポート] ボックスにポートを入力します。
- ソースレポート内の、ポート情報の提供元となる統計を選択するには、**[統計値の使用]** をクリックします。

[要素または統計値の選択] ダイアログボックスが開いたら、統計を選択し **[OK]** をクリックします。



ホストまたはポートに統計を使用すると、[ホスト] ボックスと [ポート] ボックスには何も表示されませんが、**[URL の追加]** ウィンドウの下部に情報が表示されます。

- 5 [パス] ボックスにパスを入力します (必須ではありません)。

たとえば、レポートから別の Web アクセスサーバーシステムにあるレポートへのリンクを作成すると仮定します。この場合は、たとえば以下のようなパスを指定します。

/reports/webview

- 6 **[次へ]** をクリックします。

タスク 7: リンクインデックスを作成する

図 79 は [リンクインデックスの作成] ウィンドウを示しています。

レポートからURLへのリンクウィザード

リンクインデックスの作成

URL で使用されるパラメータを作成します。統計値を選択すると、実行時にその統計値の最新の値が使用されます。

パラメータ名

パラメータ値 統計値の使用

追加

現在のパラメータリンク

削除

< 戻る 次へ > キャンセル

図 79 [リンクインデックスの作成] ウィンドウ

URL を呼び出すときに使用するパラメータ (つまりリンクインデックス) を指定できます。これにより、ソースレポートからパラメータに情報が渡されます。リンクインデックスは必須ではありません。作成しない場合は [次へ] をクリックして続行します。リンクインデックスの作成例については、「リンクインデックスの作成」を参照してください。

- 1 [パラメータ名] ボックスに、URL を呼び出すときに使用するパラメータの名前を入力します。
- 2 以下のいずれかを実行します。
 - [パラメータ値] ボックスにパラメータ値を入力します。
 - [統計値の使用] ボタンの横にあるチェックボックスをオンにし、[統計値の選択] ボタンをクリックしてパラメータ値の統計を選択します。
- 3 [追加] をクリックしてリンクインデックスを作成します。[現在のパラメータリンク] ボックスに、リンクインデックスが表示されます。



リンクインデックスは、複数作成できます。つまり、ソースレポート内の多数の要素からリンク先 URL へ、情報を渡すことができます。

- 4 必要に応じて、リンクキーを削除する場合は、[現在のパラメータリンク] ボックスでそのリンクキーを選択し [削除] をクリックします。
- 5 [次へ] をクリックします。[概要] ウィンドウが開きます。

リンクインデックスの作成

たとえば、URL から別の Web アクセスサーバーシステム上のレポートを開きたいと仮定します。490 ページのタスク 6 ではホストとポートを指定しましたが、ここではレポートが存在する場所を指定するパラメータを設定します。デバイスの準リアルタイム スナップショットレポートを開いて、このレポートに表示する特定のデバイスを選択するには、以下の手順を実行します。

- 1 [パラメータ名] ボックスに、パラメータとして `rn` と入力します。
- 2 [パラメータ値] ボックスに、以下のように入力します。

```
system/DeviceResource/Device/Device_NearRealTime_Snapshot.rep
```
- 3 [追加] をクリックします。
- 4 [パラメータ名] ボックスに `p_Device` と入力します。

- 5 **[統計値の使用]** ボタンの横にあるチェックボックスをオンにし、**[統計値の使用]** ボタンをクリックします。
- 6 デバイスの統計 (たとえば [ターゲット名]) を選択し **[OK]** をクリックします。
- 7 **[追加]** をクリックします。

この時点で、**[リンクインデックスの作成]** ウィンドウの下部に、たとえば以下のような **URL** が表示されます。

```
http://ackcat:80/reports/webview?rn=/system/DeviceResource/Device/  
Device_NearRealTime_Snapshot.rep&p_Device=<Target Name&
```

タスク 8: リンクのプロパティを確認する

ルールを作成するには **[完了]** をクリックします。

カタログマネージャの表示ペインに、リンクがグラフィックで表示されます。また、**[リンク]** カタログにもリンクが表示されます。**[ファイル]** メニューから **リンクウィザード** を起動した場合は、リンクはウィザードの **[リンクグループの選択]** ウィンドウで指定したフォルダーに表示されます。**[リンクカタログ]** のフォルダーからウィザードを起動した場合は、リンクはそのフォルダーに表示されます。482 ページの  **73** は、カタログマネージャの **[リンクカタログ]** と表示ペインでの、リンクの表示例を示しています。

レポートリンクを開く

ソースレポートの表示に使用するアプリケーションと、リンクの作成に使用されている要素のタイプに応じて、リンクは以下のように表示されます。

- **Web** アクセスサーバー

リンクは **URL** のように扱われます (つまり、ブラウザで **URL** を表示するのと同じ方法で表示されます)。たとえば、**URL** を下線付きで表示するブラウザでは、レポート内のリンクも下線付きで表示されます。



レポートからアプリケーションへのリンクを、**Web** アクセスサーバーで開くことはできません。この種類のリンクを開くには、レポートビルダまたはレポートビューアを使用します。また、レポートにリンクされているアプリケーションを正常に起動するには、リンク先のアプリケーションが、レポートビルダまたはレポートビューアの実行元のシステムに存在する必要があります。

- レポートビルダおよびレポートビューアの場合

リンクの上にカーソルを置くと、カーソルが矢印から手の形に変わります。さらに、リンクに使用されている要素のタイプに応じて、次のように表示されます。

- レポートリンクが設定されている要素は、青い枠で囲まれます。
- ラベルおよびテーブル列の文字列には下線が付きます。

実際には、次の図のように表示されます。

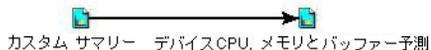
デバイスサマリー				
5月12日(月)14:00				
デバイス	ビジネ時間のCPU使用率	ビジネ時間のバッファ使用率	ビジネ時間のメモリー使用率	
<u>Cisco_02</u>	85.00	98.23	94.67	
<u>Cisco_03</u>	94.75	97.97	87.56	
<u>Cisco_04</u>	82.50	97.95	82.70	
<u>Cisco_01</u>	84.50	97.41	86.97	

青い枠
手の形のカーソル
下線付き文字列

リンクを開くには、レポート内のリンクをクリック (Web アクセスサーバーの場合) またはダブルクリック (レポートビルダおよびレポートビューアの場合) します。

表示ペインでのリンクの変更

[リンクカタログ] からリンクを選択すると、そのリンクがカタログマネージャの表示ペインにグラフィック表示されます。



リンクを修正するには、以下のいずれかを実行します。

- リンクの表示方法を変更する。

ナビゲーションペインを右クリックするか、ツールバーの  をクリックします。メニューから、以下のいずれかのオプションを選択します。

- [円環]: リンクを環状に並べます。

- [階層]: リンクを階層状に並べます。
- [組織]: リンクを組織的に並べます。
- [直交]: リンクを **90 度** (直角) に並べます。
- [ランダム]: リンクをランダムに並べます。
- [ツリー]: リンクをツリー状に並べます。
- リンク対象オブジェクト (レポート、**URL**、およびアプリケーション) を移動する。

オブジェクトをクリックします。ハンドルが表示されます。オブジェクトを新しい場所までドラッグします。
- リンクを変更する。

リンクされているオブジェクト同士を結ぶ矢印を選択すると、矢印が黄色で強調表示されます。右クリックします。以下のオプションを含むメニューが表示されます。

 - [編集]: 要素のリンクキーを表示および変更するには、このオプションを選択します。詳細は **497** ページの「[リンクのプロパティの表示および変更](#)」を参照してください。リンクの表示名、説明、またはその両方を変更するには、カタログでリンクを右クリックし、メニューから [**プロパティ**] を選択します。
 - [有効]: レポート内のリンクを無効にするには、このオプションを選択します。リンクはカタログ内に残りますが、機能はしなくなります。無効にしたリンクは、いつでも有効にできます。
 - [新規ブラウザで開く]: このオプションを選択すると、レポートを **Web** アクセスサーバーで表示したときに、リンク先 (レポートまたは **URL**) が新しいブラウザウィンドウで開くようになります。
 - [削除]: カタログからリンクを削除するには、このオプションを選択します。

リンクのコピー

リンクをコピーするには、以下の手順に従います。

- 1 [リンクカタログ] で、コピー元となるリンクを見つけます。

- 2 リンクを右クリックし、メニューから **[コピー]** を選択します。

[リンクのコピー] ダイアログボックスが開き、リンクのコピー先として指定できるリンクグループフォルダーが表示されます。



- 3 以下の手順に従います。
 - a [宛先リンクグループ] ボックスで、リンクのコピー先とするフォルダーを選択します。
 - b 必要に応じて、[新規リンク名] ボックスに、リンクの新しい名前を入力します。
 - c **[OK]** をクリックします。

リンクの移動

あるリンクグループから別のリンクグループへ、リンクを移動できます。

リンクを移動するには、以下の手順に従います。

- 1 カタログで、移動するリンクを見つけます。
- 2 リンクを右クリックし、メニューから **[移動]** を選択します。

[リンクの移動]ダイアログボックスが開き、リンクの移動先として指定できるリンクグループフォルダーが表示されます。



- 3 リンクの移動先とするフォルダーを選択し [OK] をクリックします。

リンクの削除

リンクカタログからリンクを削除するには、そのリンクを右クリックし、メニューから [削除] を選択します。確認のダイアログボックスが開き、リンクを削除してよいかどうかを尋ねられます。[はい] をクリックすると、リンクが削除されます。

リンクのプロパティの表示および変更

リンクのプロパティを表示または変更するには、以下の手順に従います。

- 1 ナビゲーションペインでリンクを右クリックし、メニューから [プロパティ] を選択します。

[レポートリンクのプロパティ] ダイアログボックスが開きます。



- 2 以下のものを表示および変更するには、[全般] タブをクリックします。
 - [表示名]: カタログでのリンクの表示名です。
 - [説明]: リンクの説明です(指定されていない場合もあります)。説明は省略することも可能です。
 - [リンクタイプ](レポート、URL、またはアプリケーション)
 - [ソース]
- 3 レポートから URL へのリンクの場合のみ: ソースレポート内の、リンクのトリガー元である要素または統計(リンクアンカー)を変更するには、[アンカー] タブをクリックします。このタブは、[レポートから URL へ] ウィザードの [リンク項目の選択] ウィンドウと同じものです。詳細は、[489 ページのタスク 5](#)を参照してください。
- 4 レポートから URL へのリンクの場合のみ: 任意の URL 情報を変更するには、[ベース] タブをクリックします。このタブは、[レポートから URL へのリンク] ウィザードの [URL の追加] ウィンドウと同じものです。詳細は、[490 ページのタスク 6](#)を参照してください。
- 5 [パラメータ] タブをクリックします。リンクパラメータの変更方法については、レポートリンクのタイプに応じて、以下の情報を参照してください。

- [レポート]: このタブは、[レポートからレポートへ] ウィザードの [リンクインデックスの作成] ウィンドウと同じものです。詳細は、[478 ページのタスク 5](#) を参照してください。
 - [アプリケーション]: このタブは、[レポートからアプリケーションへ] ウィザードの [リンクインデックスの作成] ウィンドウと同じものです。詳細は、[491 ページのタスク 7](#) を参照してください。
 - [URL]: このタブは、[レポートから URL へ] ウィザードの [リンクインデックスの作成] ウィンドウと同じものです。詳細は、[491 ページのタスク 7](#) を参照してください。
- 6 [適用] をクリックすると変更が適用されます。[OK] をクリックしてダイアログボックスを閉じます。

リンクのエクスポートとインポート

リンクグループ内のリンクをエクスポートおよびインポートできます。これは、以下のいずれかの場合に便利です。

- 作成したレポートパックにレポートリンクを含めたい場合。
レポートリンクを含めるには、install.pkg ファイルの **reportlink** 指令を使用します。install.pkg ファイルとその指令に関する詳細は、『**HP OpenView Performance Insight Reference Guide**』を参照してください。
- レポートリンクを、バックアップの目的で別のシステムに保存したい場合。
- Web アクセスサーバーシステムが複数あり、あるシステムからリンクをエクスポートし、それを別のシステムにインポートしたい場合。

リンクグループのエクスポート

リンクグループをエクスポートするには、以下の手順に従います。

- 1 [リンクカタログ] でリンクグループを右クリックします。
- 2 [ファイル] メニューから [エクスポート] を選択します。
[保存] ダイアログボックスが開きます。
- 3 以下の手順に従います。
 - a リンクファイルの保存先に移動します。

- b [ファイル名]ボックスに、リンクのファイル名(たとえば `deviceresources_links.tlg`)を入力します。
- c **[保存]**をクリックします。

リンクのインポート

リンクグループをインポートするには、以下の手順に従います。

- 1 [リンクカタログ]カタログで、リンクのインポート先となるリンクグループをクリックします。

リンクグループをインポートすると、このリンクグループのサブフォルダーとして表示されます。

- 2 [ファイル]メニューから**[インポート]**をクリックします。

[開く]ダイアログボックスが開きます。

- 3 以下の手順に従います。

- a `.tlg` ファイルのあるディレクトリに移動します。

- b ファイルを選択し、**[開く]**をクリックします。

リンクカタログの更新

リンクカタログ内のフォルダーを更新するには、フォルダーを右クリックし、メニューから**[更新]**を選択します。

15 Web アクセスサーバーの使用

この章では、Web アクセスサーバーの管理機能について説明します。これらの機能は、[管理]と[カタログ]のリンクを使用して利用できます。これらのリンクにアクセスするには、管理者権限を持つアカウントで Web アクセスサーバーにログオンする必要があります。

具体的には、この章では以下を行う方法を説明します。

- クライアントアプリケーション、つまり Web アクセスサーバー、レポートビューア、レポートビルダ、および管理コンソールに必要なユーザーアカウントを管理する。
- Web アクセスサーバー、OVPI システム属性、メールサーバー、および SSL(Secure Socket Layer) 通信を設定する。
- Web アクセスサーバーのログファイルを表示し、その外観を制御する。
- Web アクセスサーバー、レポートビルダ、およびレポートビューアのための Java 設定を制御する。
- レポート属性を設定する。
- レポートビューを作成する。
- Web アクセスサーバーの外観を制御する。
- [System] と [Users] フォルダーにレポートを配布する。
- サービスの設定を変更する。

Web アクセスサーバーへのアクセス

Web アクセスサーバーにアクセスする前に、以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- OVPI HTTP Server が動作している。動作していない場合は、80 ページの「OVPI のプロセスの開始および停止」を参照してください。
- 以下のいずれかの Web ブラウザがインストールされている。
 - Netscape Navigator 6.x 以降
 - Internet Explorer 5.x 以降

Web アクセスサーバーにアクセスするには、以下の手順に従います。

- 1 お使いの Web ブラウザを起動します。
- 2 ブラウザの [アドレス] または [場所] フィールドに以下の URL を入力し、[Enter] を押します。

`http://server_name.organization.type:port_number`

`server_name` は、Web アクセスサーバーの名前です。

`organization` は、ユーザーの組織の名前です。

`type` は、ドメインの種類 (たとえば com、org、net) です。

`port_number` は、デフォルトの Web アクセスサーバーのポート番号です。



Web アクセスサーバーがポート 80 を使用している場合は、ポート番号を入力する必要はありません。

ログオンページが開きます。



- 3 [ログオン] をクリックします。

[ネットワーク パスワードの入力] ダイアログボックスが開きます。



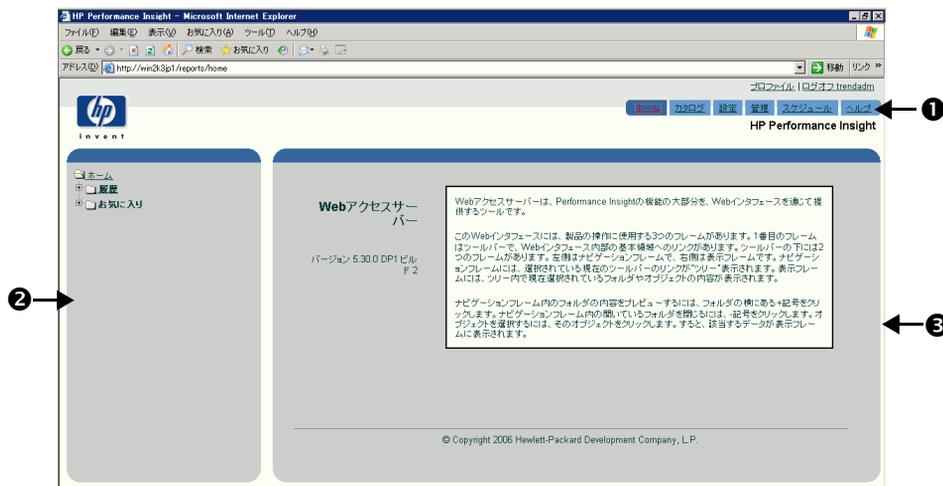
- 4 管理者のユーザー名とパスワードを入力し [OK] をクリックします

OVPI は、インストール時に、trendadm というデフォルトの管理者アカウントを作成します。このアカウントを使用するか、または、管理者権限を持つ別のアカウントがあればそれを使用します。

Web アクセスサーバーが開きます。

Web アクセスサーバーの概要

次の図は Web アクセスサーバーを示しています。



Web アクセスサーバーは、以下のコンポーネントで構成されています。

- リンクバー (1)

リンクバーは次のリンクで構成されます。[ホーム]、[カタログ]、[設定]、[管理]、[スケジュール]、および[ヘルプ]。管理機能を実行できるリンクを以下に示します。

- [カタログ] リンクにより、Web サーバーの、[System] と [Users] の両方のフォルダーにレポートを配布でき、また Web サーバーに配布されているレポートを表示できます。
- [管理] リンクにより、ユーザーとユーザーグループのアカウントの管理、サービスの設定、ログファイルの表示、Java と配布項目の設定の変更、および Web アクセスサーバーの外観の制御ができます。

非管理者ユーザーが利用可能なリンクの詳細は、『HP OpenView Performance Insight レポートの作成および表示ガイド』を参照してください。

- ナビゲーションフレーム (2)

標準的なツリー構造を使用して、各機能に関連付けられたフォルダーにアクセスできます。

- 結果フレーム (3)

ナビゲーションフレームで選択されているフォルダーの内容またはレポートを表示します。

[管理] リンク

[管理] リンクを使用して、クライアントアプリケーションのアカウントを管理し、サービス、ログファイル、**Java**、および配布項目の設定を変更します。

[管理] リンクのナビゲーションツリーは、以下のように表示されます。

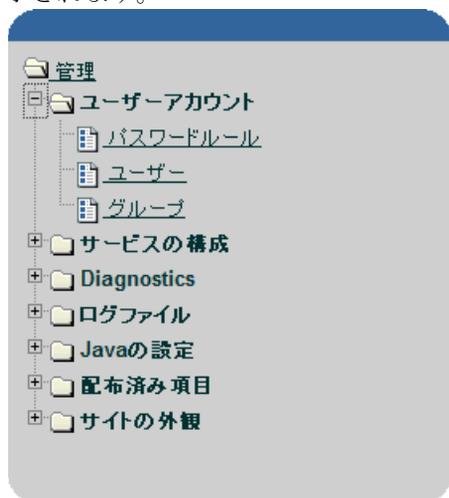


このツリーの中には、[ユーザーアカウント]、[サービスの構成]、[Diagnostics]、[ログファイル]、[Java の設定]、[配布済み項目]、および[サイトの外観]というフォルダーがあります。

[ユーザーアカウント]

このフォルダーを使用して、ユーザーアカウントの作成、変更、削除を行い、またパスワード規則の設定を行います。これらのアカウントは、クライアントアプリケーション (**Web** アクセスサーバー、管理コンソール、レポートビューア、およびレポートビルダ) へのログオンに使用されます。

[ユーザーアカウント]フォルダーのナビゲーションツリーは、以下のように表示されます。



[ユーザーアカウント]フォルダーを使用して作成するユーザーアカウントは、ユーザーがOVPIのクライアントアプリケーション(管理コンソール、Webアクセスサーバー、レポートビルダ、およびレポートビューア)にアクセスできるようにするためのアカウントです。

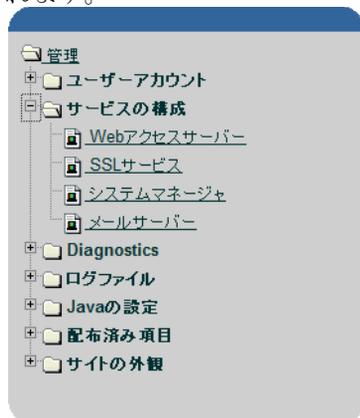
[ユーザーアカウント]フォルダーには、以下が含まれています。

- [パスワードルール] ページ
このページを使用して、ユーザーアカウント用に作成するパスワードのパスワード有効期限ルールを設定します。詳細は、517 ページの「[パスワードの有効期限ルールの設定](#)」を参照してください。
- [ユーザー] フォルダー
このフォルダーを使用して、デフォルトのユーザーアカウント (trendadm) を含むユーザーアカウントを作成、変更、または削除します。詳細は、516 ページの「[ユーザーアカウントの管理](#)」を参照してください。
- [グループ] フォルダー
このフォルダーを使用してユーザーアカウントのグループを作成、変更、または削除します。詳細は、525 ページの「[ユーザーグループの管理](#)」を参照してください。

[サービスの構成]

このフォルダーを使用して、OVPI をインストールした Web アクセスサーバーとシステムの設定の変更、SSL (Secure Socket Layer) 通信のセットアップ、およびレポートリンクをメール送信するための属性の指定を行います。

[サービスの構成] フォルダーのナビゲーションツリーは、以下のように表示されます。



[サービスの構成] フォルダーには、以下が含まれています。

- [Web アクセスサーバー] ページ

このページを使用して Web アクセスサーバーの現在の設定を変更します。Web アクセスサーバーは、OVPI クライアントによる OVPI データベースへのアクセスを制御します。詳細は、557 ページの「[Web アクセスサーバー設定の変更](#)」を参照してください。

- [SSL サービス] ページ

このページを使用して、Web アクセスサーバーとサポートされている Web ブラウザとの間での SSL(Secure Socket Layer) 通信を有効にします。詳細は、562 ページの「[SSL サービス設定の変更](#)」を参照してください。

- [システムマネージャ] ページ

このページを使用してシステムマネージャの現在の設定を変更します。システムマネージャは、すべての Web アクセスサーバーとデータベースのリストを管理します。詳細は、567 ページの「[システムマネージャの設定の変更](#)」を参照してください。

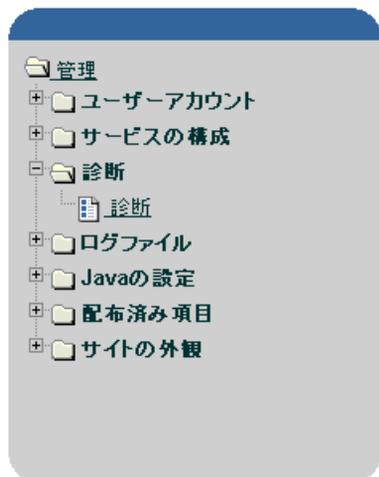
- [メールサーバー] ページ

このページを使用して、レポートリンクをメール送信するための属性を指定します。詳細は、576 ページの「[メールサーバーの設定の変更](#)」を参照してください。

[診断]

このフォルダーを使用して、Web アクセスサーバーに関する Java とオペレーティングシステムの情報と、データベース接続に関する情報を表示します。

[診断] フォルダーのナビゲーションツリーは、以下のように表示されます。



[診断] フォルダーには、以下が含まれています。

- [診断] ページ

Web アクセスサーバーとデータベースに関する以下の情報を表示できます。

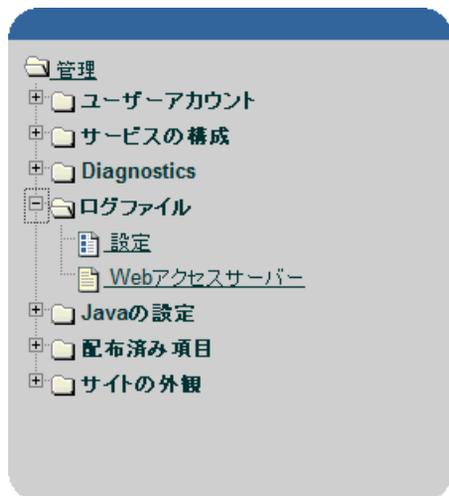
- Web アクセスサーバー。Java のバージョン、Java のベンダー、Java のベンダーの URL、およびオペレーティングシステムのアーキテクチャと名前とバージョン番号を表示できます。
- データベース。名前、接続の最大数、接続ステータス、および現在の接続数を表示できます。

詳細は、535 ページの「[診断の表示](#)」を参照してください。

[ログファイル]

このフォルダーを使用して、**Web** アクセスサーバーのログファイルにアクセスします。

[ログファイル] フォルダのナビゲーションツリーは、以下のように表示されます。



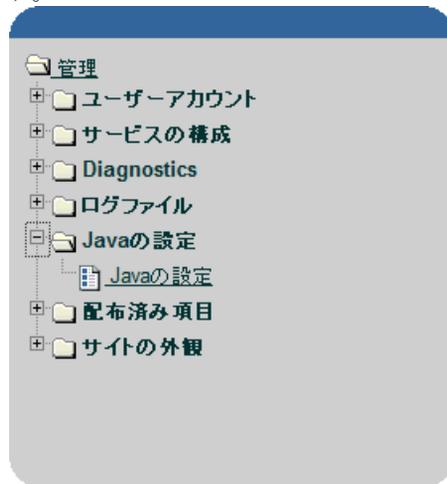
[ログファイル] フォルダには、以下が含まれています。

- [設定] ページ
ページに表示されるログファイルのエントリーの数、およびログファイルのフレームの背景色を設定できます。詳細は、[536 ページの「ログファイルの設定の変更」](#)を参照してください。
- [Web アクセスサーバー] ページ
Web アクセスサーバーのログファイルを表示できます。このログファイルには、サーバーに関するすべての情報、警告、エラー、およびデバッグの各メッセージが記載されています。詳細は、[538 ページの「ログファイルの表示」](#)を参照してください。

[Java の設定]

このフォルダーを使用して、レポートビルダ、レポートビューア、および **Web** アクセスサーバーのサービスに関する **Java** 設定を変更します。

[Java の設定] フォルダのナビゲーションツリーは、以下のように表示されます。



これには以下が含まれています。[Java の設定] ページ。このページにより、ヒープのサイズと引数を変更できます。詳細は、539 ページの「[Java 設定の変更](#)」を参照してください。

[配布済み項目]

このフォルダーを使用して、配布項目 (レポートと URL) の設定を変更し、カタログビューをセットアップします。[配布済み項目] フォルダーのナビゲーションツリーは、以下のように表示されます。



これには以下が含まれています。

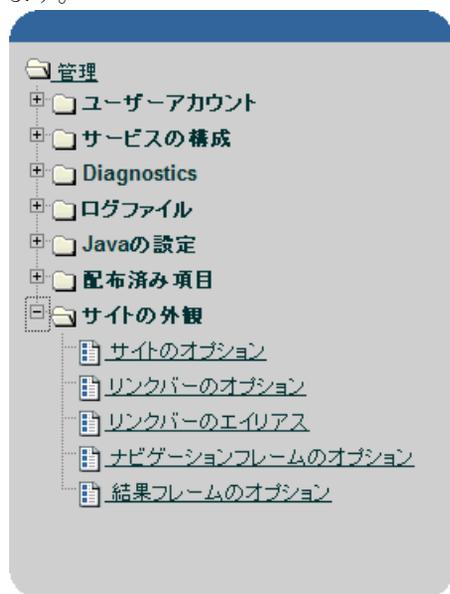
- [配布済み項目] ページ

このページによりレポートと URL の属性を設定できます。詳細は 541 ページの「[配布項目の設定の変更](#)」を参照してください。

- [カタログビューマネージャ] ページ

このページにより、ビューを作成できます。ビューを使用すると、ユーザーは、[System] フォルダー内の配布されたレポートの特定のリストを確認できます。詳細は、544 ページの「[ビューの作成](#)」を参照してください。

[サイトの外観] フォルダのナビゲーションツリーは、以下のように表示されます。



[サイトの外観] フォルダには、以下が含まれています。

- [サイトのオプション] ページ
Web ブラウザのタイトルバーに表示されるタイトルを変更できます。詳細は、548 ページの「[サイトのオプションの変更](#)」を参照してください。
- [リンクバーのオプション] ページ
多数あるリンクバーのオプションを変更できます。これらのオプションとして、リンクバーのタイトル、位置揃え、高さ、色、イメージの大きさと位置、フォーカスの色などがあります。詳細は、548 ページの「[リンクバーのオプションの変更](#)」を参照してください。
- [リンクバーのエイリアス] ページ
任意のリンクの表示 / 非表示を切り替えたり、その名前を変更したりできます。詳細は 551 ページの「[リンクバーの別名の変更](#)」を参照してください。
- [ナビゲーションフレームのオプション] ページ

ナビゲーションフレームの幅、背景色、および背景イメージを変更できます。詳細は、553 ページの「[ナビゲーションフレームのオプションの変更](#)」を参照してください。

- **[結果フレームのオプション]** ページ

結果フレームの余白の色と背景色を変更できます。詳細は、554 ページの「[結果フレームのオプションの変更](#)」を参照してください。

[カタログ] リンク

このリンクを使用して、Web サーバーにレポートを配布し、また [System] および [Users] フォルダーに配布されているレポートを表示することができます。

[カタログ] リンクのナビゲーションツリーは、以下のように表示されます。



[カタログ] リンクには、以下のページとフォルダーが含まれています。

- **[新規レポートの配布]** ページ

Web アクセスサーバーにレポートを配布できます。配布すると Web アクセスサーバーを使用してレポートを表示できるようになります。つまり、レポートを表示するには、レポートを配布する必要があるということです。これらのレポートは、レポートビルダまたはレポートビューアの、[ファイル] メニューの [ブラウザ] オプションを使用しても表示できます。詳細は、555 ページの「[レポートの配布](#)」を参照してください。

- **[URL の配布]** ページ

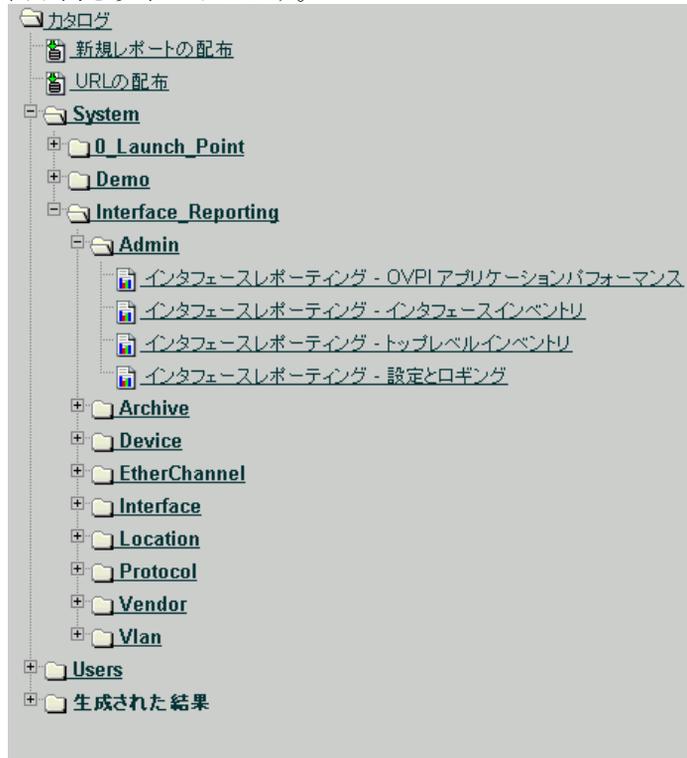
Web アクセスサーバーのカタログに URL を配布します。これによって頻繁に使用する Web サイトにすばやくアクセスできるようになります。たとえば、会社に複数の Web アクセスサーバーシステムが配備されている場合、そのうちの 1 台に格納されていて頻繁に表示する特定のレポートを表示するために、URL を配布することができます。

URL を選択すると、Web アクセスサーバーの設定内容に応じて、現在のブラウザウィンドウまたは新しいブラウザウィンドウに、指定された Web サイトが表示されます。この機能の使用の詳細については、『HP OpenView Performance Insight レポートの作成および表示ガイド』を参照してください。

- [System] フォルダー

すべてのユーザーが [System] フォルダーに配布されたレポートにアクセスできます。しかし、[システムディレクトリをユーザーに表示] オプションが選択されていない場合、またはこのフォルダー内のレポートがユーザーのカタログビューにない場合は、レポートを表示することはできません。OVPI の管理者だけがこのフォルダーにレポートを配布できます。

レポートを [System] フォルダに配布したときのナビゲーションペインの表示例を以下に示します。



- [Users] フォルダ

このフォルダは、ユーザーまたは OVPI の管理者によって Web アクセスサーバーにレポートが配布された後に表示されます。ユーザーまたは管理者がレポートを配布すれば、そのレポートはそのユーザーのフォルダに表示されます。ユーザー（および管理者）だけが、そのフォルダの配布されたレポートにアクセスできます。

キャパシティプランニングレポートを **ncanfield** というユーザーのフォルダーに配布したときのナビゲーションペインの表示例を以下に示します。



- [生成された結果] フォルダー

このフォルダーは、生成されたレポートの結果を表示します。このフォルダーの内容は、[スケジュール] リンクをクリックしたときに表示される [結果] フォルダーの内容と同じです。

ユーザーアカウントの管理

どの OVPI クライアント (レポートビルダ、レポートビューア、Web アクセスサーバー、および管理コンソール) においても、ユーザーはログオンする必要があります。

OVPI をインストールする際に、デフォルトのユーザーアカウントを 1 つ作成します。アカウント名は、**trendadm** で、パスワードは **trendadm** です。理想は、OVPI クライアントアプリケーションを使用する各人についてユーザーアカウントを作成することです。

この項では、以下を行う方法を説明します。

- ユーザーアカウント用のパスワードの有効期限ルールを設定する。
- ユーザーアカウントを作成、変更、および削除する。
- ユーザー役割または管理者役割をユーザーに割り当てる。

あるいは、この項で説明するタスクのほとんどは、`userimport` と `groupimport` というコマンドを使用して実行することもできます。これらのユーティリティの詳細については、『**HP OpenView Performance Insight Reference Guide**』を参照してください。



この項に記載した手順では、ユーザーが、デフォルトの **OVPI** 管理者のユーザーアカウントまたは **OVPI** の管理者権限を持つユーザーアカウントを使用して **Web** アクセスサーバーにログオンしていることを想定しています。

パスワードの有効期限ルールの設定

ユーザーアカウントのパスワードの有効期限ルールを設定できます。
パスワードの有効期限ルールを設定するには、以下の手順に従います。

- 1 リンクバーから、[**管理**] を選択します。
- 2 [**管理**] ツリーで、[**ユーザーアカウント**] を展開し、次に [**パスワードルール**] をクリックします。

[**パスワードルール**] ページが開きます。

パスワードルール

アカウントパスワードが従うべき条件を変更するには、以下のルールを有効または無効にします。

<input type="checkbox"/> パスワードの長さは次の文字数以上である	<input type="text" value="4"/>
<input type="checkbox"/> アカウント名の循環シフトをパスワードにすることはできない	
<input type="checkbox"/> パスワードに次の個数以上の数字を含める	<input type="text" value="1"/>
<input type="checkbox"/> パスワードに次の個数以上の記号文字を含める	<input type="text" value="1"/>
<input type="checkbox"/> 過去 n 回以内と同じパスワードは使用できない	<input type="text" value="3"/>
<input type="checkbox"/> ユーザーは、パスワード失効後 n 日間ログインを継続できる	<input type="text" value="10"/>

適用

- 3 以下のいずれかを実行します。
 - a 最小パスワード長を設定するには、[**パスワードの長さは次の文字数以上である**] チェックボックスをオンにし値を入力します (入力できる最大値は **9999** です)。

この規則を無効にするには、**[パスワードの長さは次の文字数以上である]** チェックボックスをオフにします。

- b アカウント名で使用する文字列を、循環させたパスワードにならないように設定するには、**[アカウント名の循環シフトをパスワードにすることはできない]** チェックボックスをオンにします。

たとえば、アカウント名が caesar である場合、以下のいずれもこのアカウントのパスワードにはなれません。すなわち、caesar、aesarc、esarca、sarcae、arcaes、rcaesa。

この規則を無効にするには、**[アカウント名の循環シフトをパスワードにすることはできない]** チェックボックスをオフにします。

- c パスワードに規定の数の数字を含むように設定するには、**[パスワードに次の個数以上の数字を含める]** チェックボックスをオンにし値を入力します(入力できる最大値は 9999 です)。

この規則を無効にするには、**[パスワードに次の個数以上の数字を含める]** チェックボックスをオフにします。

- d パスワードに規定の数の句読文字を含むように設定するには、**[パスワードに次の個数以上の記号文字を含める]** チェックボックスをオンにし値を入力します(入力できる最大値は 9999 です)。

この規則を無効にするには、**[パスワードに次の個数以上の記号文字を含める]** チェックボックスをオフにします。

- e 異なったパスワードを規定の回数以上、使用しなければ、同じパスワードを再使用できないように設定するには、**[過去 n 回以内と同じパスワードは使用できない]** チェックボックスをオンにし値を入力します。(入力できる最大値は 9999 です)。

たとえば、現在のパスワードが caesar であり、このオプションが 3 に設定されていると仮定します。このパスワードの期限が切れたとき、パスワードとして再び caesar を使用できるようになるには、別の 3 つのパスワードをそのときまでに使用しなければなりません。

この規則を無効にするには、**[過去 n 回以内と同じパスワードは使用できない]** チェックボックスをオフにします。

- f 期限切れ後もパスワードを使用できる日数を指定するには、**[ユーザーは、パスワード失効後 n 日間ログインを継続できる]** チェックボックスをオンにし日数を入力します(入力できる最大値は 9999 です)。

この規則を無効にするには、[ユーザーは、パスワード失効後 n 日間ログインを継続できる] チェックボックスをオフにします。

- 4 [適用] をクリックして変更を適用します。

▶ 変更内容は現在のパスワードには適用されません。パスワードの規則は、ユーザーがパスワードの変更を要求されたときに適用されます。

ユーザーアカウントの作成

ユーザーアカウントを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 リンクバーから、[管理] を選択します。
- 2 [管理] ツリーで、[ユーザーアカウント] を展開し、次に [ユーザー] をクリックします。[ユーザーの管理] ページが開き、現在のユーザーアカウントが表示されます。

ユーザーの管理

ユーザー名	実名	会社/部署	電子メール	電話番号	変更/削除
trendadm	unknown	not available	not available	not available	

[ユーザーの追加](#)

- 3 [ユーザーの追加] をクリックします。[ユーザーの追加] ページが開きます。

- 4 以下の制約に注意しながら、すべてのボックスに必要な情報を入力します。以下の文字をこのページの各フィールドで**使用しない**でください。アンパサンド (&)、円記号 (\)、カンマ (,)、二重引用符 (“)、スラッシュ (/)、疑問符 (?)、パーセント (%)、および単一引用符 (') です。

有効な入力は以下のとおりです。

- すべての英字 (大文字と小文字)、すべての数字、および、上記のものを除くすべての特殊文字。
- ユーザー名は、1 文字以上、最大 255 文字まで入力できます。英数字、スペース (空白)、アンダースコア (_)、およびハイフン (-) だけを使用できます。
- ユーザーの実名と会社 / 部門は、最小 0 文字 (したがって空欄にできます)、最大 255 文字までです。

- パスワードは、最小 4 文字、最大 255 文字まで入力できます。スペース（空白）は使用できません。
 - 電話番号のフォーマットは自由ですが、255 文字を超えることはできません。
 - 電子メールアドレスのフォーマットは自由ですが、255 文字を超えることはできません。
- 5 ユーザーに管理者役割を与える場合にのみ [**管理者である**] チェックボックスをオンにします。このオプションを選択しない場合、アカウントには自動的にユーザー役割が与えられます。
 - 6 ユーザーグループを選択するには、以下のいずれかを実行します。
 - ユーザーを 1 つのユーザーグループに割り当てるには、[**グループ**] ボックスでそのユーザーグループ名を選択します。
 - ユーザーを複数のユーザーグループに割り当てるには、[**Ctrl**] キーを押したまま残りのユーザーグループ名を選択します。
 - ユーザーをどのユーザーグループにも割り当てない場合は、[**グループなし**] を選択します。
 - 7 [**データベース**] リストで、ユーザーがアクセスするデータベースを選択します。現在のリストに別のデータベースを追加する方法の詳細は、567 ページの「**システムマネージャの設定の変更**」を参照してください。
 - 8 [**ビュー**] リストで、ユーザーが使うビューを選択します。ビューの作成方法の詳細は、544 ページの「**ビューの作成**」を参照してください。
 - 9 ユーザーアカウントのパスワードの期限を設定するには、以下のいずれかを実行します。
 - [**無期限**] オプションをクリックします。このアカウントのパスワードは無期限になります。
 - [**パスワードの期限切れ**] オプションの日数を選択し、入力することで、パスワードの期限を設定します。

パスワードの期限が切れると、アカウントのパスワードの期限が切れたことを通知するページが表示され、そのアカウントのパスワードを変更するオプションが表示されます。

このオプションに加えて、以下を実行できます。

- パスワードの有効期限ルールをセットアップします。たとえば、パスワードの猶予期間を設定できます。このオプションにより、アカウントのパスワードの期限が切れた後も、指定回数だけそのアカウントにログインできます。この猶予期間が経過すると、そのアカウントはロックされます（使用不能になります）。詳細は、517 ページの「[パスワードの有効期限ルールの設定](#)」を参照してください。
 - ユーザーに許されるログイン試行の失敗回数を指定します。この回数だけ失敗するとアカウントはロックされます。詳細は、557 ページの「[Web アクセスサーバー設定の変更](#)」を参照してください。
- 10 ユーザーアカウントをロックまたはロック解除するには、以下のいずれかを実行します。
- ユーザーアカウントをロックするには、[[ユーザーのログインを許可しない](#)] チェックボックスをオンにします。
 - ユーザーアカウントをロック解除するには、[[ユーザーのログインを許可しない](#)] チェックボックスをオフにします。

アカウントのロックが実施されるのは、ユーザーがアプリケーションにログインしたときです。したがって、ユーザーがログインしているときにそのアカウントをロックした場合、そのユーザーは次回にログインするまでは、自分のアカウントがロックされたことを知ることはできません。

アカウントがロックされているのにユーザーがログインしようとする、そのアカウントがロックされていることと、ユーザーが管理者に連絡する必要があることを通知するページが表示されます（アカウントのロックを解除できるのは管理者だけです）。

- 11 [[適用](#)] をクリックします。
- 12 [[OK](#)] をクリックして新しいユーザーアカウントを確定します。

新しいユーザーアカウントを確定すると、[[ユーザーの管理](#)] ページに新しいユーザーアカウントの情報が表示されます。ユーザーアカウントはナビゲーションツリーにも表示できます。

ユーザーアカウントの変更

ユーザーアカウントを変更するには、以下の手順に従います。

- 1 リンクバーから、[[管理](#)] を選択します。

- 2 [管理] ツリーで、[ユーザー アカウント] を展開し、次に [ユーザー] をクリックします。[ユーザーの管理] ページが開き、ユーザーアカウントが表示されます。



- 3 以下のいずれかを実行します。
 - [ユーザーの管理] ページでユーザーアカウントをクリックします。
 - 変更するユーザーアカウントの横にある [編集] アイコン () をクリックします。

[ユーザー名の編集] ページが表示されます。

- 4 変更を加えた後、[適用] をクリックします。
- 5 [OK] をクリックして変更を確定します。

変更を確定すると、更新されたユーザーアカウントの情報が [ユーザーの管理] ページに表示されます。

ユーザーアカウントの削除

ユーザーアカウントを削除するには、以下の手順に従います。

- 1 リンクバーから、[管理] を選択します。

- 2 [管理] ツリーで、[ユーザーアカウント] を展開し、次に [ユーザー] をクリックします。[ユーザーの管理] ページが開き、ユーザーアカウントのリストが表示されます。



- 3 削除したいユーザーの横にある  (削除アイコン) をクリックします。確認ダイアログボックスが表示されます。
- 4 [OK] をクリックします。

ユーザーアカウントに電子メールを送信

Web ブラウザ内からユーザーに電子メールを送信できます。電子メールを送信するには、電子メールのプログラムをシステムにインストールしておく必要があります。

電子メールをユーザーアカウントに送信するには、以下の手順に従います。

- 1 リンクバーから、[管理] を選択します。
- 2 [管理] ツリーで、[ユーザーアカウント] を展開し、次に [ユーザー] をクリックします。[ユーザーの管理] ページが開き、ユーザーアカウントが一覧表示されます。
- 3 ユーザーアカウントの電子メールアドレスをクリックします。電子メールのアプリケーションが表示され、指定のユーザーに向けたメールメッセージが表示されます。
- 4 メールメッセージを完成させ、これを送信します。

ユーザーグループの管理

この項では、Web アクセスサーバーを使用して以下を実行する方法について説明します。

- ユーザーグループを作成、変更、および削除する。
- ユーザーグループのフィルターを作成、変更、および削除する。



この項に記載した手順では、ユーザーが OVPI 管理者として Web アクセスサーバーにログオンしていることを想定しています。

この項で説明する手順のほとんどは、**userimport** と **groupimport** というコマンドを使用して実行することもできます。詳細については、『HP OpenView Performance Insight Reference Guide』のアカウント管理者ユーティリティに関する章を参照してください。

ユーザーグループとは

ユーザーグループとは以下のものを指します。

- ユーザーアカウントの集まり

たとえば、**Thunderbolt** 社という会社のすべてのユーザー用に、**Thunderbolt** というユーザーグループを作成することができます。これは、サービスプロバイダにおいて、特定の会社の表示できるデータを制限する場合に便利です。

- ユーザーアカウントとユーザーグループとの集まり

たとえば、**All** というユーザーグループを作成し、その中にいくつかのユーザーアカウントと、**North**、**East**、**South**、**West** という 4 つのユーザーグループを含めることができます。

North、**East**、**South**、**West** の各ユーザーグループに制約を設定することで、それらのユーザーが特定の地域のデータしか表示できないようにすることが可能です。

All ユーザーグループのユーザーは、**North**、**East**、**South**、および **West** の各ユーザーグループのユーザーが表示できるデータをすべて表示できます。なぜなら、最上位のグループには、階層内の下位のグループの制約が継承されるからです。

グループを作成する際は、想定されるグループ数が少なくなるように、グループの制約を効果的に作成するよう心掛けることをお勧めします。たとえば、interface を制約として使用し各インタフェースに 1000 以上のユーザーグループを持たせるのではなく、cust-id を制約として使用します。グループの数が多いと、データベースに送られるクエリの効率やサイズに影響することがあります。

▶ レポートがあり、1 人のユーザーしかそのレポートを表示する必要がない場合は、ユーザーフォルダーの下位にあるそのユーザーのレポートディレクトリにレポートを配布します。詳細は、555 ページの「[レポートの配布](#)」を参照してください。

ユーザーグループの作成

グループを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 リンクバーから、[管理] を選択します。
- 2 [管理] ツリーで、[ユーザーアカウント] を展開し、次に [グループ] をクリックします。[グループの管理] ページが開きます。



グループの管理

Groups の内容

グループ

グループ名	メンバー数	変更/削除
グループが見つかりません		

ユーザー

ユーザー名	ユーザーの変更
trendadm	
ncanfield	

[グループの追加](#)

- 3 [グループの追加] をクリックします。[グループの追加] ページが開きます。

- 4 新しいユーザーグループを作成するには、以下の手順に従います。
- α [グループ] ボックスで、作成するユーザーグループの名前を入力します。

▶ すでに存在するグループ名を入力したり、"Group" という名前を使用したりしないでください。

ユーザーグループ名は、以下の制約に従う必要があります。

以下の文字をユーザーグループ名で**使用しない**でください。

アンパサンド (&)、アスタリスク (*)、円記号 (\)、コロン (:)、カンマ (,)、二重引用符 (")、感嘆符 (!)、スラッシュ (/)、大なり記号 (>)、開き角かっこ (()、小なり記号 (<)、ピリオド (.)、シャープ記号 (#)、疑問符 (?)、閉じ角かっこ ()、単一引用符 (')、パーセント (%)、スペース (空白)

ユーザーグループに対して有効な文字は以下のとおりです。

- 名前には、すべての英字 (大文字と小文字)、すべての数字、および、上記のものを除くすべての特殊文字を、含めることができます。
- 1 文字以上、最大は **255** 文字です。

- b この新しいユーザーグループに属するユーザーおよびユーザーグループを（いずれも 1 つまたは複数）を [使用可能なユーザー/グループ] リストから選択し、[追加] をクリックします。グループは他のグループに属していてもかまいません。

ユーザー名、ユーザーグループ名、またはその両方が、[メンバー] リストに移動します。

- c [次へ] をクリックします。[グループフィルター] ページが開きます。

グループフィルター: NE_Reporting

アクティブなフィルター

編集

削除

列: オペレータ: 値:

フィルタの追加

完了 キャンセル



フィルターは、テーブル列名、数値演算子、および統計情報の値を必要とする、比較手段です。

- 5 フィルターを作成するには、以下の手順に従います。
- a フィルタリングの対象となるテーブル列名を [列] フィールドに入力します。
 - b [オペレータ] の矢印をクリックし、演算子を選択します。
 - c [値] フィールドに値を入力します。

たとえば、**ABC Company** というクライアントを持つサービスプロバイダを考えてみましょう。**ABC Sales** というグループを作成し、それに **ABC** のレポートしか表示を許可しないフィルターを付けるとします。これをするには、以下のようなフィルターを作成します。

cust_id = 05

cust_id はテーブル列名です。

= は数値演算子です。

05 は ABC のカスタマ識別番号です。

d [**フィルタの追加**] をクリックします。

6 [**終了**] をクリックします。

[**グループの管理**] ページに新しいユーザーグループが一覧表示されます。それらのユーザーグループは [**グループ**] フォルダーの下にあるナビゲーションフレームにも表示されます。

ユーザーグループの変更

ユーザーグループを変更するには、以下の手順に従います。

- 1 リンクバーから、[**管理**] を選択します。
- 2 [**管理**] ツリーで、[**ユーザーアカウント**] を展開し、次に [**グループ**] をクリックします。[**グループの管理**] ページが開き、ユーザーグループとユーザーのリストが表示されます。
- 3 以下のいずれかを実行します。
 - [**グループの管理**] ページのユーザーグループをクリックします。
 - ユーザーグループの横の  ([**編集**] アイコン) をクリックします。このオプションを選択した場合は、この手順のステップ 5 に進みます。

[次の項目の内容 : <グループ名 >] ページが開き、ユーザーグループと、そのユーザーグループに含まれているユーザーのリストが表示されます。
- 4 [**グループの編集**] をクリックします。[**グループの変更**] ページが表示されます。これは、[**新規グループの追加**] ページと同じものです。
- 5 ユーザーグループに追加する場合、ユーザーまたはユーザーグループを [**使用可能なユーザー/グループ**] リストから選択し、[**追加**] をクリックします。ユーザーまたはユーザーグループが [**メンバー**] リストに追加されます。
- 6 ユーザーグループから削除する場合、ユーザーまたはユーザーグループを [**メンバー**] リストから選択し、[**削除**] をクリックします。[**使用可能なユーザー/グループ**] リストからユーザーまたはユーザーグループが削除されます。
- 7 [**次へ**] をクリックしてから [**完了**] をクリックします。

ユーザーグループの削除

グループを削除するには、以下の手順に従います。

- 1 リンクバーから、[管理]を選択します。
- 2 [管理]ツリーで、[ユーザーアカウント]を展開し、次に[グループ]をクリックします。[グループの管理]ページが開き、ユーザーグループとユーザーのリストが表示されます。
- 3 削除するユーザーグループの横にある  ([削除]アイコン)をクリックします。確認ダイアログボックスが表示されます。
- 4 [OK]をクリックします。

ユーザーグループのフィルターの作成

フィルターはレポートの生成時に適用され、また、ログオンしている間に実行した、すべてのレポートに適用されます。

プロパティテーブルの任意の共通列(1つまたは複数)に対してフィルタリングできます。1つのグループに対して複数のフィルターを作成した場合、フィルターはすべてANDで結ばれます。たとえば、`cust_id=3`というフィルターを作成し、さらに同じグループに別に`location_id=2`というフィルターを作成したとします。このグループに属するユーザーのデータを取得するために作成されるSQLは、以下ようになります。

```
where cust_id=3 AND location_id=2
```

プロパティテーブルの列名とそれに含まれるデータがわかります。プロパティのインポート/エクスポート機能をレポートパックに対して使用する場合、列とデータがこれらの列に含まれている必要があります。

ユーザーグループのフィルターを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 リンクバーから、[管理]を選択します。
- 2 [管理]ツリーで、[ユーザーアカウント]を展開し、次に[グループ]をクリックします。[グループの管理]ページが開き、ユーザーグループとユーザーのリストが表示されます。
- 3 以下のいずれかを実行して、フィルターを追加するユーザーグループを選択します。

- [グループの管理] ページのユーザーグループをクリックします。
- ユーザーグループの横の  ([編集] アイコン) をクリックします。

[次の項目の内容:<グループ名>] ページが開き、ユーザーグループと、そのユーザーグループに含まれているユーザーのリストが表示されます。

- 4 [フィルター**の編集**] をクリックします。[グループフィルター] ページが開きます。
- 5 以下の手順に従います。
 - a フィルタリングの対象となるテーブル列名を [列] フィールドに入力します。
 - b [演算子] の矢印をクリックし、演算子を選択します。
 - c [値] フィールドに値を入力します。
 - d [フィルター**の追加**] をクリックします。
- 6 [終了] をクリックします。

ユーザーグループのフィルターの変更

ユーザーグループのフィルターを変更するには、以下の手順に従います。

- 1 リンクバーから、[管理] を選択します。
- 2 [管理] ツリーで、[ユーザーアカウント] を展開し、次に [グループ] をクリックします。[グループの管理] ページが開き、ユーザーグループとユーザーのリストが表示されます。
- 3 以下のいずれかを実行します。
 - [グループの管理] ページのユーザーグループをクリックします。
 - ユーザーグループの横の  ([編集] アイコン) をクリックします。

[次の項目の内容:<グループ名>] ページが表示され、ユーザーグループと、そのユーザーグループに含まれているユーザーのリストが表示されます。
- 4 [フィルター**の編集**] をクリックします。[グループフィルター] ページが開きます。
- 5 フィルターを選択し [編集] をクリックします。フィルターの値が、[列]、[演算子]、および [値] の各ボックスに表示されます。

- 6 必要な値を編集し、[**フィルター** の **追加**] をクリックします。
- 7 [**終了**] をクリックします。

ユーザーグループのフィルターの削除

ユーザーグループのフィルターを削除するには、以下の手順に従います。

- 1 リンクバーから、[**管理**] を選択します。
 - 2 [**管理**] ツリーで、[**ユーザーアカウント**] を展開し、次に [**グループ**] をクリックします。[**グループの管理**] ページが開き、ユーザーグループとユーザーのリストが表示されます。
 - 3 以下のいずれかを実行します。
 - ナビゲーションフレームでユーザーグループを選択します。
 - [**グループの管理**] ページのユーザーグループをクリックします。
 - ユーザーグループの横の  ([**編集**] アイコン) をクリックします。
- [次の項目の内容 :< グループ名 >] ページが表示され、ユーザーグループと、そのユーザーグループに含まれているユーザーのリストが表示されます。
- 4 [**フィルター** の **編集**] をクリックします。[**グループフィルター**] ページが開きます。
 - 5 [**グループフィルター**] ボックスで、削除するフィルターを選択し、[**削除**] をクリックします。
 - 6 [**終了**] をクリックします。

例：グループを使用したデータのフィルタリング

ユーザーがアクセスできるデータを制限するために、ユーザーのあちこちのフォルダーにレポートを移動する必要はありません。ユーザーのフォルダーとカタログビューは、ユーザーが実行できるレポートを制限するためにのみ使用され、表示するデータを制限するものではありません。代わりに、グループとフィルターを使用して、ユーザーが表示できるデータを制限します。

以下の例では、他のグループに属するグループを使用して、階層グループの設定方法を示します。さらに、フィルターの **OR** 演算と **AND** 演算の方法を示します。

グループを使用してデータのフィルタリングをセットアップするには、以下の手順に従います。

1 以下のユーザーを作成します。

- ABCco
- ABCcoNortheast
- ABCcoSoutheast

詳細は、519 ページの「ユーザーアカウントの作成」を参照してください。

2 異なるフィルタを備えた 2 つのグループを作成します。各グループは所属するユーザーのデータのみをフィルタリングします。以下の条件を設定します。

- a cust_id=1 というフィルタを備えた ABCcoNEGroup グループを作成します。
- b ABCcoNortheast ユーザーを ABCcoNEGroup グループに割り当てます。
- c cust_id=2 というフィルタを備えた ABCcoSEGroup グループを作成します。
- d ABCcoSoutheast ユーザーを ABCcoSEGroup グループに割り当てます。

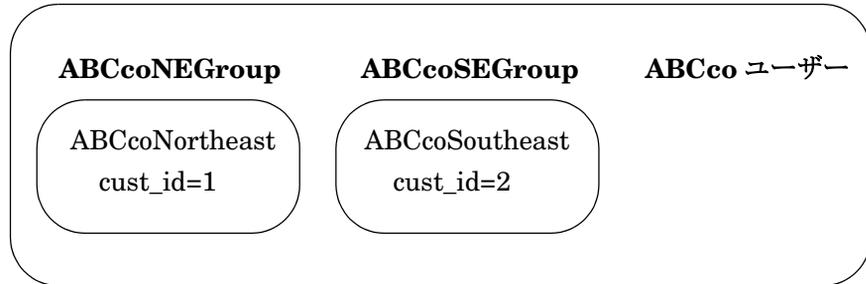
3 ABCcoGroup というマスターグループを作成します。これにはフィルタを作成しません。

4 ABCcoNEGroup と ABCcoSEGroup グループを ABCcoGroup に割り当てます。

5 ABCco ユーザーを ABCcoGroup に割り当てます。

グループをグループに含めると、上位グループのフィルターは下位グループに継承され OR で結ばれます。つまり、**ABCcoGroup** に含まれる任意のユーザー（この場合、**ABCco**）は以下のフィルタを備えています。
where cust_id=1 OR cust_id=2 つまり、以下のようなグループ構成になります。

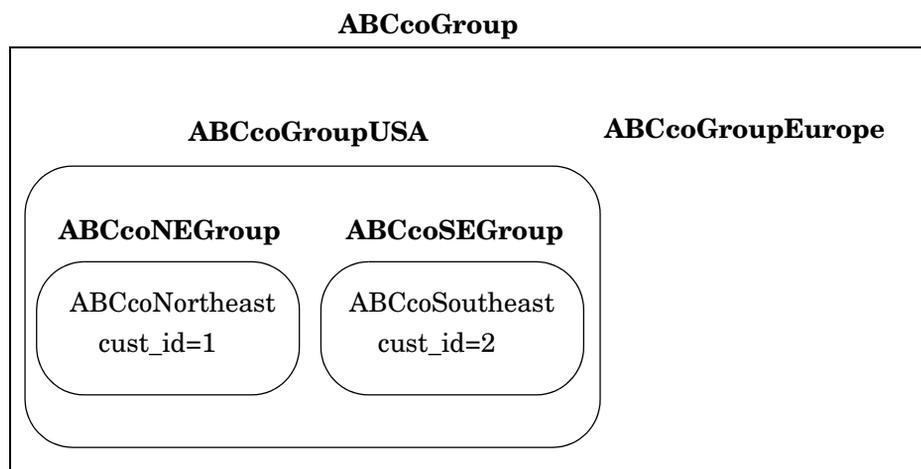
ABCcoGroup



同様に、**ABCcoNEGroup** と **ABCcoSEGroup** の両方のグループに **ABCco ユーザー** を追加することによっても、同じ結果を得ることができます。ただし、これはあまり望ましくありません。ユーザーが複数のグループに属しているときは、ユーザーがどのグループに属しているかを知るよりも、グループ階層内を追跡する方が簡単だからです。

階層構造として、2層を超えるグループ構成も可能です。たとえば、**ABCcoGroupUSA** と **ABCcoGroupEurope** というグループがあるとします。この場合、**ABCcoNEGroup** と **ABCcoSEGroup** を **ABCcoGroupUSA** に含め、

ABCcoGroupUSA と ABCcoGroupEurope を ABCcoGroup グループに含めます。その結果、地域、国、および全社にわたるフィルターを、ユーザーに適用できるようになります。以下のようなグループ構成になります。



これらのフィルターはレポートの生成時に適用され、また、ログオンしている間に実行した、すべてのレポートに適用されます。したがって、ABCcoNortheastとしてログオンし、[System] フォルダからレポートを実行した場合、そのABCcoNortheast ユーザーには、cust_id=1 のデータだけが表示されます。同様に、ABCcoSoutheastとしてログオンし、[System] フォルダから同じレポートを実行した場合、そのユーザーには cust_id=2 のデータだけが表示されます。

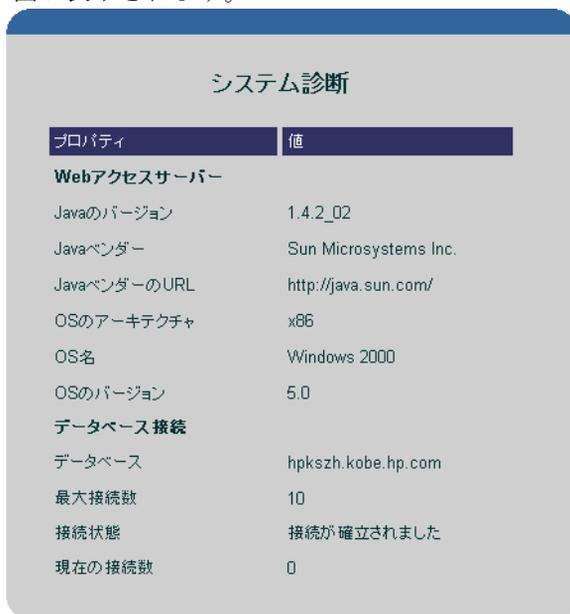
診断の表示

[診断] ページを使用して、Web アクセスサーバーとデータベースに関する以下の情報を表示できます。

- Web アクセスサーバー。Java のバージョン、Java のベンダー、Java のベンダーの URL、およびオペレーティングシステムのアーキテクチャと名前とバージョン番号を表示できます。
- データベース。名前、接続の最大数、接続ステータス、および現在の接続数を表示できます。

診断を表示するには、以下の手順に従います。

- 1 リンクバーで、[管理]をクリックします。
- 2 [管理]ツリーで、[診断]を展開します。
- 3 [診断]をクリックします。[システム診断]ページが開き、以下のような画面が表示されます。



The screenshot shows a window titled "システム診断" (System Diagnosis). It contains a table with two columns: "プロパティ" (Property) and "値" (Value). The table is divided into two sections: "Webアクセスサーバー" (Web Access Server) and "データベース接続" (Database Connection).

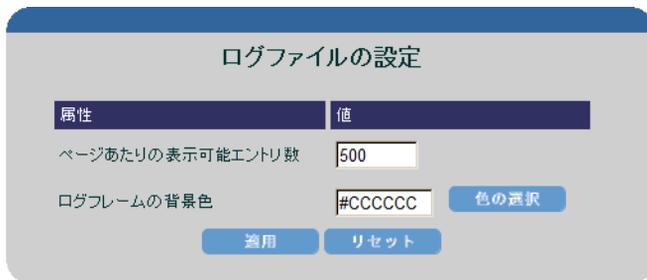
プロパティ	値
Webアクセスサーバー	
Javaのバージョン	1.4.2_02
Javaベンダー	Sun Microsystems Inc.
JavaベンダーのURL	http://java.sun.com/
OSのアーキテクチャ	x86
OS名	Windows 2000
OSのバージョン	5.0
データベース接続	
データベース	hpkszh.kobe.hp.com
最大接続数	10
接続状態	接続が確立されました
現在の接続数	0

ログファイルの設定の変更

ログファイルの設定を変更するには、以下の手順に従います。

- 1 リンクバーで、[管理]をクリックします。
- 2 [管理]ツリーで、[ログファイル]を展開します。

- 3 **[設定]** をクリックします。**[ログファイルの設定]** ページが開きます。



属性	値
ページあたりの表示可能エントリ数	500
ログフレームの背景色	#CCCCCC 色の選択

適用 リセット

- 4 以下のいずれかを実行します。

- **[ページあたりの表示可能エントリ数]** ボックスに、ログファイルの各ページに表示するログエントリーの数を入力します (デフォルト値は **500** です)。
- **[ログフレームの背景色]** ボックスで、以下のいずれかを実行します。
 - 色の値を **16** 進数形式で入力します。
 - **[色の選択]** をクリックします。**[Color Selector]** ダイアログボックスが開きます。これを使用してパレットから色を選択するか、特定のカラー値を入力します。色を選択したら、**[適用]** をクリックし、**[OK]** をクリックします。



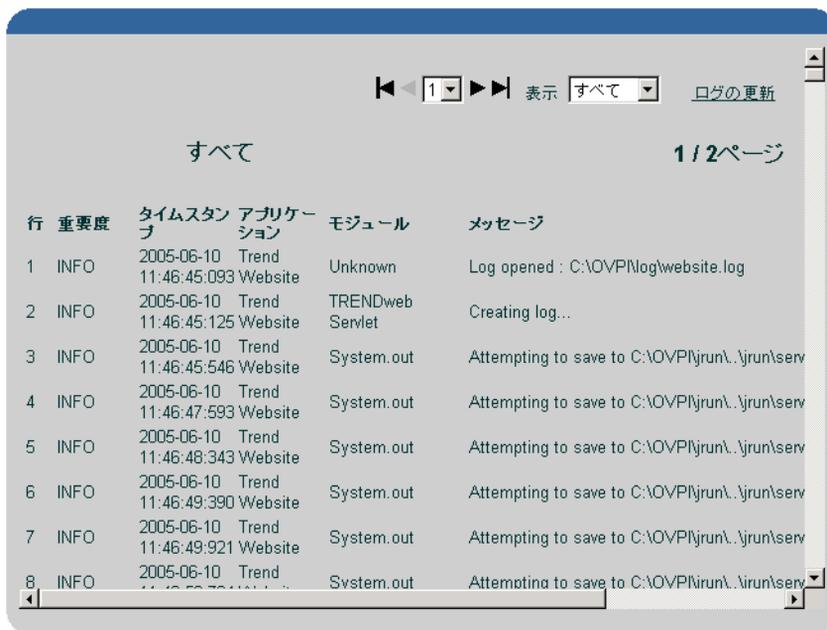
- 5 **[適用]** をもう一度クリックします。

ログファイルの表示

ログファイルを表示するには、以下の手順に従います。

- 1 リンクバーで、[管理] をクリックします。
- 2 [管理] ツリーで、[ログファイル] を展開します。
- 3 [Web アクセスサーバー] をクリックします。

Web アクセスサーバーのログファイルの表示例を以下に示します。



The screenshot shows a log viewer window with a table of log entries. The table has five columns: 行 (Line), 重要度 (Severity), タイムスタンプ (Timestamp), アプリケーション (Application), モジュール (Module), and メッセージ (Message). The entries show log opening, log creation, and attempts to save to a file.

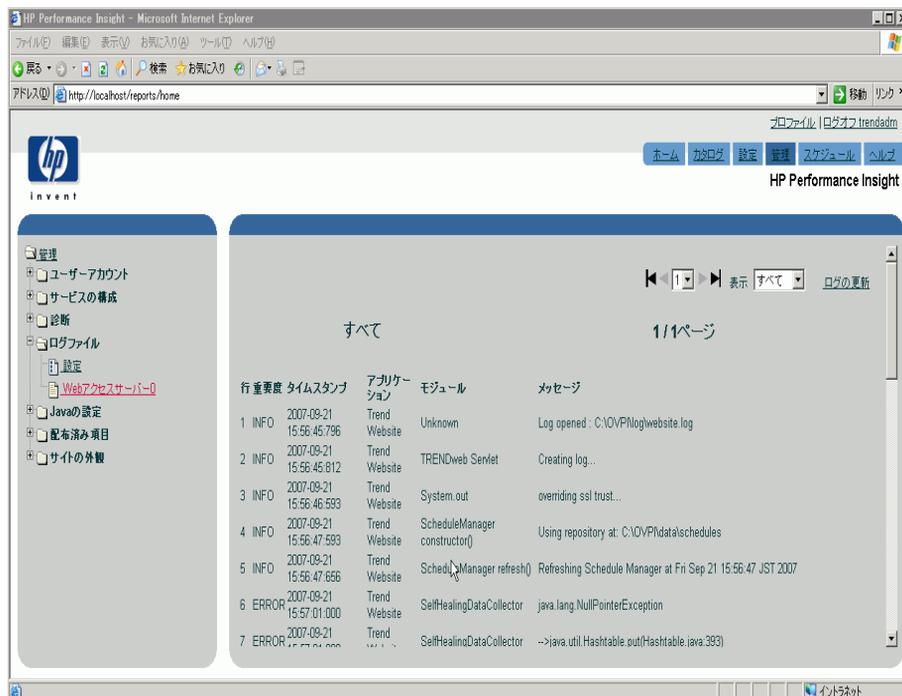
行	重要度	タイムスタンプ	アプリケーション	モジュール	メッセージ
1	INFO	2005-06-10 11:46:45:093	Trend Website	Unknown	Log opened : C:\OVPI\log\website.log
2	INFO	2005-06-10 11:46:45:125	Trend Website	TRENDweb Servlet	Creating log...
3	INFO	2005-06-10 11:46:45:546	Trend Website	System.out	Attempting to save to C:\OVPI\jrun\..jrun\serv
4	INFO	2005-06-10 11:46:47:593	Trend Website	System.out	Attempting to save to C:\OVPI\jrun\..jrun\serv
5	INFO	2005-06-10 11:46:48:343	Trend Website	System.out	Attempting to save to C:\OVPI\jrun\..jrun\serv
6	INFO	2005-06-10 11:46:49:390	Trend Website	System.out	Attempting to save to C:\OVPI\jrun\..jrun\serv
7	INFO	2005-06-10 11:46:49:921	Trend Website	System.out	Attempting to save to C:\OVPI\jrun\..jrun\serv
8	INFO	2005-06-10 11:46:50:370	Trend Website	Svstem.out	Attemotina to save to C:\OVPI\jrun\..jrun\serv

ローテーションを有効にすると、ロガーによって **website0.log**、**webiste1.log** などのファイルがログディレクトリに作成されます。**builder**、**viewer** および **piadmin** のデフォルトのログ設定は「ローテーションなし」です。

- 4 以下のいずれかを実行します。
 - ログファイルのページ内を移動するには、▶ をクリックして次のページに進み、◀ をクリックして前のページに戻ります。また ◀▶ をクリックすると最初のページに移動し、▶◀ をクリックすると最後のページに移動します。

— 特定のページに移動するには、ページ番号の横にあるプルダウン矢印をクリックし、表示するログのページを選択します。

- 5 表示したメッセージのタイプを選択するには、[表示] リストからメッセージタイプ ([すべて]、[情報]、[警告]、[エラー]、および [デバッグ]) を選択します。
- 6 ログファイルを更新するには、[ログの更新] をクリックします。これにより、表示されているログファイルのコピーが更新され、ユーザーがそのログファイルを表示した後で生成された新しいメッセージがすべて表示されます。



Java 設定の変更

Java 設定を変更するには、以下の手順に従います。

- 1 リンクバーから、[管理] を選択します。

- 2 [管理] ツリーで、[Java の設定] を展開し、次に [Java の設定] をクリックします。[Java の設定] ページが開きます。

Javaの設定

注意: ヒープサイズが、システムで使用可能なリソース以下であることを確認してください。使用可能メモリーを超える設定の場合、アプリケーションが起動しなくなることがあります。

属性	値
レポートビルダのヒープサイズ	<input type="text" value="256"/> MB
レポートビルダのJava引数	<input bin;{env.systemroot}="" s"="" type="text" value="-Djava.library.path=" {ovpi.home}=""/>
レポートビューアのヒープサイズ	<input type="text" value="256"/> MB
レポートビューアのJava引数	<input bin;{env.systemroot}="" s"="" type="text" value="-Djava.library.path=" {ovpi.home}=""/>
Webアクセスサーバーのヒープサイズ	<input type="text" value="256"/> MB
WebアクセスサーバーのJava引数	<input type="text" value="-Dfile.encoding=UTF-8 -Djava.awt.headless=true -Dtrend.1"/>

適用 リセット

- 3 以下のいずれかを実行します。
 - a ヒープサイズの各ボックスに、クライアントとサービスが使用できるメモリーの最大量を入力します。



クライアントとサーバは必ずしも割り当てられたすべてのメモリーを使用するとは限りません。

- b Java 引数の各ボックスにはいずれも、クライアント、サービス、またはその両方が起動されたときに適用する Java コマンド行の引数を入力します。

これらのコマンド行の引数の詳細は、お使いの **Java** のマニュアルを参照してください。

- 4 すべての変更を完了したら、[適用] をクリックします。
- 5 サービスのオプションのいずれかを変更した場合は、そのサービスを停止させてから再起動します。

配布項目の設定の変更

配布項目の設定を変更するには、以下の手順に従います。

- 1 リンクバーから、[管理] を選択します。
- 2 [管理] ツリーで、[配布済み項目] を展開し、次に [配布済み項目] をクリックします。[配布済み項目] ページが開きます。

配布済み項目

属性	値
生成されたレポートの場所	<input type="text" value="C:\OVPI\data\schedules"/>
配布済み項目の場所	<input type="text" value="C:\OVPI\reports\deploy"/>
イメージキャッシュの場所	<input type="text" value="C:\OVPI\run\servers\piweb\tw-app\images"/>
システムディレクトリのエイリアス	<input type="text" value="System"/>
'Download As' フリルダウンのデフォルトの深さ	<input type="text" value="5"/>
システムディレクトリをユーザーに表示	<input checked="" type="checkbox"/>
配布リンクをユーザーに表示	<input checked="" type="checkbox"/>
生成された結果を表示	<input checked="" type="checkbox"/>
管理者以外のユーザーがレポートをスケジューリング可能	<input checked="" type="checkbox"/>
すべてのユーザーリーフノードを表示	<input checked="" type="checkbox"/>
ユーザーリーフノードを結果フレームにのみ表示	<input type="checkbox"/>
すべてのビューを持つレポートの配布	<input type="checkbox"/>
起動パッドのフィルター処理の有効化	<input checked="" type="checkbox"/>

- 3 以下を実行します。
 - a [生成されたレポートの場所] ボックスに、スケジュールの作成場所となるフォルダーの名前を入力します。
 - b [配布済み項目の場所] ボックスに、配布されるレポートと URL の保存先を入力します。
 - c [イメージキャッシュの場所] ボックスに、レポートを表示するときのイメージ (ラベルなど) の保存場所とするフォルダーの名前を入力します。
 - d [システムディレクトリのエイリアス] ボックスに、OVPI の管理者が Web サーバーに配布したレポートの格納場所とするディレクトリの名前を入力します (デフォルトでは、これは [System] です)。

- e ['Download As'ドリルダウンのデフォルトの深さ]ダイアログボックスに表示されるドリルダウン深度のデフォルト値を変更するには、['Download As'ドリルダウンのデフォルトの深さ]ボックスに新しい値を入力します。



値を -1 にすると可能なレポートがすべて生成されますが、生成結果のファイルが非常に大きくなりうるため、この値はお勧めしません。

- f [System] ディレクトリを表示または非表示にするには、以下のいずれかを実行します。
 - ディレクトリを表示するには、[システムディレクトリをユーザーに表示]チェックボックスをオンにします。
 - ディレクトリを非表示にするには、[システムディレクトリをユーザーに表示]チェックボックスをオフにします。
- g [配布] リンクを表示または非表示にするには、以下のいずれかを実行します。
 - [配布] リンクを表示するには、[配布リンクをユーザーに表示]チェックボックスをオンにします。
 - [配布] リンクを非表示にするには、[配布リンクをユーザーに表示]チェックボックスをオフにします。
- h [カタログ] リンクを使用してアクセスされる [生成された結果] フォルダを表示または非表示にするには、以下のいずれかを実行します。
 - [生成された結果] フォルダを表示するには、[生成された結果を表示]チェックボックスをオンにします。
 - [生成された結果] フォルダ非表示にするには、[生成された結果を表示]チェックボックスをオフにします。
- i [スケジュール] リンクを表示または非表示にするには、以下のいずれかを実行します。
 - [スケジュール] リンクを表示するには、[管理者以外のユーザーがレポートをスケジュールリング可能]チェックボックスをオンにします。
 - [スケジュール] リンクを非表示にするには、[管理者以外のユーザーがレポートをスケジュールリング可能]チェックボックスをオフにします。
- j 以下のいずれかを実行します。

- 管理者権限を持つユーザーがすべてのユーザーのフォルダーを表示できるようにするには、**[すべてのユーザーリーフノードを表示]** チェックボックスをオンにします。
- 管理者権限を持つユーザーが自分のフォルダーだけを表示できるようにするには、**[すべてのユーザーリーフノードを表示]** チェックボックスをオフにします。

リーフノードとは、任意のレポートまたは空のフォルダーです。リーフノードを非表示にすると、**[カタログ]** ツリーには表示されなくなります。ただし **Web** アクセスサーバーの結果フレームからは、これらにアクセスできます。

このオプションは、管理者権限を持たないユーザーには影響しません。

k **Web** アクセスサーバーウィンドウの結果フレームにのみリーフノードを表示するには、以下のいずれかを実行します。

- リーフノードを結果フレームに表示するには、**[ユーザーリーフノードを結果フレーム内のみ表示する]** チェックボックスをオンにします。
- リーフノードを結果フレームに表示しないようにするには、**[ユーザーリーフノードを結果フレーム内のみ表示する]** チェックボックスをオフにします。

l 以下のいずれかを実行します。

- ユーザーフォルダーを結果フレームにのみ表示するには、**[ユーザーリーフノードを結果フレームにのみ表示する]** チェックボックスをオンにします。

多くのユーザが存在する場合にこのオプションをオンにすると時間を節約できます。なぜならブラウザが、**[カタログ]** ナビゲーションツリーを表示する前にすべてのユーザーレコードをロードする必要がなくなるからです。

- ユーザーフォルダーをナビゲーションツリーに表示するには、**[ユーザーリーフノードを結果フレームにのみ表示する]** チェックボックスをオフにします。

m 以下のいずれかを実行します。

- すべての配布済みレポートをすべての既存のビューに追加するには、**[すべてのビューを持つレポートの配布]** チェックボックスをオンにします。

- いずれの配布済みレポートも既存のビューに追加しないようにするには、[**すべてのビューを持つレポートの配布**] チェックボックスをオフにします。
- n レポートに指定した値が確かにデータベースに配置されたことを確認するためにレポートのリストを作成したときに、Web アクセスサーバーの起動パッドでデータベースを検査したい場合には、[**起動パッドのフィルター処理の有効化**] ボックスをオンにします。



このオプションは NNM 統合でのみ使用されます。

- 4 変更が完了したら、[**適用**] をクリックします。
- 5 Web アクセスサーバーを停止させてから再起動します。詳細は、80 ページの「**OVPI のプロセスの開始および停止**」を参照してください。

ビューの作成

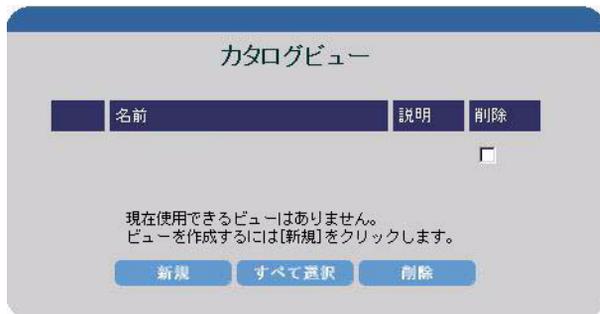
ビューを使用すると、ユーザーは、[System] フォルダ内の配布されたレポートの特定のリストを確認できます。ユーザーアカウントを作成するときに割り当てたビューによって、そのユーザーが表示できるレポートが決まります。そのビューは、ユーザーがアクセスするすべてのデータベースに適用されます。

ビューの作成

ビューを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 リンクバーから、[**管理**] を選択します。

- 2 [管理] ツリーで、[配布済み項目] を展開し、次に [カタログビューマネージャ] をクリックします。[カタログビュー] ページが開きます。



- 3 [新規] をクリックします。[表示] ページが開き、現在 [System] フォルダに配布されているすべてのレポートが表示されます。



- 4 [名前] ボックスにそのビューの名前を入力します。
以下の文字をこのページの各フィールドで使用しないでください。アンパサンド (&)、円記号 (\)、カンマ (,)、二重引用符 (“)、スラッシュ (/)、疑問符 (?)、および単一引用符 (') です。
- 5 [説明] ボックスに、ビューの説明を入力します (説明は省略可能です)。
- 6 ビュー用にレポートフォルダを選択するには、以下のいずれかを実行します。

— 各フォルダーの横にあるボックスをオンにして、フォルダー内のすべてのレポートを選択します。

—  (すべて選択ボタン) をクリックして、フォルダー内のすべてのレポートを選択します。

フォルダー内のすべてのレポートの選択を解除するには、 (すべて選択解除するボタン) をクリックします。

7 ビュー用に 1 つのレポートだけを選択するには、必要なレポート (1 つまたは複数) の横にあるボックスをオンにします。



1 フォルダー内のすべてのレポートを選択した場合、その選択はそのフォルダーにのみ適用され、そのサブフォルダーには適用されません。たとえば、前の図の [ATM] フォルダーの横にあるチェックボックスをオンにした場合、[ATM] フォルダー内のレポートだけがビューに表示されます。現時点では、[ATM] フォルダーにはレポートは配布されていません。[PVC] フォルダーのレポートを含めるには、その横のチェックボックスをオンにする必要があります。

8 レポートのデータ取得先である、データベースを指定するには、各レポート右横のデータベースリストからデータベースを選択します。

デフォルトでは、各レポートはデフォルトデータベースからデータを取得します。

9 [System] フォルダーに配布されているすべてのレポートを選択するには、[表示] ページの下にある [**すべて選択**] ボタンをクリックします。

10 レポートの選択が終了したら、[OK] をクリックしてビューを作成します。

[カタログビュー] ページが開き、ビューが正しく作成されたことが示されます。



ビューの変更

ビューを編集または削除するには、以下の手順に従います。

- 1 リンクバーから、[管理]を選択します。
- 2 [管理]ツリーで、[配布済み項目]を展開し、次に[カタログビューマネージャ]をクリックします。[カタログビュー]ページが開きます。
- 3 ビューを編集するには、以下を実行します。
 - a 以下のいずれかを実行することで、編集するビューを選択します。
 - 編集するビューの横にある (編集ボタン)をクリックします。
 - [カタログビュー]ページでビューの名前をクリックします。
[表示]ページが表示されます。
 - b 変更を行います。
 - c [OK]をクリックして変更を適用します。
- 4 ビューを削除するには、以下を実行します。
 - a 削除するビューの横にある[削除]チェックボックスをオンにします。また、すべてのビューを選択するには[すべて選択]をクリックします。
 - b [削除]をクリックしてビュー(1つまたは複数)を削除します。確認ダイアログボックスが表示されます。
 - c [OK]をクリックします。

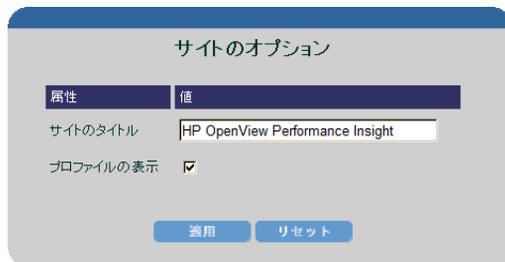
Web アクセスサーバーの外観の変更

[サイトの外観]フォルダーを使用して、サイト全体、リンクバー、ナビゲーションフレーム、および結果フレームのさまざまなオプションを変更できます。

サイトのオプションの変更

Web アクセスサーバーのタイトルを変更するには、以下の手順に従います。

- 1 リンクバーから、[管理] を選択します。
- 2 [管理] ツリーで、[サイトの外観] を展開し、次に [サイトの オプション] をクリックします。[サイトのオプション] ページが開きます。



属性	値
サイトのタイトル	HP OpenView Performance Insight
プロフィールの表示	<input checked="" type="checkbox"/>

適用 リセット

- 3 以下を実行します。
 - a [サイトのタイトル] ボックスに、Web ブラウザのタイトルバーに表示するタイトルを入力します。
 - b リンクバーの [プロフィール] リンクを非表示にするには、[プロフィールの表示] ボックスをオフにします。リンクバーの [プロフィール] リンクを表示するには、[プロフィールの表示] ボックスをオンにします。
- 4 [適用] をクリックした後、ブラウザの [更新] ボタンをクリックします。

リンクバーのオプションの変更

Web アクセスサーバーのリンクバーのオプションを変更するには、以下の手順に従います。

- 1 リンクバーから、[管理] を選択します。

- 2 [管理] ツリーで、[サイトの外観] を展開し、次に [リンクバーのオプション] をクリックします。[リンクバーのオプション] ページが開きます。

属性	値
タイトル	HP OpenView Performance Insight
タイトルのサイズ	4
整列	右
高さ	100 ピクセル
背景色	#FFFFFF 色の選択
背景イメージ	/webview/images/backgroundtile.gif
イメージ	/webview/images/hpinvent.png
イメージの幅	74 ピクセル
イメージの高さ	61 ピクセル
代替イメージ	Hewlett Packard
イメージのX位置	25 ピクセル
イメージのY位置	25 ピクセル
イメージの背景の幅	200 ピクセル
フォーカス時のリンク背景色	#336699 色の選択
非フォーカス時のリンク背景色	#6699CC 色の選択

適用 リセット

- 3 以下のいずれかを実行します。
- a [タイトル] ボックスに、リンクバーのタイトルを入力します。このタイトルはリンクバーの下に表示されます。
 - b [タイトルのサイズ] の矢印をクリックしてから、タイトルの希望のポイントサイズを選択します。
 - c [整列] の矢印をクリックしてから、位置揃えのオプションを選択します。このオプションにより、Web ブラウザのウィンドウを規準としたときのリンクバーの位置が揃います。
 - d [高さ] にはリンクバーの高さ (ピクセル単位) を入力します。
 - e [背景色] ボックスで、以下のいずれかを実行します。

- 色の値を 16 進数形式で入力します。
 - [色の選択] をクリックします。[Color Selector] ウィンドウが開きます。このウィンドウで、パレットから色を選択するか、カラー値を個別に入力します。色を選択したら、[適用] をクリックし、[OK] をクリックします。
- f [背景イメージ] ボックスに、リンクバーの背景に表示するイメージの場所を入力します。そのイメージは、Web サーバー上になければなりません。
- イメージの場所を入力しない場合、Web アクセスサーバーは、Web サーバー上の [piweb] フォルダ内でのイメージを探します。たとえば、Windows では、このディレクトリの絶対パスは以下のとおりです。
- ```
installation_directory\jrun\servers\piweb\tw-app\webview\images
```
- この場合、*installation\_directory* は OVPI がインストールされているディレクトリです。
- g [イメージ] ボックスに、リンクバーの左に表示するイメージの場所を入力します。イメージの配置場所については、この手順の手順 f を参照してください。
- h [イメージの幅] と [イメージの高さ] のボックスに、イメージの幅と高さをピクセル単位で入力します。
- i [代替イメージ] ボックスに、ポインタをイメージ上に置いたときに表示するテキストを入力します。
- j [イメージの X 位置] と [イメージの Y 位置] のボックスに、Web ブラウザのウィンドウにおけるイメージの x 座標と y 座標の位置をピクセル単位で入力します。
- ブラウザのウィンドウの左上隅が 0,0 です。デフォルトでは、下へ 25 ピクセル、右へ 45 ピクセルの座標位置にイメージを配置します。
- k [イメージの背景の幅] ボックスに、リンクバーでイメージが占めるスペースをピクセル単位で入力します。
- l [フォーカス時のリンク背景色] および [非フォーカス時のリンク背景色] のボックスで、以下のいずれかを実行します。
- 色の値を 16 進数形式で入力します。

- **[色の選択]** をクリックします。**[Color Selector]** ウィンドウが開きます。このウィンドウで、パレットから色を選択するか、カラー値を個別に入力します。色を選択したら、**[適用]** をクリックし、**[OK]** をクリックします。

これらのオプションは、リンクバー上の各リンクの背景に配置されるタブの色を制御します。**[フォーカス時のリンク背景色]** はポインタがリンク上にあるとき、**[非フォーカス時のリンク背景色]** はポインタがリンク上にないときを表します。

- 4 変更が完了したら、**[適用]** をクリックし、ブラウザの **[更新]** ボタンをクリックします。

## リンクバーの別名の変更

リンクバーの別名を変更するには、以下の手順に従います。

- 1 リンクバーから、**[管理]** を選択します。
- 2 **[管理]** ツリーで、**[サイトの外観]** を展開し、次に **[リンクバーのエイリアス]** をクリックします。**[リンクバーのエイリアス]** ページが開きます。

| 属性              | 値                                   |
|-----------------|-------------------------------------|
| 1 ホームリンクの表示     | <input checked="" type="checkbox"/> |
| 2 カタログリンクの表示    | <input checked="" type="checkbox"/> |
| 3 設定リンクの表示      | <input checked="" type="checkbox"/> |
| 4 管理リンクの表示      | <input checked="" type="checkbox"/> |
| 5 スケジュールリンクの表示  | <input checked="" type="checkbox"/> |
| 6 ヘルプリンクの表示     | <input checked="" type="checkbox"/> |
| ホームリンクのエイリアス    | ホーム                                 |
| カタログリンクのエイリアス   | カタログ                                |
| 設定リンクのエイリアス     | 設定                                  |
| 管理リンクのエイリアス     | 管理                                  |
| スケジュールリンクのエイリアス | スケジュール                              |
| ヘルプリンクのエイリアス    | ヘルプ                                 |

適用      リセット

3 以下を実行します。

- a リンクバーにリンクを表示するときの順序を制御するには、各リンクの横にある数値の矢印をクリックし数値を選択します。

リンクのデフォルトの順序は、[ホーム]、[カタログ]、[設定]、[管理]、[スケジュール]、[ヘルプ]です。

- b リンクバー上のリンクを表示しないようにするには、[<リンク名>リンクの表示]チェックボックスをオフにします。リンクバー上のリンクを表示するには、[リンク名の表示]チェックボックスをオンにします。

- c リンクの名前を変更するには、[<リンク名>リンクのエイリアス]ボックスに新しい名前を入力します。

4 変更が完了したら、[適用]をクリックし、ブラウザの[更新]ボタンをクリックします。

## ナビゲーションフレームのオプションの変更

ナビゲーションフレームのオプションを変更するには、以下の手順に従います。

- 1 リンクバーから、[管理]を選択します。
- 2 [管理] ツリーで、[サイトの外観]を展開し、次に[ナビゲーションフレームのオプション]をクリックします。[ナビゲーションフレームのオプション] ページが開きます。



| 属性           | 値                         |
|--------------|---------------------------|
| ナビゲーションの幅    | 300 ピクセル                  |
| ナビゲーションの余白の色 | #336699 <span>色の選択</span> |
| ナビゲーションの背景色  | #CCCCCC <span>色の選択</span> |

適用 リセット

- 3 以下を実行します。
  - a [ナビゲーションの幅] ボックスに、ナビゲーションフレームの幅をピクセル単位で入力します。
  - b [ナビゲーションの余白の色] と [ナビゲーションの背景色] のボックスで、以下のいずれかを実行します。
    - 色の値を 16 進数形式で入力します。
    - [色の選択] をクリックします。[Color Selector] ウィンドウが開きます。このウィンドウで、パレットから色を選択するか、カラー値を個別に入力します。色を選択したら、[適用] をクリックし、[OK] をクリックします。
- 4 変更が完了したら、[適用] をクリックし、ブラウザの [更新] ボタンをクリックします。

## 結果フレームのオプションの変更

結果フレームのオプションを変更するには、以下の手順に従います。

- 1 リンクバーから、[管理] を選択します。
- 2 [管理] ツリーで、[サイトの外観] を展開し、次に [結果フレームのオプション] をクリックします。[結果フレームのオプション] ページが開きます。

余白の色

背景色

### 結果フレームのオプション

| 属性      | 値                                                                        |
|---------|--------------------------------------------------------------------------|
| 結果の余白の色 | <input type="text" value="#336699"/> <input type="button" value="色の選択"/> |
| 結果の背景色  | <input type="text" value="#CCCCCC"/> <input type="button" value="色の選択"/> |

このページでは、Web アクセスサーバーの結果フレームの色を変更できます。結果の余白の色は、フレームの上部にある水平バーの色です。デフォルトは青色です。背景色は、このフレーム全体の色です。デフォルトはグレイです。

- 3 [結果の余白の色] または [結果の背景色] のボックスで、以下のいずれかを実行します。
  - 色の値を 16 進数形式で入力します。
  - [色の選択] をクリックします。[Color Selector] ウィンドウが開きます。このウィンドウで、パレットから色を選択するか、カラー値を個別に入力します。色を選択したら、[適用] をクリックし、[OK] をクリックします。
- 4 変更が完了したら、[結果フレームのオプション] ページで [適用] をクリックし、ブラウザの [更新] ボタンをクリックします。

## レポートの配布

URL を配布するには、以下の手順に従います。

- 1 リンクバーから、[ **カタログ** ] を選択します。
- 2 [ **カタログ** ] ツリーで、[ **新規レポートの配布** ] をクリックします。[ レポートの配布 ] ページが開きます。

### レポートの配布

| 名前   | 値                                                                     |  | 概要               |
|------|-----------------------------------------------------------------------|--|------------------|
| 配布項目 | <input type="text"/> <input type="button" value="参照..."/>             |  | 配布するローカルレポートファイル |
| 保存先  | <input type="text" value="/users"/> <input type="button" value="参照"/> |  | レポートが保存されるパス     |
| 表示名  | <input type="text"/>                                                  |  | カタログ階層内に表示される名前  |
| 説明   | <input type="text"/>                                                  |  | 説明(オプション)        |

- 3 以下のいずれかを実行します。
  - [ **配布項目** ] ボックスに、配布するレポートのパスとファイルの名前を入力します。
  - [ **参照** ] をクリックし、配布するレポートを見つけて選択します。
- 4 [ **保存先** ] ボックスで、以下を実行します。
  - a [ **保存先** ] の矢印をクリックして、[ **System** ] または [ **users** ] を選択します。
  - b 以下のいずれかを実行します。
    - レポートの配布先となるフォルダーを入力します。  
[ **users** ] フォルダーにレポートを配布する場合は、既存のユーザーアカウントからユーザー名を表すフォルダーを入力します。
    - [ **参照** ] をクリックし、レポートの配布先となるフォルダーを見つけて選択します。

レポートを配布すると、以下のいずれかが行われます。

- レポートが、[System] フォルダの下に指定フォルダに表示されま  
す。
  - レポートが、[users] フォルダの下にユーザーのフォルダに表示さ  
れます。
- 5 [表示名]フィールドに、レポートの名前を入力します。これは、[カタログ]  
リンクで表示されるレポート名になります。
- 表示名を入力しない場合、レポートのファイルシステム名が使用されます。  
たとえば、**ncanfield.rep** という名前のレポートを配布し、表示名を入力し  
なかった場合、[カタログ]リンクからレポートを表示すると、そのレポー  
トは **ncanfield.rep** として表示されます。
- 6 [説明]フィールドに、レポートに関する説明を入力します(説明は省略可能  
です)。
- 7 **[配布]** ボタンをクリックします。

レポートが正常に配布されると、以下のメッセージが表示されます。

```
You have successfully deployed "report_name"
```

この例で、*report\_name* は、この手順の**手順 3** で入力したレポートの名前で  
す。

# サービスの設定の変更

この項では、以下の設定を変更するための方法について説明します。

- Web アクセスサーバー (557 ページ)
- SSL(562 ページ)
- システムマネージャ (567 ページ)
- メールサーバー (576 ページ)

## Web アクセスサーバー設定の変更

Web アクセスサーバーについては、以下の設定を変更できます。ポート番号、レルム、Web サイトのドキュメントルート、ログファイルのパス、ログ記録、デバッグ、ヘッドレスオペレーション、タイムアウト値、および認証方法です。

Web アクセスサーバーの設定を変更するには、以下の手順に従います。

- 1 リンクバーから、[ **管理** ] を選択します。[ 管理 ] ページが開きます。
- 2 [ 管理 ] ツリーで、[ サービスの構成 ] を展開し、次に [ **Web アクセス サーバー** ] をクリックします。[ Web アクセスサーバーの設定 ] ページが開きます。

| 属性               | 値                                   |
|------------------|-------------------------------------|
| ポート              | 80                                  |
| レルム              | tw-app                              |
| Webサイトのドキュメントルート | /                                   |
| ログファイルの場所        | C:\OVPI\log                         |
| ログの有効化           | <input checked="" type="checkbox"/> |
| デバッグの有効化         | <input type="checkbox"/>            |
| タイムアウト           | 3 分                                 |
| 認証方法             | HTTP基本                              |
| アカウントID          | trendadm                            |

適用

### 3 以下を実行します。

- a [ポート] ボックスに、**Web** アクセスサーバーのポート番号を入力します。
- b [レルム] ボックスに、サーバーのレルム名を入力します。最大 50 文字までです。

レルム名はユーザーを認証するために使用します。ユーザーのログオン情報(ユーザー名とパスワード)は、割り当てられたレルムに対してのみ機能します。**Web** アクセスサーバーの前にプロキシサーバーを使用している場合は、レルム名を変更する必要があります。

たとえば、プロキシサーバーのレルム名が `realm1` であり、**Web** アクセスサーバーのレルム名が `tw-app` である場合、ユーザーは 2 回ログオンする必要があります。**Web** アクセスサーバーのレルム名を `realm1` に変更すれば、ユーザーは 1 回のログオンですみます。

レルム名は、**Web** アクセスサーバーで [ログオン] ボタンをクリックした後の [ネットワーク パスワードの入力] ダイアログボックスに表示されます。

- c [Web サイトのドキュメントルート] ボックスに、ホームページのディレクトリ階層を再配置するディレクトリを入力します。これにより、**Web** アクセスサーバーのコンポーネントが配置される URL が変更されます。

デフォルトでは、階層は `/`(ルート)です。つまり、**OVPI** すべてのコンポーネントが **Web** アクセスサーバーのルートレベルに配置されます。

このオプションは、プロキシサーバーが存在し、**OVPI** がプロキシ内のコンポーネントのうちの 1 つである環境において役に立ちます。複数のユーザーアプリケーションがあり、その 1 つが **OVPI** である場合は、この URL を `/ovpi` に変更できます。たとえば、デフォルトの URL を `http://hostname/reports/home` から以下の URL に変更します。  
`http://hostname/ovpi/reports/home`.

- d サーバーのログファイルのパスを変更するには、[ログファイルの場所] ボックスにパスを入力します。



パスには ASCII 文字のみ使用できます。

- e [Log File(s) for Rotation] ボックスに、ローテーションするファイルの数を入力します。この値はゼロより大きくする必要があります。ローテーションを無効にするには、[Log Files for Rotation] にゼロを入力します。
- f [Log File Size] ボックスに、ログファイルのサイズを入力します。この値はゼロより大きな整数にする必要があります。ローテーションが無効の場合は、ログファイルのサイズは考慮されません。
- g ログ記録を指定するには、以下のいずれかを実行します。
  - ログ記録を有効にするには、[ **ログの有効化** ] チェックボックスをオンにします。
  - ログ記録を無効にするには、[ **ログの有効化** ] チェックボックスをオフにします。
- h デバッグを指定するには、以下のいずれかを実行します。
  - デバッグを有効にするには、[ **デバッグの有効化** ] チェックボックスをオンにします。
  - デバッグを無効にするには、[ **デバッグの有効化** ] チェックボックスをオフにします。
- i UNIX のみ：ヘッドレスオペレーションを制御するには、以下のいずれかを実行します。
  - ヘッドレスオペレーションを有効にするには、[ **ヘッドレス操作の有効化** ] チェックボックスをオンにします。
  - ヘッドレスオペレーションを無効にするには、[ **ヘッドレス操作の有効化** ] チェックボックスをオフにします。

OVPI をインストールした後、システムはヘッドレスオペレーション用に設定されます。ヘッドレス サポートでは、ソフトウェアを使用してグラフィックをレンダリングします。したがってグラフィックカードは必要ありません。

代わりに、以下のコマンドのいずれかを入力することで、ヘッドレスサポートを無効または有効にします。

```
headlessctl enable
```

```
headlessctl disable
```

- j Web アクセスサーバーでの処理（たとえばレポートのロード）が、タイムアウトする時間（分単位）を、[タイムアウト]ボックスに入力します。

有効な値は、0 より大きくて 1000 未満の任意の整数です。

- k [認証方法] の矢印をクリックし、以下のいずれかを選択します。
  - [HTTP 基本]。この方法では、[ネットワーク パスワードの入力] ダイアログボックスにユーザーアカウントのユーザー名とパスワードを入力して、にログオンする必要があります。
  - [URL]。この方法では、URL を使用してレポートを表示するときにユーザー名を入力する必要があります。URL を使用してレポートを表示する方法の詳細は、『HP OpenView Performance Insight レポートの作成および表示ガイド』を参照してください。
  - [なし]。この方法では、認証が必要ありません。ただし、ユーザーは [アカウント ID] ボックスで指定したユーザーアカウントと同じ権限でシステムにアクセスします。

 [アカウント ID] ボックスに、管理者権限を持たないユーザーアカウントを指定した場合、[管理] リンクにはアクセスできなくなります。管理者権限のリセットする方法の詳細は、560 ページの「[管理者権限のリセット](#)」を参照してください。

- [アカウント ID]。ユーザーアカウントの名前を入力します。Web サーバーに、他のユーザーアカウントでアクセスする場合、ここで設定したアカウントと同じ権限が必要です。

- 4 [適用] をクリックします。
- 5 変更が完了したら、Web アクセスサーバーを停止させてからまた起動します。この手順については、80 ページの「[OVPI のプロセスの開始および停止](#)」を参照してください。

## 管理者権限のリセット

この項では、Web アクセスサーバーの認証設定を変更するときに起こりうる問題の処理方法について説明します。

Web サーバーのための認証がなく、かつ管理者権限を持たない [アカウント ID] ボックスのユーザーアカウントが、Web アクセスサーバーの [管理] リンクにアクセスするには、管理者権限を設定しなおす必要があります。これをするには、`config.prp` ファイルを編集するか、または URL を使用して Web アクセスサーバーにログオンします。

### config.prp ファイルの編集

`config.prp` ファイルを編集することで管理者権限をリセットするには、以下の手順に従います。

- 1 テキストエディタで以下のファイルを開きます。

```
installation_directory\data\config.prp
```

この場合、`installation_directory` は OVPI がインストールされているディレクトリです。

- 2 `config.prp` ファイル内で以下の行を見つけます。

```
appserver.security=none
```

- 3 この行を以下のように変更します。

```
appserver.security=basic
```

- 4 以下の場所に移動します。

```
JBOSS_HOME/server/piweb/deploy/tw-app.war/WEB-INF.
```

この例で、UNIX の場合は `JBOSS_HOME = opt/OV/nonOV/PiJBoss/405` です。

Windows の場合は `JBOSS_HOME= C:\Program Files\HP OpenView\nonOV\ PiJBoss\405` です。

- 5 `web.auth` ファイルのコピーを作成し、これを同じディレクトリに貼り付けます。
- 6 `web.xml` ファイルを削除します。
- 7 `web.auth` ファイルのコピーの名前を `web.xml` に変更します。
- 8 Web アクセスサーバーを停止し起動します。Web アクセスサーバーを停止してからまた起動する方法の詳細は、80 ページの「OVPI のプロセスの開始および停止」を参照してください。

## URL の使用

管理者権限で Web アクセスサーバーにログオンするには、以下の URL を入力します。

**http://hostname/reports/home?ov\_user=trendadm**

この場合、*hostname* は Web アクセスサーバーの名前です。

## SSL サービス設定の変更

Web アクセスサーバーとサポートされている Web ブラウザとの間の SSL (Secure Socket Layer) 通信を有効または無効にできます。

SSL を有効にするには、自己署名デジタル証明書を作成します。この自己署名デジタル証明書によって SSL を有効にすることができます。ただし、セキュリティを向上させるには、この証明書を認証機関に送って署名入りデジタル証明書を受け取る必要があります。署名入りデジタル証明書を受け取ったら、これをインポートする必要があります。詳細は、565 ページの「[デジタル証明書のインポート](#)」を参照してください。

SSL を有効または無効にするには、以下の手順に従います。

- 1 リンクバーから、**[管理]** を選択します。[管理] ページが開きます。

- 2 [管理] ツリーで、[サービスの構成] を展開し、次に **[SSL サービス]** をクリックします。**[SSL サービス構成ページ]** が開きます。

### SSLサービス構成ページ

| プロパティ              | 値                                   |
|--------------------|-------------------------------------|
| SSLの有効化            | <input type="checkbox"/>            |
| 非セキュアHTTPポートを有効にする | <input checked="" type="checkbox"/> |
| セキュアポート            | <input type="text" value="443"/>    |
| キーストア パスワード        | <input type="password"/>            |

| 証明書識別データ | 値                                    |
|----------|--------------------------------------|
| 名前       | hpkszh.kobe.hp.com                   |
| 組織       | <input type="text" value="Unknown"/> |
| 組織単位     | <input type="text" value="Unknown"/> |
| 場所       | <input type="text" value="Unknown"/> |
| 州/都道府県   | <input type="text" value="Unknown"/> |
| 国コード     | <input type="text" value="US"/>      |

▶ OVPI をインストールした際に SSL 通信を有効にした場合、[キーストア パスワード] と [証明書情報] のオプションは表示されません。

- 3 SSL を有効にするには、以下を実行します。

- a **[SSL の有効化]** チェックボックスをオンにします。
- b Web アクセスサーバーの非セキュアなポートをオフにするには、**[非セキュア HTTP ポート を有効にする]** ボックスをオフにします。

このオプションを無効にすると、ユーザーは `https://hostname` を使用して Web アクセスサーバーにアクセスする必要があります。

- c **[セキュアポート]** ボックスの値はそのまま (デフォルトは **433**) におきます。または **[セキュアポート]** ボックスのポート番号を変更します。

- d [キーストア パスワード] ボックスに 6 文字以上のパスワードを入力します。



パスワードを記録し安全な場所に保管しておきます。このパスワードは、署名証明書を作成するのに必要です。

自己署名証明書を作成すると、証明書リポジトリに保存されます。このパスワードにより、Web アクセスサーバーは証明書リポジトリにアクセスできます。

残りのフィールドは、証明書署名機関によって検証および署名される必要のある、SSL キーを生成するのに必要な情報を要求します。この情報は、証明書の有効性を確認するために、証明書のチェック担当者が使用します。



[国]、[組織]、[組織単位]、[場所]、[州/都道府県]、および[国コード] フィールドには ASCII 文字のみ入力できます。

- e [国コード] ボックスに 2 文字の国コードを入力します ("JP" など)。
- f 自分が所属する組織名を入力します ("ABC システム株式会社" など)。
- g 部または課の名前 ("Northeast Sales" など) を入力します。
- h 所在地の市町村名 ("杉並区" など) を入力します。
- i 都道府県名を入力します ("東京" など)。
- j [適用] をクリックします。

[適用] をクリックすると、[SSL サービス構成ページ] ページに、証明書の有効期限と、[新規 自己署名型証明書の生成] チェックボックスが表示されます。

新しい証明書を作成する必要があるときは、必要に応じてこのページの [証明書識別データ] セクションの情報を変更し、このオプションを選択し、[適用] をクリックします。

- k 変更内容を有効にするため、Web アクセスサーバーを停止させてから再起動します。この手順については、80 ページの「OVPI のプロセスの開始および停止」を参照してください。



この自己署名デジタル証明書によって SSL を有効にすることができます。ただし、セキュリティを向上させるには、この証明書を認証機関に送って署名入りデジタル証明書を受け取る必要があります。署名入りデジタル証明書を受け取ったら、これをインポートする必要があります。詳細は、[デジタル証明書のインポート](#)を参照してください。

- 4 SSL を無効にするには、以下の手順に従います。
  - a **[SSL の有効化]** チェックボックスをオフにします。
  - b **[適用]** をクリックします。
  - c 変更内容を有効にするため、**Web** アクセスサーバーを停止させてから再起動します。この手順については、80 ページの「**OVPI のプロセスの開始および停止**」を参照してください。

## デジタル証明書のインポート

SSL を有効した時点で、自己署名デジタル証明書を得たことになります。証明書は、認証機関 (CA) によって署名されていると、他人からの信頼がより高まります。

これを実行するには、CA に証明書署名要求 (CSR) を送る必要があります。CA は要求者を認証し、その証明書に署名します。

### 証明書署名要求 (CSR) の生成

CSR を生成するには、以下を実行します。

- 1 次のディレクトリに移動します。

```
installation_directory/jre/bin
```

- 2 CSR を生成するには、コマンド行で以下を入力します。

```
keytool_path -certreq -file filename.csr -keystore
JBOSS_HOME/lib/keyStore -alias ovpi
```

*keytool\_path* は、DPIPE\_HOME ディレクトリ内の、**keytool** ユーティリティの場所です。

UNIX の場合は JBOSS\_HOME = opt/OV/nonOV/PiJBoss/405 、  
Windows の場合は C:\Program Files\HP  
OpenView\nonOV\PiJBoss\405 です。

*filename* は、.csr ファイルに与える名前です。

この自己署名デジタル証明書によって **SSL** を有効にすることができます。ただし、セキュリティを向上させるには、この証明書を認証機関に送って署名入りデジタル証明書を受け取る必要があります。署名入りデジタル証明書を受け取ったら、これをインポートする必要があります。

以下のプロンプトが表示されます。

```
Enter keystore password:
```

- 3 キーストアパスワードを入力し、**[Enter]** を押します。

これは、**OVPI** のインストール時に **SSL** を有効にするときに入力したパスワード、および **Web** アクセスサーバーを使用するときに入力するパスワードと同じものです。



パスワードを入力するときは、画面にそのパスワードが表示されるので、他人の面前では入力しないでください。

これにより、.csr ファイルに、以下の行で始まる要求が記載されます。  
-----BEGIN NEW CERTIFICATE REQUEST-----

## 署名入りデジタル証明書のインポート

証明書に署名した後、**CA** はこれを要求者に返送します。次に、署名入り証明書をキーストアにインポートする必要があります。これによって自己署名証明書は上書きされます。一部の認証機関は、署名入り証明書とともにサーバー証明書を添付することがあります。

署名入り証明書をインポートするには、以下の手順に従います。

- 1 次のディレクトリに移動します。

```
installation_directory/jre/bin
```

- 2 サーバー証明書のみ: サーバー証明書をインポートするには、コマンド行で以下を入力します。

```
keytool -import -file filename -keystore JBOSS_HOME/lib/trustStore
```

- 3 コマンド行で以下を入力します。

```
keytool -import -file filename -keystore JBOSS_HOME/lib/keyStore -alias ovpi -trustcacerts
```

ここで、UNIX の場合は `JBOSS_HOME = opt/OV/nonOV/PiJBoss/405`、  
Windows の場合は `C:\Program Files\HP  
OpenView\nonOV\PiJBoss\405` です。

以下のプロンプトが表示されます。

Enter keystore password:

- 4 キーストアパスワードを入力し、**[Enter]** を押します。



パスワードを入力するときは、画面にそのパスワードが表示されるので、他人の面前では入力しないでください。

これは、OVPI のインストール時に SSL を有効にするときに入力したパスワード、および Web アクセスサーバーを使用するときに入力するパスワードと同じものです。

## システムマネージャの設定の変更

システムマネージャは、すべての Web アクセスサーバーとデータベースのリストを管理します。[Performance Insight システム] ページに、すべての Web アクセスサーバーとデータベースシステムが表示されます。またこのページで以下も実行できます。

- デフォルト システムを選択する (568 ページの「[デフォルトシステムの変更](#)」)。
- システムを追加する (568 ページの「[システムの追加](#)」)。
- 現在のシステムの設定を変更する (571 ページの「[システムの設定の変更](#)」)。
- システムを削除する (575 ページの「[システムの削除](#)」)。

### [Performance Insight システム] ページの表示

[Performance Insight システム] ページを開くには、以下の手順に従います。

- 1 リンクバーから、**[管理]** を選択します。[管理] ページが開きます。

- 2 [管理] ツリーで、[サービスの構成] を展開し、次に [システムマネージャ] をクリックします。[Performance Insight システム] ページが開きます。



このページには、お使いのコンピュータが接続されているすべての Web アクセスサーバーとデータベースが表示されます。またデフォルトシステムと、各システムの役割も示します。システムのロールが、Web アクセスサーバー (appserver) である場合があります、またデータベースサーバーと Web アクセスサーバーの両方である場合もあります。

このページで、システムの追加、変更、または削除ができます。デフォルトシステムを変更することもできます。

## デフォルトシステムの変更

接続を最初に確立したシステムがデフォルトシステムになります。デフォルトを変更するには、以下の手順に従います。

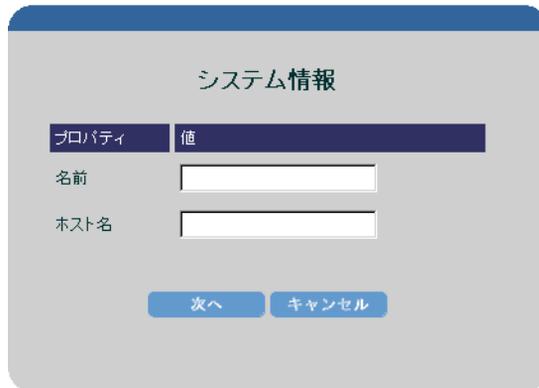
- 1 前述の [手順 2](#) に示した [Performance Insight システム] ページで、デフォルトシステムにするシステムの [デフォルト] ボタンをクリックします。
- 2 [適用] をクリックします。

## システムの追加

システムを追加するには、以下の手順に従います。

- 1 567 ページの「[\[Performance Insight システム\] ページの表示](#)」で説明したように [Performance Insight システム] ページを開きます。
- 2 [追加] をクリックします。

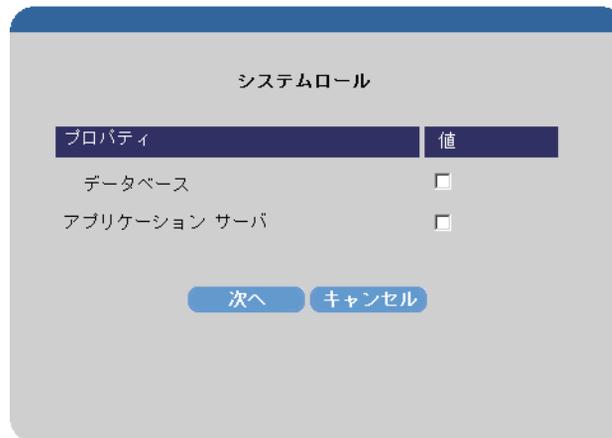
[システム情報] ページが開きます。



| プロパティ | 値                    |
|-------|----------------------|
| 名前    | <input type="text"/> |
| ホスト名  | <input type="text"/> |

- 3 システムの全般プロパティを入力するには、以下を実行します。
  - a [名前] ボックスにそのシステムの名前を入力します。
  - b [ホスト名] ボックスにそのシステムのホスト名を入力します。
  - c [次へ] をクリックします。

[システムロール] ページが開きます。



| プロパティ        | 値                        |
|--------------|--------------------------|
| データベース       | <input type="checkbox"/> |
| アプリケーション サーバ | <input type="checkbox"/> |

- 4 システムにロール (1 つまたは複数) を割り当てるには、以下を実行します。
  - a データベースのロールをシステムに割り当てるには、[データベース] ボックスをオンにします。

- b Web アクセスサーバーの役割をシステムに割り当てるには、[アプリケーション サーバ] ボックスをオンにします。
- c [次へ] をクリックします。

システムに割り当てた役割(1 つまたは複数)に応じて、以下のページのいずれかまたは両方が表示されます。

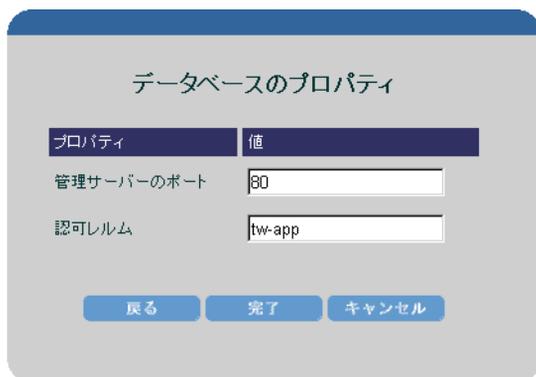
- [Web アクセスサーバーのプロパティ] (手順 5 に進む)
  - [データベースのプロパティ] (手順 8 に進む)
- 5 Web アクセスサーバーの役割を選択した場合、[Web アクセスサーバーのプロパティ] ページが表示されます。

| プロパティ        | 値                        |
|--------------|--------------------------|
| ポート          | 80                       |
| コンテキスト       | /                        |
| SSLを使用して接続する | <input type="checkbox"/> |
| 認可レルム        | tw-app                   |

戻る      完了      キャンセル

- 6 必要に応じて、[Web アクセスサーバーのプロパティ] ページのデフォルト値を変更します。
- [ポート] ボックスで、Web アクセスサーバーのポート番号を変更します。
  - [コンテキスト] ボックスで、Web アクセスサーバーへのパスを変更します。
  - データベースサーバーが SSL を使用しており、そのデータベースサーバーとの安全な通信を望む場合は、[SSL を使用して接続する] ボックスをオンにします。
  - [認可レルム] ボックスで、データベースサーバーが認証用に使用するレルム名を変更します。

- 7 [次へ] をクリックします (データベースの役割を選択していない場合は、[完了] をクリックします)。
- 8 データベースの役割を選択している場合は、[データベースのプロパティ] ページが表示されます。



| プロパティ      | 値      |
|------------|--------|
| 管理サーバーのポート | 80     |
| 認可レルム      | tw-app |

戻る      完了      キャンセル

- 9 該当する場合は、[データベースのプロパティ] ページで以下を実行します。
  - a [管理サーバーのポート] ボックスで、Web アクセスサーバーが接続をリスンするポート番号を変更します。
  - b [認可レルム] ボックスで、データベースサーバーが認証用に使用するレルム名を変更します。
- 10 [完了] をクリックします。

## システムの設定の変更

システムの設定を変更するには、以下の手順に従います。

- 1 [Performance Insight の設定] ページを開きます。567 ページの「[Performance Insight システム] ページの表示」を参照してください。
- 2 変更するユーザーの横にある  ([編集] アイコン) をクリックします。

[システムのプロパティ] ページが開きます。

システムのプロパティ

全般 | Webアクセスサーバー | データベース

| プロパティ | 値                                   |
|-------|-------------------------------------|
| 名前    | hpkszh                              |
| ホスト名  | <input type="text" value="hpkszh"/> |

OK キャンセル

列の見出しのすぐ上に表示されているリンクは、システムに与えられた役割を表しています。

- 3 システムの全般プロパティを変更するには、以下を実行します。
  - a [全般] リンクをクリックします。[システムのプロパティ] ページが開きます。
  - b [ホスト名] ボックスで、そのシステムのホスト名を変更します。
  - c [OK] をクリックします。
- 4 Web アクセスサーバーのプロパティを変更するには、以下の手順に従います。

- a [Web アクセスサーバー] リンクをクリックします。[システムの Web アクセスサーバーのプロパティ] ページが開きます。

| プロパティ               | 値                                   |
|---------------------|-------------------------------------|
| システムのWebアクセスサーバーの使用 | <input checked="" type="checkbox"/> |
| ポート                 | 80                                  |
| コンテキスト              | /                                   |
| SSLを使用して接続する        | <input type="checkbox"/>            |
| SSLポート              | 443                                 |
| 認可レールム              | tw-app                              |

- b 必要に応じて以下を実行します。
- システムを Web アクセスサーバーとしては使用できないようにするには、[システムの Web アクセスサーバーの使用] ボックスをオフにします。
  - システムを Web アクセスサーバーとして使用できるようにするには、[システムの Web アクセスサーバーの使用] ボックスをオンにします。
  - [ポート] ボックスで、Web アクセスサーバーのポート番号を変更します。
  - [コンテキスト] ボックスで、Web アクセスサーバーへのパスを変更します。
  - データベースサーバーが SSL を使用しており、そのデータベースサーバーとの安全な通信を望む場合は、[SSL を使用して接続する] ボックスをオンにします。
  - [SSL ポート] ボックスで、サーバーが SSL 要求の送受信をリスンする TCP/IP ソケットのポートを変更します。

- [認可レلم] ボックスで、データベースサーバーが認証用に使用するレلم名を変更します。
  - c [OK] をクリックします。
- 5 データベースのプロパティを変更するには、以下の手順に従います。
- a [データベース] リンクをクリックします。[システムデータベースプロパティ] ページが開きます。

システムデータベースプロパティ

全般 | Webアクセスサーバー | データベース

| プロパティ         | 値                                   |
|---------------|-------------------------------------|
| システムデータベースの使用 | <input checked="" type="checkbox"/> |
| ホスト名          | hpkszh                              |
| 説明            |                                     |
| ポート           | 1521                                |
| ベンダー          | Oracle                              |
| データベースインスタンス  | ovpi                                |
| ユーザー名         | dsi_dpipe                           |
| パスワード         | *****                               |
| 最大接続数         | 10                                  |

- b 以下のいずれかを実行します。
  - システムをデータベースとしては使用できないようにするには、[システムデータベースの使用] ボックスをオフにします。
  - システムをデータベースとして使用できるようにするには、[システムデータベースの使用] ボックスをオンにします。
  - [説明] ボックスに、データベースの説明を入力します。
  - [ポート] ボックスにデータベースのポート番号を入力します。
  - [データベースインスタンス] ボックスにデータベースインスタンスを入力します。デフォルトでは、これらは、DSQUERY(Sybase の場合) または \$ORACLE\_SID(Oracle の場合) です。

これが、クライアントアプリケーションが情報を検索するデータベースの名前のデフォルトです。

Sybase の場合、このサーバー名は Sybase インタフェースファイル内で確認できます。このファイルは、Sybase SQL Server がインストールされているシステムにあります。Sybase インタフェースファイルの詳細については、『HP OpenView Performance Insight Installation Guide』を参照してください。

- [ユーザー名] ボックスに、データベースのユーティリティ名を入力します。
  - [パスワード] ボックスに、データベースのパスワードを入力します。
  - [最大接続数] ボックスに、このデータベースプールの最大接続数を入力します。
- c [OK] をクリックします。
- 6 変更が完了したら、Web アクセスサーバーを停止させてからまた起動します。

OVPI サービスの停止と起動の方法については、80 ページの「OVPI のプロセスの開始および停止」を参照してください。

## システムの削除

システムを削除するには、以下の手順に従います。

- 1 [Performance Insight の設定] ページを開きます。567 ページの「[Performance Insight システム] ページの表示」を参照してください。
- 2 削除するシステムの横にある  ([削除] アイコン) をクリックします。確認ダイアログボックスが表示されます。
- 3 [OK] をクリックします。

## メールサーバーの設定の変更

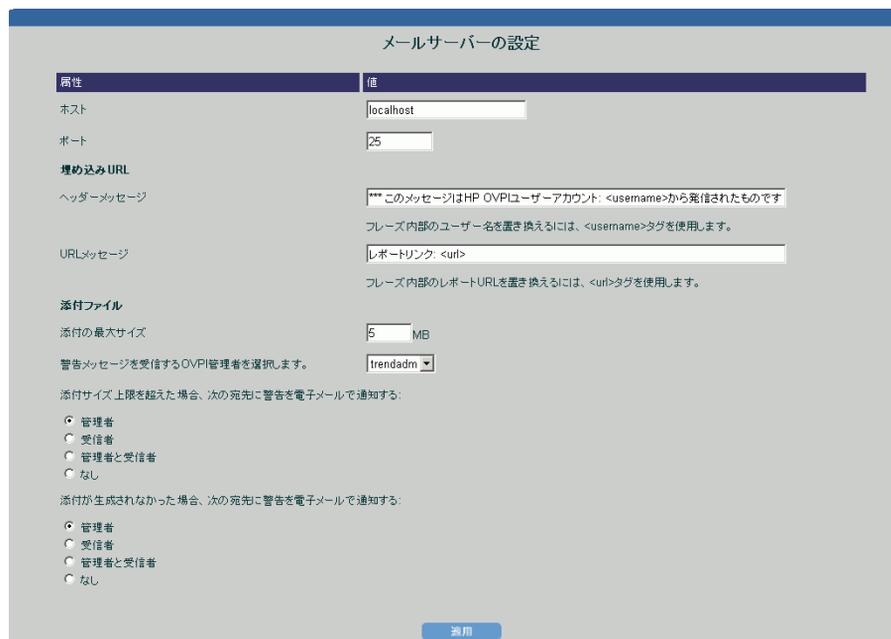
レポートを表示しているときに、**[Email]** ボタン  をクリックすると、別のユーザーにレポートの URL を電子メールで送信できます (詳細は、『**HP OpenView Performance Insight** レポートの作成および表示ガイド』を参照してください。)。この機能を使用するには **SMTP** メールサーバーが必要です。

すべてのユーザーが、[ビューの設定] ページの [レポートの電子メール送信の許可] オプションで、この機能を有効または無効にできます。このページを表示するには、リンクバーから **[設定]** を選択します。[設定] ツリーで、[配布済み項目] を展開し、次に **[表示]** をクリックします。

SMTP メールサーバーの設定を変更するには、以下の手順に従います。

- 1 リンクバーから、**[管理]** を選択します。[管理] ページが開きます。
- 2 [管理] ツリーで、[サービスの構成] を展開し、次に **[メールサーバー]** をクリックします。

[メールサーバーの設定] ページが表示されます。



| 属性                                                                                                                             | 値                                                                                              |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ホスト                                                                                                                            | localhost                                                                                      |
| ポート                                                                                                                            | 25                                                                                             |
| <b>埋め込みURL</b>                                                                                                                 |                                                                                                |
| ヘッダーメッセージ                                                                                                                      | ***このメッセージはHP OVPIユーザーアカウント: <username>から発信されたものです<br>フレーズ内部のユーザー名を置き換えるには、<username>タグを使用します。 |
| URLメッセージ                                                                                                                       | レポートリンク: <url><br>フレーズ内部のレポートURLを置き換えるには、<url>タグを使用します。                                        |
| <b>添付ファイル</b>                                                                                                                  |                                                                                                |
| 添付の最大サイズ                                                                                                                       | 5 MB                                                                                           |
| 警告メッセージを受信するOVPI管理者を選択します。                                                                                                     | trendadm                                                                                       |
| 添付サイズ上限を超えた場合、次の宛先に警告を電子メールで通知する:                                                                                              |                                                                                                |
| <input checked="" type="radio"/> 管理者<br><input type="radio"/> 受信者<br><input type="radio"/> 管理者と受信者<br><input type="radio"/> なし |                                                                                                |
| 添付が生成されなかった場合、次の宛先に警告を電子メールで通知する:                                                                                              |                                                                                                |
| <input checked="" type="radio"/> 管理者<br><input type="radio"/> 受信者<br><input type="radio"/> 管理者と受信者<br><input type="radio"/> なし |                                                                                                |

**適用**

- 3 以下のいずれかを実行します。

- a [ホスト]ボックスに、SMTP メールサーバーのホスト名を入力します。
- b [ポート]ボックスに、SMTP メールサーバーのポート番号を入力します。
- c [ヘッダーメッセージ]ボックスに、メールメッセージの [件名] 行に表示するメッセージを入力します。

<username> 変数で、メールメッセージの送信元のアカウントのユーザー名をメッセージ内に表示できます。

- d [URL メッセージ]ボックスに、メールメッセージのテキスト内にレポートの URL を提示する形態を入力します。

<url> 変数で、レポートの URL をメッセージ内に表示できます。

- 4 [適用] をクリックします。

## グラフの X 軸の時刻フォーマットの変更

Web アクセスサーバーやレポートビルダの、グラフの x 軸の時刻フォーマットを、graph.prp ファイルから編集できます。たとえば、config.prp ファイルの時刻データは、*E hh:mm a* で表されていますが、これは曜日、時:分、A.M. または P.M. に変換されます (Wed 12:05 pm など)。以下の表は利用可能な変数を示しています。

表 11 グラフの X 軸の時刻フォーマットの変数

| 記号 | 意味                        | 形式      | 例         |
|----|---------------------------|---------|-----------|
| G  | 「紀元後」の記号                  | テキスト    | 西暦        |
| y  | 年                         | 数値      | 1996      |
| M  | 月                         | テキストと数値 | July & 07 |
| d  | 日                         | 数値      | 10        |
| h  | A.M. または P.M. での時間 (1~12) | 数値      | 12        |
| H  | 1 日のうちでの時間 (0 ~ 23)       | 数値      | 0         |
| m  | 分                         | 数値      | 30        |

表 11 グラフの X 軸の時刻フォーマットの変数

| 記号 | 意味                         | 形式    | 例           |
|----|----------------------------|-------|-------------|
| s  | 秒                          | 数値    | 55          |
| S: | ミリ秒                        | 数値    | 978         |
| E  | 曜日                         | テキスト  | 火曜日         |
| D  | 年内の通算日                     | 数値    | 189         |
| F  | 月の曜日                       | 数値    | 2(7月の第2水曜日) |
| w  | 年における週                     | 数値    | 27          |
| W  | 月の通し週                      | 数値    | 2           |
| a  | A.M. または P.M.              | テキスト  | P.M.        |
| k  | 1日のうちの時間(1 ~ 24)           | 数値    | 24          |
| K  | A.M. または P.M. での時間(0 ~ 11) | 数値    | 0           |
| z  | タイムゾーン                     | テキスト  | 太平洋標準時      |
| '  | テキスト用エスケープ                 | 区切り記号 |             |
| "  | 単一引用符                      | リテラル  | '           |

グラフの x 軸の時刻フォーマットを設定するには、以下の手順に従います。

1 下の場所にある graph.prp ファイルを編集します。

— UNIX の場合 :

`DPIPE_HOME/data/graph.prp`

— Windows の場合 :

`DPIPE_HOME\data\graph.prp`

この場合、`DPIPE_HOME` は OVPI がインストールされているディレクトリです。

config.prp ファイルに記載される時刻フォーマットは、たとえば以下のように表示されます。

```
xaxis.hourly.time.format=E hh:mm a
xaxis.daily.time.format=E MMM d
xaxis.weekly.time.format=MMM d
xaxis.monthly.time.format=MMMMM
xaxis.summary.hourly.time.format=E hh:mm a
xaxis.summary.daily.time.format=E MMM d
xaxis.summary.weekly.time.format=MMM d
xaxis.summary.monthly.time.format=MMMMM
```

- 2 表 11 に挙げた変数を使用して、希望のフォーマットに変更します。
- 3 変更を行った後、以下を実行します。
  - a [ファイル]メニューの[保存]をクリックします。
  - b [ファイル]メニューの[終了]を選択します。
- 4 Web アクセスサーバーを停止し起動します。詳細は、80 ページの「[OVPI のプロセスの開始および停止](#)」を参照してください。



## 16 データのアーカイブ

データテーブルにデータを長期間保存していると、データベースのサイズが増大する原因となります。これは、要約とレポート作成の両方のパフォーマンスに悪影響を及ぼします。**OVPI** のデータアーカイブ機能はこのようなパフォーマンス低下の要因を防ぐのに役立ちます。データアーカイブ機能では、データテーブルの代わりにアーカイブテーブルを使用して、長期間データを保存します。

データアーカイブ機能により、**OVPI** の要約およびレポート作成に影響することなく長期間データを保存することができます。この機能を使用すると、**OVPI** データスキーマの異なる表領域に **OVPI** データを保存できます。

データのアーカイブには、アーカイブテーブル、アーカイブフラグ、アーカイブ保持期間、およびデータ保持プロファイルの概念があります。

### アーカイブテーブル

アーカイブテーブルはデータテーブルに存在するデータを長期間保存します。`datapipe_manager` コマンドを使用して、既存および新規のデータテーブルにアーカイブテーブルを作成します。1つのデータテーブルに関連付けられるアーカイブテーブルは1つだけです。アーカイブテーブルが関連付けられているデータテーブルはアクティブテーブルと呼ばれます。

アーカイブテーブルは、関連するデータテーブルと同じように区分されています。データテーブルの構造が変更される場合は常に、`datapipe_manager` コマンドでそのデータテーブルのアーカイブテーブルにも同じ変更を実行します。データテーブルが削除されると、`datapipe_manager` コマンドにより、関連するアーカイブテーブルは削除されます。



アーカイブテーブルのテーブルタイプは、常に「アーカイブ」です。

# データ保持プロファイル

データテーブルのデータ保持プロファイルは、データベースにデータテーブルを作成するとき作成されます。datapipe\_manager コマンドは、TEEL ファイルに指定されている情報を使って保持プロファイルを作成します。

datapipe\_manager コマンドは、保持プロファイルを参照するデータテーブルがない場合にその保持プロファイルを削除します。

保持プロファイルには以下の情報が含まれています。

- 名前: 保持プロファイルの名前を指定します。デフォルトでは、datapipe\_manager コマンドにはプロファイルの名前としてテーブルカテゴリ、保持期間、および期間タイプの組み合わせが使用されます。たとえば、TEEL ファイルに以下のパラメータを指定したと仮定します。

— TableTimeType: hourly

— TableCategory: DevResCiscoSwitch

— TableRetention: 12

保持ファイルの名前は、DevResCiscoSwitch12hourly になります。

- 保持: データテーブルにデータを保持する日数を指定します。
- アーカイブ保持: アーカイブテーブルにデータを保持する日数を指定します。デフォルトのアーカイブ保持値は、テーブルの期間タイプに基づいています。たとえば、テーブルの期間タイプが hourly である場合、アーカイブ保持期間は 30 日です。
- アーカイブフラグ: アーカイブテーブルが必要かどうかを示します。デフォルトでは、アーカイブフラグの値は [OFF] に設定されています。データテーブルのデータを保持するには、アーカイブフラグの値を [ON] に設定する必要があります。
- 説明: 保持プロファイルの説明を指定します。

# データ処理のアーカイブ

レポートパックをインストールする間、`datapipe_manager` コマンドは、TEEL ファイルに指定されている保持期間に基づいて各データテーブルの保持プロファイルを作成します。`datapipe_manager` コマンドは、データテーブルの期間タイプを基にプロファイル名とアーカイブ保持期間のデフォルト値を使用して、保持プロファイルを作成します。このプロファイルは **OVPI** デictionaryに登録されます。



同じ名前および同じ保持期間の保持プロファイルが既に存在する場合、`datapipe_manager` コマンドはそのプロファイルを使用し、新しいプロファイルを作成しません。

データテーブルのデータをアーカイブするには、保持プロファイルのアーカイブフラグの値を **[ON]** に設定する必要があります。アーカイブフラグが **[ON]** に設定されていると、`datapipe_manager` コマンドは、データテーブルに対してアーカイブテーブルを作成します。`datapipe_manager` コマンドは、アクティブテーブルとも呼ばれるデータテーブルの保持プロファイルをアーカイブテーブルにも割り当てます。

データテーブルに対してアーカイブフラグが **[ON]** に設定されていると、そのデータテーブルの指定の保持期間が終了すると、エージングプロセスによってデータがデータテーブルからアーカイブデータに移動します。たとえば、データテーブルの保持期間が **10** 日に設定され、アーカイブ保持期間が **60** 日に設定されていると、**10** 日後には `db_delete_data` コマンド (エージングプロセス) によってデータがデータテーブルからアーカイブデータに移動します。アーカイブテーブルのデータは、その後 **60** 日間利用可能です。**60** 日経過した後、`db_delete_data` コマンドによってアーカイブテーブルからデータが削除されます。これは、アクティブテーブル内とアーカイブテーブル内を合わせて合計 **70** 日間はデータが利用可能であることを意味します。データテーブルのアーカイブ保持期間およびアーカイブフラグの変更の詳細は、**584** ページの「[保持プロファイルの管理](#)」を参照してください。

## 保持プロファイルの管理

データを効率的にアーカイブするには、保持プロファイルを効率的に管理する必要があります。この章では、以下の項目について説明します。

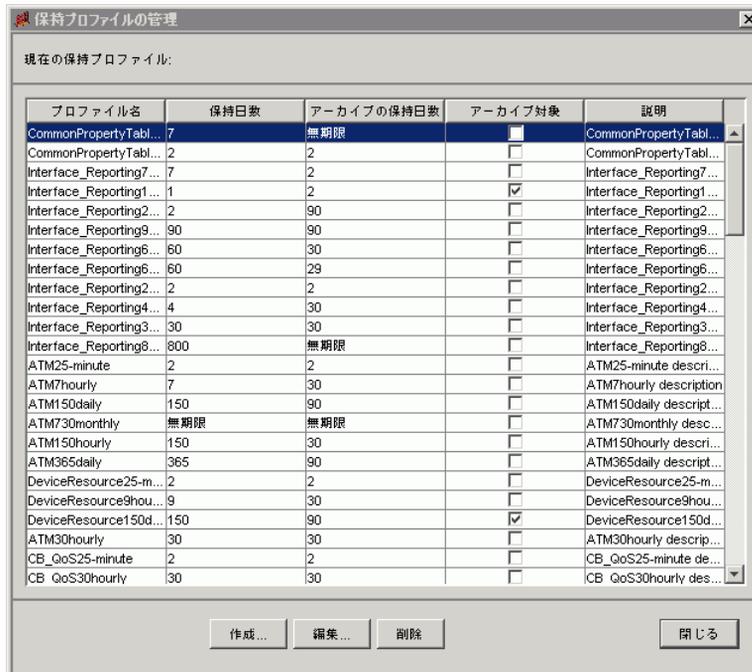
- 584 ページの「[保持プロファイルの表示](#)」
- 585 ページの「[保持プロファイルの追加](#)」
- 587 ページの「[保持プロファイルの変更](#)」
- 587 ページの「[保持プロファイルの削除](#)」

### 保持プロファイルの表示

現在のすべての保持プロファイルを表示するには、以下の手順に従います。

- 5 HP OpenView の Performance Insight Management Console ウィンドウを開きます。
- 6 **[管理]** から **[テーブル]** オプションの順に選択します。

- 7 [ファイル]->[保持プロファイル]->[保持プロファイルの管理]を順に選択します。[保持プロファイルの管理]ダイアログボックスが開きます。



[保持プロファイルの管理]ダイアログボックスで、保持プロファイルを作成、変更、および削除することができます。

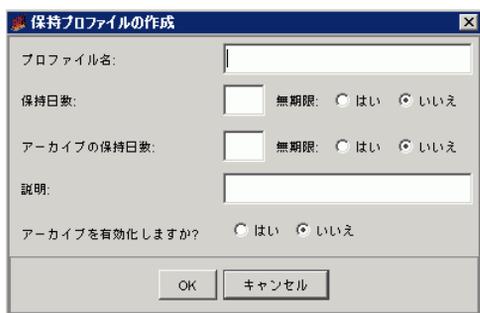
## 保持プロファイルの追加

レポートパックをインストールした後、OVPIシステムに新しい保持プロファイルを作成および追加することができます。保持プロファイルの作成時にエラーまたは問題が発生した場合は、エラーメッセージが表示されます。

保持プロファイルを追加するには、以下の手順に従います。

- 1 [保持プロファイルの管理]ダイアログボックスを開きます。[保持プロファイルの管理]ダイアログボックスを開く方法は、584 ページの「保持プロファイルの表示」を参照してください。

- 2 [保持プロファイルの管理] ダイアログボックスで、[作成 ...] をクリックします。[保持プロファイルの作成] ダイアログボックスが開きます。



このダイアログボックスでは、以下の情報を設定できます。

- [プロファイル名]: 保持プロファイルの名前。プロファイル名は最大で **64** 文字までです。
  - [保持日数]: データがデータテーブルまたはアクティブテーブルで利用可能な日数。永久的な保持を指定するには、[無期限] ラジオボタンで [はい] を選択する必要があります。
  - [アーカイブの保持日数]: データがアーカイブテーブルで利用可能な日数。永久的なアーカイブ保持を指定するには、[無期限] ラジオボタンで [はい] を選択する必要があります。
  - [説明]: 保持プロファイルの説明。プロファイルの説明は最大で **255** 文字までです。
  - [アーカイブを有効化しますか?]: アーカイブテーブルを作成するかどうかを指定するためのフラグ。
- 3 [保持プロファイルの作成] ダイアログボックスの [OK] ボタンをクリックして、システムに保持プロファイルを作成および保存します。

## 保持プロファイルの変更

OVPI では、製品のインストール時に作成されたデフォルトのプロファイルを変更することはできません。保持プロファイルを変更するには、以下の手順を実行する必要があります。

- 1 [保持プロファイルの管理] ダイアログボックスを開きます。[保持プロファイルの管理] ダイアログボックスを開く方法は、584 ページの「[保持プロファイルの表示](#)」を参照してください。
- 2 [プロファイル名] リストから、変更するプロファイルを選択します。
- 3 [編集...] をクリックします。[保持プロファイルの編集] ダイアログボックスが開きます。



保持プロファイルの名前以外のすべてのパラメータを変更することができます。

- 4 [OK] をクリックして、保持プロファイルを更新します。



[現在の保持プロファイル] リストにより、保持プロファイルが更新されたかどうかを確認できます。

## 保持プロファイルの削除

保持プロファイルを削除するには、以下の手順を実行する必要があります。

- 1 [保持プロファイルの管理] ダイアログボックスを開きます。[保持プロファイルの管理] ダイアログボックスを開く方法は、584 ページの「[保持プロファイルの表示](#)」を参照してください。
- 2 削除するプロファイルを [現在の保持プロファイル] リストから選択します。

- 3 [削除] をクリックします。確認のダイアログボックスが開きます。
- 4 [はい] をクリックして、システムからプロファイルを削除します。

▶ デフォルトのプロファイルまたは使用中のプロファイルを削除することはできません。

## データと内部テーブルの詳細の表示

データまたは内部テーブルに関する詳細情報を表示するには、テーブルマネージャの表示ペインでテーブルをダブルクリックします。

たとえば、`rate_IR_property` テーブルの詳細情報を表示するには、以下の手順を実行する必要があります。

- 1 テブルマネージャのナビゲーションペインで、[カテゴリ] コンボボックスから `Interface_Reporting` を選択します。

表示ペインに、`Interface_Reporting` カテゴリに関連付けられているすべてのテーブルが表示されます。

- 2 表示ペインで [`IR_property`] テーブルをダブルクリックします。

次の図のように、[データテーブル詳細] ダイアログボックスが開きます。

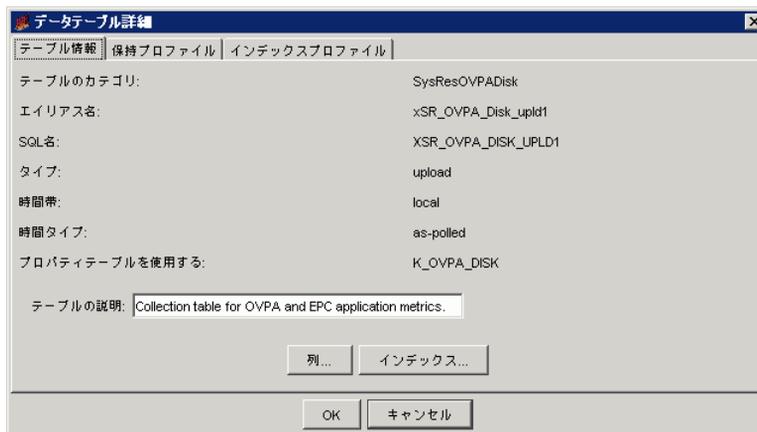


図 80 [データテーブル詳細] ダイアログボックス

[データテーブル詳細] ダイアログボックスを使用して、以下のことを実行できます。

- テーブルの列に関する情報の表示
- 説明を追加する
- 保持プロファイルを設定する
- テーブルの列に関する情報の表示
- 対応するインデックスに関する情報を表示する

## データテーブルの情報の表示

[データテーブル詳細] ダイアログボックスの [テーブル情報] タブには、選択されているテーブルのテーブル情報が表示されます。データテーブルの場合は、[テーブル情報] タブに、このデータまたは内部テーブルで使用されているプロパティテーブルの名前も表示されます。

## データテーブル保持プロファイルの設定

[データテーブル詳細] ダイアログボックスの [保持プロファイル] タブには、選択したデータテーブルの現在のデータ保持設定が表示されます。

[保持プロファイル] タブでは以下の作業を行うことができます。

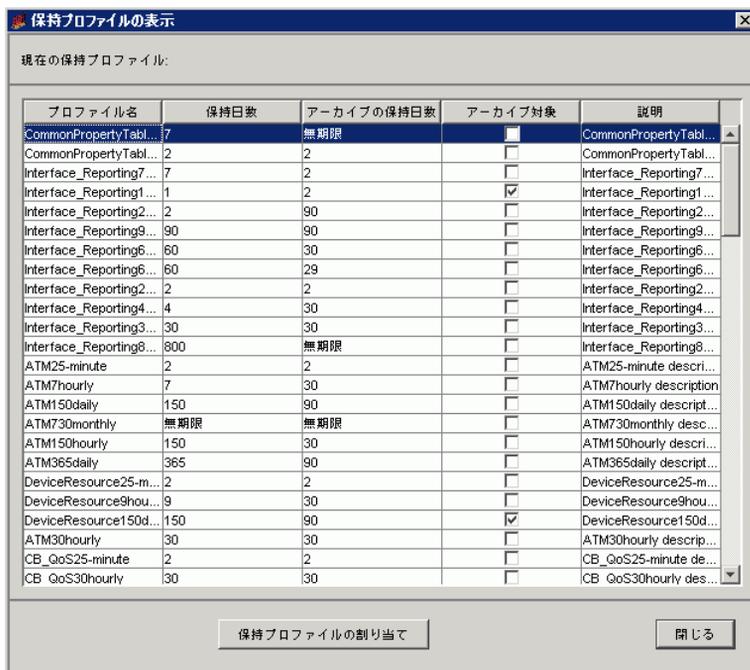
- 異なる保持プロファイルをデータテーブルに割り当てる
- 新しい保持プロファイルを作成する
- 既存の保持プロファイルを変更する

### 異なる保持プロファイルをデータテーブルに割り当てる

異なる保持プロファイルをデータテーブルに割り当て、アーカイブ関連の属性を変更することができます。新規に割り当てられたプロファイルに対してアーカイブが ON の場合、`datapipe_manager` により、プロファイルが割り当てられたデータテーブルのアーカイブテーブルを利用できるようにします。アーカイブテーブルの利用可能性チェックが完了すると、メッセージが表示されます。アーカイブテーブルが存在しない場合にアーカイブテーブルを作成するには、`datapipe_manager` コマンドを使用します。

異なる保持プロファイルデータをデータテーブルに割り当てるには、以下の手順に従います。

- 1 [データテーブル詳細] ダイアログボックスを開きます。[テーブルテーブル詳細] ダイアログボックスを開く方法は、589 ページの「データテーブルの情報の表示」を参照してください。
- 2 [保持プロファイル] タブを選択します。
- 3 [保持プロファイルの表示] をクリックします。[保持プロファイルの表示] ダイアログボックスが開きます。



- 4 データテーブルに割り当てる保持プロファイルを [現在の保持プロファイル] リストから選択します。
- 5 [保持プロファイルの割り当て] をクリックします。

## 複数のデータテーブルへの保持プロファイルの割り当て

単一の保持プロファイルを複数のデータテーブルに割り当てることができます。新規に割り当てられたプロファイルに対するアーカイブが ON の場合、datapipe\_manager コマンドにより、プロファイルが割り当てられたデータテーブルのアーカイブテーブルを利用できるようになります。

- 1 HP OpenView の Performance Insight Management Console ウィンドウを開きます。
- 2 [管理] から [テーブル] オプションの順に選択します。
- 3 [データベーステーブル管理] ウィンドウの表示ペインから [タイプ] を選択します。[データベーステーブル管理] ウィンドウのナビゲーションペインに、データテーブルのリストが表示されます。
- 4 SHIFT キーまたは CTRL キーを押して、保持プロファイルを割り当てるテーブルをナビゲーションペインから選択します。
- 5 [ファイル]->[保持プロファイル]->[保持プロファイルの割り当て...] の順に選択します。[保持プロファイルの表示] ダイアログボックスが開きます。
- 6 割り当てる保持プロファイルを [現在の保持プロファイル] リストから選択します。
- 7 [保持プロファイルの割り当て...] をクリックして、選択したプロファイルをすべての選択テーブルに割り当てます。

▶ [オブジェクトタイプ] として [表示] を選択すると、**保持プロファイルの割り当て** オプションが表示されます。

## データテーブルの説明の追加

[データテーブル詳細] ダイアログボックス (588 ページの図 80) の [説明] ボックスに、テーブルの説明を記入できます。[説明] ボックスに説明文を入力し [OK] をクリックします。説明文は最大で 255 文字までです。

## データテーブルの列情報の表示

テーブルの列に関する詳細を表示するには、[データテーブル詳細] ダイアログボックス (588 ページの図 80) の [列] をクリックします。[列] ウィンドウが開きます。

| エイリアス名                   | SQL名                     | データタイプ           | SQLタイプ        | 資産列                      | オブジェクト識別子                     | 空白可                                 | デフォルト値 |
|--------------------------|--------------------------|------------------|---------------|--------------------------|-------------------------------|-------------------------------------|--------|
| target_name              | TARGET_NAME              | snmp_char_string | varchar2(64)  | <input type="checkbox"/> |                               | <input checked="" type="checkbox"/> |        |
| request_ts               | REQUEST_TS               | unix_time        | date          | <input type="checkbox"/> |                               | <input checked="" type="checkbox"/> |        |
| received_ts              | RECEIVED_TS              | unix_time        | date          | <input type="checkbox"/> |                               | <input checked="" type="checkbox"/> |        |
| delta_time               | DELTA_TIME               | snmp_ticks       | number        | <input type="checkbox"/> |                               | <input checked="" type="checkbox"/> |        |
| user_name                | USER_NAME                | snmp_char_string | varchar2(8)   | <input type="checkbox"/> |                               | <input checked="" type="checkbox"/> |        |
| table_key                | TABLE_KEY                | snmp_char_string | varchar2(128) | <input type="checkbox"/> |                               | <input checked="" type="checkbox"/> |        |
| report_type              | REPORT_TYPE              | snmp_char_string | varchar2(1)   | <input type="checkbox"/> |                               | <input checked="" type="checkbox"/> |        |
| received_usec            | RECEIVED_USEC            | snmp_gauge       | number        | <input type="checkbox"/> |                               | <input checked="" type="checkbox"/> |        |
| cpmCPUTotalIndex         | CPMCPUTOTALINDEX         | snmp_integer     | number        | <input type="checkbox"/> | 1.3.6.1.4.1.9.9.109.1.1.1.1.1 | <input checked="" type="checkbox"/> |        |
| cpmCPUTotalPhysicalIndex | CPMCPUTOTALPHYSICALINDEX | snmp_integer     | number        | <input type="checkbox"/> | 1.3.6.1.4.1.9.9.109.1.1.1.1.2 | <input checked="" type="checkbox"/> |        |
| cpmCPUTotal5sec          | CPMCPUTOTAL5SEC          | snmp_gauge       | number        | <input type="checkbox"/> | 1.3.6.1.4.1.9.9.109.1.1.1.1.3 | <input checked="" type="checkbox"/> |        |
| cpmCPUTotal1min          | CPMCPUTOTAL1MIN          | snmp_gauge       | number        | <input type="checkbox"/> | 1.3.6.1.4.1.9.9.109.1.1.1.1.4 | <input checked="" type="checkbox"/> |        |
| cpmCPUTotal5min          | CPMCPUTOTAL5MIN          | snmp_gauge       | number        | <input type="checkbox"/> | 1.3.6.1.4.1.9.9.109.1.1.1.1.5 | <input checked="" type="checkbox"/> |        |
| dsi_key_id               | DSI_KEY_ID               | numeric          | number(10,0)  | <input type="checkbox"/> |                               | <input checked="" type="checkbox"/> |        |
| dsi_agg_type             | DSI_AGG_TYPE             | seq_key          | number(10,0)  | <input type="checkbox"/> |                               | <input checked="" type="checkbox"/> |        |
| ta_sysuptime             | TA_SYSUPTIME             | snmp_ticks       | number        | <input type="checkbox"/> |                               | <input checked="" type="checkbox"/> |        |
| ta_period                | TA_PERIOD                | unix_time        | date          | <input type="checkbox"/> |                               | <input checked="" type="checkbox"/> |        |
| ta_samples               | TA_SAMPLES               | snmp_integer     | number        | <input type="checkbox"/> |                               | <input checked="" type="checkbox"/> |        |

[列] ウィンドウには、テーブル内の各列に、以下の情報が表示されます。

[エイリアス名]: テーブル内の列の、論理的かつ一意な、内容を表した名前です。

[SQL名]: テーブル内の列の SQL 名です。

[データタイプ]: 各列の OVPI データタイプです。

[SQLタイプ]: この列のデータのデータベースタイプです。

[資産列]: この項目がオンの場合は、この列に、アセット要約で使用されるアセットプロパティが含まれています。

[オブジェクト識別子]: MIB ツリーにおける、選択されているオブジェクトへのパスです。ピリオドで区切られた数字の列で表されます。SNMP コレクタに関連付けられている列にのみ MIB OID 値が表示され、それ以外の列ではこの項目は空欄である場合があります。

[空白可]: この項目がオンの場合は、この列は NULL の可能性があります。

[デフォルト値]: 列のデフォルト値です。

## データテーブルのインデックス情報の表示

テーブルのインデックスに関する詳細を表示するには、[データテーブル詳細] ダイアログボックス (588 ページの [図 80](#)) の [インデックス] をクリックします。[インデックス] ウィンドウが開きます。



| インデックス名            | 一意                                  | クラスタ化                               | 列1          | 列2          |
|--------------------|-------------------------------------|-------------------------------------|-------------|-------------|
| RDRRCR_CPUTOTAL_I1 | <input checked="" type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/>            | TA_PERIOD   |             |
| PK_RDRRCR_CPUTOTAL | <input checked="" type="checkbox"/> | <input checked="" type="checkbox"/> | TA_PERIOD   | DSI_KEY_ID_ |
| RDRRCR_CPUTOTAL_I1 | <input checked="" type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/>            | DSI_KEY_ID_ |             |

キャンセル

[インデックス] ウィンドウには、テーブルの各インデックスに、以下の情報が表示されます。

[インデックス名]: テーブルのインデックスの名前です。

[一意]: この項目がオンの場合は、そのインデックスは一意です。

[クラスタ化]: この項目がオンの場合は、そのインデックスはクラスタ化されています。

[列 1]: インデックスの構築に使用される 1 つ目の SQL 名です。

[列 2]: インデックスの構築に使用される 2 つ目の SQL 名です。



インデックスの各要素ごとに列が表示されます。

## データテーブルのタイプ別またはカテゴリ別での表示

データテーブルをタイプ別またはカテゴリ別に表示するには、テーブルマネージャのナビゲーションペインで [データテーブル] フォルダを開きます。[データテーブル] フォルダには、以下のフォルダが含まれています。

- [タイプ]

このフォルダには、データのタイプ別に編成されたデータテーブルが含まれています。要約タイプのデータは、データの時間タイプ別に編成されたデータテーブルと共に、[概要] フォルダにあります。

- [カテゴリ]

このフォルダには、データのカテゴリフィールドに基づいて編成されたデータテーブルが含まれています。各カテゴリは、データベースに追加された順に表示されます。

たとえば、[カテゴリ] フォルダからルーターを選択した場合は、表示ペインに以下のような結果が表示されます。

| カテゴリ   | エイリアス名                  | SQL名             | タイプ  | 時間タイプ     |
|--------|-------------------------|------------------|------|-----------|
| router | rate_router_system      | Router_system_   | rate | 5-minute  |
| router | rate_router_ipaddress   | Router_ipaddress | rate | as-polled |
| router | test_tbl_1              | test_tbl_1       | raw  | hourly    |
| router | router_system           | router_system_   | raw  | 5-minute  |
| router | router_ipaddress        | router_ipaddress | raw  | as-polled |
| router | hour_router_SHroutersla | SHroutersla      | sum  | hourly    |
| router | day_router_SDroutersla  | SDroutersla      | sum  | daily     |



実際に表示される列は、この例の列とは異なる場合もあります。データテーブルの表示時にどの列を表示するかは、ユーザが選択できます。

表示される列は以下のとおりです。

- [カテゴリ]: テーブルのカテゴリです。カテゴリとは、**OVPI** のレポート機能によってテーブルのグループに割り当てられる標準のコードです。レポートのタイプに基づいて、複数のテーブルをグループにすることができます。最後に追加したカテゴリは、リストの末尾に表示されます。
- [エイリアス名]: データベース内のテーブルの、論理的かつ一意な、内容を表した名前です。
- [SQL 名]: **SQL Server** がテーブルを識別するための名前です。**SQL** クエリにはこの名前を使用します。
- [ビューである]: この項目がオンの場合は、選択されているテーブルが、データテーブルをクエリするために作成されたビューになります。
- [タイプ]: このテーブルに格納されているデータのタイプです。使用できるタイプは、未処理 (**raw**)、レート、要約、予測、資産、リンク、ベースライン、**Lkeys**、アップロードのいずれかです。
- [時間タイプ]: データの時間タイプです。時間タイプは、ポーリング時、分以下、5分、時単位、日単位、週単位、月単位、四半期単位、年単位のいずれかです。
- [時間帯]: テーブルのタイムゾーンです。
- [サイズ(行数)]: テーブルの行数です。
- [サイズ(KB)]: テーブルのサイズ(キロバイト単位)です。

- [データの保持 (日数)]: テーブル内にデータを保持する日数です。この日数プラス1日が経過したデータは破棄されます。保持のためのオプションは以下のとおりです。
- [無期限] – データは永久に削除されません。
  - [n] – データはこの日数だけ保存されます。
  - [デフォルト] – データはデフォルトの期間(時間タイプの保持期間)だけ保持されます。この値は、[テーブルのデフォルトの設定]ダイアログボックスの[データを保持する日数]ボックスで設定します。
- [アーカイブデータの保持 (日数)]: テーブル内にデータを保持する日数です。この日数プラス1日が経過したデータは破棄されます。アーカイブ保持のためのオプションは以下のとおりです。
- [無期限] – データは永久に削除されません。
  - [n] – データはこの日数だけ保存されます。
  - [デフォルト] – データはデフォルトの期間(時間タイプのアーカイブ保持期間)だけ保持されます。この値は、[テーブルの詳細設定]ダイアログボックスの[アーカイブ保持]ボックスで設定します。
- [アーカイブ]: これは、アーカイブテーブルを作成するかどうかを指定するためのフラグです。

# アーカイブ設定のガイドライン

アーカイブ設定のガイドラインは以下のとおりです。

- アクティブテーブルまたはアーカイブテーブルの適切な保持期間を設定した新しい保持プロファイルを作成します。
- アーカイブは、プロファイル自体の作成時にプロファイルに対して有効にするか、またはデータテーブルにプロファイルを割り当てた後に **ON** に設定することができます。
- 時単位またはそれよりも長い期間タイプが設定されているデータテーブルは、アーカイブに適しています。
- 以下の表は、アーカイブが **ON** の場合に推奨される最小保持期間を示しています。

表 12 推奨保持期間

| テーブルの時間タイプ | 最小保持期間 (日)         |
|------------|--------------------|
| ポーリング時     | 1                  |
| 分以下        | 1                  |
| 5分         | 1                  |
| 時単位        | 2                  |
| [日単位]:     | デフォルト (レポートパックが設定) |
| [週単位]:     | デフォルト (レポートパックが設定) |
| [月単位]:     | デフォルト (レポートパックが設定) |
| 四半期単位      | デフォルト (レポートパックが設定) |
| 年単位        | デフォルト (レポートパックが設定) |

- 上記で作成した保持プロファイルを、アーカイブする必要があるデータテーブルに割り当てます。
- テーブルの時間タイプ、テーブルタイプ、保持期間、およびテーブルカテゴリなどによってさまざまなプロファイルを作成します。このように、保持プロファイルだけでなく対応するアーカイブテーブルおよびアクティブテーブルの管理とメンテナンスも簡単に行えます。
- `db_delete_data` の完了に 1 時間以上かかる場合は、`trendtimer.sched` ファイルに `-c` オプションを追加して (`db_delete_data -c 5` など)、スレッドの数を増やします。
- アーカイブが ON の場合は、データファイルのサイズが増大しても利用できる十分な記憶領域を確保し、特に 'dpipe\_archive\_seg' と 'dpipe\_archive\_ind\_seg' 領域に関連付けられるようにします。
- アーカイブレポートのリストおよびそれに対応するデータテーブル (レポート作成の基になる) を以下に示します。この表は、データテーブルのアーカイブに対する設定時に適切なアーカイブレポートを選択する際に参考になります。

## Interface Reporting

表 13 レポートとそれに対応するデータテーブル

| 番号 | レポート                       | データテーブル                                                                                     |
|----|----------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1  | IR_log.rep                 | RIR_ProcedureLog                                                                            |
| 2  | System_Performance.rep     | SHIRPerformance、<br>SDIRPerformance                                                         |
| 3  | Adhoc_Interface_Search.rep | SHIRDevPorts                                                                                |
| 4  | Availability_Detail.rep    | SRIRDevPorts、SHIRDevPorts、<br>SDIRDevPorts                                                  |
| 5  | Capacity_Planning.rep      | SHIRDevPorts、SDIRDevPorts、<br>SMIRDevPorts、<br>SD42SDIRDevPortsFORE、<br>SD42SDIRDevPortsDOW |
| 6  | Discard_Exception.rep      | SHIRDevPorts、SDIRDevPorts、<br>SMIRDevPorts                                                  |

表 13 レポートとそれに対応するデータテーブル

| 番号 | レポート                         | データテーブル                                             |
|----|------------------------------|-----------------------------------------------------|
| 7  | Error_Exceptions.rep         | SHIRDevPorts、SDIRDevPorts、SMIRDevPorts              |
| 8  | Exception_Hot_Spots.rep      | SHIRDevPorts、SDIRDevPorts、SMIRDevPorts              |
| 9  | Utilization_Exception.rep    | SHIRDevPorts、SDIRDevPorts、SMIRDevPorts              |
| 10 | Grade_Of_Service.rep         | SHIRDevPorts、SDIRDevPorts、SMIRDevPorts              |
| 11 | Near_Real_Time.rep           | SRIRDevPorts、SHIRDevPorts、SDIRDevPorts、SMIRDevPorts |
| 12 | Near_Real_Time_Simple.rep    | SRIRDevPorts、SHIRDevPorts                           |
| 13 | Near_Real_Time_Snapshot.rep  | SRIRDevPorts、SHIRDevPorts、SDIRDevPorts、SMIRDevPorts |
| 14 | Service_Level_Management.rep | SHIRDevPorts、SDIRDevPorts                           |
| 15 | Top_Ten.rep                  | SDIRDevPorts                                        |
| 16 | Unreachable.rep              | SHIRDevPorts                                        |
| 17 | Utilization_Volume.rep       | SHIRDevPorts、SDIRDevPorts、SMIRDevPorts              |

## システムリソース

表 14 レポートとそれに対応するデータテーブル

| 番号 | レポート                    | データテーブル                                                        |
|----|-------------------------|----------------------------------------------------------------|
| 1  | Adhoc_Search.rep        | SD_SR_SysVolXcep                                               |
| 2  | Appl.rep                | SD_AppOVPA_byApp、<br>SD_AppOVPA_SysApp                         |
| 3  | Capacity_filesystem.rep | SD_SR_SysXcep、<br>SD_SR_SysFSXcep、<br>SD42SD_SR_SysFSXcep_FORE |
| 4  | Capactiy_memory.rep     | SH_SR_SysExec、<br>SD_SR_SysExec、<br>SM_SR_SysExec              |
| 5  | Execsum.rep             | SH_SR_SysExec、<br>SD_SR_SysExec、<br>SM_SR_SysExec              |
| 6  | Forecast_cpu.rep        | SD42SD_SR_SysXcep_Fore、<br>SD_SR_SysXcep                       |
| 7  | Forecast_filesystem.rep | SD_SR_SysXcep、<br>SD_SR_SysFSXcep、<br>SD42SD_SR_SysFSXcep_Fore |
| 8  | Forecast_memory.rep     | SD_SR_SysXcep、<br>SD42SD_SR_SysXcep_Fore                       |
| 9  | Hotspots.rep            | SR_SR_Kernel、SD_SR_SysXcep                                     |
| 10 | NRT_quickview.rep       | SR_SR_Kernel                                                   |
| 11 | NRT_snapshot.rep        | SR_SR_Kernel                                                   |
| 12 | Quickview.rep           | SH_SR_SysXcep、<br>SD_SR_SysXcep                                |
| 13 | Snapshot.rep            | SH_SR_SysXcep                                                  |

表 14 レポートとそれに対応するデータテーブル

| 番号 | レポート                               | データテーブル                                                              |
|----|------------------------------------|----------------------------------------------------------------------|
| 14 | SystemAvailability.rep             | SH_SR_SysUpGShift、<br>SD_SR_SysUp                                    |
| 15 | Topten.rep                         | SD_SR_SysVolXcep、<br>SD_SR_SysXcep、<br>SD_SR_SysFSXcep               |
| 16 | Toptentran.rep                     | SDTran_ByTransaction、<br>SDTran_Transaction、<br>SHTran_ByTransaction |
| 17 | TransactionBySystem.rep            | SHTran_Transaction、<br>SDTran_Transaction                            |
| 18 | CPUQuickView.rep                   | SH_SR_CPU(A)、SD_SR_CPU                                               |
| 19 | SystemResourceDiskDetails.<br>rep  | SH_SR_Disk、SD_SR_Disk                                                |
| 20 | SystemLogicalVolumeDetails<br>.rep | SH_SR_LogicalVolume、<br>SD_SR_LogicalVolume                          |
| 21 | SystemNetInterface.rep             | SH_SR_NetInterface、<br>SD_SR_NetInterface                            |
| 22 | ProcessDetails.rep                 | SH_SR_Process、<br>SD_SR_Process                                      |

## アーカイブの制限事項

アーカイブには以下の制限があります。

- 現在、**Oracle** でのみサポートされています。**Sybase** ではサポートされていません。
- 現在、アーカイブレポートは **IR** および **SR** レポートパックでのみ利用可能です。



# 17 システムの調整

この章では、HP OpenView Performance Insight (OVPI) システムのパフォーマンスを改善するための方法について説明します。多くの要因が、OVPI のパフォーマンスに、よい影響または悪い影響を与えます。それらの要因は、以下の領域に分類できます。

- ハードウェア
- オペレーティングシステムの設定パラメータ
- Sybase の設定パラメータ
- OVPI の処理オプション



これらの領域のすべてが、各インストールに影響するわけではありません。プラットフォームや作業負荷といった要因も、ある設定領域の全体効率に影響する可能性があります。

この章では、Oracle の設定パラメータについては説明しません。Oracle に固有の調整については、Oracle のマニュアルを参照してください。

## ハードウェアでの検討事項

全体のパフォーマンスに影響するハードウェアの要因は以下のとおりです。

- プロセッサのタイプとクロック速度
- プロセッサの数
- メモリーの量
- ディスクドライブのインターフェース
- 物理ディスクデバイスの数

## プロセッサのタイプとクロック速度

一般に、プロセッサの速度が遅い場合は、プロセッサがパフォーマンスの主要な要因となりますが、プロセッサの速度が向上するにつれて、ディスクとネットワーク I/O が OVPI の処理全体の速度に対する制限要因となっていきます。

HP は、選択したプラットフォームで利用可能な最速のプロセッサを使用することをお勧めします。

## プロセッサの数

OVPI は、マルチプロセッサ環境を利用し並列（同時）タスクを実行できるように設定できます。可能な限り、マルチプロセッサ構成にしてください。

## メモリー

Sybase で最大限のパフォーマンスを得るには、プラットフォームが何であれ、なるべく多くのメモリーを確保してください。Sybase は主に、データキャッシュとプロシージャキャッシュのバッファとしてメモリーを使用します。利用可能なディスクキャッシュが多いほど、システムが行う I/O が減るため、パフォーマンスが向上します。

表 15 は、所定の OVPI システムのメモリー容量を選択するためのガイドラインを示しています。

表 15      メモリーのガイドライン

| システムのメモリ<br>(1 プロセッサあたり) | アプリケーション   |
|--------------------------|------------|
| 1 GB                     | 小規模のインストール |
| 2 GB                     | 中規模のインストール |
| 2 GB 超                   | 大規模のインストール |

## 共有メモリー / スワップファイルのサイズ

共有メモリーの量は、物理メモリー量とスワップファイルサイズとの間の値にしてください。スワップファイルのサイズは、マシン内の物理メモリー量の 2～3 倍にしてください。

表 16 は、さまざまなオペレーティングシステムにおける、データベースサーバーのための最大メモリー割り当て量を示しています。ここに示されているのは、各タイプのオペレーティングシステムにおいて、**Adaptive Server Enterprise 11.9.2.5 ESD 1** で許される共有アドレス指定可能なメモリーの最大量です。

表 16 データベースサーバーのための最大割り当て

| オペレーティングシステム | 共有アドレス指定可能メモリーの最大量 |
|--------------|--------------------|
| HP-UX        | 2.75 GB            |
| Solaris      | 4 GB               |
| Windows      | 2 GB               |

システムが共有メモリーをスワップアウトしないようにすることで、パフォーマンスを改善できます。各オペレーティングシステムについて、その方法を以下に示します。

- **HP-UX**

次のパラメータを設定します。**SWAPMEM\_ON = 1** ただし、この設定により、利用可能な共有メモリーの量は減少します。

- **Solaris**

**ISM (Intimate Shared Memory)** 機能を使用して共有メモリーをロックします。ただし、**Sun4c** ファミリーのマシンは、現時点ではこの機能をサポートしていません。

## ディスクドライブのインタフェース

システム構成に十分なメモリーが備わっている場合、次に要因になると思われるものは、ディスク **I/O** です。

適切なディスクインタフェース(コントローラ)を選択することで、データがディスクからメモリーに高速に移動できるようにします。一般に、ファイバーチャネルと **SCSI** のインタフェースは、**IDE** や **Enhanced IDE** のインタフェースよりも性能が優れています。メモリーの場合と同様、インタフェースが高速であるほど、**I/O** バスからメモリーに高速にデータを移動して処理できます。

高速なインタフェースにより、複数の **I/O** デバイスをインタフェースのコントローラに接続しているシステムのスループットも向上します。一部のプラットフォームベンダーは、オプション(ハードウェア)のキャッシュコントローラを提供しており、非キャッシュコントローラに比べて大幅なパフォーマンス向上を実現できます。より大きなシステムの場合、複数のインタフェースを使用することもできます。

ファイバーチャネルは、中～大規模のほとんどのインストールで採用できるインタフェースです。ファイバーチャネルと **SCSI** を選択できる場合は、ファイバーチャネルを選択します。それが選択できない場合は、可能な限り **SCSI 320/160MB/sec** の **LVD** インタフェースを使用してください。

**15,000RPM** のハードドライブを使用することをお勧めします。

## 物理ディスクデバイスの数

一般に、重要なファイルがディスクドライブ上に計画的に配置されている場合、それらドライブの数が多いほどスループットは向上します。たとえば、通常のオペレーティングシステムで使用するすべてのデータを単一のデバイスに配置し、残りのデバイスをバックアップとして使用している場合は、複数ディスク構成による利点は得られません。

複数ディスクの使用を検討するときは、データベースのトランザクションログをデータベース自身とは別のデバイスに置いてください。高速な **RAID** ボリュームがあれば、十分な空き容量がなくても、データベースとトランザクションログとを同じボリュームに配置できます。また、オペレーティングシステムのページ/スワップ/仮想メモリーのファイルも別のデバイス(1つまたは複数)に配置します。高速な **I/O** システムがある場合は、**Sybase** 用の **CPU** の数を増やします。

一部のベンダーが販売しているディスクアレイ製品には、複数のドライブが備わっているだけでなく、高度なハードウェアが用意されているため、データベースステアブルのハードウェア分割、埋め込みキャッシュ、ディスクミラーリング、**RAID**、およびその他のオプションに対応でき、スループットとデータの冗長性を向上させることができます。これらのサブシステムは、大規模なインストールで、またはハードウェアの予算が制限要因とならない小～中規模のインストールで、望ましい選択肢となります。

RAID は、「ミラーリングとストライピング (1+0)」、「ストライピングとミラーリング (0+1)、または「ミラーリング、ストライピング、およびチェックサム (5)」でセットアップする必要があります。1+0 と 0+1 のセットアップは、5 のセットアップよりも多くの容量が必要ですが、より高速です。また、1+0 のセットアップの方が復旧が簡単です。RAID を使用する場合は、ストライプサイズを 128KB に設定します。

## オペレーティングシステムのパラメータの設定

使用しているオペレーティングシステムの種類に応じて、さまざまな設定パラメータを調整する必要があります。各オペレーティングシステムについて、その方法を以下に示します。

- HP-UX

カーネル全体を通してさまざまなアルゴリズムと式が、**maxusers** パラメータを使用します。このパラメータの値は、システムで許される実際のユーザー数に対してでなくシステムリソース割り当てに対しての制限になります。また、一部のシステムのテーブルサイズやその他のパラメータ (**nproc**、**nccallout**、**ninode**、**nfile** など) の定義の一部でもあります。**nproc**、**nccallout**、**ninode**、**nfile** の各パラメータは固定値である必要があります。**maxusers** は 124 に設定します。

- Solaris

**maxusers** パラメータのデフォルト値は、物理メモリー (メガバイト単位)、または 1024 のいずれか小さい方です。この値は 2048 より大きく設定することはできません。ユーザー接続数を調整したい場合、**ulimit** ユーティリティを使用して **nfiles (descriptors)** パラメータを設定します。

## Oracle パラメータの設定

この章では、Oracle の調整方法は説明していません。OVPI のインストールプログラムは、Oracle データベースのいくつかのパラメータへのデフォルトを提供しています (それらのパラメータについては、『HP OpenView Performance Insight Oracle データベースのインストールおよびアップグレードガイド』の第 3 章を参照してください)。問題がある場合は、Oracle データベースの管理者に問い合わせてください。

# Sybase パラメータの設定

この項は、以下の 2 つの要素から構成されます。

- 管理コンソールを使用してアクセスする、データベースチューナーツールについて説明します。このツールを使うと、**Sybase** のスループット全体に影響を与えるパラメータを参照し、修正することができます。
- 設定パラメータによっては、データベースチューナーからアクセスできないものもあります。この章では、**Sybase** 設定コマンド `sp_configure` の使用方法についても説明します。このコマンドは、これらのパラメータ設定を表示したり変更したりするために使用できます。

▶ 任意のシステムまたはアプリケーションのパフォーマンス調整を行う場合、パラメータは 1 回に 1 つだけ変更できます。1 回に複数のパラメータを変更して、最終的な変更の結果パフォーマンスが低下した場合には、マイナスの影響の原因となった変更を簡単に特定することができません。

## データベースチューナーの使用

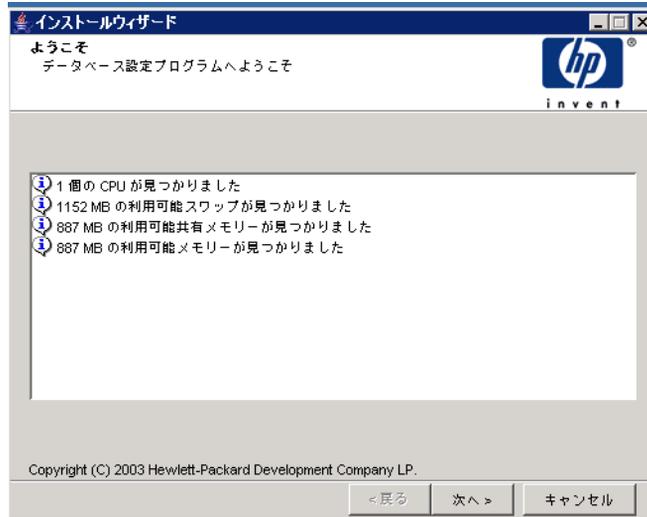
このツールを使うと、**Sybase** のスループット全体に影響を与えるパラメータを参照し、修正することができます。

▶ データベースチューナーは **Sybase** データベースでのみ使用できます。

データベースチューナーを使用するには、以下の手順に従います。

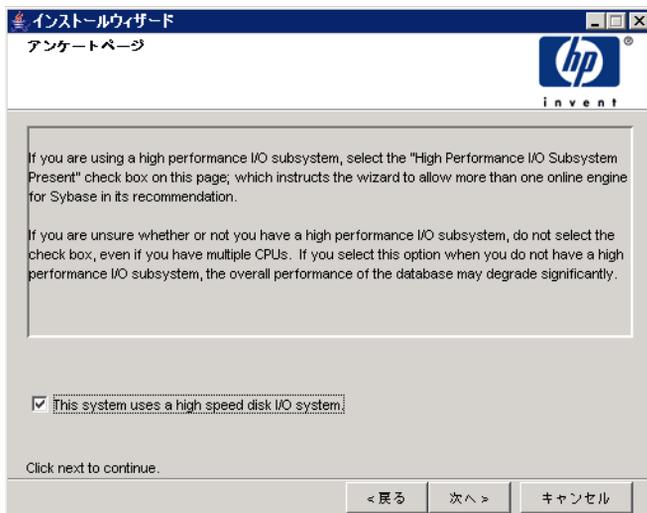
- 1 **UNIX システムのみ**： データベースチューナーを実行するシステムに root ユーザーとしてログオンします。
- 2 以下のいずれかの方法で、データベースチューナーを実行します。
  - コマンド行  
シェルウィンドウ (**UNIX**) またはコマンドプロンプトウィンドウ (**Windows**) を開いて、「**dbtuner**」と入力します。
  - 管理コンソール  
管理コンソールを起動します。(詳細は、96 ページの「**管理コンソールの起動**」を参照してください)。管理者権限のあるアカウントで管理コンソールにログオンして、[ツール] メニューから、[**データベース チューナー**] を選択します。

[ ようこそ ] ウィンドウに、ウィザードを実行しているシステムの物理的特性(たとえば利用可能なメモリの量など)がいくつか表示されます。



3 [次へ] をクリックします。

[ アンケート ] ウィンドウが表示されます。



4 以下のいずれかを実行します。

- RAID など、高パフォーマンスの I/O システムを使用している場合は、**[This system uses a high speed disk I/O system]** チェックボックスをオンにして、**[次へ]** をクリックします。

このチェックボックスをオンにすると、最大オンラインエンジンパラメータに影響があります。詳細は、614 ページの「**最大オンラインエンジン**」を参照してください。

- 高パフォーマンスの I/O サブシステムを使用していない場合は、**[次へ]** をクリックします。

[Sybase 連続情報] ウィンドウに Sybase の設定に関する情報が表示されます。

5 情報を確認し、変更を行って、**[次へ]** をクリックします。

[構成] ウィンドウが開きます。

| パラメータ                     | 調整済み    | 推奨      |
|---------------------------|---------|---------|
| SQL Perfron Integration   | 0       | 0       |
| additional network memory | 5013504 | 5013504 |
| max network packet size   | 16384   | 16384   |
| max online engines        | 1       | 1       |
| number of devices         | no      | no      |

Accept Recommendations

Reset Page Values

Change Value

|        |              |
|--------|--------------|
| Min:   | no selection |
| Max:   | no selection |
| Units: | no selection |

続行するには [次へ] をクリックします。

<戻る    次へ>    キャンセル

このページには、設定パラメータの現在値および推奨値が表示されます。**[調整済み]** 列の値が現在の設定値です。**[推奨]** 列の値は、ご使用の Sybase データベースに関する推奨値です。

**[調整済み]** 列の値は、異なる色で表示されることがあります。これらの色は、以下の値を示します。

- 推奨範囲内の値は黒色で表示されます。
- 推奨値を超える値は青色で表示されます。
- 推奨値に満たない値は赤色で表示されます。

パラメータの詳細は、613 ページの「**About Sybase パラメータ**」を参照してください。この項では、パラメータの変更を有効にするために Sybase を再起動する必要があるかどうかについても説明します。

- 6 パラメータ値を確認して、以下のいずれかを実行します。
  - **[推奨]** 列の値に合致するように **[調整済み]** 列の値を変更するには、**[Accept Recommendations]** をクリックします。
  - パラメータの値を変更するには以下を実行します。
    - パラメータを選択します。パラメータの現在値は **[値]** ボックスに表示されます。このボックスは **[Change Value]** ボタンの左にあります。

パラメータに指定可能な最小値と最大値、およびパラメータの単位（バイトなど）が **[Change Value]** ボタンの下に表示されます。

- 値を変更して、**[Change Value]** をクリックします。
- **[次へ]** をクリックして続行します。

必要に応じて、**[Reset Page Values]** をクリックしてパラメータを現在値にリセットします。

**[調整済み]** 列に新しい値が表示されますが、この手順を完了するまで変更は有効になりません。

▶ 1回に1つのパラメータだけを変更することを強くお勧めします。1回に複数のパラメータを変更して、全体の変更の結果パフォーマンスが低下した場合には、マイナスの影響の原因となった変更を簡単に特定することができません。

インストールウィザード：**[選択の概要]** ウィンドウが表示されます。



- 7 以下の手順に従います。
  - a 設定の要約を確認します。
  - b 必要であれば、**[戻る]** をクリックして前のページに戻り、変更します。
  - c **[インストール]** をクリックします。

## About Sybase パラメータ

この項では、Sybase 設定ウィザードを使用して 611 ページの**手順 6**を実行する際に設定できるパラメータについて説明します。詳細は『**HP OpenView Performance Insight Sybase** データベースのインストールおよびアップグレードガイド』を参照してください。

- ▶ 変更を有効にするために Sybase の再起動を必要とするパラメータの変更を行う場合、すべての変更を完了した後に Sybase を再起動するか、または各変更が完了するたびに Sybase を再起動することができます。

### SQL Perfmon の統合

**SQL Perfmon の統合**パラメータを使用すると、Windows NT パフォーマンスモニタによる Adaptive Server 統計値の監視を有効化したり無効化したりできます。値 1 は、Windows NT パフォーマンスモニタでの Adaptive Server のパフォーマンス監視を有効にします。値 0 は監視を無効にします。Sybase の制限により、この値は 0 に設定され、変更することはできません。

- ▶ このパラメータは、Windows NT システムだけに適用できます。

### ネットワークメモリ追加

**ネットワークメモリ追加**パラメータは、デフォルトの packet size よりも大きいネットワーク packet に使用可能な追加メモリの最大サイズを設定します。Adaptive Server は、入力した値を切り捨てて 2K に最も近い概数にします。

このパラメータとネットワーク packet の最大サイズを変更して、サーバーとクライアント間のデータスループットを増加させることができます。これらの値を増加すると、大量のデータを転送するアプリケーションのパフォーマンスを向上させることができます。

**追加のネットワークメモリーを増やさずにネットワーク packet の最大サイズを増やした場合**、デフォルトの packet size を超えるサイズの packet を送受信することはできません。これは、割り当てられたすべてのネットワークメモリーがデフォルトのサイズでユーザーに予約されるためです。ログインした際に大きいサイズの packet を要求すると、アプリケーションはデフォルトのサイズの packet を使うという警告メッセージが表示されます。

この値は推奨値に設定されており、変更することはできません。

## ネットワークパケットの最大サイズ

ネットワークパケットの最大サイズパラメータは、**Adaptive Server** と通信するクライアントが要求できるネットワークパケットの最大サイズを指定します。この値は **312** の倍数である必要があります。

アプリケーションの一部がネットワーク全体で大量のデータを送受信する場合、大きなパケットサイズを使用することでこれらのアプリケーションのパフォーマンスを向上させることができます。最良のパフォーマンスのために、ネットワークを構成するパケットサイズと共に効率的に機能するサーバーのパケットサイズを選択します。以下の **2** つの目的があります。

- ネットワークにサーバーが行う読み取りおよび書き込みの数を減らす
- ネットワークパケットの未使用の領域を減らす（ネットワーク全体のスループットを増やす）

追加のネットワークメモリーを増やさずにネットワークパケットの最大サイズを増やした場合、デフォルトのパケットサイズを超えるサイズのパケットを送受信することはできません。これは、割り当てられたすべてのネットワークメモリーがデフォルトのサイズでユーザーに予約されるためです。ログインした際に大きいサイズのパケットを要求すると、アプリケーションはデフォルトのサイズのパケットを使うという警告メッセージが表示されます。

この値を変更したら、変更を有効にするために **Sybase** を再起動する必要があります。

## 最大オンラインエンジン

単一プロセッサ環境の場合、**Sybase** は**最大オンラインエンジン**のデフォルト値である **1** つの **CPU** を使用するように設定されます。マルチプロセッサ環境の場合、追加 **CPU** を使用するように **Sybase** を設定できます。複数の **CPU** を使用すると、**1** つまたは複数のプロセッサをクライアントプロセスに割り当てることにより、スループットにゲインが生じます。

- ご使用のシステムが高パフォーマンスのディスク **I/O** システムを備えた複数の **CPU** を使用していない場合は、**最大オンラインエンジン**のデフォルト値の **1CPU** を変更しないでください。変更すると、内部の競合のためにパフォーマンスにマイナスの影響が生じることがあります。
- **RAID** など、高パフォーマンスのディスク **I/O** システムを備えた複数の **CPU** を使用するシステムの場合は、**最大オンラインエンジン**の値を増やすことにより、複数の **CPU** を活用することができます。この場合、システムで使用する **CPU** の数から **1** を差し引いて推奨値を算出します。たとえば、**4** つの **CPU** がある場合、**[推奨]** 列の値は **3** になります。

この値を変更したら、変更を有効にするために **Sybase** を再起動する必要があります。

### デバイスの数

この数はデータベースにデータを保存できるデバイスの最大数を表します。各デバイスのサイズは、オペレーティングシステムによって幾分異なりますが、**2GB** を超えることは稀です。この制限のために、大規模なインストールには小規模なインストールよりも多くのデバイスが必要になります。

この値を変更したら、変更を有効にするために **Sybase** を再起動する必要があります。

### ロックの数

**ロックの数**パラメータは、**Adaptive Server** のすべてのユーザーに使用可能なロックの合計数を設定します。

**Adaptive Server** が必要とするロックの合計数は、実行中のクエリの数と性質によって異なります。指定されているロックの合計数が十分でない場合、以下のようなアプリケーションの問題が発生することがあります。

- ロックを取得できない
- 接続に失敗する

ロックの数が適切であることを確認してください。デフォルトでは、**Sybase** には **5,000** ロックが定義されています。**HP** は、最低でも **20,000** ロックを推奨します。多数の子コレクタまたは **trendcopy** のパラレルインスタンスを実行する実装では、**40,000** から **80,000** ロックを使用する必要があります。

この値を変更したら、変更を有効にするために **Sybase** を再起動する必要があります。

### オープンインデックスの数

**オープンインデックスの数**は、**Adaptive Server** において同時に使用できるインデックスの最大数です。この数字を算出する方法を **Sybase** が変更したため、**OVPI** ではこの値を **3000** に設定することで最も関連するエラーを防止します。

インデックスのプールが尽きたことを示すエラーが **Sybase** に発生しない限り、この値を保持することをお勧めします。

この値は推奨値に設定されており、変更することはできません。

## オープンオブジェクトの数

オープンオブジェクトの数は、Adaptive Server において同時に使用できるオブジェクトの最大数です。この数字を算出する方法を Sybase が変更したため、OVPI ではこの値を 3000 に設定することで最も関連するエラーを防止します。

オブジェクトのプールが尽きたことを示すエラーが Sybase に発生しない限り、この値を保持することをお勧めします。

この値は推奨値に設定されており、変更することはできません。

## ユーザー接続の数

ユーザー接続の数はパラメータは、Adaptive Server に同時に接続できるユーザー接続の最大数を設定します。この数はプロセスの最大数を表すものではありません。プロセスの最大数は、このパラメータの値だけでなく他のシステムアクティビティによっても異なります。

ユーザー接続数は注意して選択する必要があります。少なく割り当てると、タスクが Sybase に接続できなくなります。ユーザー接続が多すぎると、データキャッシュに割り当て可能であったメモリを浪費します。

ユーザー接続数は 100 に設定することをお勧めします。ほとんどの場合、この値で十分です。メモリが制約されている場合、より正確な計算によってさらにメモリを節約できることがあります。最適なユーザー接続数を計算するには、以下の数を追加します。

- 子の SNMP コレクタの合計数 (`mw_collect -c` オプション)。-c がいない場合、デフォルトは 5 です。
- 必要な同時 trendcopy プロセスの合計数。
- 必要な同時クライアントプロセスの合計数。
- その他の Sybase プロセス (`bcp`、`isql` など) に対応するには、5 を追加します。

この値を変更したら、変更を有効にするために Sybase を再起動する必要があります。

## プロシージャキャッシュの割合

プロシージャキャッシュの割合パラメータは、Adaptive Server のメモリ要求が満たされた後、プロシージャキャッシュに割り当てられるメモリの割合を指定します。Adaptive Server のメモリ要求とは、ロック、ユーザー接続、コード自体、

およびその他のリソースが必要とするメモリの合計です。残りのメモリは、プロセスキャッシュとデータキャッシュ間に分割されますが、**プロセスキャッシュの割合**の値に基づいてプロセスキャッシュが先に割り当てられます。

プロセスキャッシュの割合の最適な値はアプリケーションによって異なるため、この値を再設定することにより **Adaptive Server** のパフォーマンスが向上する場合があります。たとえば、複数の異なるプロセスまたは特定のクエリを実行する場合、アプリケーションではプロセスキャッシュをより多く使用します。したがってこの値を増やす必要があります。

この値を変更したら、変更を有効にするために **Sybase** を再起動する必要があります。

### 分単位のリカバリ間隔

**分単位のリカバリ間隔**パラメータは、システム障害時に **Adaptive Server** がプロセスのリカバリ完了に要する最大分数をデータベースごとに設定します。

リカバリ間隔は、**Adaptive Server** の障害時にも有効な長時間の実行、短時間のログ作成トランザクション（インデックスの作成など）には影響しません。これらのトランザクションの取り消しにはトランザクションの実行に要するのと同じくらい時間がかかる場合があります。

**Adaptive Server** では、この設定と各データベースのアクティビティの量を使用して、各データベースのチェックポイントのタイミングを判定します。**Adaptive Server** がデータベースのチェックポイントを実行するとき、変更されているキャッシュのすべてのデータページがディスクに書き込まれます。これにより、短時間の高 I/O が作成できます。また、チェックポイントは、**truncate log on chkpt** オプションが設定されている各データベースのトランザクションログの切り捨てを含むその他の管理作業も実行します。スリーピングチェックポイントプロセス「wakes up」は、約 1 分間に 1 回 **truncate log on chkpt** 設定をチェックします。また、チェックポイントが必要かどうかを判定するリカバリ間隔もチェックします。

この値を変更した場合、変更を有効にするために **Sybase** を再起動する必要はありません。

## 合計メモリ

合計メモリパラメータは、**Adaptive Server** がオペレーティングシステムから割り当てられる **2K** 単位でのメモリのサイズを設定します。利用可能なメモリが多いほど、**Adaptive Server** が内部バッファにとキャッシュに使用できるリソースは多くなり、サーバーがディスクからデータを読み取らなければならない回数が削減されます。

この値を設定する前に、システムに必要なその他のメモリを見積もってください。**Adaptive Server** の起動時には、合計メモリパラメータで設定されているメモリの全容量が取得されなければなりません。この値を非常に大きく設定した場合、その他のメモリ要求のためにメモリの全容量が利用できないと、**Adaptive Server** は起動しません。

この値を変更したら、変更を有効にするために **Sybase** を再起動する必要があります。



**UNIX** ポートを共有メモリ設定パラメータに変更する必要がある場合があります。

さらに、クライアントの作業と **Sybase** がシステムのページングやスワッピングを引き起こさないように注意してください。これは、**Windows** のパフォーマンスモニターまたはさまざまな **UNIX** ポートで **sar** または **vmstat** を使用してチェックすることができます。

## 4K プールと 16K プール

**4K** プールおよび **16K** プールとは、設定可能なデータキャッシュプールのことです。

デフォルトでは、**Sybase** はデフォルトデータキャッシュと呼ばれる 1 つのデータキャッシュだけを装備しています。このキャッシュには **2K** バッファだけが含まれます。インストールプロセスで、デフォルトデータキャッシュにバッファプールが追加されます。**15MB** のメモリが **4K** バッファプールに割り当てられます。そして、残りの **40%** が **16K** バッファプールに割り当てられ、**60%** が **2K** バッファプールに割り当てられます。

これらの値のいずれかまたは両方を変更した場合、変更を有効にするために **Sybase** を再起動する必要はありません。

## sp\_configure コマンドの使用

**sp\_configure** コマンドを使用すると、Sybase 設定パラメータを表示したり変更したりすることができます。

- ▶ Sybase パラメータを変更するために **sp\_configure** への呼び出しが必要な変更を行う場合、既存の設定ファイルをコピーして必要な変更を含めた新しい設定ファイルが作成されます。たとえば、**sp\_configure** を使用して既存の値に 20 の変更を行った場合、20 の追加設定ファイルが作成されます。同じ値を 20 回変更するか 20 の異なる値を変更するかは関係ありません。各ファイル名には、.001 から始まって増分する 3 桁の拡張子が含まれます。

Sybase から設定リストを取得するには、以下のコマンドを入力します。

```
isql -Usa -P
1> sp_configure
2> go
```

以下の項では、表示される可能性のあるパラメータとそれらのパラメータの推奨値について説明します。変更を有効にするためにサーバーの再起動を必要とする変更を行う場合

- ▶ 変更を有効にするためにサーバーの再起動を必要とする変更を行う場合、すべての変更を完了した後にサーバーを再起動するか、または各変更が完了するたびにサーバーを再起動することができます

## オペレーティングシステム - 非同期の I/O プロセス

一部のオペレーティングシステムでは、利用可能なオペレーティングシステムのリソースを最大限に活用できるように Sybase を設定する必要があります。

HP/UX の場合は、非同期 I/O プロセスで Sybase の I/O スループットを最大にする必要があります。出力には以下のようなセクションがあります。

Group: O/S Resources

| Parameter Name | Default | Memory Used | Config Value |
|----------------|---------|-------------|--------------|
|----------------|---------|-------------|--------------|

Run Value

|                        |   |   |   |
|------------------------|---|---|---|
| o/s asynch i/o enabled | 0 | 0 | 0 |
|------------------------|---|---|---|

「o/s asynch i/o enabled」と表示される行に注意してください。Run Value がゼロの場合、オペレーティングシステムのカーネルは非同期 I/O を有効にしていません。この場合、これを有効にするようにシステム管理者に依頼してください。

▶ 出力のテキストは、使用している Sybase のバージョンによってわずかに異なります。

## トランザクションログキャッシュ

指定されたサーバーにあるすべてのデータベースは、自動的にデフォルトのデータキャッシュをトランザクションログに使用します。パフォーマンスを向上するには、デフォルトのデータキャッシュ用に 4K バッファプールを作成することを強くお勧めします。さらに、OVPI データベース専用のログキャッシュも作成します。これらの作業を完了するには、「620 ページの「デフォルトのデータキャッシュの変更」」および「620 ページの「専用ログキャッシュの作成」」の情報を使用してください。

### デフォルトのデータキャッシュの変更

デフォルトのデータキャッシュ用に 8MB、4K バッファプールを作成するには、以下のコマンドを使用します。

```
isql -Usa -P
sp_poolconfig "default data cache", "8M", "4K"
go
```

### 専用ログキャッシュの作成

OVPI データベースログページ専用 (logonly オプション) に 12MB の名前付きキャッシュを作成するには、以下のコマンドを使用します。

```
isql -Usa -P
sp_cacheconfig 0logcache0, 012M0, logonly
go
```

名前付きキャッシュが作成されたら、以下の手順でそのキャッシュを OVPI データベースのトランザクションログに結び付けます。

▶ トランザクションログをログキャッシュに結びつける前に、データベースをシングルユーザーモードに設定する必要があります。

- 1 データベースをシングルユーザーモードに設定するには、以下のように入力します(処理する前に、実行中のアクティブな OVPI トランザクションがないことを確認してください)。

```
isql -Usa -P
sp_dboption dpipe_db,Osingle user0,true
go
```

出力は次のようになります。

```
Database option 'single user' turned ON for database
'dpipe_db'.
Run the CHECKPOINT command in the database that was changed.
(return status = 0)
```

- 2 **dpipe\_db** データベース (**dpipe\_db** を使用) に切り替え、以下のように、後に **sp\_bindcache** コマンドが続くチェックポイントコマンドを発行します。

```
1> use dpipe_db
2> go

1> checkpoint
2> go

1> sp_bindcache logcache, dpipe_db, syslogs
2> go
```

- 3 **master** データベースに切り替えて、**dpipe\_db** データベースを正常な状態 (マルチユーザー) に戻します。

```
1> use master
2> go

1> sp_dboption dpipe_db,Osingle user0,false
2> go
```

出力は次のようになります。

```
Database option 'single user' turned OFF for database
'dpipe_db'.
Run the CHECKPOINT command in the database that was changed.
(return status = 0)
```

- 4 以下のコマンドを入力して、**dpipe\_db** データベースにチェックポイントを実行します。

```
1> use dpipe_db
2> go
```

```
1> checkpoint
2> go
```

- 5 新しく作成されたキャッシュ (logcache) にバッファプールを割り当てます。

```
isql -Usa -P
sp_poolconfig Ologcache0,04M0,08K0
go
```

- 6 Sybase を再起動して、新しいログキャッシュを有効にします。

## トランザクションログ I/O のサイズ

専用ログキャッシュを使用している場合、OVPI トランザクションログの I/O サイズを変更する必要があります。共通ログキャッシュを使用している場合は、OVPI トランザクションログの I/O サイズを変更する必要はありません。

OVPI トランザクションログの I/O サイズを決定するには、以下のコマンドを入力します。

```
isql -Usa -P
1> use dpipe_db
2> go

1> sp_logiosize
2> go
```

このコマンドの出力は次のようになります。

```
The transaction log for database Odpipe_db0 will use I/O size of
2 Kbytes.
(return status = 0)
```

デフォルトでは、Sybase は 4K トランザクションログを使用するように設定されています。しかし、Sybase ではデフォルトのキャッシュ構成の 4K バッファをトランザクションログに割り当てて使用することはありません。したがって、キャッシュ構成が変更されていないシステムには、2K トランザクションログが使用されます。Sybase では、ユーザーデータベース (特に OLTP アクティビティ) には 4K ログ I/O サイズを使用することをお勧めします。一部の OVPI インストールでは、8K ログ I/O サイズを使用してよりよい管理を行っています。

ログの I/O サイズを変更するには、以下のコマンドを入力して、トランザクションログ (たとえば 8K) だけにキャッシュプールを割り当てます。

```
isql -Usa -P
1> use dpipe_db
2> go

1> sp_logiosize 080
2> go
```

このコマンドの出力は次のようになります。

```
The transaction log for database 'dpipe_db' will use I/O size of
8 Kbytes.
(return status = 0)
```

## Traceflag パラメータ

359 traceflag は、OVPI におけるいくつかのクエリのパフォーマンスを向上します。このフラグにより、プロシージャのコンパイル時にサーバーは正しいインデックスを選択できます。t raceflag がないと、サーバーが誤ったインデックスを選択してインデックススキャンが生じるために、パフォーマンスは大幅に低下する可能性があります。359traceflag パラメータを使用することを強くお勧めします。

## UNIX システム

359traceflag パラメータ、-T359 を以下の server startup run ファイルのコマンド行に追加します。

- 1 スーパーユーザー (root) としてログオンします。
- 2 以下のように入力して、Sybase にアクセスします。su - sybase
- 3 以下を入力して、インストールディレクトリに変更します。cd install
- 4 以下を入力して、RUN\_servername ファイルを開きます。vi RUN\_servername

この場合、servername は OVPI Sybase サーバーの名前です。

- 5 `${SYBASE}/bin/dataserver` を含む行の最後に `traceflag` パラメータ、`-T359` を追加します。



-T359 文字列の全ての文字は連続しています。他のパラメータと区切るため以外は、文字列を入力する際にスペースを使わないでください。

- 6 ファイルを保存して閉じます。
- 7 Sybase を停止させてから再起動します。
- 8 以下の手順を実行して、`traceflag` が有効になっていることを確認します。
  - a Sybase のホームディレクトリにある `install` ディレクトリを開きます。
  - b 使い慣れたエディタを使ってエラーログファイルを開き、`Active traceflags` を探します。
  - c `Active traceflags` のリストに `359` があることを確認します。また、`Active traceflags` エントリのタイムスタンプが、`traceflag` が `server startup run` ファイルに追加された実際の日付と時刻に対応していることを確認します。

## Windows

`359 traceflag` パラメータ、`-T359` を以下のようにレジストリに追加します。

- 1 Windows のタスクバーの [スタート] をクリックして、[ファイル名を指定して実行] を選択します。
- 2 [ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスで「`regedit`」と入力し、[OK] をクリックします。
- 3 [レジストリエディタ] ウィンドウで、以下のディレクトリのリストを展開します。  
`HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\SYBASE\  
Server\servername\Parameters`  
この場合、`servername` は OVPI Sybase サーバーの名前です。
- 4 `Parameters` フォルダを強調表示します。
- 5 メニューから、[編集]>[新規]>[文字列の値] を選択します。  
一時的な名前の付いた新しい値が表示されます。

- 6 たとえば Arg6 または Arg7 など、標準的な命名規則に従って新しい値の名前を入力してから、**Enter** キーを押します。
- 7 新しい値の名前をダブルクリックします。  
[ **文字列の編集** ] ダイアログが表示されます。
- 8 [ **値データ** ] フィールドで、「**-T359**」と入力してから、[ **OK** ] をクリックします。



**-T359** 文字列の全ての文字は連続しています。他のパラメータと区切るため以外は、文字列を入力する際にスペースを使わないでください。

- 9 [ **レジストリエディタ** ] ウィンドウを閉じます。
- 10 Sybase を停止させてから再起動します。
- 11 以下の手順を実行して、**traceflag** が有効になっていることを確認します。
  - a Sybase のホームディレクトリにある `install` ディレクトリを開きます。
  - b 使い慣れたエディタを使ってエラーログファイルを開き、**Active traceflags** を探します。
  - c **Active traceflags** のリストに **359** があることを確認します。また、**Active traceflags** エントリのタイムスタンプが、**traceflag** がレジストリに入力された実際の日付と時刻に対応していることを確認します。

## その他の設定パラメータ

以下の設定パラメータには、デフォルト値と同じ値に設定された **Config Value** と **Run Value** が含まれている必要があります。

- `cpu grace time`
- `max number network listeners`
- `max async i/os per engine`
- `max async i/os per server`

これらのパラメータのデフォルト値の検証および設定を行うには、以下の手順に従います。

- 1 以下のコマンドを入力します。

```
isql -Usa -P
1> sp_configure Oconfig_param0
2> go
```

この例で、*config\_param* は指定した設定パラメータの 1 つです。

たとえば、*cpu grace time* の値をリストする場合、出力は次のようになります。

| Parameter Name | Default | Memory Used | Config Value | Run Value |
|----------------|---------|-------------|--------------|-----------|
| cpu grace time | 500     | 0           | 500          | 500       |

- 2 デフォルト値を設定するには、以下を実行します。

```
isql -Usa -P
1> sp_configure Oconfig_param0, 0, Odefault0
2> go
```

この例で、*config\_param* は指定した設定パラメータの 1 つです。

- 3 Sybase を再起動すると、変更が適用されます。

## プロパティテーブルのバインディング

すべてのプロパティテーブルをそれぞれのキャッシュに配置することにより、パフォーマンスを拡張することができます。この方法では、プロパティテーブルが参照されるときにページの I/O は必要ありません。、これを実現するには、以下の手順を実行する必要があります。

- 名前付きキャッシュを作成します。
- 個々のプロパティテーブルを名前付きキャッシュにバインドします。
- バインディングが成功したことを確認します。

## 名前付きキャッシュの作成

プロパティテーブルを配置する名前付きキャッシュ (**keycache** など) を作成する必要があります。必要なキャッシュの量が少なすぎたり多すぎたりしないように、**OVPI** データベースが正常なサイズに到達した後にこれを実行することをお勧めします。名前付きキャッシュ (**keycache**) を作成した後、名前付きキャッシュを表示可能にするには **Sybase** を再起動する必要があります。

たとえば、**keycache** という名前付きキャッシュを作成してキャッシュのサイズを **1MB** に等しくするには、以下のコマンドを入力します。

```
isql -Usa -P
1> sp_cacheconfig keycache, 01M0
2> go
```

**Sybase** を再起動します。作成したばかりのキャッシュを設定するには、**618** ページの「**4K プールと 16K プール**」を参照してください。

## 個々のプロパティテーブルの名前付きキャッシュへのバインディング

名前付きキャッシュを作成したら、プロパティテーブルを名前付きキャッシュにバインドする必要があります。最も頻繁に使用されるデータテーブルのプロパティテーブル、最も大きなデータテーブルのプロパティテーブル、またはディスクアクセスを減らしてパフォーマンスを向上する任意のプロパティテーブルを選択することができます。

プロパティテーブルを選択するには、以下のコマンドを入力します。

```
isql -Usa -P
1> use dpipe_db
2> go
```

対応するプロパティテーブル名と一緒にすべてのデータテーブルの名前を返すには、以下のコマンドを入力します。

```
1> select dsi_data_table, dsi_key_table from dsi_key_tables
2> go
```

キャッシュするすべてのプロパティテーブルの名前を特定した後、各プロパティテーブルの名前に対して以下のコマンドを繰り返します。

```
1> sp_bindcache keycache, dpipe_db, "key_tabl_name"
2> go
```

この例では、**key\_tabl\_name** はキャッシュするプロパティテーブルの名前です。引用符を入力する必要があります。

たとえば、プロパティテーブル **K\_IFEntry\_Disc**、**KIRDevPorts**、および **K\_frswitch\_port** を **keycache** という名前のキャッシュにバインドするには、以下のコマンドを入力します。

```
1> sp_bindcache keycache, dpipe_db, "K_IFEntry_Disc"
2> go
```

```
1> sp_bindcache keycache, dpipe_db, "KIRDevPorts"
2> go
```

```
1> sp_bindcache keycache, dpipe_db, "K_frswitch_port"
2> go
```

### バインディングが成功したことの確認

プロパティテーブルのバインディングが成功したことを確認するには、以下のコマンドを入力します。

```
isql -Usa -P
1> sp_helpcache
2> go
```

各バインディングのステータスは **v** (有効) である必要があります。この出力は、次の図のようなものです。

| Cache Name         | Config Size | Run Size | Overhead |
|--------------------|-------------|----------|----------|
| default data cache | 0.00 Mb     | 35.87 Mb | 1.93 Mb  |
| keycache           | 1.95 Mb     | 1.95 Mb  | 0.15 Mb  |

| Memory Available For<br>Named Caches | Memory Configured<br>To Named Caches |
|--------------------------------------|--------------------------------------|
| 37.84 Mb                             | 1.95 Mb                              |

35.89MBのメモリが残されており、デフォルトキャッシュに割り当てられます。

```
----- Cache Binding Information: -----
Cache Name Entity Type Status

keycache dpipe_db.dsi_dpipe.Kmon_ethstats_ table V
keycache dpipe_db.dsi_dpipe.KDrouter_traffic table V
keycache dpipe_db.dsi_dpipe.Kmon2_alhost_ table V
keycache dpipe_db.dsi_dpipe.KDhp_filesystem table V
keycache dpipe_db.dsi_dpipe.Kmon2_almatrix_ table V
```

```
keycache dpipe_db.dsi_dpipe.Kdbaselineday table V
keycache dpipe_db.dsi_dpipe.KHhp_compsystem table V
.
.
.
```

必要に応じてこれらの機能を実行することができます。

- キャッシュ割り当てが期限切れであると思われる場合、名前付きキャッシュを追加または変更します。たとえば、キャッシュを小さくしたり大きくしたりする必要があります。
- 新しいプロパティテーブルを名前付きキャッシュにバインドします。



## 18 セルフヒーリングサービスコレクタの使用

セルフヒーリングプロセスは、問題を検出して自動的に問題を解決するステップを実行するソフトウェアアプリケーションの機能です。HP OpenView セルフヒーリングサービスでは、セルフヒーリングプロセスを実行するフレームワークを提供します。

セルフヒーリングサービス (SHS) は、HP がサポートするカスタマ向けの無料のサービスです。HP OpenView アプリケーションのトラブルシューティング、解決方法の検索、およびサポート例の提示に関する多くのステップを自動化します。SHS を使用すると、問題発生認識、文書化された解決方法の検索、サポート例の提示、トラブルシューティング情報の収集、および解決方法の入手に必要な時間と労力を大幅に削減することができます。

## セルフヒーリングプロセスの概要

セルフヒーリングサービスの機能の概要は以下のとおりです。次の図は、セルフヒーリングのプロセスを示しています。

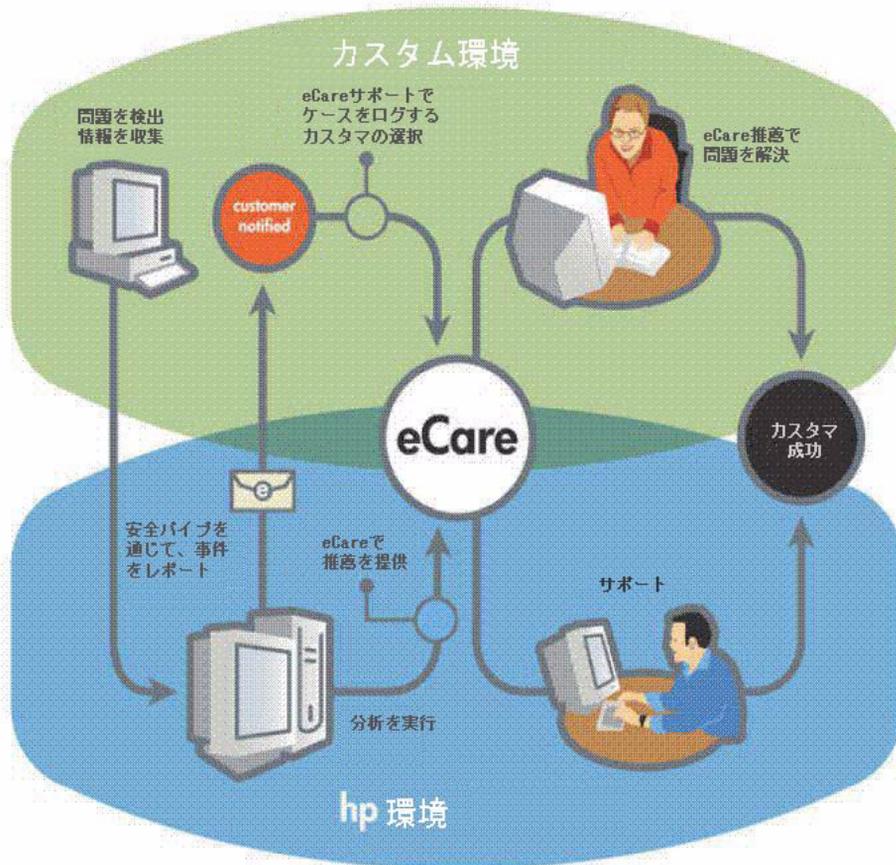


図 81 セルフヒーリングサービスワークフロー図

SHS は、以下のように機能します。

- 1 OVPI アプリケーションソフトウェアにより、エラー発生が検出されます。エラー情報は、trend.log、builder.log、および website.log ファイルなどのアプリケーションログファイルに保存されます。

- 2 ログファイルのエラーは、トリガーと呼ばれる特定のパターンの後に続きます。いくつかの関連するトリガーは 1 つのコンテキストにグループ化されます。たとえば、データベースに関連するすべてのメッセージは、**DatabaseContext** と呼ばれるコンテキストにグループ化されます。
- 3 SHS では、これらのトリガーパターンを識別して、コンテキスト名を含むタスクファイルを作成します。
- 4 SHS コレクタでは、検出されたエラーに関するすべての情報を含む出力ファイルを作成します。
- 5 SHS クライアントから SHS サーバーにこの出力ファイルの情報が送信されます。
- 6 SHS サーバーでは、これらのエラー定義およびそれに対応する解決方法を中央のナレッジデータベースから検索します。
- 7 eCare の Web ページに、検出された問題に関連する分析結果、ナレッジベース、およびディスカッションフォーラムの文書が発行されます。次に、問題が検出され、その問題を解決するための情報が Web ページに準備されていることを知らせる電子メールメッセージがユーザーに送られます。ユーザーは Web ページにアクセスして、問題を解決するための情報を利用することができます。
- 8 この自己解決方法が成功しなかった場合は、このエラーを解決するために過去のサポート事例を表示することができます。サポートエンジニアが必要とする情報はすべて、問題が生じたときに利用可能になります。これにより解決までの時間が早くなります。

詳細は、以下の URL にアクセスしてください。

**<http://www.hp.com/managementsoftware/self-healing>**

## SHS の有効化と開始

OVPI をインストールすると、SHS 2.06.98 クライアントパッケージが自動的にインストールされ、OVPI に登録されます。

UNIX システムにインストールされた OVPI の場合は次のとおりです。

登録ファイルは次の場所にあります。

```
/var/opt/hpsupport/data/reg/dc
```

UNIX システムでは、OVPI をインストールした後、自動的に SHS サービスが開始されません。UNIX で SHS サービスを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
/opt/OV/bin/shsctrl -start
```

**Windows システムにインストールされた OVPI の場合は次のとおりです。**

登録ファイルは次の場所にあります。

```
[HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Hewlett-Packard\SH
Services\Supportability Adapter\dc]
```

このレジストリキーは OVPI 登録ファイルのポインタです。Windows の登録ファイルは、DPIPE\_HOME\data\support\reg\dc にあります。

Windows システムでは、OVPI をインストールした後、自動的に SHS サービスが開始されます。ただし、SHS サービスを手動で開始する場合は、以下のコマンドを入力します。

```
cscript <installDir>/bin/shsctrl.vbs -start
```

ここで、<installDir> は、Windows オペレーティングシステムでセルフヒーリングサービスがインストールされているディレクトリです。デフォルトでは、C:\Program Files\HP OpenView です。

OVPI をインストールした後、SHS サービスを開始すると、SHS は OVPI システムのエラーの監視を開始します。

## 例：SHS によるエラーの検出と解決

以下は、SHS がどのようにエラーを検出し、ユーザーがそのエラーを解決するのに役立つかを示す例です。

OVPI アプリケーションの実行中に、次のエラーが trend.log ファイルに記録されます。

```
java.sql.SQLException: ORA-01502: index ind1 or partition of such
index is in unusable state
```

SHS は trend.log ファイルに記録されたこのエラーを検出します。trend.log ファイルの上記のエラーと一致するトリガーパターンが既に SHS にあります。このようなエラーパターンに関連付けられているコンテキストは「General」です。

SHS コレクタでは、エラーに関するすべての情報を含む出力ファイルを作成します。SHS クライアントから SHS サーバーにこの情報が送信されます。

SHS サーバーは、ナレッジデータベースからこのエラーを検索します。このエラーが既知の問題に関連している場合は、ソリューションレポートが作成されます。このソリューションレポートには、エラーを解決するために実行する手順が記載されています。ユーザーの問題を解決するためにこのレポートが利用可能になります。

提供された解決方法によって問題が解決されない場合は、OVPI サポートが提供する過去の事例を参照できます。サポートエンジニアが必要とする情報はすべて、問題が生じたときに利用可能になります。これにより解決までの時間が早くなります。

この例では、ORA-01502 error of unusable index or partition は、ソーステーブルで正しく実行されていない indexmaint の問題である可能性があります。この問題は、データベースが利用できない場合、またはソーステーブルで実行中の indexmaint に欠陥がある場合に発生することがあります。trend.log はサポートでも利用可能であるため、サポートエンジニアが trend.log を調べて、エラーに関する詳細情報を見つけることもできます。この情報は、サポートが indexmaint により問題を解決して、ホットフィックスまたはパッチを最も早く実行するのに役立ちます。



# 19 MIB の管理

SNMP プロトコルは、MIB (Management Information Base) というデータ構造を用いたネットワークリソースの管理をサポートしています。MIB には管理対象オブジェクトのグループがあります。これは、ノードの統計値と設定パラメータを含むことのできる変数のテーブルです。ここでいうノードとは、ネットワーク通信でアクセス可能な任意のデバイスであり、SNMP を使用してポーリングできます。

各ノードは、ノードの製造元がそのノードの機能に適切であると考えられる MIB をサポートしています。標準 MIB の定義は、インターネットエンジニアリングタスクフォースの RFC (Request for Comment) ドキュメントに記載されています。エンタープライズ MIB の定義は、ノードの製造元で規定されています。

ノードからの情報を検証したい場合は、MIB ブラウザを使用して、そのノード上で動作するエージェントに要求を出すことで、そのノードのステータスと設定情報をクエリまたは変更できます。さらに、別のセットのオブジェクトを選択してノードから収集したい場合には、カスタム収集テーブルを作成できます。

利用可能な任意の MIB ブラウザを使用して、ノード上のステータスと設定情報をクエリまたは変更できます。ただし、HP OpenView Performance Insight (OVPI) の MIB ブラウザを使用してカスタム収集テーブルを作成する必要があります。

この章では、OVPI の MIB ブラウザを使用して以下を実行するための方法について説明します。

- 標準のベンダーまたはデバイス固有の MIB をロードする。OVPI に備わっている MIB がデータ収集のニーズに十分に対応できない場合、カスタムの MIB 定義をロードできます。

645 ページの「[MIB のロード](#)」を参照してください。

- 現在ロードされている MIB ファイルの内容を、UNIX または DOS のディレクトリ構造に似たグラフィックの MIB マップツリーとして表示する。このツリー構造により、MIB の内容を表示および分析できます。

- **SNMP Get** 要求を実行してノード上のステータスと設定情報のクエリを実行する。**MIB** ブラウザには **Get** 関数と **Set** 関数があります。**MIB** ブラウザは、**MIB** グループまたはオブジェクトについてノードをポーリングし、その応答を画面に表示します。

651 ページの「**SNMP データのクエリ**」を参照してください。

- **SNMP** の値を設定する。

656 ページの「**SNMP 値の設定**」を参照してください。

- ロード済みの **MIB** からオブジェクトを選択することで、カスタム収集テーブルを作成します。

656 ページの「**収集テーブルの作成**」を参照してください。



この章でいう、「オブジェクト」と「変数」という用語は、**MIB** の観点からは同義であり、**MIB** 管理オブジェクトを指します。

## MIB ブラウザの起動

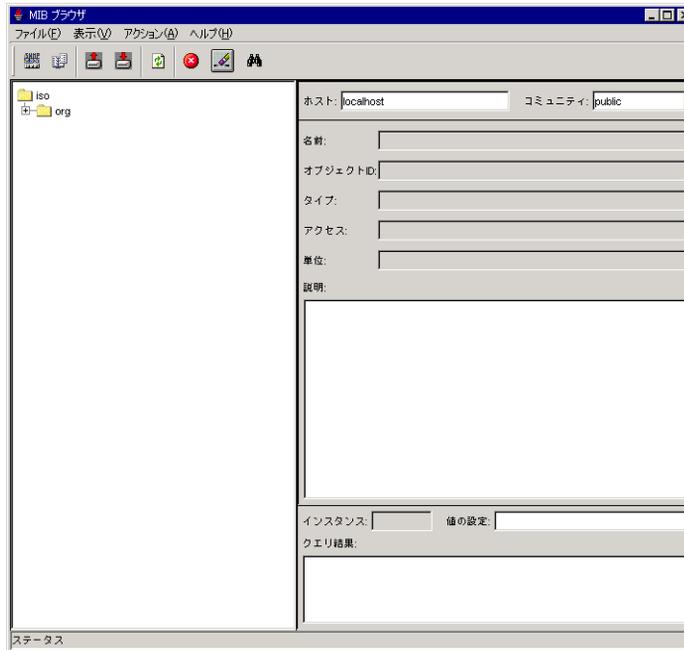
**MIB** ブラウザは、管理コンソールから、またはコマンド行から起動できます。

**MIB** ブラウザを起動するには、以下の方法のうちの **1** つを実行します。

- 管理コンソール
  - a 管理コンソールを起動します。詳細は、**96** ページの「**管理コンソールの起動**」を参照してください。
  - b [ツール] メニューから [**MIB ブラウザ**] を選択します。**MIB** ブラウザウィンドウが表示されます。
- コマンド行  
次のコマンドを入力します。

**mibbrowser**

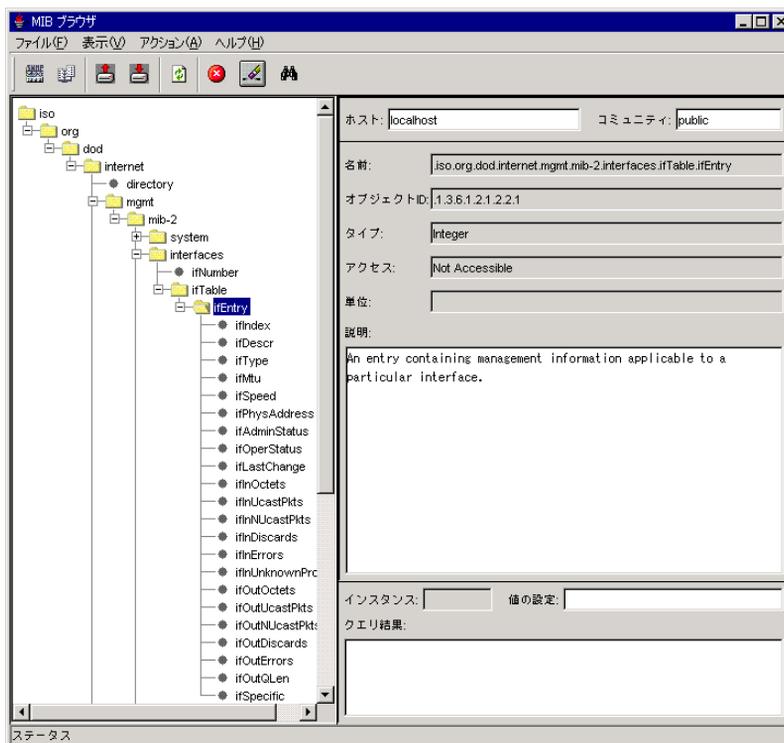
以下の図は、MIB ブラウザの初期ウィンドウの例を示しています。



Windows システムでは、[スタート]メニューから MIB ブラウザを起動することもできます。

## MIB ブラウザウィンドウ

MIB ブラウザウィンドウは選択した MIB オブジェクトに関する情報を表示します。以下の図は、MIB ツリーを展開した状態の MIB ブラウザウィンドウの例を示しています。



MIB ブラウザウィンドウには、ナビゲーションペインと表示ペインがあります。ペインの大きさは、ペインを分割している垂直線をいずれかの方向に希望の大きさまで移動することで調整できます。オペレーティングシステムによって以下のいずれかを実行します。

- **Windows** の場合。ペインを分割している垂直線上にカーソルを置いて両方向の矢印 (⇄) が表示されるようにし、いずれかの方向にこの矢印を希望の大きさまで移動します。
- **UNIX** の場合。ペインを分割している垂直線上のボックス (☐) をポイントし、左クリックして押さえたまま、いずれかの方向に希望の大きさまで移動します。

## ナビゲーションペイン

このペインには、MIB ツリーが表示されます。これは、現在ロードされているすべての MIB のマップです。MIB をロードして、ツリーを更新すると、その MIB がツリーに表示されます。ツリーから任意のオブジェクトを選択すると、そのオブジェクトに関する情報が MIB ブラウザの右ペインに表示されます。

MIB ツリーの階層レベルは、Windows エクスプローラで Windows システムの内容を表示するときとまったく同様に展開できます。フォルダーを展開することで、そのフォルダー内のページやフォルダーを表示できます。また、階層レベルを折りたたむこともできます。

ナビゲーションペインのフォルダーは、以下の手順で開きます。

- フォルダーの内容を見るには、プラス記号 (+) をクリックします。
- フォルダーの内容は表示フレームに表示されます。一部の MIB オブジェクトを表示できない場合は、ナビゲーションペインのスクロールバーを使用してそのオブジェクトを表示します。
- 開いたフォルダーを閉じるには、マイナス記号 (-) をクリックするか、フォルダーをダブルクリックします。

## 表示ペイン

このペインは、ツリー内で選択したオブジェクトの詳細を表示します。これは、以下の情報を示します。

- ターゲットホストの情報。これは、ノードの名前と、それに対応するコミュニティ文字列を表示します。この情報は、SNMP の Get 関数と Set 関数を使用するときに重要になります。

表示される情報を以下に説明します。

[ホスト] このボックスで、ターゲットノードを指定します。選択する MIB オブジェクトを含んだノードの名前または IP アドレスを入力します。デフォルト値は **localhost** です。

[コミュニティ] このボックスで、ホストにアクセスする現在のコミュニティ文字列を指定します。デフォルト値は **public** です。読み取りや書き込みなど操作の種類に応じて、適切な値をこのボックスに入力します。

- 選択した **MIB** オブジェクトに関する一般的な情報

表示される情報を以下に説明します。

[名前] 選択した **MIB** オブジェクトのテキスト形式のオブジェクト **ID(OID)** です。これには、パスの各ノードがあってピリオドで区切られており、末尾はこの管理対象オブジェクトの名前です。

[オブジェクト ID] 数値 **OID** です。これは、選択したオブジェクトまでの **MIB** ツリーのパスであり、ピリオドで区切られた数値で表されています。オブジェクト **ID** の末尾の値は、そのテーブルにおける、このオブジェクトの位置です。

[タイプ] 選択したオブジェクトに割り当てられた **SNMP** データ型です。これは、**OVPI** がレポートデータベースで使用する記憶型と、オブジェクトの処理で使用するアルゴリズムを特定します。**MIB** ファイル内の各オブジェクトについての **SYNTAX** エントリに対応しています。

[アクセス] 選択したオブジェクトから情報を取得する際のパーミッションのタイプです。有効なアクセスモードは、読み取り専用、読み取り/書き込み、アクセス不能です。

[単位] 選択したオブジェクトの量のタイプです。

[説明] 選択したオブジェクトの説明です。

- **SNMP Get** 要求の結果。これには、**SNMP Set** で値を設定するための領域が含まれています。

表示される情報を以下に説明します。

[インスタンス] 選択した管理対象オブジェクトのインスタンスです。インスタンスは [クエリ結果] ボックスから選択できます。

[値の設定] 選択したオブジェクトのインスタンスの新しい値を入力します。可能ならば、**SNMP Set** アクションを使用して値を実際に変更します。[コミュニティ] フィールドの先頭には、適切なコミュニティ文字列を設定することを忘れないでください。

[クエリ結果] 選択した管理対象オブジェクトに対する **SNMP Get** 要求の結果です。

## メニューバーとツールバー

MIB ブラウザには、[ファイル]、[表示]、[アクション]、および[ヘルプ]という各メニューがあります。また、頻繁に行うタスクのためのツールバーボタンがあります。

### [ファイル] メニュー

表 17 に [ファイル] メニューのオプションとそれに対応するツールバーボタンを示します。

表 17 MIB ブラウザの [ファイル] メニューのオプション

| オプション | 説明                                                                                                                                                                                                     | ツールバーのボタン                                                                             |
|-------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| [新規]  | [新規] のサブメニューから、[収集] を選択できます。これにより、ロードした MIB からユーザ独自の SNMP 収集テーブルを作成できます。詳細は、656 ページの「 <a href="#">収集テーブルの作成</a> 」を参照してください。<br>このオプションは、標準の OVPI インストールでは必須ではありません。OVPI のソリューションレポートを使用している場合は必要ありません。 |    |
| [開く]  | このオプションにより、MIB 定義ファイルを MIB ブラウザにロードできます。詳細は、645 ページの「 <a href="#">MIB のロード</a> 」を参照してください。                                                                                                             |  |
| [終了]  | MIB ブラウザを終了します。                                                                                                                                                                                        | なし                                                                                    |

### [表示] メニュー

[表示] メニューには以下のオプションが含まれています。

[すべて更新] このオプションは、ナビゲーションペイン内のツリーを更新し、また表示ペインの SNMP Get 要求結果のセクションに表示されている情報もすべて更新します。



## [アクション]メニュー

表 18 に [アクション] メニューのオプションとそれに対応するツールバーボタンを示します。

表 18 MIB ブラウザの [アクション] メニューのオプション

| オプション      | 説明                                                                                                                             | ボタン                                                                                   |
|------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| [SNMP Get] | これは、選択したグループまたはオブジェクトの MIB ツリーの、GetNextRequest ツリーウォークを開始します。これは、スカラー形式または列形式の変数に対して機能します。詳細は、651 ページの「SNMP データのクエリ」を参照してください。 |    |
| [SNMP Set] | これにより、[クエリ結果] ボックスから選択したインスタンスに値を設定できます。これは、スカラー形式または列形式の変数に適用されます。詳細は、656 ページの「SNMP 値の設定」を参照してください。                           |    |
| [停止]       | 現在の SNMP Get 要求の出力を停止します。                                                                                                      |    |
| [クリア]      | [クエリ結果] ボックスの出力をクリアします。                                                                                                        |    |
| [検索]       | このオプションにより、左ペインの MIB マップにある変数を見つけることができます。                                                                                     |  |

## [ヘルプ]メニュー

[ヘルプ] メニューには、[MIB ブラウザについて] オプションがあります。これは MIB ブラウザのバージョンと著作権情報を表示します。

## MIB のロード

OVPI は、デフォルトの場所 ( DPIPE\_HOME/mibs) に MIB を格納します。DPIPE\_HOME は、OVPI が常駐するディレクトリを指す環境変数です。MIB をロードするとき、このディレクトリからか、または MIB ファイルが格納されている任意のディレクトリから、MIB を選択します。

MIB のアンロードについては、647 ページの「MIB のロード」を参照してください。

### 考慮すべき問題

MIB をロードするときには、以下の問題を考慮する必要があります。

- MIB ツリーの最上位を含める
- データの収集と集約のためのオブジェクトタイプを検証する

### MIB ツリーの最上位を含める

MIB ファイルには、MIB の先頭までの完全修飾 ISO ツリーを含める必要があります。そうでない場合は MIB ツリーの最上位が前回ロードしたファイル内にある必要があります。MIB ツリーの最上位が欠落している場合、以下のようなメッセージが表示されます。



この例では、MIB ツリーの最上位は別のファイルにあります。

## オブジェクトタイプを検証する

場合によっては、**MIB** は不適切なオブジェクトタイプを使用します。この最も一般的な例は、カウンタまたはゲージとして機能するフィールドが **INTEGER** として定義されている場合です。



フィールドのラベルは大文字 / 小文字を区別します。

これらのフィールドからデータを収集して正しく集約したい場合は、フィールドのラベルを修正する必要があります。

以下の例に示すように、**[DESCRIPTION]** フィールドによってフィールド内のデータの使用方法を指定できます。ここでの、最初の例は **counter** の定義であり、2 番目の例はゲージの定義です。

### 例: カウンタの **[DESCRIPTION]** フィールド

カウンタとして定義したフィールドは、ある一定の期間にわたって起きる事項の、発生頻度を監視します。これらの **[DESCRIPTION]** フィールドには、多くの場合、「*count*」または「*total number*」という語が含まれています。以下は、このような **[DESCRIPTION]** の例です。Total number of octets since the device booted  
以下は、**counter** のフィールド定義の例です。

```
sysLinkCellsTx
SYNTAX INTEGER
ACCESS read-only
STATUS mandatory
DESCRIPTION
"Count of ATM cells transmitted on the link"
::= { sysLinkEntry 10 }
```

以下のように修正します。

```
sysLinkCellsTx
SYNTAX Counter
ACCESS read-only
STATUS mandatory
DESCRIPTION
"Count of ATM cells transmitted on the link"
::= { sysLinkEntry 10 }
```

## 例：ゲージの [DESCRIPTION] フィールド

ゲージとして機能するフィールドは通常、ある任意の時点におけるある事項の数量を示します。その [DESCRIPTION] フィールドには、多くの場合、「使用中」、「使用される」、または「利用可能」という語が含まれています。たとえば、以下のフィールド定義はゲージです。

```
sysCurrentBuffers
SYNTAX INTEGER
ACCESS read-only
STATUS mandatory
DESCRIPTION
"The number of system buffers currently in use."
::= { sysLinkEntry 22 }
```

以下のように修正します。

```
sysCurrentBuffers
SYNTAX Gauge
ACCESS read-only
STATUS mandatory
DESCRIPTION
"The number of system buffers currently in use."
::= { sysLinkEntry 22 }
```



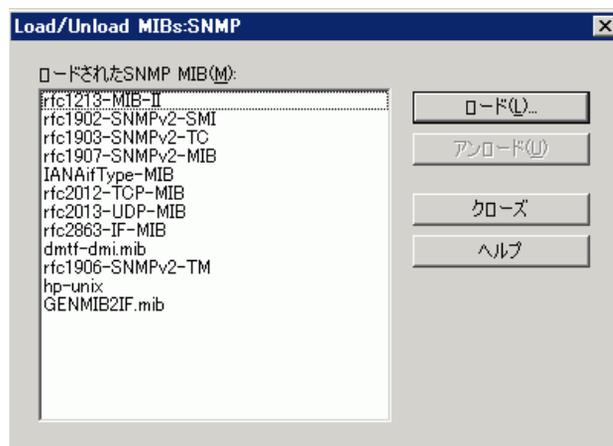
該当するフィールド型のデータベース収集テーブルを作成するには、MIB をロードする前に MIB ファイル内のデータ型を修正します。変更したオブジェクトが SEQUENCE OF リストにある場合、そのシーケンスリスト内の型も変更します。

## MIB のロード

異なる MIB 定義ファイルをロードするには、以下の手順に従います。

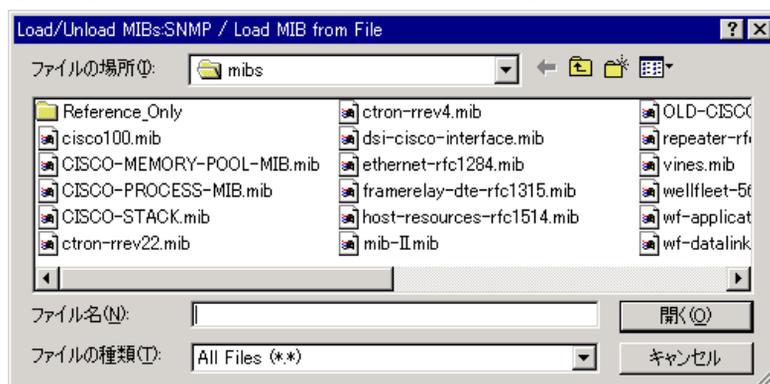
- 1 以下のいずれかを実行します。
  - [ファイル] メニューの [開く] を選択します。
  -  をクリックします。

[Load/Unload MIBs:SNMP] ダイアログボックスが開きます。現在ロードされている MIB が表示されます。



- 2 [ロード] をクリックして、デフォルトの mibs ディレクトリを表示します。

[Load/Unload MIBs:SNMP / Load MIB from File] ダイアログボックスが開きます。mibs ディレクトリが表示されます。



この時点で、MIB が異なるディレクトリにある場合、MIB が格納されているディレクトリを選択します。

- 3 MIB を選択し [開く] をクリックします。

MIB がロードされ、[Load/Unload MIBs:SNMP] ウィンドウに表示されます。MIB がロードされない場合、以下のようなエラーメッセージが表示されます。



この場合のエラーは構文エラーであり、メッセージはエラーの場所を示しています。エラーを解決できない場合、ベンダーに連絡して問題を解決してください。

MIB ツリーの最上位が別のファイルにある場合は、MIB ツリーの最上位を含んでいるファイルを最初に選択し、次に MIB ツリーの最上位が欠落しているファイルをロードします。そうしなければエラーが発生します。詳細は、645 ページの「[MIB ツリーの最上位を含める](#)」を参照してください。

- 4 この時点で、別の MIB をロードできます。それをするには、希望の MIB がすべてロードされるまで、上記の[手順 2](#)と[手順 3](#)を繰り返します。
- 5 **[閉じる]** をクリックします。
- 6 以下のいずれかを実行します。
  -  をクリックします。
  - [表示] メニューの **[更新]** を選択します。
- 7 新しくロードした MIB の要素に関する情報を表示したい場合、左ペインのツリーからその MIB を見つけます。

ロードした MIB は、OVPI で使用できます。MIB をアンロードする場合は、アンロード手順に従って取り除きます。

## MIB のアンロード

MIB 定義ファイルをアンロードするには、以下の手順に従います。

- 1 以下のいずれかを実行します。
  - [ファイル]メニューの[開く]を選択します。
  -  をクリックします。

[Load/Unload MIBs:SNMP] ダイアログボックスが開きます。現在ロードされている MIB が表示されます。

- 2 [Loaded SNMP MIBs] ボックスから、アンロードする MIB ファイル(1つまたは複数)を選択します。



複数の MIB をリストから選択できます。これをするには、最初の MIB をクリックした後、[Shift] キーを使用して連続する MIB を範囲選択するか、または [Ctrl] キーを使用して MIB を個別に選択します。

MIB ツリーの最上位を含む MIB ファイルを選択したが、そのファイルを、別の MIB ファイルが使用しているという場合は、以下のような、解決できなかったオブジェクト ID のエラーメッセージが表示されます。



この場合、アンロードするそれらの MIB ファイルを同時に選択するか、または従属する MIB ファイルを最初にアンロードします。

- 3 [アンロード] をクリックします。以下のような確認メッセージが開きます。



複数の MIB が選択されている場合、選択されている MIB の数がメッセージに表示されます。

- 4 [OK] をクリックします。その MIB がリストから削除されます。アンロードした MIB は、MIB ブラウザを停止させ、再起動した後にマップから削除されます。
- 5 [閉じる] をクリックします。

## SNMP データのクエリ

[アクション] メニューから、[SNMP Get] または [SNMP Set] のいずれかのオプションを選択することで、現在のノードにロードされている MIB のデータを取得および表示できます。このデータにアクセスするには、ノードとコミュニティ文字列を設定する必要があります。

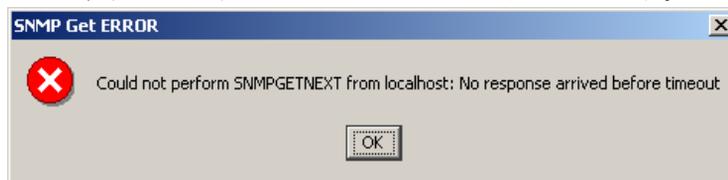
## ノードの設定

現在のノードは、表示ペインの [ ホスト ] ボックスに表示され、SNMP 関数のターゲットになります。ターゲットノードの名前または IP アドレスを [ ホスト ] ボックスに入力します。デフォルトは **localhost** ですが、変更する場合は、現在の名前を削除し、新しい名前を入力します。

## コミュニティ文字列の設定

MIB ブラウザは、ノード用に定義したコミュニティ文字列を使用してそのデータにアクセスします。OVPI が現在のノードを認識していれば、MIB ブラウザはそのノードのコミュニティ文字列を使用します。新しいノードはデフォルトを使用します。デフォルトのコミュニティ文字列の、読み取りは **public**、書き込みは **private** です。

値を変更したい場合は、現在の値を削除し新しい値を入力します。実行したい操作に、適切なコミュニティ文字列を設定してください。たとえば、選択したオブジェクトについて読み取り操作を実行したい場合、[ コミュニティ ] ボックスの値が **public** (これが適切な値であると仮定) であることを確認します。そうしなければ、以下のようなエラーメッセージが表示されます。



## MIB マップでのグループまたはオブジェクトの検索

グループまたはオブジェクトの名前 (全部または一部) がわかっている場合、そのグループまたはオブジェクトを MIB マップ内で検索することができます。

MIB マップ内でグループまたはオブジェクトの名前を検索するには、以下の手順に従います。

- 1 以下のいずれかを実行します。
  - [アクション] メニューから [検索] を選択します。

-  をクリックします。

[検索] ダイアログボックスが開きます。



- 2 検索したい項目の名前を必要な数だけ [検索] ボックスに入力します。

デフォルトの検索では、大文字/小文字は区別されません。SNMP のグループまたはオブジェクトの名前には大文字が埋め込まれていることが多いからです。

- 3 必要であれば、以下を実行します。

- 大文字と小文字を区別したい場合は、[大文字と小文字を区別] を選択します。

- ボックスに入力したものと完全に一致する名前だけを検索したい場合は、[完全に単語と一致] をオンにします。デフォルトの検索では、入力した名前は MIB の名前の一部と比較されます。

- 4 [検索] をクリックします。

- 5 入力した項目の別のインスタンスを見つける場合は、[次を検索] をクリックします。

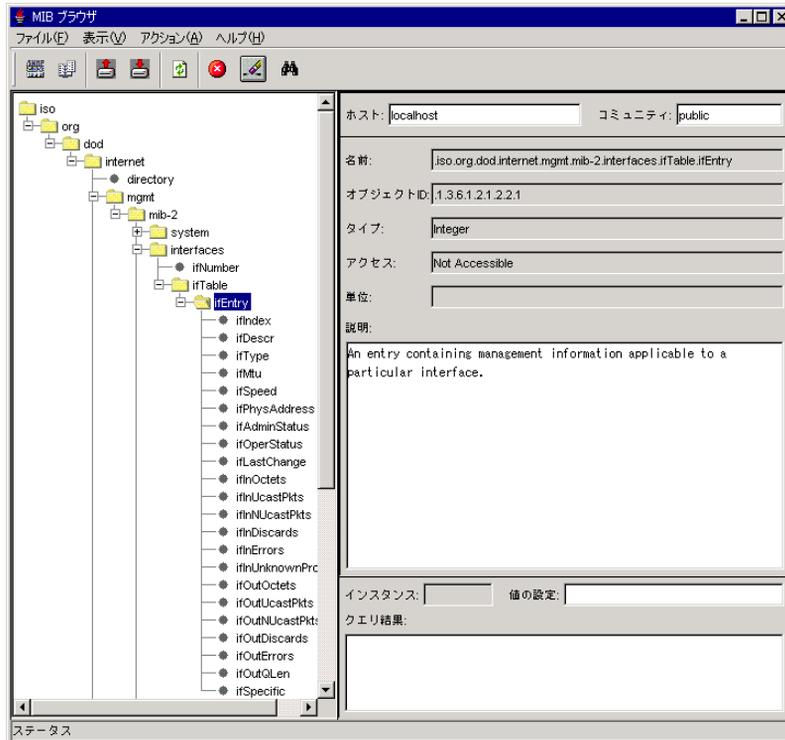
- 6 検索が完了したら、[閉じる] をクリックします。

## データの表示

ノード上にあるデータを確認または検証したい場合は、[SNMP Get] オプションを使用してノード上の現在のデータを表示できます。[SNMP Get] オプションによって、スカラー形式または列形式の変数にデータが提供されます。[ホスト] フィールドで指定したノード上にある現在のデータを表示するには、以下の手順に従います。

- 1 MIB マップ内のグループまたはオブジェクトをクリックして選択します。

以下の図は、選択した [ifEntry] グループフォルダーとともにロードされる mib-II.mib ファイルを示しています。

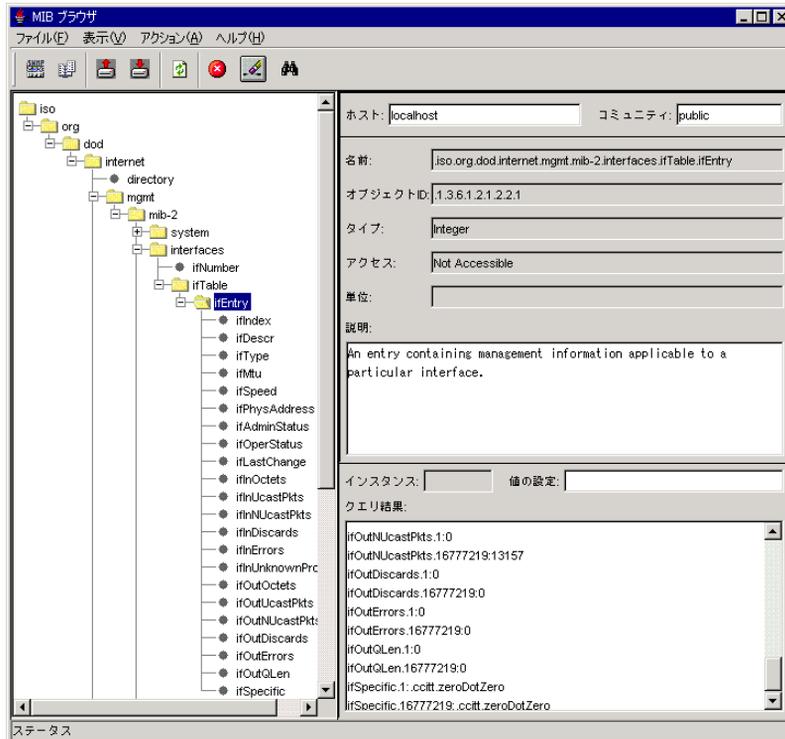


2 選択したグループまたはオブジェクトの MIB ツリーの、GetNextRequest ツリーウォークを開始するには、以下のいずれかを実行します。

— [アクション] メニューから [SNMP Get] を選択します。

—  をクリックします。

MIB ブラウザの右下隅にある [クエリ結果] フィールドに値が表示されます。以下の例は、[ifEntry] グループに対する GetNextRequest で受信したエンタリーのリストの一部を示しています。



特定のオブジェクトを選択した場合、そのオブジェクトだけがポーリングされますが、そのオブジェクトを含んでいるテーブル内のすべてのオブジェクトのインスタンスと値を取得できます。

グループ（フォルダー）を選択した場合、MIB ブラウザは、そのグループのすべてのオブジェクトをポーリングします。これには、選択したグループの下にあるすべてのグループの内容が含まれています。データは、オブジェクト別に [クエリ結果] フィールドに表示されます。つまり、最初のオブジェクトの値がすべて表示され、その後次のオブジェクトの値が表示され、以下同様に他のオブジェクトの値も表示されます。

- 3 ポーリングが終了するまで待てない場合は、[停止] ボタンをクリックするか、[アクション] メニューから [停止] を選択することで、GetNextRequest を停止することができます。ポーリングが停止され、すでに受信した値が [クエリ結果] フィールドに表示されます。

## SNMP 値の設定

MIB ブラウザの [ 値の設定 ] フィールドを使用して、書き込み可能な MIB オブジェクトの値を設定できます。現在のノードが、SNMP 関数のターゲットです。

値を設定するには、以下の手順に従います。

- 1 MIB マップで設定したいオブジェクト名を選択します。
- 2 以下のいずれかを実行することで、**SNMP Get** 関数を実行します。
  - [アクション] メニューから [SNMP Get] を選択します。

—  をクリックします。

結果は、[クエリ結果] フィールドに表示されます。

- 3 変更したいインスタンスまたは変数を [クエリ結果] フィールドから選択します。インスタンスまたは変数の名前は [インスタンス] フィールドに表示され、値は [値の設定] フィールドに表示されます。
- 4 オブジェクトの新しい値を [値の設定] フィールドに入力します。
- 5  をクリックします。

設定が成功すると、変更した値は [クエリ結果] フィールドに表示されます。

## 収集テーブルの作成

OVPI MIB ブラウザにより、1 つまたは複数のグループから、指定した MIB 管理対象オブジェクトのセットを選択できます。そうすることで、選択されたオブジェクト群を単一のテーブルで同時にポーリングできます。これを収集テーブルと呼びます。

### 収集テーブルの機能

収集テーブルには以下の機能があります。

- 収集テーブルは、データ収集のために選択した MIB グループまたはオブジェクト (またはその両者) の複合セットです。

- カスタム設計レポートのためのデータソースになります。
- 収集テーブルを使用して、レポートに実際に必要なデータに収集を絞ることができるので、ポーリング効率の向上、データ収集の速度アップ、および使用するデータベース領域の節減を実現できます。
- **MIB** 内のいろいろなグループからのオブジェクトを含んだ単一のレポートを生成できます。
- 1 対 (ペア) の 32 ビットカウンタを 64 ビットフィールドにオーバーレイできます。657 ページの「SNMPv1 における 64 ビット値」を参照してください。

収集テーブルを作成するには、**[収集]** オプションを使用して収集するオプションを選択します。OVPI の MIB ブラウザから収集テーブルを作成すると、そのテーブルに対応する **TEEL** ファイルが作成されます。



OVPI が提供する既存のソリューションのいずれかを実行する場合、収集テーブルを作成する必要はありません。ソリューションには、必要なあらゆる収集テーブルが含まれています。

## SNMPv1 における 64 ビット値

SNMPv2 は、64 ビットカウンタを導入しています。一方、SNMPv1 エージェントは、32 ビットカウンタしかサポートしていません。SNMPv1 エージェントが、64 ビットカウンタに格納された、より高精度の値を返すための、一般的な方法の 1 つは、1 対 (ペア) の 32 ビットカウンタを 64 ビットフィールドにオーバーレイし、2 つに分けて値全体を提供することです。

以下の例では、sitCounter と呼ばれる 64 ビットカウンタが、sitCtrSplit1High という上位の 32 ビットフィールドと、sitCtrSplit1Low という下位の 32 ビットフィールドに分割されています。これら 2 つの 32 ビットフィールドを再び組み合わせることで、OVPI は 64 ビット値をフルに格納し処理できるようになります。

```
sitCtrSplit1High OBJECT-TYPE
 SYNTAX Counter32
 MAX-ACCESS read-only
 STATUS current
 DESCRIPTION
 "The high 32-bits of the 64-bit counter, sitCounter."
```

```

 ::= { sitEntry 7 }

sitCtrSplit1Low OBJECT-TYPE
 SYNTAX Counter32
 MAX-ACCESS read-only
 STATUS current
 DESCRIPTION
 "The low 32-bits of the 64-bit counter, sitCounter."
 ::= { sitEntry 8 }

sitCounter OBJECT-TYPE
 SYNTAX Counter64
 MAX-ACCESS read-only
 STATUS current
 DESCRIPTION
 "The SectionInTransit units received since the device booted."
 booted."
 ::= { sitEntry 9 }

```

半分に分けた 2 つのデータを正しい順序で組み合わせることが重要です。*High Part* は、64 ビットカウンタの上位 32 ビットを表します。*Low Part* は、64 ビットカウンタの下位 32 ビットを表します。

|                   |               |
|-------------------|---------------|
| <b>64 ビットカウンタ</b> |               |
| 上位 32 ビットカウンタ     | 下位 32 ビットカウンタ |

[新規収集] ウィザードの [高低カウンタペアの定義] ウィンドウを使用して、上位と下位のカウンタのペアの組み合わせを定義します。新しい収集の作成についての詳細は、659 ページの「[収集テーブルの作成](#)」を参照してください。この手順の 663 ページの[手順 7](#)に、64 ビットカウンタを定義するための、カウンタのペアを選択する方法が説明されています。

## 収集テーブルの要件

収集テーブルには以下の要件があります。

- 最大幅は 1,962 文字です。これはすべての列の総文字数です。

- 列の個数は最大 **250** です。データテーブルのオブジェクトを選択する場合、デフォルトの列が **13** 列あるため、**13** 列以上を設定してください。プロパティテーブルのオブジェクトを選択する場合、デフォルトの列が **7** 列あるため、**7** 以上を設定してください。
- オブジェクトには共通インデックスが必要です。たとえば、あるオブジェクトがインタフェースごとにエラーをカウントしている場合、すべてのオブジェクトがインタフェースごとのデータを提供する必要があります。同じテーブル内の **MIB** オブジェクトには、定義別に共通インデックスが備わっています。異なるインデックスを備えたオブジェクトを含む収集テーブルは、データベース内では無効なデータとなります。
- 各データテーブルには、対応するプロパティテーブルが必要です。リストから既存のプロパティテーブルを選択するか、新しいプロパティテーブルを作成することができます。新しいプロパティテーブルを作成する場合は、デフォルトのキー変数を使用するか別のキー変数を選択できます。

このセクションには収集テーブルを作成するための基本情報が含まれています。テーブルの作成に関する情報がさらに必要である場合は、**HP OpenView** 営業担当者に連絡して『**HP OpenView Performance Insight TEEL Reference Guide**』（英語）を入手してください。このマニュアルには、テーブルの属性と **TEEL** ファイルの作成に関する情報が記載されています。

## 収集テーブルの作成

カスタム収集テーブルを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 収集のダイアログを開きます。以下のいずれかを実行します。

—  をクリックします。

— **[ファイル]** メニューから **[収集の作成]** を選択します。

(ここで、ログインダイアログが表示される場合があります。ログイン情報を入力して続行してください。)

[収集の定義] ウィンドウが開きます。

収集定義ウィザード

**収集の定義**

データベースのテーブルセットの作成に使われる収集名を入力します。名前の長さは 30 文字以内です。収集カテゴリは既存のリストから選択するか、収集をグループ化するために使用する新しい名前を入力します。255 文字以内で説明を入力することができます。

収集名:

収集カテゴリ: default

収集の説明:

< 戻る 次へ > キャンセル

2 収集名、収集カテゴリ、および収集テーブルの説明を入力します。

- a [収集名] ボックスにデータテーブルの名前を入力します。この名前は **OVPI** のデータリポジトリに格納されます。



ウィザードは、提供するエイリアス名に基づいて名前をコレクションに割り当てます。

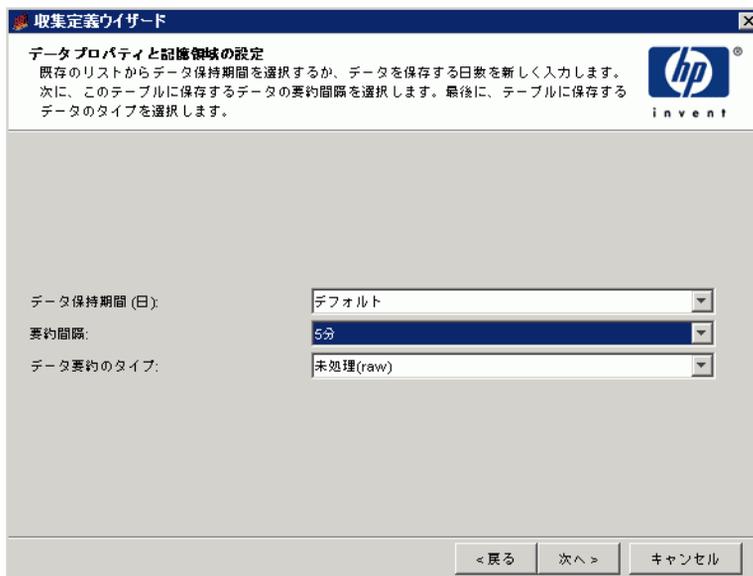
名前は一意でなければなりません。最大 **255** 文字までです。使用できるのは、大文字/小文字のアルファベット、数字、特殊文字のハイフン (-) とアンダースコア (\_) です。

- b [収集カテゴリ] ボックスで、収集テーブルのカテゴリを入力または選択します。

カテゴリ名は、テーブルのセットをまとめてグループ化します。どの名前を選択するべきかを判断できない場合は、**[default]** を選択します。この名前は、最大 **30** 文字までです。

- c [収集の説明] ボックスに、テーブルの説明を入力します。説明は省略することも可能です。説明は、最大 **255** 文字までです。

- 3 [次へ] をクリックします。[データプロパティと記憶領域の設定] ウィンドウが開きます。



- 4 テーブルのデータ保持期間、要約間隔、および要約タイプを選択します。
- a [データ保持期間] ボックスで、テーブル内にデータを保持する日数を入力または選択します。
  - b [要約間隔] ボックスで、テーブル内のデータの時間特性を選択します。たとえば、5分テーブルには5分間隔のデータが格納されます。この5分間隔で収集されたデータをレートデータと呼びます。
  - c [データ要約のタイプ] ボックスで、テーブルのタイプを選択します。

テーブルタイプは、テーブルに含まれているデータのクラスを指定するものです。テーブルタイプのオプションには、以下のものがあります。

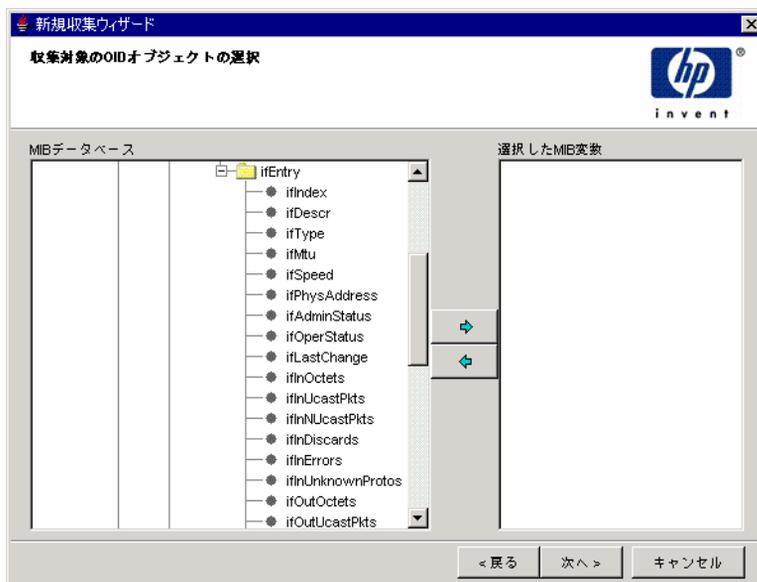
#### — [レート]

テーブルにはレートデータが格納されます。レートデータは、raw 入力データからの 1 対の行から算出される差分データです。

#### — [未処理 (raw)]

テーブルには raw (ポーリング時の) データが格納されます。

- 5 [次へ] をクリックします。[収集対象のOIDオブジェクトの選択] ダイアログボックスが開きます。



- 6 MIB オブジェクトを選択します。

以前に MIB ブラウザからオブジェクトを選択してある場合、それらのオブジェクトは両方のペインに表示されます。強調表示されたオブジェクトは、左ペインのツリーの [MIB データベース] フィールドに表示されます。また選択したオブジェクトの名前は右ペインの [選択した MIB 変数] フィールドに表示されます。

以前にオブジェクトを選択していない場合、またはオブジェクトを追加したい場合は、この時点で [MIB データベース] フィールドのツリーから、1 つまたは複数のオブジェクトを選択できます。複数のオブジェクトを選択できます。連続するオブジェクトを範囲選択するには、[Shift] キーを押したまま左マウスボタンをクリックします。個別に選択するには、[Ctrl] キーを押したまま左マウスボタンをクリックします。各オブジェクトはテーブル内の列になります。

可能な列は全体で 250 であること、またデフォルトの列は 13 であることを覚えておいてください。したがって、最大 237 の列を追加できます。それを超えると、エラーメッセージが表示されます。

オブジェクトを選択した後、右矢印  をクリックして、選択したオブジェクトを [選択した MIB 変数] フィールドに追加します。

全体文字数の制限(1,962文字)を超えるオブジェクトを選択した場合、制限を超えるこのオブジェクトは[**選択した MIB 変数**]フィールドには追加されず、以下のメッセージが表示されます。

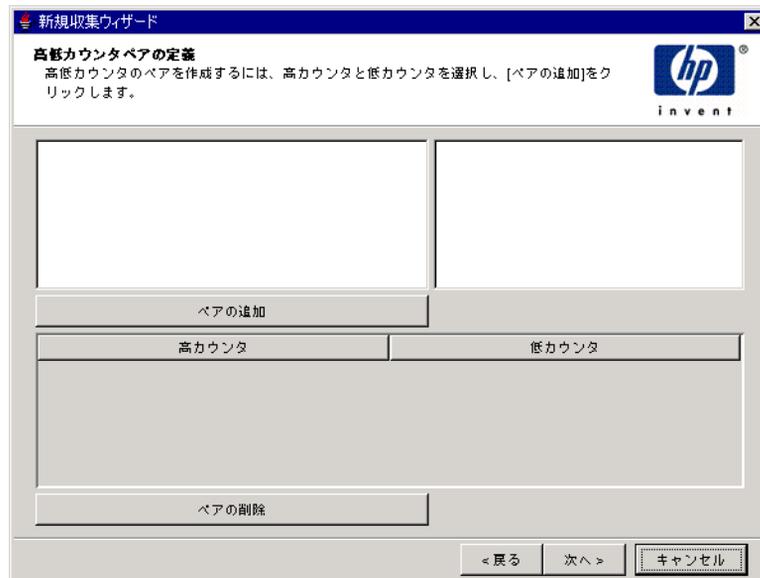


列として有効でないオブジェクト(フォルダーなど)を選択した場合、[**列を追加できません**]というタイトルのエラーメッセージが表示され、そのオブジェクトが一覧表示されます。これらのオブジェクトは[**選択した MIB 変数**]リストには表示されません。



選択したオブジェクトが不要な場合、[**選択した MIB 変数**]フィールドでそのオブジェクトを強調表示し、次に左矢印ボタンをクリックして、選択したオブジェクトをリストから取り除きます。

- 7 [次へ]をクリックします。[**高低カウンタペアの定義**]ウィンドウが開きます。ここに各列の選択されたカウンタがすべて表示されます。



ここで、2つの32ビットカウンタと64ビットカウンタとをAND演算することで、疑似64ビットカウンタを作成できます。この手順は省略可能です。

- a 64ビットカウンタを定義するには、各列からカウンタを選択し、[ペアの追加] ボタンをクリックします。

必要に応じて引き続きこの方法でペアを追加し、新しい収集テーブルに必要なカウンタをすべて定義します。

- b 誤ってカウンタのペアを追加した場合は、一番下のフィールドでこのペアを強調表示し、[ペアの削除] をクリックしてリストからこれを取り除きます。

- 8 [次へ] をクリックします。[MIB インデックス値の入力] ウィンドウが開きます。

新規収集ウィザード

**MIBインデックス値の入力**

必要に応じてMIBインデックスの値を入力します。MIBインデックスは、ピリオドで区切られた任意の整数で構成されています。個々の整数値の範囲は-255~255です。たとえば次のようになります: 1.2.-3.-4 MIBインデックスがなくても続行できます。

MIBインデックス

<戻る 次へ> キャンセル



MIB インデックスはテーブル化されたエントリーにのみ適用されます。テーブル化されていないエントリーはゼロのインデックスを持つこととなります。

- 9 **MIB** インデックスフォーマットを入力します。ユーザー自身の **MIB** を参照してフォーマットを決めてください。

たとえば、**MIB** インデックスフォーマット **1.1** は、**2**つのインデックスがあつてそれぞれの長さが整数であることを示しています。

**MIB** インデックスフォーマットの入力省略可能ですが、以下の項目を検討してから、入力するかどうかを決めてください。

**MIB** インデックスを入力しない場合、以下のようになります。

- 解析されていないインデックスが `dsi_table_key` に挿入されます。
- 複数のインデックスがある場合、連結されて小数で区切られます(たとえば、**1.2**)。

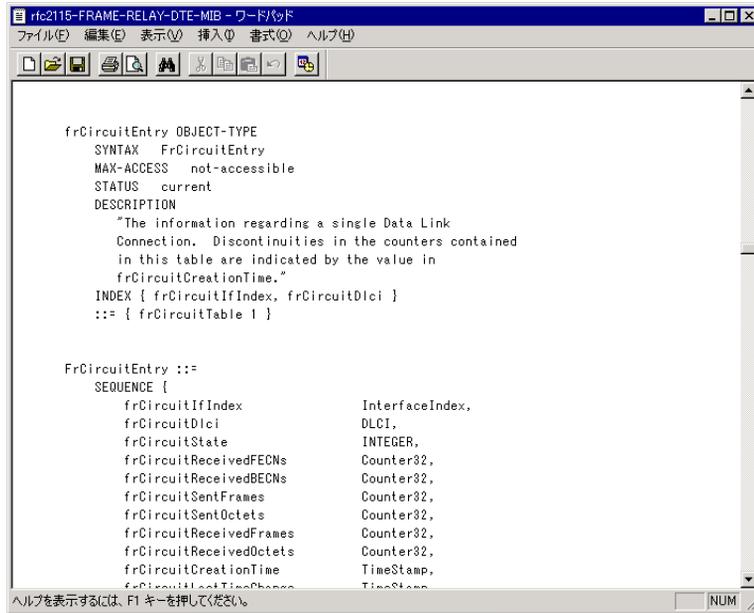
**MIB** インデックスを入力すると、以下のようになります。

- **mw\_collect** が、インデックスに関連付けられた各コンポーネントを、ユーザーが作成したプロパティテーブルの列に挿入します。
- **mw\_collect** は、コンポーネントを挿入した後、各コンポーネントを取り上げて、アンダースコアで区切ってこれをテーブルキーに挿入します(たとえば、**1\_2**)。

#### 例 : **MIB** インデックスフォーマットの決定

以下の例は、**rfc2115-FRAME-RELAY-DTE** **MIB** の `frCircuitTable` グループにある `frCircuitEntry` オブジェクトの **MIB** インデックスフォーマットを決定するための方法を示しています。

- a MIB ファイルを開きます。エントリーを見つけて、そのインデックスが frCircuitIfIndex、frCircuitDlci であることを確認します。これを以下の図に示します。



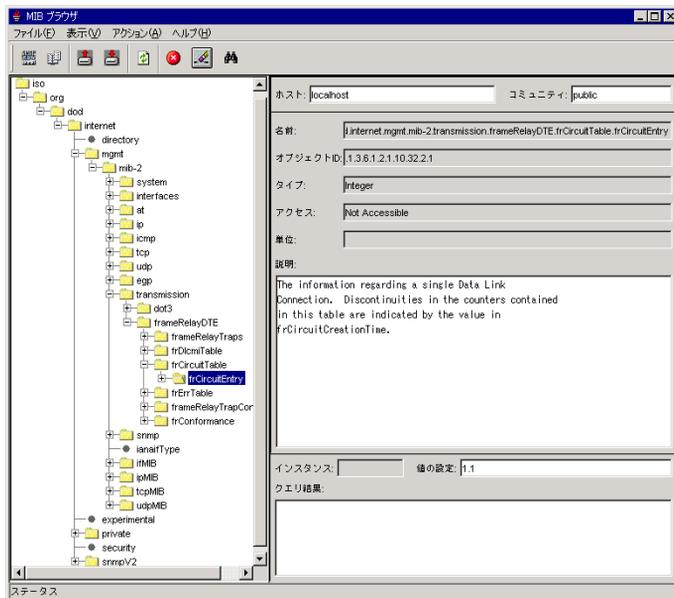
```
frCircuitEntry OBJECT-TYPE
SYNTAX FrCircuitEntry
MAX-ACCESS not-accessible
STATUS current
DESCRIPTION
 "The information regarding a single Data Link
 Connection. Discontinuities in the counters contained
 in this table are indicated by the value in
 frCircuitCreationTime."
INDEX { frCircuitIfIndex, frCircuitDlci }
 ::= { frCircuitTable 1 }

FrCircuitEntry ::=
SEQUENCE {
 frCircuitIfIndex InterfaceIndex,
 frCircuitDlci DLCI,
 frCircuitState INTEGER,
 frCircuitReceivedFECNs Counter32,
 frCircuitReceivedBECNs Counter32,
 frCircuitSentFrames Counter32,
 frCircuitSentOctets Counter32,
 frCircuitReceivedFrames Counter32,
 frCircuitReceivedOctets Counter32,
 frCircuitCreationTime TimeStamp,
 frCircuitLastTimeChange TimeStamp
}
```

インデックスは、1つの整数値(frCircuitIfIndex)と、それに続くもう1つの整数値(frCircuitDlci)で構成されています。

MIB ブラウザで表示すると、インデックスは整数値を使用してフォーマットされ、ピリオドで区切られ、次に2番目の整数値が続いていることがわかります(たとえば、*n.n*)。

- b MIB ブラウザを使用して MIB を開き、frCircuitTable グループの frCircuitEntry オブジェクトに移動します。これを以下の図に示します。



オブジェクトを選択し **SNMP Get** 要求を実行すると、そのオブジェクトがポーリングされます。[クエリ結果]に、テーブル内の関連するすべてのオブジェクトのインスタンスと値が表示されます。たとえば、frCircuitIfIndex インスタンスの場合、MIB インデックスフォーマットは 1.1 です。これは、3 と 20 がそれぞれ単一の整数値だからです。frCircuitEntry オブジェクトの場合、665 ページの **手順 9** の MIB インデックスのボックスに 1.1 を入力できます。

665 ページの **手順 9** で MIB インデックスフォーマットを入力した場合、以下を実行する必要があります。

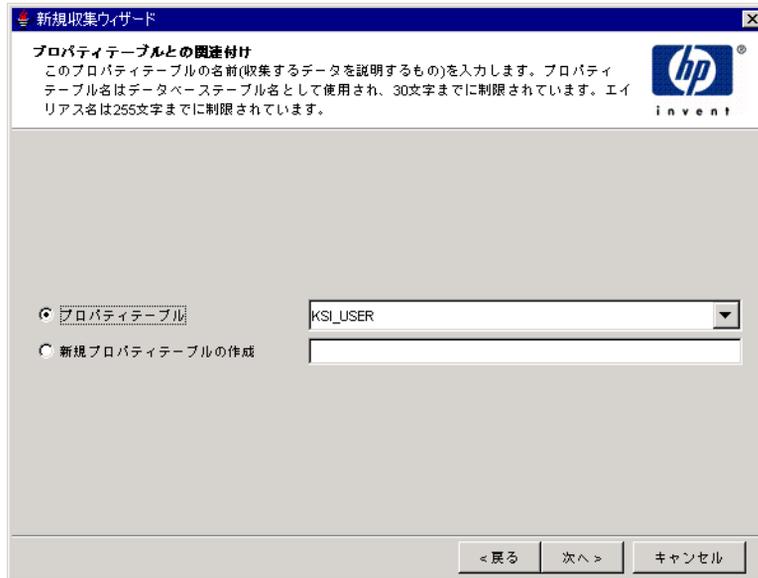
- 新しいプロパティテーブル列を作成します。テーブルにはインデックスコンポーネントと同じ名前を付けることをお勧めします (**手順 10**)。
- 正しいデータ型、および長さ (該当する場合) を設定します (**手順 11**)。
- 新しい各列をオブジェクト別変数および収集別変数として指定します (**手順 11**)。

- 列を指定した後、`dsi_table_key` のオブジェクト別と収集別のオプションをクリアします(手順 11)。



上記の手順を実行しなければ、収集定義は機能しません。

- 10 [次へ] をクリックします。[プロパティテーブルとの関連付け] ダイアログボックスが開きます。



- 11 プルダウンリストから既存のプロパティテーブルを選択するか、新しいプロパティテーブルを作成します。

**[新規プロパティテーブルの作成]** オプションを選択した場合、新しいプロパティテーブルの **SQL** 名を入力します。名前は一意でなければなりません。最大 30 文字までです。使用できるのは、アルファベット、数字、アンダースコア ( `_` ) です。

- a [次へ] をクリックします。[プロパティ属性の定義] ダイアログボックスが開きます。



- b デフォルト列だけのプロパティテーブルを作成することも、さらに列を追加することもできます。いずれの場合も、列の属性を変更できます。属性を変更した場合、[次へ] ボタンをクリックする前に、変更したフィールドの外をクリックして、変更を適用してください。

プロパティテーブル内のデフォルト列だけを使用する場合は、現在の設定を用いてそのデフォルト列を使用でき、また必要に応じて属性の一部を変更できます。各フィールドを変更するには、以下の手順に従います。

プロパティテーブルに新たな列を追加したい場合は、以下の手順に従います。

- [新規] ボタン  をクリックします。既存のリストの末尾に列のラインが現れます。[列] フィールドと [エイリアス] フィールドにデフォルト名が表示されます。column\_n という名前です。ここで、n は数値であり、新しい列を追加するたびに増えていきます。
- 列の SQL 名を指定するには、[列] フィールドの既存の名前を強調表示し、新しい名前を入力します。この名前は最大 30 文字までであり、アルファベット、数字、アンダースコアを含めることができます。
- 列のエイリアス名を指定するには、[エイリアス] フィールドの既存の名前を強調表示し、新しい名前を入力します。この名前は最大 255 文字までであり、アルファベット、数字、アンダースコア、ハイフンを含めることができます。

- **[データタイプ]** フィールドのプルダウンリストから列のデータ型を選択します。

利用可能なデータ型のオプションとそれに対応するデータベースのストレージタイプについては、433 ページの**手順 4**を参照してください。

- 該当する場合は、**[データ長]** フィールドに数値を入力します。このフィールドは、データ型が以下のいずれかである場合にのみ値を受け入れます。char\_string、hex\_string、numeric、octet\_string、snmp\_char\_string、snmp\_hex\_string、snmp\_octet\_string
- 列が、プロパティテーブル内の、要素を定義するプロパティの、一意な組み合わせの一部である、ということを示したい場合は、**[オブジェクト別]** フィールド内のボックスをクリックしてチェックマーク (4) が表示されるようにします。この場合、**[ヌル可能]** フィールドと**[デフォルト値]** フィールドは空欄になります。この列をオブジェクト別変数にしたい場合、チェックマークが消去されるようボックスをクリックします。オブジェクト別変数として [dsi\_target\_name] 以外の列を指定した場合は、オブジェクト別変数として dsi\_table\_key は指定できません。ただし、オブジェクト別変数の最初のものとして dsi\_target\_name を指定した場合のみ、オブジェクト別変数として dsi\_table\_key を指定できます。
- 列が、収集対象要素を定義する列の一意な組み合わせの一部である、ということを示したい場合は、**[収集別]** フィールド内のボックスをクリックしてチェックマーク (4) が表示されるようにします。この場合は、**[ヌル可能]** フィールドと**[デフォルト値]** フィールドは空欄になります。この列を変数別収集にしたい場合、チェックマークが消去されるようボックスをクリックします。変数別収集として [dsi\_target\_name] 以外の列を指定した場合は、変数別収集として dsi\_table\_key を指定できません。ただし、変数別収集の最初のものとして dsi\_target\_name を指定した場合のみ、変数別収集として dsi\_table\_key を指定できます。
- この列が NULL 値でありうる場合は、**[ヌル可能]** フィールドのボックスにチェックマーク (4) があることを確認してください (これがデフォルトです)。この列に NULL 値を含めたくない場合は、ボックスをクリックして、チェックマークを消去します。**[オブジェクト別]** フィールドまたは**[収集別]** フィールドにチェックマークがある場合、この列は空欄にする必要があります。

- 列にデフォルト値を設定する場合は、[ **デフォルト値** ] フィールドに値 (最大 **255** 文字まで) を入力します。このフィールドは、この列がオブジェクト別変数または変数別収集である場合には、空欄にする必要があります。
- この列に外部キー参照が含まれている場合は、[ **外部キー** ] フィールドのプルダウンリストから、キーを持つプロパティテーブルを選択します。この列に外部キー参照を含めたくない場合は、このフィールドのプルダウンリストから [no fk] 値を選択できます。
- キー変数で列を指定する場合、キー変数の順序で列を配置する必要があります。たとえば、リスト内の最初の列は **1** 番目のキー変数に対応させ、**2** 番目の列は **2** 番目のキー変数に対応させ、以下同様に列をキー変数に対応させます。

プロパティテーブル内での列の順序を変更したい場合は、変更したい列を選択して以下を実行します。

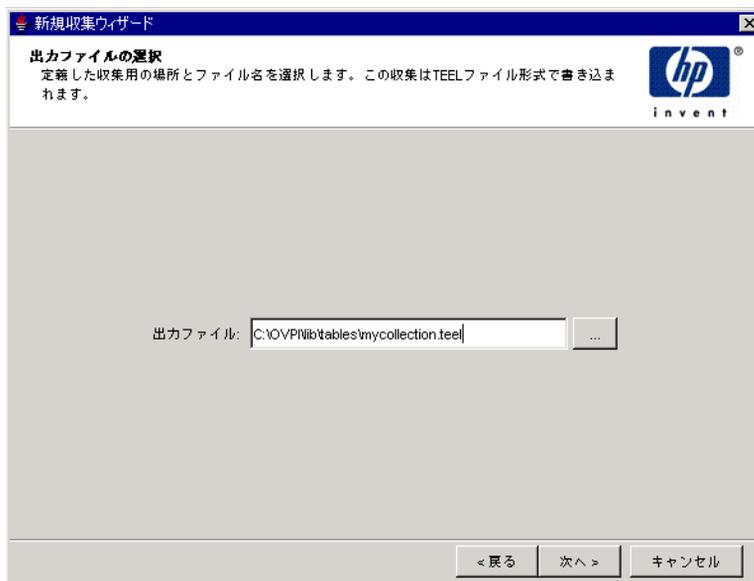
列を上へ移動するには、[ **上へ移動** ] ボタン  をクリックします。

列を下へ移動するには、[ **下へ移動** ] ボタン  をクリックします。

プロパティテーブルから列を削除するには、[ **削除** ] ボタン  をクリックします。

オブジェクト別変数と変数別収集が同じである場合は、プロパティテーブルには **6** つのデフォルト列しかありません。

- 12 [次へ] をクリックします。[出力ファイルの選択] ダイアログボックスが開きます。

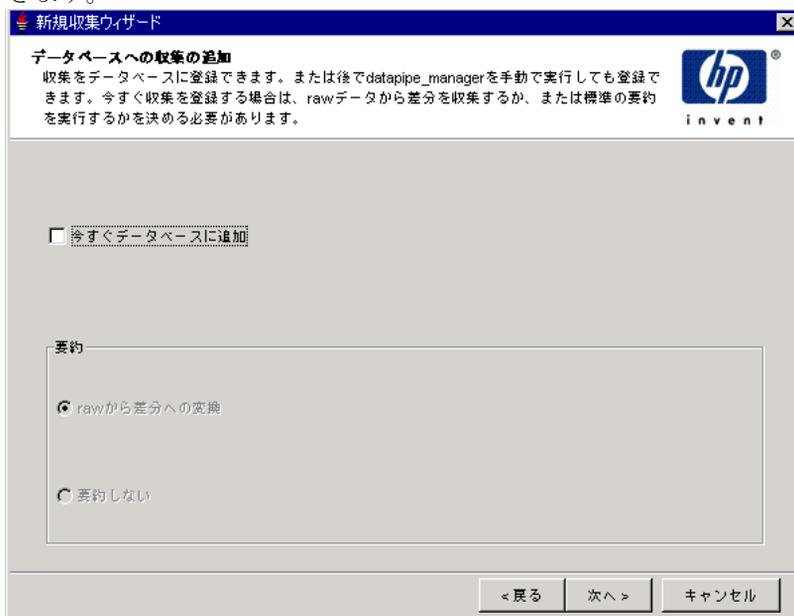


- 13 出力ファイルの名前と場所が正しいことを確認します。

ファイルの名前または場所を変更する必要がある場合は、[出力ファイル] フィールドに新しい名前を入力するか、または以下を実行します。

- a ... をクリックします。[開く] ダイアログボックスが開きます。
- b [参照] プルダウンリストからディレクトリを選択します。
- c 該当するディレクトリの場所を指定します。
- d [ファイル名] フィールドに名前を入力します。
- e [開く] をクリックします。[出力ファイルの選択] ダイアログボックスの [出力ファイル] フィールドに新しい名前と場所が表示されます。

- 14 [次へ] をクリックします。[データベースへの収集の追加] ウィンドウが開きます。



- 15 ここでテーブルを生成しそれをデータベースに追加したい場合は、[今すぐデータベースに追加] オプションが選択されていることを確認します。

このオプションの選択を解除する場合は、コマンド行から以下のコマンドを入力する必要があります。

```
datapipe_manager -p create -a teel_file
```

この例で、*teel\_file* は、672 ページの [手順 13](#) の出力ファイルの名前です。

このコマンドのオプションの詳細については、『HP OpenView Performance Insight TEEL Reference Guide』を参照してください。

- 16 テーブル内のデータに対してシステムが実施する要約処理のタイプを、以下のオプションから 1 つ選択します。

— [raw から差分への変換]

raw から差分への変換処理に必要なデータベースオブジェクトが生成されます。手動で生成する場合は、[手順 15](#) のコマンドに `-r r2d` を付けます。

— [データをレートテーブルに直接コピー]

データはレートテーブルに直接コピーされます。

## — [要約なし]

他のデータベースオブジェクトは生成されません。

- 17 [次へ] をクリックします。[概要] ダイアログボックスが開きます。



- 18 以下の手順に従います。

- 要約を確認します。
- 必要であれば、[戻る] をクリックして前のページに戻り、変更します。
- [完了] をクリックします。TEEL ファイルは指定した場所に存在します。

## 20 ログファイルの解釈

HP OpenView Performance Insight(OVPI) のログファイルは、システムの動作に関するメッセージを常に記録しています。メッセージは、プロセスの開始時と完了時にログに記録されます。メッセージはエラー状態が生じたときにも記録されます。

この章では、ログファイルを示し、それらログファイルに記録されるメッセージの基本フォーマットについて説明します。

### OVPI ログファイル

OVPI は以下のログファイルを生成します。

- `audit.log`。このログファイル内の各メッセージは、入力されたコマンドとその開始時刻および終了時刻を示します。
- `builder.log`。レポートビルダの動作に関するメッセージが記録されます。
- `console.log`。管理コンソールの動作に関するメッセージが記録されます。
- `dbmaint.log`。**dbmaint** ユーティリティによって生成されたメッセージが記録されます。このユーティリティは新しいデータベース構造を内部テーブルに反映させます。
- `install.log`。OVPI のインストールまたはアップグレードに関するメッセージが記録されます。
- `metrics.log`。このログ内の各メッセージは、入力されたコマンドとその結果を一覧表示します。
- `ovpi_uninstall.log`。OVPI のアンインストールに関するメッセージが記録されます。

- `report_YMMDDhhmmss.log`。[パッケージマネージャ]を使用したレポートパックのインストールに関するメッセージが記録されます。ファイル名は、そのインストールを実施した年、月、日、時刻を示します。たとえば、`report_20030110131106.log` となります。
- `trend.log`。OVPI のバックエンドプロセス (たとえば `trendtimer`) のすべてについてのメッセージが記録されます。各メッセージは、ログ記録されたプロセスの開始時刻と終了時刻を示します。
- `viewer.log`。レポートビューアの動作に関するメッセージが記録されます。
- `website.log`。Web アクセスサーバーの動作に関するメッセージが記録されます。`website.log` ファイルの表示の詳細については、538 ページの「[ログファイルの表示](#)」を参照してください。

OVPI のログファイルは、1 つを除いてすべて OVPI インストールディレクトリの `log` フォルダーにあります (たとえば、Windows システムの `C:OVPI\log`)。 `ovpi_uninstall.log` ファイルは、オペレーティングシステムに応じて、以下の場所にあります。

- UNIX  
`/var/tmp/ovpi_uninstall.log`
- Windows  
`%TEMP%\ovpi_uninstall.log`



`audit.log` ファイルと `metrics.log` ファイルを除いて、すべてのログファイルはメッセージフォーマットが同じです。`audit` と `metric` のログファイルの詳細は、それぞれ 681 ページの「[audit.log ファイル](#)」および 683 ページの「[metrics.log ファイル](#)」を参照してください。

## ログファイルの表示

ログファイルを表示するには、以下の手順に従います。

- 1 Windows エクスプローラ (Windows の場合) またはファイルマネージャ (UNIX の場合) を使用して、OVPI インストールディレクトリの `log` フォルダーに移動します。
- 2 表示したいログファイルを開くには、それをダブルクリックします。

この方法でログファイルを開くには、適切なプログラム(たとえば、Windows システムでは WordPad)を .log ファイルの種類に関連付けておく必要があります。

▶ Windows では、一部のログファイルを開くことはできません。このログファイルのあるアプリケーションが排他的に使用し続けているからです。それらのログファイルを開くには、そのログファイルのコピーを作成してそのコピーを開きます。

## ログファイルのメッセージフォーマット

以下のログファイルはこの項で説明するメッセージフォーマットを使用しています。builder.log、console.log、install.log、ovpi\_uninstall.log、report\_YYMMDDhhmmss.log、trend.log、viewer.log、および website.log です。

audit と metric の各ログファイルのメッセージフォーマットの詳細については、それぞれ 681 ページの「[audit.log ファイル](#)」および 683 ページの「[metrics.log ファイル](#)」を参照してください。

ログファイル内のすべてのエントリは以下のように、CSV(カンマ区切りの値)フォーマットです。

*timestamp*、*time\_zone*、*GMT\_offset*、*appl\_name*、*module\_name*、*severity*、*process\_ID*、*parent\_proc\_ID*、*message\_ID*、*message*

各メッセージはカンマで区切られたフィールドを含んでいます。フィールドが欠落している場合は、カンマを代わりに置きます。

### timestamp

*timestamp* フィールドは、ログエントリが発生したときの時刻を表します。以下のフォーマットによる 24 時間表示です。

YYYY-MM-DD hh:mm:ss:nnn

このフォーマットは、以下を表しています。

- YYYY は、4 桁の年です。
- MM は、2 桁の月です。
- DD は、2 桁の日です。

- *hh* は、2 桁の時間です。
- *mm* は、2 桁の分です。
- *ss* は、2 桁の秒です。
- *nnn* は、3 桁のミリ秒です。この値は、未知の場合は、000 です。

たとえば、以下のタイムスタンプは、2001年4月19日午後4時47分12秒123ミリ秒です。

```
2001-04-19 16:47:12:123
```

## time\_zone

*time\_zone* フィールドは、ログエントリーが発生したときのタイムゾーンです。

たとえば、米国の **Torrance** にて冬季にエラーが発生した場合、タイムゾーンは太平洋標準時 (PST) です。米国の **Reston** にて夏期にエラーが発生した場合、タイムゾーンは東部夏時間 (EDT) です。

## GMT\_offset

*GMT\_offset* フィールドは、タイムスタンプのタイムゾーンの、グリニッジ標準時 (GMT) からのオフセットです。このフォーマットは以下のとおりです。

```
{ } hh:mm
```

このフォーマットは、以下を表しています。

- *hh* は、2 桁の時間です。
- *mm* は、2 桁の分です。

たとえば、-05:00 は、グリニッジ標準時よりも 5 時間前であり、米国の、東部夏時間 (EST) または中部夏時間 (CDT) です。

## appl\_name

*appl\_name* フィールドは、ログエントリーの起因となった OVPI 内のアプリケーションの一意的な名前です。

## module\_name

*module\_name* フィールドは、プログラマが入力した、内容を表した名前です。

## severity

*severity* フィールドは、そのログエントリーの重要度レベルです。重要度レベルは、以下のとおりです。

- **INFO**。このメッセージはアプリケーションに関する情報通知です。特に処置は必要ありません。
- **WARNING**。このメッセージは、より深刻な状況になりうるため回避処置が必要である可能性がある情報です。
- **ERROR**。このメッセージは、アプリケーションの実行時に発生した問題についての情報です。この場合、問題を解決する処置が必要です。
- **FATAL**。このメッセージは、アプリケーションが失敗して処理が停止した問題についての情報です。この場合、問題を解決する処置が必要です。

メッセージに重要度レベルが指定されていない場合は、以下の値が重要度レベルとして使われます。

- **DEF\_ERROR**。このメッセージは、アプリケーションの実行時に発生した問題についての情報です。この場合、問題を解決する処置が必要と思われるます。

## process\_ID

*process\_ID* フィールドは、ログエントリーの起因となったプロセスのプロセス識別番号 (Pid) です。システムは、各プロセスが開始したときにそのプロセスに Pid を割り当てます。

## parent\_proc\_ID

*parent\_proc\_ID* フィールドは、ログエントリーの起因となったプロセスの親プロセスのプロセス識別番号 (Pid) です。

## message\_ID

*message\_ID* フィールドは、メッセージの一意な識別番号です。メッセージに識別番号が割り当てられていない場合、このフィールドは 0 です。

## message

*message* フィールドは、ログエントリの原因に関する説明です。

## ログファイルメッセージの例

この項では、ログファイルでのエラー表示のいくつかの例を示します。

### WARNING と INFO メッセージ

: 以下は、ログファイル内の **WARNING** と **INFO** のメッセージの例です。

```
2001-12-06 01:00:17:000,Pacific Standard Time,-8:00,
bcp_gateway,,WARNING,701,718,0,"no data collected for table
RIRRouterSystem, Db POWDER2"
```

```
2001-12-06 01:00:17:000,Pacific Standard Time,-8:00,trendtimer
,,INFO,187,41,0,"[Pid=544] C:\OVPI/bin/rmon_collect -n -i 60"
```

```
2001-12-06 01:00:18:000,Pacific Standard Time,-8:00,trendpm,,
INFO,475,718,0,"No procedures found to execute - trying to
generate one from command line params"
```

### ERROR メッセージ

以下は、ログファイル内の **ERROR** メッセージの例です。

```
2001-12-06 01:00:16:000,Pacific Standard Time,-8:00,dpipe_snmp
,,DEF_ERROR,726,718,0,"Error: failed to setup SNMP session with
host rough.hp.com,port 161,comm public (table RIRRouterSystem)"
```

```
2001-12-06 01:00:16:000,Pacific Standard Time,-8:00,dpipe_snmp
,,ERROR,660,718,0,"SNMP request Error[1]. host: 134.70.65.10,
comm: public, timeout: 1000, retries: 5, port 161"
```

.  
. .  
.

```
2001-12-06 01:00:18:000,Pacific Standard Time,-8:00,trendpm,,
DEF_ERROR,475,718,0,"No output table specified"
```

## audit.log ファイル

audit.log ファイルは、バックエンドプロセスの開始時刻、終了時刻、および時間を記録しています。プロセスが始まると、ファイルは **Pid**(プロセス識別番号) を割り当てます。その後、プロセスがいつ終了したかを記録してそのプロセスの **Pid** が終了したことを示します。

### ログファイルのフォーマット

ログファイル内のすべてのエントリは以下のように、CSV(カンマ区切りの値)フォーマットです。

*message type*、*program name*、*pid*、*ppid*、*start date-stamp*、*start time-stamp*、*end date-stamp*、*end time-stamp*、*duration in seconds*、*command line arguments*

#### Message Type

*message type* フィールドは、以下のいずれかです。

- **dtsys001**  
これはメッセージの開始を示します。
- **dtsys002**  
これはメッセージの終了を示します。

したがって、アプリケーションは、開始時に **dtsys001** メッセージをログ記録し、終了時に **dtsys002** メッセージをログ記録します。

#### Program Name

*program name* フィールドは実行可能ファイルの名前です。

#### PID

*PID* フィールドは、プロセスの **id** です。

#### PPID

*PPID* フィールドは、親プロセスの **id** です。

## Start Date Stamp

*start date-stamp* フィールドは、アプリケーションが開始された日付です。このフォーマットは以下のとおりです。

*yyyymmdd*

このフォーマットは、以下を表しています。

- *YYYY* は、4桁の年です。
- *MM* は、2桁の月です。
- *DD* は、2桁の日です。

## Start Time Stamp

*start time-stamp* フィールドは、アプリケーションが開始された時刻です。このフォーマットは以下のとおりです。

*hh:mm:ss*

このフォーマットは、以下を表しています。

- *hh* は、2桁の時間です。
- *mm* は、2桁の分です。
- *ss* は、2桁の秒です。

## End Date Stamp

*end date-stamp* フィールドは、アプリケーションが開始された日付です。このフィールドは、*message type* フィールドが *dtsys001* のときには空です。

このフォーマットは以下のとおりです。

*yyyymmdd*

このフォーマットは、以下を表しています。

- *YYYY* は、4桁の年です。
- *MM* は、2桁の月です。
- *DD* は、2桁の日です。

## End Time Stamp

*end time-stamp* フィールドは、アプリケーションが終了した時刻です。このフィールドは、*message type* フィールドが **dtsys001** のときには空です。

このフォーマットは以下のとおりです。

*hh:mm:ss*

このフォーマットは、以下を表しています。

- *hh* は、2 桁の時間です。
- *mm* は、2 桁の分です。
- *ss* は、2 桁の秒です。

## Duration in Seconds

*duration in seconds* フィールドは、プロセスの実行時間です (秒単位)。このフィールドは、*message type* フィールドが **dtsys001** のときには空です。

## コマンド行引数

これは、プロセスの実行時に使用されたコマンド行引数です。たとえば、以下に示す `audit.log` ファイルの行は、**mw\_collect** プロセスが、`-n`(分散型ポーリング)、`-i`(収集 ID)、および `-k`(拒否サンプル) という引数を実行時に使用したことを示しています。

```
dtsys001,mw_collect,888,1188,20031210,14:30:07,,,"-n -i 5 -K 1"
```



上の例では、*end date-stamp*、*end time-stamp*、*duration in seconds* の各フィールドが空欄です。これは、*message type* フィールドが **dtsys001** に設定されているからです。

プロセスのコマンド行引数の詳細については、『**HP OpenView Performance Insight Reference Guide**』(英語)を参照してください。

## metrics.log ファイル

`metrics.log` ファイルは、**mw\_collect**、**bcp\_gateway** および **trendcopy** という OVPI プログラムのアカウントリング情報を記録しています。

このログファイルのメッセージと `audit.log` ファイルのメッセージとは互いに関連しています。一般に、関連するメッセージを見つけるにはメッセージのヘッダ部分を使用します。`program name`、`PID`、および `PPID` フィールドは、`audit.log` ファイル内のメッセージと正確に一致します。`metrics.log` ファイルメッセージの `time-stamp` フィールドは、`audit.log` ファイル内のメッセージの、`start time-stamp` フィールドと `end time-stamp` フィールドとの間にあります。

## ログファイルのフォーマット

ログファイル内のすべてのエントリは以下のように、CSV(カンマ区切りの値)フォーマットです。

*message type*、*program name*、*pid*、*ppid*、*date-stamp*、*time-stamp*、*number of objects to process*、*number of objects processed successfully*、*min*、*max*、*avg*、*object description*



*object* の意味は、各プログラムによって異なります。

### Message Type

*message type* フィールドは、以下のいずれかです。

- `dtsys003`  
これはメッセージの要約です。
- `dtsys004`  
これはメッセージの詳細です。

### Program Name

*program name* フィールドは実行可能ファイルの名前です。

### PID

*PID* フィールドは、プロセスの `id` です。

### PPID

*PPID* フィールドは、親プロセスの `id` です。

## Date-Stamp

*date-stamp* フィールドは、メッセージが生成された日付です。このフォーマットは以下のとおりです。

*yyyymmdd*

このフォーマットは、以下を表しています。

- *YYYY* は、4 桁の年です。
- *MM* は、2 桁の月です。
- *DD* は、2 桁の日です。

## Time-Stamp

*time-stamp* フィールドは、メッセージが生成された時刻です。このフォーマットは以下のとおりです。

*hh:mm:ss*

このフォーマットは、以下を表しています。

- *hh* は、2 桁の時間です。
- *mm* は、2 桁の分です。
- *ss* は、2 桁の秒です。

## Message Data

以下のフィールドはメッセージデータのフィールドと見なされます。*number of objects to process*、*number of objects processed successfully*、*min*、*max*、*avg*、*object description* です。これらのメッセージは、使用しているプログラム (*mw\_collect*、*bcp\_gateway*、*bcp\_gateway*、または *trendcopy*) に応じて異なります。これらのメッセージの説明は、それぞれ 686 ページの「[mw\\_collect メッセージ](#)」、687 ページの「[bcp\\_gateway メッセージ](#)」、または 688 ページの「[trendcopy メッセージ](#)」を参照してください。

## Object Description

*object description* は、以下に示すようにメッセージタイプに応じて異なります。

- *dtsys003*

動作対象とするオブジェクトが一意に定まらない状態で実行可能ファイルが呼び出されたとき、*object description* の値は、all です。オブジェクトを一意に指定した場合は、オブジェクトの名前はオブジェクト名そのものです。

- **dtsys004**

*object description* の値は、そのオブジェクトそのものです。

## mw\_collect メッセージ

この項では、使用中のプログラムが **mw\_collect** であるときに表示されるメッセージデータについて説明します。この場合、*object* は収集ノードです。

**mw\_collect** プログラムは、**dtsys003** メッセージだけを生成します。このメッセージデータは、以下のとおりです。

- *number of objects to process*

これは、**mw\_collect** がポーリングを試みたノードの数です。



これは各ノードを 1 とカウントするとは限りません。たとえば、複数のテーブルについて同じノードを収集した場合、このノードは複数回カウントされます。

- *number of objects processed successfully*

これは、正常にポーリングされたノードの数です。

正常なポーリングとは、エラー状態を生じることなく、**mw\_collect** がすべてのデータを収集できたポーリングです。たとえば、ノード A に 5 つのインタフェースがあり、3 行を収集しただけで **SNMP** のタイムアウトが生じた場合、そのポーリングは正常でないと見なされます。

- *min*

これは、最小収集時間であり、コレクタの子が実行された最小時間 (秒) です。

- *max*

これは、最大収集時間であり、コレクタの子が実行された最大時間 (秒) です。

- *avg*

これは、平均収集時間であり、コレクタの子が実行された平均時間 (秒) です。

- *object description*

これは、all でなければなりません (mw\_collect プログラムが -h オプションで実行された場合を除く)。これらの mw\_collect コマンドラインオプションの詳細については、『HP OpenView Performance Insight Reference Guide』を参照してください。

## bcp\_gateway メッセージ

この項では、使用中のプログラムが **bcp\_gateway** であるときに表示されるメッセージデータについて説明します。この場合、*object* はデータテーブル内の行です。bcp\_gateway プログラムは、dtsys003 メッセージだけを生成します。



テーブルをロードするために **bcp\_gateway** の複数インスタンスを実行した場合、テーブル/データベースの同じ組み合わせに対して複数のレコードが生成される場合があります。

このメッセージデータは、以下のとおりです。

- *number of objects to process*

これは、プログラムがロードを試みた行の数です。bcp\_gateway コマンドが -M オプションを使用した場合、この値は常に 0 です。

- *number of objects processed successfully*

これは、正常にロードされた行の数です。

- *min*

これは、固定長のトランザクションをロードした最小時間 (秒) です。

- *max*

これは、固定長のトランザクションをロードした最大時間 (秒) です。

- *avg*

これは、固定長のトランザクションをロードした平均時間 (秒) です。

- *object description*

これは、オブジェクトのテーブル名 / データベース名の名前です。



**bcp\_gateway** によってロードされた行の総数がトランザクションサイズ (1000 行) よりも少なかった場合、*min*、*max*、*avg* の時間は、この行数のロードを反映したものになります。**bcp\_gateway** によってロードされた行の総数がトランザクションサイズよりも大きかった場合、最後のセットがトランザクションサイズよりも小さければ、*min*、*max*、および *avg* の計算時に、最後のセットまたは行が含まれない場合があります。

## trendcopy メッセージ

この項では、使用中のプログラムが **trendcopy** であるときに表示されるメッセージデータについて説明します。**dtsys003** メッセージの場合、*object* は、各データとプロパティテーブル内でコピーされた行です。**trendcopy** プログラムは、**dtsys003** と **dtsys004** メッセージを生成します。

**dtsys004** メッセージは、特定のテーブル名を指定せずに **trendcopy** を起動したときにのみ記録されます。この場合、各プロパティテーブル / データテーブルのコピーごとに **dtsys004** メッセージが生成されます。

これらのメッセージデータは、以下のとおりです。

- *number of objects to process*  
フィールドが欠落している場合は、カンマ", "が代わりに表示されます。
- *number of objects processed successfully*  
これは、コピーされた行の総数です。データテーブルとプロパティテーブルが含まれています。
- *min*  
これは、固定長のトランザクションをロードした最小時間 (秒) です。これには、キーテーブルとデータテーブルの処理時間が含まれています。
- *max*  
これは、固定長のトランザクションをロードした最大時間 (秒) です。
- *avg*  
これは、固定長のトランザクションをロードした平均時間 (秒) です。
- *object description*

テーブル名が指定されなかった場合は、all です。この場合、テーブル名は以下のように記録されます。

- データだけのコピーの場合、データテーブル名が記録されます。
- プロパティだけのコピーの場合、プロパティテーブル名が記録されます。
- 両方の場合、データテーブル名とプロパティテーブル名が記録されます。



trendcopy によってコピーされた行の総数が、トランザクションサイズよりも小さかった場合、最小、最大、および平均の時間の値は、この行数のロードを反映したものになります。trendcopy によってロードおよびコピーされた行の総数がトランザクションサイズよりも大きかった場合、最後のセットがトランザクションサイズよりも小さければ、最小、最大、および平均の計算時に、最後のセットまたは行が含まれない場合があります。

## builder.log ファイルと viewer.log ファイル

レポートビルダまたはレポートビューアを使用しているときのレポートの問題の原因を見つけるには、それぞれのログファイル (builder.log および viewer.log) を確認します。Web アクセスサーバーをデバッグモードに設定しているとき、ログファイルは、レポートをロードしたときに SQL ステートメントを生成します。

Web アクセスサーバーをデバッグモードで実行するには、以下の手順に従います。

- 1 レポートビルダまたはレポートビューアの [編集] メニューから [オプション] を選択します。[オプション] ダイアログボックスが開きます。
- 2 [ログ] タブを選択します。
- 3 [デバッグトレースの有効化] オプションをクリックして選択します。
- 4 [OK] をクリックします。

以下を実行することで、アプリケーション内でログファイルメッセージを確認できます。

- レポートビルダの場合: レポートビルダの [表示] メニューから [ログファイル] を選択します。

[ログビューア]ウィンドウが開きます。ログファイルの内容が表示されます。ログファイルのメッセージは種類別(すべて、情報、警告、エラー、デバッグ)に分類されます

ウィンドウ内のメッセージを消去するには、[ログビューア]ウィンドウを右クリックし、ショートカットメニューから[クリア]を選択します。

- レポートビルダおよびレポートビューアの場合: レポートビルダおよびレポートビューアの[表示]メニューから[ログ出力の表示]を選択します。

[出力ビューア]ウィンドウが開きます。ログファイルに書き込まれたとおりのログファイルメッセージが表示されます。

---

## A 付録：NNM-OVPI 統合

Network Node Manager (NNM) と OpenView Performance Insight (OVPI) の統合の詳細については、『HP OpenView Network Node Manager and Performance Insight Integration User Guide』を参照してください。



# 索引

## 数字

- 14K プールパラメータ , 618
- 16K プールパラメータ , 618
- 32 ビットカウンタ , 657
- 64 ビットカウンタ , 657, 658, 664
- 64 ビットカウンタ , より高精度の値 , 657

## 記号

- .ini ファイル、保存 , 107

## A

- audit.log ファイル , 675

## B

- builder.log ファイル , 675

## C

- console.log ファイル , 675
- CPU grace time パラメータ , 625
- CSV ファイル
  - から収集を作成する , 167

## D

- dbmaint.log ファイル , 675
- [Diagnostics] ページ , 説明 , 508

- dpipe\_db, 64

## E

- ee\_collect, 159

## G

- groupimport ユーティリティ , 517

## H

- High Part, 定義 , 658
- HTTPS, 215

## I

- install.log ファイル , 675
- ISM(Intimate Shared Memory), 605

## J

- [Java の設定]
  - フォルダー , 509
  - 変更 , 539

## L

- LIR
  - LIR を設定する利点 , 137
  - 実装例 , 139
  - マッピング , 138
- LIR の設定 , 143

LIR マッピングとコピーポリシー , 138  
LIR を設定する利点 , 137  
Low Part, 定義 , 658

## M

max async I/Os per engine, 625  
max async I/Os per server, 625  
max number network listeners, 625  
maxusers パラメータ , 607  
metrics.log ファイル , 675  
MIB  
    アンロード , 650  
    オブジェクト , 不適切なタイプ , 646  
    オブジェクト値の設定 , 656  
    から収集を作成する , 167  
    管理対象オブジェクト , 656  
    収集テーブル , 657  
    説明 , 637  
    ロード , 645  
MIB ブラウザ , 637 ~ 674  
    [アクション] メニュー , 644  
    インタフェース , 説明 , 640  
    起動 , 638  
    コミュニティ文字列の変更 , 652  
    [ヘルプ] メニュー , 644  
    メニューオプション , 643  
mw\_collect, 159

## O

OVPI  
    機能 , 21  
ovpi\_uninstall.log ファイル , 675  
OVPI データベース  
    再配置 , 83

    再配置後のチェックリスト , 85  
OVPI の調整 , 603

## R

RAID  
    データベース調整への影響 , 610  
report.log ファイル , 676  
[Report Settings] フォルダ , 説明 , 511  
rmon\_collect, 159

## S

sar, 618  
SNMPv3  
    データの収集 , 46  
SNMP 検出  
    起動 , 112  
    機能 , 111  
SNMP プロファイル  
    管理 , 270  
    削除 , 273  
    作成 , 271  
    編集 , 272  
Solaris, 605  
sp\_configure, 619  
SQL perfmon の統合パラメータ (Sybase),  
    613  
SQL Server のバックアップ , 69, 76  
srvbuild ユーティリティ , 65  
SSL  
    keystore パスワード , 564  
    インポート , デジタル証明書 , 565  
    デジタル証明書 , 562  
    無効化 , 565

[SSL サービス] ページ, 説明, 507

## Sybase

RAM, 604

SQL Server のバックアップ, 69

### 調整

パフォーマンスの参照

デバイスのダンプ, 70

デフォルトデータキャッシュ, 618

デフォルトトランザクションログ, 622

バックアップサーバー, 64

起動, 69

シャットダウン, 75

スクリプト, 76

バッファプールをデフォルトデータ

キャッシュに追加, 618

パラメータの定義, 613

sybssystemprocs, 64

## T

tempdb データベース

サイズ設定のガイドライン, 367

tl\_groups テーブル, 85

traceflag パラメータ, 623

trend.log ファイル, 57, 676

trendtimer

停止

Windows での, 82

## U

URL

配布, 462

userimport ユーティリティ, 517

## V

viewer.log ファイル, 676

vmstat, 618

## W

website.log ファイル, 676

Web アクセスサーバー

[カタログ] リンク, 504, 513

[管理] リンク, 504, 505

結果フレームのオプションの変更, 554

設定の変更, 557

タイトルの変更, 548

ナビゲーションフレームのオプションの  
変更, 553

ユーザーアカウント, 516

リンクバーのオプションの変更, 548

リンクバーの別名の変更, 551

レポートの配布, 555

[Web アクセスサーバー] ページ, 説明, 507,  
509

Windows

サービスの開始または停止, 81

## あ行

[アクション] メニュー

MIB ブラウザ, 644

インストールの更新, 139

インタフェースファイル, 63

インポート

グループ, 336

ノード, 264, 305

ユーザーとグループ, 517

エクスポート

グループ, 337

テーブルデータ, 408

ノード, 306

オープンインデックスの数パラメータ  
(Sybase), 615

オープンオブジェクトの数パラメータ, 616

オープンオブジェクトの数パラメータ  
(Sybase), 616

オブジェクト  
「管理対象オブジェクト」も参照

オブジェクトマネージャ, 291

起動, 293

ビューの変更, 296

ログの表示, 298

「管理対象オブジェクト」も参照

オペレーティングシステム  
パフォーマンスに対する影響, 607

オンラインマニュアル  
表示, 109

## か行

[外部キー], 400

カウンタ  
64ビット, 657

カタログマネージャ  
URLの配布, 462

新しいディレクトリの作成, 463

起動, 452

説明, 451

ディレクトリの移動, 463

ディレクトリのコピー, 464

[配布済み項目]カタログ, 説明, 451

変更  
URLプロパティ, 467

レポートプロパティ, 467

[リンク]カタログ, 説明, 451

レポートの移動, 463

レポートのコピー, 464

レポートの配布, 454

レポートの配布解除, 459

レポートリンク, 451

[カタログ]リンク, 504, 513

[システム]フォルダー, 514

[配布URL]ページ, 513

[ユーザー]フォルダー, 515

カテゴリ  
グループ化, 322

間隔、ポーリング, 244

管理  
SNMPプロファイル, 270

コミュニティ文字列プロファイル, 268

データパイプのインストール, 273

ノード, 259

管理コンソール  
起動, 96

終了, 99

ツールバー, 101

メニューバー, 98 ~ 101

[ツール]メニュー, 100

[ファイル]メニュー, 99

[ヘルプ]メニュー, 101

[編集]メニュー, 99

ログオン, 97

管理者、権限のリセット, 561

管理対象オブジェクト  
オブジェクトツリーの変更, 299

関連付けられたレポート, 295

検索, 297

作成, 308

定義, 319

データベース内のデータの変更, 307

ビュー, 296

表示, 293

「オブジェクトマネージャ」も参照

「オブジェクト」も参照

- 「グループマネージャ」も参照
- 「オブジェクトマネージャ」も参照
- [管理] リンク, 504, 505
  - [Java の設定] フォルダー, 509
  - [Report Settings] フォルダー, 511
  - [サービスの構成] フォルダー, 507
  - [診断] フォルダー, 508
  - [ユーザーアカウント] フォルダー, 505
  - [ログファイル] フォルダー, 509
- キーマップテーブル, 398
- 起動
  - カタログマネージャ, 452
  - 管理コンソール, 96
  - パッケージマネージャ
    - Performance Insight から, 125
    - Windows デスクトップから, 125
    - コマンド行, 126
- キャッシュ
  - データプール, 618
  - デフォルトデータ, 618
  - 名前付き, キャッシュ, 620, 627
- 行数
  - 行数グラフの作成, 288
- 共通インデックス, 659
- 共有メモリー, 605
  - ISM(Intimate Shared Memory) 機能, 605
  - ロック, 605
- グループ
  - インポート, 336
  - エクスポート, 337
  - 管理, 525
  - 管理対象オブジェクト
    - 種類, 319
    - 定義, 319
    - 内容の表示, 338
  - 編集, 339
  - レポートビルダでの使用, 348
- 検索, 325
- 削除, 340
- 派生
  - 作成, 329
  - 定義, 320
- フォルダー
  - 作成, 334
  - 定義, 320
- プロパティ
  - 作成, 332
  - 定義, 320
- ユーザーアカウント
  - 削除, 530
  - 作成, 526
  - 定義, 42, 525
  - フィルター, 44, 61, 528, 530, 531, 532
  - 変更, 60, 529
- 列挙リスト
  - 作成, 327
  - 定義, 320
- [グループ] フォルダー, 506
- グループマネージャ, 319
  - 起動, 322
  - グループ化の方法, 320
  - グループタイプ, 319
  - グループの削除, 340
  - 表示オプション, 341
  - ポーリングポリシーの管理, 343
  - ログの表示, 340
- 結果フレームのオプション, 554
- 検索
  - オブジェクト, 297
  - グループ, 325
  - テーブルエイリアス名, 382

- ノード , 261
- 検出、ノード
  - SNMP 検出ウィザードの使用 , 112
- 合計メモリパラメータ (Sybase), 618
- 更新
  - ポーリングポリシーリスト , 164
- コピーポリシー , 147
  - 実装例 , 148
- コピーポリシーマネージャ , 149
- コピーポリシーマネージャの使用 , 149
- コミュニティ文字列
  - 値の変更 , 652
- コミュニティ文字列プロファイル
  - 管理 , 268
  - 削除 , 270
  - 作成 , 269
  - 編集 , 269
- [コレクタ]
  - EE コレクタ , 283
  - MW コレクタ , 283
  - SR コレクタ , 283

## さ行

- サーバー
  - 切断 , 99
  - バックアップ
    - 起動 , 69
    - シャットダウン , 75
    - ダンプおよびロード , 64
  - 変更 , 99
- サーバーの変更
  - メニューオプション , 99
- サービス
  - UNIX の場合
    - 起動 , 82

## Windows の場合

- 開始または停止 , 81
- ステータスの確認 , 81
- ステータスの変更 , 81
- 設定の変更 , 557
- [ サービス診断 ] フォルダー , 508
- [ サービスの構成 ] フォルダー , 507
- 最大オンラインエンジンパラメータ , 610
- 最大オンラインエンジンパラメータ (Sybase), 614
- 最大列 , 429, 659
- サイトのオプション
  - 変更 , 548
- [ サイトの外観 ] フォルダー , 547
- 削除
  - SNMP プロファイル , 273
  - コミュニティ文字列プロファイル , 270
  - データパイプのインストール , 276
  - ノード , 263
  - ビュー , 547
  - ポーリングポリシー , 248
- 作成
  - SNMP プロファイル , 271
  - カスタム制約 , 422
  - 管理対象オブジェクト , 308
  - コミュニティ文字列プロファイル , 269
  - 制約 , 420 ~ 423
  - ノード , 261
  - 派生グループ , 329
  - ビュー , 544
  - フォルダグループ , 334
  - プロパティグループ , 332
  - ポーリンググループ , 251
    - 同じタイプのノード , 252
    - 同じビューにあるノード , 253

- タイプとビュー, 254
  - 単一のノード, 251
  - 特定のインスタンス, 256
  - ルールベースの, 256
- 列挙リストグループ, 327
- 差分データ、定義, 26
- 時間範囲
  - 時間範囲テーブル, 448
  - 設定, 448
  - 定義, 448
- 時間範囲テーブル, 448
  - 保持期間の設定, 448
- [システム] フォルダー, 514
- システムマネージャ, 567 ~ 575
  - システム設定の変更, 571
  - システムの削除, 575
  - システムの追加, 568
  - 設定の変更, 562
- [システムマネージャ] ページ, 説明, 507
- 実行頻度, 定義, 448
- 指定インスタンスポーリング, 161
- 収集データテーブル
  - 定義, 429
- 収集テーブル
  - 共通インデックス, 659
  - 最大幅, 429, 658
  - 最大列, 429, 659
  - 定義, 656
  - 必要なテーブル, 657
- 集約タイプ, 138
- 出力
  - 表示
    - オブジェクトマネージャ, 298
- 情報のソート, 163

- 証明書の管理, 216
  - インストール, 218
  - インポート, 219
  - エクスポート, 219
  - 更新, 220
  - 削除, 220
- スワッピング, 注意, 618
- スワップファイルのサイズ, 605
- 制約
  - 作成, 420 ~ 423
  - 定義, 420
  - 変更, 424
- 接続, 最大数, 616
- [設定] ページ, 説明, 509
- セットアップ、プロキシサーバー, 86
- ソート
  - データベース情報, 381
- た行**
- タイトル, 変更, 548
- タイプ検出, 120
  - 機能, 111
- タイムアウト値, 設定, 560
- タイムラグ
  - 設定, 448
  - 定義, 448
- ダンプ
  - データベース, 72 ~ 74
- チェックリスト、再配置後, 85
- 調整
  - パフォーマンスの参照
- 追加
  - ノード, 425
  - プロパティテーブルの説明, 399

- ツールバー
  - 管理コンソール, 101
- [ツール] メニュー
  - 管理コンソール, 100
- ディスクドライブ
  - パフォーマンスに対する影響, 605, 606
- データキャッシュプール, 構成, 618
- データ収集
  - 説明, 23
  - 定義, 21
- データ処理
  - 説明, 26
  - 定義, 22
- データセットレポート、定義, 29
- [データテーブル], 283
- データテーブル
  - 作成, 429
  - 収集, 定義, 429
  - 説明の追加, 388, 399, 591
  - 定義, 26
  - データの表示, 402
  - デフォルトの設定, 447
  - 保持日数, 383, 384, 596
- データテーブル, 表示
  - カテゴリ別, 594
  - タイプ別, 594
- データテーブルの作成, 429
- データパイプ, 124
  - プロパティインポート, 25
- データパイプのインストール
  - 管理, 273
  - 削除, 276
  - 作成, 274
  - 編集, 275
- データベース
  - dump database コマンド, 72
  - サイズ設定のガイドライン, 367
  - スクリプトを使用したバックアップ, 76
  - ダンプ, 72 ~ 74
    - 例, 73 ~ 74
  - 調整
    - パフォーマンスの参照
    - フォーム、変更のための使用, 307
    - 保持日数, 383, 384, 596
    - リストア, 74
    - ロード, 74
- データベースサーバー
  - 変更, 106
- [データベースチューナー]
  - Sybase の設定, 608 ~ 612
  - パフォーマンスの参照
- データベースチューナー (Sybase), 616
  - SQL perfmon の統合パラメータ, 613
  - オープンインデックスの数パラメータ, 615
  - 合計メモリパラメータ, 618
  - 最大オンラインエンジンパラメータ, 614
  - デバイスの数パラメータ, 615
  - ネットワークパケットの最大サイズパラメータ, 614
  - ネットワークメモリ追加パラメータ, 613
  - プロシージャキャッシュの割合パラメータ, 616
  - 分単位のリカバリ間隔パラメータ, 617
  - ユーザー接続の数パラメータ, 616
  - ロックの数パラメータ, 615
- データベースの役割の管理, 142
- データレポート
  - 定義, 22
- テーブル
  - キーマップ, 398

- グループメンバー, 398
- 時間範囲, 448
- データ, 収集, 429
- プロパティ
  - バインディング, 626, 627
  - バインディングの確認, 628
- 列サイズ, 変更, 381
- テーブルエイリアス名
  - 検索, 382
- テーブルデータ
  - エクスポート, 408
- テーブルマネージャ, 379 ~ 449
  - 起動, 379
  - 検索
    - テーブルエイリアス名, 382
  - 時間タイプ, 384, 595
  - ソート
    - テーブル情報, 381
  - データタイプ, 384, 595
  - データテーブル
    - カテゴリ別の表示, 594
    - タイプ別の表示, 594
  - テーブルの作成, 429
  - ナビゲーション, 380
  - 表示
    - テーブル情報, 381
    - プロパティテーブル, 385
  - 表示の更新, 381
  - ペイン, 380
  - 変更
    - テーブル列のサイズ, 381
  - 要約タイプ, 442
- デジタル証明書
  - CSR, 生成, 565
  - インポート, 565
- デバイスの数パラメータ (Sybase), 615
- デバイス、ダンプ

- ディスクへ, 72
- テープへ, 71
- デバッグ
  - 有効化と無効化
    - Web アクセスサーバー, 559
- デフォルトの設定, 448
- トランザクションログ
  - I/O サイズ, 622
  - Sybase デフォルト, 622
  - サイズ設定のガイドライン, 367

## な行

- ナビゲーションフレームのオプション, 553
- 名前付きキャッシュ, 作成, 620, 627
- 認証
  - 設定の変更, 560
  - 設定方法, 90, 560
- ネットワークパケットの最大サイズパラメータ (Sybase), 614
- ネットワークメモリ追加パラメータ (Sybase), 613
- ノード
  - インポート, 264, 305
  - エクスポート, 306
  - カスタムグループ, 244
  - 管理, 259
  - グループ化, 244, 321
  - 検索, 261
  - 削除, 263
  - 作成, 261
  - 追加, 425
  - 定義, 637
  - 特性, 260
  - 編集, 263

## は行

[ 配布 URL ] ページ , 513

配布ウィザード , 454 ~ 461  
レポートの配布解除 , 459

配布解除  
ウィザードの使用 , 459

パスワード  
期限の設定 , 41, 521  
有効期限ルールの設定 , 517 ~ 519

[ パスワードルール ] ページ , 説明 , 506

派生グループ  
作成 , 329

バックアップサーバー , 63  
シャットダウン , 75  
ダンプおよびロード , 64

バックアップサーバーの作成  
UNIX システム , 64  
Windows NT システム , 68

バックアップスクリプト  
作成 , 77  
実行 , 79

パッケージ  
アンインストール , 133  
依存関係 , 124  
インストール , 127

パッケージのアンインストール , 133

パッケージのインストール , 127

パッケージマネージャ , 123  
起動

Performance Insight から , 125  
Windows デスクトップから , 125  
コマンド行から , 126  
パッケージのアンインストール , 133

パフォーマンス

影響する要因 , 603  
オペレーティングシステム , 607  
共有メモリー , 605  
スワップファイルのサイズ , 605  
ディスクドライブ I/O , 605  
ディスクドライブの量 , 606  
ハードウェアでの検討事項 , 603  
パラメータの定義 , 613  
複数の調整パラメータの変更 , 608  
保持期間影響 , 449  
メモリーのガイドライン , 604

パフォーマンスエージェント  
からの収集の作成 , 193 ~ 214, 232 ~  
242

パフォーマンスグラフ  
パフォーマンスグラフの起動 , 281  
パフォーマンスグラフの表示 , 282  
プロセスの所要時間 , 284

パフォーマンスグラフのコレクタ , 283

パフォーマンスに対するハードウェアの影響 ,  
603

パフォーマンスの調整 , 603  
パフォーマンスの参照

ビュー  
削除 , 547  
作成 , 544  
定義 , 511, 544  
ノードグループ , 244  
編集 , 547

ビューの編集 , 547

表示  
オンラインマニュアル , 109  
データテーブル , 594  
プロパティテーブル , 385  
ログ情報 , 340

表示オプション

- グループマネージャ, 341
- [ファイル]メニュー
  - 管理コンソール, 99
- フォーム
  - オブジェクトマネージャでの使用, 306
- フォルダーグループ
  - 作成, 334
- [フォルダの一意性値], 299
- フラットファイル
  - 定義, 22
  - データの取得, 25
- プロキシサーバー、セットアップ, 86
- プロシージャキャッシュの割合パラメータ (Sybase), 616
- プロセスの所要時間
  - 作成, 284
- プロセスの所要時間グラフ, 284
- プロパティインポートデータパイプ, 25
- プロパティグループ
  - 作成, 332
- プロパティテーブル
  - 値の変更, 276
  - キーマップテーブル, 398
  - 最大列, 429, 439, 659, 671
  - 作成, 443
  - 詳細の表示, 397
  - 説明の追加, 399
  - デフォルト列, 439, 671
  - 名前付きキャッシュへのバインディング, 626, 627
  - バインディングの確認, 628
  - 表示, 385
  - 列カウント, 439, 671
- プロパティテーブルのバインディング, 626, 627
- 確認, 628
- 分単位のリカバリ間隔パラメータ (Sybase), 617
- ページング, 注意, 618
- ヘッドレスサポート
  - 無効化, 559
  - 有効にする, 559
- 別名, 変更, 551
- [ヘルプ]メニュー
  - MIB ブラウザ, 644
  - 管理コンソール, 101
- 変更
  - 制約, 424
  - データベースサーバー, 106
  - テーブル列のサイズ, 381
  - プロパティテーブル, 276
- 編集
  - SNMP プロファイル, 272
  - グループ, 339
  - コミュニティ文字列プロファイル, 269
  - データパイプのインストール, 275
  - ポーリングポリシー, 247
- [編集]メニュー
  - 管理コンソール, 99
- ポート番号
  - Web アクセスサーバー, 558
- ポーリング
  - 間隔, 244
  - 頻度, 160
  - 目的, 160
- [ポーリング間隔], 283
- ポーリンググループ
  - 管理, 249
  - 作成, 251
  - 同じタイプのノード, 252

- 同じビューノードにあるノード, 253
- タイプとビュー, 254
- 単一のノード, 251
- 特定のインスタンス, 256
- ルールベースの, 256
- 編集, 259
- ポーリンググループの編集, 259
- ポーリングの稼動状態
  - ポーリングの稼動状態グラフの作成, 286
- ポーリングポリシー
  - グループ, 343
  - 削除, 347
  - 作成, 343
  - 変更, 346
- 削除, 248
- 作成, 242
- 収集、作成, 167
  - CSV ファイルから, 167
  - MIB から, 167
  - 手作業による, 167
- 表示, 165
- 編集, 247
- ポーリングポリシーマネージャ
  - 間隔, 244
  - 起動, 162
  - 情報のソート, 163
  - ノードのインポート, 264
  - 表示機能, 163
  - ポリシーリストの更新, 164
  - 列のサイズの変更, 164
- 保持期間、定義, 27
- 保持日数
  - データテーブル, 383, 384, 596
- 保存
  - .ini ファイル, 107
  - ユーザー設定, 107

## ま行

- マスター, 64
- [メールサーバー] ページ, 説明, 508
- メニューオプション, MIB ブラウザ, 643
- メニューバー
  - 管理コンソールの, 98 ~ 101
- メモリー
  - ガイドライン, 604
  - 共有, 605

## や行

- ユーザーアカウント, 516
  - 削除, 523
  - 作成, 519
  - 電子メール, 524
  - 電子メールの送信, 524
  - パスワードの期限の設定, 41, 521
  - パスワードの有効期限ルール, 517
  - 変更, 522
  - ロック, 522
- [ユーザーアカウント] フォルダー, 505
- ユーザー接続, 最大数, 616
- ユーザー接続の数パラメータ (Sybase), 616
- ユーザー設定
  - 保存, 107
- [ユーザー] フォルダー, 515
- [ユーザー] フォルダー, 説明, 506
- ユーティリティ
  - groupimport, 517
  - userimport, 517
  - ユーザーとグループのインポート, 517
- 要約, テーブル, 442

## ら行

リストア

データベース, 74

履歴単位

設定, 448

定義, 448

リンク

レポートからアプリケーション, 481

リンクバー

オプションの変更, 548

別名の変更, 551

列カウント, 429, 659, 671

列挙リストグループ

作成, 327

列サイズ, 変更, 164

[レベルあたりのツリーノード数値], 299

レポート

管理対象オブジェクト, 295

デモパッケージ, 124

配布, 555

配布解除, 459

ファイルの種類, 29

有効化, 555

レポート, 配布, 454

レポートの設定

変更, 541

レポートの配布, 454

複数の Web アクセスサーバーへの, 129

レポートパック, 123

準備, 25

レポートビルダ

制約の作成, 420 ~ 423

レポートファイル、定義, 29

レポートリンク

インポート, 499

エクスポート, 499

作成, 472 ~ 493

開く, 493

レポートから URL へ, 作成, 486

レポートからアプリケーション, 作成,  
481

レポートからレポート, 作成, 472

レポートリンク, 説明, 451

レلمム名, Web アクセスサーバー, 558

ログ

トランザクションログの参照

ログオン

管理コンソール, 97

ログ記録, 有効化と無効化

Web アクセスサーバー, 559

ログ情報

表示, 340

ログファイル, 675 ~ 690

audit.log, 675

builder.log, 675

console.log, 675

dbmaint.log, 675

install.log, 675

metrics.log, 675

ovpi\_uninstall.log, 675

report.log, 676

trend.log, 57, 676

viewer.log, 676

website.log, 676

設定の変更, 536

の名称, 675

の場所, 675

表示, 538, 676

フォーマット, 677 ~ 680

例, 680

[ログファイル] フォルダー, 509

ロック

ユーザーアカウント , 522

ロックの数パラメータ (Sybase), 615